

岐阜県文化財保護センター
調査報告書 第129集

荒尾南遺跡C地区

(第1分冊)

2014

岐阜県文化財保護センター

あら お みなみ
荒 尾 南 遺 跡 C 地 区
(第 1 分 冊)

2 0 1 4

岐阜県文化財保護センター



09_13地点 方形周溝墓群（南から）



08_13地点 SZc40・SZc41（北から）

卷頭図版 2



07_1 · 08_13地点出土 石器・石製品



SIc03出土 砧石



SKc0806出土 石杵



SDc031（大溝）上層肩部出土土器



SDc031（大溝）出土 円盤状銅製品

卷頭図版 4



SDc031 (大溝) 出土 巴型銅器



SDc031 (大溝) 出土 手捏ね土器

序

岐阜県西濃地域は、肥沃な平野と大小の河川を有し、古来、北陸・近畿と東海を結ぶ交通の要衝であり、国分寺や国分尼寺、国衙、不破関など、国家の重要な機関が置かれたため、古代を通じて美濃国の中心地でした。

荒尾南遺跡は、大垣市中心部の西方に所在し、弥生・古墳時代の遺跡としては、県下でも最大級の規模を有し、美濃地方西部における当時の中心的な遺跡であると考えられています。過去の調査では、3艘の船が表現された土器や人面が描かれた土器が出土するなど、全国的にも注目を集めている遺跡です。

このたび、国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所による東海環状自動車道建設に伴い、荒尾南遺跡の工事予定地内において、埋蔵文化財記録保存のための発掘調査を実施しました。

今回の発掘調査では、弥生時代から古墳時代前期にかけての方形周溝墓をはじめとして、住居跡、溝状遺構、土坑など多種多様な遺構を検出すると共に、大量に出土した遺物の中には、石製品や木製品の生産に関わる遺物も含まれていることが分かりました。このうち本書は、平成19年度から平成23年度に実施した「荒尾南遺跡C地区」の発掘調査の成果をまとめたものです。

当遺跡の調査成果によって、黎明期の古代美濃を探る上での重要な知見を得られたことは真に喜ばしい限りのことあります。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、御理解と御協力をいただきました関係諸機関並びに関係者各位、大垣市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成26年2月

岐阜県文化財保護センター
所長 丸山 和彦

例　　言

- 1 本書は、岐阜県大垣市荒尾町・桧町に所在する荒尾南遺跡（岐阜県遺跡番号21202-08568）C地区の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、東海環状自動車道建設に伴うもので、国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所から岐阜県が委託を受けた。発掘調査及び整理等作業は、平成20年度までは(財)岐阜県教育文化財団文化財保護センター、平成21年度からは岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 発掘調査及び整理等作業は、八賀晋三重大学名誉教授及び山田昌久首都大学東京教授の指導のもとに実施した。本書では、平成19年度から平成23年度に行ったC地区（遺跡南部）の発掘調査（面積7,160m²）について、平成23年度から平成24年度に整理等作業を実施してまとめた。
- 4 発掘調査及び整理等作業の担当は、本書第1章第2節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆は第1章から第4章第5節と第6章第2節を春日井恒、第6章第3節を林直樹、それ以外を鷺見博史が行った。また、編集は鷺見が行った。
- 6 発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削、測量などの業務と、出土遺物の洗浄・注記は、国際航業株式会社（平成19年度）、株式会社アキジオ（平成20年度）、株式会社イビソク（平成21年度）、株式会社ユニオン（平成23年度）に委託して行った。
- 7 整理等作業における土器実測・トレース・観察業務は、ナカシャクリエイティブ株式会社、株式会社文化財サービス、株式会社島田組、エイテック株式会社（平成23年度）、ナカシャクリエイティブ株式会社（平成24年度）に、金属製品・木製品・石製品の実測・トレース・観察業務は、株式会社イビソク（平成20年度）、株式会社太陽測地社（平成21年度）、ナカシャクリエイティブ株式会社（平成22年度）、株式会社アキジオ（平成24年度）に、また二次整理作業支援業務を株式会社イビソク（平成24年度）に委託して行った。
- 8 遺物の写真撮影は、株式会社イビソク（平成23年度）、アートフォト右文（平成24年度）に委託して行った。
- 9 放射性炭素年代測定・赤色顔料・粘土塊・鉄関連遺物・花粉・プラントオパール・自然木樹種同定・大型植物遺体・金属製品の各分析は株式会社パレオ・ラボ、木製品樹種同定分析は株式会社パレオ・ラボと株式会社吉田生物研究所に委託して行い、その結果は第5章に掲載した。
- 10 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・五十音順）
青木哲哉、赤澤徳明、赤塚次郎、石井智大、石川ゆずは、石黒立人、石田由紀子、石野博信、伊丹徹、伊藤正人、伊庭功、扇崎由、大塚初重、大野薰、恩田知美、河合章行、川崎志乃、鬼頭剛、黒坂貴裕、黒沢浩、黒須亜希子、下濱貴子、鈴木元、鈴木とよ江、鈴木正貴、高木宏和、高野陽子、永井宏幸、中井正幸、中野晴久、長瀬治義、原田幹、林大智、早野浩二、樋上昇、久田正弘、深澤芳樹、藤川智之、藤澤良祐、藤田慎一、穂積裕昌、堀木真美子、豆谷和之、宮腰健司、森下章司、矢野健一、渡邊博人、大垣市教育委員会
- 11 本文中の方位は、世界測地系の座標北を示し、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第VII系を表している。
- 12 土層及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄2005・2007『新版標準土色帖』（日本色研事業株

式会社)による。

13 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目次（第1分冊）

序	
例言	
目次	
第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	2
第2章 遺跡の環境	11
第1節 地理的環境	11
第2節 歴史的環境	13
第3章 調査の概要	15
第1節 基本層序	15
第2節 遺構概要	16
第3節 遺物概要	19
第4章 調査の成果	31
第1節 08_10地点・09_8地点	31
第2節 08_11地点	38
第3節 07_6～8地点	48
第4節 07_9地点・09_9地点	117
第5節 07_4・5地点・09_20地点	122
報告書抄録	

第2分冊 目次

第4章 調査の成果	
第6節 09_12地点	
第7節 08_12地点・09_17地点	
第8節 07_2・3地点・09_11・13地点	
第9節 09_14地点	
第10節 07_1地点・08_13地点・09_15地点	
第11節 08_14地点・09_16地点	
第12節 09_10地点	
第13節 11_9地点	
第14節 11_8地点	

第3分冊 目次

遺構一覧表

遺物観察表

遺構全体図分割図

第4分冊 目次

第5章 自然科学的分析

第1節 分析の概要

第2節 土器付着炭化物の放射性炭素年代測定

第3節 木製品と堆積物の放射性炭素年代測定

第4節 プラント・オパール分析

第5節 水田遺構の花粉化石分析

第6節 大溝（SDc031）の花粉化石分析

第7節 出土自然木の樹種同定

第8節 木製品の樹種同定

第9節 大型植物遺体の同定

第10節 鉄関連遺物の分析

第11節 金属製品の蛍光X線分析

第12節 赤色顔料の蛍光X線分析

第13節 遺構出土粘土塊の検討

第6章 総括

第1節 方形周溝墓・墓について

第2節 C地区における石器や金属製品、木製品について

第3節 工具加工痕からみた木材加工

第4節 荒尾南遺跡C地区の土地利用の変遷

参考文献

写真図版

挿図目次

図 1 遺跡位置図	1	図47 SKc0299・SKc0300	67
図 2 荒尾南遺跡の調査地区位置図	3	図48 SKc0308・SKc0325	68
図 3 C 地区調査地点位置図	6	図49 SKc0358・SKc0387・SKc0389	70
図 4 周辺の地形と遺跡の立地	11	図50 SKc0401	71
図 5 周辺遺跡位置図	14	図51 SDc029・SDc030	72
図 6 C 地区基本層序模式図	15	図52 SDc031北部	74
図 7 遺構断面の形状模式図	18	図53 SDc031北部出土遺物（1）	75
図 8 08_10地点北壁土層図	31	図54 SDc031北部出土遺物（2）	76
図 9 08_10地点・09_8地点平面図	32	図55 SDc031北部出土遺物（3）	77
図10 包含層・SDc002出土遺物	32	図56 SDc031北部出土遺物（4）	78
図11 SDc002	32	図57 SDc031中部	80
図12 SZc01	34	図58 SDc031中部底面杭検出状況	81
図13 SZc01出土遺物	35	図59 SDc031中部出土遺物（1）	83
図14 SZc02	36	図60 SDc031中部出土遺物（2）	84
図15 SZc01出土遺物	37	図61 SDc031中部出土遺物（3）	85
図16 SZc03	37	図62 SDc031中部出土遺物（4）	86
図17 08_11地点南壁土層図	38	図63 SDc031中部出土遺物（5）	88
図18 08_11地点平面図	39	図64 SDc031中部出土遺物（6）	89
図19 08_11地点包含層出土遺物	40	図65 SDc031中部出土遺物（7）	90
図20 小土坑列	41	図66 SDc031中部出土遺物（8）	91
図21 SZc04	42	図67 SDc031中部出土遺物（9）	92
図22 SAc01	43	図68 SDc031中部出土遺物（10）	93
図23 SKc0097	44	図69 SDc031中部出土遺物（11）	95
図24 SDc006	45	図70 SDc031中部出土遺物（12）	96
図25 SDc009	47	図71 SDc031中部出土遺物（13）	97
図26 SDc011	47	図72 SDc031中部出土遺物（14）	98
図27 07_地点西壁（上）、07_8地点東壁（下）土層図	48	図73 SDc031中部出土遺物（15）	99
図28 07_6～8地点包含層出土遺物	50	図74 SDc031中部出土遺物（16）	100
図29 07_6～8地点IV層上面平面図	51	図75 SDc031中部出土遺物（17）	101
図30 南部小土坑列（1）	52	図76 SDc031中部出土遺物（18）	102
図31 南部小土坑列（2）	53	図77 SDc031中部出土遺物（19）	103
図32 北部小土坑列	54	図78 SDc031中部出土遺物（20）	104
図33 SKc0197	55	図79 SDc032～SDc034	105
図34 SKc0197出土遺物	55	図80 SDc036	106
図35 SKc0281	55	図81 SDc037	108
図36 SKc0282	56	図82 SDc040～SDc044	109
図37 07_6～8地点V層上面平面図	57	図83 SDc045・SDc046	110
図38 SZc05	58	図84 SDc051・SDc053	112
図39 SZc05遺物出土状況（1）	59	図85 SDc054出土遺物	113
図40 SZc05遺物出土状況（2）	60	図86 SDc054	114
図41 SZc05北溝出土遺物	61	図87 SDc055・SDc056	115
図42 SZc05南溝出土遺物（1）	62	図88 07_9地点・09_9地点東壁土層図	117
図43 SZc05南溝出土遺物（2）	63	図89 07_9地点・09_9地点包含層出土遺物	117
図44 SZc06	64	図90 07_9地点・09_9地点IV層上面平面図	118
図45 SZc07・SZc08	65	図91 SDc059	118
図46 SZc09	66	図92 07_9・09_9地点V層上面平面図	119
		図93 SZc10	119

図94 SKc0424・SKc0446	120	図135 SDc031南部土層断面図・出土状況図(1)	165
図95 09_20地点北壁土層図	122	図136 SDc031南部出土状況図(2)	166
図96 07_4・5地点・09_20地点包含層出土遺物(1)	124	図137 SDc031南部出土状況図(3)	167
		図138 SDc031南部出土遺物(1)	174
図97 07_4・5地点・09_20地点包含層出土遺物(2)	125	図139 SDc031南部出土遺物(2)	175
		図140 SDc031南部出土遺物(3)	176
図98 07_4・5地点・09_20地点包含層出土遺物(3)	126	図141 SDc031南部出土遺物(4)	177
		図142 SDc031南部出土遺物(5)	178
図99 07_4・5地点・09_20地点包含層出土遺物(4)	127	図143 SDc031南部出土遺物(6)	179
		図144 SDc031南部出土遺物(7)	180
図100 07_4・5地点・09_20地点IV層上面平面図	127	図145 SDc031南部出土遺物(8)	181
		図146 SDc031南部出土遺物(9)	182
図101 SKc0528	128	図147 SDc031南部出土遺物(10)	183
図102 SKc0529	129	図148 SDc031南部出土遺物(11)	184
図103 SKc0529出土遺物	130	図149 SDc031南部出土遺物(12)	185
図104 SIc01・SIc02遺構平面図・遺物出土状況図	131	図150 SDc031南部出土遺物(13)	186
		図151 SDc031南部出土遺物(14)	187
図105 SIc01・SIc02出土遺物(1)	132	図152 SDc031南部出土遺物(15)	188
図106 SIc02出土遺物(2)	133	図153 SDc031南部出土遺物(16)	189
図107 SIc02出土遺物(3)	134	図154 SDc031南部出土遺物(17)	190
図108 07_4・5地点・09_20地点V層上面平面図	135	図155 SDc031南部出土遺物(18)	191
		図156 SDc031南部出土遺物(19)	192
図109 SBc01	136	図157 SDc031南部出土遺物(20)	193
図110 SBc02	137	図158 SDc031南部出土遺物(21)	194
図111 SHc01(1)	139	図159 SDc031南部出土遺物(22)	195
図112 SHc01(2)	140	図160 SDc031南部出土遺物(23)	196
図113 SHc01出土遺物	140	図161 SDc031南部出土遺物(24)	197
図114 SHc02	141	図162 SDc031南部出土遺物(25)	198
図115 SHc03・SHc04	142	図163 SDc031南部出土遺物(26)	199
図116 SPc091	143	図164 SDc031南部出土遺物(27)	200
図117 SPc092・SPc097	144	図165 SDc031南部出土遺物(28)	201
図118 SPc098・SPc105	145	図166 SDc031南部出土遺物(29)	202
図119 SPc106・SPc116	146	図167 SDc031南部出土遺物(30)	203
図120 SPc118・SPc120	147	図168 SDc031南部出土遺物(31)	204
図121 SPc127・SPc129	148	図169 SDc031南部出土遺物(32)	205
図122 SPc132・SPc136	149	図170 SDc031南部出土遺物(33)	206
図123 SKc0532・SKc0534・SKc0538	150	図171 SDc031南部出土遺物(34)	207
図124 SKc0539・SKc0542	151	図172 SDc031南部出土遺物(35)	208
図125 SKc0552・SKc0554	152	図173 SDc031南部出土遺物(36)	209
図126 SKc0557	153	図174 SDc031南部出土遺物(37)	210
図127 SKc0558・SKc0559	154	図175 SDc031南部出土遺物(38)	211
図128 SKc0563・SKc0564	155	図176 SDc031南部出土遺物(39)	212
図129 SKc0575	156	図177 SDc031南部出土遺物(40)	213
図130 SKc0577・SKc0578・SKc0579	158	図178 SDc031南部出土遺物(41)	214
図131 SKc0584・SKc0588・SKc0608	159	図179 SDc031南部出土遺物(42)	215
図132 SKc0625・SKc0635・SKc0640・SKc0657	161	図180 SDc031南部出土遺物(43)	216
		図181 SDc031南部出土遺物(44)	217
図133 SKc0674・SKc0678	162	図182 SDc031南部出土遺物(45)	218
図134 SDc031南部	164		

図183	SDc031南部出土遺物 (46) ······	219
図184	SDc031南部出土遺物 (47) ······	220
図185	SDc031南部出土遺物 (48) ······	221
図186	SDc031南部出土遺物 (49) ······	222
図187	SDc031南部出土遺物 (50) ······	223
図188	SDc031南部出土遺物 (51) ······	224
図189	SDc031南部出土遺物 (52) ······	225
図190	SDc031南部出土遺物 (53) ······	226
図191	SDc031南部出土遺物 (54) ······	227
図192	SDc031南部出土遺物 (55) ······	228
図193	SDc031南部出土遺物 (56) ······	229
図194	SDc031南部出土遺物 (57) ······	230
図195	SDc031南部出土遺物 (58) ······	231
図196	SDc031南部出土遺物 (59) ······	232
図197	SDc031南部出土遺物 (60) ······	233
図198	SDc031南部出土遺物 (61) ······	234
図199	SDc031南部出土遺物 (62) ······	235
図200	SDc031南部出土遺物 (63) ······	236
図201	SDc031南部出土遺物 (64) ······	237
図202	SDc031南部出土遺物 (65) ······	238
図203	SDc031南部出土遺物 (66) ······	239
図204	SDc031南部出土遺物 (67) ······	240
図205	SDc031南部出土遺物 (68) ······	241
図206	SDc031南部出土遺物 (69) ······	242
図207	SDc031南部出土遺物 (70) ······	243
図208	SDc031南部出土遺物 (71) ······	244
図209	SDc031南部出土遺物 (72) ······	245
図210	SDc031南部出土遺物 (73) ······	246
図211	SDc031南部出土遺物 (74) ······	247
図212	SDc031南部出土遺物 (75) ······	248
図213	SDc031南部出土遺物 (76) ······	249
図214	SDc031南部出土遺物 (77) ······	250
図215	SDc031南部出土遺物 (78) ······	251
図216	SDc031南部出土遺物 (79) ······	252
図217	SDc031南部出土遺物 (80) ······	253
図218	SDc031南部出土遺物 (81) ······	254
図219	SDc031南部出土遺物 (82) ······	255
図220	SDc031南部出土遺物 (83) ······	256
図221	SDc031南部出土遺物 (84) ······	257
図222	SDc031南部出土遺物 (85) ······	258
図223	SDc031南部出土遺物 (86) ······	259
図224	SDc031南部出土遺物 (87) ······	260
図225	SDc068 ······	262
図226	SDc074・SDc076 ······	263
図227	SDc074・SDc076出土遺物 ······	264
図228	SDc082 ······	265
図229	SDc085・SDc096 ······	266
図230	SDc085・SDc096出土遺物 ······	267

表目次

表1	調査体制表 ······	10
表2	C地区遺構数量表 ······	17
表3	出土遺物点数 ······	19
表4	II期からVII期の器種分類 (1) ······	19
表5	II期からVII期の器種分類 (2) ······	20
表6	II期からVII期の器種分類 (3) ······	21
表7	II期からVII期の器種分類 (4) ······	22
表8	II期からVII期の器種分類 (5) ······	23
表9	II期からVII期の器種分類 (6) ······	24
表10	石器器種別出土点数一覧表 ······	26
表11	石器地点別出土点数一覧表 ······	26
表12	木製品・繊維製品数量表 ······	28
表13	08_10地点・09_8地点出土遺物数量 ······	31
表14	08_11地点出土遺物数量 ······	40
表15	07_6~8地点出土遺物数量 ······	49
表16	07_9地点・09_9地点出土遺物数量 ······	118
表17	07_4・5地点・09_20地点出土遺物数量 ······	123

巻頭図版目次

卷頭図版1	09_13地点 方形周溝墓群 08_13地点 SZc40・SZc41	
卷頭図版2	07_1・08_13地点出土 石器・石製品 SIc03出土 砥石 SKc0806出土 石杵	
卷頭図版3	SDc031 (大溝) 上層肩部出土土器 SDc031 (大溝) 出土 円盤状銅製品	
卷頭図版4	SDc031 (大溝) 出土 巴型銅器 SDc031 (大溝) 出土 手捏ね土器	

挿入写真目次

写真1	荒尾南遺跡とその周辺 ······	12
-----	-------------------	----

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

荒尾南遺跡は、大垣市荒尾町・桧町に所在する（図1）。この遺跡内において、国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所（以下「岐阜国道事務所」という。）による東海環状自動車道建設に伴い、記録保存のための発掘調査を実施することになった。東海環状自動車道は、東名・名神高速道路、中央自動車道、東海北陸自動車道などを、環状にネットワーク化することを目的とし、鋭意建設が進められている高速自動車道である。

荒尾南遺跡は、大垣市教育委員会が実施した平成元年度～5年度の遺跡の詳細分布調査によって確認された、弥生時代～中世に至る遺跡である（大垣市教育委員会1994）。この分布調査では、JR東海道線と国道21号の間で濃密な遺物散布が認められている（大垣市教育委員会1993）。分布調査結果に基づく大垣市遺跡地図の刊行後、平成6年度に県道50号（大垣環状線）建設に伴い、財団法人岐阜県文化財保護センターが発掘調査を実施し、弥生時代前期～古墳時代初頭を中心とした遺構・遺物を確認した。その後も、大垣市教育委員会が市道建設に伴う試掘調査や発掘調査を実施し、弥生時代中期の方形周溝墓群や弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡を確認した。

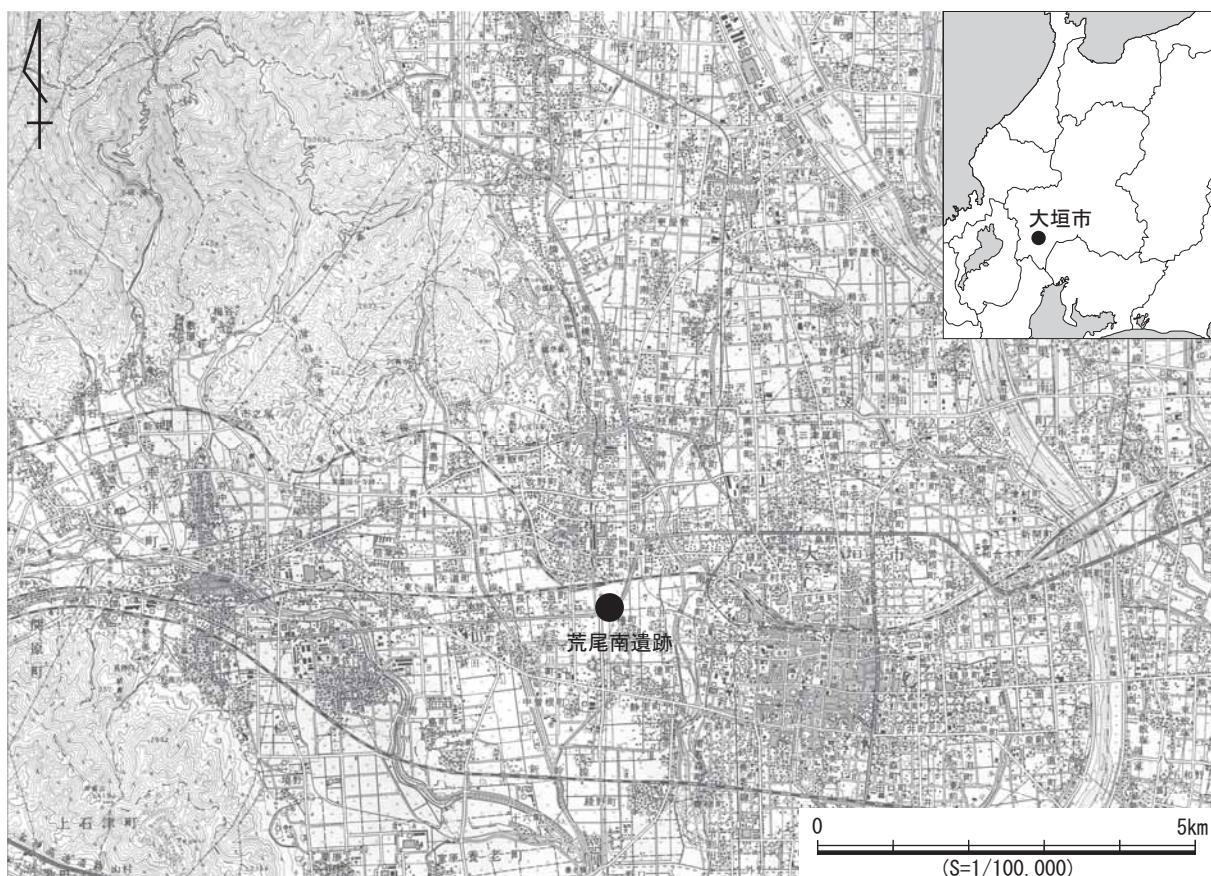


図1 遺跡位置図（国土地理院発行の5万分の1地形図（大垣）を使用した。）

荒尾南遺跡及びその周辺部において、東海環状自動車道が建設されることになり、文化財保護法第94条第1項に基づき、岐阜国道事務所長から岐阜県教育委員会教育長あて発掘の通知（平成18年2月24日付け国部整岐調第242号）が提出され、過去の調査成果に基づき、道路敷、調整池堰堤部分などの工事により埋蔵文化財に影響が及ぶと考えられる範囲における発掘調査の実施による記録保存の措置が必要であり、同法第94条第2項の規定に基づき、県教育長から同事務所長あてに、勧告（平成18年3月8日付け社文第40号の45）がされた。遺跡周辺部については、平成18年度から平成19年度にかけて試掘・確認調査を県教育委員会が実施し、遺構や遺物が確認された調査坑周辺の事業予定地では、発掘調査が必要であるとされた（岐阜県教育委員会2009）。また、平成21年度には遺跡範囲内ではあるが、遺跡の残存状況が不明確な部分について、県教育委員会が試掘・確認調査を実施し、遺構・遺物が確認できた範囲は、平成23年度に発掘調査を行うこととなった。

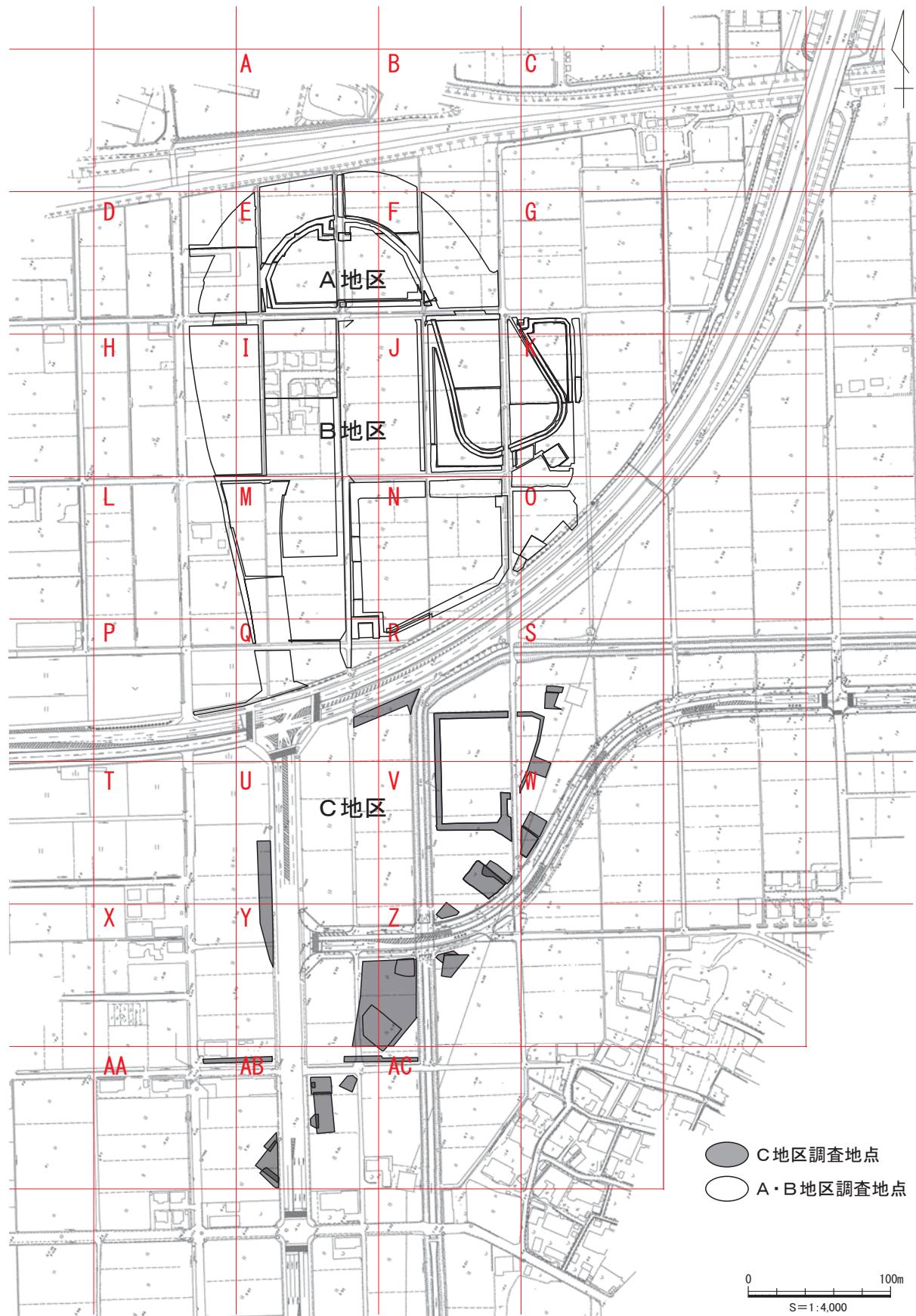
荒尾南遺跡は、南北750m、東西250mに広がる細長い遺跡であるため、JR東海道線から国道21号までの範囲のうち、北部をA地区、南部をB地区、国道21号より南側をC地区と区分した（図2）。本書は、荒尾南遺跡C地区7,160m²についての発掘調査成果の記録である。C地区的発掘調査は、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター（平成21年度から岐阜県文化財保護センター）が平成19年度～平成21年度、平成23年度に実施し、二次整理作業は平成23年度から平成24年度に実施した。なお、平成19・20年度の発掘調査は、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターが、文化財保護法第92条に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出について（平成19年3月19日付け財文保第8号の4、平成20年3月21日付け財文保第83号）を岐阜県教育委員会に提出し、岐阜県教育委員会から埋蔵文化財の発掘調査についての通知（平成19年3月23日付け社文第45号の11、平成20年4月3日付け社文第3号の4）を受けて実施した。平成21・23年度の発掘調査は、岐阜県文化財保護センターが岐阜国道事務所長からの発掘調査実施の依頼を受けて、調査着手後、文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告（平成21年5月14日付け文財セ第17号の2、平成23年5月10日付け文財セ第14号）を岐阜県教育委員会に提出し、岐阜県教育委員会から埋蔵文化財の発掘調査についての通知（平成21年6月12日付け社文第14号の10、平成23年5月18日付け社文第9号）を受けた。

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

発掘調査は、用地買収状況及び工事計画の優先度に応じて、岐阜国道事務所と調査地点を協議し、平成19年度から開始した。発掘調査対象地は、道路建設計画により橋脚や調整池が建設される部分であり、平成19年度には1,804m²、平成20年度には1,334m²、平成21年度には3,146m²、平成23年度には876m²の発掘調査を実施した。

発掘区は、橋脚の規模や調整池堰堤の形状により形や面積が異なるが、A地区・B地区を含めた荒尾南遺跡全体を100m×100mで区切り、北西から南東へA～ACまで29の大区画を設定した。さらにその中に5m×5mの小区画を設定し、北から南へA～T、西から東へ1～20とし、発掘区画の呼称は大区画名と北西角の杭番号を用いて表した。また、調査地点の番号は、各年度毎に便宜的に使用した



番号であり、調査年度を明示するため、必要に応じて西暦の下二桁を前に付けて、07_1地点のように表示した。

調査対象地の多くは、調査前には水田として利用されていた場所であるが、過去に行われた発掘調査により、調査面は2面あることが判明している。第1面は古墳時代中期以降と思われる遺構や遺物が存在し、第2面は弥生時代中期から古墳時代前期の墓域、居住域が広がることが想定された。ただし、第1面に遺構が存在しない地点があり、調査を実施していく中で、第1面遺構の有無を速やかに判断し、掘削作業を進めるようにした。

基本層序は、過去の調査成果を基に、I層からVI層まで設定し、I層が表土層、II層が耕地整理等に伴う盛土層、III層及びIV層を遺物包含層、V層を遺構基盤層と設定した（第3章第1節参照）。このうちII層からIV層は微地形の自然堤防上にあたり、土地利用による形状の改変のため確認できない場所があった。なお、発掘調査を実施する中で、必要に応じてa～bを用いて細分した。

C地区では、発掘区壁面に約45度の傾斜を付けるように、重機により発掘区内の表土（I層）及び無遺物層（II層）を除去し、人力で包含層（III層）を掘削した後、第1調査面となるIV層上面で遺構検出作業、遺構掘削作業を行った。第1調査面終了後、人力により包含層（IV層）を掘削し、V層上面において遺構検出作業、遺構掘削作業を実施した。遺構の調査記録は、写真撮影及び手測り実測、デジタル測量を行った。検出した遺構は、検出順を原則として、暫定的に調査担当職員ごとの通番を付し、整理作業時に遺構種別番号を設けた。遺構種別番号は、遺構略記号とcを頭に付けた種別ごとの通し番号とした。遺物包含層から出土した遺物は、層位・グリッド単位、遺構から出土した遺物は、遺構内を概ね5cm単位の人工層位もしくは、分層した層位毎に取り上げたが、原位置性が高い遺物や、遺構との関係性が検討できる出土状況のものについては、実測あるいは出土位置を測定して取り上げた。遺物には、取り上げ単位ごとに遺物ラベルを添付した。遺物ラベルには「西暦下二桁とAM（遺跡名略号）」「出土場所（遺構番号又はグリッド番号）」「出土層位」「取上日」「備考」を記入し、この記録をもとに一次遺物台帳を作成した。遺構番号は、担当職員を区別するアルファベット（A、B、C…）と4桁の数字により表記した（例、A0001）。このため、二次整理作業時には、遺構種別番号を新たに付けた。発掘区全体の写真撮影は、原則として高所作業車を用いて撮影したが、狭小な調査地点では使用していない。発掘区内は、湧水が激しく、排水溝を発掘区内に掘削して常時ポンプによる排水を行う必要があった。

なお、出土遺物の洗浄及び注記作業、遺物台帳作成（一次整理作業）を、業者に委託して、A地区・B地区とともに現地で実施した。

2 調査の経過

現地での調査経過は以下の通りである。なお、調査地点は図3に示したが、その範囲は発掘区の上端のラインである。

平成19年度 発掘調査面積1,804m²

道路の橋脚や調整池の堰堤部分にあたる、07_1～9地点を設定した。4月24日から07_7地点の重機による表土掘削を開始し、07_6地点、07_8地点、07_9地点も順次行った。5月7日からは遺物包含層（III層）掘削作業及び、第1面の遺構検出作業を開始した。第1面では、古代以降と思われる溝や土坑を

07_7地点で検出し、遺構掘削作業を行った。6月11日からは、07_4・5地点の表土掘削作業も行い、遺物包含層（III層）掘削に取りかかった。6月13日に07_6～9地点の第1面の調査を終え、高所作業車により発掘区全体の写真撮影を実施した。6月15日からは07_9地点の遺物包含層（IV層）掘削作業を開始した。6月25日から07_6～8地点の遺構検出作業も並行して行い、前方後方形周溝墓の周溝部を検出した。7月12日に07_4・5地点の第1面の調査を終え、高所作業車により発掘区全体の写真撮影を実施した。7月18日から遺物包含層（IV層）掘削作業を開始し、包含層中から多量の遺物が出土した。7月24日前方後方形周溝墓の掘削を行い、古墳時代前期の土器が出土。出土状況の記録を作成。7月31日から07_7地点北部で検出した幅が広い溝状遺構の掘削を開始する。8月6日から07_4・5地点でV層上面での遺構検出作業を行うが、発掘区中央部が帶状に凹み、これが大垣市教委調査による大溝の延長部になると予想された。8月20日に07_9地点の第2面の調査が終了し、翌日に発掘区全体の写真撮影を実施した。9月からは、07_4～8地点の遺構掘削作業が主となり、特に大溝からは多量の土器や木製遺物が出土した。木製遺物の中には、農具の未成品や木製祭祀具と思われるものが認められた。9月10日からは07_3地点の遺物包含層（III層）掘削を開始し、9月18日からは07_3地点の第1面遺構検出作業、遺構掘削作業を行い、9月25日に07_3地点の第1面の調査を終え、発掘区全体の写真撮影を実施した。9月27日からは遺物包含層（IV層）掘削作業に取りかかった。10月1日からは07_2地点、10月4日からは07_1地点の重機による表土掘削作業を開始し、遺物包含層（III層）掘削作業を行った。07_4・5地点や07_7地点の大溝からは赤彩のある板状木製品やカゴ状木製品が出土した。10月10日に三重大学名誉教授八賀晋氏に、10月12日に愛知県埋蔵文化財センター赤塚次郎氏に現地で指導を受けた。10月12日には07_6～8地点の第2面の調査を終了し、高所作業車による発掘区全体の写真撮影を行った。10月17日からは07_1・2地点の第1面の遺構検出作業を行った。07_2地点では明確な遺構を検出することができなかつたが、発掘区全体の写真撮影を10月18日に行った。また、この日に07_4・5地点大溝から巴形銅器が出土した。10月24日に07_1地点の第1面調査、07_3地点の第2面調査を終了し、発掘区全体の写真撮影を行った。翌日からは07_1地点の遺物包含層（IV層）掘削作業を開始した。11月7日から07_1地点の第2面遺構検出作業を行い、方形周溝墓と思われる溝状遺構や木棺墓を確認した。12月4日に07_1地点、12月10日に07_4・5地点、12月12日に07_2地点の第2面調査を終了し、発掘区全体の写真撮影を行った。その後、発掘区壁面土層実測や補足調査、分析試料のサンプリングを行い、12月14日をもって現地での調査を終了した。一次整理作業は、A・B地区とともに1月31日まで現地において行った。

平成20年度 発掘調査面積1,334m²

道路の橋脚や調整池の堰堤部分にあたる、08_10～14地点を設定した。7月17日から08_10、11地点の重機による表土掘削作業を開始し、7月25日から遺物包含層（III層）掘削作業を開始した。7月31日から遺構検出作業を行い、IV層上面において土坑、溝状遺構などを確認した。08_11地点では、小さな土坑が不規則ながら帶状に分布した状態であった。8月19日には08_10、11地点の第1面の調査を終了し、高所作業車による発掘区全体の写真撮影を行った。その後遺物包含層（IV層）掘削作業を行い、8月21日からはV層上面での遺構検出作業にも取りかかった。08_10地点では、方形周溝墓と思われる溝状遺構を、08_11地点では方形周溝墓や土坑、溝状遺構を確認し、8月25日からは順次遺構掘削作業に移行した。9月8日からは07_1地点の南に位置する、08_13地点の表土掘削作業を開始

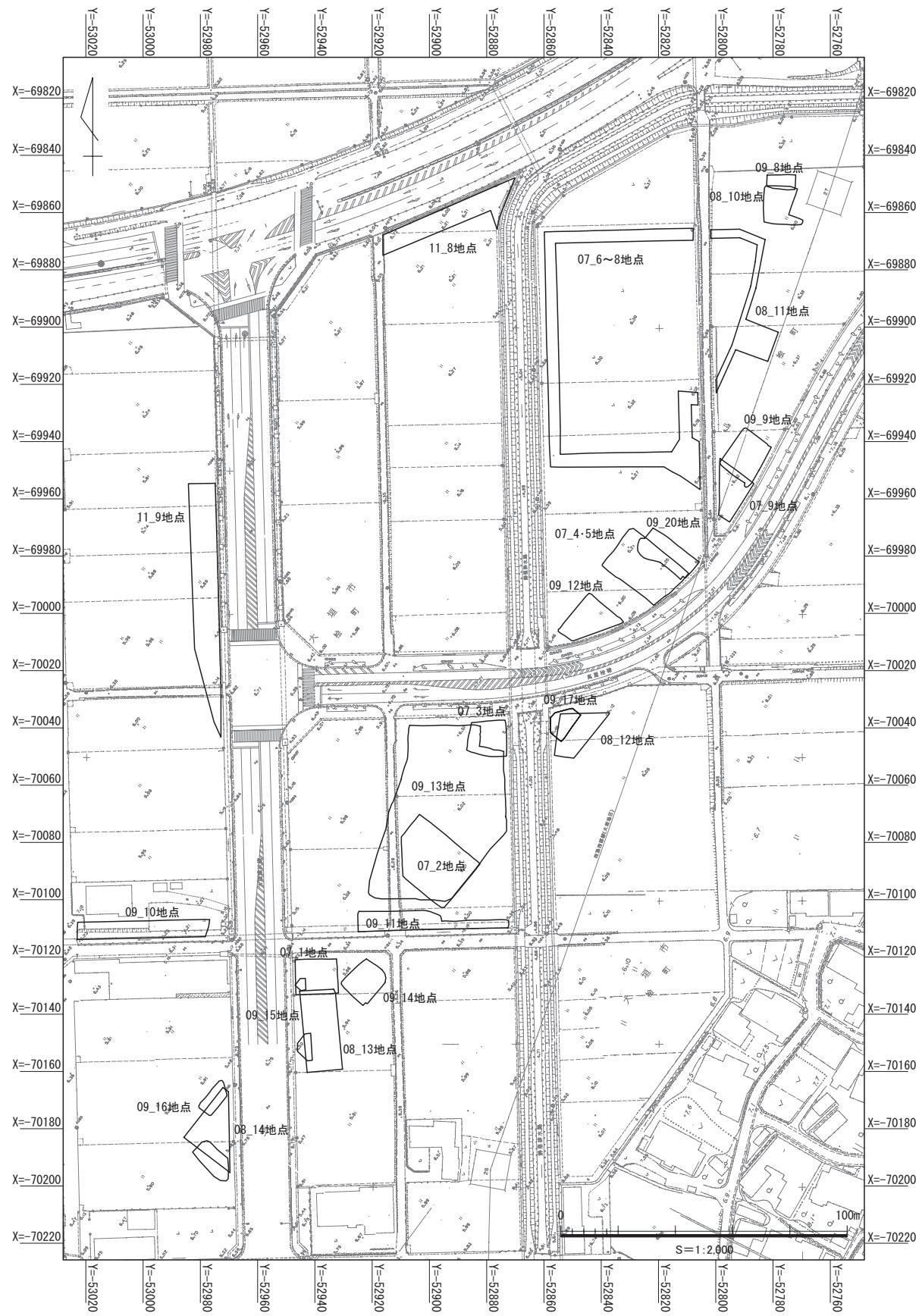


図3 C地区調査地点位置図

したが、当初の想定とは異なり、発掘区南部に洪水によると思われる砂層の堆積が厚く、1.5mほど掘削する必要があった。そこから07_1地点の調査面に向けて、緩やかに傾斜していることを想定しながら重機掘削を行ったが、砂層の堆積は急に薄くなり、粘質土を重機により0.5mほど掘削してしまった。調査を進める中で、墳丘が残存した方形周溝墓がここに存在し、墳丘の上部を重機により掘削してしまったことが判明した。重機による表土掘削作業は、9月11日からは08_14地点に移動したが、ここでも洪水によると思われる砂層が厚く堆積していた。9月12日に08_10、11地点の第2面の調査を終了し、高所作業車による発掘区全体の写真撮影を行った。9月16日から08_13地点、翌日から08_14地点の遺物包含層（III層）掘削作業を開始した。9月21日に短時間に集中的に降雨があり、08_13地点の発掘区壁面が崩落する事態となつたが、翌日から壁面の補強工事を行い調査を継続した。10月2日からは08_13、14地点のIV層上面での遺構検出作業を行うが、08_13地点では墳丘状の高まりを2カ所確認したほかは、遺構と思われるものではなく、08_14地点でも明確な遺構を確認することはできなかつた。このため08_14地点では10月3日に、08_13地点では10月8日に第1面の調査を終了し、発掘区全体の写真撮影を行つた。両地点とも撮影翌日には、遺物包含層（IV層）掘削作業を開始し、順次遺構検出作業及び遺構掘削作業を行つた。10月14日に三重大学名誉教授八賀晋氏に現地で指導を受けた。10月17日から08_12地点の重機による表土掘削を行い、10月28日から遺物包含層（III層）掘削作業を開始した。11月5日にIV層上面での遺構検出作業を実施するが、遺構を確認できなかつたため、そのまま遺物包含層（IV層）掘削作業に移行した。11月6日に08_13地点の方形周溝墓墳丘面を検出した状態で、他のV層上面遺構とともに第2面として発掘区全体の写真撮影を行つた。発掘区全体の測量実施後には、墳丘の解体作業を開始した。11月10日に08_12地点のV層上面での遺構検出作業を行い、数基の方形周溝墓が周溝を共有するように重複していることを確認し、周溝の掘削作業を行つた。11月13日に08_14地点の第2面の調査を終了し、発掘区全体の写真撮影を行つた。11月15日には、A・B地区での現地説明会に合わせて、08_13地点の現地公開を行つた。12月2日に08_13地点の方形周溝墓の墳丘解体作業を終了し、その下部において検出した土坑の掘削作業を行う。12月11日に08_12地点の第2面の調査を、12月12日に08_13地点の方形周溝墓墳丘解体後の調査を終了し、発掘区全体の写真撮影を行い、現地での調査を終了した。一次整理作業は、A・B地区と合わせて1月31日まで現地で行った。

平成21年度 発掘調査面積3,146m²

道路の橋脚や調整池の堰堤部分、既設用水路の付け替え予定地にあたる、09_8～17、20地点を設定した。4月28日から09_8、9地点において、重機による表土掘削作業を開始し、5月11日からは遺物包含層（III層）掘削作業を行つた。09_8地点では5月13日にIV層上面での遺構検出作業、5月14日に遺構掘削作業を行い、第1面の調査を終了したため、発掘区全体の写真撮影を行つた。09_12地点は5月13日から15日に重機による表土掘削作業を行つた。5月14日に09_9地点のIV層上面での遺構検出作業を終え、小土坑が帶状に分布する状況を確認し、遺構掘削作業に取りかかつた。09_8地点は5月15日から遺物包含層（IV層）掘削作業、5月19日からV層上面での遺構検出作業を行い、08_10地点から続く方形周溝墓の溝を確認した。09_9地点では5月19日に第1面の調査を終了し、高所作業車による発掘区全体の写真撮影を行つた。また、同日から09_12地点の遺物包含層（III層）掘削作業、09_20地点の表土掘削作業を開始した。5月21日から09_9地点で遺物包含層（IV層）掘削作業を

開始した。5月27日に09_9地点のV層上面で遺構検出作業を開始し、溝状遺構や土坑などを確認した。09_12地点でもIV層上面で遺構検出作業を行い、水田と思われる遺構や小さな土坑を確認した。09_20地点において遺物包含層（III層）掘削作業を開始した。5月29日に09_8地点の第2面、6月1日に09_12地点の第1面の調査を終了し、発掘区全体の写真撮影を行った。6月4日に09_20地点のIV層上面での遺構検出作業を行うが、明確な遺構は確認できなかつたため、発掘区全体の写真撮影を行い、遺物包含層（IV層）掘削作業に移行した。6月5日から09_12地点のV層上面での遺構検出作業を行い、方形周溝墓と思われる溝状遺構や、土坑などを確認した。6月10日から09_10地点の重機による表土掘削作業を開始し、6月15日から遺物包含層（III層）掘削作業を行った。6月16日からは09_13地点北半部の重機による表土掘削作業を開始した。この調査地点は、周辺の耕作状況や排土処理の都合から北半部と南半部に分けて調査を行う必要があった。09_20地点では6月18日からV層上面で遺構検出作業を行いつつ、07_4・5地点から続く大溝の掘削作業を行い、大溝内からは多量の土器片や木製品が出土した。また、V層上面では竪穴住居や溝状遺構を確認した。6月19日には09_9地点の第2面調査を終了し、高所作業車により発掘区全体の写真撮影を行った。6月24日に09_10地点でIV層上面の遺構検出作業を終了したが、遺構は確認できなかつたため、発掘区全体の写真撮影を行い、遺物包含層（IV層）掘削作業に移行した。6月25日に09_11地点西半部の重機による表土掘削作業を行い、09_13地点の遺物包含層（III層）掘削作業も開始した。6月29日からは09_13地点のIV層上面での遺構検出作業を行い、南北方向の溝状遺構を確認したもの、II層上面から掘り込まれていることを確認した。また、IV層とした黒色土層が部分的に存在しないところを何ヵ所か確認したが、これは方形周溝墓の墳丘頂部であった。7月16日に09_13地点の第1面調査を終了し、高所作業車による発掘区全体の写真撮影を行った。7月22日から09_11地点の遺物包含層（III層）掘削作業、09_13地点の遺物包含層（IV層）掘削作業を開始し、順次遺構検出作業も並行して行った。7月30日から09_14、15地点の重機による表土掘削作業を開始した。また、7月30日には09_20地点の第2面調査を終了し、高所作業車による発掘区全体の写真撮影を行った。7月31日から09_15地点の遺物包含層（III層）掘削作業を開始し、IV層上面での遺構検出作業を行ったが、遺構は確認できなかつたため、8月5日には第1面調査を終了し、発掘区全体の写真撮影を行った。また、09_14地点の遺物包含層（III層）掘削作業を開始し、8月17日にはIV層上面で遺構検出作業を行ったが、遺構は確認できなかつたため、第1面調査を終了し、発掘区全体の写真撮影を行った。09_15地点は8月17日から、09_14地点は8月18日から遺物包含層（IV層）掘削作業を開始した。09_15地点は、07_1地点と08_13地点に隣接し、08_13地点で検出した盛土が残存した方形周溝墓の南辺が続く位置であった。8月19日には09_13地点のV層上面での遺構検出作業をおおむね終えたが、網目状に黒色土が残存し、周溝を共有した方形周溝墓群の存在が明らかとなつた。8月26日に09_15地点の第2面調査を終了し、発掘区全体の写真撮影を行った。また、09_14地点ではV層上面での遺構検出作業を終え、土坑、溝状遺構を検出した。8月31日に第2面調査を終了し、高所作業車による発掘区全体の写真撮影を行った。9月17日に立命館大学青木哲哉講師に遺跡が立地する微地形について現地で指導を受けた。9月28日に09_16地点の重機による表土掘削作業を開始した。10月6日に三重大学名誉教授八賀晋氏に現地で指導を受けた。10月13日に09_10地点と09_11地点西半部の第2面調査を終了し、高所作業車により発掘区全体の写真撮影を行った。また、09_17地点では重機による表土掘削作業を行った。10月14日に09_16地点での遺物包

含層（Ⅲ層）掘削作業を終え、Ⅳ層上面での遺構検出作業を行ったが、遺構が確認できなかつたため、発掘区全体の写真撮影の後に、遺物包含層（Ⅳ層）掘削作業に移行した。09_17地点においても、翌日遺物包含層（Ⅲ層）掘削、Ⅳ層上面での遺構検出作業を行つたが、遺構が確認できなかつたため、発掘区全体の写真撮影の後に、遺物包含層（Ⅳ層）掘削作業に移行した。10月16日から09_11地点東半部の重機による表土掘削作業を開始した。この地点は、非常に狭小な発掘区であったため、掘削は西半部でも検出した自然流路埋土の砂礫層上面までとした。10月19日には、09_13地点北半部の第2面調査を終了し、高所作業車による発掘区全体の写真撮影を行つた。10月20日からは09_16、17地点のV層上面の遺構掘削作業を開始した。09_16地点は08_14地点に、09_17地点は08_12地点に隣接し、方形周溝墓や溝状遺構の広がりを確認した。10月27日から09_13地点南半部の重機による表土掘削作業を開始した。07_2地点や09_13地点北半部、09_11地点の調査状況から、南半部の多くは自然流路にかかると判断でき、Ⅳ層上面では遺構が存在しない可能性が高いため、重機による掘削をⅢ層まで行つた。10月29日に09_11地点東半部、09_17地点の第2面調査を終了し、発掘区全体の写真撮影を行つた。11月4日に愛知県埋蔵文化財センター赤塚次郎氏に現地で指導を受けた。11月9日に09_16地点の第2面調査を終了し、発掘区全体の写真撮影を行つた。11月16日にA地区において不発弾が発見されたため、A地区、B地区の発掘作業は一時中断することとなつた。C地区は直線距離で約0.5km離れていたが、安全確認のため一時発掘作業を中断した。12月7日から不発弾が埋没している可能性がないと判断されたため、09_13地点南半部での発掘作業を再開した。12月17日に09_13地点南半部の第2面調査を終了し、高所作業車による発掘区全体の写真撮影を行つた。その後、補足調査を行い12月21日をもつて現地での調査を終了した。一次整理作業は、A・B地区と合わせて2月28日まで現地で行つた。

平成23年度 発掘調査面積876m²

国道21号と県道50号（大垣環状線）との交差点拡幅部にあたる、11_8、9地点を設定した。4月19日から11_8、9地点の危険物探査を行い、4月21日に安全を確認した。4月26日から11_9地点において、重機による表土掘削作業を開始した。5月18日に11_9地点において二度目の危険物探査を行い、5月19日に安全を確認した。5月20日からは人力による掘削作業に入り、5月24日からは遺物包含層（Ⅳ層）掘削作業を行つた。5月25日から遺構検出作業を行い、自然流路埋土上面において溝状遺構を確認した。5月26日には遺構検出作業を終了し、発掘区全域が自然流路であることを確認し、自然流路(NRc1)埋土の黒色泥炭層の掘削を開始した。黒色泥炭層からは遺物はほとんど出土しなかつた。5月30日に台風2号による降雨のため、発掘区壁面が崩落する事態となつたが、翌日に壁面の補強作業を行い調査を継続した。6月6日には自然流路埋土の黒色泥炭層の掘削を終了し、黒色粘質シルト層の掘削を開始したが、弥生土器や杭、板状木製品が出土した。6月7日には周辺水路が増水し、発掘区内が水浸しとなる事態となつたため、排水ポンプを追加して排水し、調査を継続した。また、狭小な発掘区にもかかわらず掘削深度が深くなつたため、人力による掘削は自然流路埋土の砂礫層上面までとした。6月22日には自然流路埋土の砂礫層上面までの掘削を終了し、高所作業車による発掘区全体の写真撮影を行つた。7月8日に自然流路埋土の砂礫層を重機により掘削し土層確認を行い、立命館大学青木哲哉講師に遺跡が立地する微地形について現地で指導を受けた。7月11日から11_8地点において重機による表土掘削作業を開始した。7月14日からは第1面の遺物包含層（Ⅲ層）掘削作業、Ⅳ層上面での遺構検出作業を行い、小土坑や溝状遺構を検出した。7月15日には遺構検出作業を終了し、遺構掘

削作業に入った。7月21日には第1面の調査を終了し、高所作業車による発掘区全体の写真撮影を行った。7月25日から第2面の調査を開始した。遺物包含層（IV層）掘削作業、V層上面での遺構検出作業を行い、主に方形周溝墓群と入り江状の溝状遺構を検出した。7月26日からは遺構掘削作業に入った。入り江状の溝状遺構からは弥生時代中期の土器がまとまって出土した。また、その肩部においては、こぶし大の礫を大量に含む溝状遺構を確認した。8月1日に愛知県埋蔵文化財センター赤塚次郎氏、8月9日に三重大学名誉教授八賀晋氏に現地で指導を受けた。9月7日に第2面の調査を終了し、高所作業車による発掘区全体の写真撮影を行った。9月8日からは補足調査を行った。9月13日には重機による入り江状の溝状遺構肩部から陸地部分にかけての断ち割りと土層確認を行い、立命館大学青木哲哉講師に遺跡が立地する微地形について現地で指導を受け、現地での調査を終了した。一次整理作業は、A・B地区と合わせて12月15日まで現地で行った。

二次整理作業は、石器や金属製品、木製品の整理作業を平成20年度から一部実施したが、土器類及び調査記録類の整理作業は、平成23年4月から平成25年3月まで実施した。

3 調査体制

発掘調査及び整理作業の体制は、表1のとおりである。平成20年度までは財団法人岐阜県教育文化財団岐阜県文化財保護センターとして業務を行っていたが、平成21年度からは県教育機関岐阜県文化財保護センターとして業務を行った。なお、平成22年度は、C地区の発掘調査・整理作業を行っていないため割愛した。

表1 調査体制表

職名	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成23年度	平成24年度
理事長（～H20）	-	広瀬利和			
副理事長（～H20）	伊藤克己 兼理事長職務 代理者 岩田重信	伊藤克己 吉田康雄			
所長 H20まで常務理事兼所長	田口久之	梅村恒男	後藤満	高橋照美	丸山和彦
総務課長 H20まで経営課長	加藤美好	加藤美好	長屋忠司	村瀬誠三	村瀬誠三
調査課長 H20まで調査部長	北村厚史	北村厚史	小谷和彦	小谷和彦	小谷和彦
調査第一係長・H21/23は担当 チーフ・H20まで課長（発掘 担当）	成瀬正勝	成瀬正勝	早野壽人	河瀬実浩	-
調査第二係長・H21/23は担当 チーフ・H20まで課長（整理 担当）	谷村和男	谷村和男	谷村和男	春日井恒	春日井恒
発掘調査担当職員	石井照久 香田明彦 野々田光則 春日井恒 北村昌弘	河瀬実浩 香田明彦 野々田光則 春日井恒 鷺見博史	河瀬実浩 北川真司 野々田光則 春日井恒 鷺見博史	山本厚美 鷺見博史 小野木学	
整理担当職員	林直樹	林直樹 藤田英博	藤田英博 三島誠	藤田英博 宗宮隆司 三島誠	宗宮隆司 三輪晃三 山本厚美 鷺見博史 小野木学 岩瀬岳
整理作業員				岩田のり子, 加 藤美里, 兼村清 子, 林 浩 美, 三 島京子, 宮川真 弓, 山田弘子	株式会社イビ ソクに委託

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

荒尾南遺跡は、大垣市の北西部、揖斐川が形成した標高6m前後の沖積地に立地する。遺跡の北方には、金生山から南に向かって舌状に延びる牧野台地と通称される低位段丘、北西部には相川によって形成された緩扇状地が位置する。遺跡は、その扇端部から氾濫平野にかけて広がりを見せ、その範囲は東西約250m、南北約750mと広大な範囲に及ぶ。東西方向に走行するJR東海道線と境を接する遺跡の北縁付近が段丘低位面の末端部に相当する。また、遺跡内には、中小の河川が幾筋も推定され¹⁾、結果として網目状になっている。このことから、荒尾南遺跡は、扇状地の微高地部分の旧中州上から旧河道に形成された遺跡といえる。

荒尾南遺跡C地区の東方にある桧遺跡も、微高地部分の旧中州上に形成された遺跡である。また、遺跡の南縁に位置する桧集落は杭瀬川により形成した自然堤防帶に立地することから、微高地に囲まれた荒尾南遺跡と桧遺跡の間は、排水性の悪い低湿な環境であった可能性がある。

弥生時代から古墳時代前期の生活痕跡が残された、基本層序のV層上面は、C地区内では調査地点

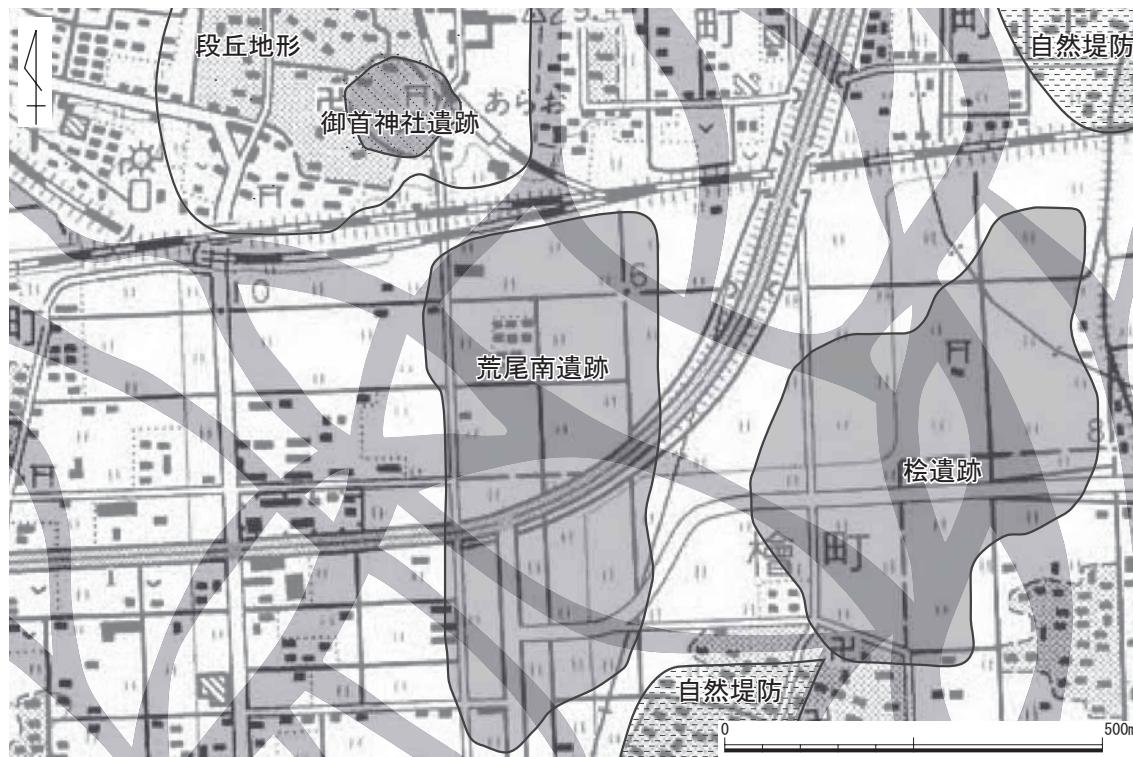


図4 周辺の地形と遺跡の立地（国土地理院発行の2万5千分の1地形図（大垣）を使用した。遺跡の範囲は県域統合型GISぎふ「大垣市都市計画図」をもとに作成した。）

1) 大垣市教育委員会1997「6 荒尾南遺跡・桧遺跡」『大垣市遺跡詳細分布調査報告書－解説編』において、空中写真の解析から網目状の旧河道が推定されており、図4に転記した。



写真1 荒尾南遺跡とその周辺

によって標高が異なる。V層上面での標高が最も高いのは、07_7地点の北西部で5.90mである。ここから東に向かって緩やかに傾斜し、08_10地点で5.50m、08_11地点で5.40mである。07_7地点の南西部では5.70mとあまり変化がないが、07_4・5地点になると4.80mと傾斜がやや強くなっている。こことほぼ同じ標高になるのは、南側の07_3地点や09_10地点、西端部の08_12地点で、4.70m～4.80mである。07_4・5地点の西にある09_12地点は、これよりもやや高く4.90m～5.00mあり、07_7地点北西部から南西部にかけて、旧地形では南北方向にやや高まりを持った、旧中州状の地形だったと推定できる。この場所では、IV層の堆積が確認できなかったことから、削平された可能性が高く、本来はより標高が高い場所であったと思われる。11_9地点から09_11地点にかけて検出した、自然流路(NRe1)の東西両肩にあたる09_13地点や09_11地点西端部では、V層上面の標高が4.20m～4.40mとなる。ここから西の09_10地点に向かっては緩やかに標高が高くなっていくようであるが、南の08_13地点や08_14地点では、4.20m～4.30mとあまり変化がないか、やや低くなっている。09_14地点から08_14地点にかけて、V層上面での標高が4.30mよりも低くなる場所では、IV層上部に洪水砂層が堆積し、4.30mよりも高くなる場所では、洪水砂層が見られなかった。

C地区は、北西から南東に流れる自然流路によって、南北に大きく分断されているが、それぞれの場所においても、非常に緩やかな起伏が認められた。多くの旧河道が推定され(図4)、河川の作用により形成された地形と考えられている。現状では、昭和30年代に行われた耕地整理事業により、比較的平坦な地形に見受けられるが、土中には自然に形成された緩やかな起伏が残されていた。

第2節 歴史的環境

荒尾南遺跡周辺は、大垣市域内でも比較的遺跡が集中する場所で、特に弥生時代から古代にかけての重要な遺跡が分布している（図5）。これらの遺跡の概況や、過去の発掘調査については、『荒尾南遺跡A地区I』『荒尾南遺跡B地区I』に掲載しているので、時代ごとに調査結果を含めながら簡単に述べる。

縄文時代は、東町田遺跡（24）、矢道B遺跡（30）、御首神社遺跡（35）などで縄文時代中期や晩期の土器が断片的に知られている程度である。また、荒尾南遺跡では、竪穴住居跡1軒を検出し、自然流路内や包含層などから縄文時代晩期の土器が出土した。包含層から出土した縄文土器は、晩期後半の土器片で量は少ない。しかし、自然流路内から出土した縄文土器は、弥生土器と混在した状態であるものの、比較的量が多い。

弥生時代になるとこの地域では遺跡数が増加し、弥生時代前期の土器が荒尾南遺跡で比較的まとまって出土し、土器棺墓も確認されている。しかし、これまでに確認された遺構や遺物の多くは弥生時代中期～後期に属する。弥生時代中期は、東町田遺跡で方形周溝墓や環濠と思われる溝が確認され、荒尾南遺跡では大規模な方形周溝墓群や、遺跡東部を南北に貫く大溝が掘削されている。方形周溝墓群は、A地区からC地区に及ぶ広い範囲で確認されている。しかし、この時期の集落跡は未確認で、方形周溝墓を造り出した集落の存在を確認することが、大きな課題となっている。弥生時代後期は、荒尾南遺跡や東町田遺跡などで集落跡が、一本松遺跡（19）や荒尾南遺跡では方形周溝墓が確認されている。荒尾南遺跡で確認した集落跡は、弥生時代後期から古墳時代初頭に営まれたもので、竪穴住居はA地区からB地区に濃密に確認され、300軒を超える。荒尾南遺跡における後期の方形周溝墓は、C地区南西部に限られている。さらに東町田遺跡では、弥生時代末期から古墳時代初頭の前方後方形周溝墓が2基確認されている（大垣市教委2004）。

古墳時代前期には、西方の扇状地や昼飯町の台地部及びその周辺に、粉糠山古墳（11）、矢道長塚古墳、昼飯大塚古墳（13）など、大型の前方後方墳や前方後円墳が集中し、この地域に一大勢力が存在していたことをうかがわせる。荒尾南遺跡の集落跡は、古墳時代前期に衰退し、中期以降はC地区を中心に遺物が確認されている程度である。古墳時代後期を迎えると、金生山やその山麓に100基を超す群集墳が形成されている。東町田遺跡では、この時期の竪穴住居跡と掘立柱建物跡が確認されており、集落跡が営まれていたことがわかる（大垣市教委2004）。

奈良時代以降、現在の不破郡垂井町に国衙が置かれたため、西濃地域は古代美濃国の政治的中枢となつた。8世紀には不破郡閑ヶ原町に不破関が、大垣市に国分僧寺、垂井町に国分尼寺が営まれた。しかし、前時代と比較して荒尾南遺跡周辺では、奈良時代から平安時代にかけて遺跡数が減少する。そうした中でも、荒尾南遺跡C地区の東部に位置する桧遺跡（47）では、10世紀後半の掘立柱建物跡が検出されると共に、300点以上の緑釉陶器片や、鍛冶関連遺物が出土している（大垣市教委1998a）が、荒尾南遺跡では、A地区において井戸跡が確認され、遺物が少量出土している程度である。

中世には再び遺跡数が増加しているが、荒尾南遺跡ではA地区を中心に水田遺構を確認した程度である。



図5 周辺遺跡位置図（国土地理院発行の2万5千分の1地形図（大垣）を使用した。遺跡の位置や範囲は、大垣市教委1994をもとに転記した。なお、枝番号は古墳の号数を示す。)

- 1 八幡山古墳 2 社宮司窯跡 3 堤ヶ谷古墳群 4 東山田古墳群 5 東山田窯跡 6 東山田古墳 7 村北古墳群 8 村北遺跡
- 9 花岡山古墳群 10 金生山古墳群 11 粉糠山古墳 12 西町田遺跡 13 星飯大塚古墳 14 東畑遺跡 15 大塚古墳群 16 車塚古墳
- 17 兜塚古墳 18 片原木遺跡 19 一本松遺跡 20 お茶屋敷跡 21 竜神塚古墳 22 岡山本陣跡 23 赤坂畠田遺跡 24 東町田遺跡
- 25 東町田古墳群 26 西牧野遺跡 27 荒尾古墳群 28 櫻戸B遺跡 29 矢道地蔵堂遺跡 30 矢道B遺跡 31 西瀬古遺跡 32 八幡前遺跡
- 33 赤坂新田遺跡 34 熊野遺跡 35 御首神社遺跡 36 池尻城跡 37 興福地遺跡 38 興福地村北遺跡 39 興福地向田遺跡 40 塚越遺跡
- 41 河間遺跡 42 河間村内遺跡 43 笠縫城跡 44 南一色遺跡 45 福田城跡推定地 46 福田城跡 47 桧遺跡 48 木呂古墳跡 49 荒川遺跡
- 50 長松城跡・城下町 51 荒川南遺跡 52 正円寺経塚 53 十六遺跡 54 若森城跡

第3章 調査の概要

第1節 基本層序

平成6年度から平成10年度にかけて、(財)岐阜県文化財保護センターや大垣市教育委員会が実施した発掘調査や試掘調査で確認された層序、各土層から出土した遺物、遺構の時期を検討し、今回の調査を行うに当たって荒尾南遺跡全体の基本層序を検討した。遺跡全体で確認できるのは弥生時代から古墳時代の遺物包含層（IV層）と遺構基盤層（V層）で、この2層を鍵として遺跡全体の状況を検討し、以下のように基本層序を設定した。B地区及びC地区の多くの調査地点では、この層序と基本的に対応するものの、一部ではII層やIII層の堆積が確認できなかったり、洪水による砂層の堆積が認められる調査地点がある。なお、この遺跡が立地する地形を形成する土層は、基本的に河川による水成堆積によるもので、上部は耕地整理等の造成によるものが含まれる。

- I層 耕地整理時に形成された現代の土層で、a層（水田等耕作土）、b層（水田床土）c層（耕地整理に伴う盛土）に細別できる。
- II層 鉄分沈着が見られる黒褐色ないしオリーブ黒色を呈する土層である。A地区では確認していないが、C地区の調査ではブロック状の土塊を一部含むことから、窪地を平坦化するための客土の可能性がある。
- III層 灰色粘質土層で、古代以降の遺物包含層となる。
- IV層 黒褐色～黒色を呈する粘質土層である。主に弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を包含し、C地区北半部では、IV層上面で古代以降と思われる水田遺構や溝状遺構、土坑などを確認した。
- V層 黄灰色～灰色を呈する粘質～砂質土層である。この土層の上面では、主に弥生時代中期～古墳時代初頭の遺構を確認した。なお、V層中からは、遺物が出土していない。
- VI層 V層下で確認した旧河道に伴う砂礫層であるが、確認できた調査地点は限られる。

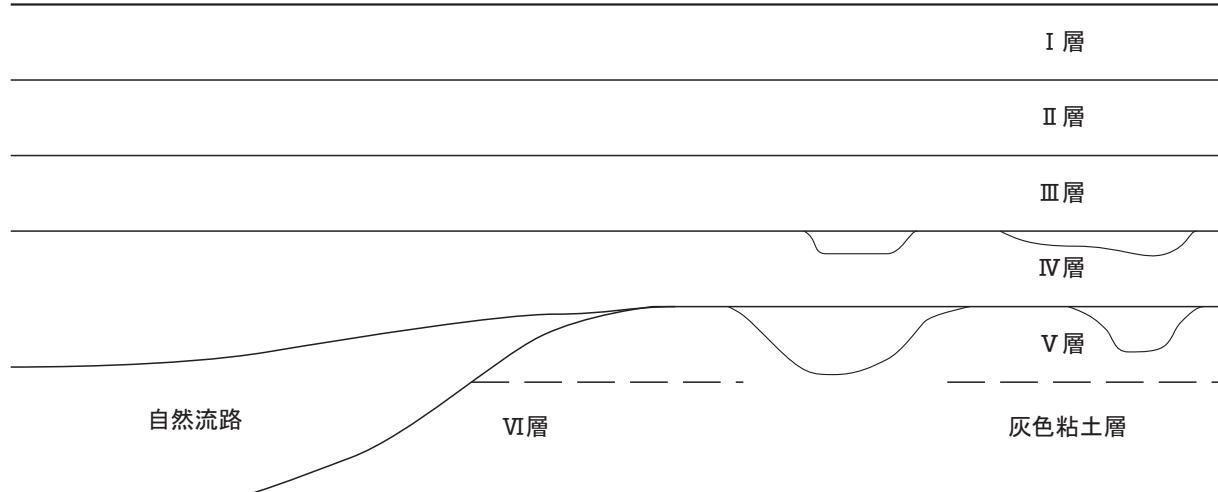


図6 C地区基本層序模式図

第2節 遺構の概要

調査では、IV層上面とV層上面を遺構検出面とし、弥生時代中期から中世に及ぶ竪穴住居跡や方形周溝墓、土坑、溝跡、水田跡などを検出した。今回報告する、平成19～21、23年度のC地区発掘調査で検出した遺構の内訳は、竪穴住居跡4軒（弥生時代末～古墳時代初頭）、掘立柱建物跡4棟、方形周溝墓47基（弥生時代中期、弥生時代末～古墳時代初頭）、前方後方形周溝墓1基（古墳時代前期）、土器棺墓1基（弥生時代中期）、木棺墓1基（弥生時代末～古墳時代初頭）、水田跡3区画（古代以降）である。そのほかに、溝状遺構211条や土坑997基を検出した（表2）。なお、本書における時期区分は、中心となる弥生時代から古墳時代について、既存の土器編年を参考にしながらI期～X期を設定し、一部細分した。詳細は次節で述べる。時期ごとの遺構数量は、表2のとおりである。

竪穴住居跡（略号SB）

遺構の重複や後世の削平により、竪穴住居跡との認定は困難な場合があるが、掘形、柱穴、壁溝、炉跡、貼り床などの竪穴住居の構成要素のうち、一部の確認に留まつても竪穴住居跡の可能性があるものとして報告した。なお、床面で検出した柱穴や小穴、土坑は略号をPとしたが、小穴や土坑は竪穴住居跡に必ずしも伴わない可能性がある。

掘立柱建物跡（略号SH）

向かい合う2辺以上が確認できるように、規則的に並んだ複数の柱穴によって構成される遺構を掘立柱建物跡とした。なお、確認した柱穴の略号はPとした。

柵（略号SA）

直線のあるいは、屈曲して並んだ複数の柱穴によって構成される遺構を柵とした。なお、確認した柱穴の略号はPとした。

単独柱穴（略号SP）

建物に伴う柱穴と同様の形状、又は柱痕跡や柱根が残存しているものの、規則的な配置が確認できず、建物遺構として認定できなかったもの。

焼土・炉跡（略号SF）

被熱した痕跡のある遺構で、竪穴住居跡に伴わないもの。

墓（略号SZ）

遺体を埋葬した穴であるが、この認定は人骨が遺存していない場合非常に困難である。ただし、方形周溝墓のように、方形や長方形に土地を区画するように溝を配置した遺構は、その区画内部に住居跡が想定できるような柱穴配置や竪穴掘形がない限り、埋葬施設である墓坑を確認できていなくても、原則として方形周溝墓とした。なお、溝による方形区画の内部に、墓坑と思われるものが複数確認された場合は、方形周溝墓をSZとし、墓坑は主体部1、主体部2と表示した。

また、完形もしくはそれに近い形状の土器が土坑内から出土するなどの遺物出土状況や、掘形や埋土の堆積状況から、土坑墓の可能性が考えられる土坑を検出したが、墓坑と確実にいえる状況が揃わなかつたため、土坑に含めた。なお、こうした墓坑の可能性が考えられる土坑については、遺構の説明中にその旨を記述した。

表2 C地区遺構数量表

時代		荒尾南遺跡		SZ		SB	SH	SD			SK			SP		ST
	大区分	小区分						2	1	2	12	2	1	30		
弥生時代	前期	I期						2	1	2	12	2	1	30		
	中期	II期		6					2							
		III期	1	1									4			
		2	2										4			
	後期	3	3	2	8	1							4			
		IV期	1	7									4			
		2	2	9	2								9			
	古墳時代	3	3										53	433	82	
		1	1													
		2	2													
		3	3													
		VI期(廻間I)	1	4									13			
		2	2													
		3	3													
		VII期(廻間I～II)	1	1									24	90	8	
		2	2													
		3	3													
	前期	VIII期(廻間II～III)	1										12			
	中期	IX期(松河戸)											2			
		X期(宇田)														
		古墳時代後期														
奈良時代	古代							10					15			
平安時代																3
鎌倉時代～室町時代	中世							8					43			
安土桃山時代～江戸時代	近世							1								
明治時代	近代							9								
合計				50	4	4		211					997		158	3

溝状遺構（略号SD）

上端の短軸（幅）に対し長軸（長さ）が5倍以上の長さとなる遺構を溝状遺構とした。ただし、5倍以上の長さがない場合でも、他の溝状遺構との関係から、溝状遺構の痕跡が土坑状の穴となって確認できたものと判断できた場合は、溝状遺構に含めた。

土坑（略号SK）

地面に掘りくぼめられた穴のうち、明確に性格付けができないものを土坑とした。遺物の出土状況や形状から墓坑、廃棄土坑といった可能性が考えられるものも含む。

集石遺構（略号SI）

こぶし大から人頭大の川原石が集められたものを集石遺構とした。

遺物集積（略号SU）

遺構外において、主に土器が集積あるいは意図的に配置されたような状態で出土したものを遺物集積とした。

水田遺構（略号ST）

畦畔状の高まりによる区画や、畦畔が確認できない場合でも、水田遺構に伴うと思われる鋤溝状の遺構が確認された範囲を水田遺構とした。

自然流路（略号NR）

幅が広く、自然の水流により形成されたと思われるものを自然流路とした。

各遺構の基礎的情報は、それぞれ種別ごとに作成した遺構一覧表に示した。遺構種別により、一覧表の項目はやや異なるが、共通する基本項目については次のとおりである。

遺構の検出層位 基本層序と検出面で表し、V層上面で検出した遺構の場合「V上」、V層上面で検出したが、その上に堆積していたのがII層だった場合「II基」（II層基底面検出）などと表記した。

遺構埋土 分層した土層数と、堆積状況を次のように表示した。

A－埋土が単一層 B－ほぼ水平な堆積 C－中央がU字状に凹むような堆積 D－凹みが片寄った堆積 E－ブロック状に土層が入り込む堆積 F－最上層が掘り込んだ状態となるもの
G－柱痕跡状の土層があるもの H－その他

平面形 壁穴住居や土坑などは、短軸と長軸の長さの比から円形・正方形（1:1.2未満）、橢円形・長方形（1:1.2以上）、長橢円形（1:1.5以上）とし、形状があまり整っていない場合は不整円形、不整長方形などとした。他に調査区外に続く、あるいは他の遺構に削平され形状が明確でないものについては不明、不定形などとした。方形周溝墓については、次のようにアルファベットと数字を組み合わせて一覧表に掲載した。

A－方形に溝が巡る B－4条の溝状遺構で方形に区画する（四隅が途切れる） C－辺の一部が途切れる D－不明 1－正方形 2－長方形 3－不明 4－不定形

断面形 壁穴住居跡や土坑、溝など断面の形状（A～C）と、上面での短軸長と深さとの比（1～6）、底面（a～d）と壁面（1～5）の状況の4つの文字で表示した。

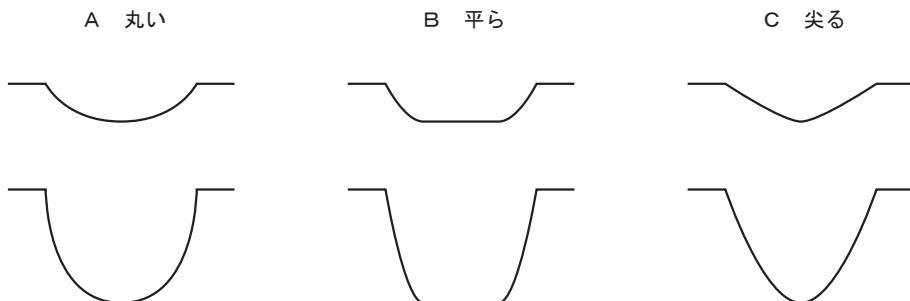


図7 遺構断面の形状模式図

深さ／上面での短軸長 1－0.3未満 2－0.3～0.7未満 3－0.7～1.1未満 4－1.1～1.5未満
5－1.5以上 6－不明

底面の状況 a－丸いか平ら b－底が2段になる（小穴含む） c－底面が凸凹 d－不明

壁面の状況 1－壁が開く 2－壁が直立に近い 3－壁面に段 4－袋状 5－不明

遺構の規模 単位はmであるが、()で示したものは、全形が確認できなかったため、残存長を測つたものである。

遺構の切り合い 「新>古」の関係を示す。

出土遺物 次のように記号化して示した。

縄文土器：J 弥生土器・土師器：H 須恵器：P 山茶碗・陶器類：T 石器類：S 木製品：W

金属製品：I

第3節 遺物の概要

1 種類と数量

平成19年度から平成21年度、平成23年度に行ったC地区発掘調査で出土した遺物は、弥生時代から古墳時代のものを中心として、縄文時代や古代以降の土器類、石器類、木製品、金属器などがある。土器類は、縄文時代晩期後半の凸帯文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、中近世陶磁器類がある。弥生土器は前期から後期まで、量的な増減はあるものの、ほぼ全時期にわたって出土した。弥生時代末期から古墳時代初頭の過渡的時期の土器については、時代区分に諸説があるため、本報告では弥生土器か土師器かの明確な区分は行っていない。このため数量などは、弥生土器と土師器を合わせて表示している。石器類や木製品、金属器など、それ自体では時期が確定できない遺物については、搬出した土器や出土層位などによって所属時期を判断している。これら各種遺物の出土点数は、表3のとおりである。

表3 出土遺物点数

種別 場所	縄文 土器	弥生土器 ・土師器	須恵器	灰釉 陶器	山茶碗・ 陶磁器類	土製品	石器・ 石製品	金属 製品	木製品	合計
I～II層	0	839	18	18	42	0	10	0	2	929
III層	1	20,674	59	25	84	3	20	0	50	20,916
IV層	0	90,521	141	36	65	6	151	6	67	90,993
IV上遺構	0	7,706	42	18	65	28	20	2	17	7,898
V上遺構	19	184,043	54	12	66	4	572	4	6,440	191,214
合計	20	303,783	314	109	322	41	773	12	6,576	311,950

2 時期区分

本書における時期区分は、大きく縄文、弥生、古墳、古代、中世、近世とし（表2）、出土遺物・検出遺構数の多い弥生時代から古墳時代にかけては、『荒尾南遺跡A地区I』『荒尾南遺跡B地区I』に示したように、既存の研究成果を参考にI期からX期に細別時期を設定し、この時期の弥生土器と土師器の器種分類を行った。また、石器及び木製品の器種分類についても後述する。

なお、出土した遺物については、以下の方々から土器様式、器種、時期などの指導を得た。

弥生土器・土師器：赤塚次郎、石黒立人、深澤芳樹 木製品：山田昌久

3 弥生時代から古墳時代初頭の土器

『荒尾南遺跡B地区I』において、遺物量が多いII期からVII期については、表4～表9のように器種分類を行った。他の時期については、既存の土器編年研究の成果を利用した。

表4 II期からVII期の器種分類（1）

時期	器種	分類	特徴・内容
II	壺	A	口縁部の形状及び条痕の有無によってA～Cに分類。 口縁部が大きく外反する太頸壺。
		1	口縁端部に押圧やキザミがあるもの。
		a	端部上下端にユビによる押圧があるもの。
		b	端部にキザミがあるもの。
		2	端部に押圧が認められないもの。
		B	頸部が長く直立して口縁部が弱く外反するもの。
		C	条痕のある壺などその他の壺。
		A	口縁部形状及び、調整手法によってA～Cに分類。
		B	口縁部が短く外反し、ハケによる調整がみられるもの。
		C	

表5 II期からVII期の器種分類（2）

時期	器種	分類	特徴・内容
II	甕		口縁部形状及び、調整手法によってA～Cに分類。
		B	口縁部がA類より長く外反する。外面はハケ調整。端部にキザミと押圧がある。
		C	器形はB類と同様で、外面に二枚貝による条痕調整を残すもの。
III	壺		口縁部形状及び文様構成によってABに分類。
		A	櫛描文を施文する細頸壺。口縁部形状から細分。
		1	口縁端部が外反したままで終わるもの。
		2	口縁端部がわずかに内湾するもの。
		3	口縁端部が強く屈曲して直立するもの。
		B	A類以外の壺。
		甕	条痕文系の甕。
IV	壺		器形の形状によりA～H類に分類した。
		A	口縁端部に凹線文を施文する細頸壺。
		1	口縁端部が屈曲して直立し、数条の凹線をもつ。胴部は加飾されずハケ調整のみのものが大半を占める。
		2	口縁端部が袋状を呈し、3条～5条程度の凹線をもつ。頸部以下を加飾する。脚台が付く資料もある。
		B	口縁部が短く開く広口壺。
		1	口縁部が短く外反するもの。
		2	口縁部が短く外反し、端部が直立するもの。
		C	口縁部が大きく開く大型壺。端部下端を拡張するもの。
		D	口縁部が袋状となる大型壺。頸部に押圧が認められる突帯がめぐる。
		E	短頸壺。口縁が短くくの字状に立ち上がるもの。
		F	いわゆる無頸壺。口縁部が短く外反しするもの。
		G	上記分類に相当しない小型の壺もの。
		H	外来的もしくは折衷的な要素の濃い壺。その他の壺。
		甕	器形の形状及び口縁部の形状によりA～E類に分類した。
		A	口縁部が短くくの字状に屈曲する甕。
		1	口縁部端部に顕著な平坦面をもち、キザミやタタキ痕がないもの。
		2	口縁部が外反し、端部にキザミもしくはタタキ痕を残す。
		3	口縁端部が屈曲して直立する。
		4	口縁部形状はA2類と類似するが、胴部にタタキ痕が認められないもの。
		5	口縁部形状はA2類に類似し、脚台の付くもの。
		B	受口状口縁の甕。端部文様で細分。
		1	口縁部に波状文をもつもの。
		2	口縁部に刺突文をもつもの。山形文をもつものを含む。
		C	III期甕に類似し口縁部が短く外反する。条痕状のハケが外面に残るもの。
		D	口縁が外反し、端部が外傾して擬凹線が認められるもの。
		E	上記分類にあてはまらないもの。
		鉢	器形の形状でA～D類に分類。
		A	口縁部が袋状となるもの。
		B	口縁部がくの字に外反して端部に強い平坦面が認められる。
		C	口縁部が受口状口縁となる鉢。
		D	高坏の坏部に類似する形状をもつ。
		高坏	口縁部の形状によってA～C類に分類した。
		A	口縁部が袋状を呈し、端部に凹線を有する。
		B	口縁部が鉗口状口縁となるもの。
		C	その他の高坏。
V～VII	壺		口縁部の形状、法量によってA～K類に分類。
		A	口縁部が大きく開く大型の広口壺。口縁端部を上下に拡張したり、口縁部・胴部を加飾する傾向が強い。やや下膨れの形状。
		1	口縁部が外反し、端部を下方に拡張する。端部に擬凹線などを加飾するもの。
		a	口縁部が大きく外反して、端部を顕著に拡張するもの。
		b	口縁部がA1a類に比べてやや短くなり、端部下方の拡張が弱いもの。
		2	口縁部が強く外反し、端部を上方にわずかに拡張するもの。
		3	口縁部が外反し、端部を下方へ拡張する。口縁部内面には段をもつもの。
		4	頸部の立ち上がりがやや垂直気味で、口縁部が強く屈曲して外方に開く。端部を大きく下方に拡張するもの。
		5	口縁部が短く外反して立ち上がり端部を上下に拡張するもの。

表6 II期からVII期の器種分類（3）

時期	器種	分類	特徴・内容
V～ VII	壺	B	口縁部が短く外反し、加飾のない大型の広口壺。
		1	口縁部が大きく外反し、端部に顕著な平坦面をもつもの。
		2	口縁部がB1類より短く強く外反するもの。B1類より器壁が厚く、粗いハケ目をそのまま残すものが多い。
		a	口縁部が短く頸部から外反し、口縁端部に強い平坦面が認められるもの。
		b	頸部がわずかに直立気味となり、口縁部が頸部から屈曲して立ち上がる。口縁端部に強い平坦面が認められるもの。
		c	B2a・b類より口縁部が短く立ち上がり、端部は強い横ナデのため端部下方が外方へ引き出され、端部が外傾するもの。
		3	口縁部が強く外反し、端部をやや丸くおさめるもの。
		C	口縁部が直線的に外傾しながら立ち上がる直口壺。
		D	受口状の口縁をもつ壺。
		1	口縁部の屈曲が顕著で、刺突文がみられるもの。
		2	口縁部の屈曲の退化が著しいもの。文様を消失する傾向がある。
		3	口縁部の屈曲が形骸化し、端部の平坦面もほとんど認められなくなるもの。
		a	端部を直立させ、頸部も直立気味のもの。
		b	口頸部の外反傾向が強く、端部の屈曲が弱いもの。
		E	二重口縁壺。
		F	口縁部が短いもしくはわずかに直立する中型の壺。
		1	口縁部がわずかに立ち上がるもの。
		2	口縁部がやや直立するもの。
		G	中型で頸部径の大きい長頸壺。
		1	頸部径が口径と大きな差がなく、口径15cmを越える中型品。
		a	口縁部が内湾しながら上方に立ち上がるもの。
		b	口縁部が顕著に内湾し、加飾が顕著なもの。
		2	口縁部が内湾して立ち上がり、やや扁平な胴部をもつもの。1類より小型品。
		a	口縁部に施文しないもの。
		b	口縁部に施文するもの。
		3	口縁部が強く内湾し、端部に内傾面をもつもの。
		a	口縁部に施文しないもの。
		b	口縁部に施文するもの。
		H	中・小型壺の長頸壺。
		1	口縁部が直線的に開くもの。
		a	口縁部に施文しないもの。
		b	口縁部に施文するもの。
		2	口縁端部がわずかに内湾するもの。
		a	口縁部に施文しないもの。
		b	口縁部に施文するもの。
		3	口縁部が強く外反するもの。
		I	口縁部が短く立ち上がる中・小型壺。
		1	口縁部がくの字に外反するもの。
		2	口縁部がやや内湾するもか口縁部がやや直立するもの。
		J	小型の壺。
		1	小型の直口壺。
		2	口縁部が内湾する小型の壺。
		a	加飾のないもの。
		b	加飾のあるもの。
		3	口縁部が短く直線的に開き、やや扁平な胴部をもつ小型の壺。G2類の小型品。
		4	G3類の小型品。口縁部に多条沈線などで加飾することが多い。
		K	外来系もしくは折衷的要素の濃いもの。その他の壺。
		器形の形状や大きさによってA～F類に分類。	
甕	A	受口状口縁をもつ大型の甕。口縁部の形状で細分。	
		1	屈曲部から口縁端部までやや長く内傾し、端部に強い平坦面をもつもの。
		2	口縁部が強いヨコナデにとともに短く明瞭に屈曲するもの。
		a	頸部が直立気味で端部に顕著な平坦面をもち、端部直下内面に強い凹面が認められるもの。
		b	口縁部の屈曲がやや弱まるもの。端部に平坦面をもつが、なかには断面が三角形を呈す資料も認められる。

表7 II期からVII期の器種分類(4)

時期	器種	分類	特徴・内容
V～ VII	甕	A 3	頸部屈曲はくの字となり、口縁部の立ち上がりが長くなるもの。口縁部屈曲が形骸化するが、端部の顕著な平坦面は堅持する。
		4	頸部・端部とも屈曲はやや弱く、口縁部の長頸化指向が顕著なもの。
		B	くの字口縁をもつ台付甕。口縁部形状で細分。
		1	口縁部が短く外反するもの。
		a	口縁部の外反が弱く、やや立ち上がりが長いもの。
		b	口縁部が短く外反する。端部が平坦であるもの。
		2	口縁部が長頸化し、その立ち上がりが直線的となるもの。端部が平坦である。
		3	口縁部が短く立ち上がり、口縁部及び端部に強い指頭圧痕が認められるもの。
		4	口縁部が比較的長く立ち上がり、端部を丸くおさめるもの。
		C	口縁部の形状がくの字を基本とするものや内湾するもの。
		1	端部を丸くおさめるもの。
		2	端部が平坦か外傾するもの。
		D	S字状口縁台付甕。
		1	S字甕A類。口縁部の屈曲が明瞭で、押引きがあるもの。
		a	口縁部中段が垂直気味に立ち上がるもの。
		b	屈曲部から口縁部下段が外方へ強く外へ引き出されるもの。
		2	S字甕B類。口縁部の屈曲は堅持するが、押引きが認められないもの。
		a	口縁部形状はD1a類に類似するが、外面に押引きをもたないもの。
		b	口縁部が短く明確に屈曲し、上段がわずかに外方へ引き出され、平坦面をもつ。
		3	S字甕C類。口縁部の屈曲が形骸化し、上段の平坦面を消失して肥厚が顕著。
		E	中・小型品の甕。
		1	口縁部がくの字状となり、端部が比較的平坦な面をもつもの。
		2	口縁部が短く外反し、胴部下半がやや膨らむ。B4類に類似する。
		3	B3類と類似した口縁部形状をもつもの。
		4	口縁部が外反して、端部をまるくおさめる平底の甕。
		5	C類と類似して口縁部が内湾する小型の甕。
		6	口縁部の立ち上がり著しく短く、器壁の薄い平底の甕。
		F	外来的もしくは折衷的要素の濃いもの。その他の甕。
	鉢	器形の形状によってA～H類に分類した。	
		A	受口状口縁の鉢。口縁部の形状で細分。
		1	口縁部が明瞭に屈曲して受口状口縁を呈するもの。
		2	口縁部の長頸化して、端部の屈曲が形骸化するもの。端部の平坦面も形骸化して、断面形が三角形にちかくなる。
		3	口縁部の長頸化傾向がさらに顕著となり、端部の屈曲が痕跡的となるもの。
		a	端部外面がわずかに直立気味して、端部が尖り気味となるもの。
		b	端部の屈曲がさらに痕跡的となり、肥厚した端部のような形状となるもの。
		4	口縁部に屈曲部がなく、くの字状となる。
		a	口縁部が短く外反するもの。
		b	口縁部が長く外反するもの。
		c	口縁部の立ち上がりが直線的となり、端部に平坦面をもつ。
		B	大型の有孔鉢。
		1	口縁部が緩やかに立ち上がり、胴部が深い形状のもの。
		2	口縁部が大きく外傾しながら直線的に開くもの。
		3	内湾傾向が強く、口縁部が内傾するもの。
	鉢	器形の形状によってA～H類に分類した。	
		C	平底の底部から胴部がなだらかに立ち上がり、口縁部がわずかに内湾する小型品。
		D	半球状の胴部をもつ台付鉢。
		E	口縁部が直線的に外傾する小型の鉢。
		F	半球形の胴部とやや突出した底部をもつもの。
		G	その他の鉢。
		H	外来的もしくは折衷的要素が濃いもの。
		高坏	器形の形状や大きさによってA～J類に分類した。
	A	口縁部が短く直立するか内傾して立ち上がるもの。	
		1	口縁部が屈曲して内傾しながら立ち上がるもの。
		2	口縁部が短く直立するもの。

表8 II期からVII期の器種分類（5）

時期	器種	分類	特徴・内容
V～VII	高坏	B	口縁部が強く外反する外反高坏。口縁部の立ち上がりの長短、口縁端部形状の差異、口縁部の外反傾向から細分した。
		1	口縁部が短く直立して、端部が外方へ引き出された平坦面をもつもの。脚部は付根から円錐状に開き、端部は屈曲して開き平坦面をもつ。
		2	口縁部が短く外反するが、坏底部からの立ち上がりで直立指向が強いもの。
		a	口縁部が短く立ち上がり、端部のみを外方へ強く引き出す。脚部は柱状でやや長脚である。
		b	口縁部の外反傾向が強く、端部の外傾する平坦面が顕著なもの。脚部は付根から外方へわずかに開く円錐状を呈し、裾部で強く外反する。
		c	口縁部の外反傾向が強く、端部が外方へ引き出されるものの丸みをもつもの。
		3	口縁部が坏底部から強く外反するもの。
		a	口縁部が強く外反し、端部はわずかな平坦面をもつかやや尖り気味となるもの。脚部は付根から円錐状に開き、裾部でやや外反する。
		b	B3a類より口縁部高が高く、口縁部と坏底部の屈曲が弱いもの。端部は丸い。脚部は柱状で裾部で外反する。
	C	有段（稜）高坏。	
		1	口縁部がやや外反するか直線的に外傾する大型品。脚部は付根から円錐状に開き、裾部でやや内湾する。
		a	口縁端部を尖り気味に丸くおさめるもの。
		b	口縁端部に内傾面をもつもの。また内面の段が顕在化する。
		2	C1類と類似するが、坏部底径がやや縮小し、口縁部の立ち上がりが開き気味となる。脚部は低脚化が進行し、透孔付近で強く内湾するか強く外反する。
		a	端部を尖り気味にまるくおさめるか外傾するわずかな平坦面をもつもの。
		b	口縁端部に内傾面をもつもの。
		c	口縁内面に多条沈線をもつもの。
		3	C2類に類似するが、坏底径の縮小がさらに進み、口縁部の開きが顕著となるもの。脚部の低脚化が著しく、透孔付近の屈曲は痕跡化してわずかに内湾する。
		a	端部を尖り気味にまるくおさめるか外傾するわずかな平坦面をもつもの。
		b	口縁端部に多条沈線をもつもの。端部を肥厚して多条沈線をもつ例が多い。
		4	C3類に酷似するが、坏底径が脚部と付根径と大きな差がないほどに縮小化するもの。坏底部内面の段は堅持し、外面の坏底部の稜も比較的明瞭である。
		a	端部を尖り気味にまるくおさめるか外傾するわずかな平坦面をもつもの。
		b	口縁端部に内傾面をもつか、その部位にのみ多条沈線をもつもの。
		c	口縁部内面中位からやや下がった位置まで多条沈線のみを施文するもの。
		d	口縁部内面を多条沈線間に山形文、斜格子文を加えて、多様な文様を2帯～4帯施文するもの。
		e	連弧文で加飾される高坏。文様帶は多条沈線・連弧文の3帯構成が多い。
	D	C4類の坏底径がさらに縮小して底部にあまり平坦な面がみられなくなり、口縁部はさらに外方へ開き、側面形状が皿形にちかくなる。内面の段は保持する。	
		1	端部を尖り気味にまるくおさめるか外傾するわずかな平坦面をもつもの。
		2	口縁端部に内傾面をもつか、その部位にのみ多条沈線をもつもの。
		3	口縁部内面中位からやや下がった位置まで多重沈線のみを施文するもの。
		4	口縁部内面を多条沈線間に山形文、斜格子文を加えて、多様な文様を2帯～4帯施文するもの。
		5	連弧文で加飾される高坏。文様帶は多条沈線・連弧文の3帯構成が多い。
	E	C類と類似するが、坏部断面形が皿形を呈するもの。内面には直線文と連弧文が施文される。内面には段が認められる。	
	F	B類に類似する中・小型の高坏。	
	G	C類に類似する中・小型の高坏。	
		1	C1類に類似する中・小型品。
		2	C1類と坏部形状が類似するが、脚部裾部が強く外反する。
		3	C3・C4類に類似する中・小型品。
		a	加飾のないもの。
		b	口縁部直下のみに多条沈線を施文するもの。
		c	口縁部中位より下がった位置まで、多条沈線に加えて山形文などを施文し、多様な文様をもつもの。脚部にも施文する例が多い。

表9 II期からVII期の器種分類（6）

時期	器種	分類	特徴・内容
V～ VII	高坏	H	坏部が椀状となる高坏。
		1	無文のもの。
		2	加飾のあるもの。
		I	ワイングラス形高坏。
		1	口縁部が直立し、坏底部が強く屈曲するもの。
		a	口縁部が内傾し、坏底部との境界で強く屈曲するもの。
		b	坏部の形状は1a類に類似するが、屈曲部がやや鈍化するもの。
		2	坏部は椀状を呈して屈曲部は形骸化し、口縁部が直立するもの。
		3	口縁部が内傾し、全体の形状は1b類に類似するもの。
		J	外来的もしくは折衷的要素が濃いもの。その他のもの。
器台	器台		器形の形状や大きさによってA～D類に分類した。
		A	口縁部及び脚裾部の外反が強く、基部径が大きいもの。
		1	いわゆる中空器台で基部径が大きい。
		a	柱状部が長いもの。
		b	口縁部・脚裾部の外反が弱くなるもの。柱状部が縮小・短脚化して付根からすぐに外反する。
		2	脚部が付根から円錐状に開くもの。
		B	口縁部が付根から外方へ大きく開き、直線的もしくはわずかに外反する。脚部形状も含めて細分。
		1	口縁部の形状が直線的なもの。
		a	柱状部がわずかに直立するが、裾部は少し屈曲して円錐状に開くもの。
		b	付根直下から脚部が円錐状に開くもの。長脚となり透孔位置が上方に移動する。
手捏ね	手捏ね	c	口縁部を下方へ拡張し、擬凹線・円形浮文を施文するなどを加飾する。
		2	口縁部が明瞭に内湾するもの。脚部形状で細分。
		a	受部形状はわずかに内湾傾向をもつが、脚部はB1b類の形状と類似するもの。
		b	長脚で付根からわずかに内湾傾向をもって円錐状に開くもの。
		3	受部の内湾が顕著で、脚部も内湾も顕著なもの。
		4	加飾の強い一群で、形状が上記の分類にあてはまらないもの。
		C	口径10cmに満たない小型の器台。
		1	口縁部が短く直線的に外傾する。端部が平坦なもの。
		2	口縁部が短く円錐状に開くもの。
		3	受部が浅い皿状となるもの。
手焙り 形土器	手捏ね	D	口縁部が強く屈曲するもの。
			ユビナデで成形された小型品。一部にハケ調整を残すものも認められる。
		A	手捏ねで成形され、口縁端部がわずかに屈曲する。
		B	A類に類似するが、口縁端部の屈曲がないもの。
		C	手捏ね成形で口縁部が直線的に外傾する。
土製品	手焙り 形土器	D	手捏ねで成形され壺形土器に類似する形状をもつもの。
		E	手捏ねで成形され、上記分類に相当しないもの。
その他	手捏ね		手焙り形土器。覆部には斜格子文を施文し、胴部に突帯が貼付されることが多く、加飾傾向が強い。
			土製品を一括。蓋形や合子形に類似するものや、紡錘車、土製円盤などを含む。
	その他		上記分類に相当しない不明品。

4 石器類

C地区で出土した石器類は773点に及び、このうち遺構出土の石器類を中心に256点を図示した。器種別では砥石や叩石が多く、大溝（SDc031）を検出した地点を中心に出土した。これに対し、剥片を含む打製石器類は、08_13地点や09_13地点とした自然流路（NRc1）両岸で多く出土しており、生業の差を示す可能性が高い。以下、各器種の分類について概要を示す。

打製石鏃 鋭利な先端部と柄に装着するための基部を作り出した小型の打製石器で、25点出土した。平面先端角が50°以上の先端部をもつもをA類、50°未満のものをB類とし、さらに、基部の形状から凹状のわずかな抉りが入るもの1類、丸みを帯びた深い抉りが入るもの2類、「く」の字状の浅い抉りが入るもの3類、いわゆる有茎鏃で、基部に茎部をもつものを4類に細分し、この組み合わせで分類した。石材は、チャートが13点と最も多く、次いで下呂石の8点である。比較的各地点から出土したが、09_13地点から最も多く11点出土した。

磨製石鏃 鋭利な先端部と柄に装着するための基部を作り出した小型の磨製石器。4点出土した。石材は、泥岩が3点である。側縁が直線的なものが多い。

石槍状石器 09_13地点から1点出土したが、両端を欠損しており、全形は不明である。

石錐 鋭利で細い先端部を作り出した小型の石器で、7点出土した。石材は、チャートが4点ある。

スクレイパー 剥片の縁辺部に連続した剥離を施し、刃部を作り出した石器で、5点出土した。このうち泥岩製の横長剥片の側縁部に刃部を形成したものが2点ある。

楔形石器 剥片の相対する二縁辺に、潰れ状あるいは階段状の剥離痕が発達する石器で、4点出土した。石材は、瑪瑙もしくは磨製石斧片を転用したハイアロクラスタイルである。

打製石斧 略長方形の形態で、ほぼ全周を二次加工し、長軸の一端に刃部をもつ石器で、4点出土した。石材は、ホルンフェルスが2点ある。

調整剥離を施す剥片（RF） 剥片の縁辺部に二次加工を施すが、定形的な刃部をもたない石器で、10点出土した。石材は、チャートが4点と最も多い。

微細な剥離痕を有する剥片（MF） 剥片の縁辺部に微細な剥離痕が確認できる剥片である。7点出土した。

石核 素材剥片を剥離した残核を総称して石核とした。3点出土したが、石材はチャート、泥岩、玉隨が1点ずつである。

磨製石斧 略長方形の形態で、長軸の一端に刃部を研磨によって作り出しているもので、23点出土した。石材は、ハイアロクラスタイルが18点と最も多い。大型蛤刃石斧が12点、扁平片刃石斧が5点、柱状片刃石斧が2点ある。他は欠損のため刃部形状は不明である。

叩石 主に橢円状・棒状の礫の側面及び長軸端に、剥離を伴うような敲打の痕跡がみられるもの。扁平な面に凹みを持つものもここに含めた。228点出土したが、石材の内訳は、砂岩が200点と大半で、他に安山岩、花崗岩、花崗閃綠岩、ハイアロクラスタイル、泥岩、流紋岩などが使用されている。大溝（SDc031）を検出した地点で砥石とともに多く出土している。

砥石・石杵 砥石は、礫の表面に溝状や帶状・平面状に砥面が認められるもので、232点が出土した。石材は砂岩が最も多く154点で、凝灰質砂岩29点、泥岩15点などがある。07_1地点や08_13地点でも比較的多く出土しているが、この地点は石鋸や緑色凝灰岩剥片が多く出土している地点でもあり、石製

表10 石器器種別出土点数一覧表

種類 石材	打製石 鏃	磨製石 鏃	石槍状 石器	石 錐	スクレ イバー	楔形石 器	打製石 斧	RF	MF	剥 片	石 核	磨 製石 斧	叩 石	砥 石・ 石杵	石 鋸	石 錘	輕 石 製品	石 製品	合 計
サヌカイト	2				1			2	2	20									27
チャート	13				4	2		4	3	18	1		4						49
下呂石	8									7									15
安山岩	2		1	1	1					4			7	2					18
ハイアロクロスタイル				1		2	1					18	1						23
泥岩		3				2		1		1	4	1	2	2	15		1		32
瑪瑙						2				2									4
玉髓							2			11	1								14
黒色片岩								1							1				2
砂岩								1	1	11		1	200	154		2	1	371	
緑色凝灰岩										94									94
石英										4									4
水晶										1									1
紅簾石片岩										1					20				21
片岩		1								1									2
凝灰岩									2			1	13				3		19
ホルンフェルス						2						1	1	15					19
閃綠岩											1		1						2
結晶片岩															1				1
花崗岩												5							5
花崗閃綠岩												5	1						6
流紋岩												2	1						3
凝灰質砂岩													29						29
凝灰質泥岩												1							1
滑石																	1	1	
翡翠																		0	
ガラス																	1	1	
軽石																9		9	
点数	25	4	1	7	5	4	4	10	7	180	3	23	228	232	22	2	9	7	773
割合(%)	3.2	0.5	0.1	0.9	0.7	0.5	0.5	1.3	0.9	23.3	0.4	3.0	29.5	30	2.8	0.3	1.2	0.9	100

表11 石器地点別出土点数一覧表

器種 調査地点	打製石 鏃	磨製石 鏃	石槍状 石器	石 錐	スクレ イバー	楔形石 器	打製石 斧	RF	MF	剥 片	石 核	磨 製石 斧	叩 石	砥 石・ 石杵	石 鋸	石 錘	輕 石 製品	石 製品	合 計
08_10地点	1									1									2
08_11地点		1								5		1	2						9
07_6地点										1		1	1	3			2		8
07_7地点	2			1						5		1	39	27			1		76
07_8地点									1					1					2
07_9地点													2						2
09_9地点			1												1				2
07_4・5地点	2						3		6	1	2	112	100			4	1		231
09_20地点	1										2	11	9						23
09_12地点	1										1	3	1						6
09_17地点										1									1
08_12地点	3								19			5	1						28
07_3地点												4	1						5
07_2地点									2			3	6		1		1		13
09_13地点	11	2	1	2	1		1		2	4		7	8	7			1		47
09_11地点												1							1
09_14地点	1				2		1			1									5
07_1地点	1			1	1		2			54	1	2	11	36	6			2	117
08_13地点	2	1		1	1	4	5		2	79	1	6	16	25	16			1	160
09_15地点										2									2
08_14地点												6	2		1				9
09_10地点					1				1			3	6		1				12
11_8地点							1		2			3	5				1		12

品加工との関係が窺われる。また、赤色顔料が付着した石杵が、09_13地点から1点出土した。

石鋸 扁平又は板状の石を利用し、擦り切りの機能を有する刃部を作り出したもので、22点出土した。

石材は、紅簾石片岩が20点ある。なお、出土地点は07_1地点と08_13地点に限られる。

石錘 扁平な円礫の両端を打ち欠いた、砂岩製のものが2点出土した。

軽石製品 平坦な面を持つ、溝状の刻みを持つなど明確な使用痕跡があるものと、それが不明瞭なものがある。使用痕跡からは、木製品のような比較的柔らかいものを研磨する道具として使用されたと推定する。9点出土したが、このうち7点は大溝（SDc031）を検出した地点で出土した。

石製品 車輪石1点、玉類5点、石棒1点がある。玉類には、管状の管玉、直径と厚みがほぼ同じで直径2cm以下の小玉、厚みが直径の半分程度の臼玉がある。勾玉は滑石製2点、管玉は凝灰岩製1点、小玉はガラス製1点、臼玉は滑石製1点である。緑色凝灰岩剥片には擦り切り痕が残るものがあり、07_1地点と08_13地点から出土した。石棒は07_2地点のNRc1から出土した。

5 木製品

C地区で出土した木製品類は6,854点に及ぶが、形状が明確なものや用途が推定できるもの、加工痕跡が明瞭なものなど904点を図示した。木製品の多くは、大溝（SDc031）と自然流路（NRc1）から出土したものであるが、周溝墓や土坑、柱穴内からも出土した。木製品は、大きく「(1) 器具」、「(2) 部材」、「(3) 加工材」に三分し、それぞれについて市教委の調査成果（大垣市教委2008）を踏まえつつ細分した（表12）。以下、各器種の分類について概要を示す。

(1) 器具

ここでは器種分類が可能な器具を扱う。器具には、単体で機能を果たす製品と、部材を集成した製品がある。一木鋤・豎杵・横槌・杓子などが前者であり、斧・鍬・鎌・曲物・指物などが後者にあたる。器種は木材加工工具、起耕・整地具、収穫具、水田作業具、敲打・潰碎具、編物・織機関連具、運搬具、漁撈具、武器・武具、容器、祭祀・儀礼関連具、葬送具、家具・生活雑具、網組み製品に分類し、さらに細分を試みた。

木材加工工具 木材加工に関わる鉄製工具の柄や楔を木材加工工具とした。楔や叩き鑿とともに使用する掛矢・横槌は、木材加工以外の用途にも用いられるので敲打・潰碎具に分類した。楔には、材を割り裂く以外にも部材接合部の留め具としての用途があるが、外見では判断しがたいので本項で一括して扱う。材面には様々な鉄製刃先の加工痕が残されているが、工具柄については斧以外特定できていない。縦斧の柄未成品と思われるものと楔が出土した。

起耕・整地具 起耕・整地作業に用いる器具類。農耕のほか、灌漑・造墓などの土木工事にも使われたと考えられる。器具の中では最も多く器種認定ができた。鍬、鋤、泥除、馬鍬、唐鋤、掘り棒、鍬や鋤などの柄などである。鍬には直柄と曲柄があり、さらに柄穴が方形となる北部九州型直柄鍬がある。直柄平鍬は、抉りのある逆台形頭部、後面の柄孔隆起、円形柄孔、前面の泥除装着用蟻溝などの特徴を備える。蟻溝の存在から、泥除を装着して使用したことがわかる。割材や未製品の状況から、①樹木伐採、②原木切り揃え（玉切り）、③ミカン割（荒割）、④割材割付・分割・荒切削、⑤平面および柄孔隆起整形、⑥仕上げ切削、⑦柄孔穿孔・細部整形の諸工程を経て製作されたことがわかる。北部九州型直柄鍬の装着には、直柄と装着具による組み合わせ構造となるため、この装着具もここに

表12 木製品・織維製品数量表

区分	器種	分類	点数
器具 合計395点	木材加工工具 小計4点	縦斧 楔	1 3
	起耕・整地具 小計148点	直柄鋤（平鋤・又鋤） 北九州型直柄鋤、方形柄孔鋤 曲柄鋤（平鋤・又鋤・多又鋤） 馬鋤 泥除 鋤、一本鋤 唐鋤 掘棒 払い鋤・払い鋤 柄 農具素材（アカガシ亜属材その他）	34 8 38 1 25 11 1 1 4 13 12
	収穫具 小計9点	木包丁 鎌柄	3 6
	水田作業具 小計13点	田下駄 大足	6 7
	敲打・潰碎具 小計16点	横槌 堅杵	5 11
	編物・織機関連具 小計21点	木錘 糸巻き 杼 紡織具 織機部材その他	7 1 6 5 2
	運搬具 小計9点	天秤棒 櫛状木製品	7 2
	漁撈具	浮子、網枠	2
	武器・武具 小計6点	刀剣 弓 盾	1 3 2
	容器 小計74点	刳物、槽 曲物 組物、指物 精製品、その他	32 33 7 2
	祭祀・儀礼関連具 小計55点	形代 竿、削り出し棒、その他 楽器 儀器	38 11 2 4
	葬送具	木棺	8
	家具・生活雑具 小計27点	椅子（腰掛） 台 発火具 杓子 その他	4 6 10 3 4
	網組み製品	籠	3
部材 合計205点	建築部材 小計137点	柱材（柱根・柱材） 屋根材（垂木・破風・棟木） 横架材、大引材 棧材 その他（梯子・床板・壁板）	32 21 15 35 34
	土木部材	杭、縦木	26
	器具部材	器種認定できない物	13
	その他の部材 小計29点	木桶 構造部材	2 27
加工材・残材・木屑 合計304点	板材 棒材 その他の加工材 残材 樹皮材 木屑		112 93 35 47 10 7

含めた。また、この中に含めたが、方形孔を2孔穿った大型の異形品が出土した（SDc031出土287）。頭部の孔は通常の柄孔のように平面縦長で斜め方向から、中央部の孔は平面横長で垂直に穿たれている。側面は平坦で刃先がなく、孔のないほうの端部に刃先が作出されている。2つの孔に柄を取り付けると犁のような形態となる。鍬とはいえないが、方形孔と刃先をもつこと、材にアカガシ亜属が選ばれていることを考慮し、とりあえず方形柄孔鍬に含めた。鍬の軸部と曲柄の台部を縄で緊縛する鍬を曲柄鍬とした。曲柄には膝柄と反柄が含まれるし、軸と柄をほぼ平行させて装着し組み合わせ鍬として使う場合もあるが、ここでは一括して曲柄鍬として扱う。曲柄鍬は、鍬身の軸部形状から笠をもつナスピ形と笠をもたない棒軸形に、刃先の形状から平鍬と又鍬に分けられる。鍬柄の頭部が出土しているがいずれも反柄である。曲柄鍬は直柄平鍬に同じくアカガシ亜属を材とするが、直柄平鍬と異なり、製作工程を知り得る素材・未製品資料がほとんど見あたらない。又鍬や多又鍬は曲柄のものが多く、直柄は1点のみ確認できた。鍬もしくは鍬と思われる刃先は、表12の数量では直柄平鍬に含めた。泥除は、平面団扇形で頭部中央に平面楕円形の柄孔を穿ち、後面頭部端に蟻柄を作出する。この蟻柄を平鍬前面の蟻溝に装着し、双方の柄孔に直柄を通し固定させる仕組みとなっている。身の部分に小さな円形孔をもつものがあるが、装着に関わる孔と補修孔の2種があるようである。直柄平鍬と並んで、当遺跡内で製作諸工程が判明した器種であり、①樹木伐採（市教委工程1）、②原木切り揃え（玉切り）、③ミカン割（荒割、市教委工程2）、④割材割付・分割・荒切削（市教委工程3）、⑤平面・蟻柄整形・分割（市教委工程4・5）、⑥仕上げ切削・整形（市教委工程6）、⑦柄孔穿孔・細部整形（市教委工程7）の諸工程を経て製作されたことがわかる。馬鍬と唐鍬が1点ずつ出土しているが、自然流路埋土上部や包含層中であり、古墳時代よりも新しい時期のものと思われる。農具素材としたものは、樹種から鍬や鍬の素材と思われる分割材である。

収穫具 稲などの植物を刈り取るために使用する道具で、木包丁と鎌柄が出土した。

水田作業具 水田作業で用いる履き物で、田下駄と大足が出土した。本書では、枠のない板田下駄と円形枠をもつ輪櫛（輪カンジキ）型田下駄を狭義の田下駄とし、縦枠と桟（横木）によって構成される方形枠田下駄を大足と呼ぶこととする。

敲打・潰碎具 敲く、打つ、碎く、潰すなどの作業に用いた道具で、横槌、堅杵が出土した。堅杵とセットで用いられる臼は出土していない。

編物・織機関連具 糸を紡ぎ、布を織る、藁製品を編むなどに使用した道具で、杼、糸巻、木錘などが出土した。

運搬具 陸上において物資を運搬する際に用いられたと思われる天秤棒、水上での運搬に用いられる舟で使用されたと思われる櫂状のものが出土した。

漁撈具 漁撈に用いられたと思われる道具は少なく、網枠や浮子と思われるものが1点ずつ出土しただけである。

武器・武具 弓、刀剣、盾といった武器・武具と思われるものが出土した。刀剣は柄もしくは鞘の可能性が考えられるもので、弓や盾には漆を塗ったものもある。

容器 器具の中では起耕・整地具に次いで多い。中でも槽などの刳物や曲物が多い。特殊な製品として、表裏面に赤彩を施した筒状の器台がある。

祭祀・儀礼関連具 多くは形代であるが、古代の斎串も包含層中から出土している。他に楽器や団扇

と思われるものも出土した。

葬送具 木棺が1基出土しているが、槽を転用した材と板材を組み合わせて木棺としている。

家具・生活雑具 火鉢臼が多いが、他に作業台や椅子などが出土した。

網組み製品 籠が出土した。

(2) 部材

建築物・土木施設・器具など構造物の一部を部材と称する。

建築部材 柱材、屋根材、横架材、床板、梯子などが出土した。柱根には掘立柱建物跡の柱穴から検出したものもある。

土木部材 杧が出土した。大半は芯持ち材で先端を尖らせただけのものである。

器具部材 器具の一部と思われるが、器種認定が困難なものをここにまとめた。

その他部材 井戸枠や木樋、構造部材である。

(3) 加工材

特定の器種や部材に認定・推定できないものを加工材として扱った。加工材は形状から板材、棒材、角材、分割材、その他の加工材などに分類した。未加工の材自体ではなく、加工の過程で生じた残材や木屑もここに含めた。その他加工材の項目では不定形な加工材を扱った。

板材 原木を縦に割り裂き扁平にした材。扁平な面が材面、年輪線の現れる面が木口、木口と直交する面が木端（こば）である。木口に現れる年輪線により大きく柾目・板目に分けられる。

棒材 細長で、手のひらで握れる程度までの太さの材を棒材と呼んでおく。棒材は、芯持の丸木材と分割材利用の削り出し棒材に分けられる。

その他の加工材 手のひらにおさまらない太めの丸木材（丸太材）、木材を纖維方向に割って作出了した分割材、分割材を角柱状に仕上げた角材のほか、様々ななかたちに整形された不定形な加工材がある。

残材 製材や二次加工の過程で生じた切れ端を残材（もしくは端材）と呼んでおく。はっきり認定できる事例として、製材した板材の分割工程で生じた残材が挙げられる。分割板材の木口切断痕には、製材切断痕と材分割痕の2種がある。製材切断痕は、原木の木口を切り揃えるいわゆる玉切りの痕跡でもあり、直交切断されている。製材切断痕はミカン割材や分割材の木口に残されている。一方、材分割痕は、ミカン割材に分割溝を入れ、材面の片側ないし両側から切断する際の痕跡である。材分割には、加工斧による斜交切断で荒切削する段階と、加工斧ないし鑿の直交切断で木口を整形する段階の2段階が認められる。

樹皮材 大溝その他の遺構から、剥ぎ取った樹皮を同じ幅に切り揃えた材が出土している。曲物容器の留め具などに使用されたと思われる。

木屑 鉄製工具の切削によって生じた木片。木屑あるいは木つ端の類。荒尾南遺跡内では、掘立柱建物跡の礎板として利用された事例、柱穴埋土に混入して出土した事例がある。木屑については、横斧・縦斧の切削痕と対応しそうな薄板状の木片、鱗片状の木片などが出土した。

6 金属製品

C地区で出土した金属製品は、鉄鑿、鉄斧、巴形銅器、円盤状銅製品、銅鏃などが10点ある。巴形銅器と円盤状銅製品はSDc031から出土した。

第4章 調査の成果

第1節 08_10地点・09_8地点

C地区北西端に位置する調査地点で、調査面積は169m²である。本線橋脚が位置するが、東側に隣接する鉄塔基礎の影響で、発掘区の西側が抉られたような形状となる。

1 層序

08_10地点北壁土層を図示した（図8）。基本層序のI層からV層を確認し、遺構検出面はIV層上面とV層上面となる。図の12層（V層）以降ほぼ水平に堆積しているが、3・4層は耕地整理に伴う盛土層と思われる。3層とした粗砂層はこの地点でのみ観察できた土層である。

2 包含層出土遺物（図10）

この地点で出土した遺物は、1,391点であるが、このうちI層は1点、III層は414点、IV層は400点で、遺構出土遺物は576点である。包含層から出土した遺物は、すべて土器類で、須恵器や灰釉陶器の11点、石器の2点を除くと、弥生土器や土師器であった（表13）。

包含層出土遺物として実測したのは、III層から出土した土師器甕1点のみである。1は、口縁端部を外側に拡張したいわゆる宇田型甕で、X期のものである。他は小破片が多いものの、弥生時代中期後葉から古代までの土器が認められた。

表13 08_10地点・09_8地点出土遺物数量

種別 場所	縄文 土器	弥生土器 ・土師器	須恵器	灰釉 陶器	山茶碗・ 陶磁器類	土製品	石器・ 石製品	金属 製品	木製品	合計
I層	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
III層	0	407	6	1	0	0	0	0	0	414
IV層	0	396	4	0	0	0	0	0	0	400
IV上遺構	0	180	0	0	0	0	0	0	0	180
V上遺構	0	394	0	0	0	0	2	0	0	396
合計	0	1,378	10	1	0	0	2	0	0	1,391

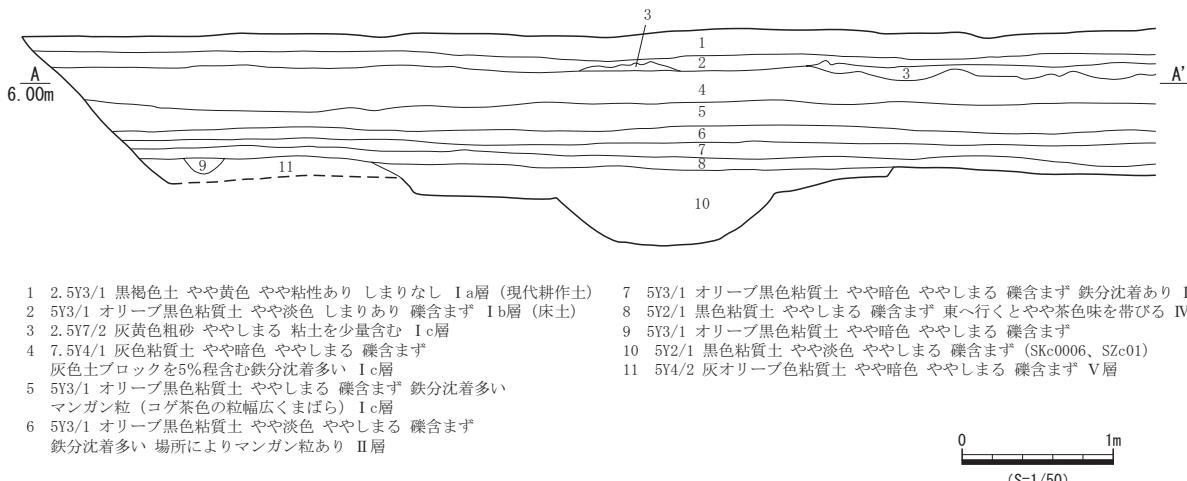


図8 08_10地点北壁土層図

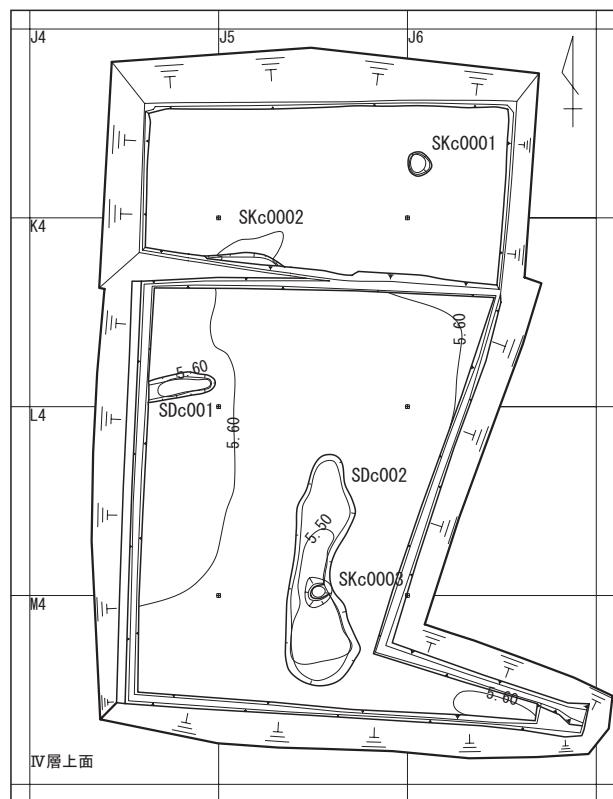


図9 08_10地点・09_8地点平面図

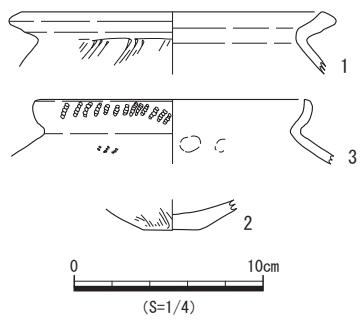


図10 包含層・SDc002出土遺物

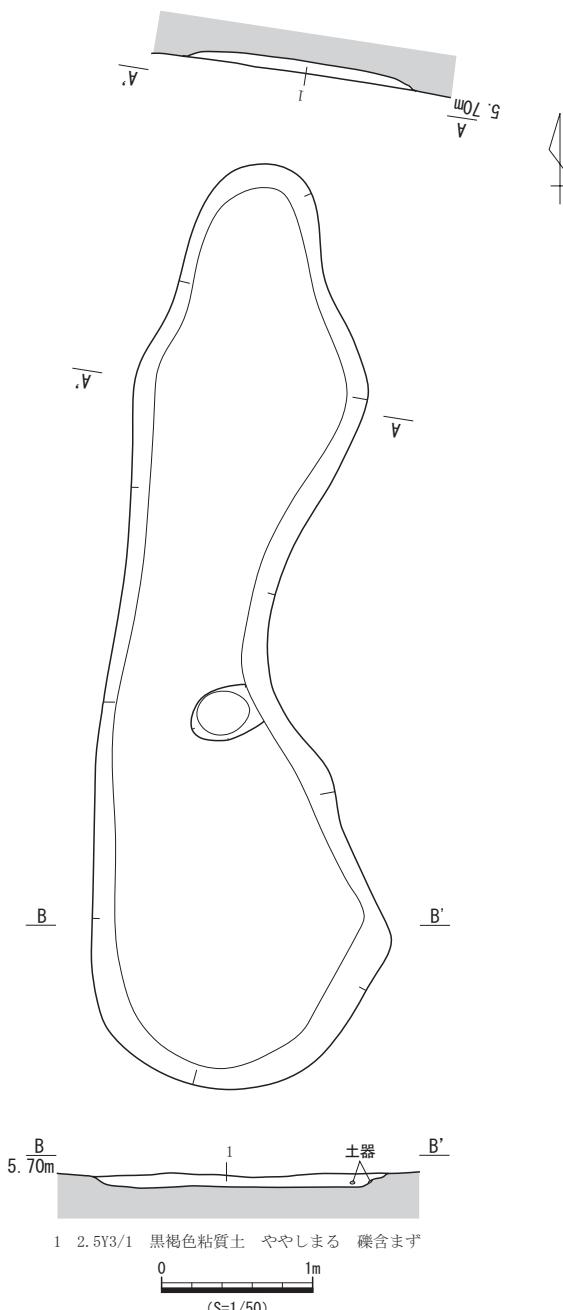


図11 SDc002

3 IV層上面の遺構と遺物

IV層上面では土坑3基と溝状遺構2条を検出し、このうち出土した遺物量が多いSDc002を図示した。

SDc002（図10・11） 南北方向の溝状遺構で浅く、性格は不明である。出土した遺物は、土器片170点であるが、小片が多くIV層中のものが混入した可能性が高い。2点のみ図示した。2はV期からVI期と思われる壺H類の底部片で、3は同じ頃の鉢A3類の口縁部片である。

4 V層上面の遺構と遺物

V層上面では、方形周溝墓3基、土坑23基、溝状遺構1条を検出した。土坑や溝状遺構からは遺物が出土しないことが多く、出土しても土器の小片が少量出土する程度で、性格不明のものばかりであった。3基の方形周溝墓について図示した。3基の方形周溝墓のうち、SZc01とSZc02は区画の方位がほぼ同じで、周溝の一部を共有するように造られている。SZc03は、他の2基とはやや方位が異なり、重複関係もない。

SZc01（図12・13）

検出状況 V層上面で南東の一部を検出したが、他の部分は発掘区外となる。平面形は比較的明瞭に確認できたが、SZc02との重複部分については、重複関係は不明瞭であった。しかし、発掘区西壁断面で先後関係を確認し、SZc01が新しいと判断した。

方台部 検出した南辺部及び東辺部は比較的直線的で、方台部の形状は方形若しくは長方形と思われる。墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝 東溝及び南溝を検出したが、いずれも一部で発掘区外へ続いている。確認した範囲では比較的直線的で、南東隅部は角を切るようにつながり、底面が浅くなる。多くは発掘区外であるが各隅部が浅くなり全周する可能性がある。周溝の断面形は、ほぼ逆台形となる。幅は1.6m～2.0mで、深さは0.5m～0.6mである。周溝底面は、幅が狭いが比較的平坦で、埋土下層にはV層ブロックを含み、墳丘盛土若しくは壁面の崩落によると思われる。その後は、方台部側若しくは周溝外側からの流入土が堆積したものと思われる。

遺物出土状況 南東隅部付近で比較的まとまって土器が出土した。5は埋土上層（B断面2層）から、出土した。6～9は中層（B断面5層前後）から出土しており、周溝が埋没する過程で転落したものと思われる。他には土器片が出土したが、いずれも小破片であった。6～8は東溝南端部の埋土中層から出土したが、7と8は土器内面を上に向けた破片が下側に、下に向けた破片が上になって、一部重なるように出土したことから、転落後破損し埋没したものと思われる。

出土遺物 4はV期の甕A2b類と思われる口縁部片で、埋土1層及びIV層が接合しており、包含層出土とすべきか。5はVI期の壺H類で、口縁部から底部まで残存する。口縁部は短く直線的で、やや開く。6と7は胎土の類似性から、同一個体の可能性が考えられるが、接合できなかった。IV-2期と思われる壺A1類で、口縁部は受け口状となり、外面に凹線を2条巡らす。胴部最大径はほぼ中位にある。焼成はやや不良で器面がやや摩滅しているが、胴部下半に煤が付着している。8は、IV-2期と思われる壺A1類で、口縁部外面に凹線を3条巡らす。この土器の胴部下半にも煤が付着している。9はIV期と思われるやや小型の壺A類で、口縁部を欠く。頸部から胴部にかけて、横線文と波状文を交互に施す。6～9は破損し接合しても完形には復元できないため、胴部に穿孔等を開けているのか不明である。

時期 周溝内埋土中層から出土した土器が、出土状況や残存状態から供献土器と思われ、また時期的にまとまりがあるため、IV-2期と思われる。

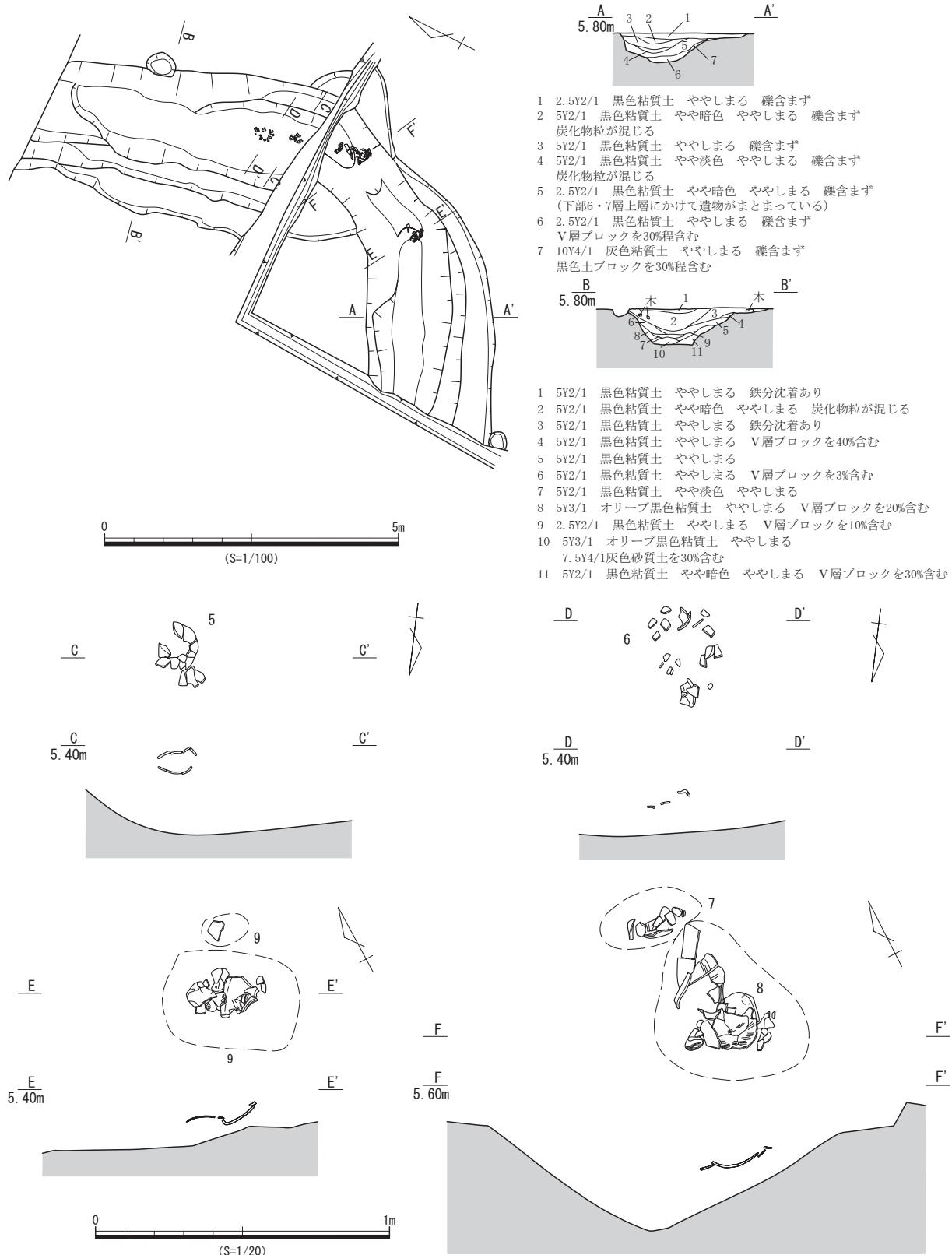


図12 SZe01

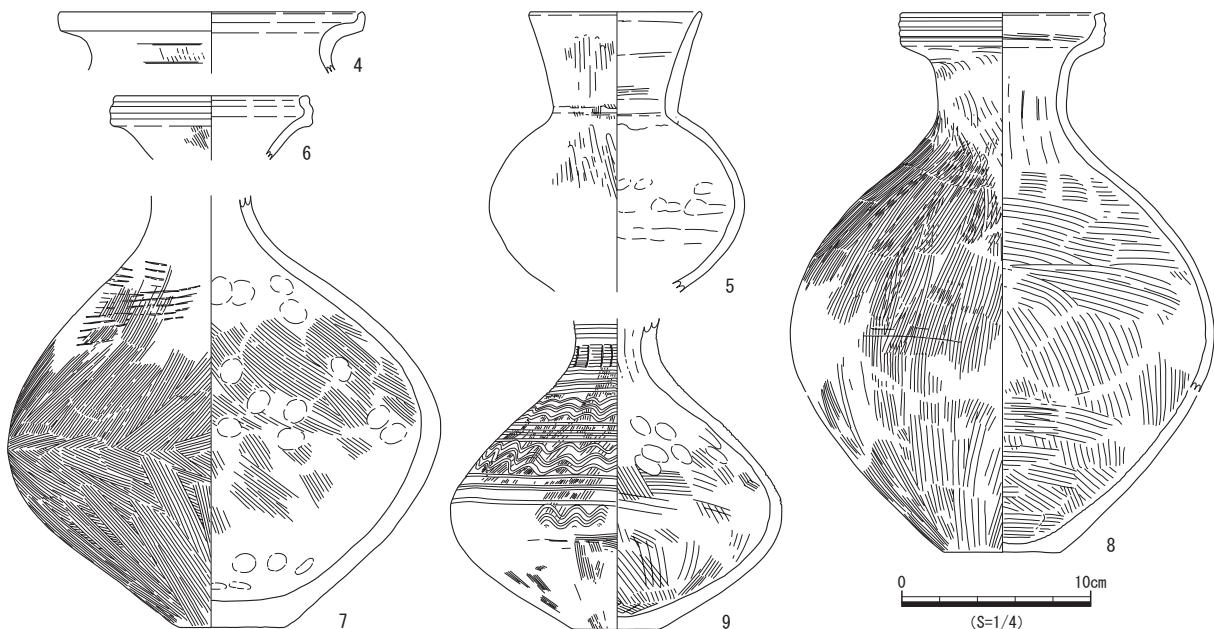


図13 SZc01出土遺物

SZc02（図14・15）

検出状況 V層上面で検出したが、西溝及び北溝の一部は発掘区外となる。平面形は比較的明瞭に確認できたが、SZc01との重複部分については不明瞭であった。しかし、発掘区西壁断面で先後関係を確認し、SZc01が新しいと判断した。

方台部 北西部が発掘区外となるため、全形は不明であるが、検出した南辺部及び東辺部は比較的直線的で、方台部の形状は、方形若しくはやや長方形になると思われる。北辺部はSZc01南溝の掘削によつてわずかに抉られたようになっている。墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝 東溝及び南溝を検出したが、幅は1.1m～1.2mほどで、隅部でやや末端が収束するように幅を狭くして接続する。北溝はSZc01南溝と重複するため、本来の幅は不明である。周溝の最も深いところで0.52mあるが、隅部は角を切るようにつながり、底面が浅くなる。南西及び北西隅部が発掘区外であるが、各隅部が浅くなり全周する可能性がある。周溝の断面形はほぼ逆台形となる。周溝底面は、幅が狭いが比較的平坦で、埋土下層にはV層ブロックを含み、墳丘盛土若しくは壁面の崩落によると思われる。その後は、方台部側若しくは周溝外側からの流入土が堆積したものと思われる。

遺物出土状況 周溝埋土上層から中層で土器片が散在して出土したが、その量は少なく41点であった。また、打製石鏃が1点出土した。南溝のほぼ中央の最下層において、小型の甕を縦に割ったような2つの破片が、内面を上に向けた状態で出土した。この破片は胎土や器形から同一個体と思われるが割れ面で接点を確認できず、二つに割った後、割れ面を叩き潰した可能性があり、方形周溝墓に伴う祭祀に関わる行為の可能性が考えられる。

出土遺物 総数48点の土器片が出土したが、図示可能なのは南溝底面から出土したIV期の甕だけである。10はIV期の甕C類と思われるが、頸部は緩やかに外反し、口縁部でわずかに内湾することから、IV-1期と思われる。前述のように大きく2つの破片に割られているが、両者は接合する接点が確認できなかった。割れ面は、弱く叩き潰されたように丸みがあるため、意図的な行為によるものと思われ

る。外面には煤がやや厚く付着している。11は打製石鏃で基部がわずかに抉られ、細長い形状のものである。

時期 南溝底面から出土した土器が、出土状況や残存状態から供獻土器と考えられ、SZc01よりも先行することから、IV-1期と思われる。

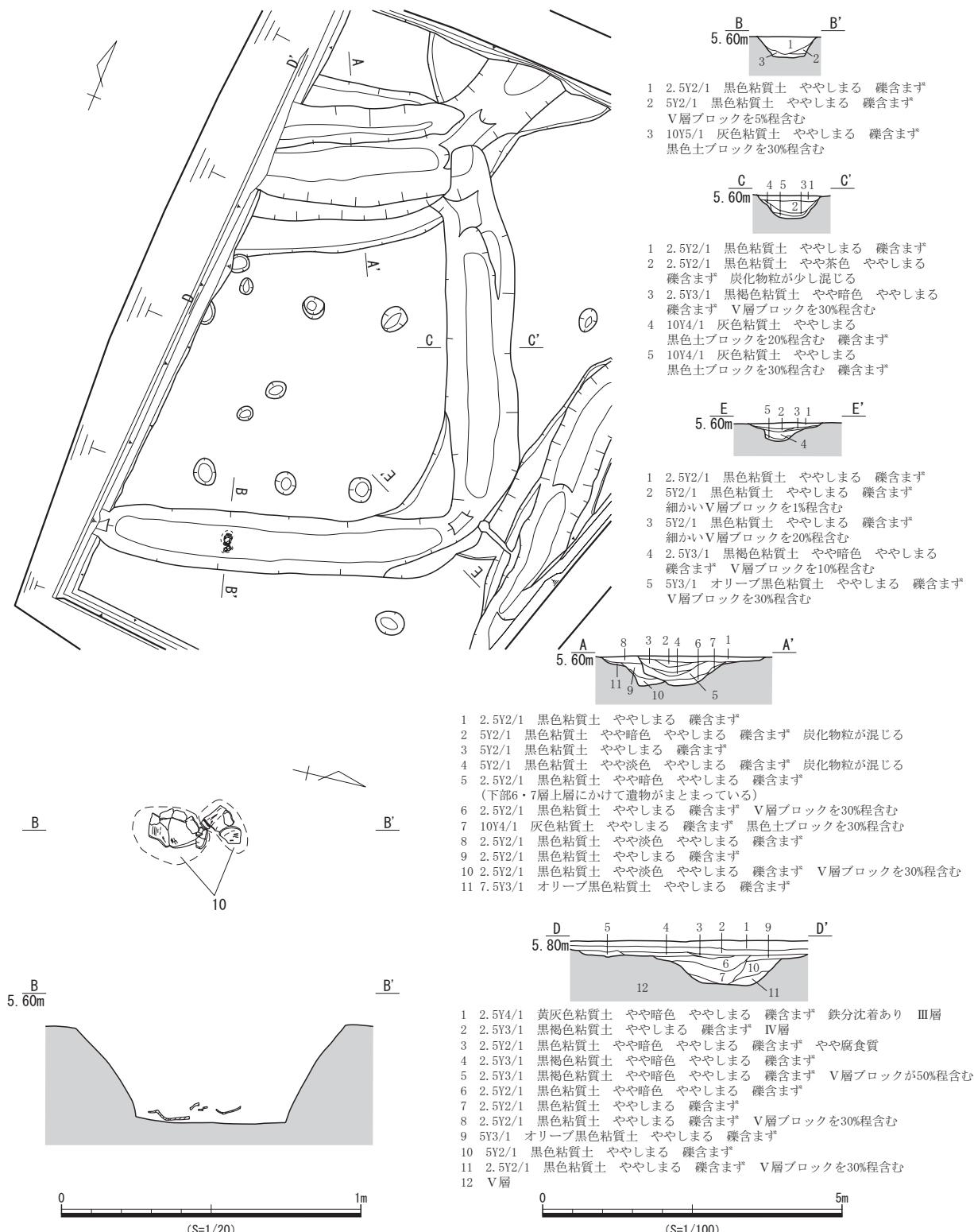


図14 SZc02

SZc03 (図16)

検出状況 V層上面で検出したが、西溝及び北西隅部を確認しただけで、他は発掘区外となる。平面形は比較的明瞭に確認できたが、SKc0011との重複部分については不明瞭であった。

方台部 北西隅の一部を検出しただけであるため、全形は不明であるが、検出した西辺部及び北辺部は比較的直線的で、方台部の形状は、方形若しくはやや長方形になると思われる。墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝 西溝及び北溝の一部を検出したが、幅は1.1mほどで、隅部でやや幅が狭くなり接続する。北溝は西端の一部を検出しただけであるが、西溝は南端部が発掘区外となる。周溝の最も深いところで0.39mあるが、隅部は角を切るようにつながり、底面が浅くなる。北西隅以外は発掘区外であるが、各隅部が浅くなり全周する可能性がある。周溝の断面形はほぼ逆台形となる。周溝底面は、幅が狭いが比較的平坦で、埋土下層にはV層ブロックを含み、墳丘盛土若しくは壁面の崩落によると思われる。その後は、方台部側若しくは周溝外側からの流入土が堆積したものと思われる。

遺物出土状況 周溝埋土中から土器片が散在して出土したが、その量は少なく12点であった。

出土遺物 出土した土器は小破片が多く、図示可能なものはなかった。

時期 時期が判明する出土遺物がないが、周溝の形状がSZc01やSZc02と類似することから、IV期のものと思われる。

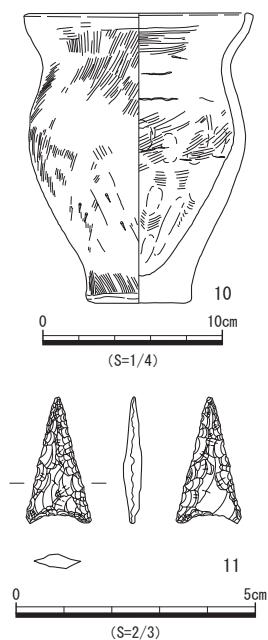


図15 SZc02出土遺物

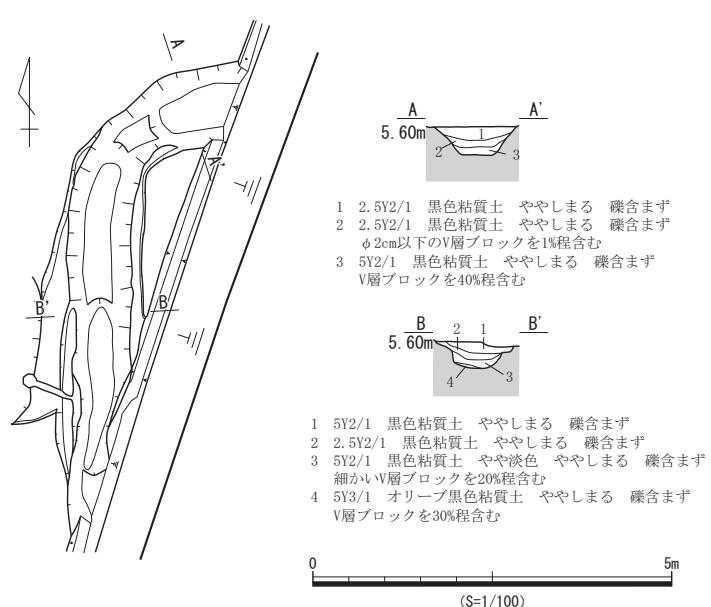


図16 SZc03

5 まとめ

この地点は、C地区の中では最も北東に位置し、大垣市教委の試掘調査結果からは、これよりも東側には遺跡は広がっていないと思われる。検出した遺構のうち、時期や性格が確定できたものは、弥生時代中期の方形周溝墓だけである。国道21号を挟んで北側のB地区南東部においても、弥生時代中期の方形周溝墓が確認されており、一連の方形周溝墓群となる可能性がある。ただし、A地区東部からB地区北東部にかけて整然と列状に並ぶものとは異なり、B地区南東部からC地区北東部では、散在した状態であり様相は異なる。

第2節 08_11地点

C地区北西端に位置する調査地点で、調査面積は288m²である。本線橋脚及び調整池堰堤の位置であるが、調整池堰堤は市道を挟んで07_6～8地点へ続き、当地点ではL字形となる。北に08_10地点、南に09_9地点がある。

1 層序

08_11地点南壁土層を図示した（図17）。北西部のL字形の西に屈曲した場所である。基本層序のI層からV層を確認し、遺構検出面はIV層上面とV層上面となる。図の9層（V層）以降ほぼ水平に堆積しているが、3層は耕地整理に伴う盛土層と思われる。

2 包含層出土遺物

この地点で出土した遺物は5,201点であるが、このうちI層（排土から採集したものを含む）は63点、III層は1,983点、IV層は2,153点で、遺構出土遺物は1,003点である。III層の遺物は、石器類が2点出土したほかは土器類で、須恵器2点、灰釉陶器6点を含む。IV層の遺物は、石器類4点、金属製品1点のほかは土器類で、須恵器3点、灰釉陶器6点、山茶碗1点を含む。III層とIV層の間で接合する遺物もあり、III層とIV層とでは出土遺物の時期的な差は、明確には認められなかった。

包含層出土遺物として実測したのは、III層及びIV層から出土した須恵器壺蓋、土師器壺、甕、弥生土器甕、石器類、鉄製品である。12は須恵器壺蓋で、形状や口径、高さなどからH-44窯期のものと思われる。13・14はIX期～X期の有段口縁壺で、口縁端部は面をなす。15は宇田甕で口縁端部が三角形状に拡張されている。16はVII期のS字状口縁台付甕でC類と思われる。17は口縁部外面に押し引きを施しており、VI期の甕D1a類である。18はIV期の甕B2類で、受口状口縁の屈曲部外面に刺突文を施す。17と18は、IV層を掘削した後に確認した、浅いくぼ地状の場所から出土したものである。19は有茎の磨製石鎌で先端及び茎部を欠く。20は両刃磨製石斧で、基部を欠損する。刃部は丸みがあり、やや刃潰れが見られる。21は叩き石で、長軸の両端部及び側面に敲打痕が残る。22は鉄鑿で、穂先が無肩のものである。断面方形の穂から片刃の刃部が作り出され、短い茎がある。

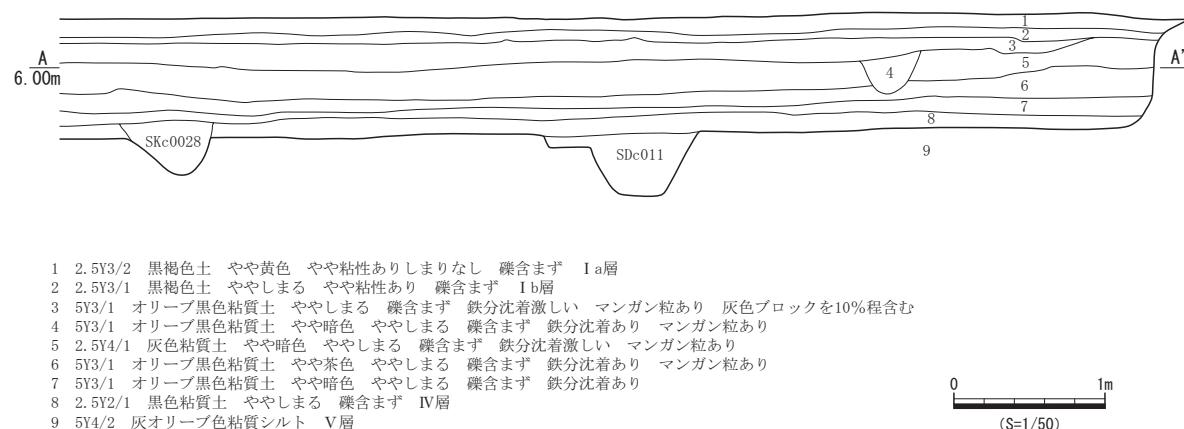


図17 08_11地点南壁土層図

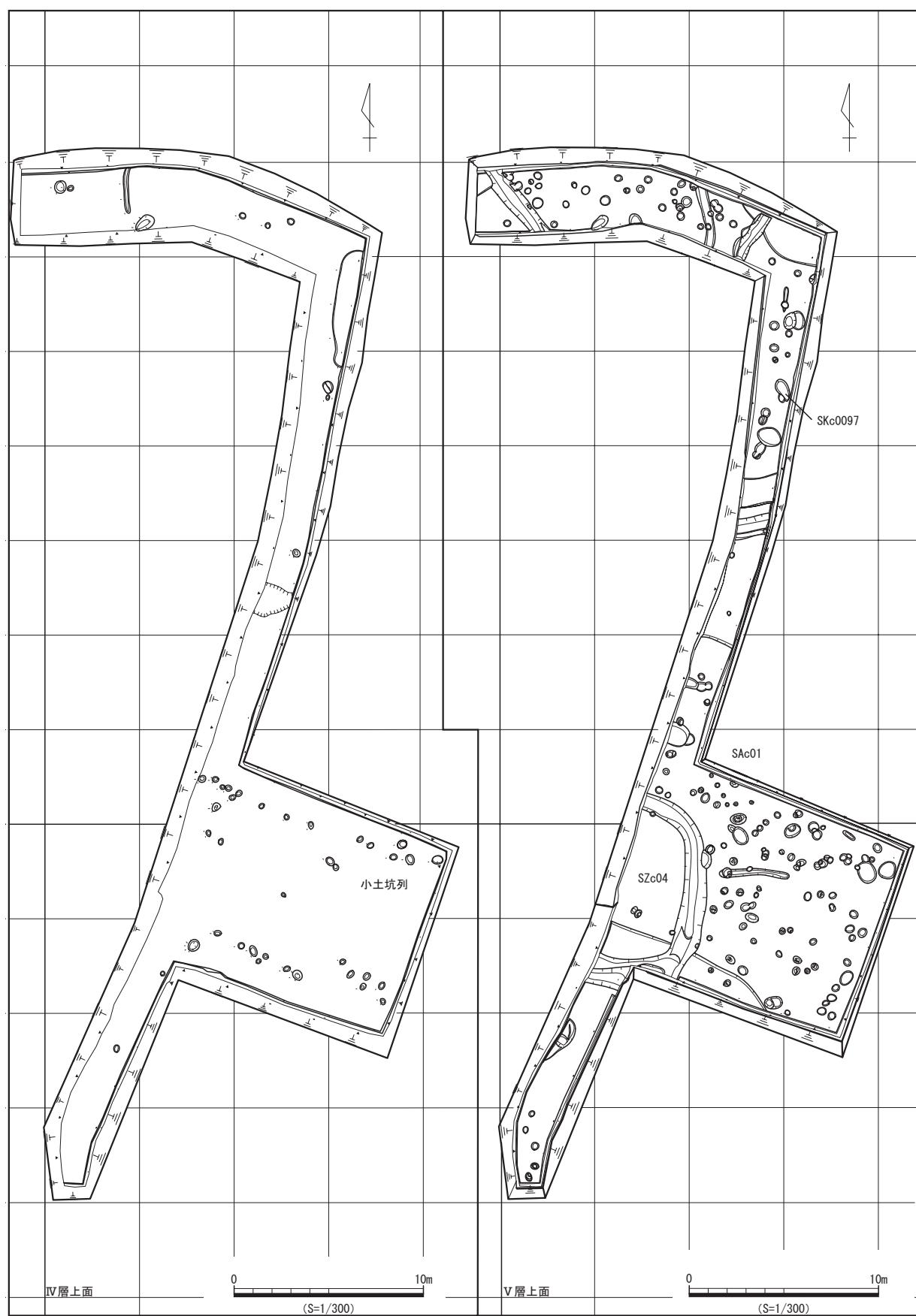


図18 08_11地点平面図

表14 08_11地点出土遺物数量

種別 場所	縄文 土器	弥生土器 ・土師器	須恵器	灰釉 陶器	山茶碗・ 陶磁器類	土製品	石器・ 石製品	金属 製品	木製品	合計
I層	0	58	2	1	1	0	1	0	0	63
III層	0	1,972	2	6	0	0	2	0	0	1,982
IV層	0	2,138	3	6	1	0	4	1	0	2,153
IV上遺構	0	138	0	0	0	0	0	0	0	138
V上遺構	0	861	1	0	1	0	2	0	0	865
合計	0	5,167	8	13	3	0	9	1	0	5,201

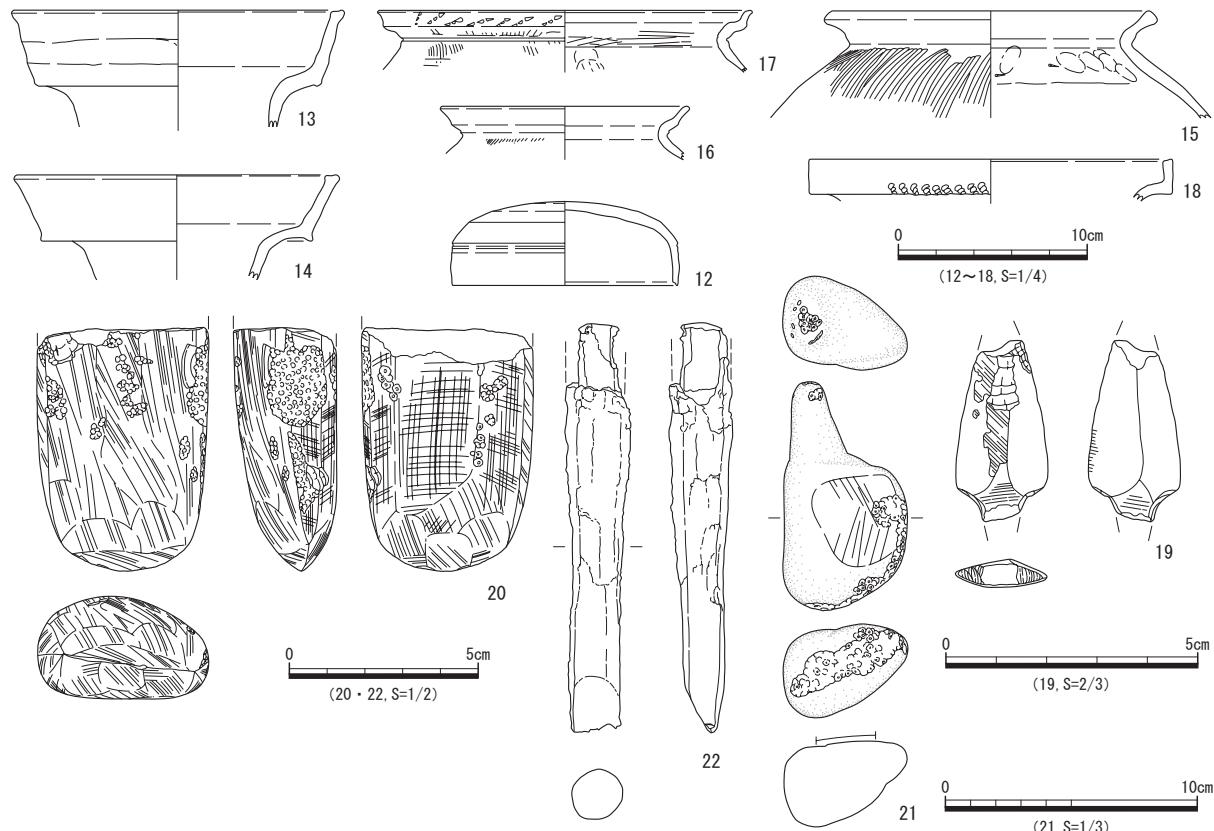


図19 08_11地点包含層出土遺物

3 IV層上面の遺構と遺物

IV層上面では土坑47基と溝状遺構1条を検出した。いずれの遺構からも遺物は少ないか出土しなかった。しかし、橋脚建設部にあたる、発掘区が方形に張り出した部分において、N60°W～N70°Wの方位に小土坑が並ぶように2列確認できた。

小土坑列（図20） 北と南に分かれるが、その間隔は約6mである。類似した遺構は、07_7地点において南北方向の小土坑列として確認しており、これがN10°E～N20°Eの方位に並ぶため、おおよそ直交するような位置関係となるが、距離は離れる。また、大垣市教委の調査（大垣市教委2003）でも、上層面の遺構として検出したSX10は、南北直線方向に不整長方形の土坑が0.7m間隔で並んでいる。ここで検出した小土坑列は、大垣市教委調査のSX10のように直線的でほぼ等間隔で並んでいるわけではないが、層位的には同じと思われる。土坑の大きさは0.24m～0.65mで、深さは0.07m～0.18mである。埋土の色や土質に共通性が見られる。出土遺物は土器小片が多く、IV層中のものが混入した可能性が高く、この小土坑列の時期は不明であるが、大垣市教委調査のSX10は古墳時代後期から古代の範囲で考えたいとされている。

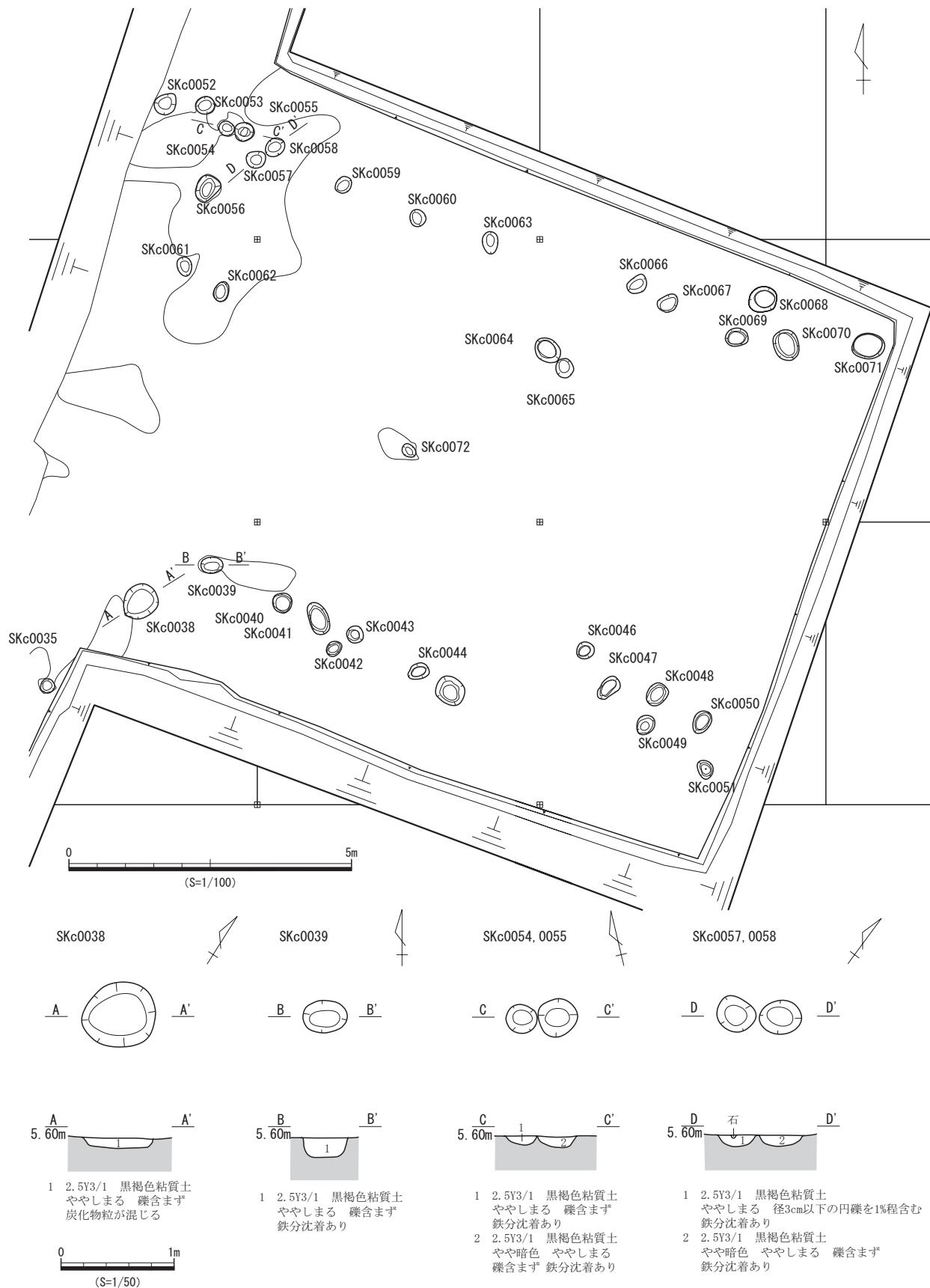


図20 小土坑列

4 V層上面の遺構と遺物

V層上面では、方形周溝墓1基、柵跡1基、柱穴45基、土坑120基、溝状遺構8条を検出した。柱穴や土坑、溝状遺構からは遺物が出土しないことが多く、出土しても土器の小片が少量出土する程度で、性格不明の遺構が多い。遺物が比較的まとまって出土した土坑と溝状遺構を方形周溝墓や柵跡とともに図示した。なお、柱穴と思われる穴については、位置関係から建物跡の可能性を検討したが、

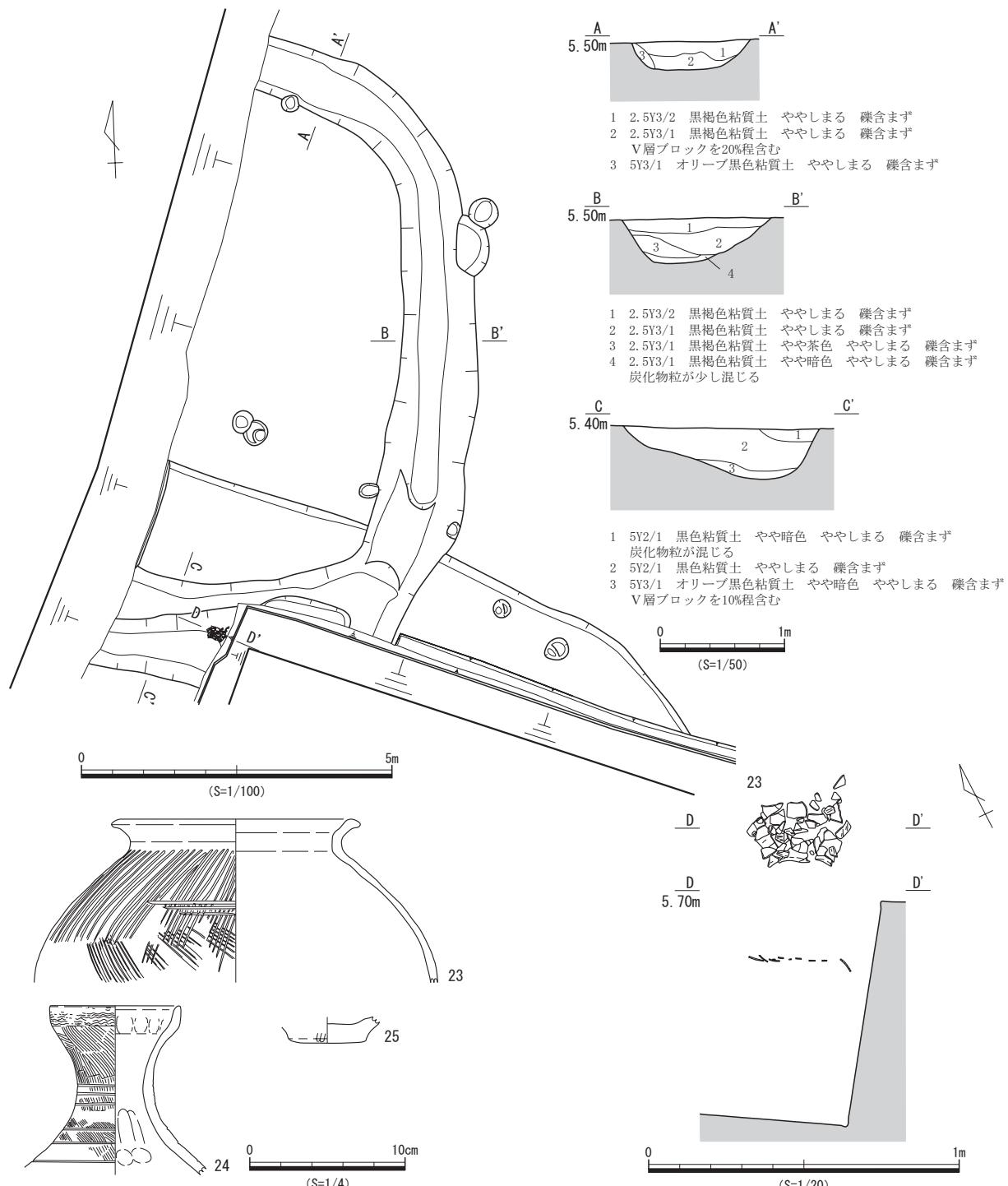


図21 SZc04

柵跡以外に明確な関連性を見いだすことができなかった。

SZc04（図21）

検出状況 V層上面で東半部を検出したが、西半部は発掘区外となる。北半部分の平面形は比較的明瞭に確認できたが、南半部では浅いくぼ地状の堆積があり、それを除去するまでは平面形を把握することが困難であった。なお、このくぼ地状堆積において17や18が出土した。

方台部 検出した南北辺部及び東辺部の方台部側は、やや湾曲したようになるが、方台部の形状は方形若しくは長方形と思われる。墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝 東溝及び北溝と南溝の一部を検出した。東溝の南東隅に近い場所では、底面が浅くなるが、北東隅部では深さに変化はない。北東隅部はやや鈍角となり、東溝が少し湾曲している。周溝の断面形はほぼ逆台形で、幅は1.0m～1.6m程で、深さは0.2m～0.4mである。周溝底面は比較的平坦で、埋土下層にはV層ブロックを含み、墳丘盛土若しくは壁面の崩落によると思われる。その後は、方台部側若しくは周溝外側からの流入土が堆積したものと思われる。

遺物出土状況 南溝上部のIV層中からX期の宇田甕が出土したが、南溝が埋没した後のIV層中から出土したもので、口縁部から胴部上半部が潰れた状態であった。他は埋土中から散在して土器片が出土した程度である。なお、埋土上部から緑色凝灰岩片が1点出土した。

出土遺物 23は南溝埋没後のIV層中から出土した、X期の宇田甕で、口縁端部が三角形状に拡張されている。24はIII-3期の壺A3類で、短く屈曲した口縁部外面に、波状文を施し、頸部には沈線を3条、上胴部には3条以上巡らせている。25は壺の底部片でIII期頃のものか。

時期 周溝内埋土から出土した24は、口縁部から上胴部片であるが、最も遺存状態が良いため、これを時期を検討する最適な資料と考え、III-3期と思われる。

SAC01（図22）

検出状況 V層上面で検出したが、各柱穴の平面形は比較的明瞭に確認できた。ほぼ同じ形状の小穴がL字形に並んで確認できたため、柵のようなものと判断した。N23°Wの方位に柱穴4基が柱間0.5mでほぼ直線上に並び、N80°Eの方位に2基の柱穴が位置する。北側は発掘区外となるため、さらに延長する可能性もあり、両者は別の柵跡であることも考えられる。

柱穴 6基の柱穴を検出したが、直径0.19m～0.27mのほぼ円形か不整円形で、深さ0.12m～0.15mである。

出土遺物 どの柱穴からも遺物は出土しなかった。

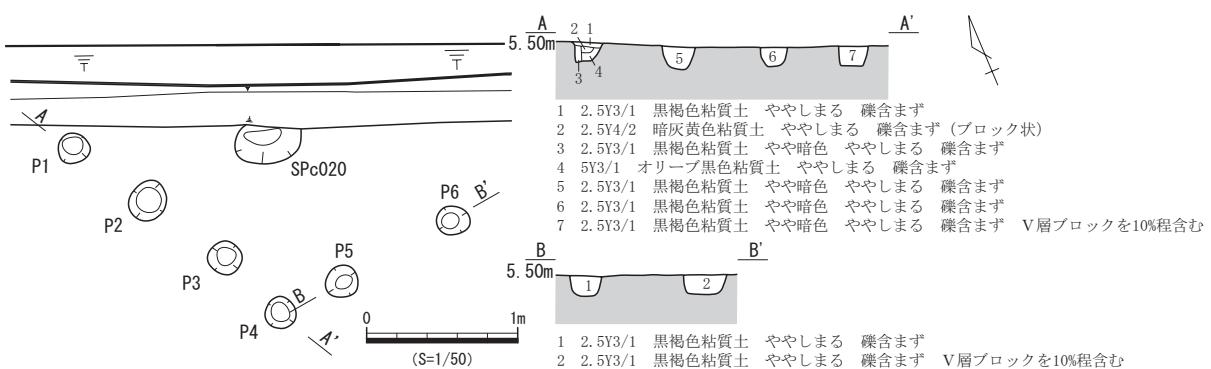


図22 SAC01

時期 出土遺物がないが、V層上面で検出したことから、弥生時代から古墳時代前期のものと思われる。

SKc0097 (図23)

検出状況 08_11地点の北東部に位置し、V層上面で検出した。平面形は比較的明瞭に確認できたが、検出時に土器片がまとまって出土した。形状は不整長楕円形で、壁面の傾斜は緩く、底面は比較的平坦である。埋土は単層でV層ブロックを含むことから、人為堆積の可能性がある。このため、土坑墓の可能性あると思われるが、穴の規模が小さいことから性格不明の穴としておく。

遺物出土状況 検出時に土器片がまとまって出土し、高壺と鉢、小型壺があることが認識できた。西から大きくは小型壺、高壺、鉢の順にあり、土器片は各個体が重なるように出土した。特に鉢は、中央部から東側へ広がっていた。土器片は、埋土上部に集中することから、この穴を掘削後埋め戻した最終段階で、土器を置いたことが考えられる。しかし、口縁部から底部まで残存していたのは鉢のみで、高壺や小型壺などは部分的に残っていただけである。

出土遺物 検出時に出土した土器4個体を実測したが、いずれもVI-1期のものと思われる。26は小型壺でやや扁平な胴部から短い口縁部が立ち上がる。27・28は高壺B3a類で、口縁部が外反し、口縁端部は丸い。29は鉢A1類で、口縁部から底部までほぼ残存する。口縁部は受口状に屈曲し、口縁部外面は無文で、肩部に刺突文を施す。

時期 出土遺物は人為的に埋められた可能性が考えられるため、遺構の時期はVI-1期と思われる。

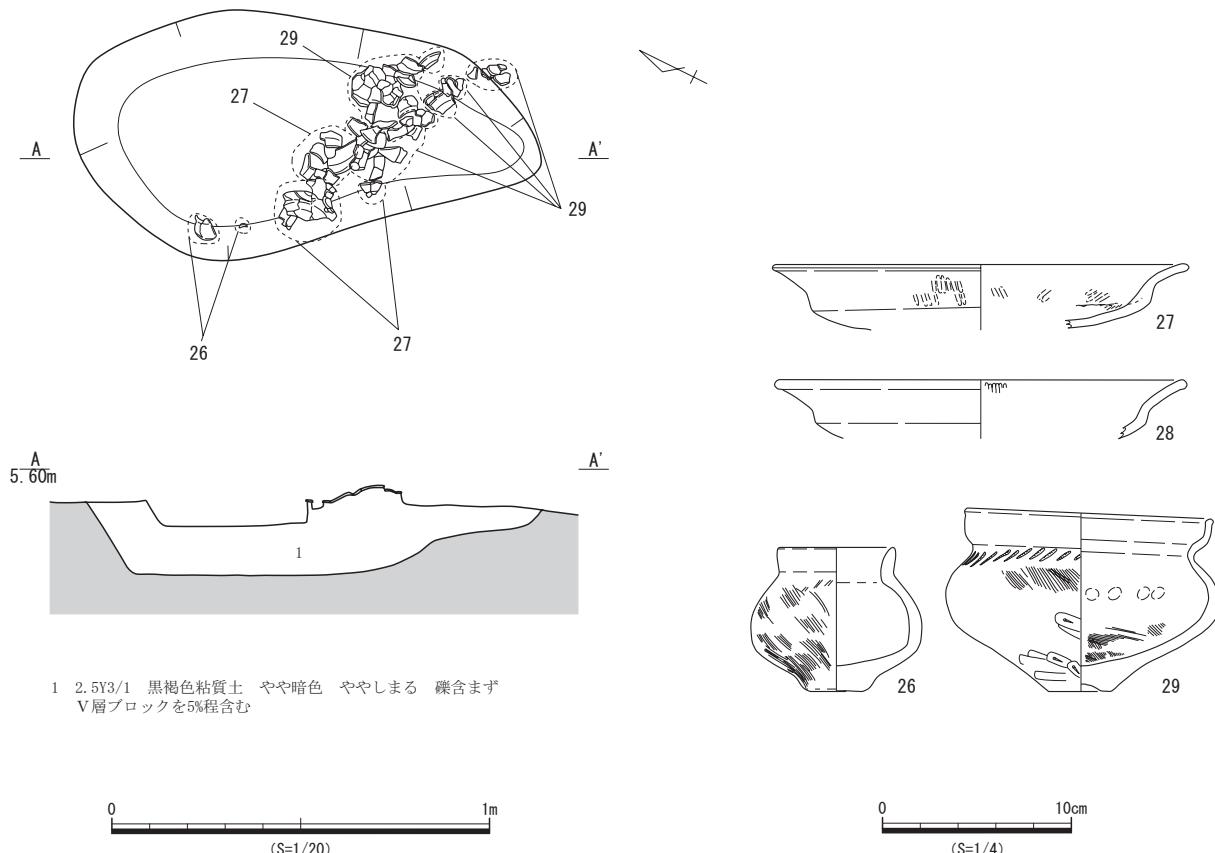


図23 SKc0097

SDc006 (図24)

検出状況 08_11地点の北部に位置し、V層上面で検出した。平面形はやや不明瞭で、当初は土坑と重複しているように確認したため、現場での遺構番号が2つになっているが、埋土が類似することや、出土遺物に時期的な差が認められないことから同一遺構と判断した。方位がN40°Eとなる溝状遺構で、断面形はほぼ逆台形となる。埋土は4層に分層したが、埋土下部に壁面の崩落と思われるV層ブロックを含むことから、自然堆積の可能性があるが、土器片は上下層で接合することから、最終的には人為的に埋め戻しを行った可能性がある。遺物の出土状況や量、埋土の堆積状況などから、土地の区画を意図した溝状遺構の可能性が考えられ、機能を停止させる際に、遺物の廃棄を行い埋め戻したことでも考えられる。

遺物出土状況 埋土中に散在して出土したが、上層（1層）から器台、下層（3層）から高坏や鉢、手捏ね土器が出土した。甕は破片が散在し、上下層から出土した。

出土遺物 出土した土器のうち6個体を実測したが、いずれもV-3期のものと思われる。30は甕A3類で口縁部がやや受口状となり、平底である。接合していないが、胎土や色調、器面調整から同一個体と判断した。31はやや小型の高坏B2c類で、口縁部が外反し、脚裾部は大きく開く。32は口縁部を欠くが器台A1b類と思われる。33は鉢A2類の口縁部片で、口縁部外面に刺突文、上胴部に横線文を施す。34は鉢F類と思われる。35は手捏ね土器D類で、短い口縁部が開き、底部は凹み底である。

時期 出土した遺物に時期的なまとまりがあることから、遺構の時期はV-3期と思われる。

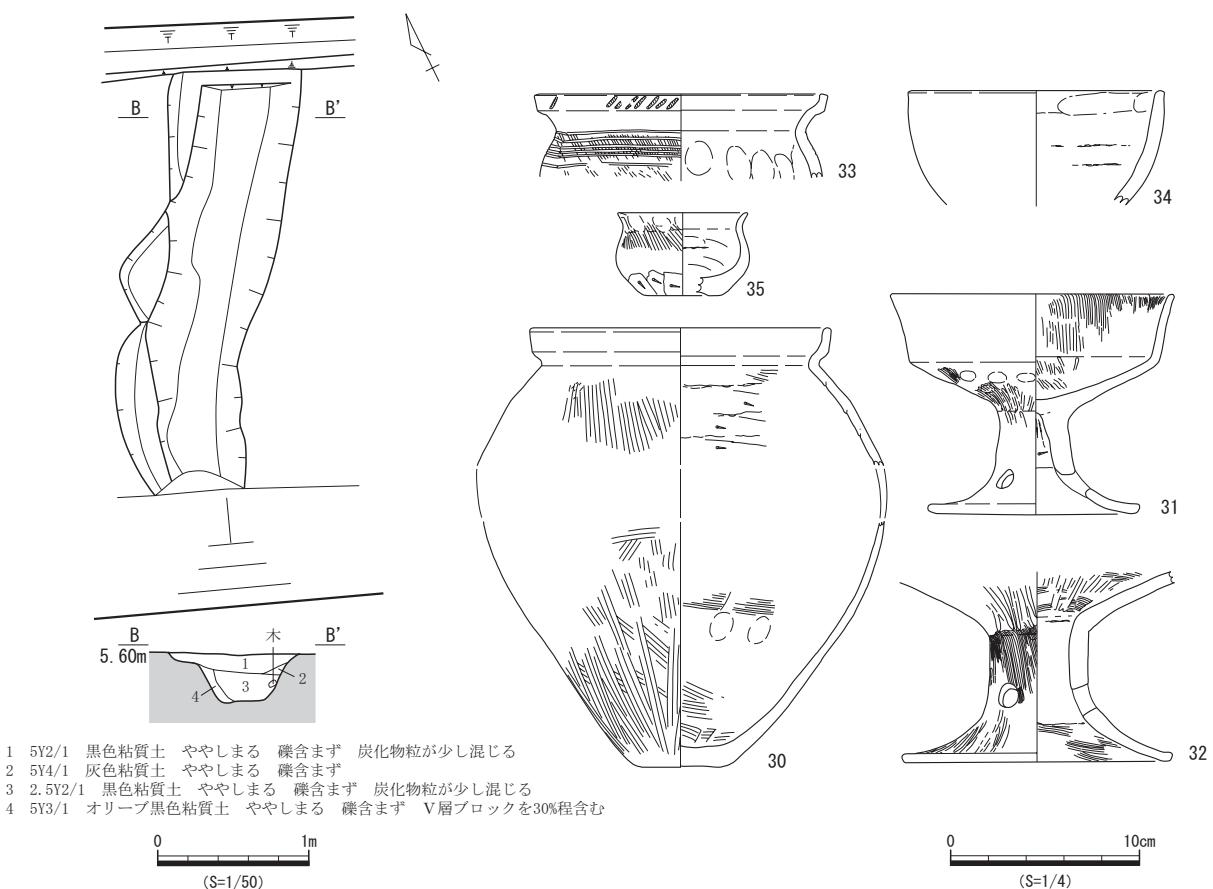


図24 SDc006

SDc009（図25）

検出状況 08_11地点の中央部に位置し、V層上面で検出した。平面形は比較的明瞭であったが、ほぼ東西方向の浅い溝状遺構である。

遺物出土状況 図示した土器のほか、壺片や甕片が埋土中に散在して出土しており、特にまとまりは認められなかった。

出土遺物 出土した土器のうち1個体を実測したが、いずれもV期のものと思われる。36は甕A2b類で口縁部がやや受口状となり、口縁部外面及び上胴部に刺突文を施す。

時期 出土した遺物は埋没する過程で混入したものである可能性が高いが、V期のものが多いと思われることからV期の遺構と考える。

SDc011（図26）

検出状況 08_11地点の北西部に位置し、V層上面で検出した。平面形は不明瞭で、当初は2基の土坑と判断し掘削を始めたが、同一の遺構で溝状となると判断した。方位がN40°Wとなる溝状遺構で、断面形はほぼ逆台形である。埋土は5層に分層したが、底面から壁面に沿って堆積した4層と5層には壁面の崩落と思われるV層ブロックを含むことから、自然堆積の可能性がある。しかし、1層から3層については土器片を多く含むことや、土器片の接合関係があることなどから、最終的には人為的に埋め戻しを行った可能性がある。SDc006と同様に、遺物の出土状況や量、埋土の堆積状況などから、土地の区画を意図した溝状遺構の可能性が考えられ、機能を停止させる際に、遺物の廃棄を行い埋め戻したこととも考えられる。

遺物出土状況 埋土中に散在して出土したが、1層から3層に土器片が多く含まれていた。口縁部から底部まで接合した有孔鉢は、2層と3層から土器片が出土した。なお、SKc0097の高坏(28)の破片がここから出土しており、SKc0097と時期的に近いと思われる。他に2層から叩石片が1点、赤鉄鉱の小片が2点出土した。

出土遺物 出土した土器のうち6個体を実測したが、いずれもV-3期からVI-1期のものと思われる。37は壺H3類で、扁平で強く張った胴部に、やや開いた口縁部が付く。38は台付甕の台部で裾部がやや開く。39は高坏B2c類と思われる口縁部片である。40は器台A2類と思われる脚部片である。41は鉢A2類と思われるが、口縁部は内湾し、口縁部外面及び上胴部に刺突文を施す。外面には厚く煤が付着している。42は鉢B2類であるが、口径12.8cmの小型品である。口縁部は大きく開き、やや内湾する。底部は平らで径12mmの孔を開けている。

時期 出土した遺物はV-3期からVI-1期のものと思われるが、SKc0097出土土器と接合関係があることから、人為的に埋め戻されたとすればVI-1期の可能性がある。

5まとめ

この地点は、C地区の中では北東部に位置する。多数の遺構を検出したが、このうちIV層上面の小土坑群は、大垣市教委調査のSX10や、07_7地点の小土坑群と類似点があるが、その性格については現状では不明である。V-3期からVI-1期と思われる遺構は、区画溝と思われるものと埋土上部に土器片がまとまって出土した土坑である。発掘区が幅3m程のトレンチ状の部分が大半のため、建物跡のようなものは明確にはできなかったが、時期が確定できないSAc01を確認したことも含めて、この時期に建物が存在していた可能性は考えられる。弥生時代中期の方形周溝墓を1基検出したが、08_10地点、

09_8地点の方形周溝墓との間にはこの時期の遺構が確認できない空白地があり、時期もやや古くIII-3期と思われる。

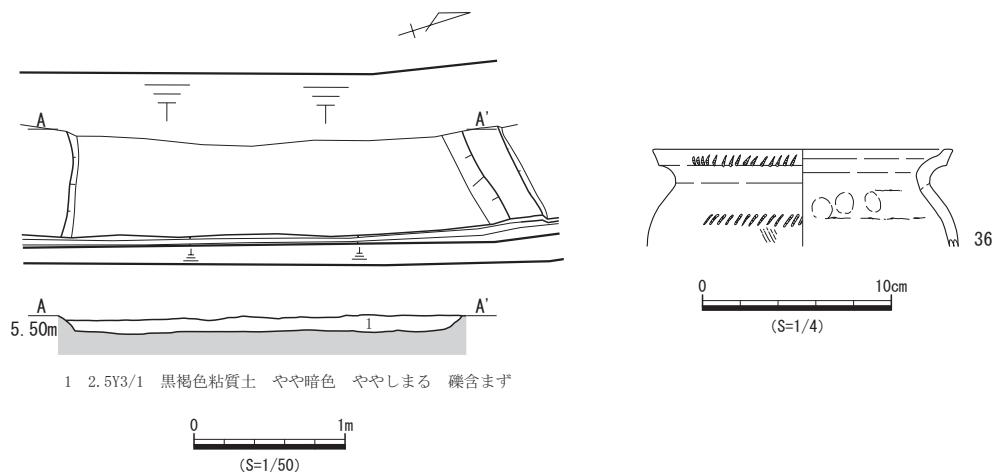


図25 SDc009

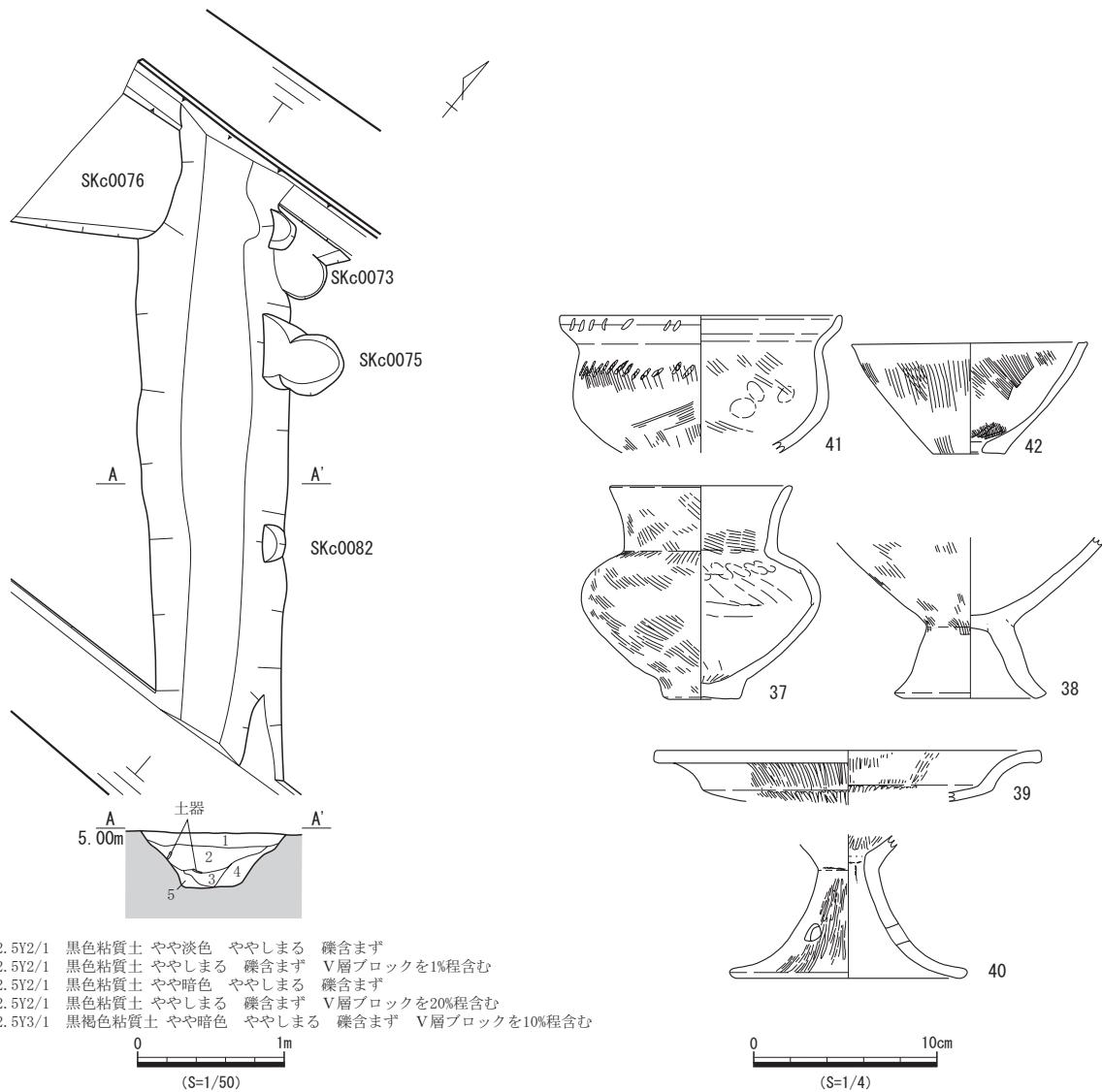


図26 SDc011

第3節 07_6～8地点

C地区北部に位置する調査地点で、調査面積は689m²である。本線橋脚の一部及び調整池堰堤の位置であるが、調整池堰堤は市道を挟んで08_11地点へ続く。幅3mのコ字形部分は07_7地点、南東隅の07_9地点へ続く橋脚部分を07_6地点、そこから北へ延び08_11地点へ続く調整池堰堤部分を07_8地点と呼称して調査を行った。なお、北東に08_10地点、南東に09_9地点、南に07_4・5地点がある。

1 層序

07_7地点西壁土層図の一部と07_8地点東壁土層図の一部を図示した（図27）。07_7地点西壁土層図は、SZc05前方部南溝の位置である。ここでは旧地形での微高地にあたると思われ、耕地整理により大きく削平された場所と思われる。IV層が残存しておらず、I b層下に耕地整理に伴う整地土と思われるI c層が堆積し、その下はV層となる。このため、07_7地点の西部では重機掘削後、V層が露出する部分があった。なお、このあたりから北及び南へ緩やかに傾斜し、IV層の堆積が認められるようになる。07_6地点東壁土層図ではIV層までのものとなっているが、調査中の壁面の崩壊防止措置のため、土層図の追加実測ができなくなったためである。この調査地点における、V層上面の標高が最も低い場所にあたり、耕地整理時の盛土層が厚く堆積している。

2 包含層出土遺物（図28）

この地点で出土した遺物は32,955点であるが、このうちI層～II層（排土から採集したものを含む）は246点、III層は987点、IV層は6,829点で、遺構出土遺物は24,893点である。III層の遺物は、石器類が1点、木製品1点のほかは土器類で、須恵器19点、灰釉陶器8点、陶磁器類23点を含む。IV層の遺物は、石器類17点、金属製品1点、木製品2点のほかは土器類で、須恵器44点、灰釉陶器28点、陶磁器類45点を含む。

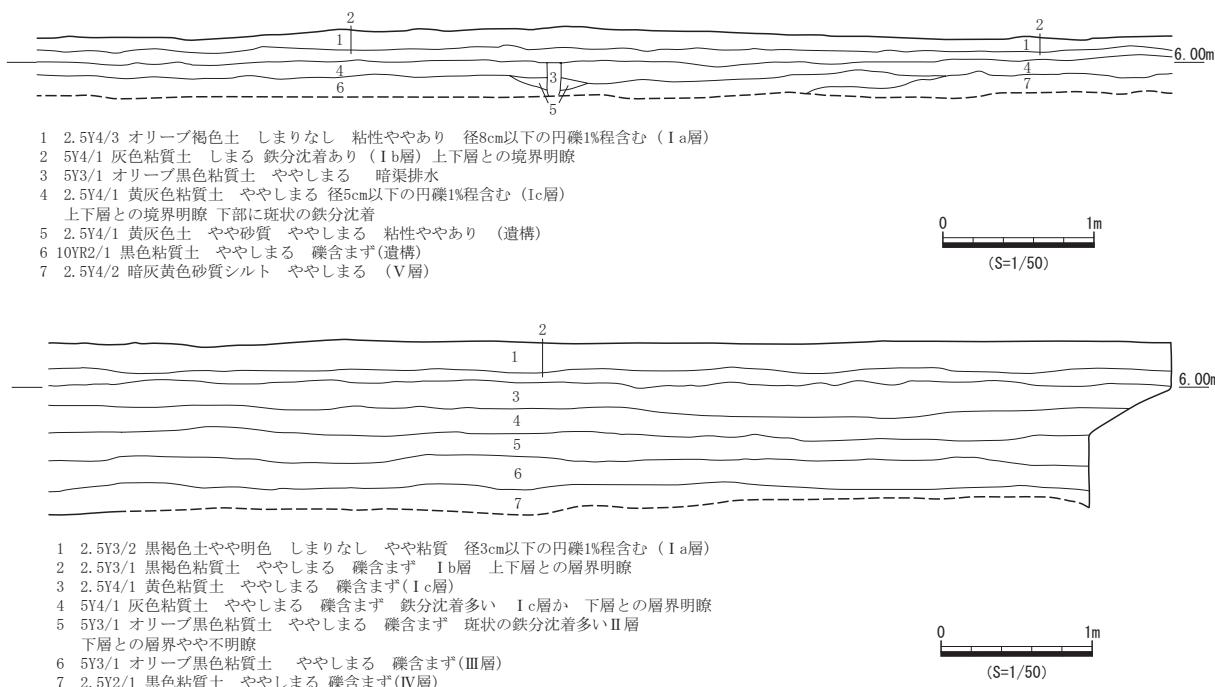


図27 07_7地点西壁（上）、07_8地点東壁（下）土層図

表15 07_6～8地点出土遺物数量

種別 場所	縄文 土器	弥生土器 ・土師器	須恵器	灰釉 陶器	山茶碗・ 陶磁器類	土製品	石器・ 石製品	金属 製品	木製品	合計
I～II層	0	192	14	16	17	0	7	0	0	246
III層	1	933	19	8	23	1	1	0	1	987
IV層	0	6,689	44	28	45	3	17	1	2	6,829
IV上遺構	0	1,276	39	18	54	28	1	2	9	1,427
V上遺構	16	21,812	27	11	18	1	60	1	1,520	23,466
合計	17	30,902	143	81	157	33	86	4	1,532	32,955

包含層出土遺物として図示した（図28）のは、III層及びIV層から出土した山茶碗、白磁碗、須恵器坏蓋、土師器壺・甕・高坏、石器、古錢である。弥生時代から古墳時代前期の土器が多いが、特に南半部ではVII期の土器が多い傾向がある。X期の甕（宇田甕）も出土しているが、その中には強い被熱痕が認められる土器片がある。

43は山茶碗の底部片で、藤澤編年の6型式のものと思われる。44は白磁玉縁碗の口縁部で太宰府分類のIV類と思われる。45は須恵器坏蓋でH-44窯期のものか。46はVII期と思われる二重口縁壺で、口縁部外面及び屈曲部に刻みを施す。47はIX期と思われる二重口縁壺で、46と同様に刻みを施す。包含層出土として取り上げたが、出土した場所はIV層が残存しない場所であり、SZc05の埋土上部にあたる。48はX期の直口壺で、比較的短い口径部は立ち上がり、胴部は肩部で強く張り、底部は丸底である。49はX期の宇田甕で口縁端部が三角形状に拡張されている。50はIX期のS字甕D類、51はVII期のS字甕C類、52はVII期の甕D3類（S字甕B類）である。53はVI期と思われる甕A3類で受口状の口縁部はやや外傾し、屈曲部と頸部に刺突文を施す。54は高坏と思われるが、脚部を欠く。口縁部が外反する碗状の坏部で、IX期～X期のものと思われる。口縁端部は平坦に調整され、上方にわずかに立ち上がる。55は台付き甕の台部に似た形状のものであるが、中実で底面は少し凹む程度である。上部は粘土が剥離したように見えるが、粗いユビ押さえで成形したままとも見える。外面には被熱痕が認められるため、台盤状土製品若しくは土製支脚のようなものの可能性を考えたい。56は発掘区周囲での表採資料で、粗い敲打痕が残る磨製石斧の未製品である。57・58は砥石である。59は古錢「景祐元寶」である。

3 IV層上面の遺構と遺物（図29）

IV層上面では土坑105基と溝状遺構16条を検出した。いくつかの遺構からは、近代以降と思われる瓦片が出土した。これら近代以降の遺構を除くと、南北及び東西方向の溝状遺構により、土地が大きく区画され、その内部に不整形や不定形の土坑が存在する状況と見ることができる。しかし、発掘区の形状がコ字形のトレーンチ状であるため不確かであることは否めない。なお、土坑の中には、列状に並んでいるような土坑群があり、これが溝状遺構に沿うように分布している場合もある。こうした土坑群を小土坑列とし、以下に報告する。なお、大きく南部と北部に分かれるため、南部小土坑列、北部小土坑列とする。これらは、08_11地点の小土坑列の方向から、おおよそ直交する位置関係となる。

南部小土坑列（図30・31） SKc0199～SKc0237の39基の土坑が、SDc019に沿うように列状に並んでいる。また、SKc0212・SKc0213とSKc0215・SKc0236の間には約2m間隔があり、そこには東西方向の溝状遺構であるSDc022とSDc023がある。SDc019と小土坑は、検出した状態ではSDc019が新しいことを確認し

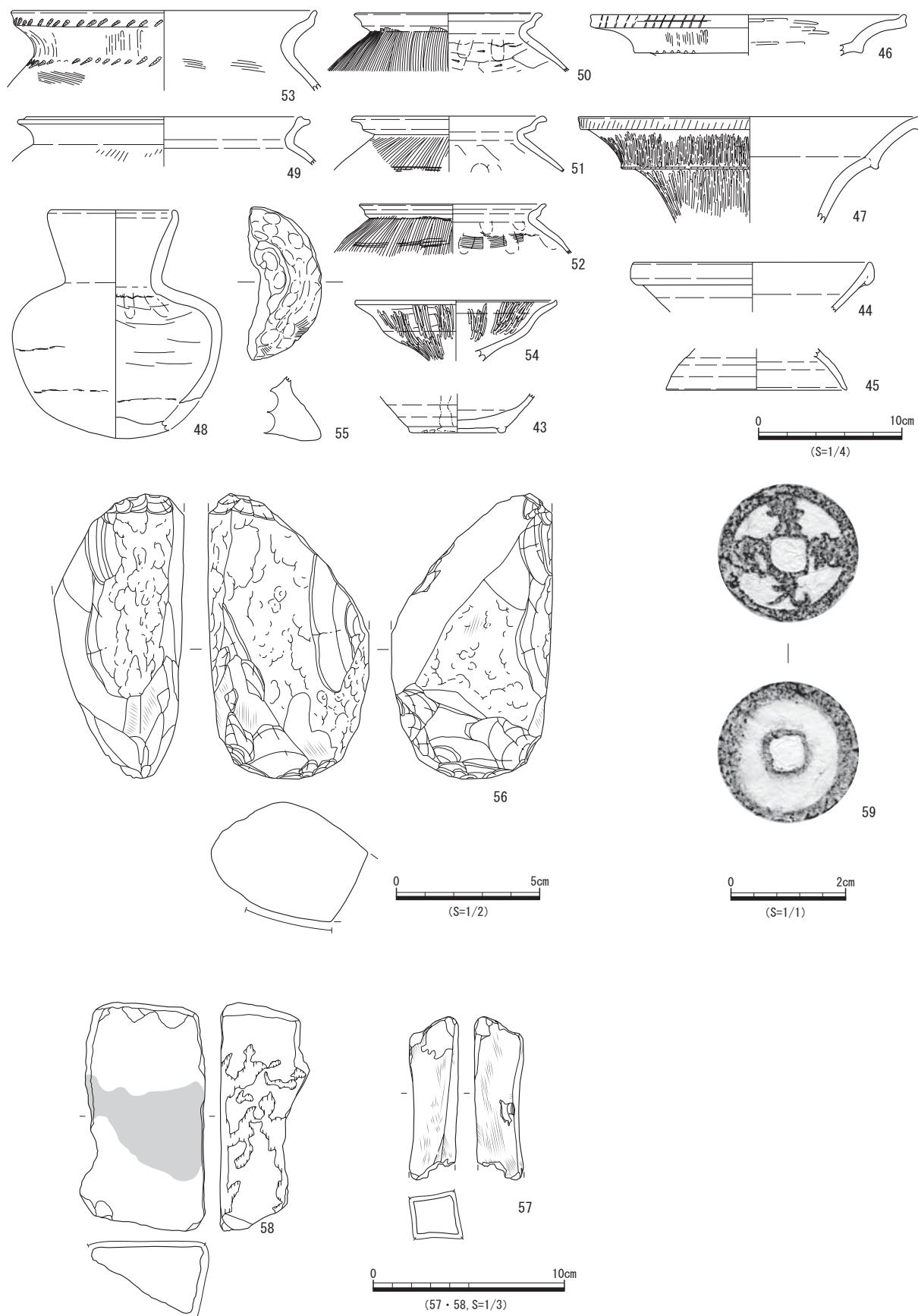


図28 07_6~8地点包含層出土遺物

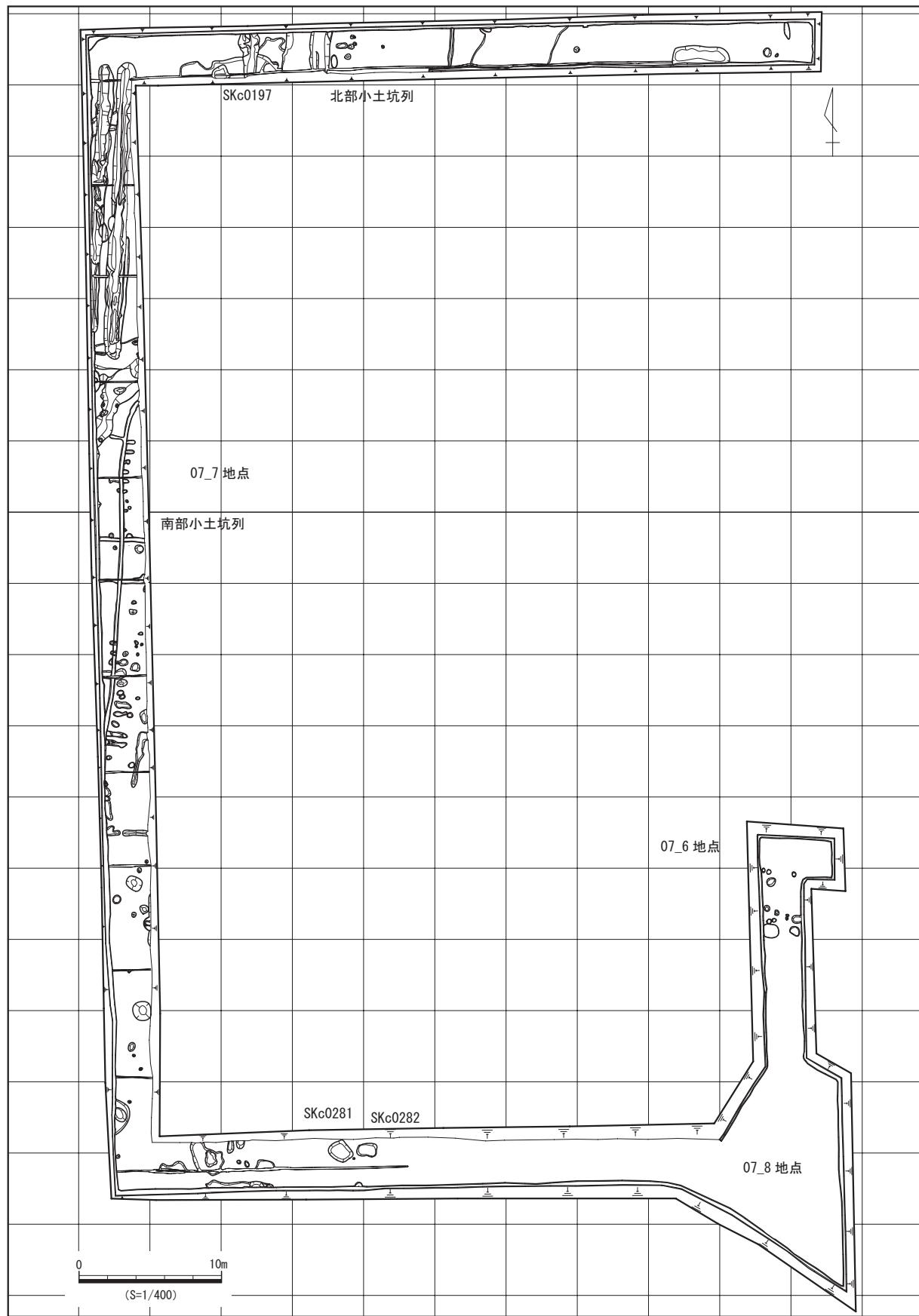


図29 07_6～8地点IV層上面平面図

たが、こうした位置関係から時期的な差はあまりないものと思われる。小土坑は、長さ0.19m～1.21m、深さ0.03m～0.16mのもので、埋土内から小破片ながら山茶碗片が出土していることから、中世以降の遺構と思われる。SDc019は、幅0.32mで長さが23.5m以上となる。深さは概ね0.12m～0.15mであるが、一部深くなり0.43mある。N 5° Eとほぼ南北方向の溝であるが、北端でSDc017やSDc018を避けるように北東に湾曲している。さらに、SDc019とほぼ直交するSDc022とSDc023を確認した。これらの溝状遺構や小土坑列が具体的にどのような機能を持つのか、現状では不明である。

北部小土坑列（図32） SKc0238～SKc0242の5基の土坑が群集し、この位置が南部小土坑列の延長に位置すると思われる。長さ0.25m～0.79m、深さ0.06m～0.10mの小さくて浅い土坑である。埋土中

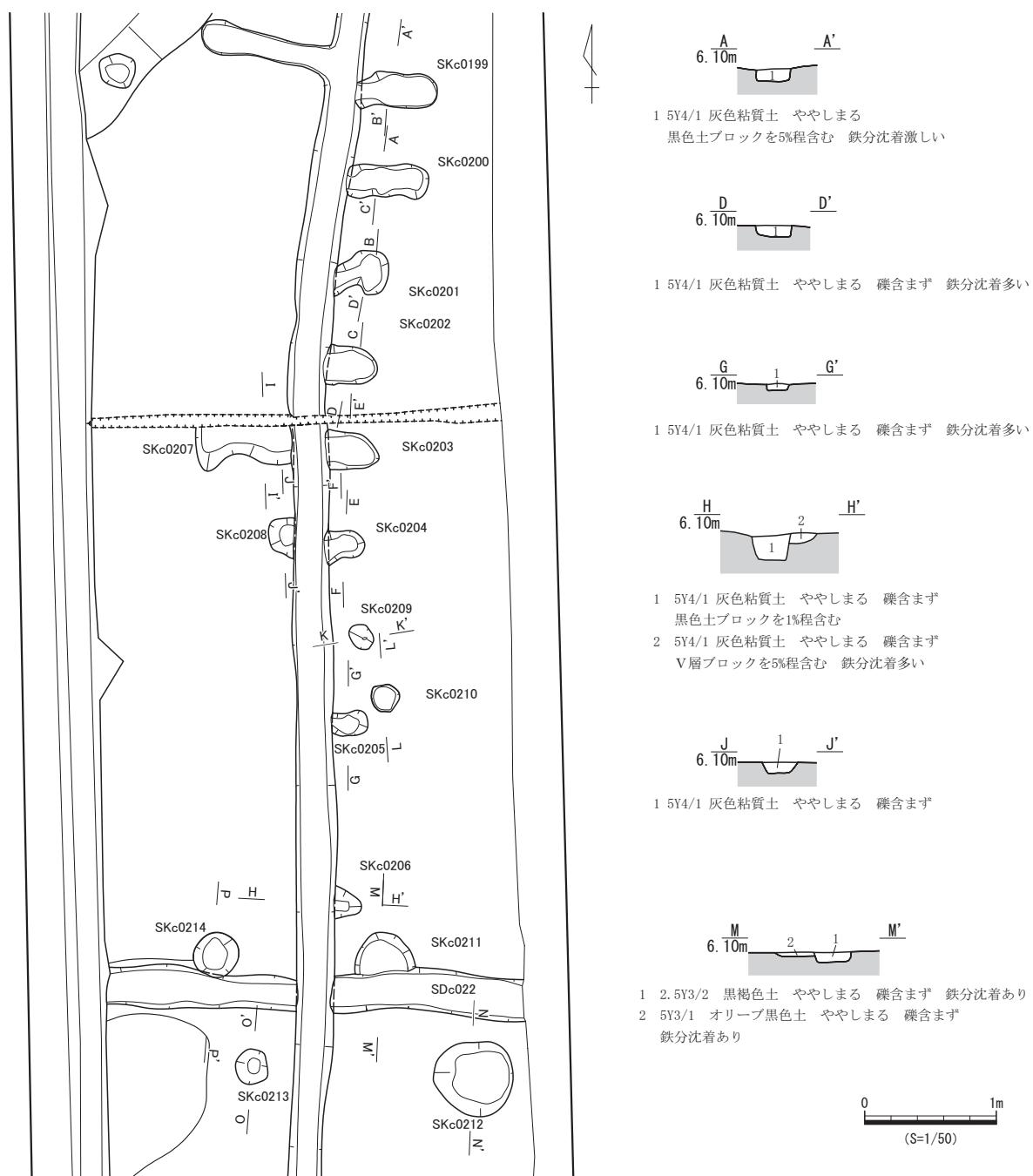


図30 南部小土坑列（1）

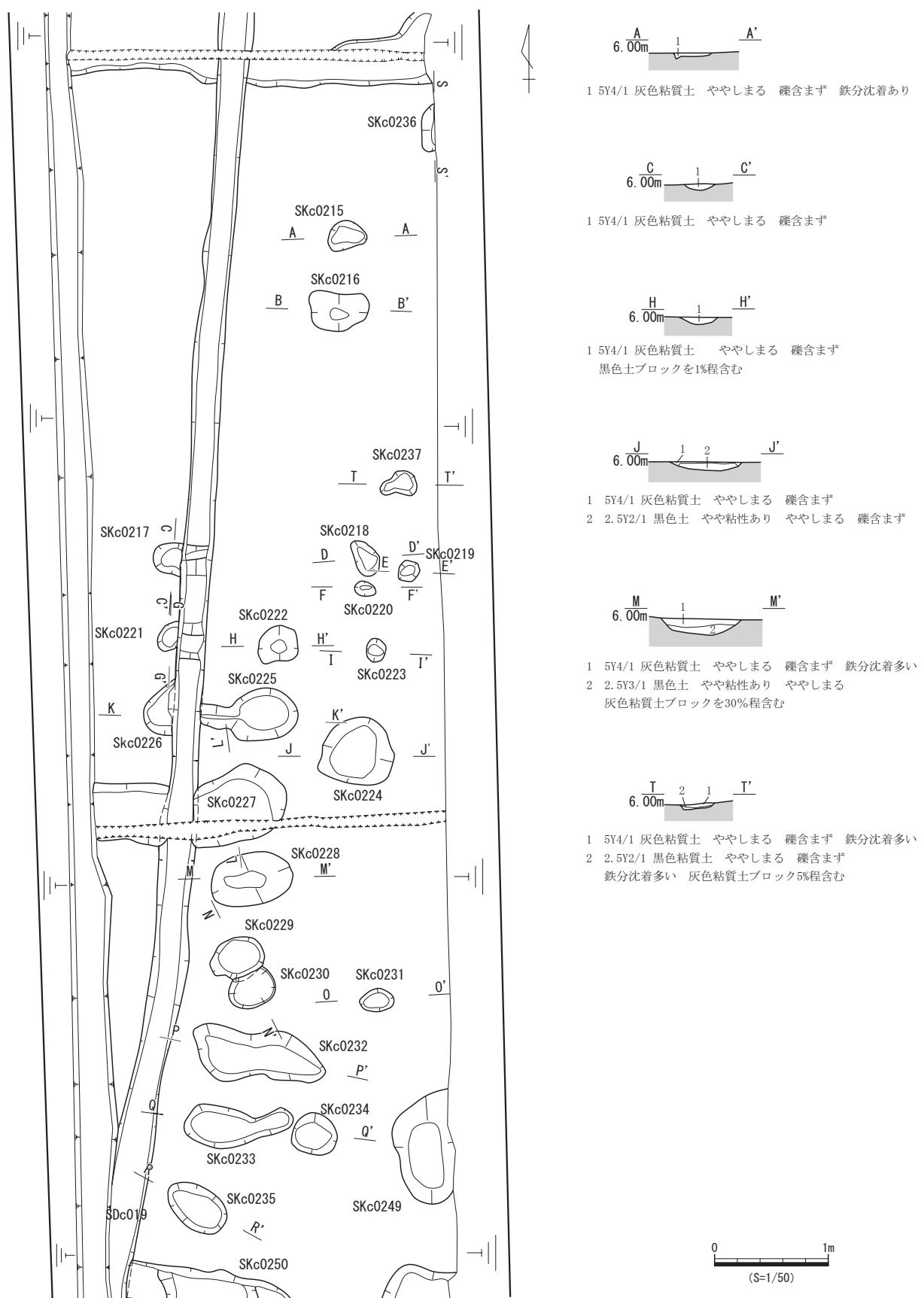


図31 南部小土坑列 (2)

から遺物が出土していないため時期は不明であるが、南部小土坑列と同様の時期（中世以降）と思われる。

SKc0197（図33・34）

検出状況 07_7地点の北部に位置し、IV層上面で検出したが、III層が削平されて存在しないため、遺構面としてはII層基底面となる。平面形は不整形で発掘区外に広がる。また、南北方向の溝状遺構であるSDc021に一部削平されている。底面は凹凸があり、性格不明の土坑である。埋土は5層に分層したが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 埋土中から比較的多くの土器片が出土したが、特にまとまりや意図的な埋納状況は確認できなかった。また、この土坑を削平するSDc021からも接合関係のある土器片が出土した。

出土遺物 図示した遺物は山茶碗片、土師器甕、刀子である。土師器甕は、SDc021出土土器とも接合しており、この遺構に伴うというよりも、包含層中にあったものが両遺構掘削時に取り出された可能性が考えられる。なお、SDc021出土の灰釉陶器片と木製品も合わせて図示した。60は山茶碗の底部片で、藤澤編年の6型式～7型式頃か。61はSDc021出土の灰釉陶器碗と思われる底部片で、三日月高台を付ける。62はVII期の甕B4類で、口縁部がく字に屈曲し、口縁端部の調整が粗い。胴部最大径はほぼ中位にある。63・64は刀子と思われる鉄製品で、64は両端部を欠く。

時期 山茶碗が出土していることから、中世以降と思われる。

SKc0281（図35）

検出状況 07_7地点の南部に位置し、IV層上面で検出した不整長方形の土坑である。同様のSKc0282と並ぶように確認した。埋土は単層であるが、黒色土ブロックを含み、人為堆積の可能性がある。深さは0.20mで、IV層上面の他の土坑と比較してやや深い。性格不明の土坑である。

遺物出土状況 埋土中から、宇田甕やS字状口縁台付甕などの土師器小片が散在して出土したが、図示可能なものはなかった。

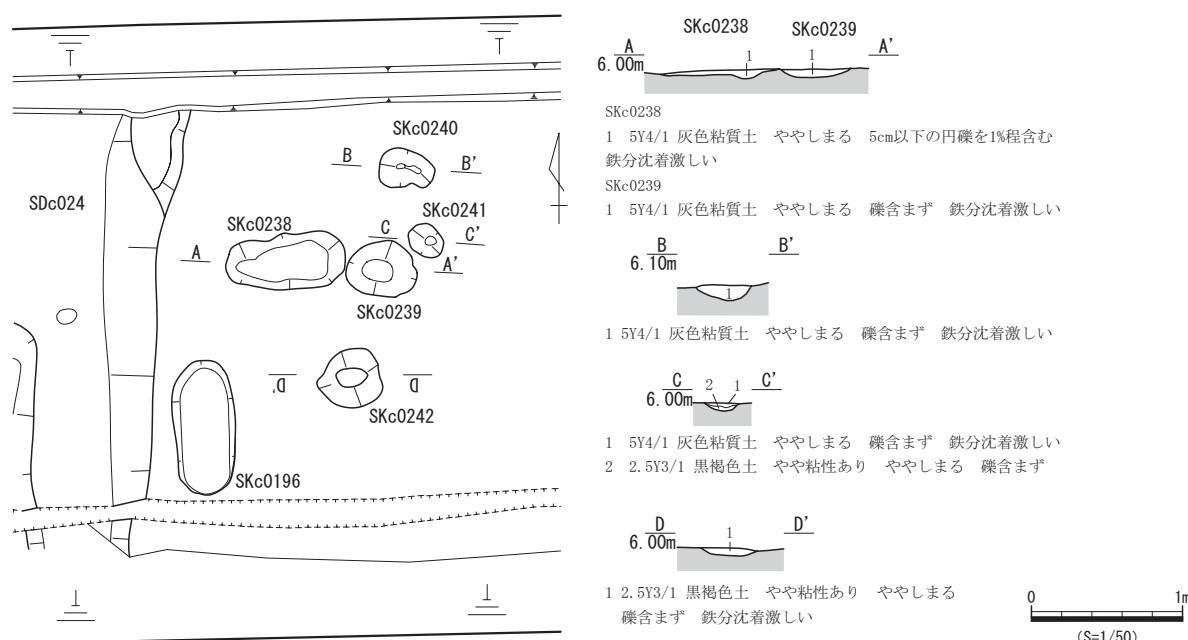


図32 北部小土坑列

時期 IV層上面で検出したことから、古墳時代以降と思われる。

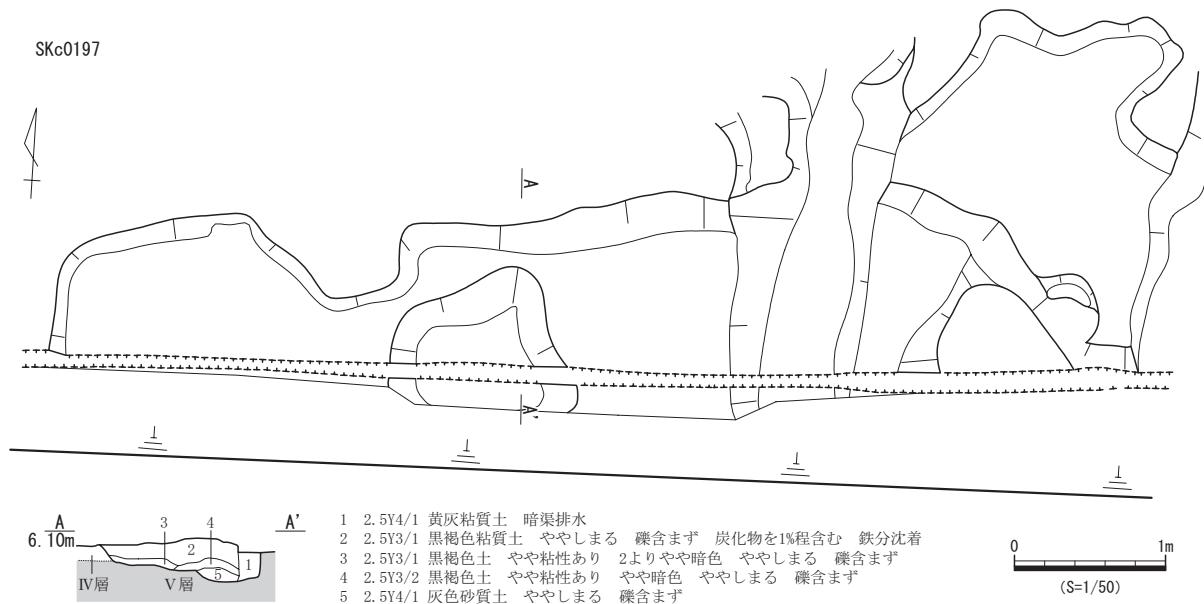


図33 SKc0197

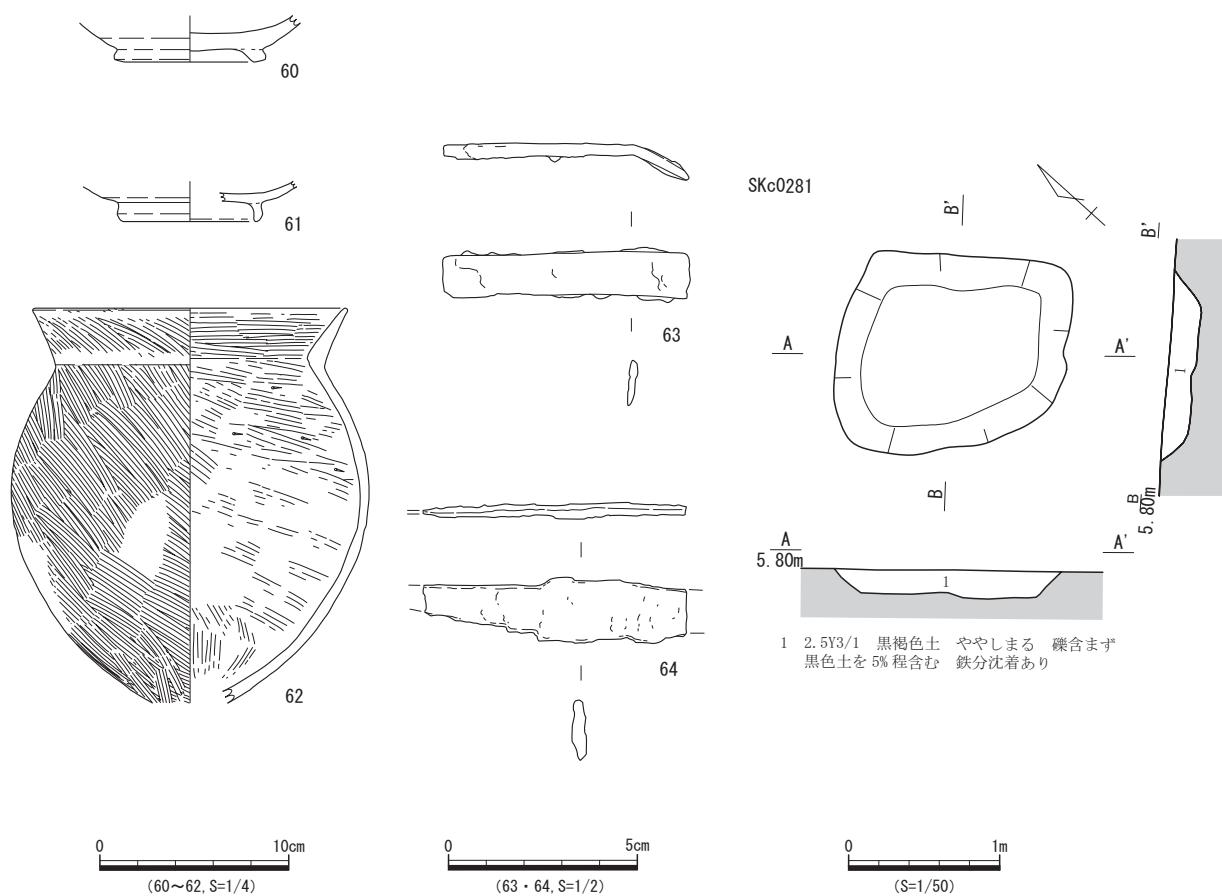


図34 SKc0197出土遺物

図35 SKc0281

SKc0282 (図36)

検出状況 07_7地点の南部に位置し、IV層上面で検出した不整長方形の土坑である。埋土は2層に分層したが、黒色土ブロックや灰色粘質土ブロックを含むことから、人為堆積の可能性がある。深さは0.46mあり、SK0281よりも深い。性格不明の土坑である。

遺物出土状況 埋土中から土師器や須恵器、山茶碗片などの土器片が散在して出土したが、特にまとまりや意図的な埋納状況は確認できなかった。また、図示可能な土器もなかった。他に叩石が1点出土したが、IV層中のものが混在した可能性がある。

出土遺物 図示した遺物は叩石(65)である。一部欠損するが、表面中央に凹みを持ち、側縁部に敲打痕が認められる。またスヌ状の付着物がある。

時期 山茶碗片が出土していることから、中世以降と思われる。

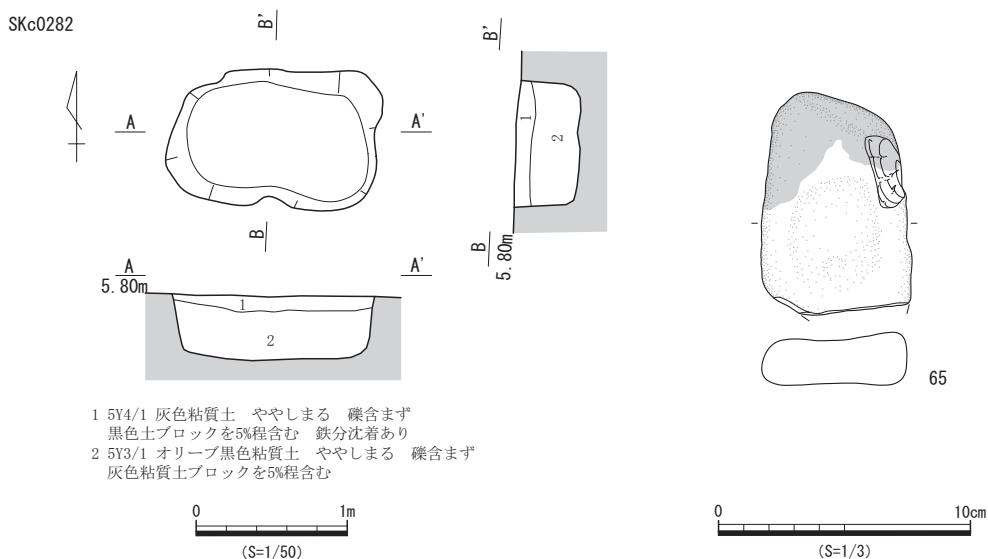


図36 SKc0282

4 V層上面の遺構と遺物

V層上面では、柱穴7基、前方後方形周溝墓1基、方形周溝墓4基、土坑115基、溝状遺構29条を検出した（図37）。柱穴と思われる穴は、形状や土層堆積状況から判断したものであるが、建物跡としてのまとまりを確認することができなかった。遺物が、比較的まとまって出土した土坑や遺跡を南北に貫く規模の大きな溝、この大溝に流れ込むように掘削された、あるいは平行して掘削された溝状遺構や周溝墓と判断したものなどを図示した。

SZc05 (図38～図43)

検出状況 IV層が残存しない場所にあり、V層上面で検出した。当初は東西方向の2条の幅広い溝と認識しており、平面形は比較的明瞭であった。掘削途中で、2条の溝が対称的な形であり、その間に挟まれた範囲が古墳の前方部のような形状であることが判明した。2条の溝を掘削した後、その底面形状から、大垣市東町田遺跡SZ02やSZ10と同様の前方後方形周溝墓であると判断した。

方台部 検出した周溝部は、前方部に伴うものであり、後方部は発掘区外となる。前方部の東端は発掘区外となるが、東町田遺跡と同様のものと考えると、周溝は連続せず、東端部で途切れるものと思われる。前方部の東端での幅は上端で約6.0m、下端で約6.8mであるが、西端での幅は上端で約4.1m、

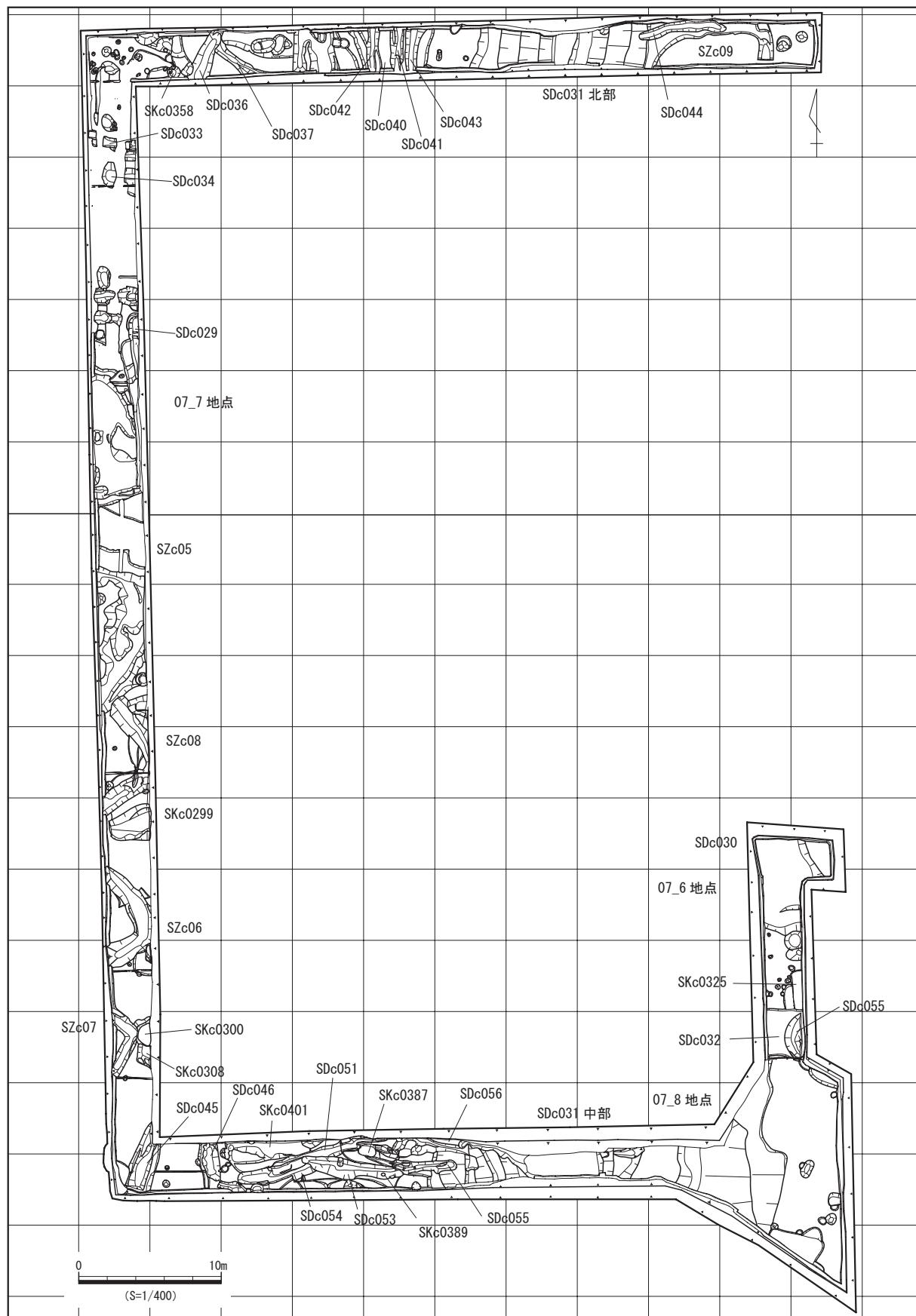


図37 07_6～8地点 V層上面平面図

下端で約5.6mとやや狭くなる。盛土や埋葬施設のようなものは確認できなかった。

周溝 北溝及び南溝の一部を検出した。北溝の南肩及び南溝の北肩部は直線的となるが、それぞれ反対側の肩部は、西へ向かって湾曲しており、後方部につながっていくと思われる。底面には若干の凹凸があるが、西側では後方部の裾部のように緩やかに傾斜し、西へ向かって高くなる。埋土は下部や

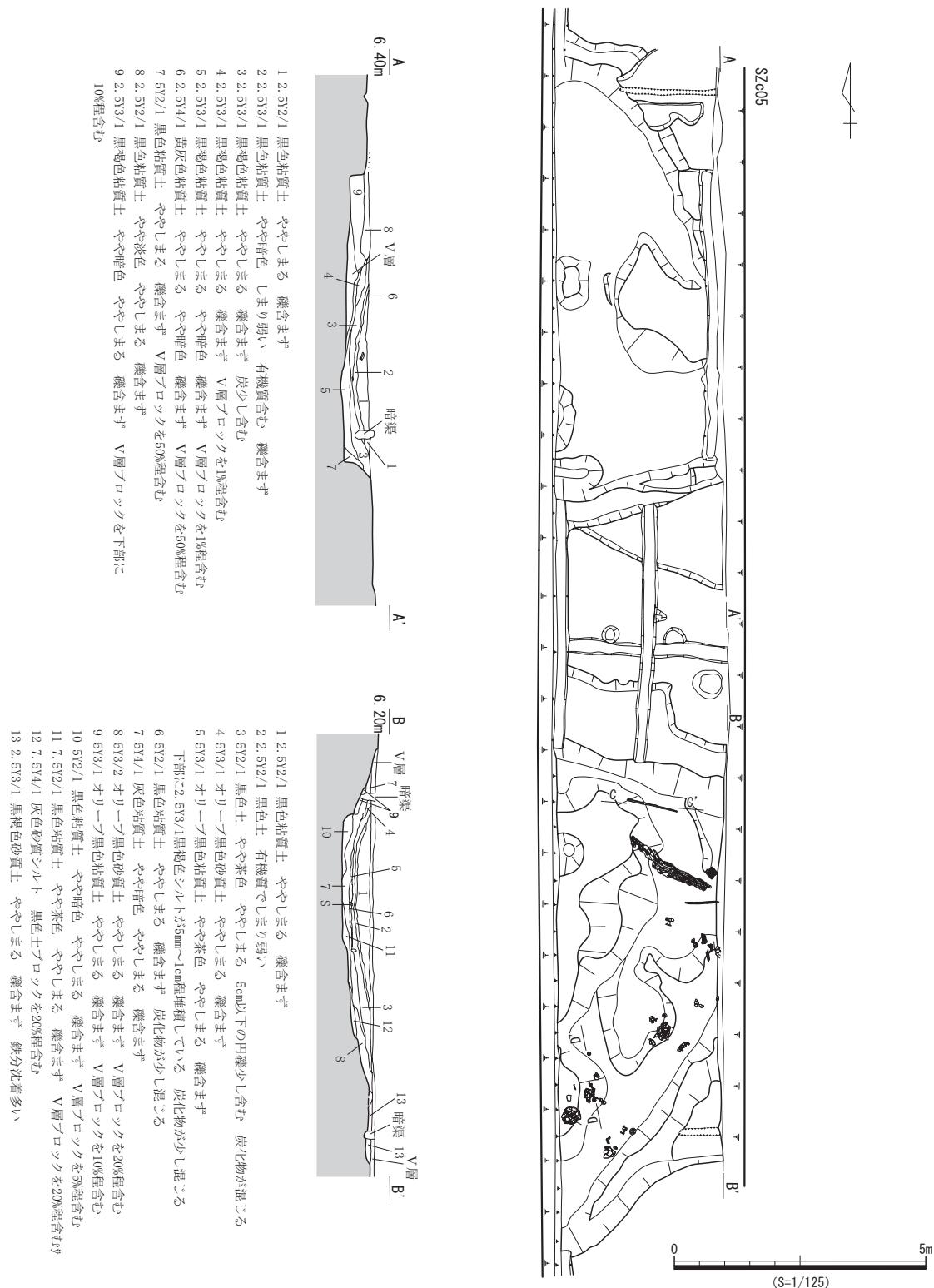


図38 SZc05

壁面近くでV層ブロックを含む堆積があり、中程に炭化物が混入した黒色から黒褐色の粘質土、上層に植物遺体を多く含む黒色土層が堆積している。

遺物出土状況 北溝から411点、南溝から3,334点の遺物が出土したが、南溝では特に埋土下層でまとまって出土し、供献された土器が周溝内に転落したものと思われる。南溝の埋土上層からは木製品や時期的にやや新しい土器が出土した。また、最上層からは須恵器片や灰釉陶器片も出土しており、Ⅲ層からⅣ層が堆積する段階でも、周溝が窪地となっていたと推定される。

北溝では、土層図における1層から4層まで（調査時取り上げ層位a層～e層）と5層以下（f層～g層）とでは遺物の様相が異なる。同様に南溝においても、1層から6層（調査時取り上げ層位a層～e層）と7層以下（f層～g層）では遺物の様相が異なり、6層を除去すると土器がまとまって出土する状況であった。



図39 SZc05遺物出土状況（1）

出土遺物 北溝出土遺物は土器9点、石器1点、木製品3点を図示した。66はI期条痕文系の壺である。67はX期の宇田甕で、口縁端部は三角形状に肥厚し、内面は浅く凹む。これら2点は埋土上層から出土した。68は壺A3類でV期～VI期と思われる。口縁部片で混入した可能性が高い。69はいわゆるS字状口縁台付甕C類と思われる。口縁部上段は外方に伸びる。肩部のヨコハケがないことから、VII期でも新しい段階のものと思われる。70もS字状口縁台付甕C類と思われる。71・72はS字状口縁台付甕の台部である。72は小型の甕である。73・74は小型の鉢である。これら7点は埋土下層から出土したもので、VII期のものが多い。

75は磨製石斧片で大型蛤刃石斧のものと思われる。76・77は埋土上層から出土した板状の構造部材で、短冊形の下端を片刃状にとがらせている。同一個体の可能性がある。78は埋土下層から出土した半割材で、上下端を一方から切断している。

SZc05 遺物出土状況

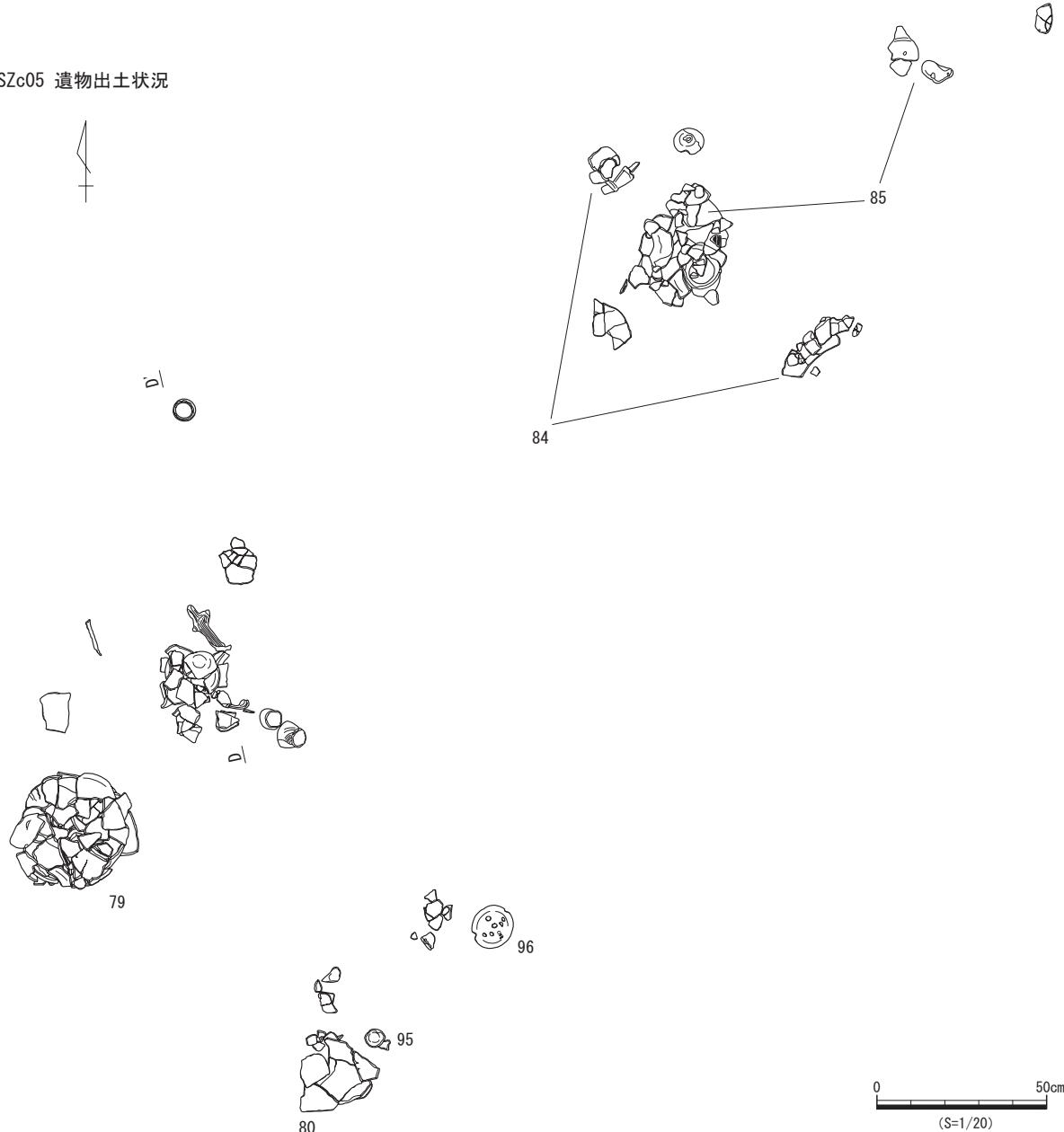


図40 SZc05遺物出土状況（2）

南溝出土遺物は土器20点、砥石2点、木製品1点を図示した。出土した遺物の時期的な傾向としては、上層がIX期以降、下層がVIII期の土器が多いが、上下層間で接合するものがある。79~81は、柳ヶ坪型壺で口縁部は二重口縁状となり、内外面に羽状施文を施す。やや下位で張るがほぼ球形の胴部で、平らな底部がわずかに突出する。頸部には断面三角形の突帯を巡らせ、上胴部には浅いハケ状の横線文を施す。80と81は形状や胎土が非常によく似た個体である。82と83は口縁部がやや受口状となる壺である。84は二重口縁壺であるが、口縁部を欠く。底部と胴部は接合していないが、胎土・色調などから同一個体と判断した。底部は凹み底で、胴下半部は粘土接合部での剥離が顕著である。頸部は比較的直線的に立ち上がり、口縁部は屈曲して開く。頸部には刻みを付けた突帯を巡らせ、上胴部には放射状にハケ状の沈線を施す。85は球形の胴部に短い口縁部が立ち上がる台付き壺で、短い脚は大きく開く。口縁部内外面と胴部外面には赤彩が認められる。86は口縁部が直線的に立ち上がり、やや胴部が張る直口壺である。87は小型壺の口縁部から胴部で、口縁部は大きく開く。胴部はやや扁平である。

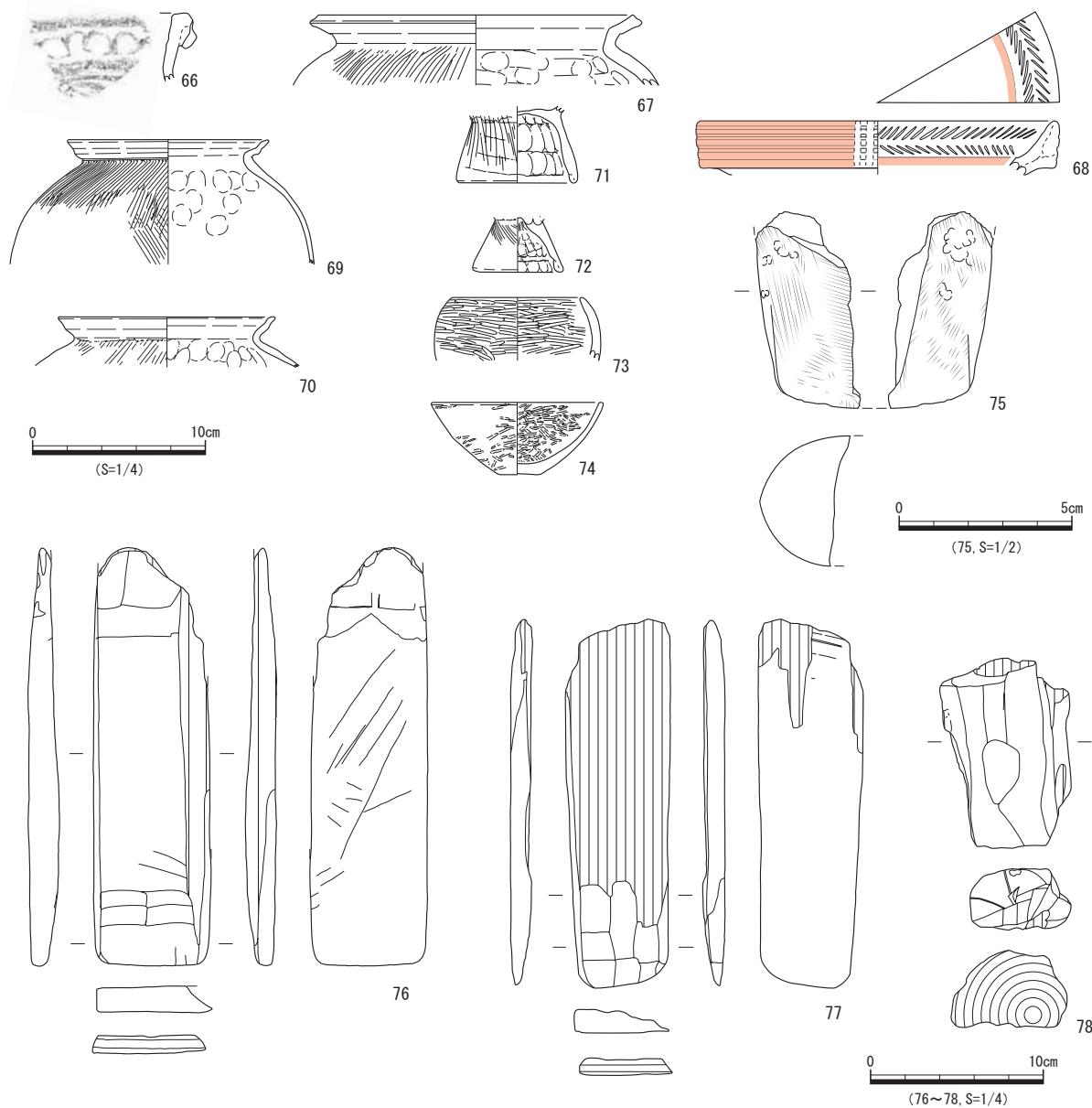


図41 SZc05北溝出土遺物

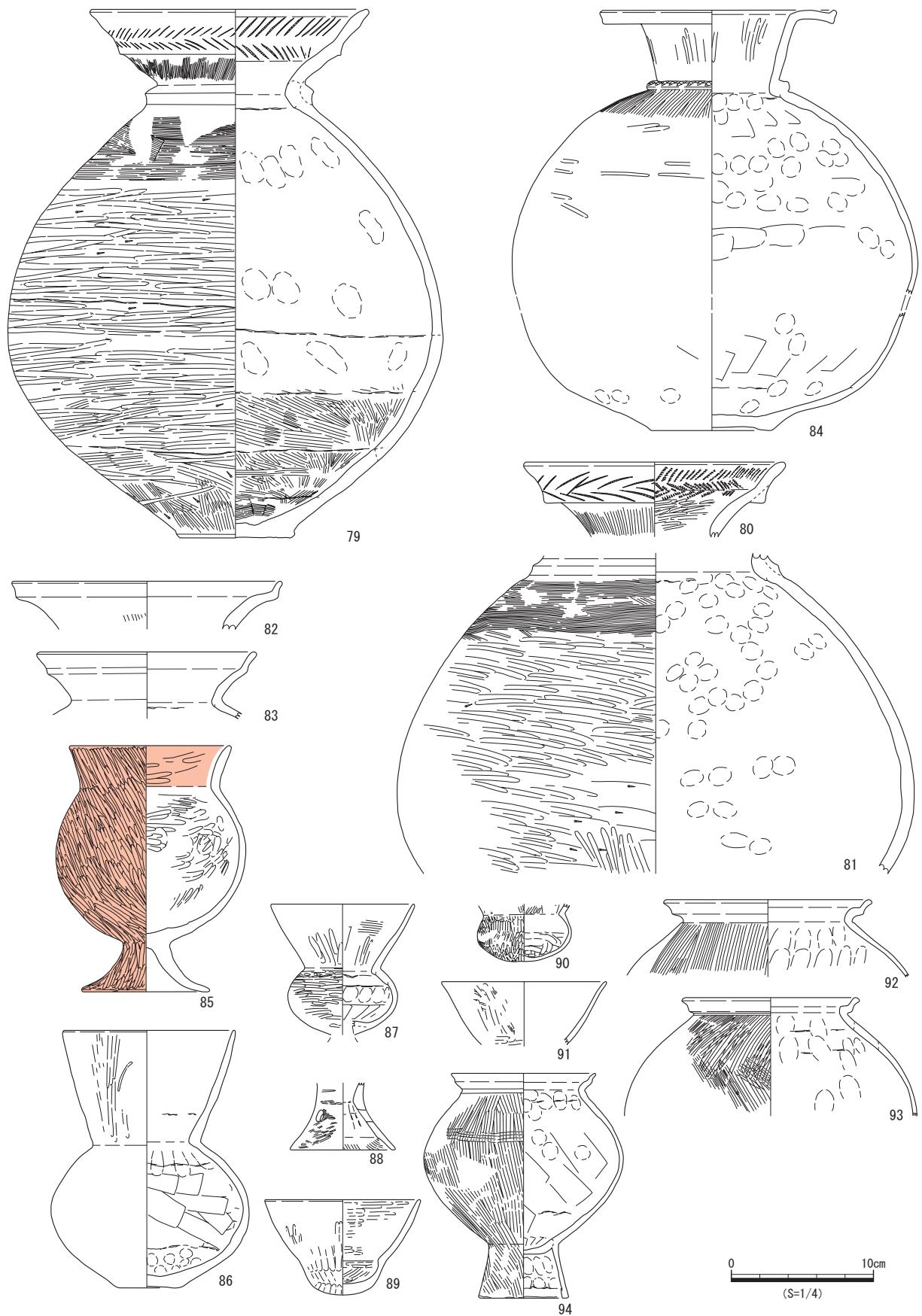


図42 SZc05南溝出土遺物（1）

が、底部の剥離状態から、脚部が付くものと思われる。88は小型壺の脚部と思われる。89~91は小型丸底壺である。92・93は、S字状口縁台付甕D類である。94は小型のS字状口縁台付甕で、胴部は中位で張る。上胴部のヨコハケは痕跡的に認められる。外面には煤が付着せず、未使用か。台部は胴部に比べて器壁が厚い。95は、S字状口縁台付甕の底部に穿孔を開けたものである。96は基部から円錐形に開く、高坏脚部である。97・98は脚部が裾部で屈折して開く高坏で、97は坏部が碗状となり、98は直線的に開く。

99は小型の手持ち砥石、100は砥石としたが、表裏面に磨面と敲打痕がある。101は平面形が長方形と思われる、短い脚がハの字に開く椅子である。

時期 周溝内下部から出土した79や83~85などから、VII期末からIX期において造営され、土器が供献されたものと思われる。

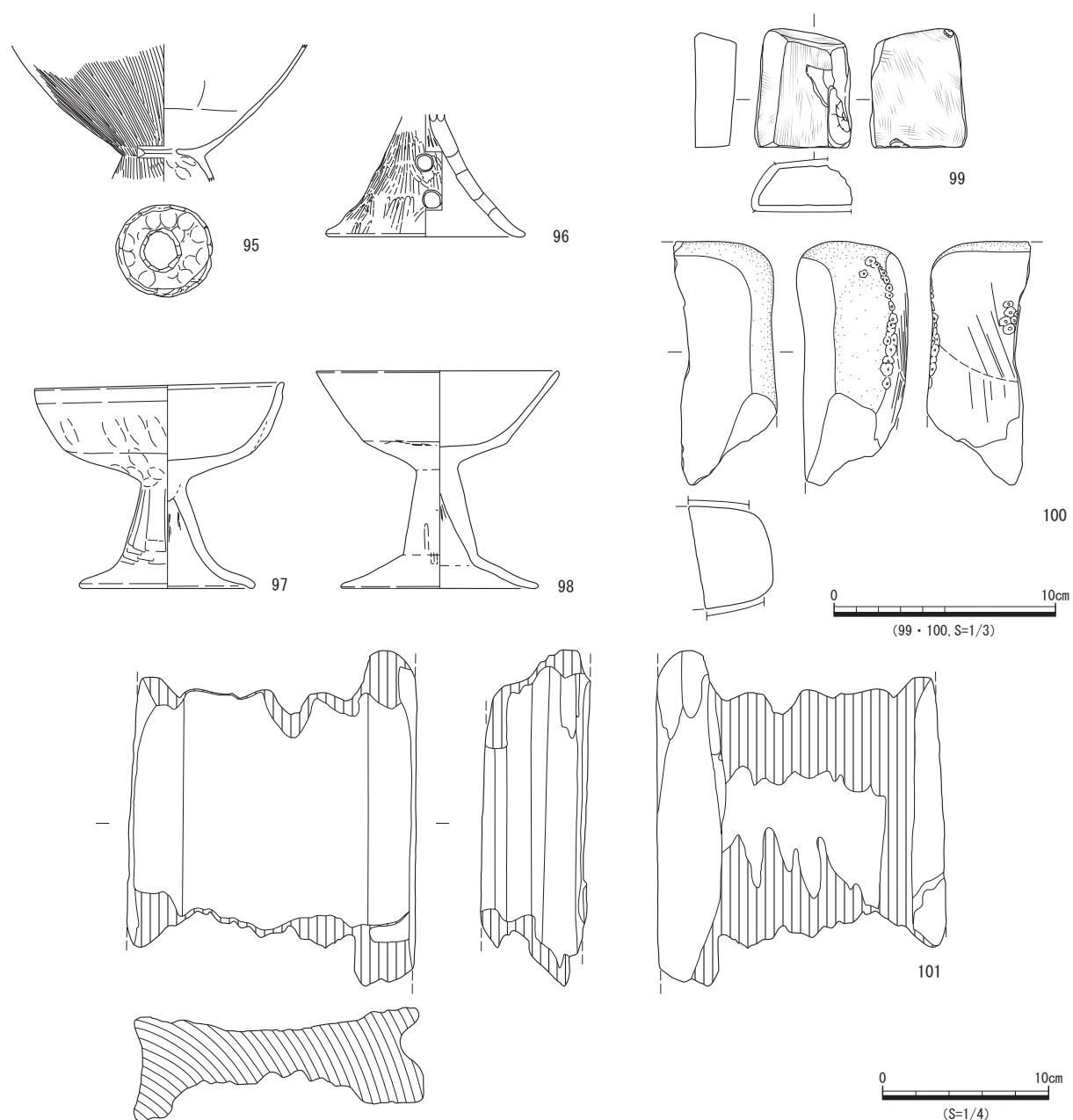


図43 SZc05南溝出土遺物（2）

SZc06 (図44)

検出状況 IV層が残存しない場所にあり、V層上面で検出した。土壤化のために平面形が不明瞭であるが、L字形に屈曲した状況が確認できた。大半が発掘区外となるため、全体の形状は不明であるが、溝状遺構が屈曲して方形の区画を作り出すと考えられること、同様の屈曲した溝が方向をそろえて3基並ぶことから、方形周溝墓の一部と判断した。

方台部 検出した範囲では、東辺部はやや湾曲しているが、方形若しくは長方形の方台部と思われる。

主体部は確認できなかったが、B-B' 土層図において墳丘盛土と思われる堆積をわずかに確認した。

周溝 東溝及び南溝の一部を検出した。南溝は比較的直線的となるが、東溝はやや湾曲している。断面形は逆台形で、埋土もほぼ水平に自然堆積した状況を示している。

遺物出土状況 170点の遺物が出土したが、埋土上層から山茶碗や灰釉陶器片が1点ずつ出土している他、各土層から土器片が散在して出土した。また、叩石が2点出土した。

出土遺物 埋土中からは縄文土器片やII期の弥生土器片が目立つが、いずれも小片で摩滅している。

弥生土器を1点図示した。102は、最も遺存状態のよい土器片で、III期の壺の胴部片と思われる。胴部が強く張り、粗いハケ目調整を施す。

時期 周溝埋土から出土した土器の中で、最も遺存状態の良い土器がIII期のものであることから、その時期の遺構である可能性が高い。

SZc07 (図45)

検出状況 IV層が残存しない場所にあり、V層上面で検出した。土壤化のために平面形が不明瞭であるが、L字形に屈曲した状況が確認できた。大半が発掘区外となるため、全体の形状は不明であるが、SZc06と同様に並ぶことから方形周溝墓の一部と判断した。

方台部 検出した範囲では、東辺部、北辺部とも比較的直線的であることから、方形若しくは長方形の方台部と思われる。主体部は確認できなかったが、B-B' 土層図において墳丘盛土と思われる堆

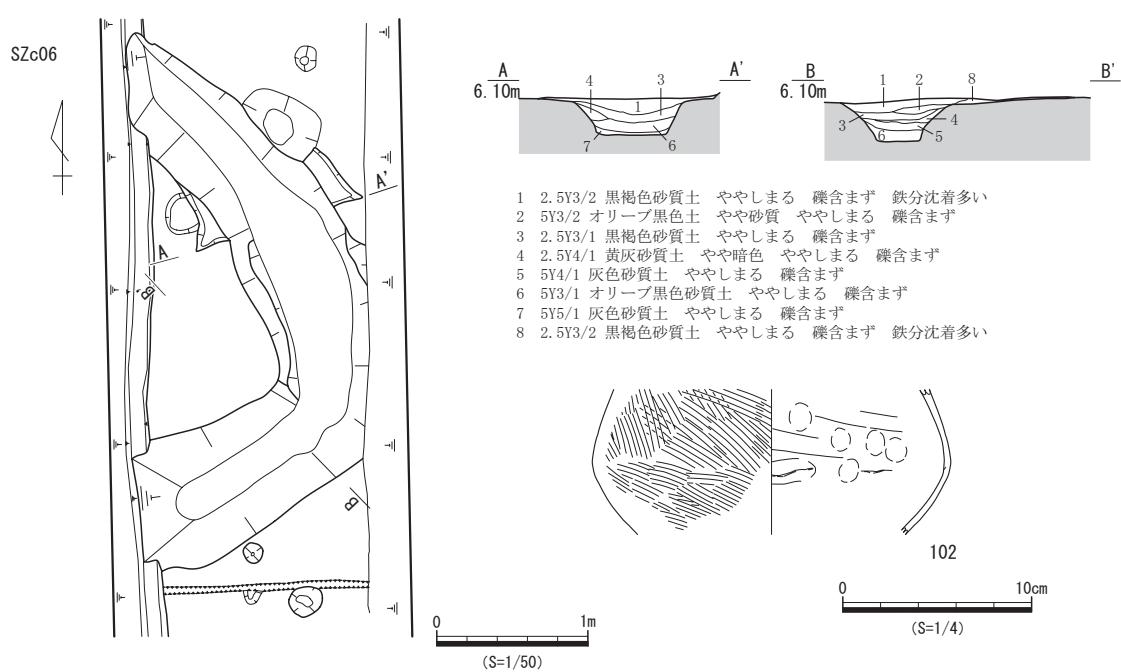


図44 SZc06

積をわずかに確認した。

周溝 東溝及び北溝の一部を検出した。どちらの溝も比較的直線的で、断面形は逆台形である。埋土は、下部に壁面の崩落土をブロックで含む堆積があるが、ほぼ水平に自然堆積した状況を示している。

遺物出土状況 32点の土器片が出土したが、各土層から土器片が散在して出土した。小破片が多く図示可能な土器はないが、弥生時代中期の土器片が含まれている。

時期 周溝埋土から出土した土器に弥生時代中期のものがあること、SZc06との位置関係から弥生時代中期のものと思われる。

SZc08 (図45)

検出状況 IV層が残存しない場所にあり、V層上面で検出した。土壤化のために平面形が不明瞭で、当初は2条の溝と認識していたが、直交する位置関係にあり、掘削する中でコーナー部の確認もできたことから、L字形に屈曲した溝であることが判明した。大半が発掘区外となるため、全体の形状は不明であるが、SZc06やSZc07と同様に並ぶことから方形周溝墓の一部と判断した。

方台部 検出した範囲では、東辺部、南辺部とも比較的直線的であることから、方形若しくは長方形の方台部と思われる。墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝 東溝及び南溝の一部を検出した。どちらの溝も比較的直線的で、壁面の傾斜は比較的緩い。埋土は、壁面の崩落土をブロックで含む堆積があるが、ほぼ水平に自然堆積した状況を示している。

遺物出土状況 90点の土器片が出土したが、各土層から土器片が散在して出土した。小破片が多く図

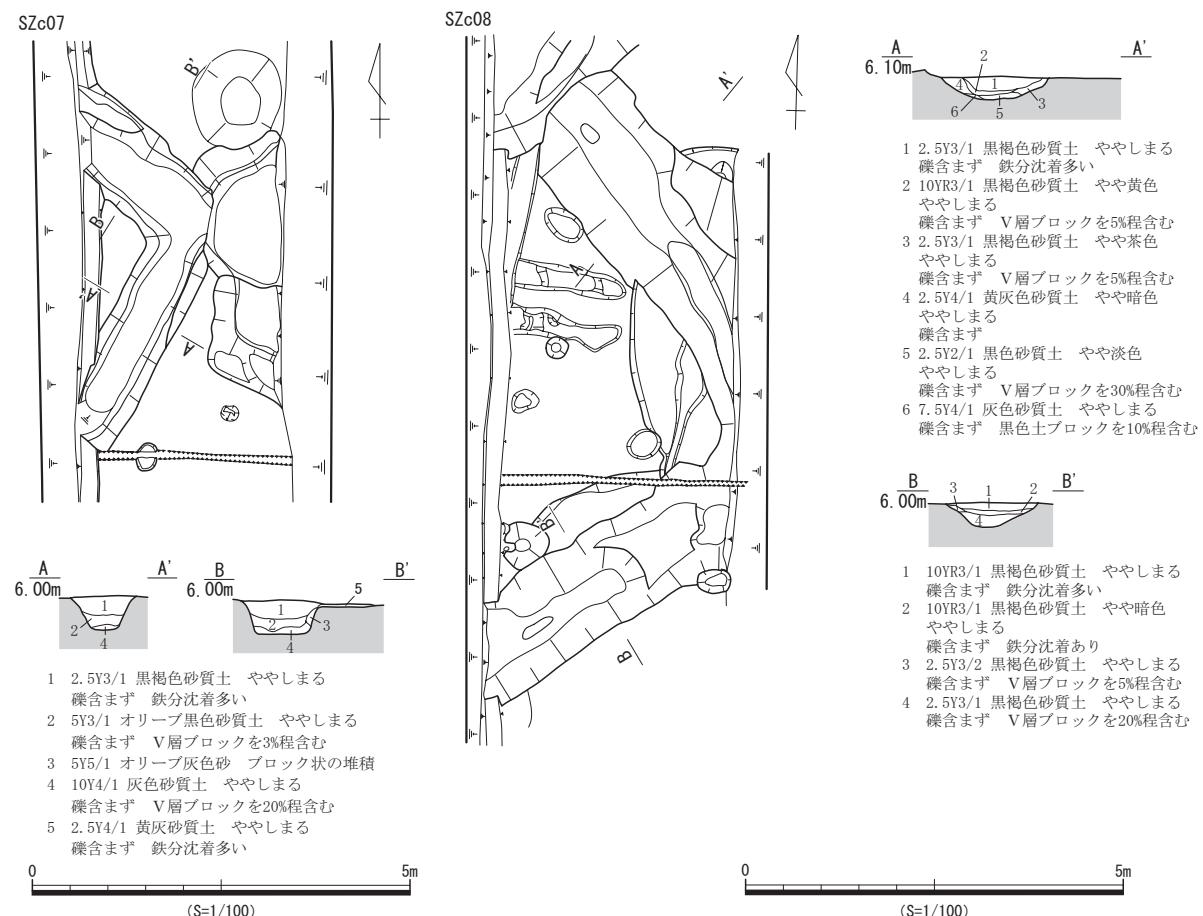


図45 SZc07・SZc08

示可能な土器はないが、下層には弥生時代中期頃と思われる土器片が含まれている。また、叩石が1点埋土上部から出土した。

時期 周溝埋土から出土した土器に弥生時代中期のものがあること、SZc06やSZc07との位置関係から弥生時代中期のものと思われる。

SZc09 (図46)

検出状況 IV層を除去した後、V層上面で検出した。SDc031が西側に位置し、そこに向かってやや傾斜するためか、屈曲する溝状遺構として検出されたが、土層堆積状況や完掘状況から2条溝状遺構が斬り合うと判断した。屈曲して発掘区外に広がる溝を、方形周溝墓の一部と判断した。

方台部 検出した範囲では、北辺部、東辺部、西辺部とも比較的直線的であることから、方形若しくは長方形の方台部と思われる。なお、北西隅部はやや丸みを持つ。墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝 南溝及び西溝と東溝の一部を検出した。どの溝も比較的直線的で、断面形が逆台形となる。北溝は、SDc044によって削平されている。埋土は、下部に壁面の崩落土をブロックで含む堆積があるが、ほぼ水平に自然堆積した状況を示している。

遺物出土状況 57点の土器片が出土したが、SDc044との区別ができるていない。各土層から土器片が散在して出土した。小破片が多く図示可能な土器はない。

時期 周溝埋土から出土した土器では時期決定できないが、周囲の方形周溝墓がいずれも弥生時代中期のものであることから、同様の時期のものである可能性が高い。

SKc0299 (図47)

検出状況 IV層が残存しない場所にあり、V層上面で検出した。土壤化のために平面形が不明瞭で、当初は方形の竪穴状の遺構と考えたが、南部がやや深くなる土坑である。発掘区外に広がるため、形状は不明であるが、方形に近い形状のものであろうか。埋土はほぼ水平に砂質土が堆積しており、自然堆積の可能性が高いと思われる。付属する遺構もなく、性格不明の穴である。

遺物出土状況 埋土中から散在して48点の土器片が出土した。弥生時代～古墳時代の土器は各層から、上部では須恵器片と灰釉陶器片が1点ずつ、下部では縄文土器片が出土したが、図示可能な土器片はなかった。なお埋土2層から石鏸が出土した。

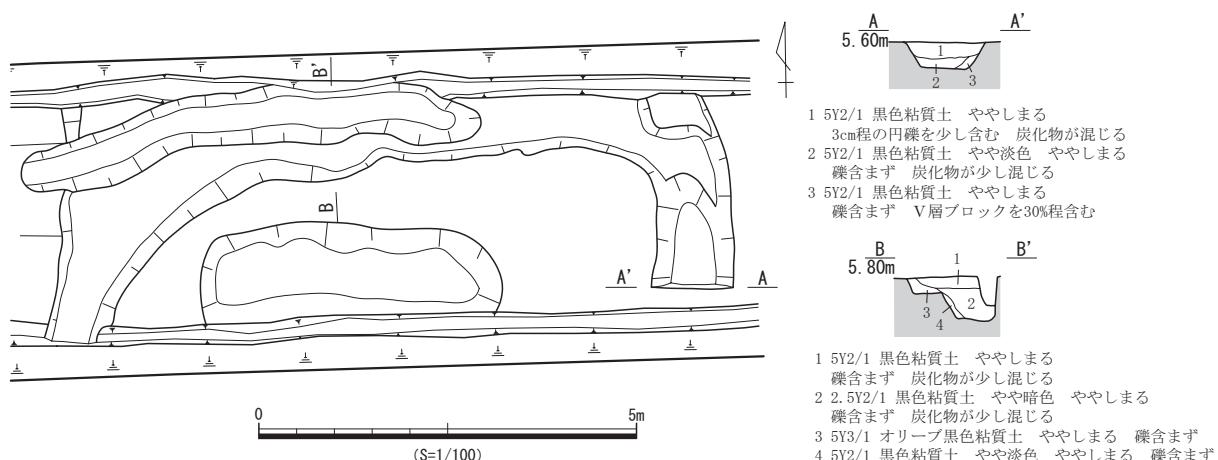


図46 SZc09

出土遺物 103は、先端部を欠く凸基打製石鏃で、弥生時代中期頃のものであろうか。

時期 出土遺物は小片のみであるが、灰釉陶器片があることから、古代以降と思われる。

SKc0300 (図47)

検出状況 IV層が残存しない場所にあり、V層上面で検出したが、土壤化のために平面形が不明瞭であった。発掘区外に広がるため、形状は不明であるが、橢円形若しくは不整方形に近い形と思われる。埋土はほぼ水平に堆積している。SKc0308は、土器の出土状況などから墓坑の可能性があり、それと

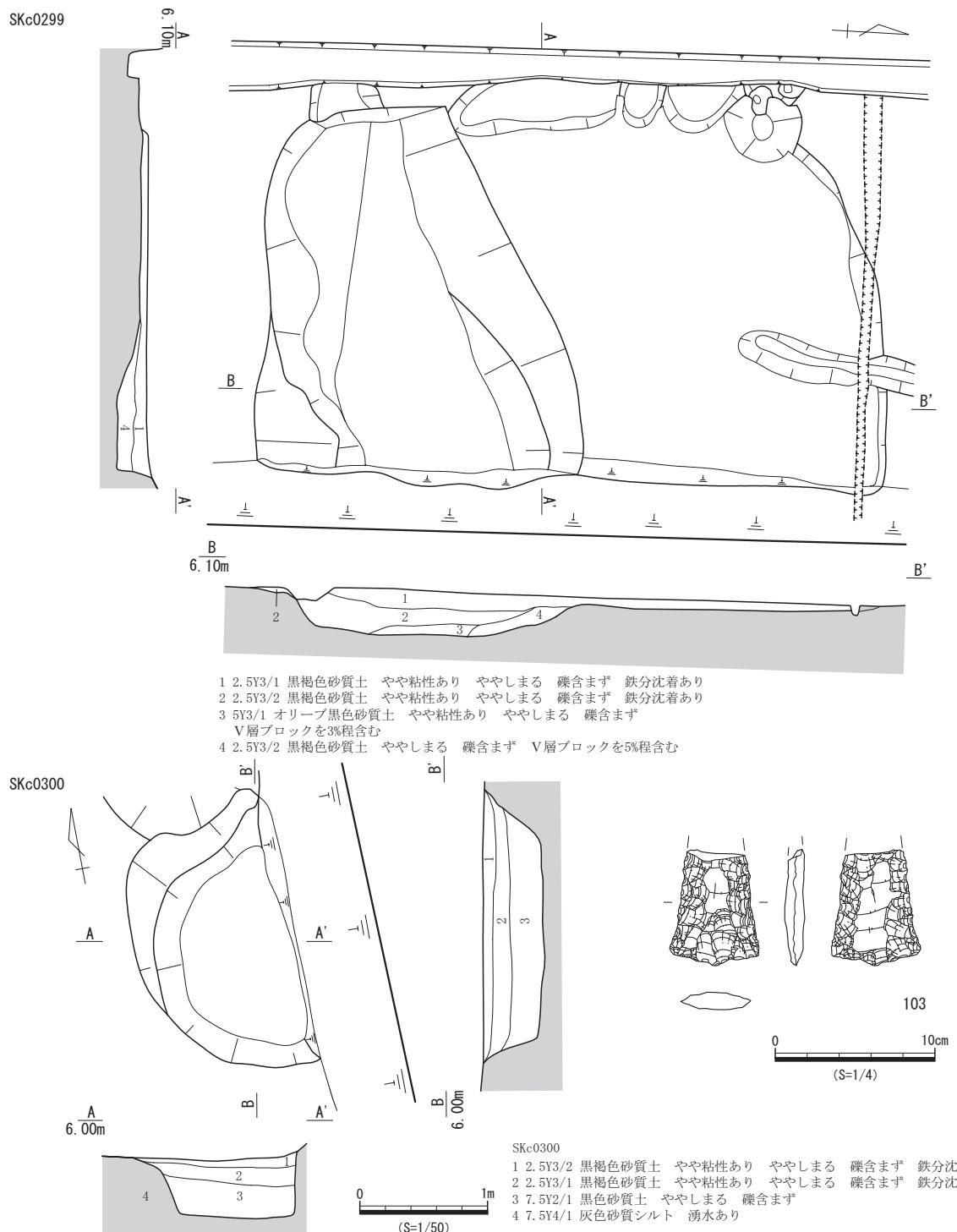


図47 SKc0299・SKc0300

一部重複するように掘削され、深さや埋土堆積状況が似ていることから、この土坑も墓坑の可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土中から散在して23点の土器片が出土した。弥生時代～古墳時代の土器は各層から出土したが、図示可能な土器片はなかった。

時期 出土遺物は小片のみであるが、SKc0308との先後関係から、VI期～VII期の可能性が考えられる。

SKc0308 (図48)

検出状況 IV層が残存しない場所にあり、V層上面で検出した。平面形は比較的明瞭であったが、発掘区外に広がるため、形状は不明であるが、方形若しくは長方形に近い形状のものであろうか。埋土はほぼ水平に堆積している。遺物出土状況から、墓坑の可能性が考えられる。

遺物出土状況 図示したように大型の土器片が、埋土2層上面で内面を上にして出土した。意図的に配置した可能性が考えられることから、埋葬に伴う儀礼的なものと思われる。他には埋土中から散在して、36点の土器片が出土したが、図示可能な土器片はなかった。

出土遺物 104は、VI期～VII期と思われる壺の胴部下半から底部である。胴部の張りはあまり強くなく、胴部下半には叩き痕が残る。

時期 図示した土器からVI期～VII期と思われる。

SKc0325 (図48)

検出状況 07_8地点北部に位置し、IV層除去後にV層上面で検出した。平面形は比較的明瞭であった

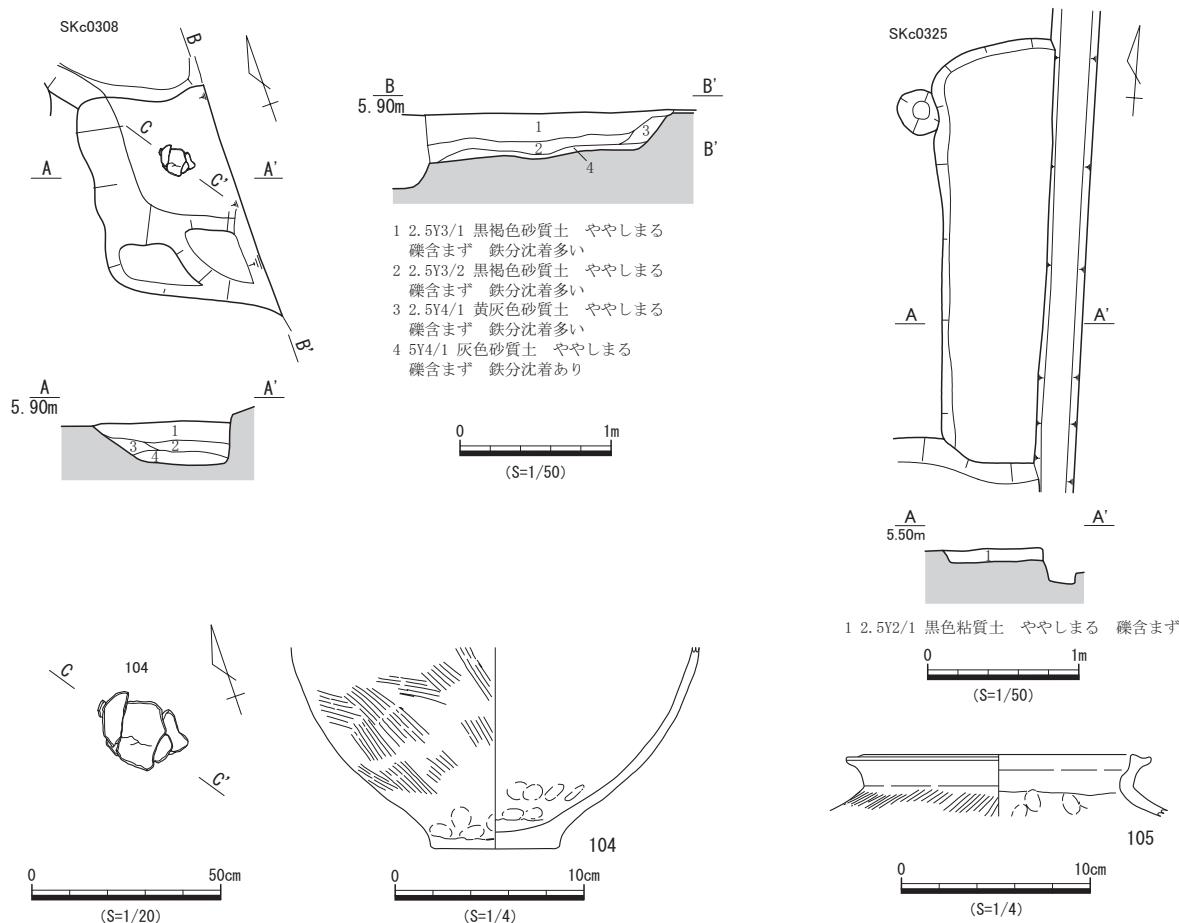


図48 SKc0308・SKc0325

が、発掘区外に広がるため、形状は不明である。方形若しくは長方形に近い形状のものであろうか。埋土は単層である。竪穴住居跡の可能性も検討したが、柱穴と思われるものが確認できなかつたため、性格不明の穴である。

遺物出土状況 埋土中から散在して59点の土器片が出土したが、1点のみ図示した。

出土遺物 105は、X期のいわゆる宇田甕で、口縁端部の外側がつまみ出されたようになる。器壁はやや薄い。

時期 図示した土器からX期と思われる。

SKc0358（図49）

検出状況 07_7地点北西部に位置し、IV層除去後にV層上面で検出した。平面形は比較的明瞭であったが、検出時に円礫が立石状に出土したが、砥石と思われるもので、意図的に配置されたとも考えられるが、単に混入しただけの可能性がある。浅い穴で性格不明である。

遺物出土状況 埋土中から散在して58点の土器片が出土したが、1点のみ図示した。

出土遺物 106は、V期～VII期の甕E6類で、口縁部が短い。

時期 図示した土器からV期～VII期と思われる。

SKc0387（図49）

検出状況 07_7地点南部に位置し、IV層除去後にV層上面で検出した。平面形は不明瞭で、掘削時に重複する別の遺構も掘り下げてしまった。発掘区外に広がるため形状は不明であるが、やや丸みがある方形に近い形状であろうか。埋土は単層で浅く、性格不明の穴である。

遺物出土状況 埋土中から散在して415点の土器片が出土したが、小破片が多く、1点のみ図示した。

出土遺物 107は、VIII期と思われる高坏で、坏底部径が小さく坏部は大きく開く。脚部は接合部からすぐに開き、円形の透かし孔を3方向から開ける。

時期 図示した土器の他、S字状口縁台付甕C類やD類の破片が出土しており、VIII期～IX期と思われる。

SKc0389（図49）

検出状況 07_7地点南部に位置し、IV層除去後にV層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。径0.3mほどの小穴であるが、甕台部の出土状況から地鎮のような性格が考えられる。

遺物出土状況 甕台部の他、埋土中から散在して17点の土器片が出土したが、小破片が多く、甕口縁部と台部の2点を図示した。甕の台部は、穴の底に横にして置かれたように出土した。

出土遺物 108はS字状口縁台付甕C類の口縁部で、VIII期のものである。109はS字状口縁台付甕の台部である。

時期 図示した土器からVIII期と思われる。

SKc0401（図50）

検出状況 07_7地点南部に位置し、IV層除去後にV層上面で検出した。平面形は不明瞭であった。発掘区外に広がるため形状は不明であるが、長さ5.98mの大型の土坑である。埋土中から多くの遺物が出土しており、廃棄土坑の可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から散在して572点の土器、2点の叩石が出土した。小破片が多く、底面近くから出土した甕や埋土上部から出土した高坏、鉢を図示した。

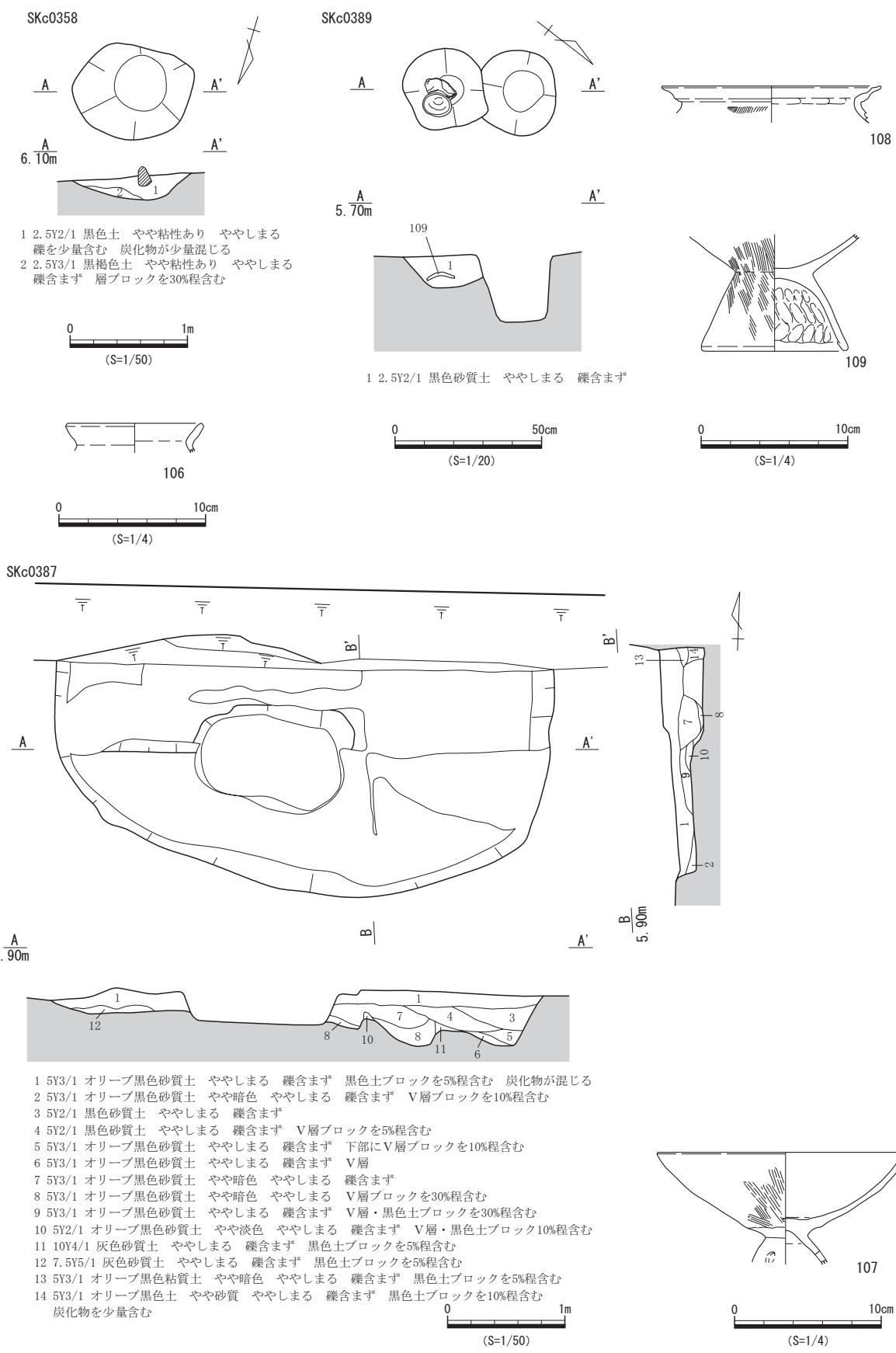


図49 SKc0358・SKc0387・SKc0389

出土遺物 110はS字状口縁台付甕C類である。胴部は肩でやや張っており、上胴部にヨコハケを施す。111は小型の鉢で、口縁部径が胴部径よりも大きくなる。口縁部は短く開き、平底である。112は大きく壺部が開く高壺である。いずれもⅧ期のものと思われる。

時期 図示した土器からⅧ期と思われる。

SDc029 (図51)

検出状況 07_7地点の北西部に位置し、V層上面で検出した。他の遺構との重複により、平面形はやや不明瞭であるが、幅4.73mの東西方向の溝状遺構と判断したが、西側はIV層上面の遺構に削平されしており、東側の一部を確認できただけであった。なお、IV層が残存していない場所であることや、他の遺構との重複関係からV層上面の遺構として調査を行ったが、埋土中から出土した遺物には古代から中世のものが含まれることから、IV層上面の遺構とすべきであった。埋土は6層に分層したが、2条の溝をひとまとめにした可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土中に散在して出土したが、弥生時代中期から中世に至る各時代の遺物がある。図示した灰釉陶器は最上層から出土した。

出土遺物 出土した土器のうち灰釉陶器皿（113）を実測した。口縁部が外反する。

時期 図示した灰釉陶器の他に、山茶碗片が出土していることから、中世頃のものと思われる。

SDc030 (図51)

検出状況 07_8地点の北部に位置し、V層上面で検出した。南東から北西方向に検出した、幅5.62mの溝状遺構である。埋土は4層に分層したが、水流があったことを示すような砂質土の堆積は認めら

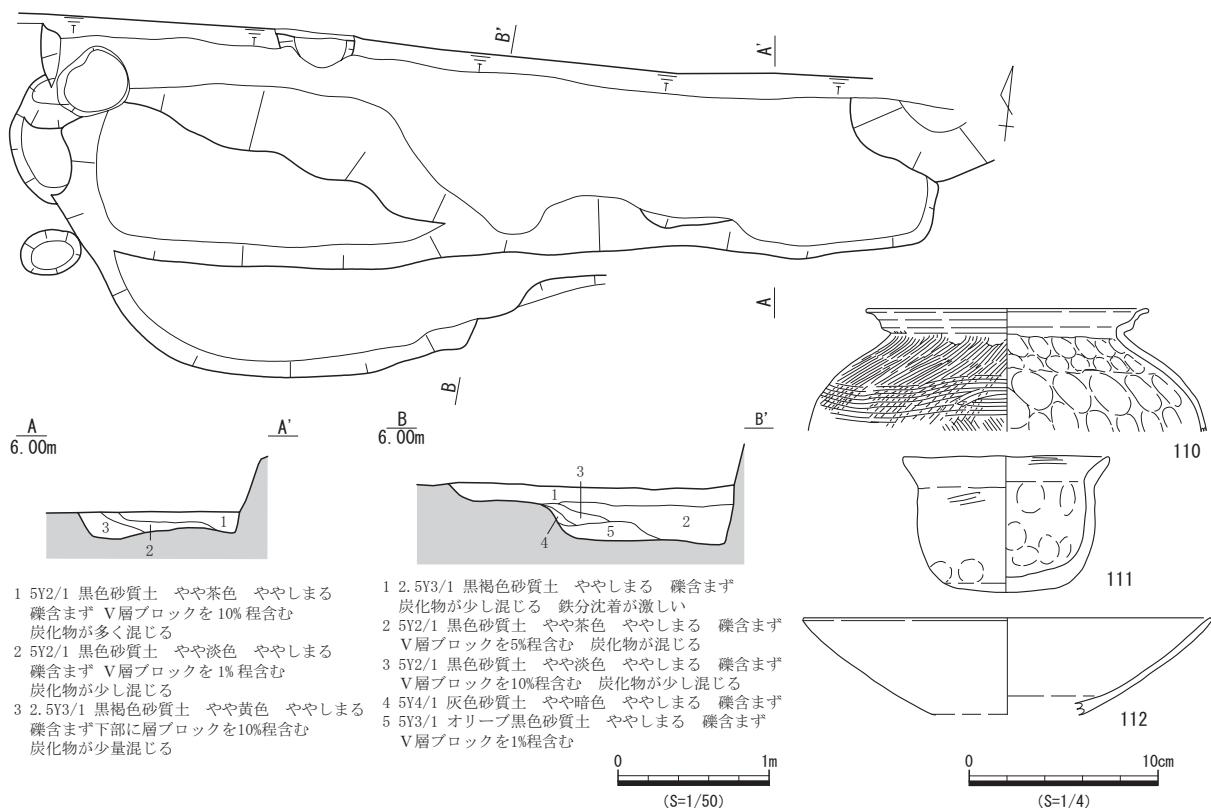


図50 SKc0401

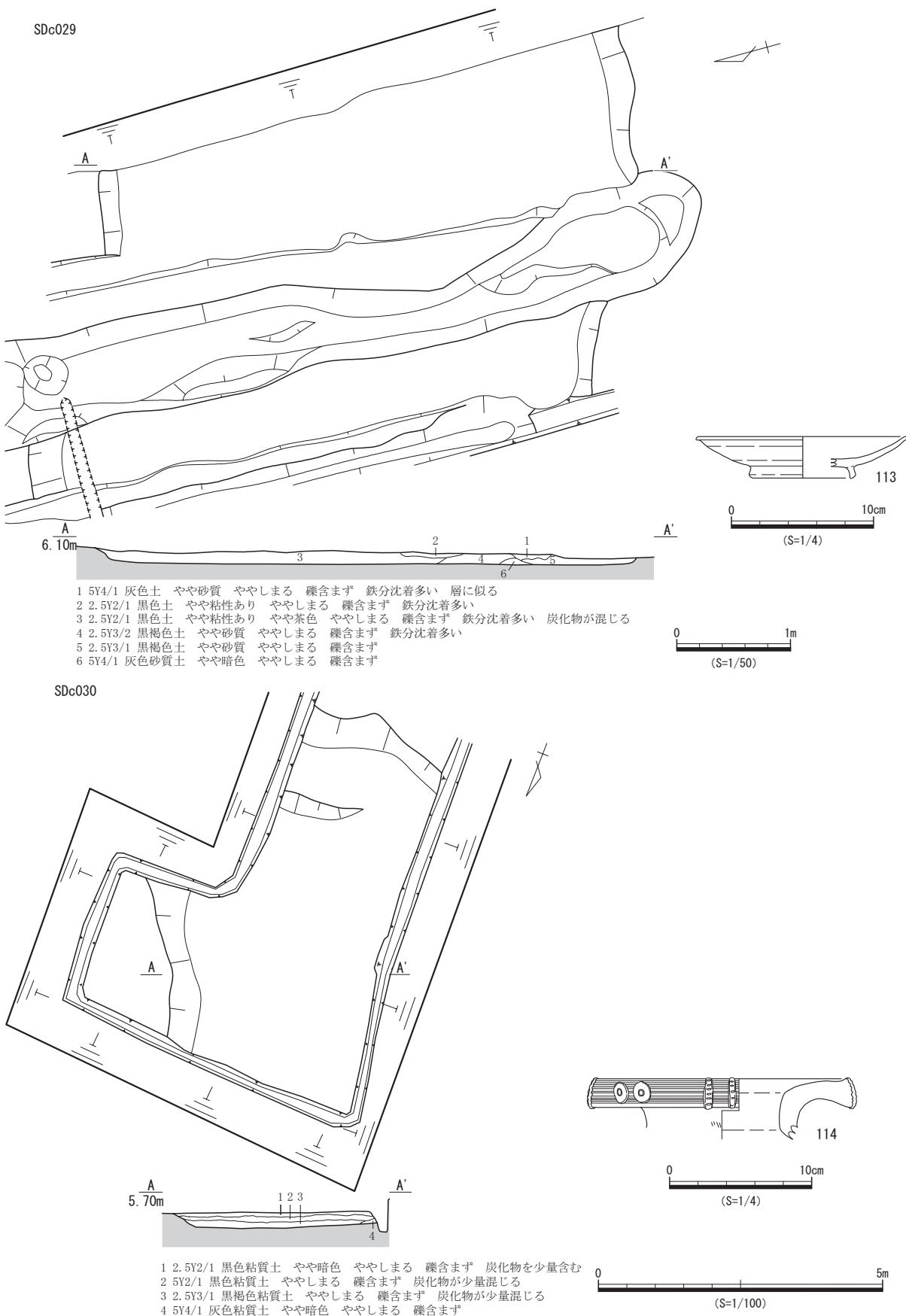


図51 SDc029・SDc030

れなかった。東側は09_9地点で同様の溝状遺構を確認していないが、西側はSDc031に向かっている可能性が高いと思われる。

遺物出土状況 埋土中にVI期の土器が散在して出土したが、細片が多く、図示できたのは壺1点だけであった。

出土遺物 114はVI期壺A4類で、口縁部内面の文様帯が平坦となるが、無文のままである。口縁端部は擬凹線を施し、その上に浮文を貼り付けている。

時期 図示した土器からVI期と思われる。

SDc031北部（図52～図56）

検出状況 SDc031は、発掘区の形状がコ字形となる07_7地点の北部及び南部において、V層上面で検出した溝で、幅10m、深さ1.8mを超える規模の大きなものである。また、国道21号北側のB地区や大垣市教委調査で検出した同様の規模の溝が、丁度南北方向に連続するような位置関係にあること、埋土の堆積状況や出土遺物の内容など、類似点が多く見られることから、遺跡東部を南北に貫く大溝と判断した。また、07_4・5地点と09_20地点においても、この延長部分を検出している。このため、同じ遺構とは思われるが、検出場所が調査地点ごとに離れることから、07_7地点北部をSDc031北部、07_7地点南部をSDc031中部、07_4・5地点と09_20地点で検出した部分については、SDc031南部（第4章第5節）としてそれぞれ説明する。

SDc031北部を検出した場所は、地形が西から東へ非常に緩やかに傾斜している。IV層除去後に西側の平面形は比較的明瞭であったが、東側は他の遺構との重複もあり不明瞭であった。幅13.13m、深さ1.88mで、壁面は比較的緩やかに傾斜している。埋土は26層に分層したが、植物遺体や砂の混在状態、土色から大きく三分でき、出土遺物においても時期的な差を認めることができる。土層図1層から4層は基本層序のⅢ層とⅣ層に該当する。上層は、土層図1層から8層で、遺物取り上げ時の区分はa層からe層が概ね対応する。黒色から黒褐色の粘質土で植物遺体が含まれる部分がある。遺物はVII期からX期のものがある。なお、a層とb層は、この溝の埋没後に窪地となったところに堆積したⅢ層とⅣ層であり、c層からe層についても溝が埋没する最終段階の埋土と思われる。中層は9層から17層で、遺物取り上げ時の区分はf層から1層が概ね対応する。黒色やオリーブ黒色の粘質土、砂質土で、植物遺体を多く含む。特に17層は植物遺体が集積したような堆積であった。遺物はV期からVI期のものが主で、木製品が多く出土したのもここからである。下層は18層から30層で、遺物取り上げ時の区分はk層及びm層からn層が対応する。黒色やオリーブ黒色、灰色の粘質土、砂質土、砂層があり、ラミナ状の堆積も確認できることから、水流があったことが確認できる。しかし、17層の堆積時には植物遺体が集積される状態であり、その後の土層堆積状態からも下層に見られるような水流はあまりなく、何らかの原因で止水され、沼地状態になった可能性が考えられる。13層及び18層をk層として遺物取り上げを行っており、IV期の遺物を中心としてV期のものがある。

遺物出土状況 埋土中から多量の土器や木製品が出土したが、土器類は上層が最も多く、木製品類は中層に多い。これらの遺物は、意図的に配置された状況のものはなく、溝内に廃棄されたものと思われる。なお、発掘区南壁において、13層中で器台と鉢が組み合った状態で出土した。

出土遺物 115～118は、下層から出土したIV期の土器である。115は大型の壺A1類で、口縁部は受口状に屈曲し、外面に凹線文を施す。頸部にも横線文や刺突文を施す。IV-2期と思われる。116は胴部

から底部片で、平らな底部から胴部がすぐに開く。最大径は中位にあり、浅い沈線で横線文や羽状文を施す。117と118は甕A2類で、口縁部が屈曲して開き、口縁端部に刻みを施す。胴部は叩きの後ハケ目調整を施す。IV-3期頃のものであろうか。

119～122は、中層から出土したV期～VI期の土器である。119は平底の甕C2類で、口縁部は短いが内湾して開き、胴部は下位で張る。VI期と思われる。120は受口状口縁となる鉢A1類で、口径と胴部径に大きな差がない。口縁部外面及び上胴部に刺突文を施す。121の器台と組み合わさって出土した。121・122は器台A1b類の中空器台で、口縁部は大きく開く。V期のものと思われる。

123～136は、上層から出土したVII期～X期頃の土器である。123・124は壺I1類で、球形の胴部に短い口縁部が付く。VII期と思われる。125はIX～X期と思われる広口壺の口縁部で、直線的に開き、端

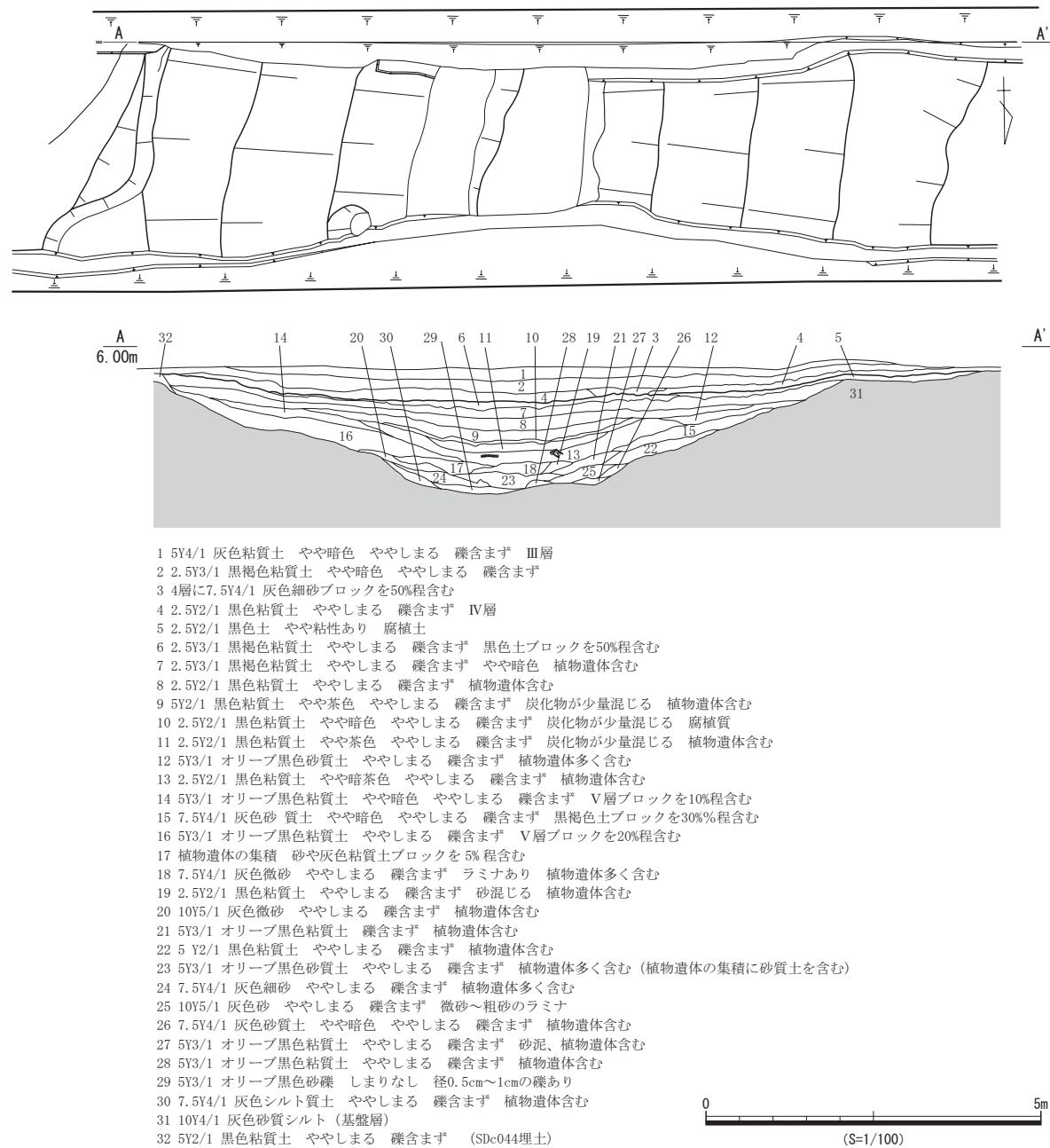


図52 SDc031北部

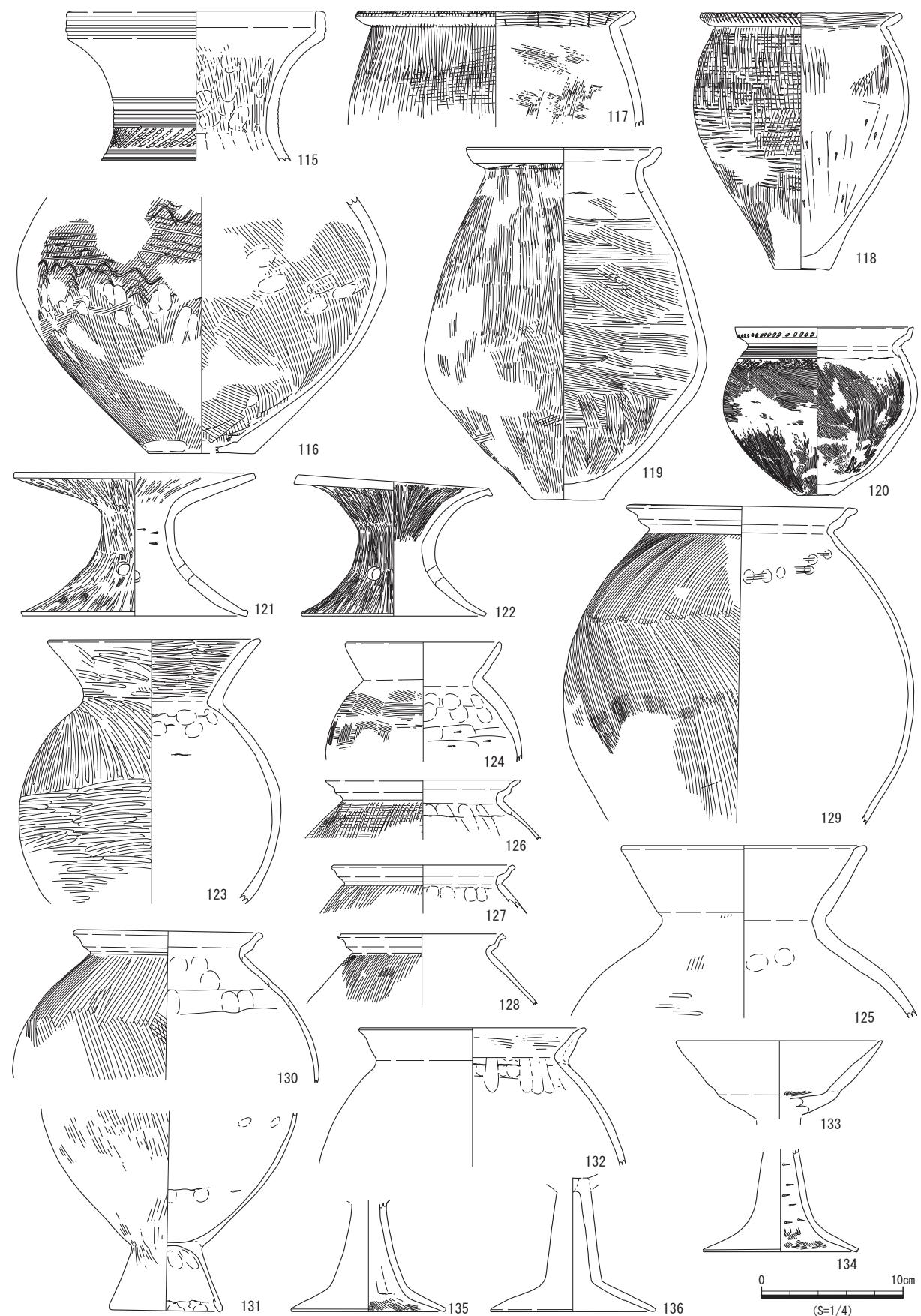


図53 SDc031北部出土遺物（1）

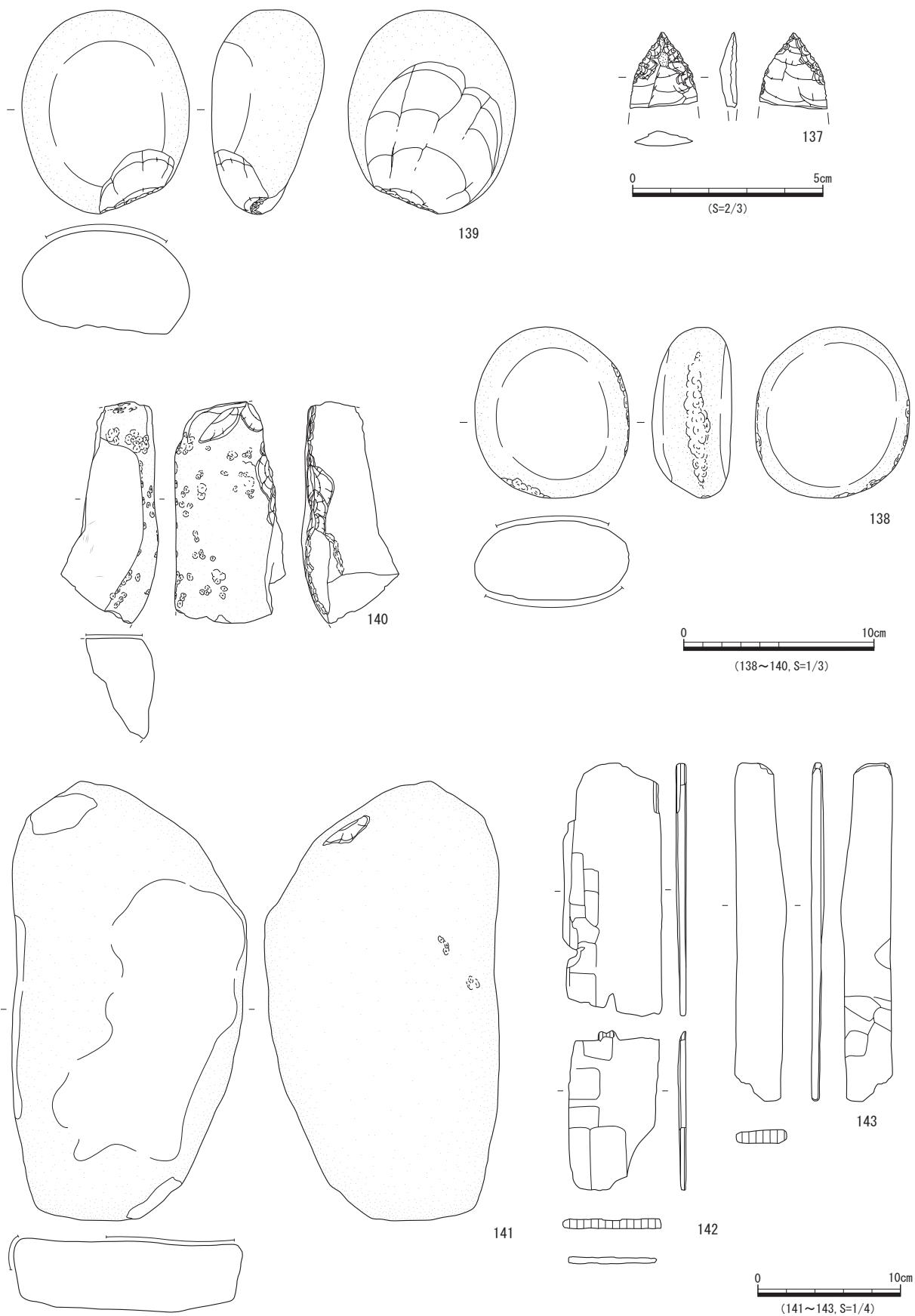


図54 SDc031北部出土遺物（2）

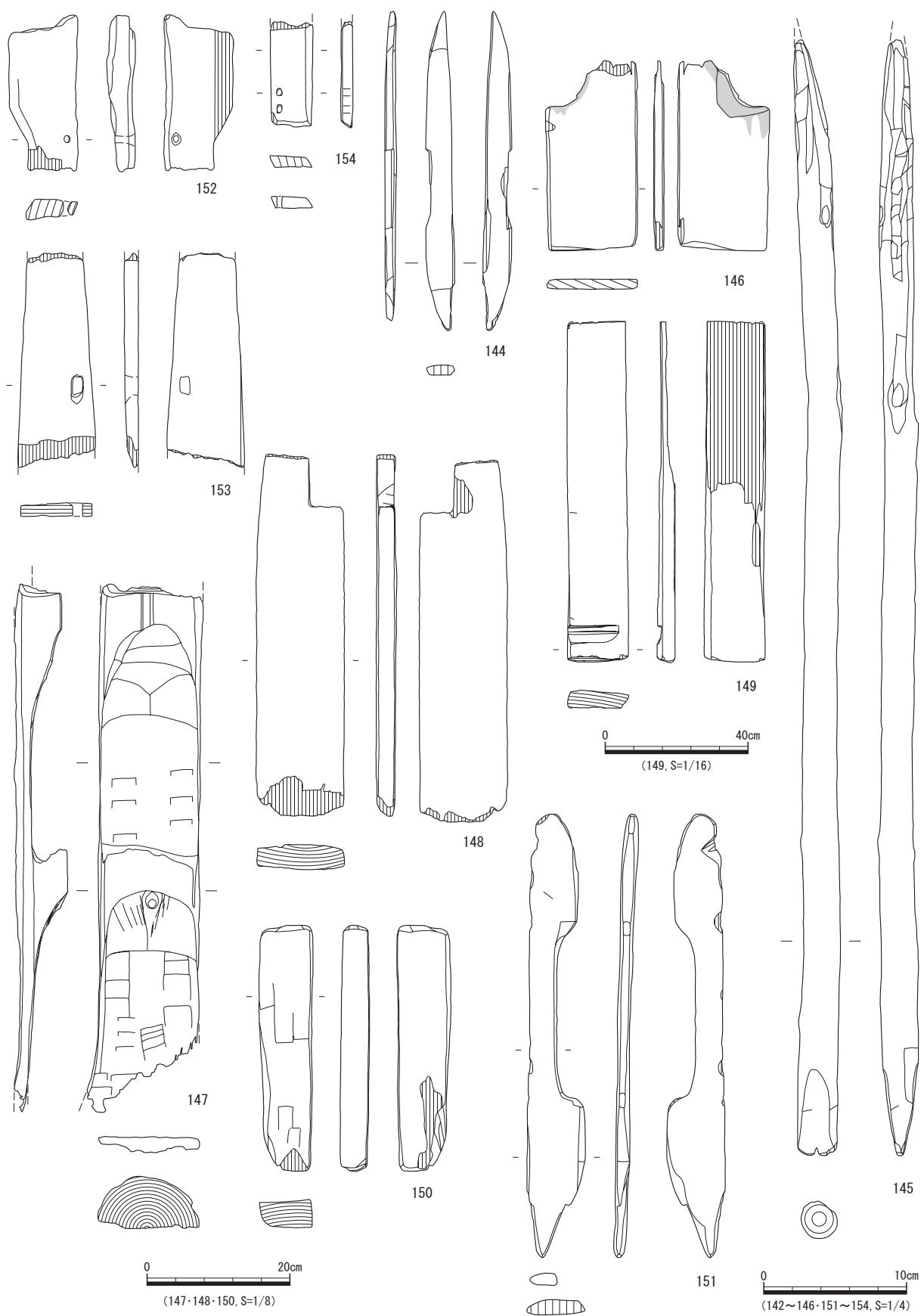


図55 SDc031北部出土遺物（3）

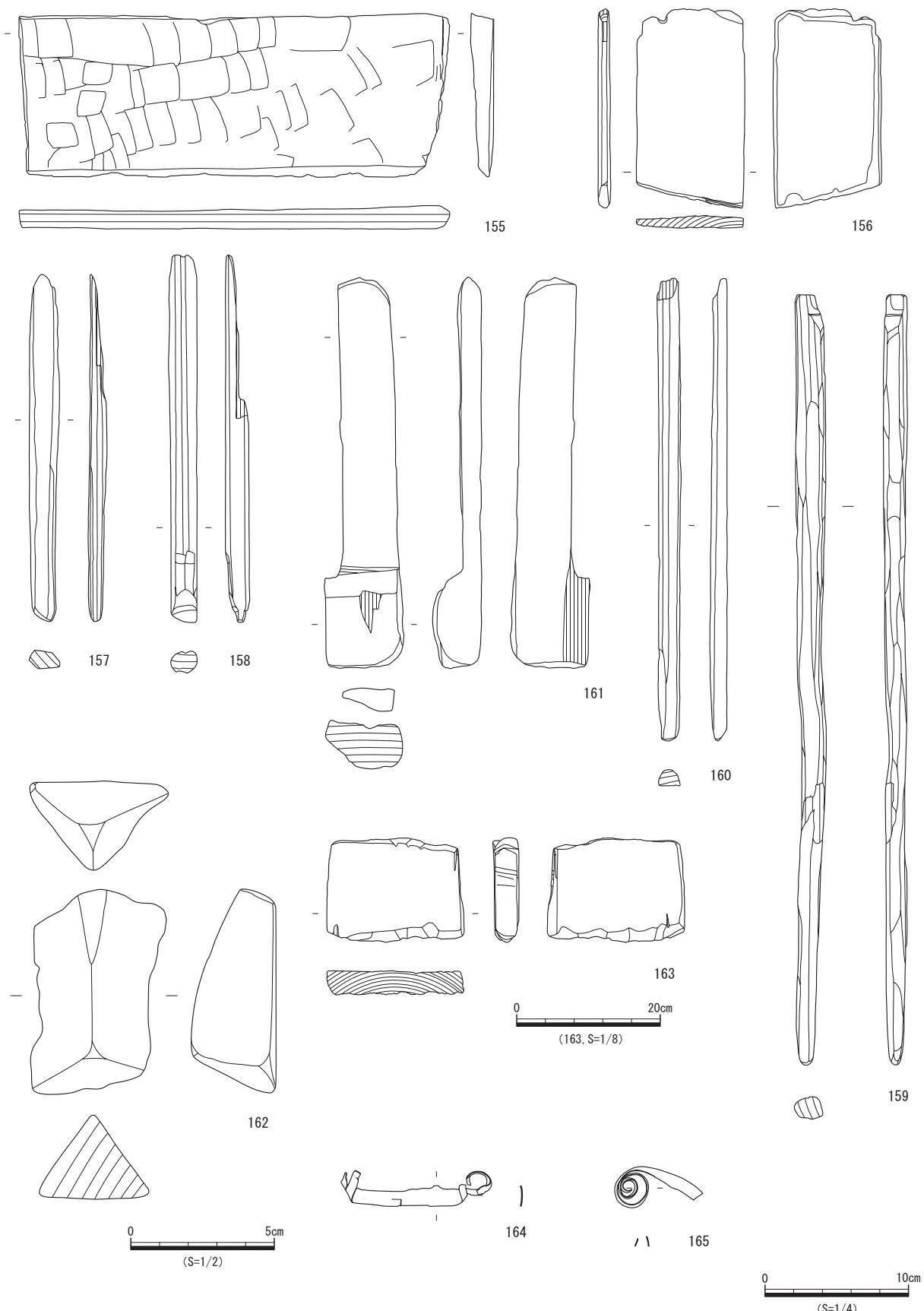


図56 SDc031北部出土遺物（4）

部は面取りする。126・127はVII期の甕D3類で、いわゆるS字状口縁台付甕B類である。なお、127は小型の甕であり、VIII期の可能性も考えられる。128はVIII期の甕で、いわゆるS字状口縁台付甕C類である。129・130はIX期の甕で、松河戸II式であろうか。131はVIII期～IX期のS字状口縁台付甕の下胴部から台部である。132は、VIII期～IX期と思われる口頸部がく字に屈曲して開く甕で、口縁端部がやや外反する。二次的な強い被熱により、器面が荒れており、灰色化している。133はIX期の高坏坏部で、直線的に開く。134～136はIX期の高坏脚部で、脚裾部が屈折して開く。

137はk層から出土した打製石鏃の先端部である。主要剥離面が大きく残る。138はb層、139・140はk層から出土した叩石で、側面に敲打痕、平坦面に砥面が認められる。140は破損した砥石を転用したと思われる。141はk層から出土した砥石で、平坦面及び側面を砥面として使用している。

142～144は、鍔・鋤類の刃先と思われるものである。145は掘棒で、芯持ち材を2方向から削り、先端を尖らせている。146は曲物側板と思われる。147は梯子であるが、両端を欠く。148～150は建築部材と思われる板材や棒状材である。151～156は加工材の板材である。側面に抉りを持つ物や貫通する孔をあけた物がある。157～160は加工材の棒材である。161は加工材で、下部に段を持ち、上端には丸みを持たせている。162と163は加工材の残材で、162は三角柱状の角材、163は板材である。164と165は樹皮紐である。これらの木製品は、上層から151・152・163～165、中層から142～149・153・154・156～162、下層から150と155が出土した。

時期 掘削時期については、SDc031中部で検出した底面の杭などによる。図示した土器はIV期以降であるが、一定の水流があったと思われる下層がIV期、止水し沼地状態になり始めた中層はV期～VI期、沼地が埋没していく上層はVII期～X期と思われる。

SDc031中部（図57～図78）

検出状況 SDc031中部を検出した場所は、地形が西から東へ非常に緩やかに傾斜している。IV層除去後に西側の平面形は比較的明瞭であったが、東側はやや不明瞭であった。幅24.9m、深さ2.47mで、壁面は下半部がやや急な傾斜となるが、上半部では西側が比較的緩やかに傾斜し、東側はテラス状の段を持って浅い溝状の凹みの後緩やかな傾斜となる。埋土は41層に分層したが、SDc031北部と同様に植物遺体や砂の混在状態や土色から大きく三分した。しかし、出土遺物においては、中層以下から遺物の出土が少なく、明確な時期差を確認することはできなかった。土層図1層から3層は基本層序のIII層とIV層に該当する。上層は、土層図1層から18層で、遺物取り上げ時の区分はa層からh層が概ね対応する。黒色から黒褐色の粘質土で植物遺体が含まれる部分がある。遺物は、ほとんどが上層から出土した物であり、V期からX期のものもあるが、VIII期以降の遺物が主体で、V期～VI期の遺物との間に層位的な差は確認できない。なお、a層とb層は、この溝の埋没後に窪地となったところに堆積したIII層とIV層である。中層は19層から33層で、遺物取り上げ時の区分はm層が概ね対応するが、一部下層のものもm層として取り上げている。黒色やオリーブ黒色の粘質土や植物遺体を多量に含む腐植土である。遺物は上層と比較して極端に少なく、時期が判明する遺物もV期からVI期のものと思われる。下層は34層から44層で、遺物取り上げ時の区分はm層及びn層が対応する。黒色やオリーブ黒色、灰色の粘質土、砂質土、砂層があり、ラミナ状の堆積も確認できることから、水流があったことが確認できる。しかし、33層の堆積以降は植物遺体が大量に集積されるような状態であり、下層に見られるような水流はあまりなく、何らかの原因で止水され、沼地状態になった可能性が考えられる。

溝の底面では、17本ほどの木杭を検出したが、湧水や軟弱な底面の状況から、図示できたのは8本だけであった（図74）。17本の木杭に規則的な位置関係を認めることができず、底面のやや東側にランダムに打ち込まれたものと思われる。土層との対応関係では、底面に盛土したような堆積となる43層と44層の位置にあたり、この堆積と何らかの関係があるのかもしれない。これらの杭のうち3本について、年代測定を行ったが、紀元前4世紀初頭から紀元前3世紀前半の範囲を示した（第5章第3節）。また、東壁面に流木状の材を検出し、これを撤去したところ根株であることが判明した。このため、根が残存していた部分は穴となってしまったが、樹種同定（第5章第6節）を行ったところアカガシ亜属であった。

溝内の東側にはテラス状の段があり、さらに東側壁面が傾斜していく手前に、浅い溝状の凹みを確

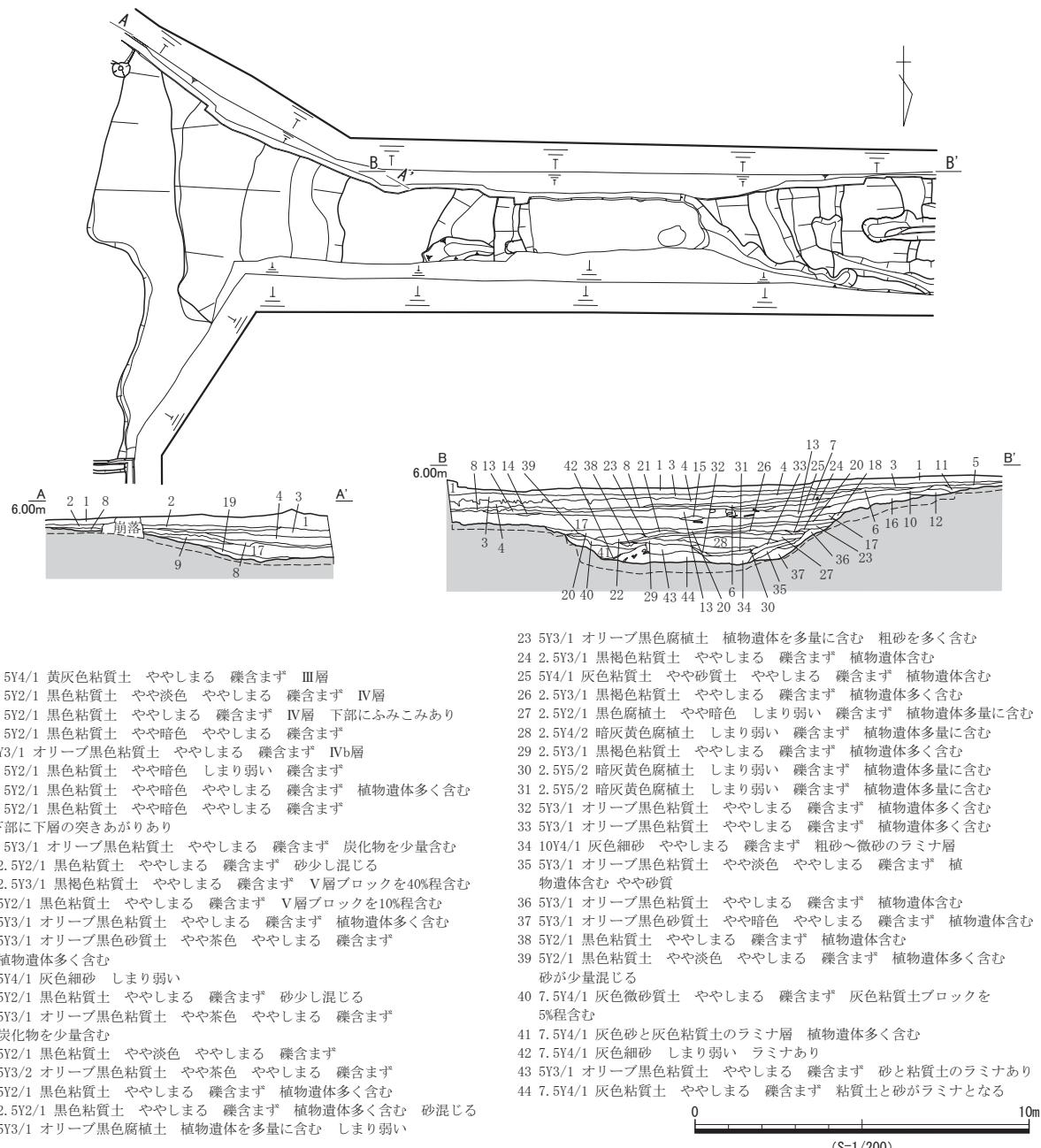


図57 SDc031中部

認した。これは、SDc031北部やB地区で検出した、この溝の延長部分にはなかったものである。どのような目的で、ここだけが24mを超える幅を持ち、テラス状の段を作り出しているのか不明であるが、SDc031南部においては、東側肩部に浅い溝状の凹みの始まりと思われる部分検出しており、このテラス状の段が南へ行くにつれて幅を減じていくと思われる。

遺物出土状況 埋土中から多量の土器や木製品が出土したが、土器類や木製品類とも上層が最も多い。中層になると極端に遺物量が減少し、下層では非常に少ない。また、上層でも西半部において遺物が多く、東半部では少ない傾向があった。溝の肩部において、西側では遺構が密集しているのに対し、東側では遺構が少ない状況を反映している可能性がある。上層の各土層におけるおおまかな土器の時期差は、a層からb層に宇田甕、c層からd層にS字状口縁台付甕C類やD類、e層からf層にS字状口縁台付甕B類やC類、g層にS字状口縁台付甕B類が出土しており、およそその堆積時期を示していると思われる。なお、多量に出土した上層の遺物は、意図的に配置された状況のものではなく、溝内に廃棄されたものと思われる。図示した土器はすべて上層から出土した物である。石器類は上層からしか出土しておらず、叩石と砥石が各17点、石製品とフレイクが各1点出土した。図示した木製品はf層が最も多いが、耕起・整地具の比率が高く7割を超える。

出土遺物 166~179はVI期~VII期と思われる壺で、a層からh層で出土した。166~168は壺A5類である。166は口頸部が短く外反し、口縁端部に横線文を施す。167は口縁部内面にやや段を持ち、口縁端

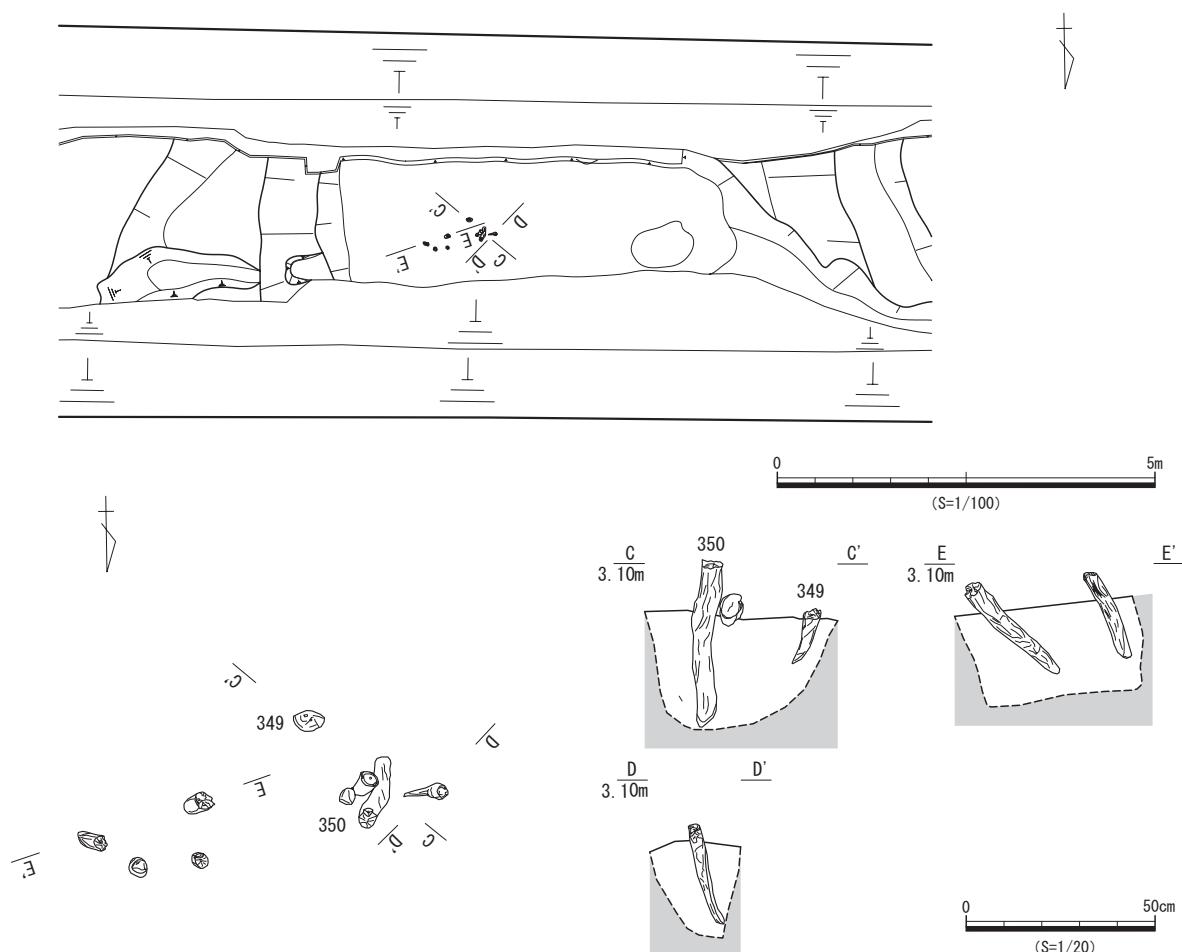


図58 SDc031中部底面杭検出状況

部に擬凹線、内面に刺突文を施す。頸部内面と上胴部には赤彩を施す。168は口縁端部を拡張し、擬凹線を施す。169は壺B2a類で、口縁部が外反する。170・171は壺B3類で、頸部がやや立ち上がり、口縁部が外反する。172・173は壺D3b類で、口縁部が立ち上がり受口状となる。172は、内外面に赤彩を施していたと思われるが、炉内で支脚のように転用されたためか、煤の付着や器面の剥落が激しい。174は壺G類の脚台部で、外面に多条沈線を施し、透かし孔がある。175は壺H1類で、口縁部は直線的に開き、胴部は扁平である。176は壺H類の胴部から底部である。177は壺J2類で、口縁部が内湾する小型の壺。178・179は口縁部を欠くがA類か。胴部はやや下位で張り、下ぶくれ状である。底部は突出し、凹み底となる。179は外面に煤が付着し、火にかけられている。180～190はVII期～IX期と思われる壺で、a層からf層で出土した。180は赤彩を施す壺で口縁部に二重口縁状の段がある。181はやや小型の壺であるが、内外面に赤彩を施す。口縁部内面に段を持ち、口縁端部も面取りする。182は柳ヶ坪型壺で、器面に黒色の皮膜のようなものが認められ、底部はやや突出し、木葉痕が残る。183・184は柳ヶ坪型壺の口縁部である。185・186は直線的な口縁部がやや開く壺で、185の胴部は球形で、底部はやや突出する。外面に煤の付着が激しく、内面にはお焦げ状の黒色部分が認められる。187は畿内系二重口縁壺の口縁部で、口縁部外面に円形の刺突文を施す。188は胴部は球形、丸底で、直線的な口縁部がやや開く小型の壺である。189は小型の壺で、短い口縁部が開く。190は短い口縁部がやや内湾しながら開く。

191～206は、VI期～VII期と思われる甕で、e層からi層で出土した。191～193は甕B3類で、口縁部は短く立ち上がり、口縁端部は粗い調整である。胴部はほぼ中位で張る台付き甕である。193はやや小型で台部を欠く。194・195は小型の甕E2類で、口縁部が短く外反し、胴部は中位で張る。台部を欠く。196は小型の甕E5類で、口縁部がやや内湾する。197～206は甕D3類で、いわゆるS字状口縁台付甕B類である。胴部は肩部で張り、口縁部内面に浅い沈線が巡るか面取りすることから、S字甕B類の中段階頃のものが多いと思われる。205は口縁部を欠くが、胴部が中位で張り、やや古いか。また、206はやや小型である。207～233は、VIII期～X期と思われる甕で、a層からh層で出土した。207～220は、口縁部上段が外方に伸びて開くことからS字状口縁台付甕C類と思われる。215の頸部から上胴部内面には二次焼成による煤の付着が認められる。220は口縁端部がやや肥厚することから新しい段階のものと思われる。221～224は小型のS字状口縁台付甕である。225・226はS字状口縁台付甕D類で、口縁端部が肥厚し、明瞭な面を持つ。227・228は布留式系の甕で、口縁部がやや内湾する。229は口縁部が内湾する小型の甕か鉢である。230は甕の台部で、器壁が厚くハ字状に開く。231は口縁端部が三角形状に肥厚し、内面は浅く凹む宇田甕である。232・233はS字状口縁台付甕の下胴部であるが、台部が意図的に打ち欠かれたように、割れ面が潰れている。

234と235は、V期～VII期と思われる鉢で、f層及びh層から出土した。234は小型の鉢C類で、小さな底部から胴部から口縁部が内湾し、調整は粗い。235は小型の鉢G類で、口縁部は短く立ち上がり、底部は凹底でやや突出する。236と237はVIII期～IX期と思われる鉢で、c層及びd層から出土した。口縁部が大きく開き、やや湾曲する。

238～243は、VI期～VII期と思われる高坏で、e層からh層で出土した。238は、口縁部内面を肥厚させ、そこに多条沈線を施す高坏C3b類である。239は高坏D4類で、口縁部がやや内湾しながら開き、口縁部内面には、多条沈線と山形文を施す。240は高坏D5類で、坏部が大きく開き、内面に多条沈線と連弧

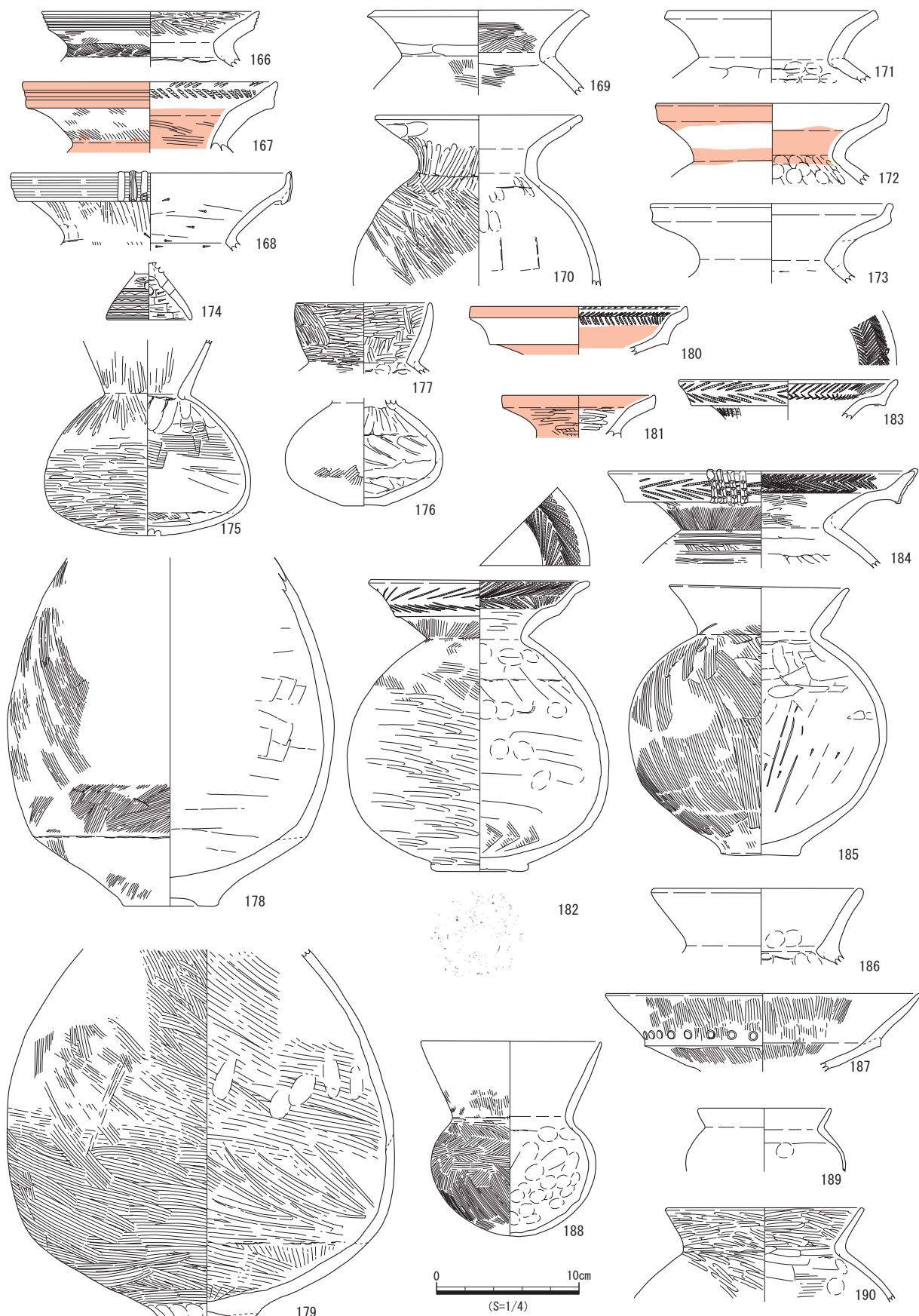


図59 SDc031中部出土遺物（1）

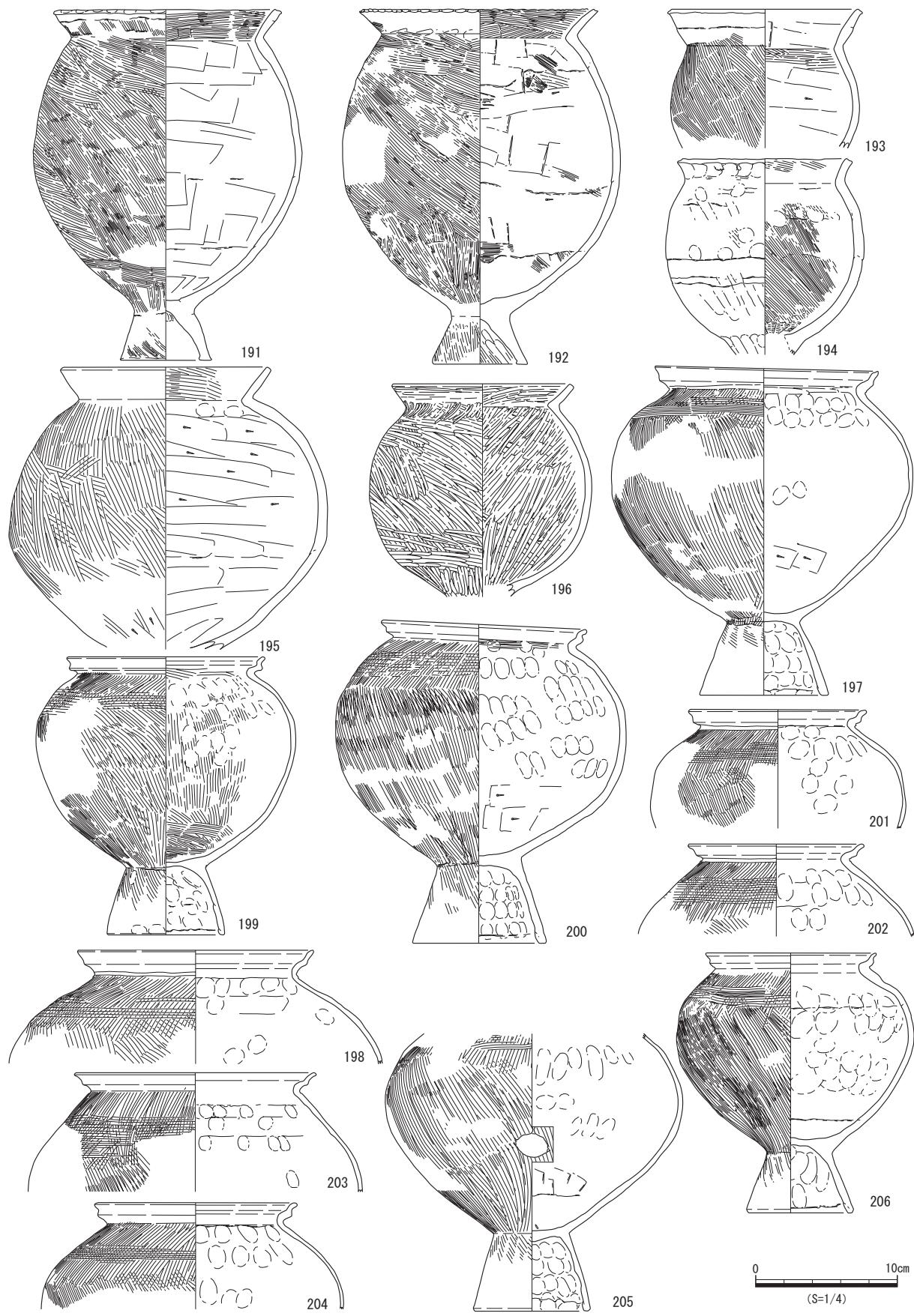


図60 SDc031中部出土遺物（2）

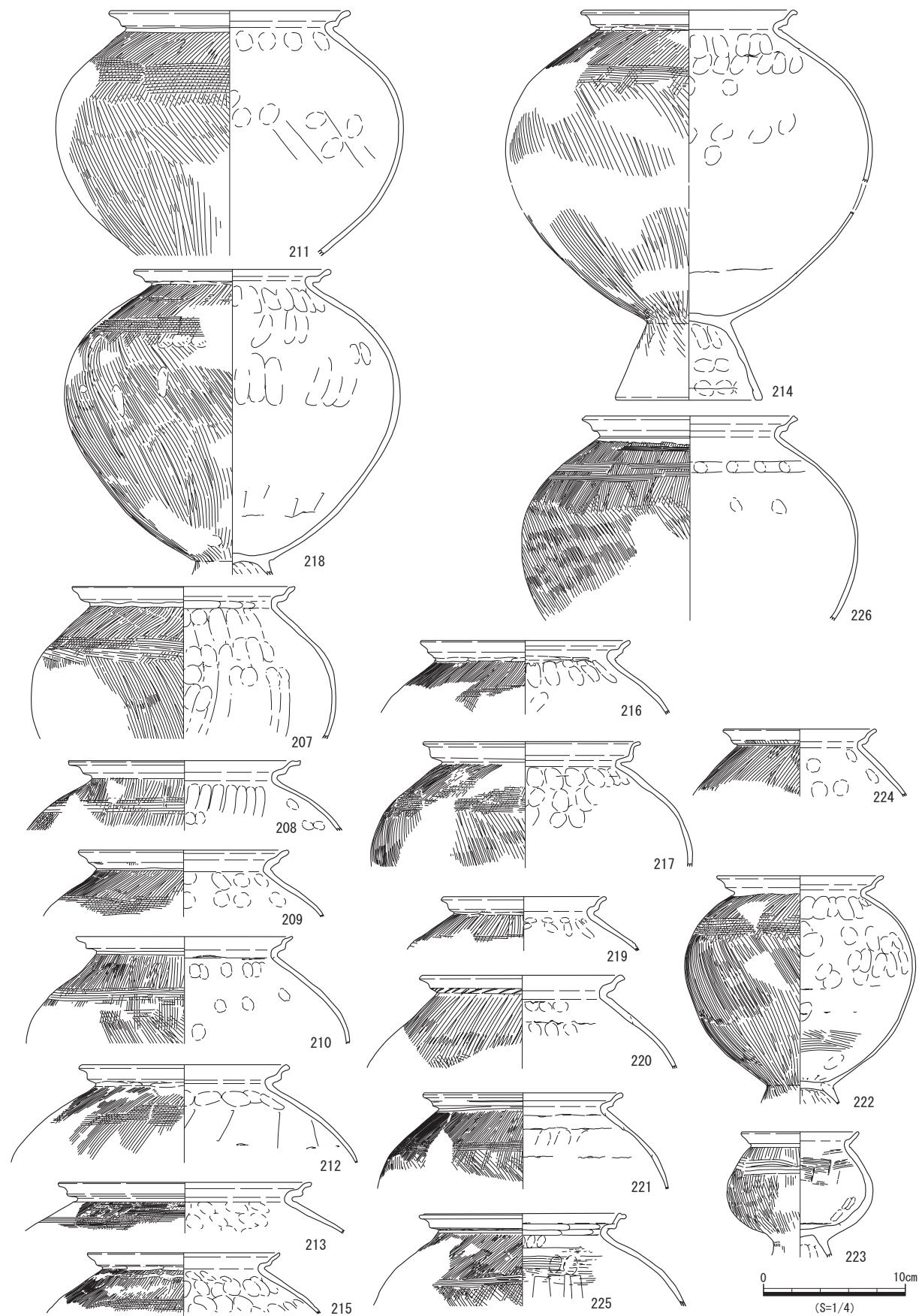


図61 SDc031中部出土遺物（3）

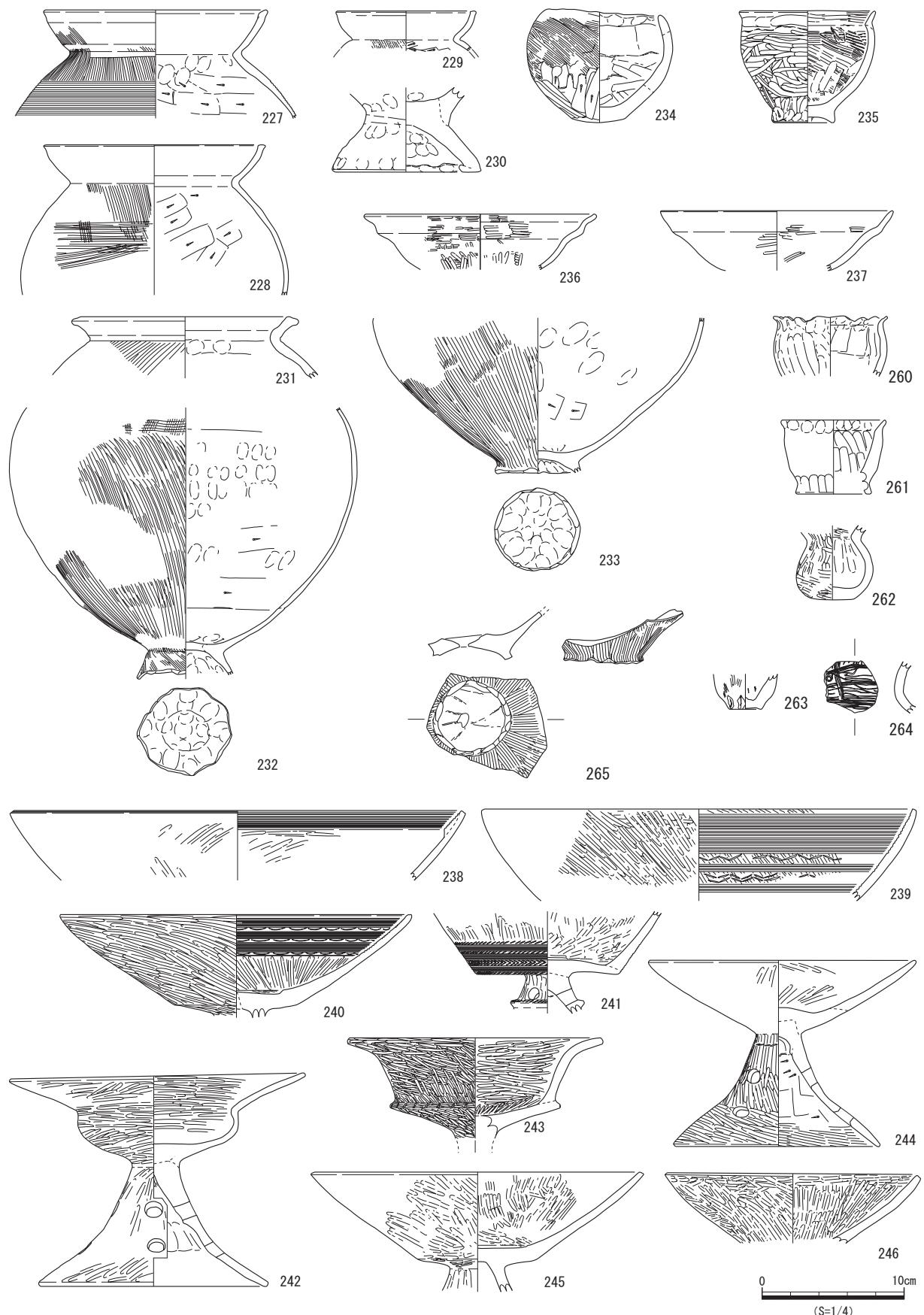


図62 SDc031中部出土遺物（4）

文を施す。241は口縁部を欠くが高坏G3c類と思われ、坏部に多条沈線や刺突文を施す。脚裾部も欠損するが、脚柱部に刻みを施した突帶を巡らせている。242は外来系の高坏J類で、坏部は碗状の形態から屈折して口縁部が大きく開き、脚部は外反する。243も外来系の高坏J類で、皿状の坏底部から、段を持って口縁部が強く外反する。屈曲部には刻みを施し、内外面とも丁寧な横方向の磨き調整を行う。244～251は、VII期～X期と思われる高坏で、a層からg層で出土した。244・245は坏部が大きく開く高坏で、246はやや小型のものである。247は、円錐形に大きく開く脚部である。248は、坏底部が小さく口縁部が直線的に開き、脚部は裾部が屈曲して開く。249は同様の脚部である。250は坏部が碗状で、脚部は短く裾で大きく広がる。251は同様の脚部である。

252～258はV期～VII期と思われる器台で、e層からi層で出土したが、いずれも受部径が脚部径よりも小さい小型の器台C類である。252は器台C1類で、口縁部が直線的に開き、脚部は内湾しており、V-3期であろうか。253は受け部を欠くが、脚部は直線的に開く。254～258は器台C2類で、受部がやや内湾し、脚部は直線的に開く。259はVII期と思われる器台C3類で、口縁部が屈曲して外反する。e層から出土した。

260～263はd層からg層で出土した手捏ね土器で、VI期～VIII期のものと思われる。264はf層から出土した土製品である。中空で球形をしたものと思われるが、表面に多数の線を施す。また、1箇所穿孔が開けられている。265はf層から出土したS字状口縁台付甕底部片であるが、脚部を打ち欠き、底部に穿孔を開けている。

266～272は細長い楕円礫を利用した叩石で、c層からi層で出土した。長軸の一端若しくは両端や側面に敲打痕がある。一部の叩石には側面に砥面が認められるものもあり、砥石を転用した物と思われる。また、270と272には表面に煤の付着が認められる。273はf層から出土した砥石で、全面を砥面として使用しており、一部に敲打痕や赤色顔料の付着が認められる。274～280はやや扁平な楕円礫を利用した砥石で、a層からh層で出土した。275は側面に敲打痕があり、275～277は煤の付着も認められる。また、破損したものも多い。280は、砥面再生のための敲打痕が残る。281は、断面V字形の砥面がある。282はd層から出土した車輪石片で、破壊した断片を廃棄した可能性がある。

283はf層から出土した直柄平鍬の未製品である。柄孔隆起は方形で、明瞭な段をなす。上端は斜めに加工し、表面と裏面は削り痕がある。平面及び柄孔隆起整形段階のものである。284は、両側面を少し壅ませた狭鍬であろうか。285は鍬の破片と思われる。286は北九州型方形柄孔鍬の装着具で、下端を柄の切り込みにのせ、L字の切り込みを柄孔と噛ませて安定させる。287は方形柄孔を2孔穿った大型の異形品である。頭部の孔は通常の柄孔のように平面縦長で斜め方向から穿たれている。中央部の孔は平面横長で垂直に穿たれている。側面は平坦で刃先がなく、孔のないほうの端部に刃先が作出されている。2つの孔に柄を取り付けると犁のような形態となる。鍬とはいえないが、方形孔と刃先をもつこと、材にアカガシ亜属が選ばれていることを考慮し、方形柄孔鍬に含めた。288は曲柄鍬の突起部分で、289～292は多又鍬や又鍬の刃先と思われる。290の下部に、紐状の押圧痕が2個斜めに平行して並んでいる。293は泥除破片、294は払い鋤の先端部と思われる。295は縦方向の細かい加工があり、農具の柄と思われる。296は方形柄孔を持つ鍬の柄で、段と抉りを持つ。297～299は形状や大きさから農具素材の可能性があるものと思われるが、297と298は樹種がヒノキであり、別の器具の材料の可能性もある。300は木包丁で、紐を付ける穿孔が二つ斜めに通り、下端部に刃部の装着溝

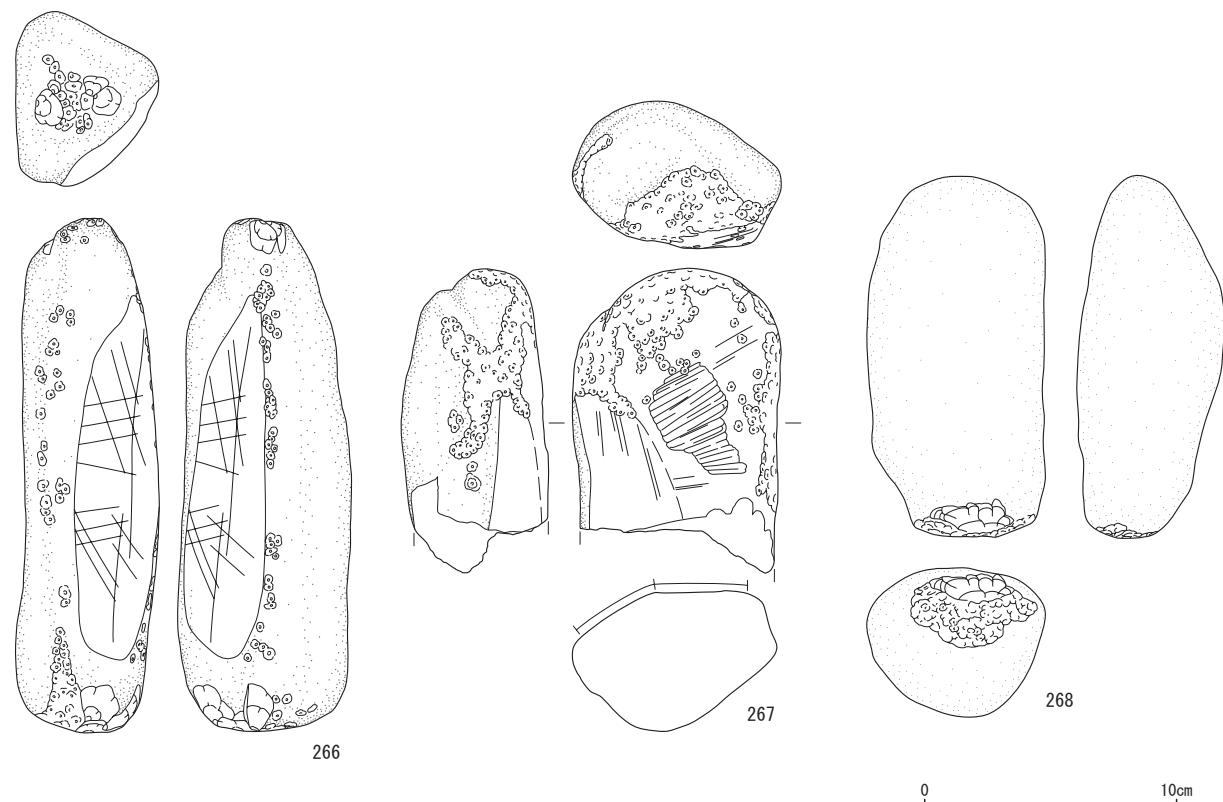
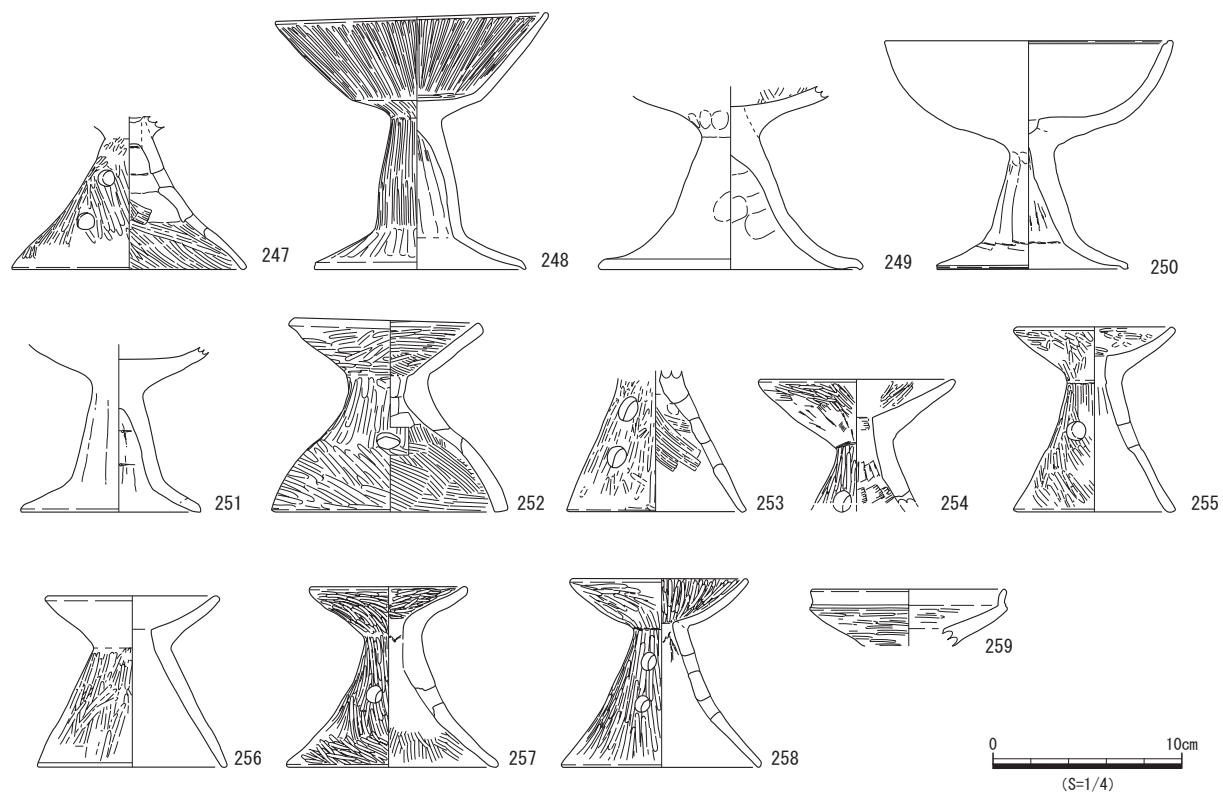


図63 SDc031中部出土遺物（5）



図64 SDc031中部出土遺物（6）

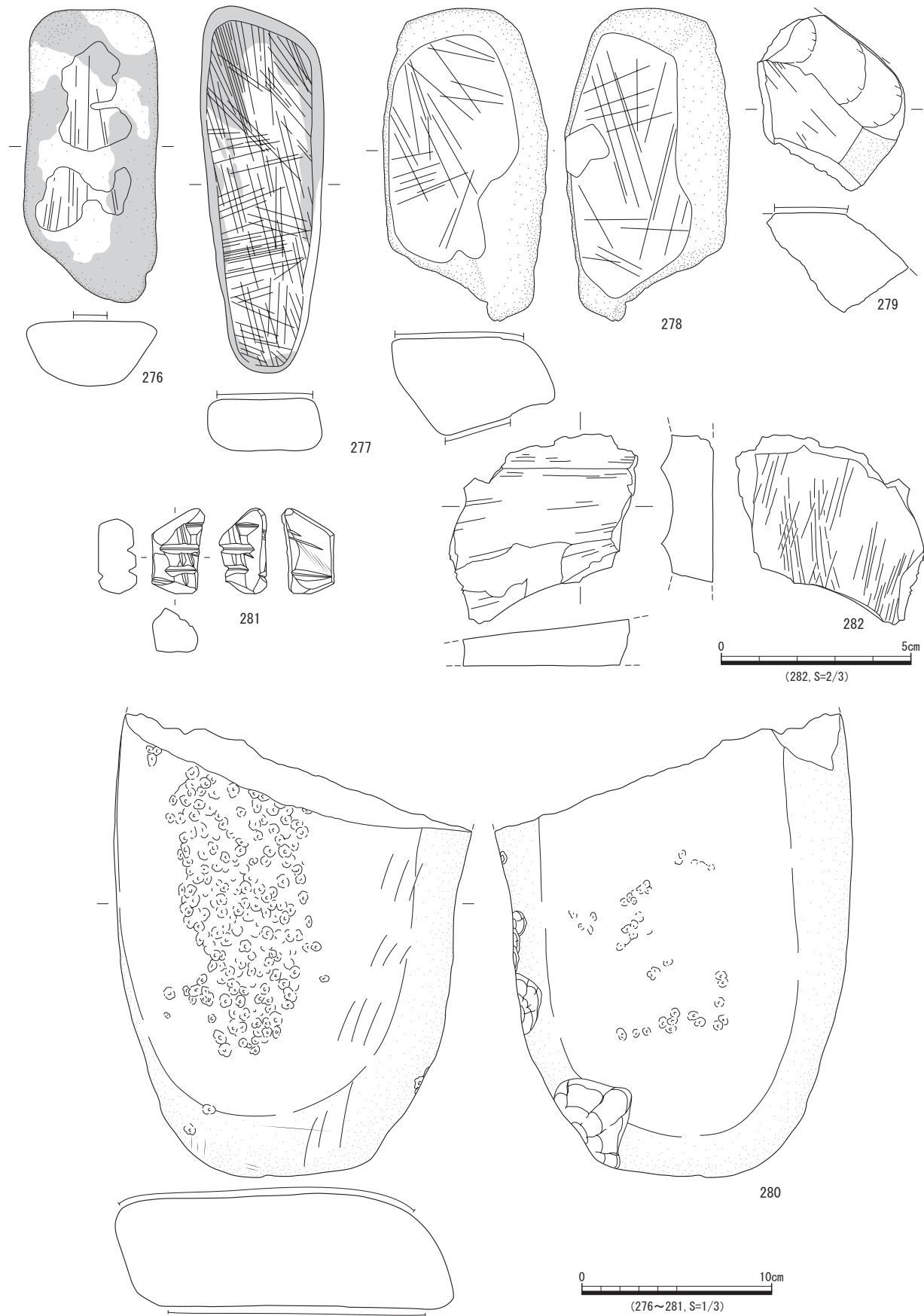


図65 SDc031中部出土遺物（7）

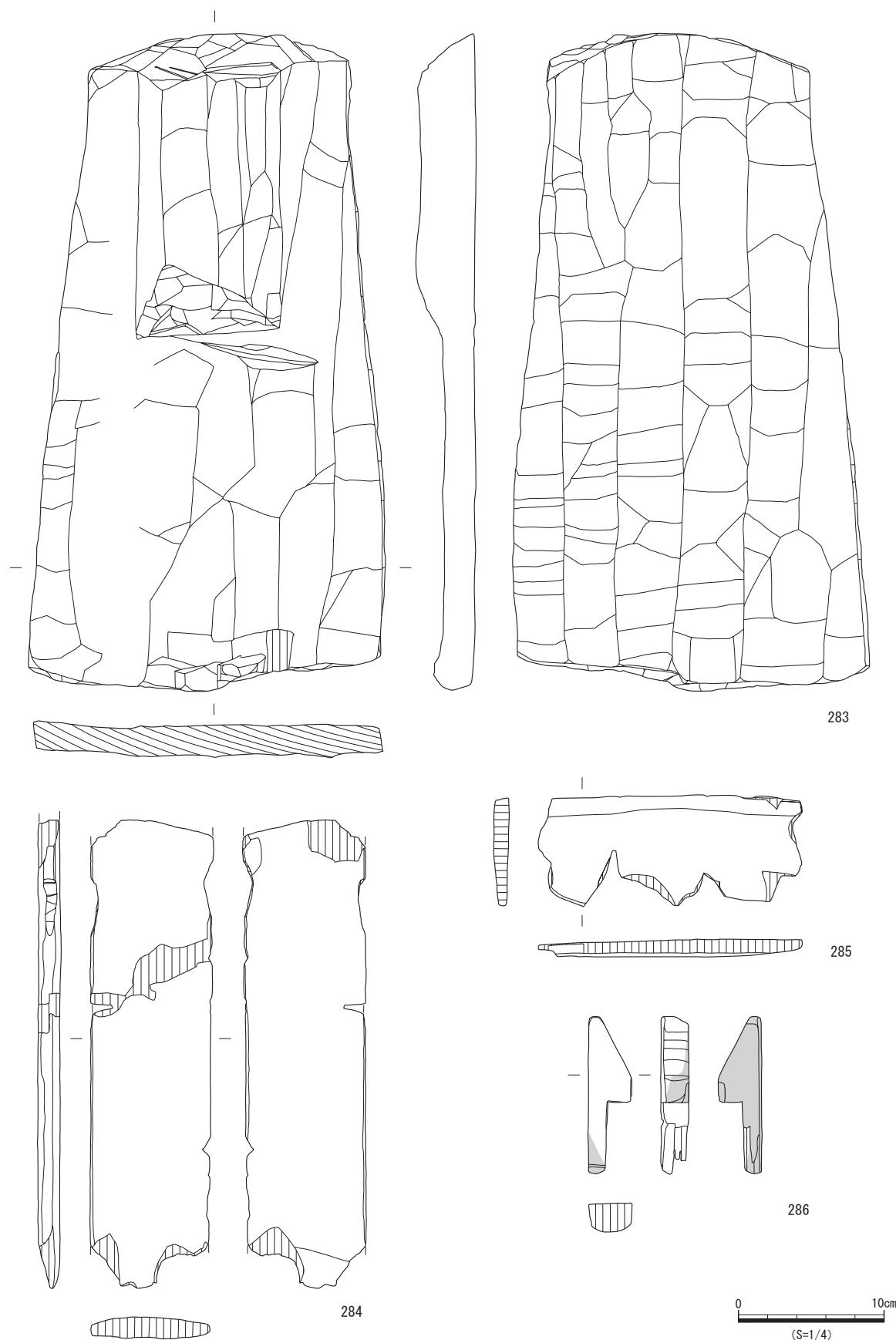


図66 SDc031中部出土遺物（8）

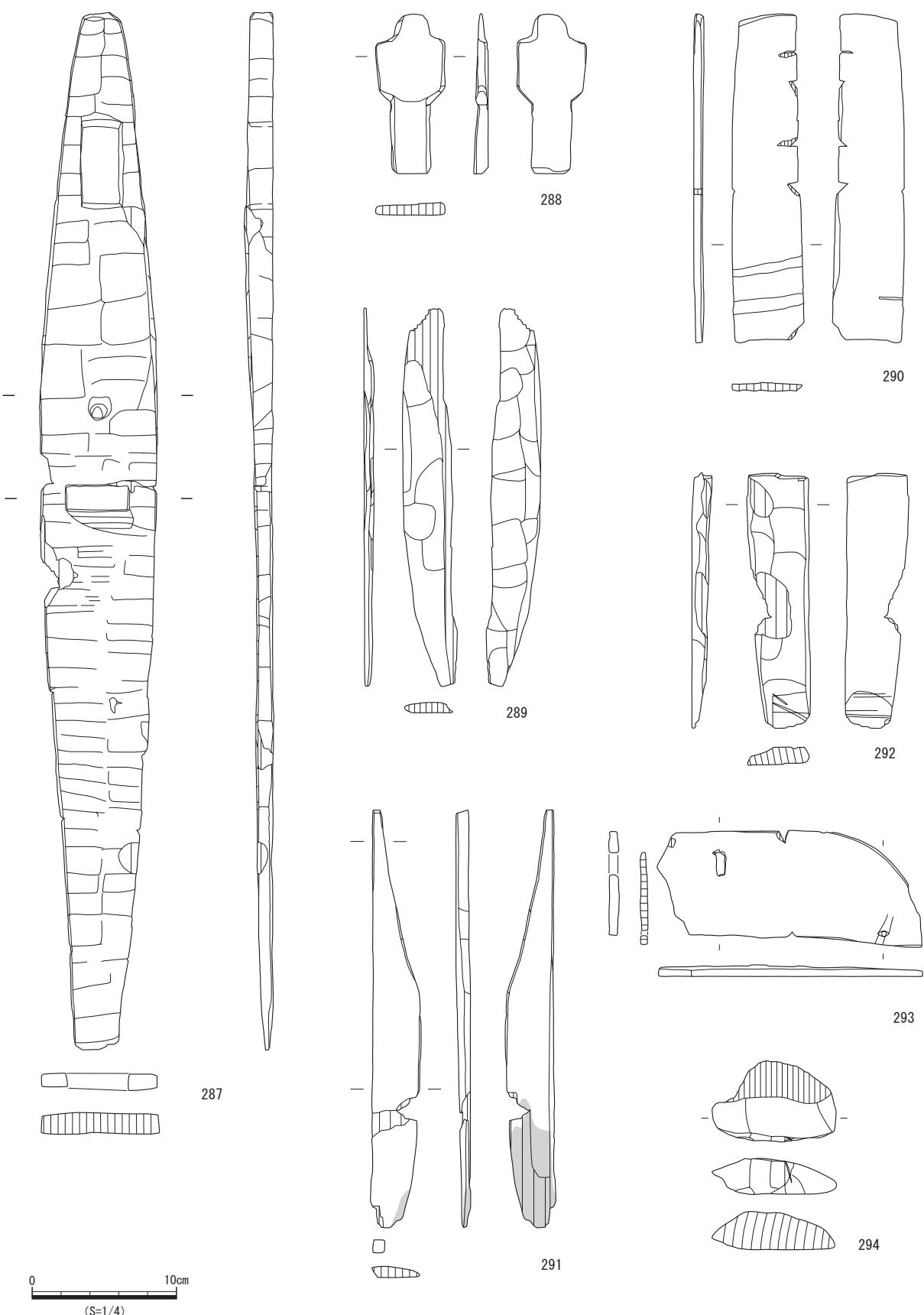


図67 SDc031中部出土遺物（9）

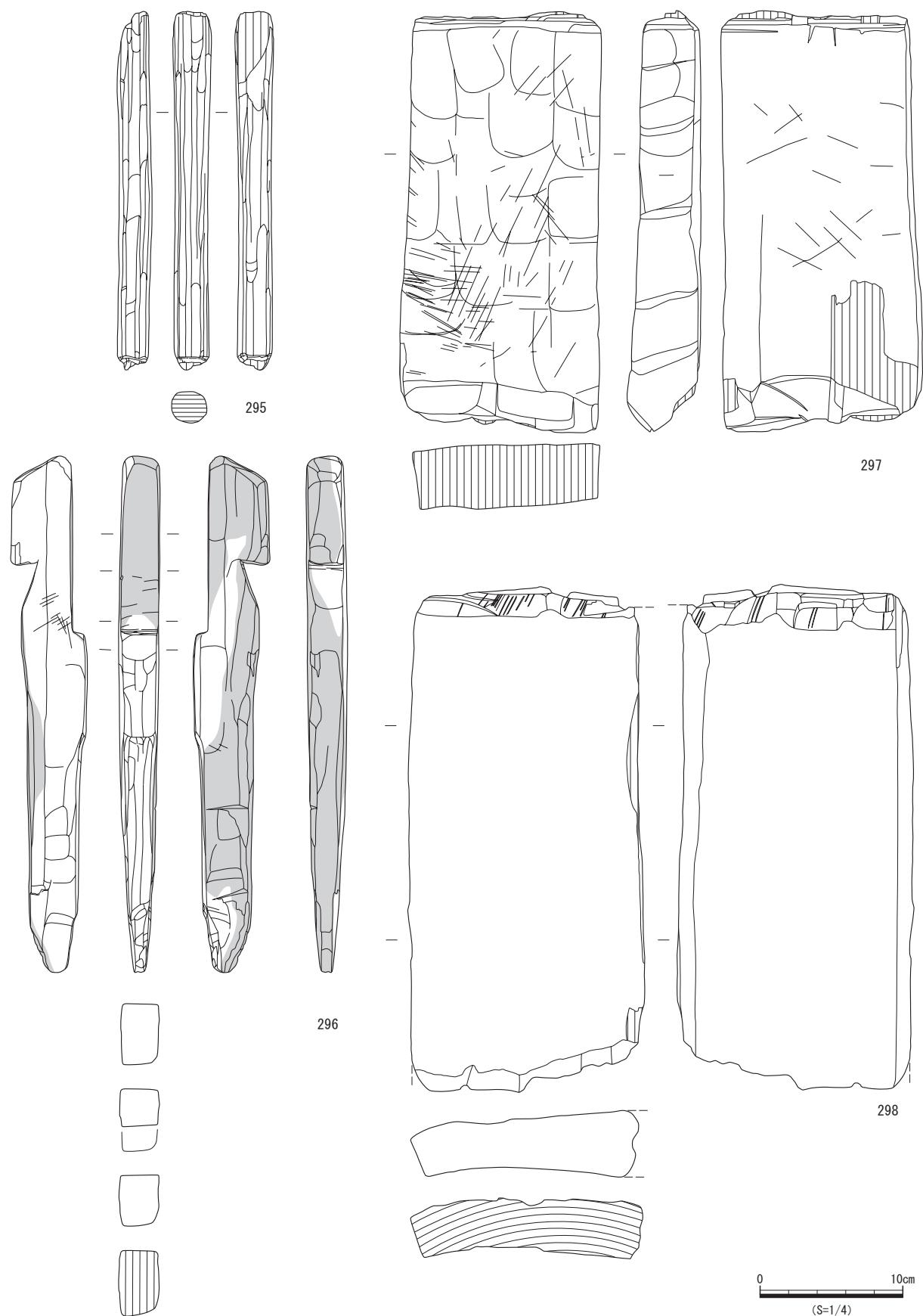


図68 SDc031中部出土遺物 (10)

がある。表面は平滑に加工され、上端部と両面に薄く紅色のものが付着する。301は鎌柄である。302は、輪カンジキ田下駄の下部に入る横桟である。303は横槌、304は堅杵である。305・306は木錘で、中央部に断面台形状の溝を巡らす。307は形状から古代の糸巻き、308は棒の軸か支え木と思われる。309は織機の緯打工具と思われる。一端を欠くが木口に柄状の加工を施す。310は側面に一定間隔で抉りを持ち、大型の簾を編む時の編み台か。311は飾り弓の弓幹の破片。樹皮をダイヤ形に切り残し、その上から黒漆を塗布する。裏面には平坦面を作出し朱漆を塗布する。年代測定の結果、弥生時代後期から古墳時代前期の年代が得られた（第5章第3節）。312は中央部に円孔があり、大型容器の底部を転用した板材と思われる。313は表面を丁寧に仕上げた精製品で、組み合わせ式の高杯の脚と思われる。芯持材を削り出し、下端には斜めの整形痕が残る。柄を整形する途中の可能性がある。314は有脚の槽底部、315は槽の側部片である。316～320は曲物側板と思われる薄い板材である。319は3対の留め孔がある。321と322は曲物の底板と思われる。323～326は曲物の把手と思われる加工材である。327・328は四方転びの箱の部材で、328の表面、側面、裏面一部に朱漆が付着している。329は丁寧に整形された、平面系を圭頭状に加工した板材であることから、琴の蓋板と思われる。330は端部を抉り紐掛けに細工した棒状材で、棒先に多数を括り付け、振り回して音を出す儀器とされるものと思われる。331・332は火鑽臼である。333は細長い板材で、10個の方形の貫通しない枘穴を設ける。蒸籠状の箱の籠枠と思われる。334と335は柱材、336と337は屋根材である。336は中央部より下でくびれ、下端を斜めに加工する。337は薄く切削した板材で、棟木の可能性がある。338は、丸太材の一端に両面からコの字状の抉りを入れた横架材である。339は、桟材と思われる建築部材で、両端を欠損している。340は床材と思われる建築部材で、断面形が平行四辺形である。341と342は建築部材で、厚みのある板材を真っ直ぐに切り落として加工している。342は上部に径1.2cmの孔を2箇所あけ、左側辺に幅0.9cmの抉りを入れる。表面は平滑に仕上げられている。343～355は杭で、このうちSDc031底面に打ち込まれていたのは348～355である。他は埋土中から出土した物であった。356・357は器種不明の部材である。356は3本の木片を樹皮紐で2箇所縛縛し、石川県二口八丁遺跡出土の木製品に似る。357は断面蒲鉾形の細長い棒状材で、表面を面取り加工して、平滑に仕上げている。358～361は用途が明確でない構造部材である。358は木口を丸く削り、不整形な穿孔を施した板材で、枠材であろうか。359は材面を横斧で平行切削した柵目板材で、材面に方形孔7箇所が並ぶ。362～375は板材で、376～381は棒状材である。382～388はその他の加工材である。389～395は、製材や二次加工等の過程で生じた切れ端（残材・端材）である。396～401は樹皮材で、紐として使用するため同じ幅ではぎ取ったものである。

時期 堀削時期については、底面で検出した杭の年代測定値が紀元前4世紀初頭～紀元前3世紀前半の範囲を示すことから、これに近い時期と思われる。その後の土層堆積はSDc031北部やSDc031南部と類似し、出土遺物の時期的傾向も同様である。このことから、弥生時代中期末若しくは後期初頭頃までは、多少の水流があつて砂や植物遺体が堆積する環境であったものが、弥生時代後期において止水し、植物遺体が集積されたように堆積する状態に変化したと思われる。水流があつたと思われる弥生時代中期頃の遺物は少ないが、弥生時代後期から土器や木製品の出土量は増加し、溝状の沼地状となつたVII期以降には、さらに多くの土器とともに木製品や未製品が廃棄され、X期以降に完全に埋没したと思われる。

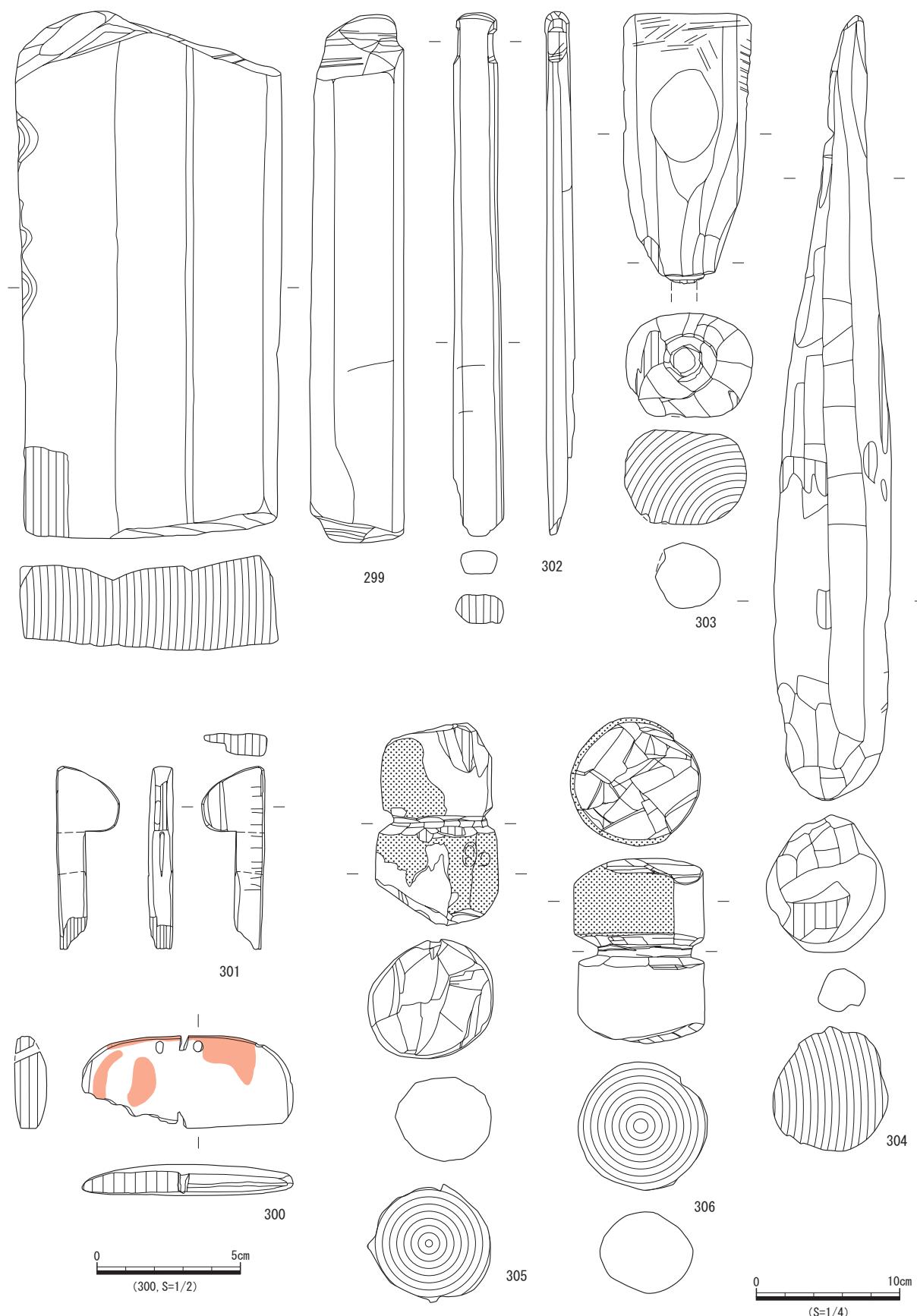


図69 SDc031中部出土遺物 (11)

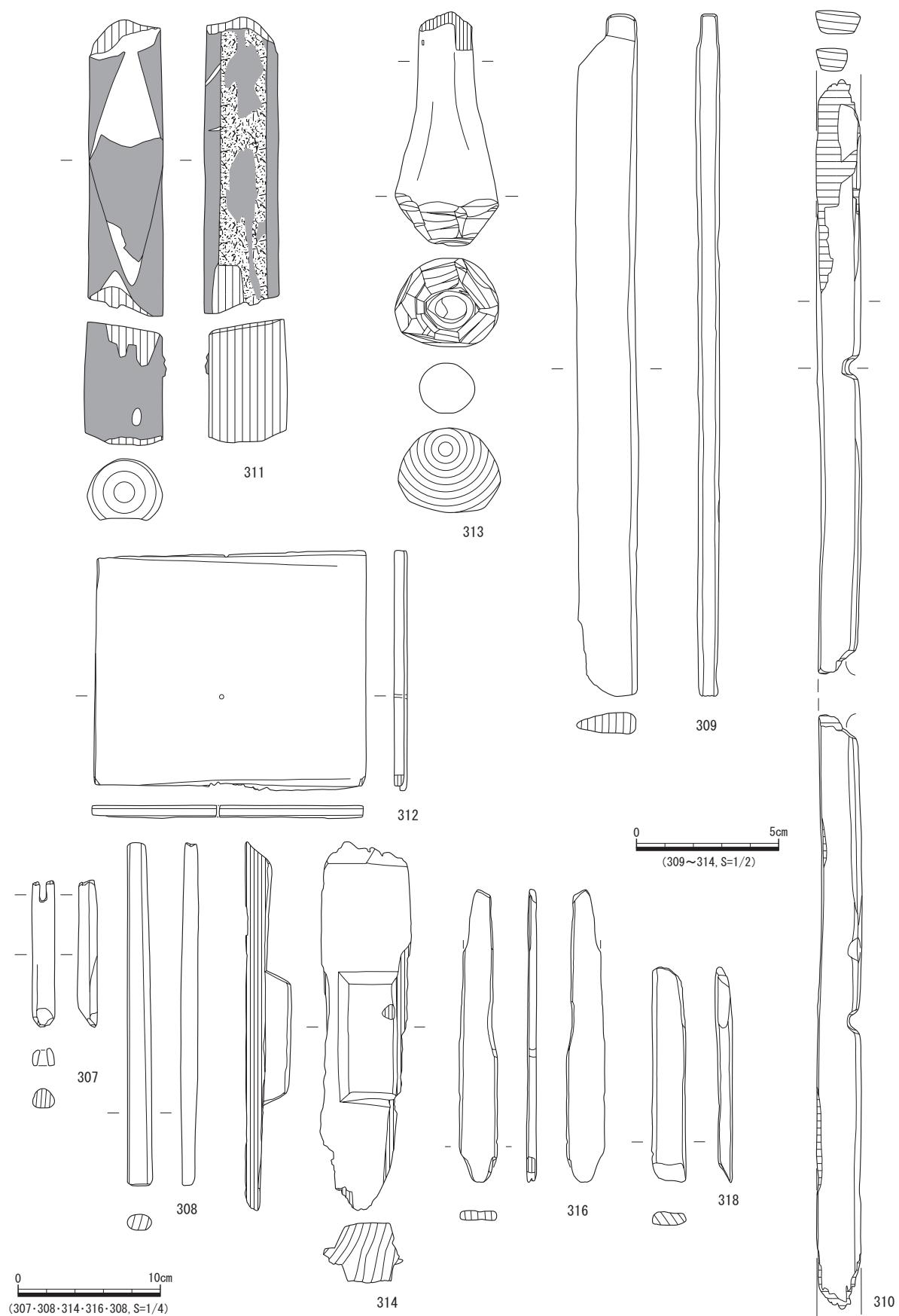


図70 SDc031中部出土遺物 (12)

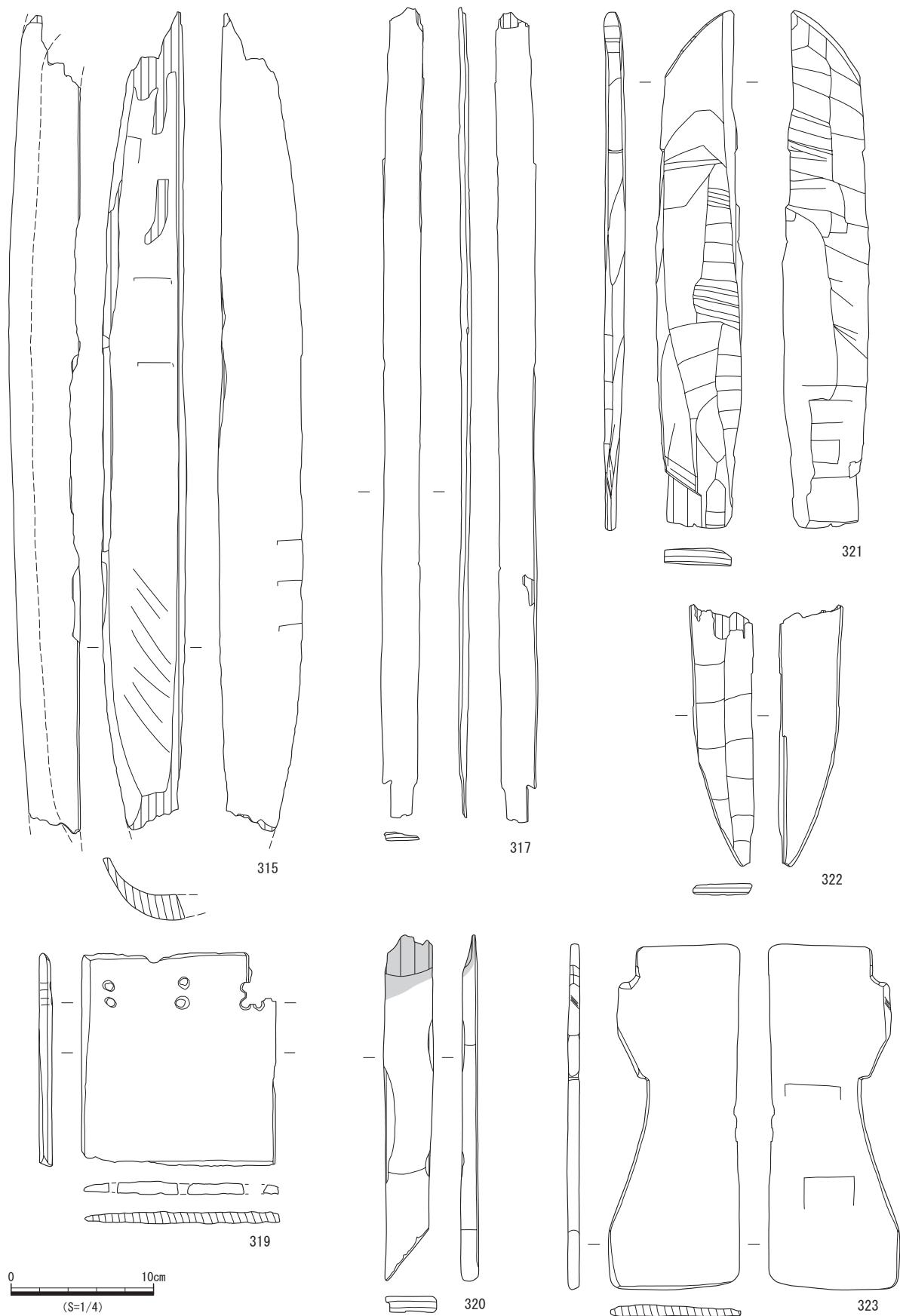


図71 SDc031中部出土遺物 (13)

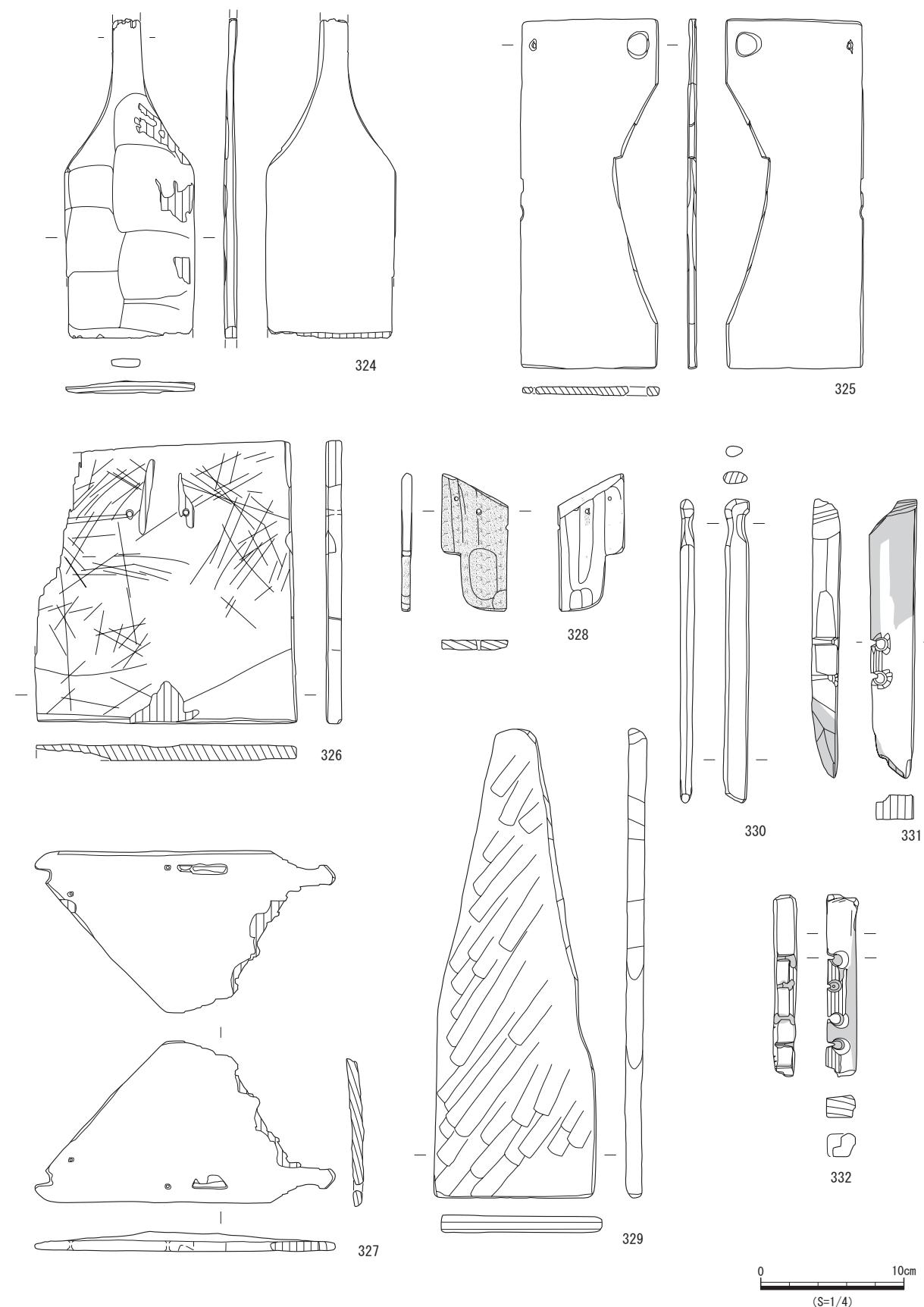


図72 SDc031中部出土遺物 (14)

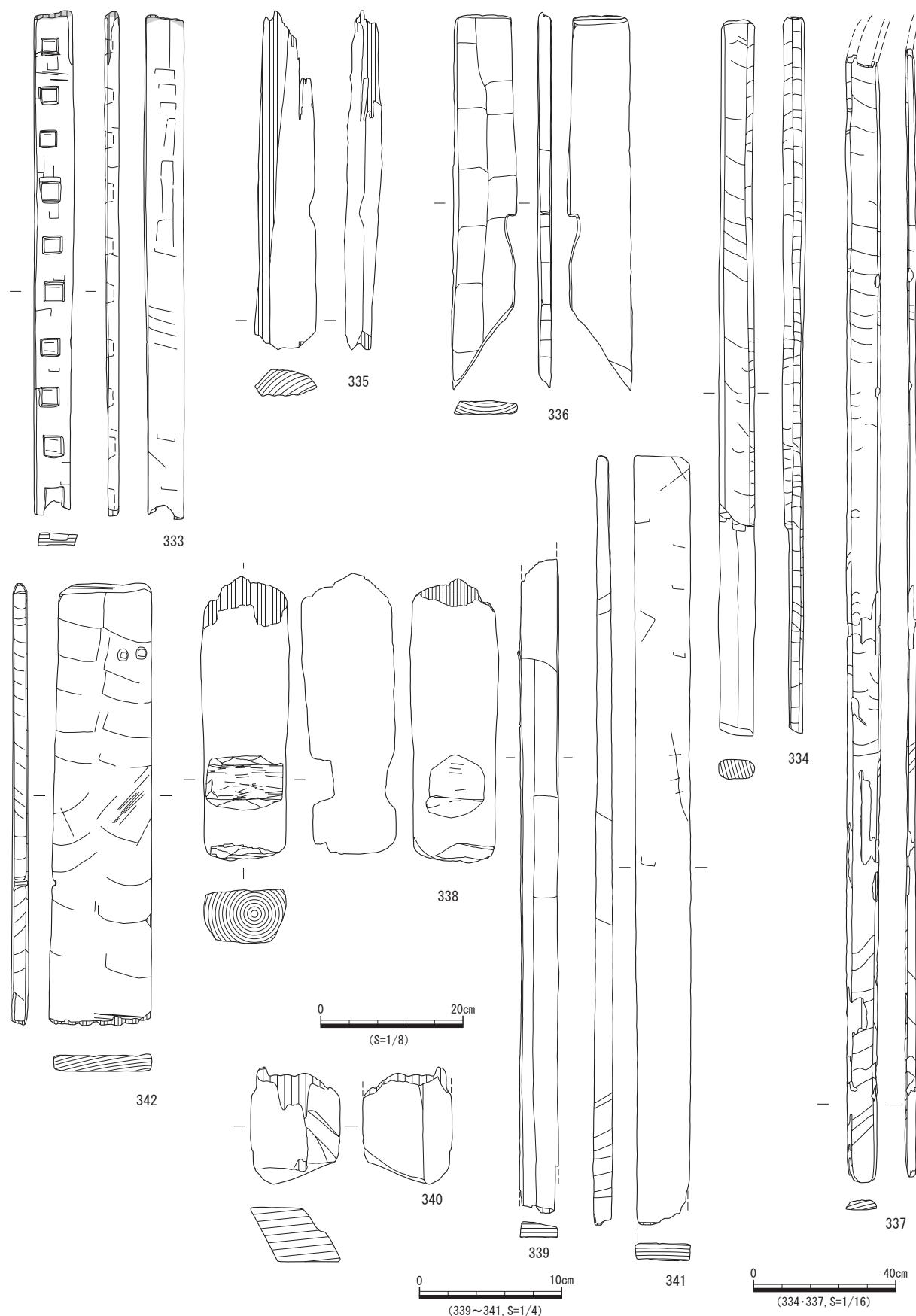


図73 SDc031中部出土遺物 (15)

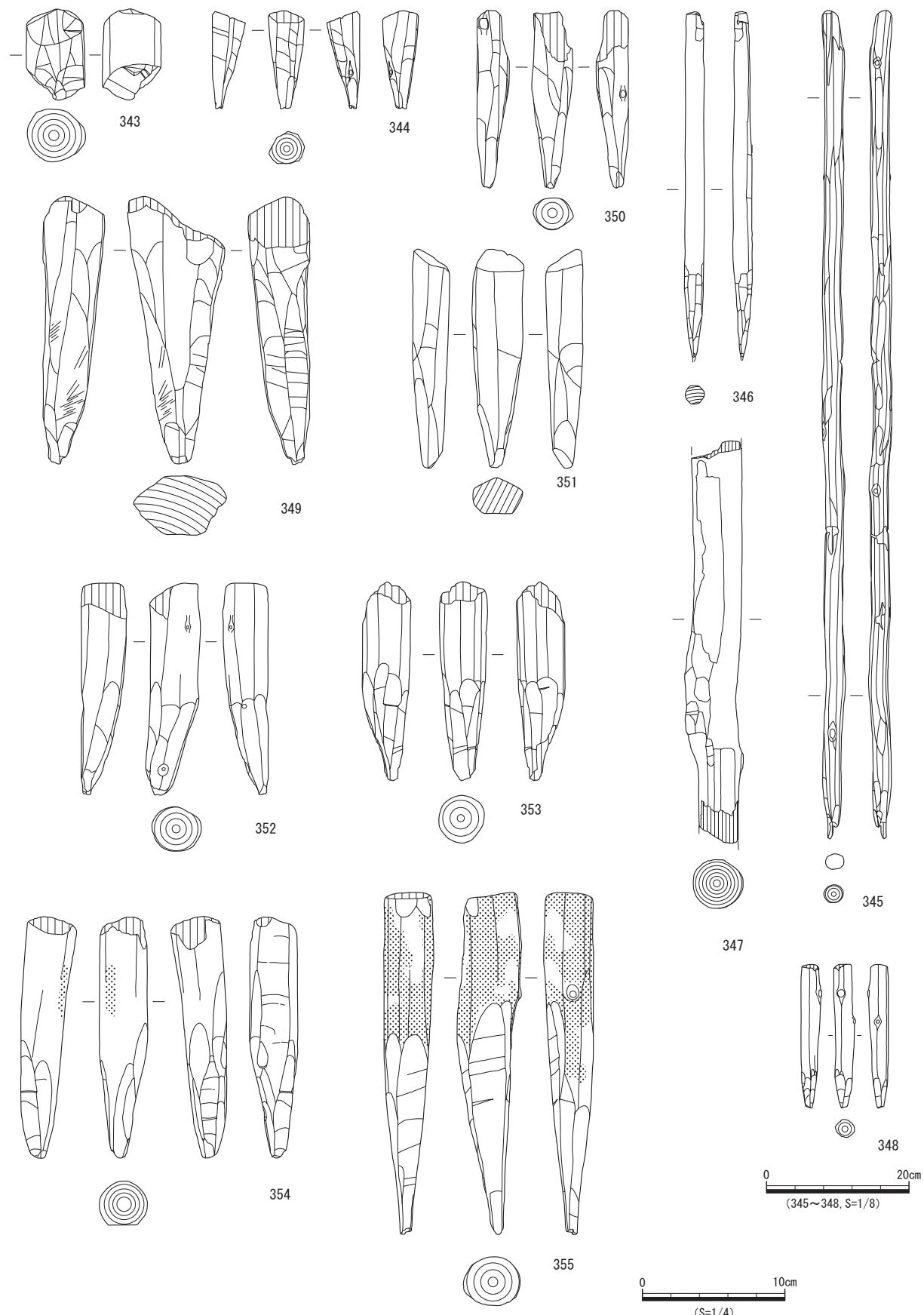


図74 SDc031中部出土遺物 (16)

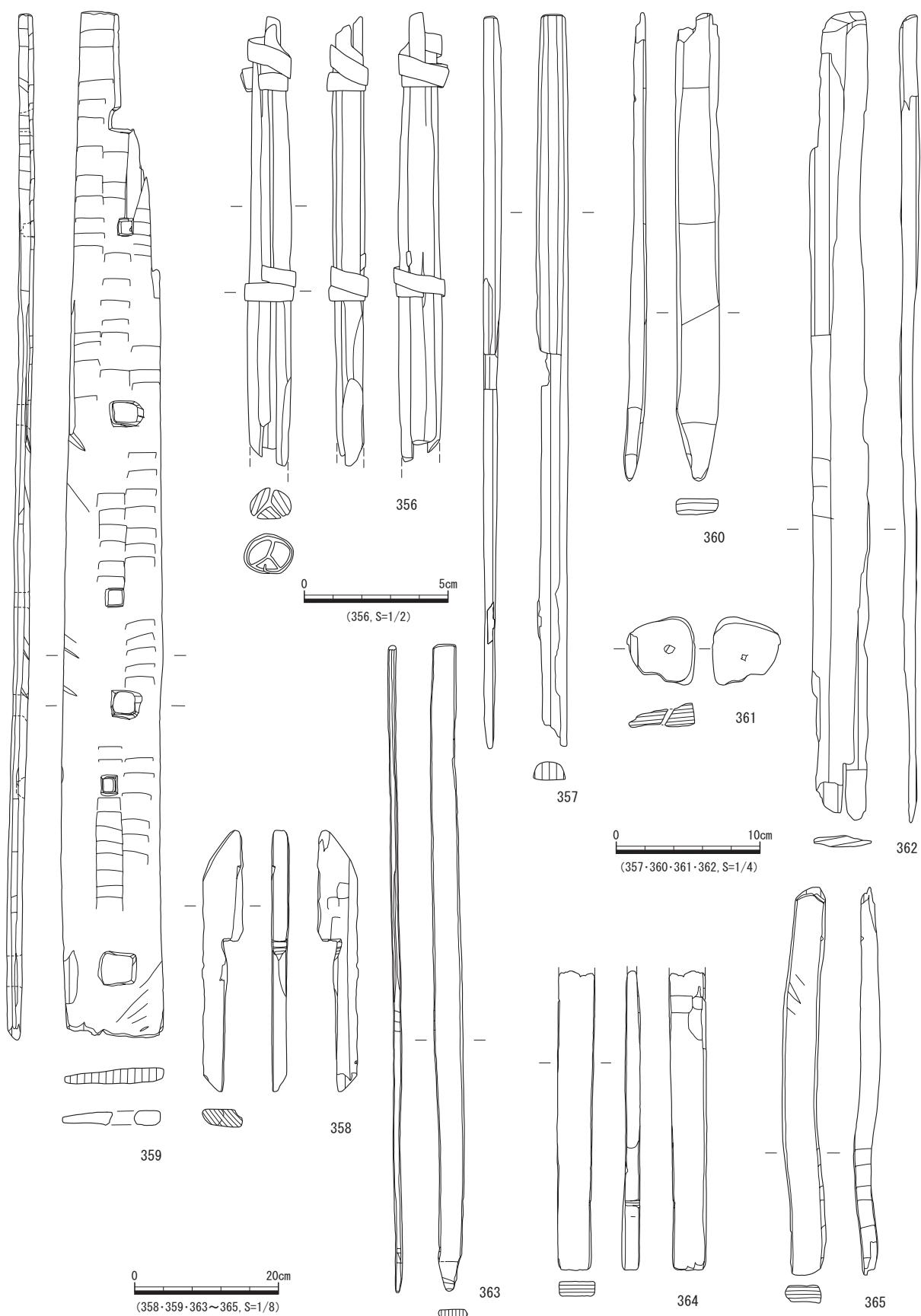


図75 SDc031中部出土遺物 (17)

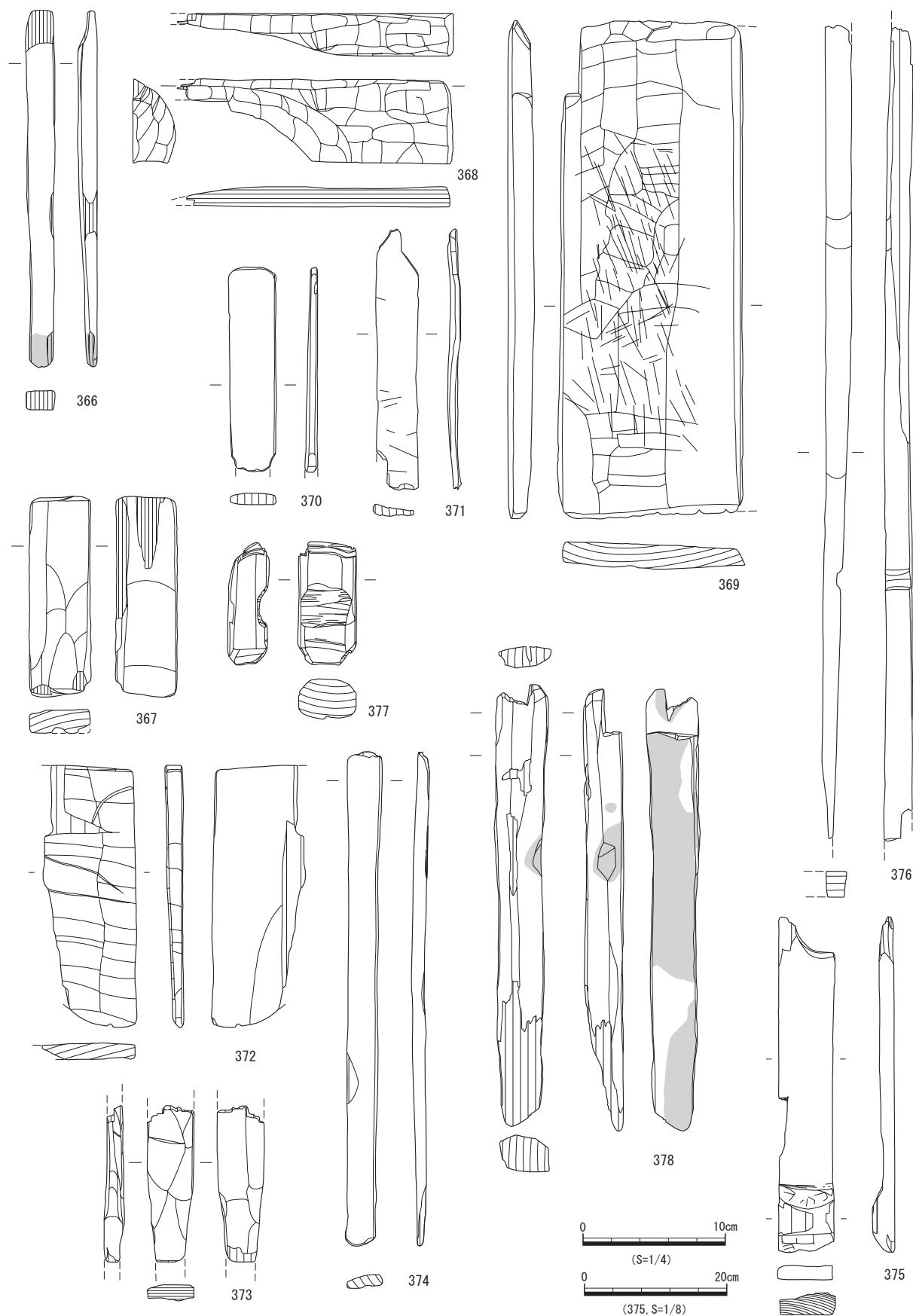


図76 SDc031中部出土遺物 (18)

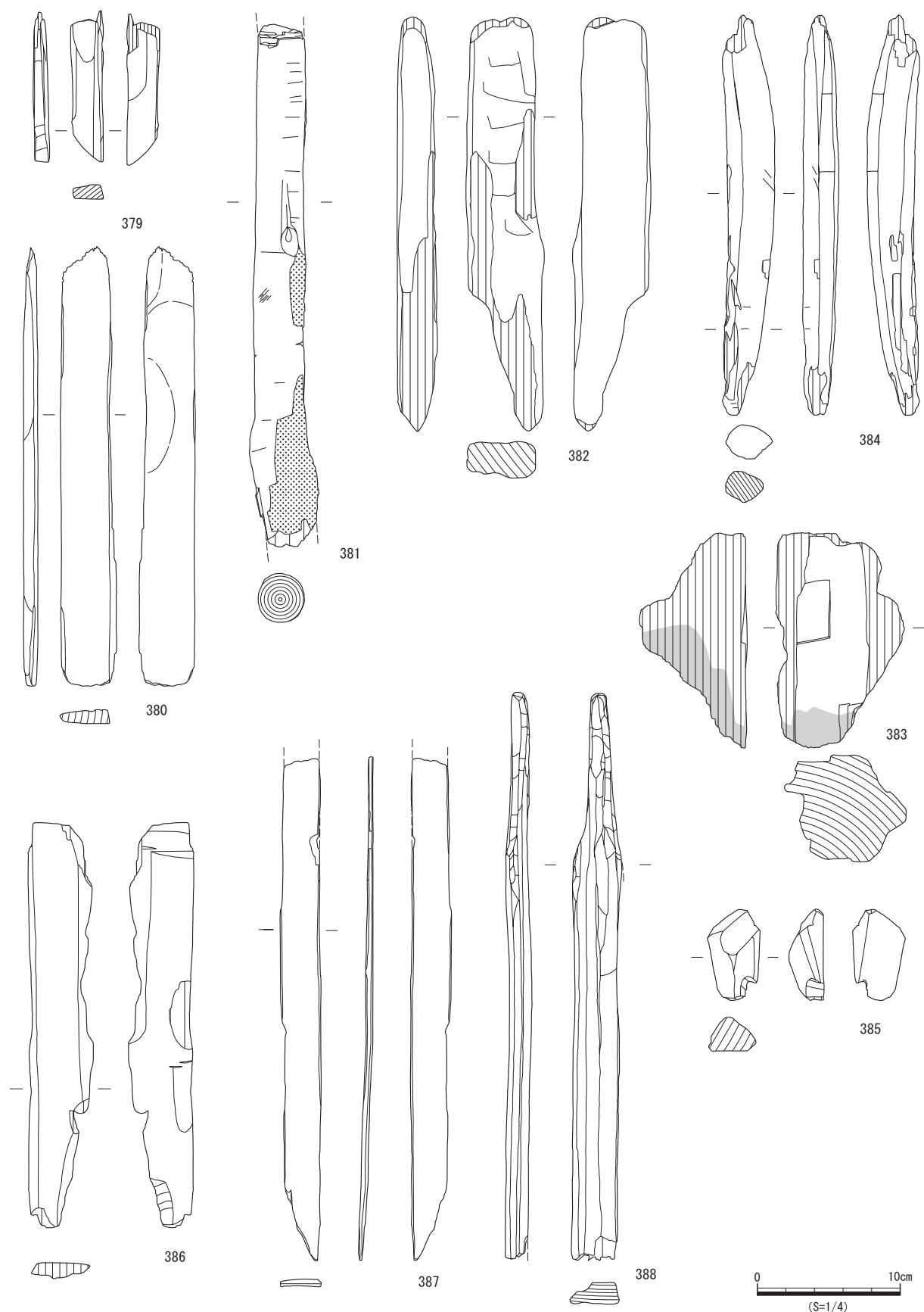


図77 SDc031中部出土遺物 (19)

SDc032 (図79)

検出状況 07_8地点に位置し、V層上面で検出した。幅3.68mのほぼ東西方向の溝状遺構であるが、東は09_9地点では確認できず、西はSDc031に向かうものと思われる。深さは0.19mと浅く、埋土は単層であった。

遺物出土状況 埋土中に散在して土器片が出土したが、検出時に壺胴部片がやまとまって出土したが、実測可能なほどには復元できなかった。

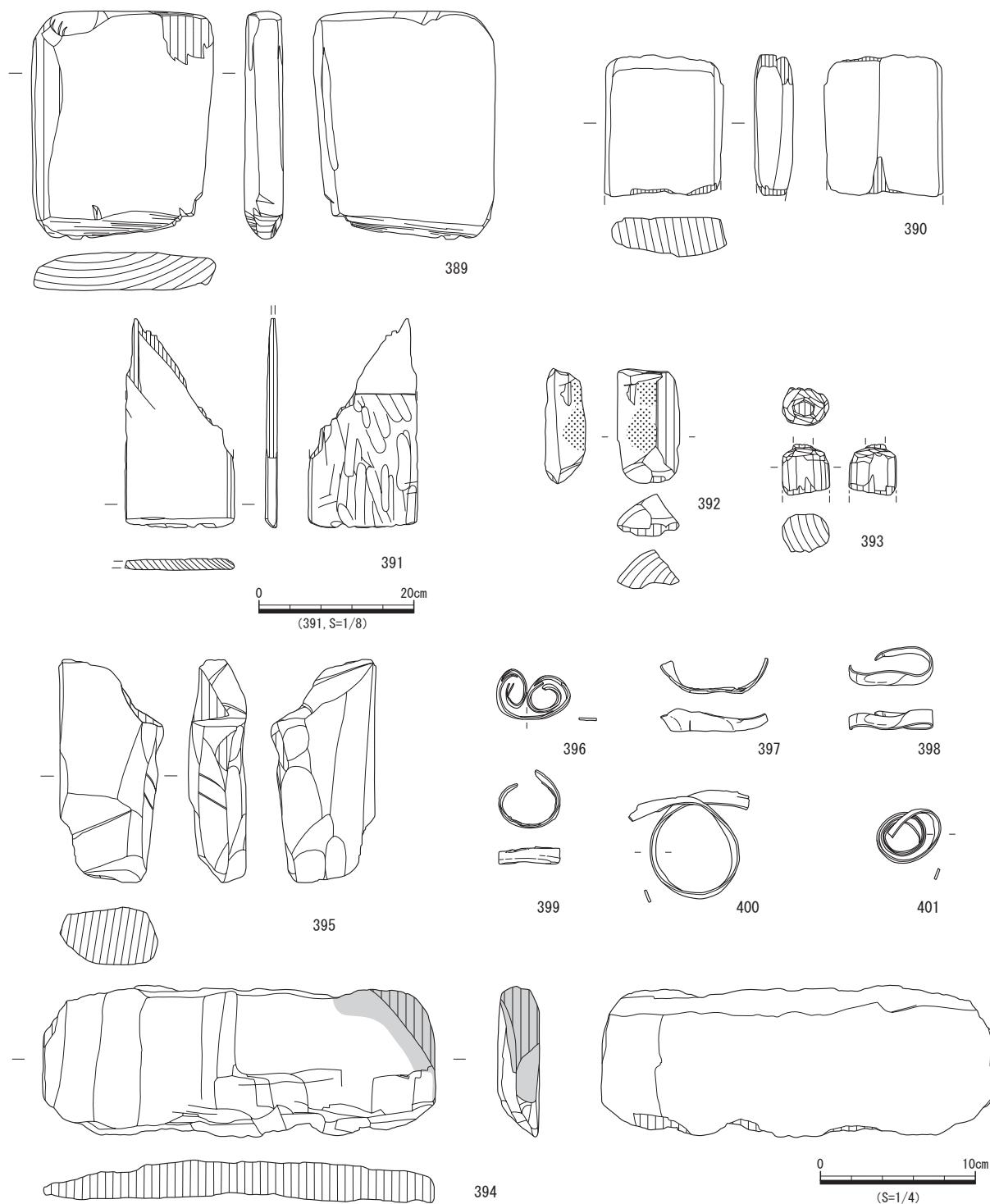


図78 SDc031中部出土遺物 (20)

出土遺物 出土した土器のうち2個体を実測した。402・403はいずれも脚部を欠くが、坏部が碗状となる小型の高坏H1類で、VII期のものと思われる。

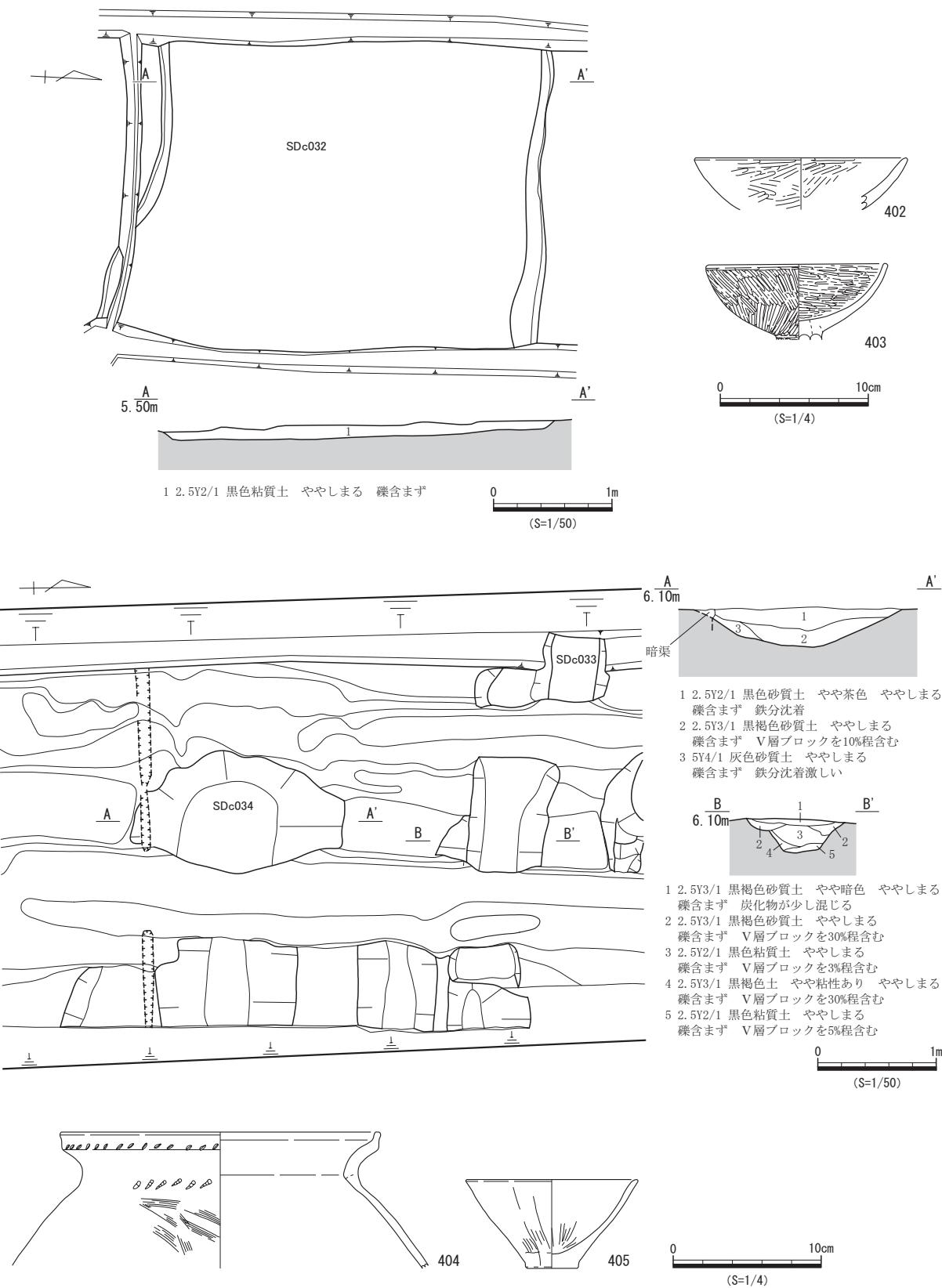


図79 SDc032～SDc034

時期 出土した遺物に時期的なまとまりがあることから、遺構の時期はV期と思われる。

SDc033 (図79)

検出状況 07_7地点の北西部に位置し、V層上面で検出した。IV層上面遺構により削平されているため、平面形は不明瞭であったが、幅0.72mのほぼ東西方向の溝状遺構である。深さ0.35mで、断面逆台形状となる。埋土は5層に分層したが、1層を除きV層ブロックを含むことから、人為的に埋め戻された可能性がある。南北に流れるSDc031と直交する方向性から、土地の区画若しくはSDc031への排水を意図した溝状遺構の可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して出土した。

出土遺物 出土した土器のうち2個体を実測したが、いずれもV期のものと思われる。404は甕A3類で、口縁部は受口状に屈曲し、屈曲部外面に刺突文を施す。405は鉢E類の底部片で、平底の底部から口縁部が直線的に開く。

時期 出土した遺物から遺構の時期はV期と思われる。

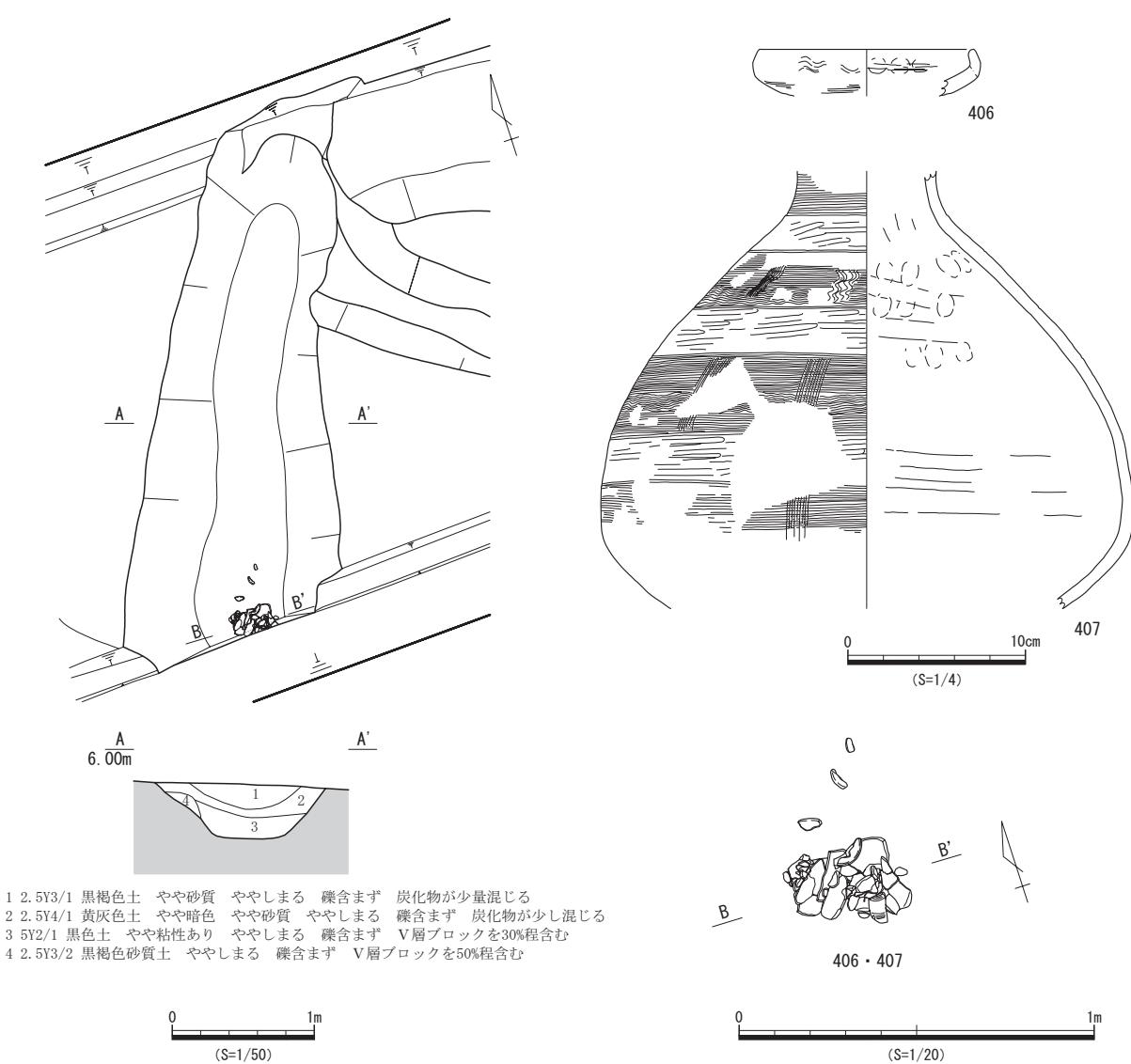


図80 SDc036

SDc034（図79）

検出状況 07_7地点の北西部に位置し、V層上面で検出した。平面形は不明瞭で、当初は土坑と重複しているように確認したため、現場での遺構番号が2つになっているが、掘削した状況や埋土が類似することから同一遺構と判断した。SDc033との間は1m程で、北側にはほぼ平行する位置関係にあるが、西側の末端を検出しており、東側は発掘区外へ続く。深さ0.43mで、埋土は3層～7層に分層したがほぼ水平堆積で、埋土の一部にV層ブロックを含むが、壁面の崩落の可能性があるため自然に埋没したものと思われる。

遺物出土状況 埋土中から少量の土器片が出土したが、図示可能なものはなかった。

時期 V層上面で検出したことから弥生時代～古墳時代前期と思われる。

SDc036（図80）

検出状況 07_7地点の北部に位置し、V層上面で検出した。平面形は比較的明瞭で、N30°Eの方向の溝状遺構である。幅1.46m、深さ0.62mで、壁面はやや開く。壺が底面で潰れたような状態で出土したことから、方形周溝墓の可能性が考えられたが、直交若しくは平行する位置関係になる溝が他にならうことから、溝状遺構とした。埋土は4層に分層したが、3層及び4層にV層ブロックを含む。

遺物出土状況 埋土中に散在して出土したが、3層において壺が潰れた状態で出土した。口縁部片と胴部片は接合できなかったが、出土状況から同一個体の可能性が高いと思われる。

出土遺物 406はIII-2期の壺A3類で、口縁部が受け口状となる。407は底部から頸部まであり、胴部下位で強く張り、櫛描文帯を施す。櫛描文帯には縦位の直線文や波状文を付加する。

時期 溝の底面で出土した壺から、遺構の時期はIII-2期と思われる。

SDc037（図81）

検出状況 07_7地点の北部に位置し、V層上面で検出した。平面形は比較的明瞭で、N53°Wの方向からほぼ北に屈曲した溝状遺構である。甕が埋土中で内面を上に向けて出土したことから、方形周溝墓のような性格も考えられた。しかし、溝の屈曲する角度が小さいことや、対応する位置関係に同様の溝がないことから、土地の区画を目的としたものである可能性が考えられる。幅0.96m、深さ0.27mで、断面逆台形状となる。

遺物出土状況 埋土中に散在して出土したが、埋土中から甕が縦に割られたような状態で、内面を上に向けて出土した。

出土遺物 出土した土器のうち3個体を実測したが、いずれもV期～VI期のものと思われる。408は甕A2a類で、口縁部が受口状に屈曲し、口縁端部は面取りする。口縁部外面や上胴部に刺突文を施す。409は甕A3類で口縁部がやや受口状となる。410は台付甕の台部である。

時期 出土した遺物に時期的なまとまりがあることから、遺構の時期はV期～VI期と思われる。

SDc040～SDc043（図82）

検出状況 07_7地点の北部に位置し、V層上面で検出した。平面形は不明瞭で、4条の溝状遺構を一括して掘削してしまい、掘削状況及び土層観察から4条の溝状遺構が重複したものと判断した。埋土2層とした部分がSDc040、埋土3層～5層がSDc041、埋土6層～9層がSDc042、埋土10層～12層がSDc043となる。いずれもほぼ南北方向の溝状遺構で、東側にはSDc031が南北に流れ、それと平行している。

遺物出土状況 堀削時には4条の溝を区別できなかったが、埋土中から少量の土器片が出土した。下層部からは弥生時代中期頃と思われる土器片、上層からはS字状口縁台付甕片が出土しているが、図示できる遺物はなかった。

時期 V層上面で検出したこと、出土した土器片の時期から弥生時代～古墳時代前期と思われる。

SDc044（図82）

検出状況 07_7地点の北東部に位置し、V層上面で検出した。SZc09と重複しており、当初はこの溝状遺構を認識できず、SZc09として掘削作業を行った。土層観察や掘削した状況、出土遺物の時期によって、別の溝状遺構であると判断した。幅0.75m、深さ0.68mのほぼ東西方向の溝状遺構である。底面のレベルは、東から西に向かって低くなり、西端はSDc031に流れ込むようになる。このため、排水を目的とした溝状遺構である可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土中から少量の土器片が出土したが、1点のみ図示した。

出土遺物 411はV期の高環B3類で、口縁部が外反する。

時期 図示した土器のほか、S字状口縁台付甕片があることからVI期以降のものと思われる。

SDc045（図83）

検出状況 07_7地点の南西部に位置し、V層上面で検出した。平面形は比較的明瞭で、N25°Eの方向

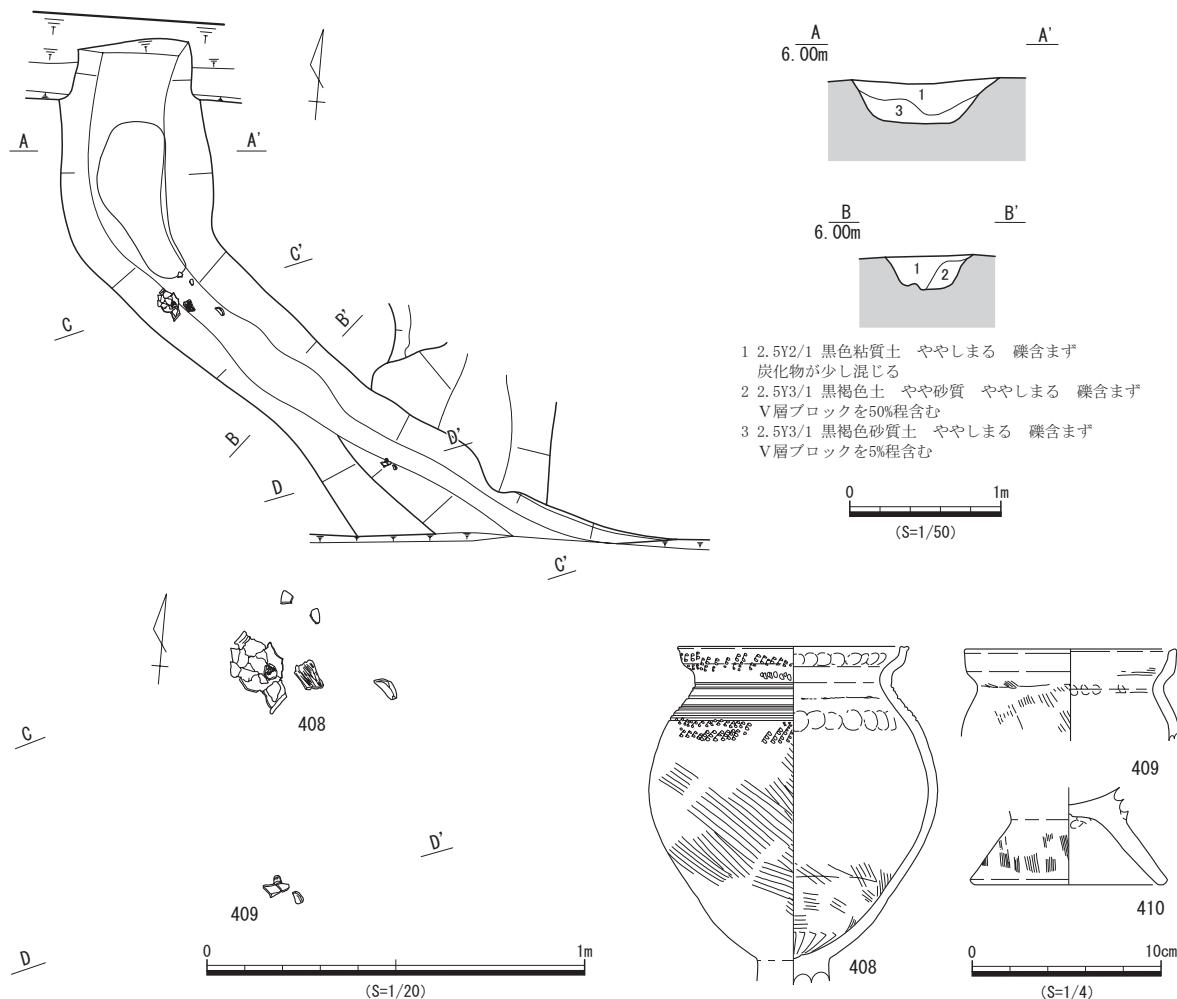


図81 SDc037

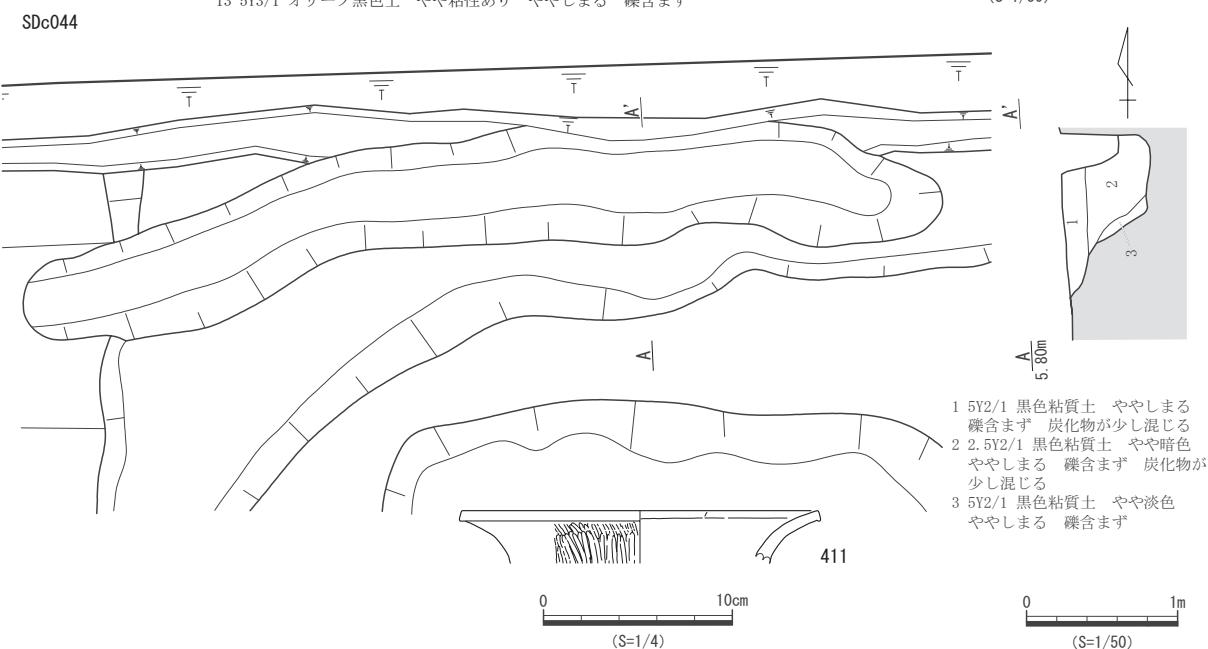
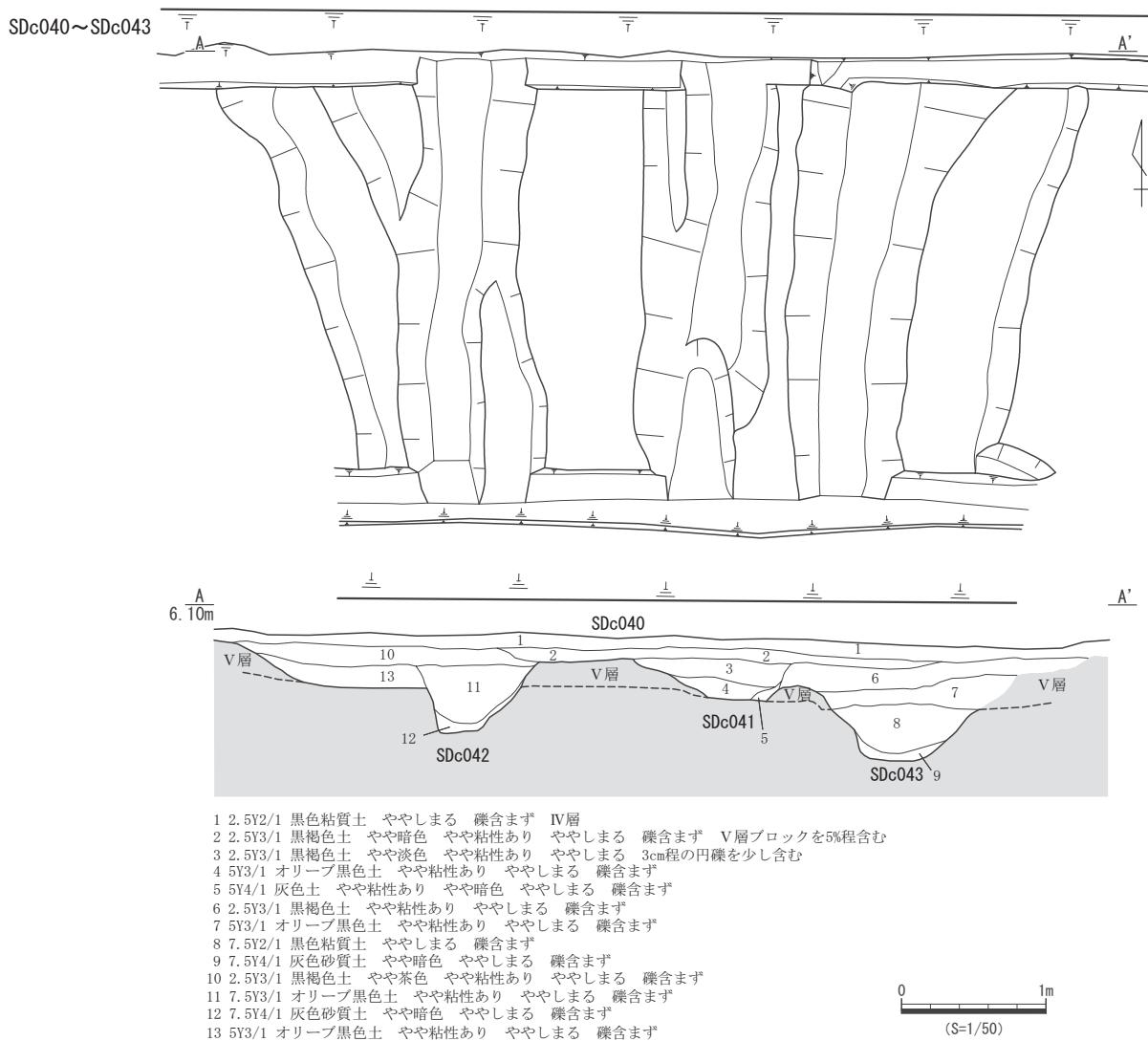


図82 SDc040~SDc044

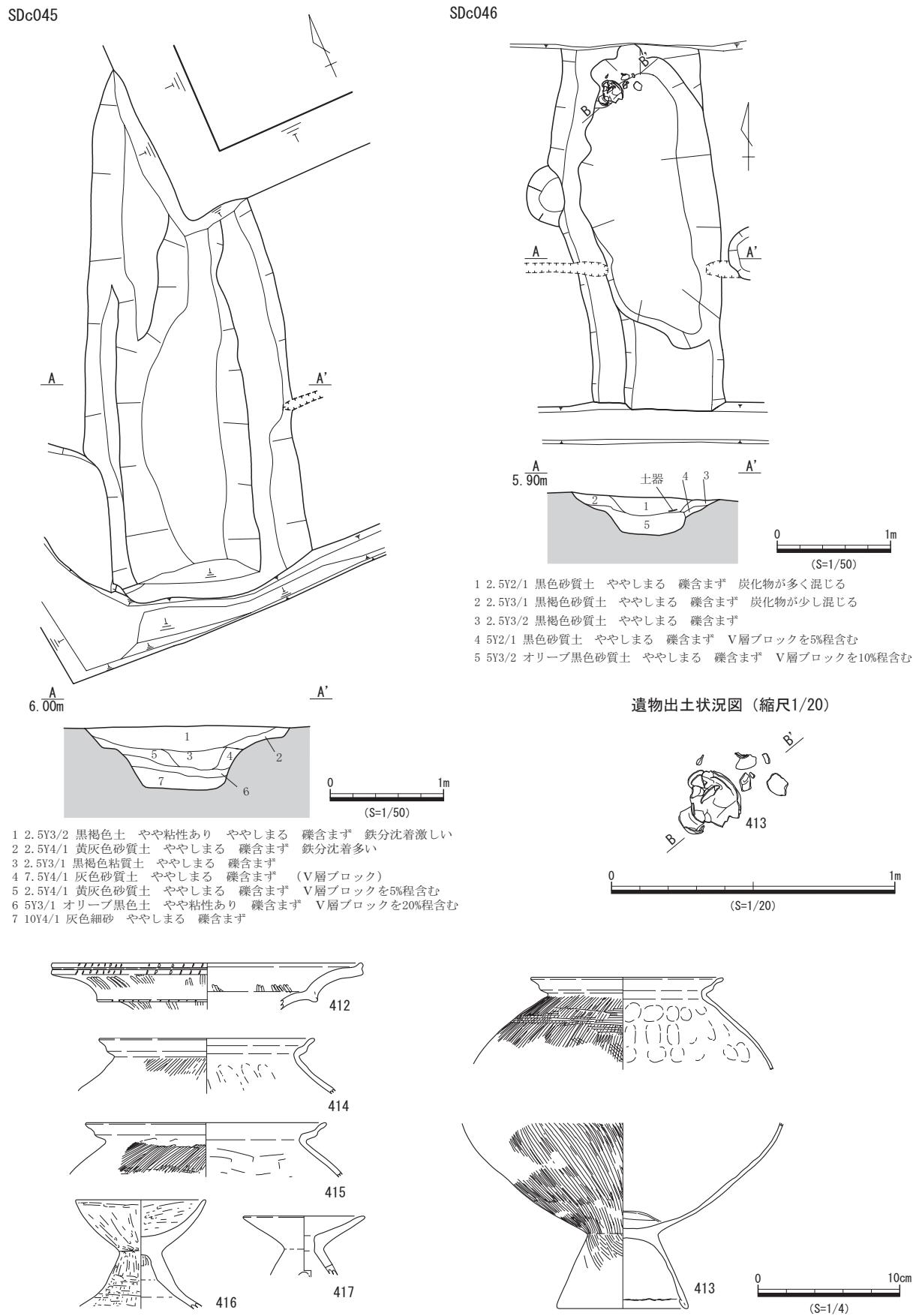


図83 SDc045・SDc046

に傾く溝状遺構である。発掘区外に延びるため全長は不明であるが、幅1.84m、深さ0.61mでやや深く、壁面にはテラス状の段を持つ。埋土は7層に分層したが、埋土5層、6層にはV層ブロックが含まれ、埋土4層は壁面のV層が崩落したものと思われるため、自然に埋没した可能性が高い。なお、SDc045の約3m東に、南北方向の溝状遺構SDc046があるが、これらとSDc031中部との間約18mの空間は、東西方向の溝状遺構が重複し、遺構密度が高くなっている。このことから、SDc045とSDc046の西側と東側では、土地利用に違いが認められ、土地を区画するための溝状遺構である可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土中に土器片が散在して出土したが、小破片が多く、図示可能な遺物はなかった。

時期 V層上面で検出したこと、出土した土器片の時期から弥生時代～古墳時代前期と思われる。

SDc046（図83）

検出状況 07_7地点の南西部に位置し、V層上面で検出した。平面形は比較的明瞭で、N5°Wの方向に傾く溝状遺構である。発掘区外に延びるため全長は不明であるが、幅1.44m、深さ0.44mでやや深く、壁面にはテラス状の段を持つ。埋土は5層に分層したが、埋土4層、5層にはV層ブロックが含まれ、出土した遺物も多く廃棄されたような状況であることから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。前述のSDc045と同様に、土地を区画するための溝状遺構と思われる。

遺物出土状況 埋土中に土器片が散在して出土したが、埋土5層上面から1層にかけてS字状口縁台付甕が廃棄されたような状態で出土した。

出土遺物 出土した土器のうち6個体を実測したが、いずれもVII期のものと思われる。412は二重口縁壺の口縁部片で、口縁端部と屈曲部に刻みを施す。413～415はS字状口縁台付甕C類と思われる。416は小型で碗状の壺部に、強く外反する脚部が付く。417は小型の器台で、口縁部がやや内湾する。

時期 出土した土器から、VII期に埋め戻されたものと思われる。

SDc051（図84）

検出状況 07_7地点の南部に位置し、V層上面で検出した。複数の遺構が重複し、その関係が当初は把握できなかつたため、複数の遺構を合わせて掘削しており、掘削途中で個々の遺構を把握したような状態であった。そのため平面形は不明瞭で、N70°Eの方向に傾く溝状遺構である。発掘区外に延びるため全長は不明であるが、幅0.83m、深さ0.33mで、壁面は開く。8層に分層したが複雑な堆積で、一部にV層ブロックが含まれることから、人為的に埋め戻された可能性がある。この溝の西端については不明であるが、SDc031に向かって傾斜することから、排水目的の溝状遺構である可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土中に土器片が散在して出土したが、小破片が多く、図示可能な遺物はなかった。

時期 V層上面で検出したこと、重複関係からVII期～VIII期と思われるSDc054よりも古いと思われるここと、出土した土器片の中にS字状口縁台付甕片があることなどからVI期頃と思われる。

SDc053（図84）

検出状況 07_7地点の南部に位置し、V層上面で検出した。複数の遺構が重複しする中であったため、平面形は不明瞭で、ほぼ東西方向の溝状遺構である。他の遺構に削平されるため全長は不明であるが、幅1.40m、深さ0.62mで、壁面は開く。埋土は4層に分層したが、黒色土ブロックやV層ブロックが含まれることから、人為的に埋め戻された可能性がある。この溝状遺構の西端はSDc055に削平される

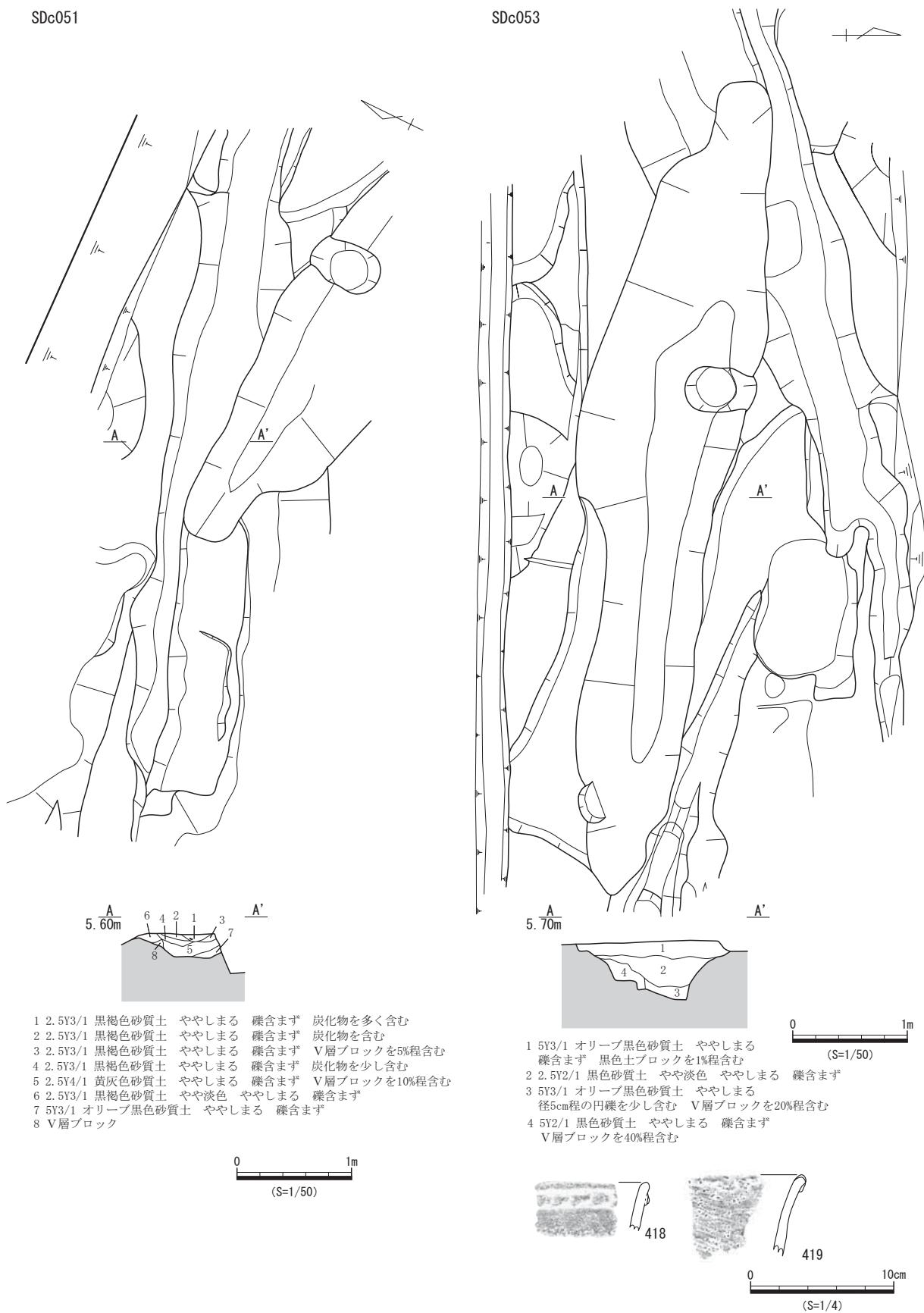


図84 SDc051・SDc053

が、SDc031へ流れ込んでいたものと思われる。

遺物出土状況 埋土中に土器片が散在して出土したが、小破片が多い。縄文土器片が出土していたためこれを図示したが、混入した土器と思われる。

出土遺物 418・419は縄文時代晚期後半の突帯文土器である。深鉢の口縁部に刻みを付けた突帯を巡らせる。

時期 V層上面で検出したこと、出土した土器片の中にS字状口縁台付甕片があることなどからVI期頃と思われる。

SDc054（図85・86）

検出状況 07_7地点の南部に位置し、V層上面で検出した。複数の遺構が重複しする中であったため、平面形は不明瞭で、N65° Eの方向に傾く溝状遺構である。発掘区外に延びるため全長は不明であるが、幅1.18m、深さ0.51mで、壁面は開く。埋土は7層に分層したが、一部にV層ブロックが含まれることから、人為的に埋め戻された可能性がある。当初はSDc051が新しいと判断して掘削したが、土層観察により先後関係は逆であることが判明した。この溝の東端は発掘区外となるが、SDc031へ流れ込んでいたものと思われる。

遺物出土状況 埋土中に土器片が散在して出土したが、埋土2層から5層に特に多く、土器片が上下層間で接合しており、廃棄されたものと思われる。

出土遺物 420は、口縁部が内湾するVI期～VII期頃の壺G2a類である。421はVIII期と思われる壺で、口縁部が外反し、胴部は下位で張って、底部はやや突出して凹み底となる。422はS字状口縁台付甕C類と思われる。423は剥片の全面を二次調整し、つまみ部と錐部を作出する石錐である。

時期 出土した土器から、VIII期に埋め戻されたものと思われる。

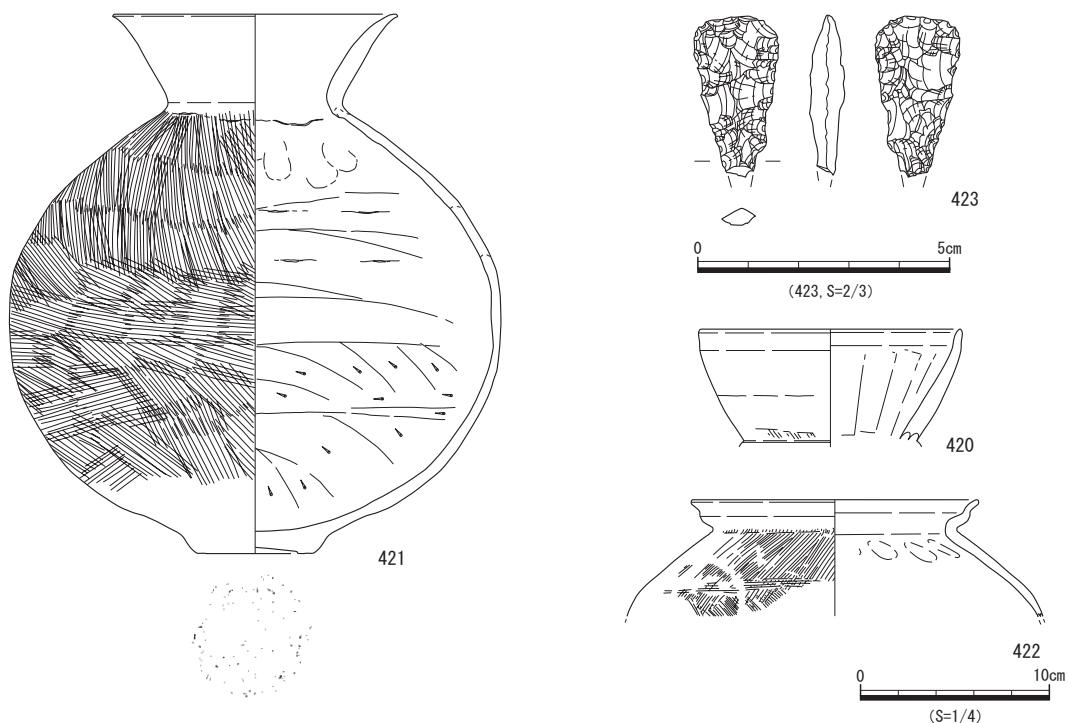


図85 SDc054出土遺物

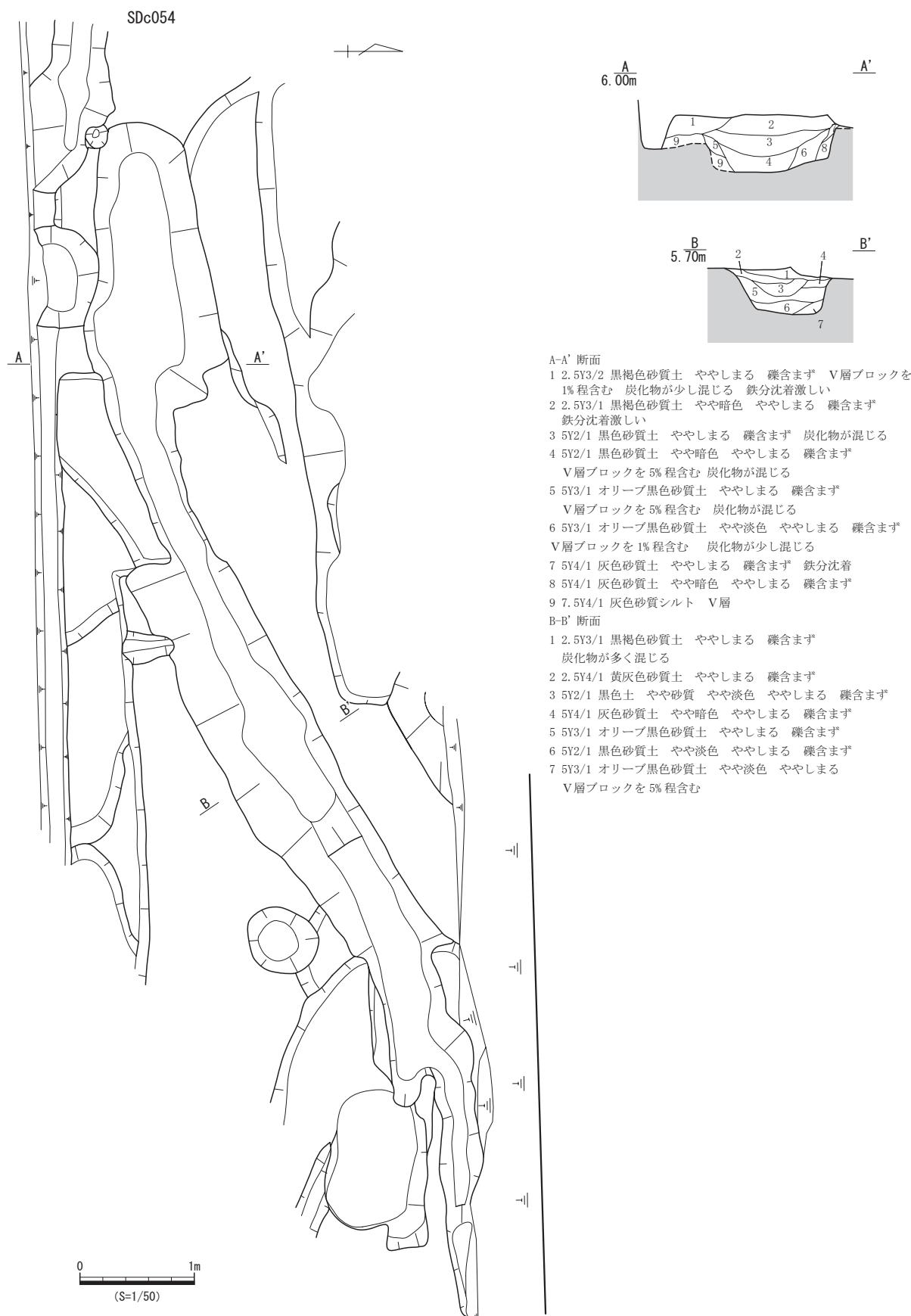


図86 SDc054

SDc055 (図87)

検出状況 07_7地点の南部に位置し、V層上面で検出した。複数の遺構が重複しする中であったため、平面形は不明瞭で、ほぼ東西方向の溝状遺構であるが、SDc053と重複する部分でやや屈曲する。西側は他の遺構と重複し不明であるが、幅0.80m、深さ0.69mで、壁面は開く。埋土は3層に分層したが、一部にV層ブロックが含まれることから、人為的に埋め戻された可能性がある。屈曲部の北側壁面に杭が打ち込まれていたが、この遺構に伴うものか否か不明である。この溝の西端は他の遺構によって削平されているが、東端部はSDc031につながる。

遺物出土状況 埋土中に土器片が散在して出土したが、小破片が多く図示できなかった。

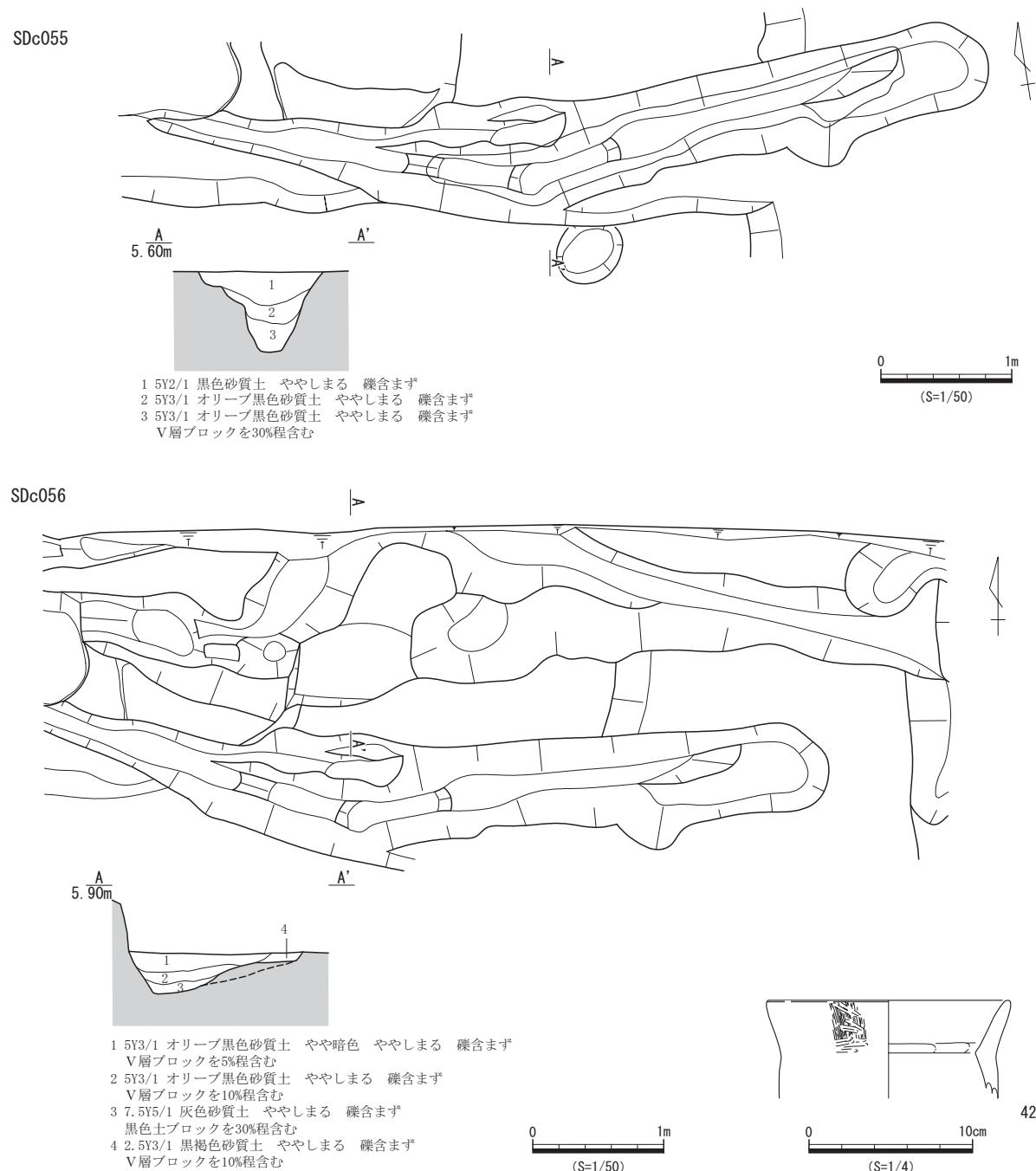


図87 SDc055・SDc056

時期 V層上面で検出したこと、出土した土器片の中にS字状口縁台付甕片があることなどからVI期頃と思われる。

SDc056（図87）

検出状況 07_7地点の南部に位置し、V層上面で検出した。複数の遺構が重複しする中であったため、平面形は不明瞭で、ほぼ東西方向の溝状遺構であるが、部分的に発掘区外となる。検出部での幅1.20m、深さ0.62mで、壁面は開く。埋土は4層に分層したが、各層にV層ブロックが含まれることから、人為的に埋め戻された可能性がある。この溝の西端は他の遺構によって削平されているが、東端部はSDc031につながる。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して出土したが、図示したのは1点だけである。

出土遺物 424は頸部の屈曲が弱く、口縁部は直線的に開く壺J類で、VI期～VII期のものと思われる。

時期 出土した土器からVII期頃に埋め戻されたものと思われる。

5まとめ

この地点は、C地区北部に位置し、国道21号を挟んで北側はB地区となる。多数の遺構を検出したが、このうちIV層上面の小土坑群は、08_11地点の小土坑群と類似したものである。ただし、列をなす方向が、この地点では南北方向となるが、08_11地点は東西方向に並んでいる点が異なる。また、それが残された時代も、出土遺物から中世以降とできる程度である。V層上面の遺構は、弥生時代中期の方形周溝墓、弥生時代後期から古墳時代前期の土坑や溝状遺構、古墳時代前期の前方後方形周溝墓などがある。

弥生時代中期の方形周溝墓は4基検出したが、うち3基は発掘区南西部において南北に並んでいた。もう1基は、発掘区北東部にあり、08_10地点の方形周溝墓群に近い位置にある。いずれの方形周溝墓も、全体を検出したのではなく、L字形やコ字形に屈曲した溝による区画の存在により、方形周溝墓と判断したものである。供献されたと思われる土器がなく、時期決定に困難が伴うが、出土した土器は弥生時代中期頃と思われるものが多く、これらの方形周溝墓の時期を示すものと判断した。

この発掘区を南北に縦断するように検出したSDc031は、国道を挟んで北側のB地区でSD0381とした大溝の延長部分と思われる。この溝の掘削時期については、SDc031中部の底面で検出した杭の放射性炭素年代測定により紀元前4世紀初頭から紀元前3世紀前半の較正年代が示された。これは赤塚氏がまとめられた朝日遺跡における年代測定結果（赤塚2009）と比較すると、貝田町式に相当すると思われる。また、SDc031北部での相違的な出土遺物の時期傾向から、埋土下層の堆積がIV期と考えられる点と大きく矛盾しないと思われる。止水し沼地状態になる中層が堆積するV期～VI期には、このSDc031に向かって東西方向の溝が掘削され、排水が行われていたと思われる。排水する理由については、溝状遺構や土坑を確認しただけのため明確にできないが、VI期からVII期に遺構や遺物が増加していることと関係があると思われる。

C地区の中で、最もV層上面での標高が高い場所で検出したのが、SZc05とした前方後方形周溝墓である。標高が高いため後世の削平を強く受けており、前方部の溝を検出したに過ぎないが、その中から多くの遺物が出土し、VII期末～IX期に造営されたと思われる。この時期は、SDc031が埋没する最終的な段階であり、C地区における遺構数が減少していく時期である。集落として廃絶された後、やや高い自然堤防上に、こうした前方後方形周溝墓が造営されたと思われる。

第4節 07_9地点・09_9地点

C地区北東部、08_11地点の南側に位置する調査地点で、調査面積は409m²である。本線橋脚が位置するが、東側には市道高屋桧線が走り、大垣市教委が1998年に発掘調査を行った場所に隣接する。西側には07_6地点や07_4・5地点がある。

1 層序

09_9地点北壁土層を図示した（図88）。基本層序のI層からV層を確認し、遺構検出面はIV層上面とV層上面となる。遺構埋土となる9層、10層を除き、ほぼ水平に堆積しているが、4層～6層は耕地整理に伴う盛土層と思われる。

2 包含層出土遺物（図89）

この地点で出土した遺物は、総数6,387点であるが、このうちI層～II層は16点、III層は80点、IV層は5,554点で、遺構出土遺物は737点である。包含層から出土した遺物は、石器や木片が各3点と土製品（瓦片）1点の他土器類で、須恵器3点、灰釉陶器9点、中世陶器類5点を除くと、弥生土器や土師器であった（表16）。石器は砥石片が2点の他、平坦な面を持つ軽石が1点であった。弥生土器や土師器はV期以降のものが大半で、IV期と思われる土器片が少量確認できたほか、それ以前のものは確認できなかった。

包含層出土遺物として実測したのは、IV層から出土した弥生土器・土師器5点で、VI期からVII期のものと思われる。425は壺A1類で、口縁端部を下方に拡張して擬凹線を施す。口縁部内面は内湾し、刺突文を施す。426は壺C類で、口縁部がやや内湾して立ち上がる。427は甕D類で、S字状口縁台付甕B類である。428は鉢B類で、底部に径2cmほどの穿孔を開ける。429は、口縁部が直線的に開く器台C1類である。

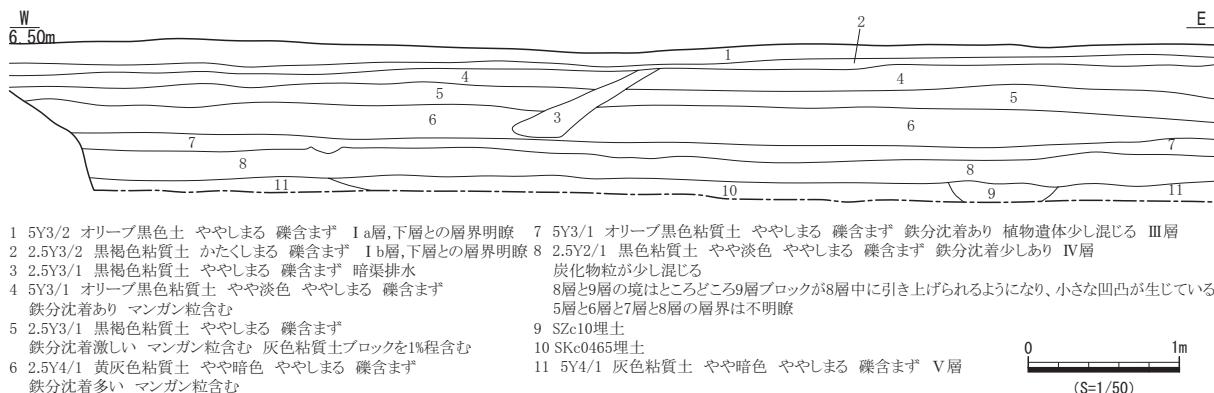


図88 07_9-09_9地点東壁土層図

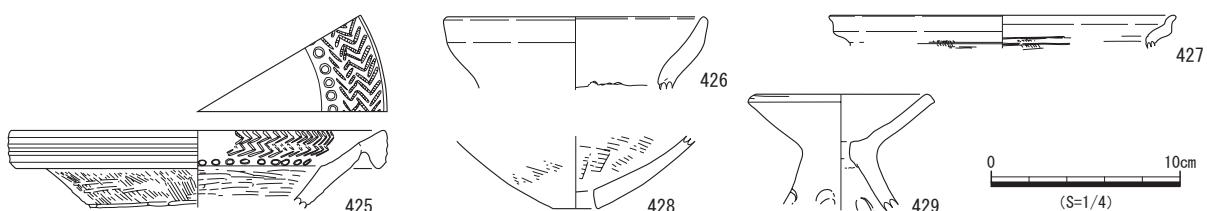


図89 07_9-09_9地点包含層出土遺物

表16 07_9·09_9地点出土遺物数量

種別 場所	縄文 土器	弥生土器 ・土師器	須恵器	灰釉 陶器	山茶碗・ 陶磁器類	土製品	石器・ 石製品	金属 製品	木製品	合計
I～II層	0	14	0	0	2	0	0	0	0	16
III層	0	72	0	8	0	0	0	0	0	80
IV層	0	5,538	3	1	5	1	3	0	3	5,554
IV上遺構	0	59	0	0	1	0	0	0	0	60
V上遺構	0	676	0	0	0	0	1	0	0	677
合計	0	6,359	3	9	8	1	4	0	3	6,387

3 IV層上面の遺構と遺物

IV層上面では、土坑10基と溝状遺構3条を検出した（図90）が、このうち耕作に関係する可能性があるSDc059を図示した。

SDc059（図91）

検出状況 東西方向の溝状遺構で浅く、壁面は開く。埋土は单層であるが、土層下部で基盤となるIV層が巻き上げられたように、ブロック状に持ち上がる事から、耕作に関係する可能性が考えられた。C地区におけるIV層上面の遺構では、明確に水田区画を示す遺構は限られているものの、各所に水田

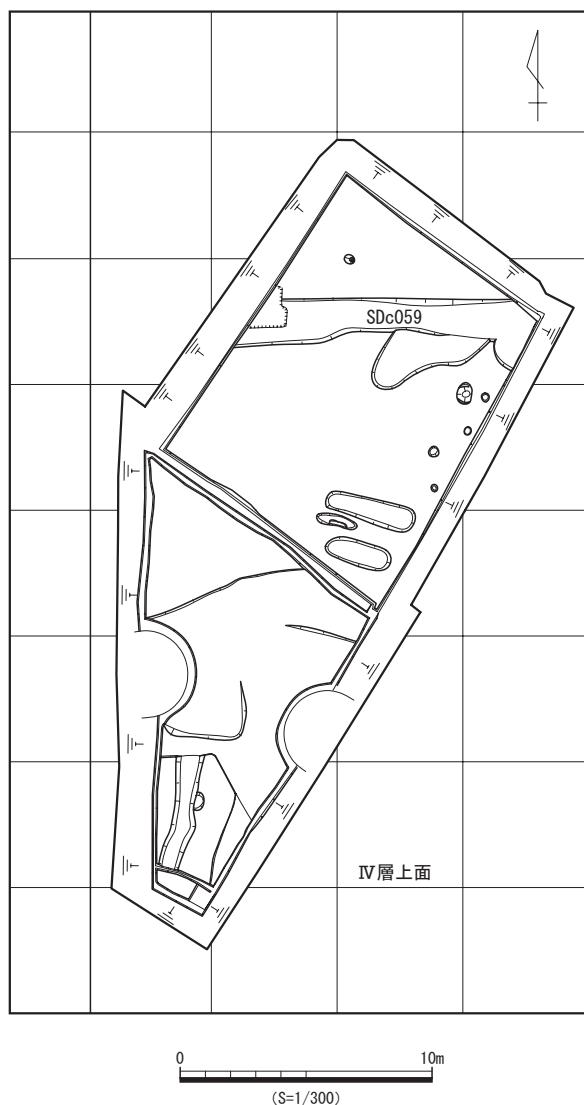


図90 07_9·09_9地点IV層上面平面図

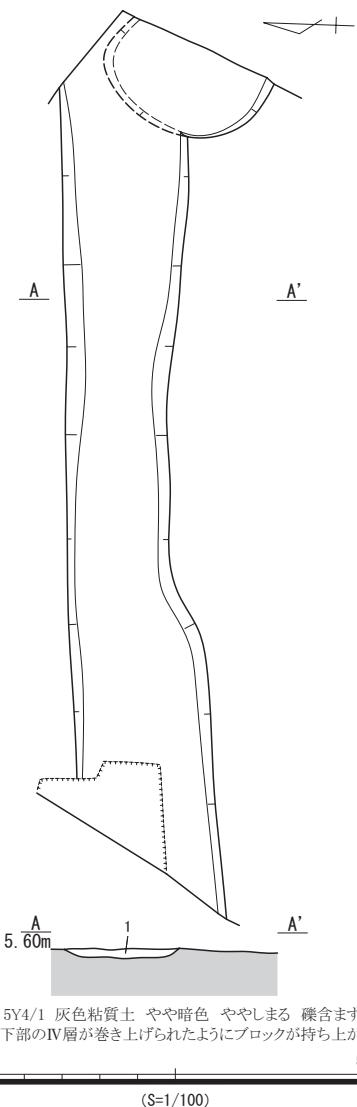


図91 SDc059

遺構に伴う鋤溝状遺構や、このような耕起に伴う可能性がある堆積を示す遺構が少量確認できる。

遺物出土状況 埋土中から少量の遺物が出土したが、図示可能なものはなかった。

時期 出土遺物からは推定できないが、IV層上面で検出したこと、07_7地点などの小土坑列が中世の可能性があることなどから、古墳時代から中世の頃と思われる。

4 V層上面の遺構と遺物

V層上面では、方形周溝墓1基、土坑87基、柱穴又は柱穴状の小穴37基、溝状遺構4条を検出した(図92)。遺物が出土しない遺構は4割ほどあり、出土しても土器の小片が少量出土する程度で、性格不明のものが大半であった。柱穴状の小穴についても、形状は柱穴のように深いものであったり、柱痕跡が確認できるものがあったが、規則的な配置は認められず、建物遺構として把握することができなかった。方形周溝墓についても、2条の溝状遺構がL字形の位置関係となることから判断したが、供獻土器もなく、出土した遺物は少ない。

SZc10 (図93)

検出状況 V層上面で南西の一部を検出したが、他の部分は調査区外となる。平面形は他の遺構との重複もあるためやや不明瞭であったが、2条の溝状遺構がL字形の配置となるため、方形周溝墓の一



図92 07_9-09_9地点 V層上面平面図

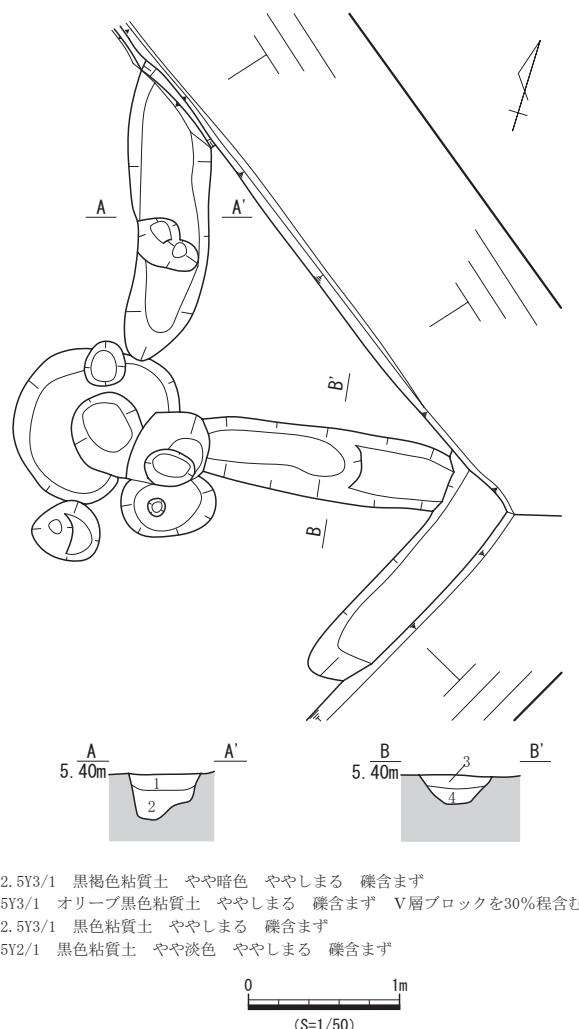


図93 SZc10

部と判断した。

方台部 検出した南辺部及び西辺部は比較的直線的で、方台部の形状は方形若しくは長方形と思われる。墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝 西溝及び南溝を検出したが、いずれも一部で調査区外へ続いている。確認した範囲では比較的直線的で、南西隅部は接続せず途切れている。埋土は2層に分層したが、ほぼ水平堆積であった。周溝の幅が、西溝0.48m、南溝0.54mと他の方形周溝墓と比較して狭い。

遺物出土状況 周溝埋土上層から土器片が9点出土しただけであり、いずれも小破片であったため、図示可能な遺物はなかった。

時期 周溝内埋土から出土した土器片の中に、内面多条沈線の高坏片があったため、VI期以降の可能性があるが、埋土上層から出土したものであり、埋没の最終段階に混入した可能性が高い。その場合は、他の方形周溝墓と同様に弥生時代中期の可能性が考えられる。

SKc0424（図94）

検出状況 07_9地点の東部に位置し、やや傾斜したV層上面で検出した。平面形は比較的明瞭で、検出時に土器片や炭化物が多く確認できた。形状は不整長楕円形で、壁面の傾斜はやや緩く、底面は比較的平坦である。埋土は2層に分層したが、炭化物が多く混入しており、人為的に埋め戻された可能性がある。このため、土坑墓の可能性あると思われるが、穴の規模が小さいことから性格不明の穴としておく。

遺物出土状況 検出時及び埋土1層中に土器片が多く出土した。特にS字状口縁台付甕片が多く、高坏や小型の甕もある。

出土遺物 出土した土器3個体を図示したが、いずれもVII期のものと思われる。430と431は甕D類といわゆるS字状口縁台付甕A類と思われる。432は小型の甕E6類で、非常に短い口縁部は内湾する。

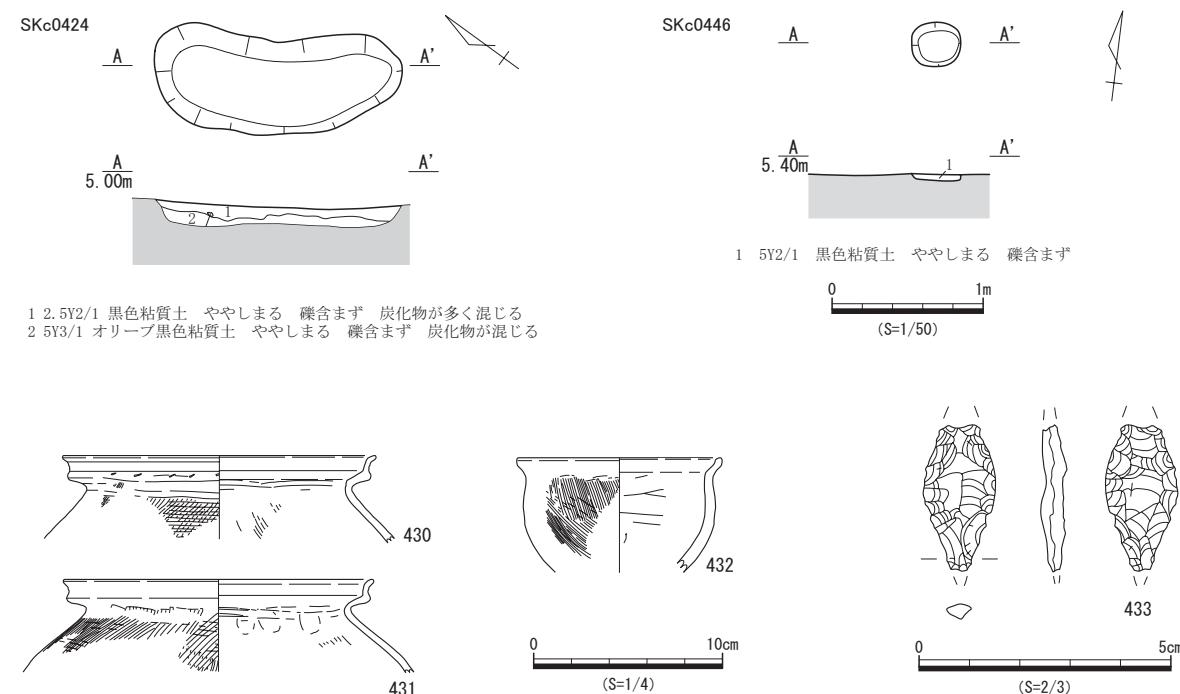


図94 SKc0424・SKc0446

時期 出土遺物は人為的に埋められた可能性が考えられるため、遺構の時期はVI期と思われる。

SKc0446 (図94)

検出状況 09_9地点の東部に位置し、V層上面で検出した。平面形はやや不明瞭であったが、径0.3m前後の不整円形で浅い穴である。埋土は単層で、性格は不明である。

遺物出土状況 埋土中から少量の土器片と石錐が出土した。

出土遺物 433は全面を二次調整した石錐であるが、先端部と基部が欠損し、両面に大きな剥離が残る。

時期 V層上面で検出したことから、弥生時代から古墳時代のものと思われる。

5 まとめ

この地点は、C地区の中では北東部、08_11地点の南側に位置することから、同様の遺構を検出した。IV層上面では小土坑群は確認できなかったが、耕作に関する可能性が考えられる溝状遺構があり、具体的な時期は不明であるが、水田などの耕作が行われていた可能性がある。V層上面では方形周溝墓1基を検出したが、C地区で多数確認した弥生時代中期のものではなく、VI期以降のものである可能性がある。しかし、東側の大垣市教委調査区では、弥生時代中期の方形周溝墓群が検出されており、埋土上部から弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が堆積していたこと（大垣市教委2003）からすれば、このSZc10についても、弥生時代中期のものと考える方が蓋然性は高いと考えられる。これらの方形周溝墓の他に、08_11地点で検出したSKc0097のように、土器片がまとまって出土した小規模な不整長楕円形の土坑（SKc0424）がある。時期は異なるものの、性格の類似性があると思われるが、その性格付けについては墓の可能性を指摘するにとどめる。

第5節 07_4・5地点・09_20地点

C地区中央部北東側、07_7地点の南側に位置する調査地点で、調査面積は363m²である。本線橋脚が位置するが、南側には市道高屋桧線が走り、大垣市教委が1996年に発掘調査を行った場所に隣接する。西側には09_12地点、東側には07_9地点がある。

1 層序

09_20地点北壁土層を図示した（図95）。基本層序のI層からV層を確認したが、IV層については黒色粘質土で植物遺体を含むIVa層と、黒褐色粘質土のIVb層に分層できる。しかし、IVb層の認識は、土層断面で確認できた部分と、遺構検出時にIVa層を除去しても明確なV層が確認できない部分があったため、IVb層の堆積があるものと判断した部分である。このため作業上は、遺構検出面がIVa層上面とIVb層上面、V層上面となるがIVb層上面とした遺構は、IVa層を除去した段階で確認できたものであり、IVb層の堆積が調査地点全体に広がるものと確認し、遺構面を区別したものではない。なお、土層図左側はSDc031への落ち込みにあたり、その上部ではIII層からIVb層に対応する堆積が複数（11～14層）認められる。これらの層では、黒色粘質土に植物遺体が含まれていたり、黒色腐食土層となっていたりすることから、SDc031が埋没し流れが止まった後の凹地状になった地形において、湿地化して沼地状になった場所に植物が繁茂していた様子がうかがえる。このSDc031への落ち込み部分を含む東肩部においては、堅穴住居跡や掘立柱建物跡を検出したり、SDc031の埋没最終段階において、まとまった土器の廃棄状況が見られたりするなど、墓域が広く展開するC地区の中では、まとまった居住域となっている。

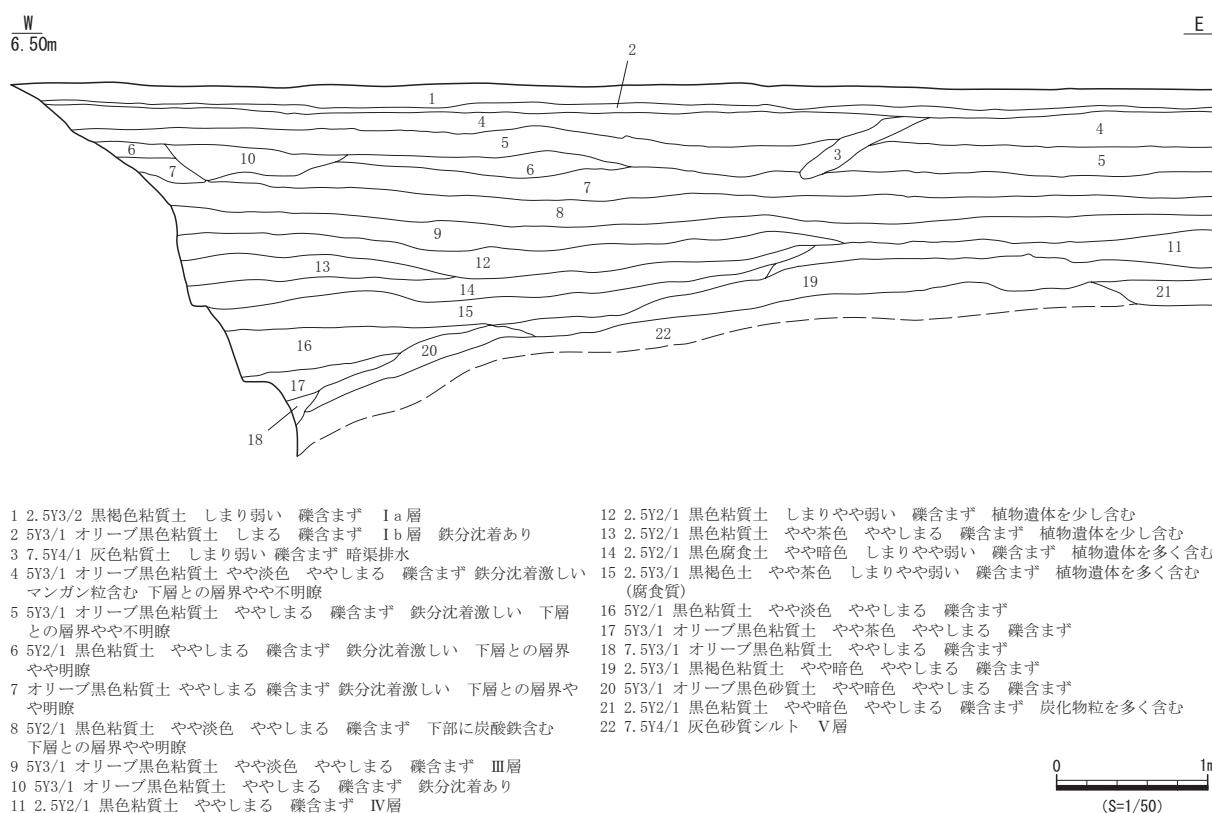


図95 09_20地点北壁土層図

表17 07_4・5地点・09_20地点出土遺物数量

種別 場所	縄文 土器	弥生土器 ・土師器	須恵器	灰釉 陶器	山茶碗・ 陶磁器類	土製品	石器・ 石製品	金属 製品	木製品	合計
I～II層	0	237	1	0	0	0	0	0	0	238
III層	0	1,857	4	0	0	0	1	0	0	1,862
IV層	0	32,463	10	0	3	0	30	2	23	32,531
IV上遺構	0	5,188	2	0	0	0	19	0	6	5,215
V上遺構	0	89,211	18	0	4	1	204	2	4,197	93,637
合計	0	128,956	35	0	7	1	254	4	4,226	133,483

2 包含層出土遺物（図96～図99）

この地点で出土した遺物は、C地区の中で最も多く総数133,483点であるが、このうちI層は238点、III層は1,862点、IV層は32,531点で、遺構出土遺物は93,637点である。包含層から出土した遺物は、石器類31点、金属製品2点、木製品23点の他は土器類で、中世陶器類3点を除くと、弥生土器や土師器であった（表17）。遺構出土の中世陶器類もSDc031埋土上層であり、包含層に含めるべきかもしれない。石器は打製石鏃2点、磨製石斧1点、叩石16点、砥石11点、ガラス製小玉1点であった。弥生土器や土師器はV期以降のものが大半で、IV期以前と思われる土器片が少量確認できた。北側の調査地点とは異なり、灰釉陶器が出土していないのが特徴的である。

包含層出土遺物として図示したのは、IV層から出土した弥生土器・土師器34点と石器類10点、木製品1点で、VI期からX期のものと思われる。434は柳ヶ坪型壺で、口縁部内面に羽状施文が残るが、段が消失しておりIX期のものと思われる。435はVIII期～IX期頃の中型壺で、口縁部がやや内湾して大きく開く。胴部は下部で膨らみを持ち、底部はやや凹み底となる。底部中央に小さな孔が開けられている。436はVIII期と思われる柳ヶ坪型壺の口縁部で、内面が有段状となる。437と438は中型の壺の上胴部と思われる。幾何学的な線刻を施すが、何を表現したものかは不明。胎土からは同一個体片と思われる。439は器種不明で壺、あるいは高壺や器台の口縁部と思われる。精緻な胎土で薄手の作りであるが、内外面に赤彩と細かな波状文を4～5段施す。口縁部外面には突帯を貼り付ける。440～443はX期の宇田甕で、口縁端部が三角形状に肥厚する。440は内面が浅く凹み宇田甕の中でも古手か。444は小型のS字状口縁台付甕D類で、口縁部の屈曲が弱く松河戸I式頃か。445は口縁部が長く直立する山陰系口縁の甕で、VIII期と思われる。446～450はVII期の甕D2類で、口縁部上段が外方に延びる。451は小型の甕E類で、口縁部が短く立ち上がる。452は小型の甕E2類で、口縁部が外反し、胴部がやや下位で張る台付甕である。453はX期と思われる平底の碗で、口縁部がやや外反する。454はVII期と思われる鉢A2類で、455はVII期と思われる小型の鉢G類で、短い口縁部がやや外反する。456と457は、VII期と思われる高壺D1類で、壺部は大きく開く。458はVII期～VIII期と思われる高壺H1類で、壺部が浅い碗状となる。459～464は、VII期～VIII期と思われる器台C2類、465は器台C3類である。466は手捏ね土器B類、467・468は手捏ね土器E類である。

469・470は下呂石製の有茎石鏃で、基部を欠く。471は、棒状の片刃石斧で先端を欠く。472～474は棒状礫を使用した叩石であるが、472は両端、473は長軸の一端と側縁の一部、474は側縁のやや突出した部分に敲打痕がある。475は板状の薄い石材を使用した砥石で、表面に鉄製品によるひつかき傷がある。476は長方形の石材の側面を砥面としているが、敲打痕もある。477は不定方向の線状痕が扁平な面以外にも見られる。478はガラス製小玉、479は銅鏃である。480は建築部材の端材か。

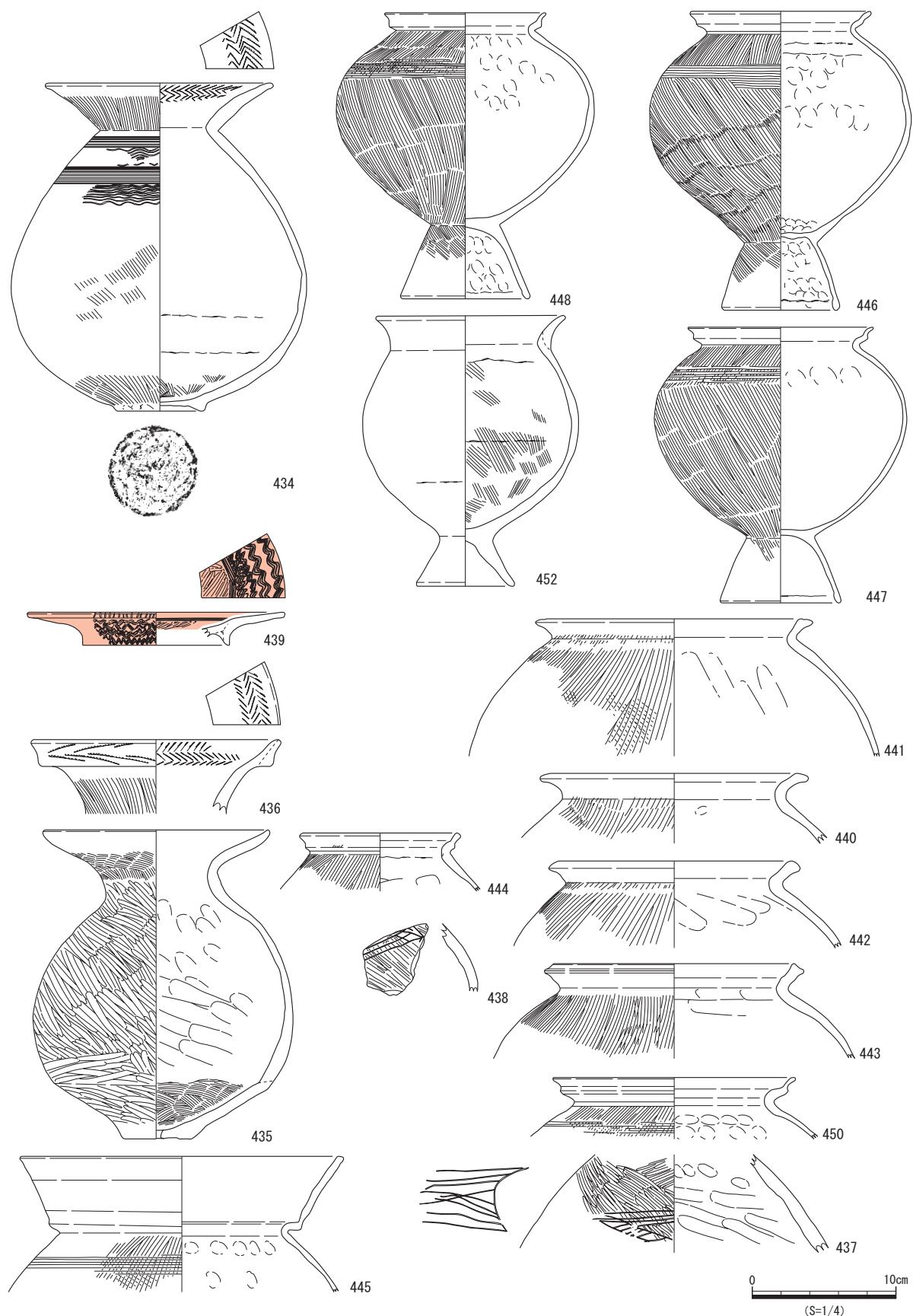


図96 07_4・5地点・09_20地点包含層出土遺物（1）

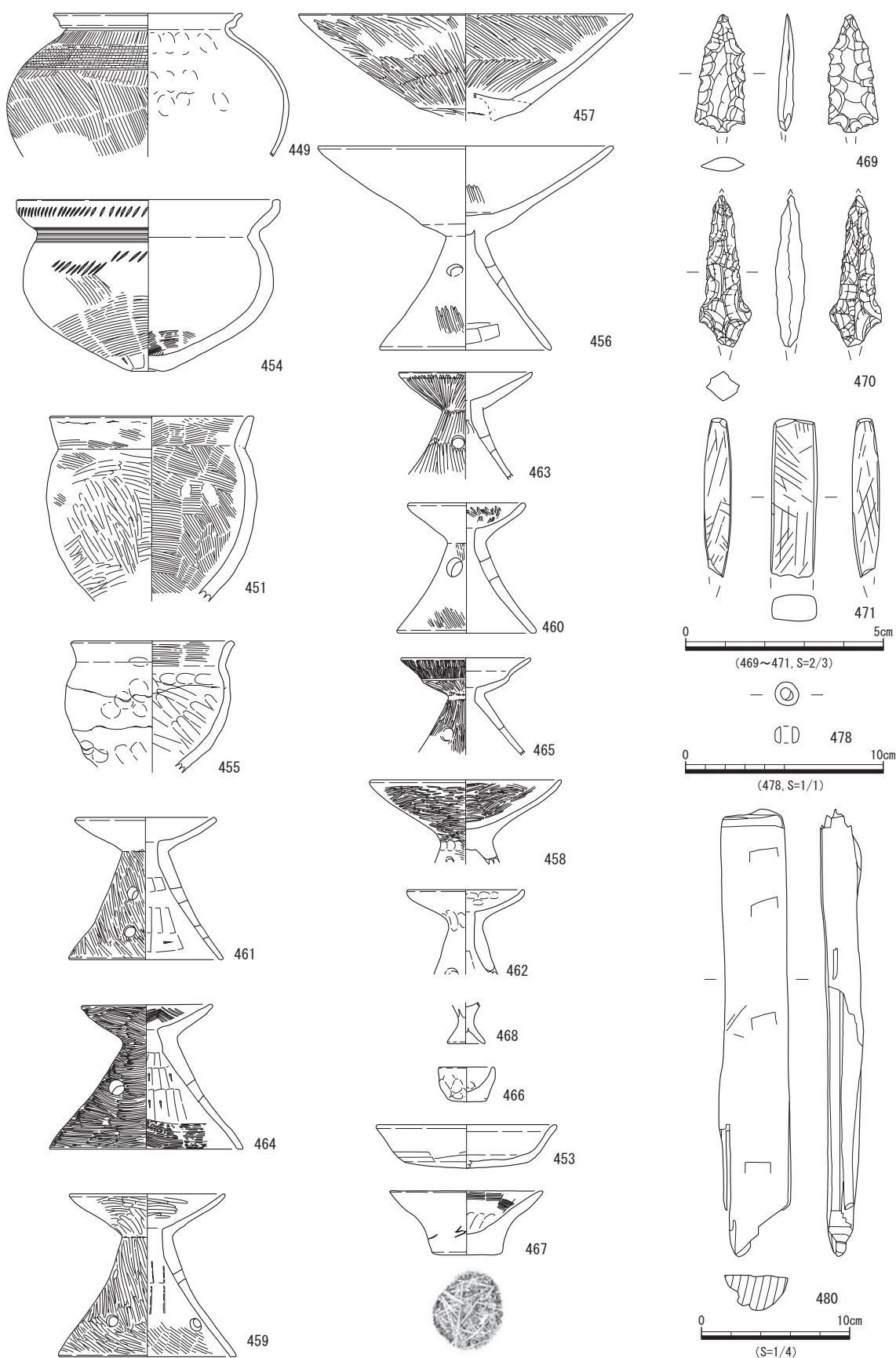


図97 07_4・5地点・09_20地点包含層出土遺物（2）

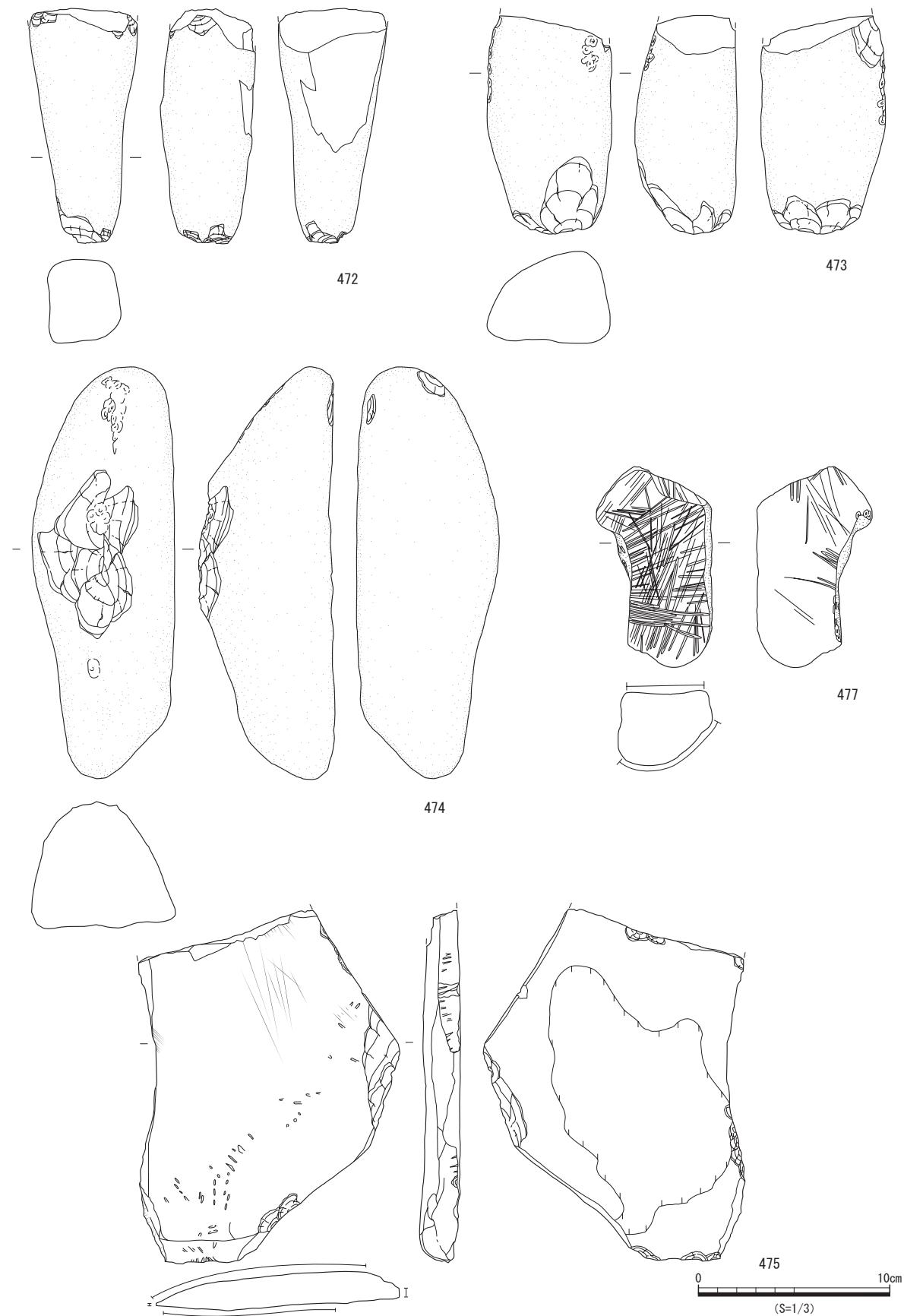


図98 07_4・5地点・09_20地点包含層出土遺物（3）

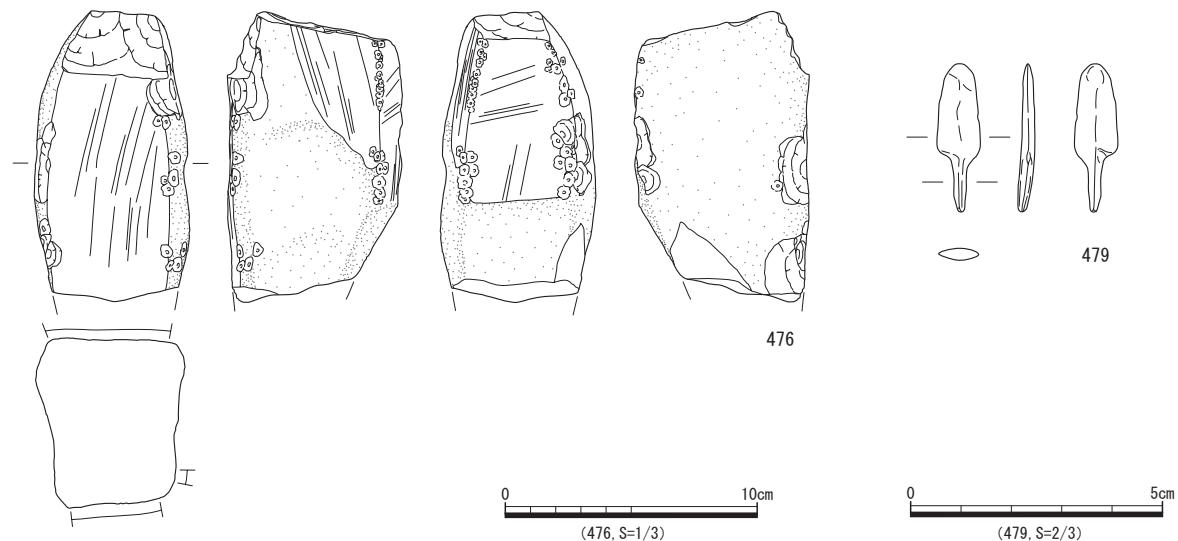


図99 07_4・5地点・09_20地点包含層出土遺物（4）

3 IV層上面の遺構と遺物(図100)

IV a 層上面では土坑9基を検出したが、不整円形や不整橢円形の浅い穴で、出土した遺物も36点と少なく、図示可能なものはなかった。IV b 層上面では土坑13基、溝状遺構3条、集石遺構2基を検出した。なおIV b 層上面の遺構は、V層上面の遺構と合わせて調査しており、全体図はV層上面の図に示している。土器が多く出土した土坑とその南側で検出した集石遺構2基を図示した。

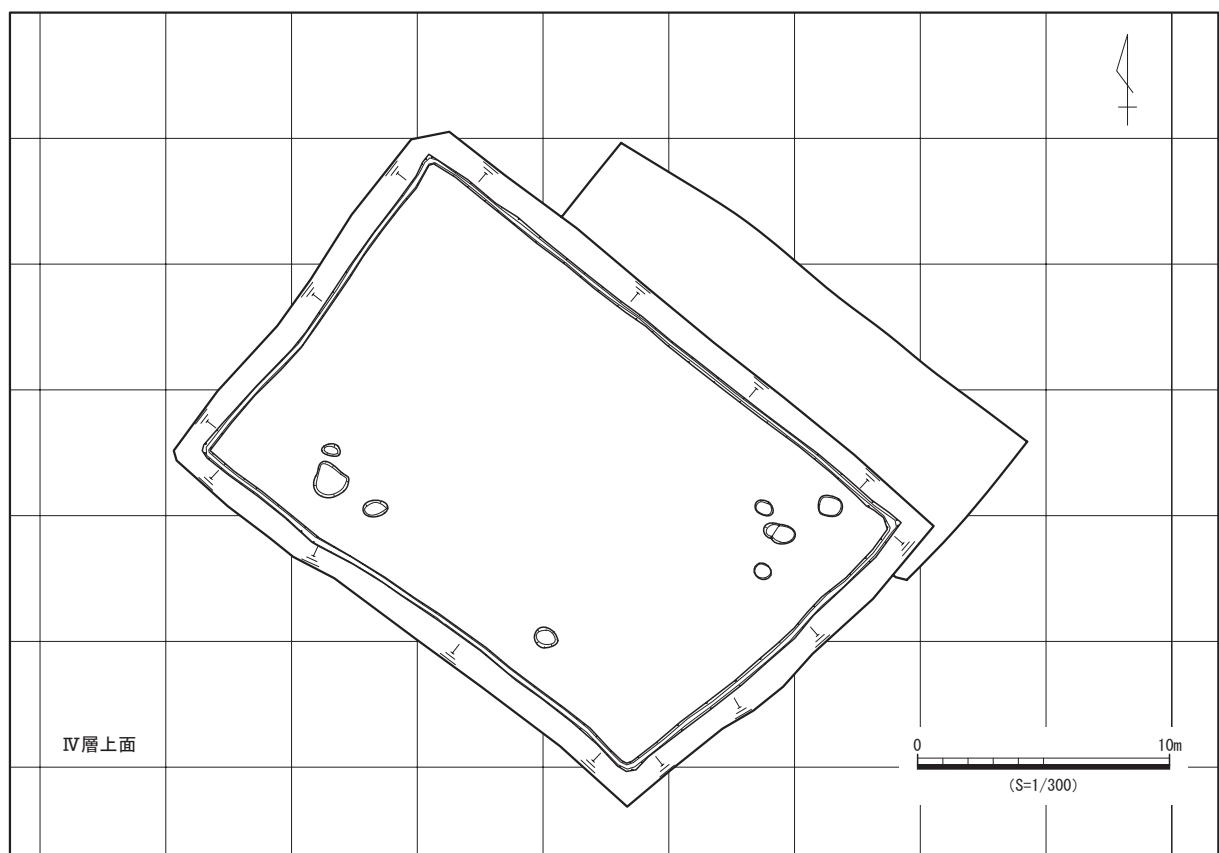


図100 07_4・5地点・09_20地点IV層上面平面図

SKc0528 (図101)

検出状況 07_4・5地点の南部に位置し、IV a 層除去後に確認したが、大半が発掘区外となり形状は不明である。埋土は2層に分層したが、埋土1層はIVa層と類似し、植物遺体を多く含むことから、窪地を土坑として掘削した可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土器片が多く出土したが、小破片が多く図示可能なものはなかった。他に木製品が2点出土したが、このうち1点を図示した。

出土遺物 481は角材状のもので両端を欠くが、建築部材の棧材であろうか。

時期 IV b 層上面で検出したことから、VII期～X期と思われるが、須恵器片が2点出土しているため、これよりもやや新しい時期となることも考えられる。

SKc0529 (図102・103)

検出状況 07_4・5地点の北部に位置し、IV a 層除去後に直線的な南辺を確認したが、北側は発掘区外となり、東側はSDc031へ続いている。検出時に土器片や炭化物が多く確認できた。全体の形状は不明で、底面は比較的平坦である。埋土は2層に分層したが、埋土1層には炭化物や焼土粒が混入していたが、炉跡のような被熱した地面を検出することはできなかった。出土した遺物にはS字状口縁台付甕片が多く、中には台部を打ち欠き底部に穿孔したものもある。SDc031肩部では、壺を中心とする土器集積が確認されており、ともに祭祀的な意味合いを持つ可能性が考えられる。

遺物出土状況 検出時及び埋土1層中に土器片が多く出土した。特にS字状口縁台付甕片が多く、壺や高壺が少ないのが特徴的である。

出土遺物 出土した土器のうち14個体を図示したが、いずれもVII期のものと思われる。石器は叩石や砥石などが5点出土した。482は頸部が外反し、口縁端部が肥厚する壺で、口縁部端部や上胴部に刺

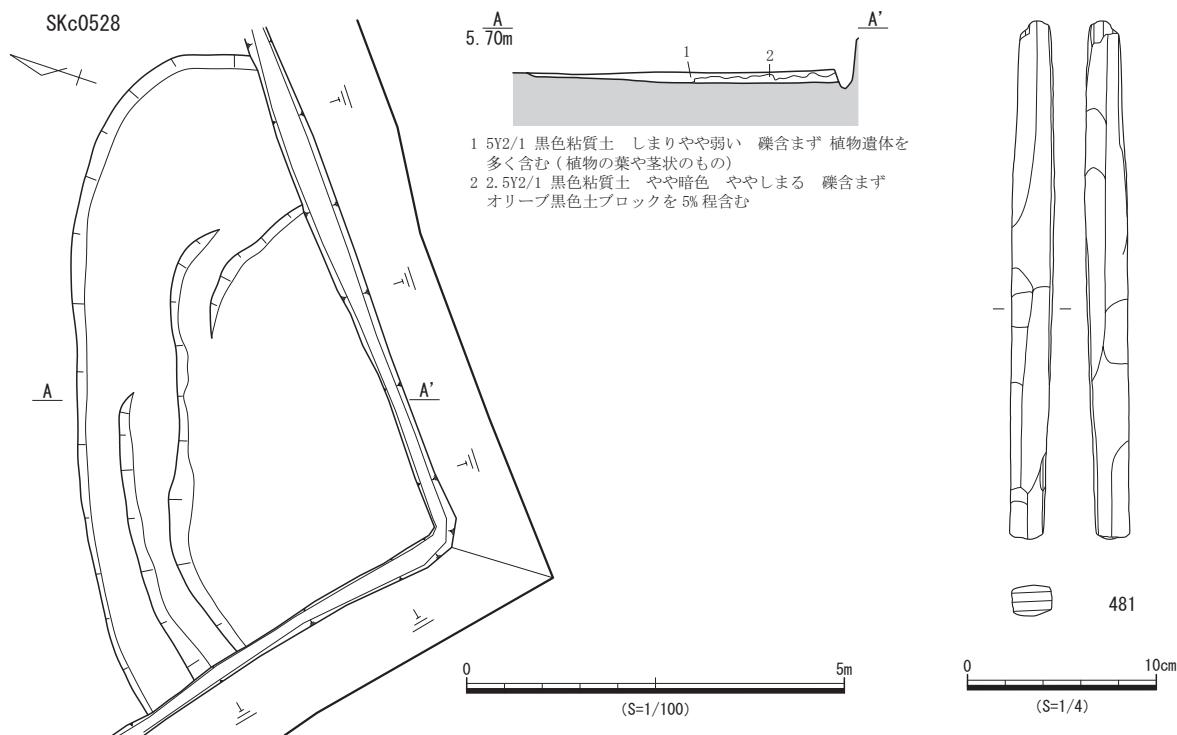


図101 SKc0528

突文を施す。483は小型丸底壺で、小さな半球状の胴部に直線的で大きく開く口縁部を付ける。484～486はS字状口縁台付甕のC類で、口縁部上段が外方へ大きく延びる。487は口縁部が長く直立する山陰系口縁の甕である。488と489はS字状口縁台付甕の底部を穿孔したもので、台部も打ち欠く。490と491は、丸底で浅い碗状の胴部に、段を持って開く口縁部を付ける鉢である。492と493は器台C2類で、494と495は器台C3類である。496は柱材と思われる。

時期 出土したS字状口縁台付甕は、C類と思われるものが大半であり、出土した土器からはVIII期のものと思われる。

SIc01（図104・105）

検出状況 07_4・5地点の北部、SDc031の西肩部でSKc0529の南に位置する。IV a層掘削時に礫や土器片が集中して出土し、IV b層上面で検出した。大型の扁平な砥石と、その近くに小さめの砥石2点や土器片がまとまって出土したため、大型の砥石が原位置性が高いと判断し、集石遺構として扱った。層位的に異なるが、V層上面ではこのすぐ南西側に掘立柱建物跡があり、SDc031の近くが何らかの作業空間であった可能性が考えられる。なお、この南東側で検出したSIc02は叩石が集まったものであり、関連性が高いと思われる。

遺物出土状況 大型の砥石は平坦面を上にして出土したが、土器片は時期幅が見られ、意図的な配置とは言い難い。

出土遺物 出土した土器のうち6個体を図示したが、VII期からIX期のものと思われる。石器は砥石が3点出土した。497は、球形の胴部にやや外傾する直口口縁部を持つ壺で、底部には径1.5cmほどの穿孔がある。498はS字状口縁台付甕D類でIX期と思われる。口縁部上段外方へ大きく伸び、端部が肥

SKc0529

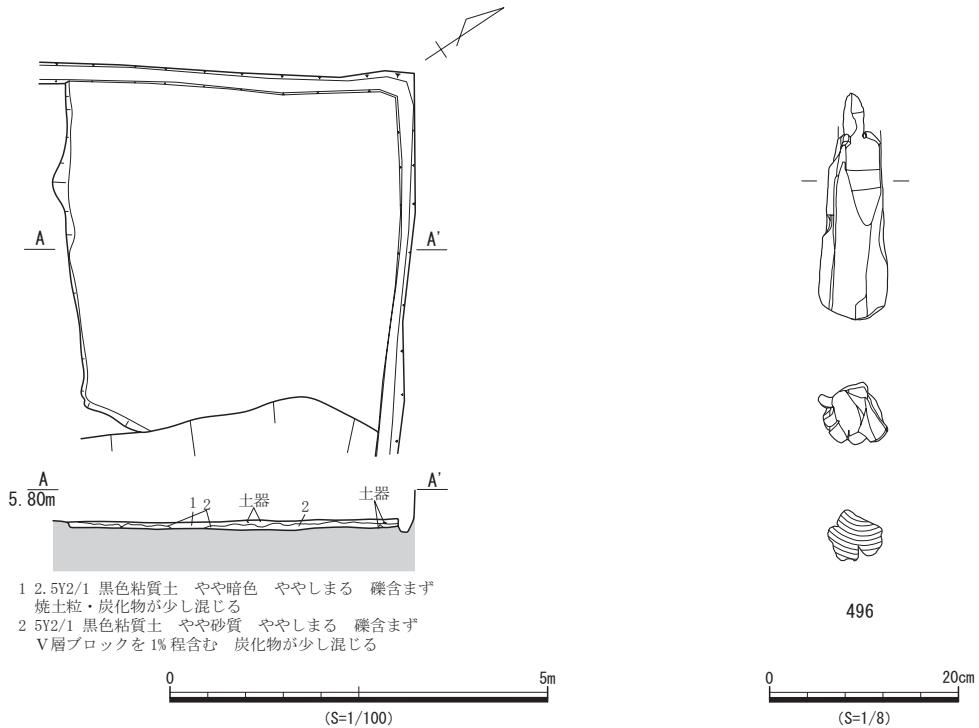


図102 SKc0529

厚して面を持つ。499はS字状口縁台付甕C類でVII期と思われる。500はS字状口縁台付甕の台部である。501はVII期の甕D2類で、口縁部上段がやや外方に延びる。502は坏部が大きく開くVII期の高坏である。503は大型の礫の各面を砥面としており、砥面再生のための敲打痕が残る。504は細長い礫の側面を砥面としている。505は扁平な砥石片で、両面が砥面として使用されている。

時期 出土したS字状口縁台付甕がVII期からIX期のものであること、SDc031南部の両肩部で検出した土器集積の時期から、この集石遺構はVII期からIX期のものと思われる。

SIc02 (図104～図107)

検出状況 07_4・5地点の北部、SDc031の西肩部でSKc0529の南に位置する。IV a層掘削時に礫が集中して出土し、IV b層上面で検出した。径数十cmの範囲に、長さ10cmから20cmほどの長楕円礫11点が集積された状態であり、原位置性が高いと判断し、集石遺構として扱った。層位的に異なるが、V層上面ではこのすぐ南西側に掘立柱建物跡があり、SDc031の近くが何らかの作業空間であった可能性が考えられる。なお、この北西側で検出したSIc01は砥石と土器片が集まったものであり、関連性が高いと思われる。

遺物出土状況 規則的な配置はなく、11点の叩石が集積された状態で出土した。これに伴うと思われる土器はなかった。

出土遺物 11点の叩石を図示した(506～516)。すべて長楕円礫で、長軸の端部や側縁部に敲打痕が認められる。508のみ砥面があり、砥石としても使用されている。こうした叩石は、大型の置き砥石の砥面を再生するために使用したと思われる。

時期 遺物からは不明であるが、SIc01との関係が想定できること、SDc031南部の両肩部で検出した土器集積の時期から、VII期～IX期頃のものと思われる。

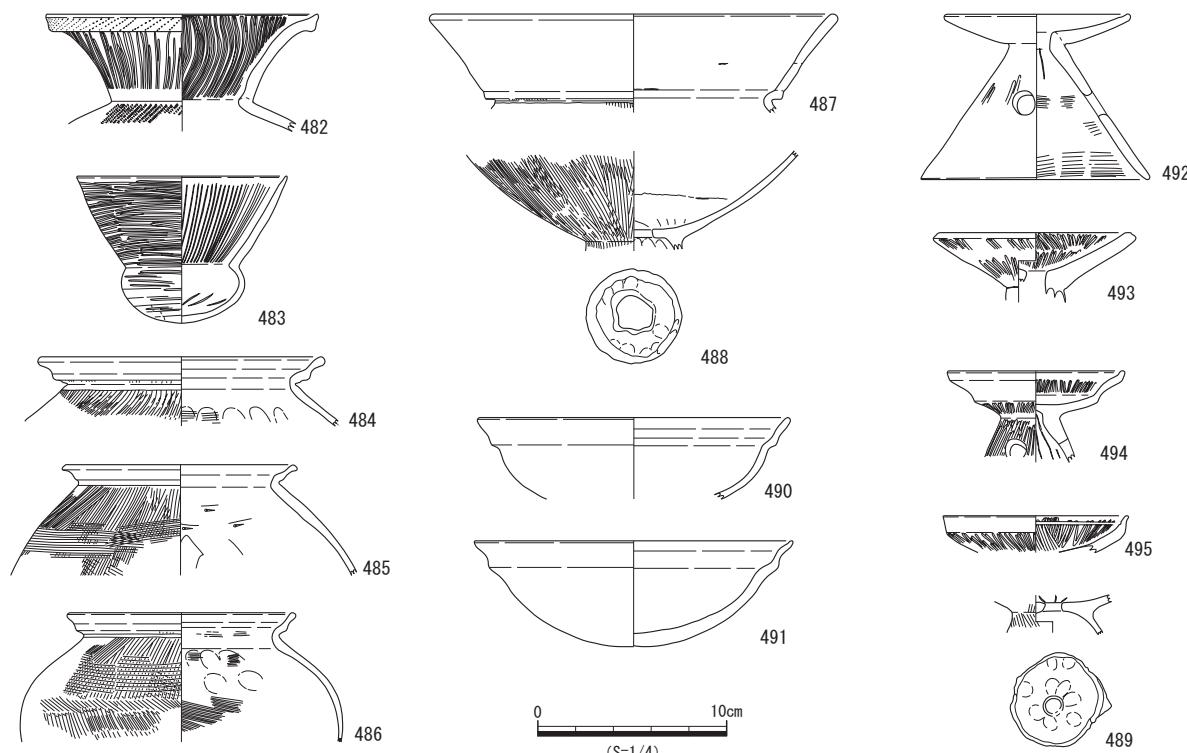


図103 SKc0529出土遺物

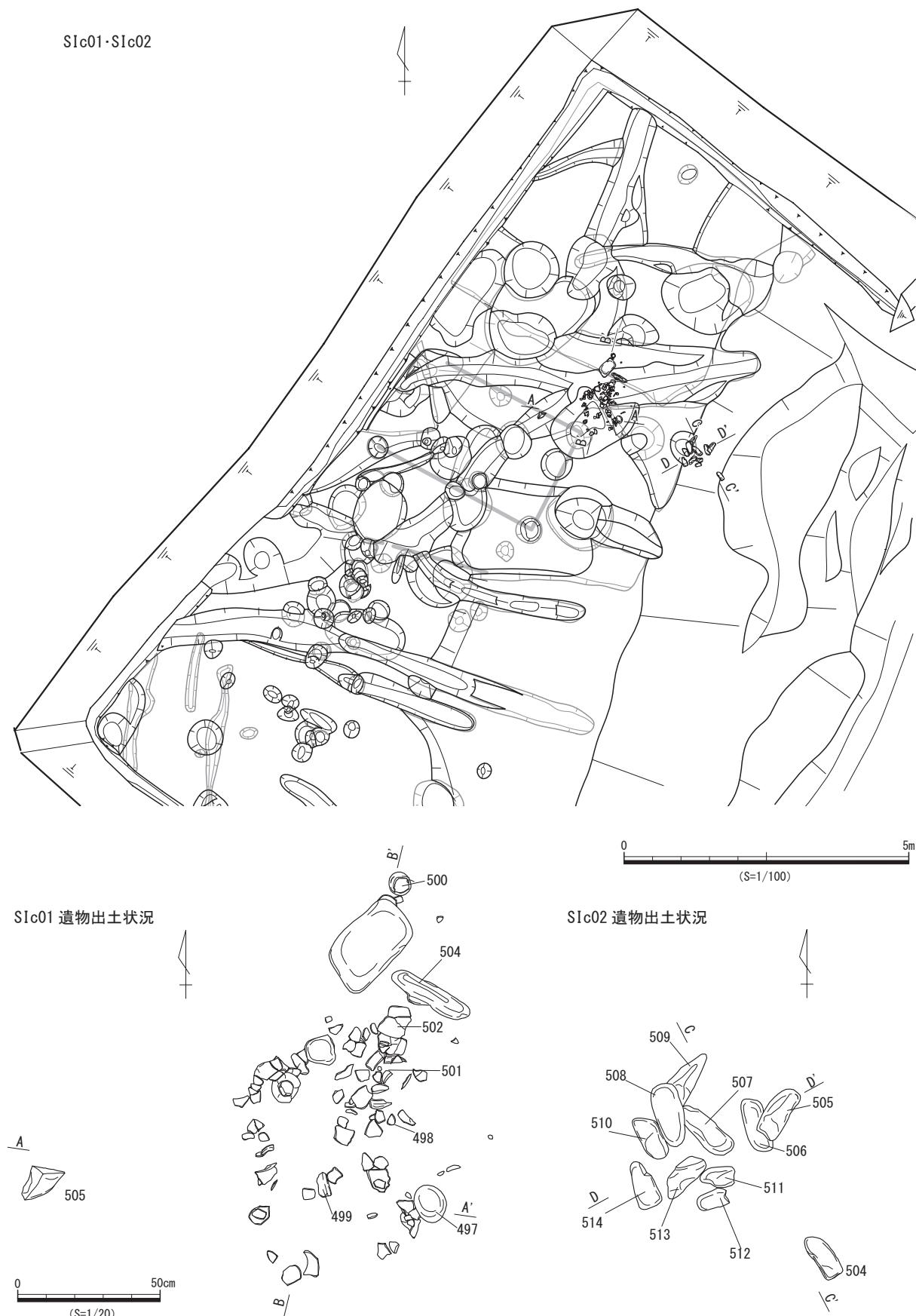


図104 SIc01・SIc02遺構平面図・遺物出土状況図

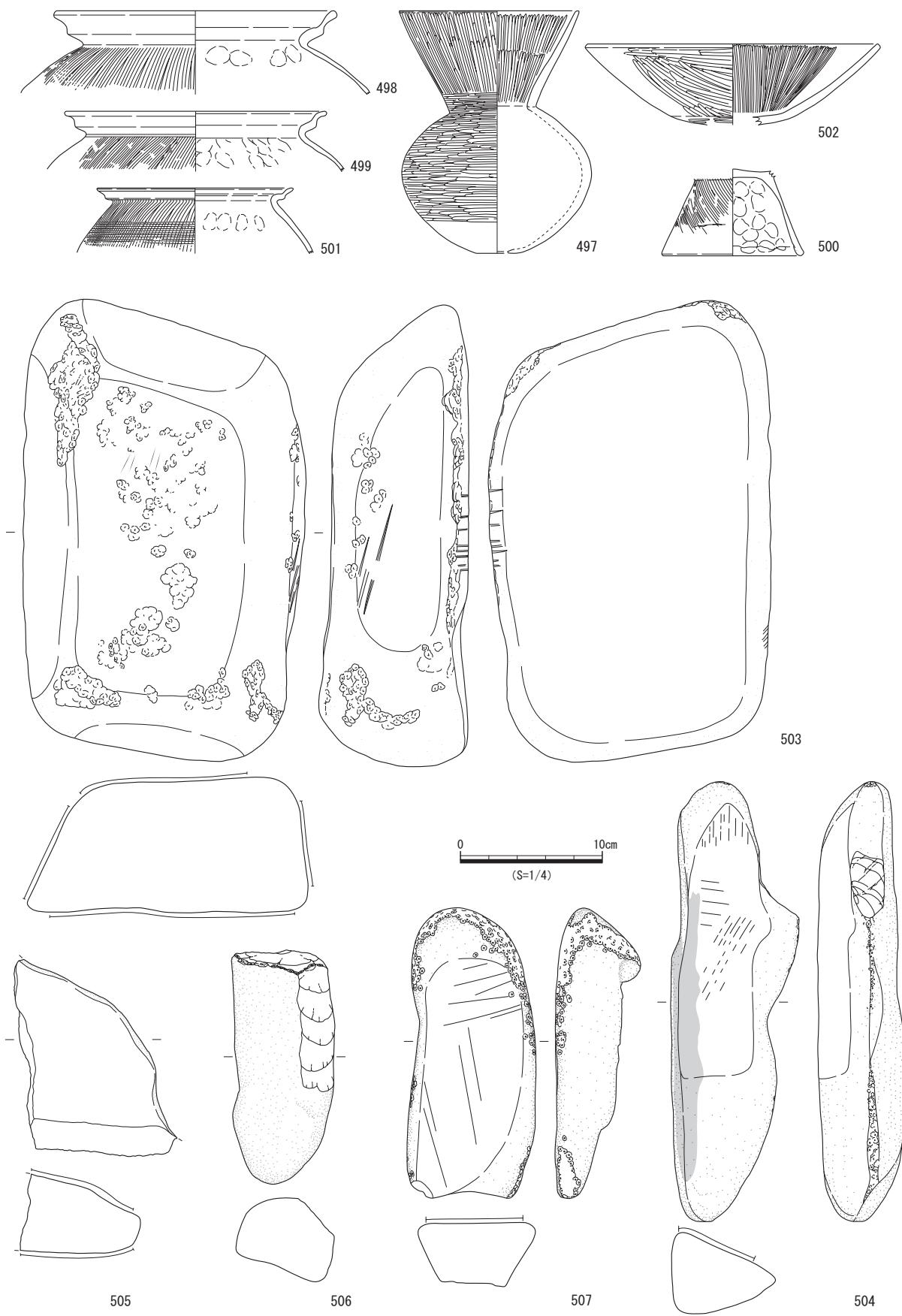


図105 SIc01・SIc02出土遺物（1）

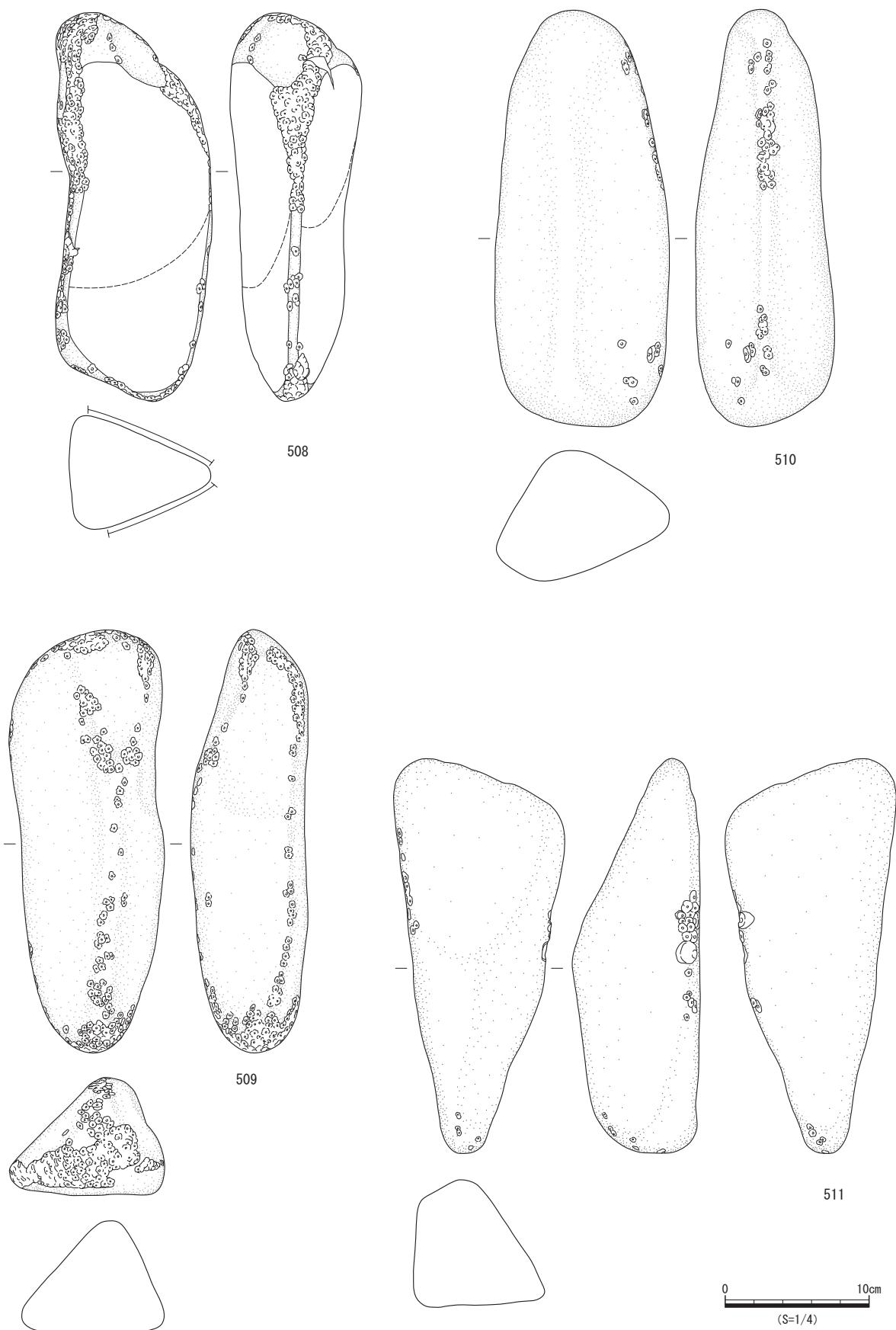


図106 SIc02出土遺物（2）

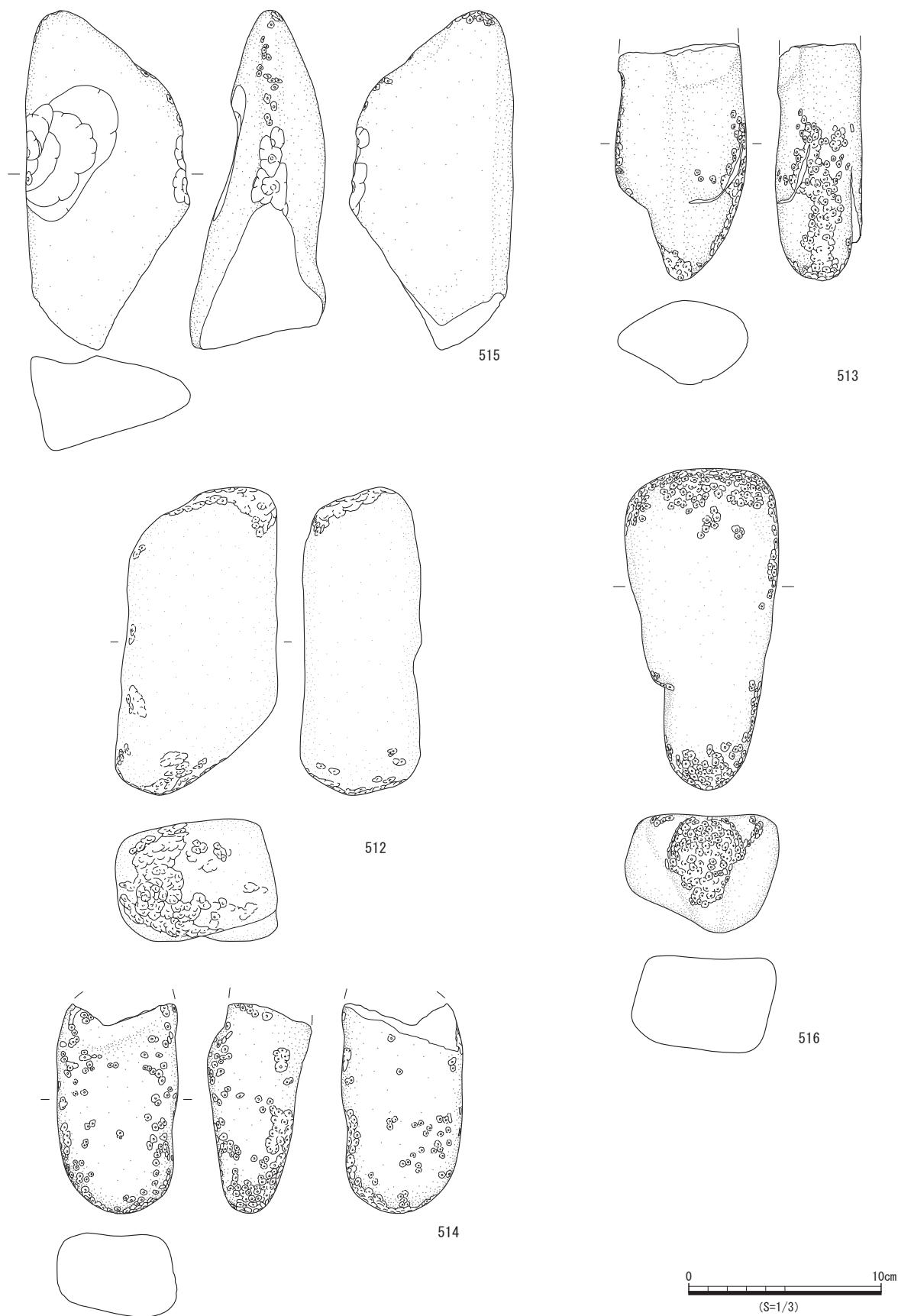


図107 Slc02出土遺物 (3)

4 V層上面の遺構と遺物(図108)

V層上面では、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡4棟の他、土坑162基、柱穴又は柱穴状の小穴50基、溝状遺構34条を検出した。遺構密度はC地区の中で最も高く、遺物量も最も多い。遺物が出土しない遺構は2割程度であるが、土器の小片が少量出土するだけの遺構もある。また、重複が激しいため形状が不明で、性格不明の遺構が多かった。柱穴状の小穴についても、形状は柱穴のように深いものであったり、柱根が残るもの、柱痕跡が確認できるものがあったが、掘立柱建物跡とした他の規則的な配置は認められず、建物遺構として把握することができなかった。この地点では、方形周溝墓を確認することができなかつたが、溝状遺構の中には他の遺構との先後関係が最も古くなるものがあり、方形周溝墓の一部であった可能性が考えられるものがある。

SBc01 (図109)

検出状況 SDc031の東側のV層上面で検出した。07年調査では、平面形が不明瞭ながら西及び南辺の一部が確認できたが、09年調査ではそれを確認することができず、位置的に柱穴の可能性が考えられる小穴や壁溝を検出しただけであった。

形状 南西部及び北部の壁溝から方形若しくは長方形の平面形と思われる。壁溝を含めない壁面の深さは西側壁面で0.21mである。壁面の断面形は急傾斜である。

埋土 07年調査では4層に分層したが、壁際に炭化物やV層ブロックが混じる堆積土があり、その後ほぼ水平に堆積し、各層において炭化物の混入がある。

床面 床面はほぼ平坦で水平である。貼床や炉跡は認められなかったが、小穴を4基検出し、位置関係から柱穴と思われる。また、北壁にあたる位置では壁溝を確認した。

遺物出土状況 07年調査では、埋土中から土器片が少量出土したが、いずれも小破片であったため、



図108 07_4・5地点・09_20地点V層上面平面図

図示可能な遺物はなかった。柱穴や壁溝からも少量の土器片が出土したが、いずれも小片で図示可能な土器はなかった。なお、出土した土器片には、S字状口縁台付甕の胴部片や小さな口縁部片が含まれていた。

時期 埋土や柱穴から出土した土器片の中に、S字状口縁台付甕片があり、VII期若しくはVIII期と思われる事から、VII期からVIII期のものと考えておきたい。

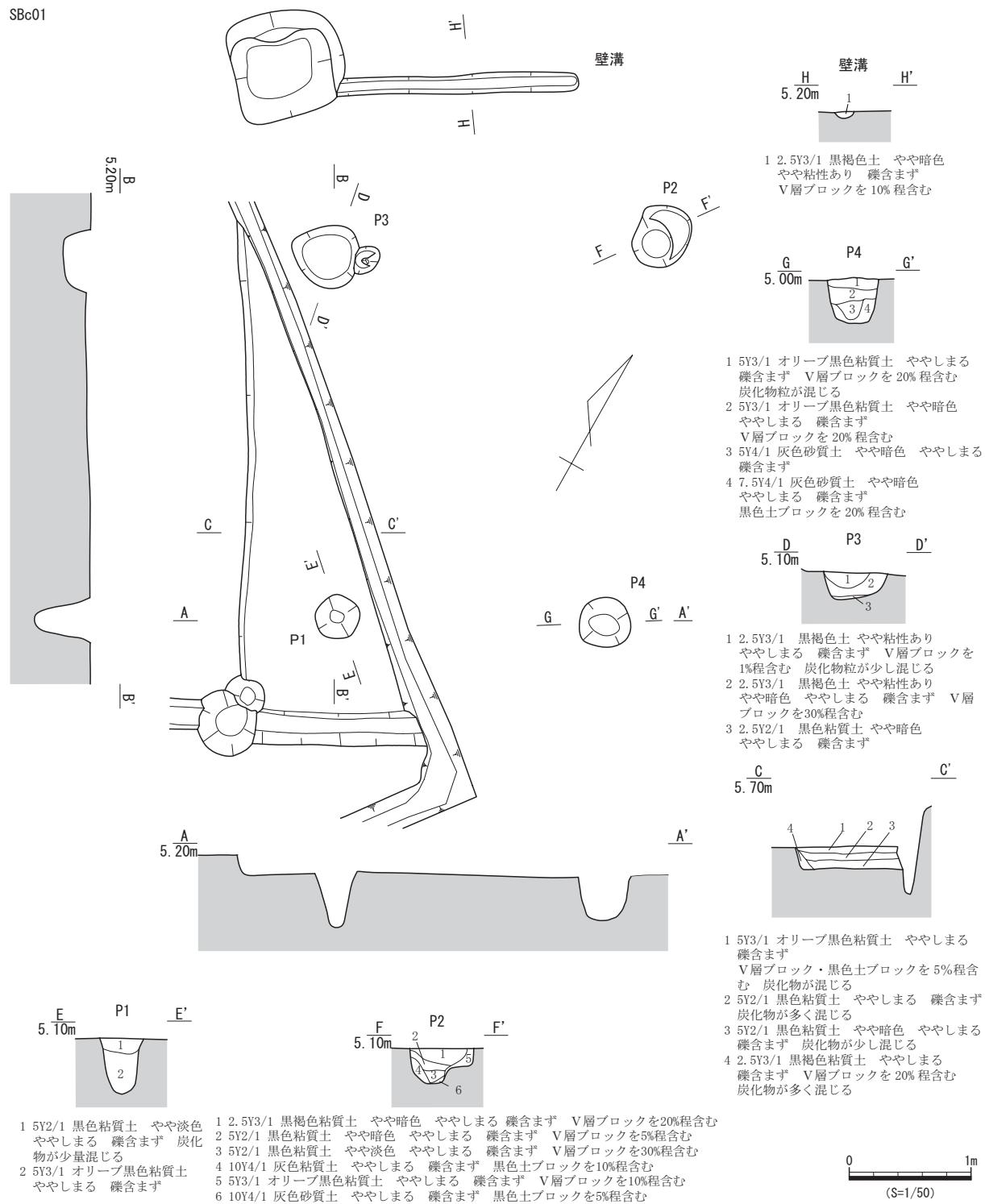


図109 SBc01

SBc02 (図110)

検出状況 SDc031の東側のV層上面で検出したが、平面形は不明瞭であった。また、大半が発掘区外に広がり、確認できたのは北辺部と西側隅部の一部である。

形状 大半が発掘区外であるが、北西隅部の形状から、方形若しくは長方形の平面形と思われる。壁面の傾斜は比較的急で、周壁溝を含めない深さは、最も残存状態のよい北西側壁面で0.18mである。

埋土 3層に分層したが、埋土1層は埋没後に再度掘削されたような堆積となるが、その範囲は平面形の中におさまるため、別の遺構である可能性は低いと思われる。SBc01と同様に炭化物が少量含まれる。

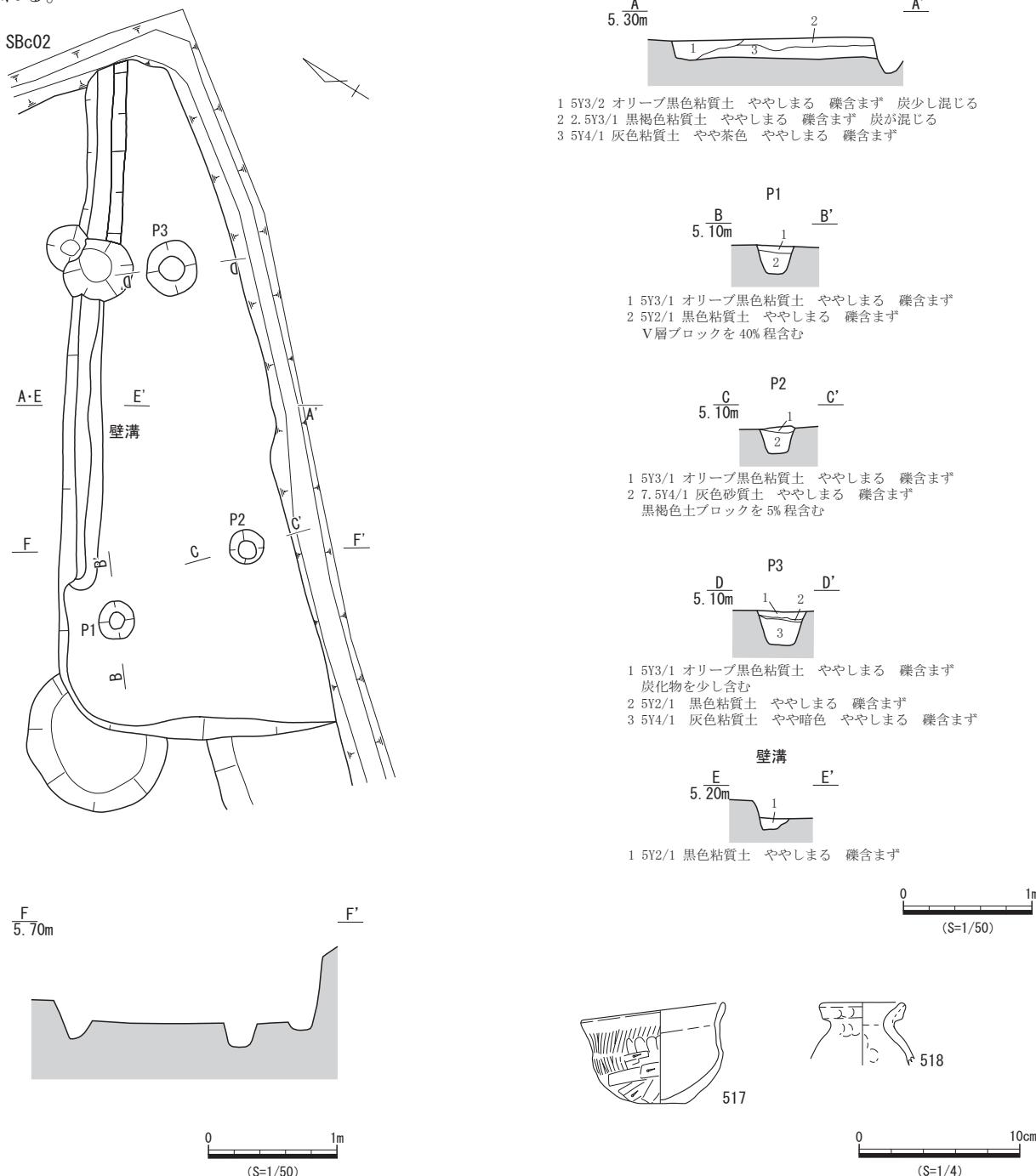


図110 SBc02

床面 床面はほぼ平坦で水平である。貼床や炉跡は認められなかつたが、北西壁側に壁溝、床面で小穴を3基検出した。3基の小穴のうちP2が位置関係から柱穴と思われる。他の2基の小穴については、SBc02に伴わない可能性もある。

遺物出土状況 埋土中から少量の土器片と剥片が出土した。図示可能なものは小型の鉢と手捏ね土器であった。床面の小穴や壁溝からも少量の土器片が出土したが、図示可能なものはなかつた。なお、埋土中から出土した土器片の中に、S字状口縁台付甕C類と思われる小破片があつた。

出土遺物 517は小型の鉢G類で、口径が胴部径よりも大きい。518は壺を模したと思われる手捏ね土器である。

時期 出土した土器の中に、小破片ながらS字状口縁台付甕C類が認められたことから、VII期以降のものと思われる。

SHc01（図111～図113）

検出状況 SDc031の東肩部のV層上面で検出したが、個々の柱穴は平面形が不明瞭であり、現地調査時に確認した先後関係は矛盾したものがある。個々の柱穴を掘削していくことで、10基の柱穴が、2間×3間の長方形に配置された状態を確認した。長軸方向はN73°Wとなり、桁行4.1m（1.3m-1.4m-1.4m）、梁行3.4m（1.7m-1.7m）の掘立柱建物跡である。他の遺構との重複により、柱穴が部分的にしか確認できなかつたものもある。なお、北側の柱穴列に沿うように幅0.18m、深さ0.04mの浅い溝状遺構を検出したが、SHc01に伴う雨落ち溝と思われる。

柱穴 10基の柱穴を検出したが、直径0.4m～0.5mの円形若しくは楕円形のものが多く、深さ0.17m～0.46mほどである。柱痕跡はP1・P2において確認し、P7・P10からは底面近くから礎板状の木製品が出土した。

遺物出土状況 P3・P8以外の柱穴から土器片が出土したが、細片で図化できる遺物はなかつた。ただし、P7からは甕D類（S字状口縁台付甕B類）と思われる口縁部片が出土した。P4の壁際に、柱を挟み込むような状態で板材が2点出土した。また、P7・P10の底面近くでは、薄い板状の木製品が敷き詰められたように出土した。

出土遺物 P4、P7、P10から木製品が出土した。519・520はP4から出土した柱の残材と思われ、519は断面台形の多角柱状材（8面）、520は断面台形の角柱状材である。いずれも表面は平滑である。521～524はP7から出土した残材や木屑で、底面近くに敷かれた状態で出土したものである。525はP10から出土した断面蒲鉾形の長方形の整形板材で、上部を削ることで四角の枘状の形を作り出している。526～529はP10から出土した木屑である。

時期 小破片ではあるが、甕D類（S字状口縁台付甕B類）が出土したことから、VII期頃と思われる。

SHc02（図114）

検出状況 SDc031の西肩部のV層上面で検出したが、他の遺構との重複が激しく、個々の柱穴は平面形が不明瞭であった。現地調査後の遺構整理段階で、5基の柱穴がコ字形に並んでいることを確認し、1間×2間の掘立柱建物跡と判断した。長軸方向はN61°Wで、桁行3.0m以上（1.5m-1.5m-）、梁行3.0mとなる。

柱穴 5基の柱穴を検出したが、直径0.37m～0.47mの円形若しくは不整円形で、深さ0.20m～0.48mである。柱痕跡はどの柱穴においても確認できなかつた。

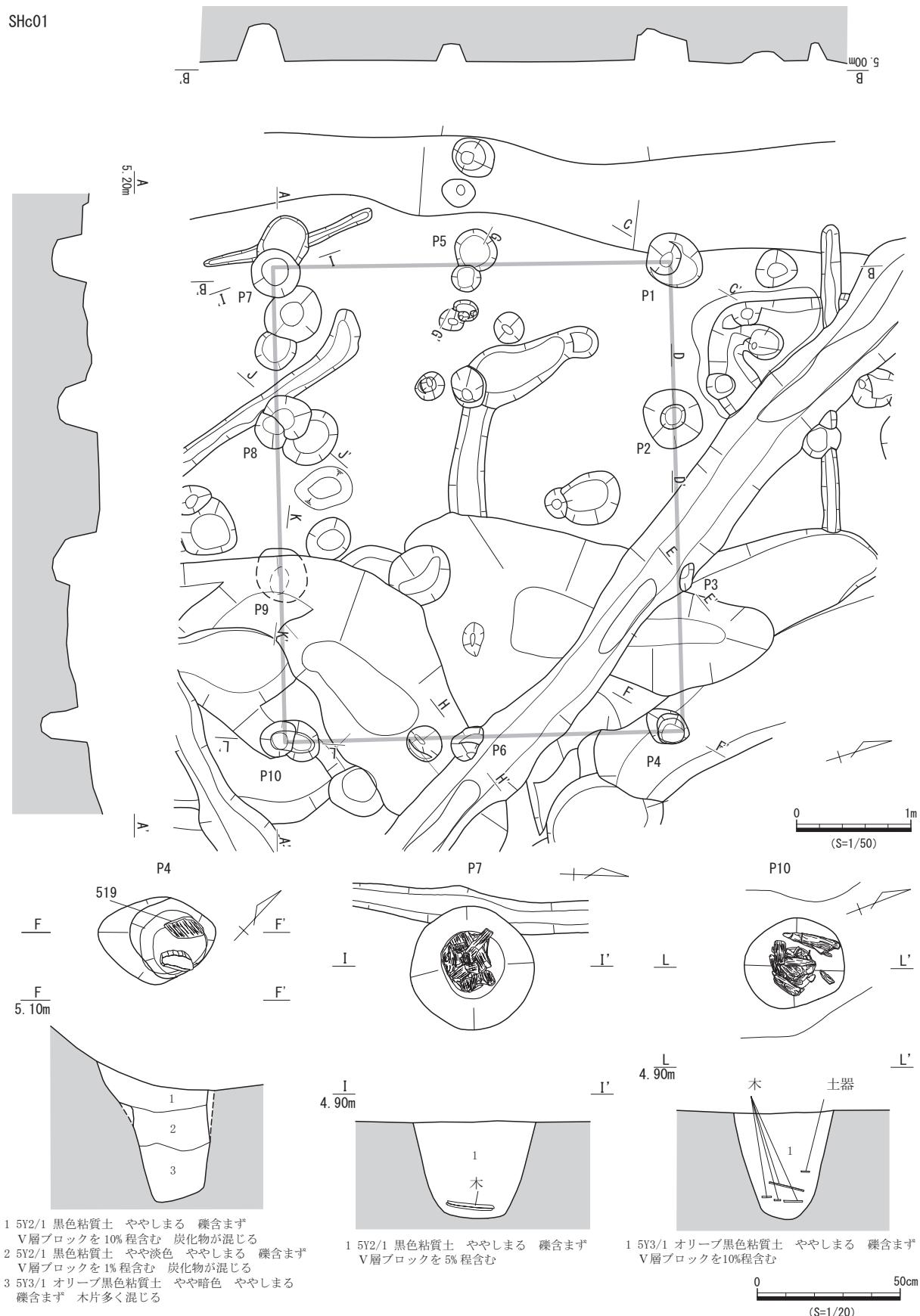


図111 SHc01 (1)

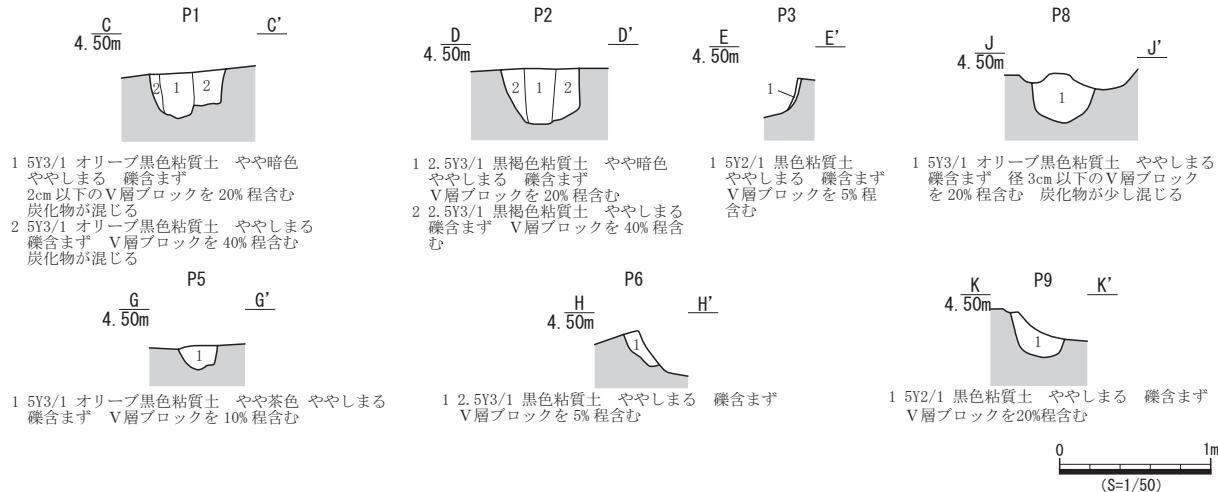


図112 SHc01 (2)

遺物出土状況 すべての柱穴から土器片が出土したが、細片で図化できる遺物はなかった。ただし、

甕D類（S字状口縁台付甕）胴部片や廻間I式～II式頃と思われる高坏片が出土した。

時期 小破片ではあるが、甕D類（S字状口縁台付甕）や高坏の形状からVI期～VII期頃と思われる。

SHc03 (図115)

検出状況 SDc031の東肩部のV層上面で検出したが、他の遺構との重複が激しく、個々の柱穴は平面形が不明瞭であった。特にSDc031の肩に近い部分では、柱穴の存在を考えずSDc031埋土を掘り下げた

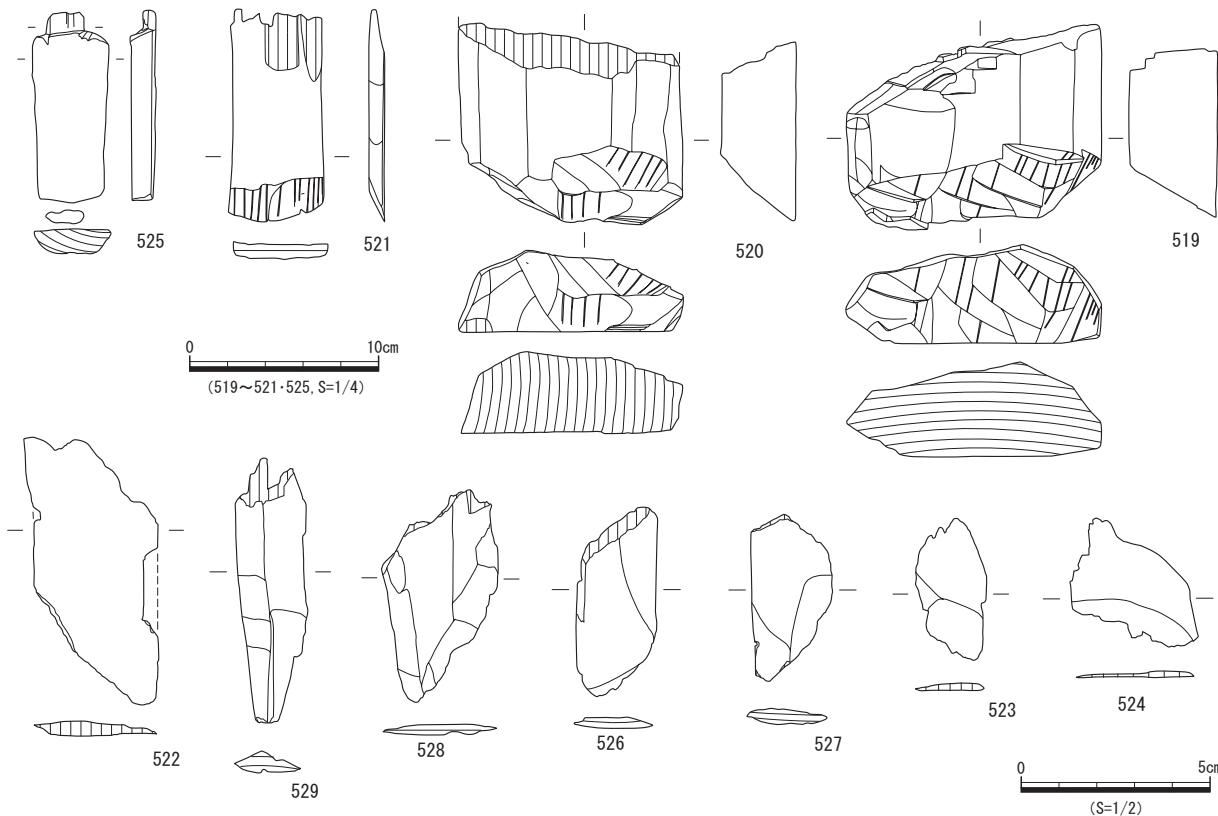


図113 SHc01出土遺物

ため、北西隅の柱穴を確認できなかった。現地調査後の遺構整理段階で、5基の柱穴がコ字形に並んでいることを確認し、1間×2間の掘立柱建物跡と判断した。長軸方向はN88°Wで、桁行3.2m (1.6m-1.6m)、梁行2.36mとなる。

柱穴 5基の柱穴を検出したが、直径0.28m～0.38mの円形や楕円形で、深さ0.09m～0.30mである。他の掘立柱建物跡よりも柱穴の規模はやや小さい。柱痕跡はP3において確認した。

遺物出土状況 すべての柱穴から土器片が出土したが、細片で図化できる遺物はなかった。ただし、P1から甕D類 (S字状口縁台付甕B類) の口縁部片が出土した。

時期 小破片ではあるが、甕D類 (S字状口縁台付甕B類) が出土したことからVII期頃と思われる。

SHc04 (図115)

検出状況 SDc031の西肩部のV層上面で検出したが、他の遺構との重複が激しく、個々の柱穴は平面形が不明瞭であった。発掘区外に広がるため、規模等は不明であるが、確認した範囲では4基の柱穴がL字形に並んだ状態であった。長軸方向はN71°Wで、桁行4.0m (2.2m-2.0m-)、梁行1.9mとなる。

柱穴 4基の柱穴を検出したが、直径0.26m～0.31mの円形や楕円形で、深さ0.25m～0.44mである。柱痕跡はどの柱穴においても確認できなかった。

遺物出土状況 すべての柱穴から土器片が出土したが、細片で図化できる遺物はなかった。ただし、P1から甕D類 (S字状口縁台付甕) が出土した。

時期 小破片ではあるが甕D類 (S字状口縁台付甕) が出土したことから、VI期～VII期と思われる。

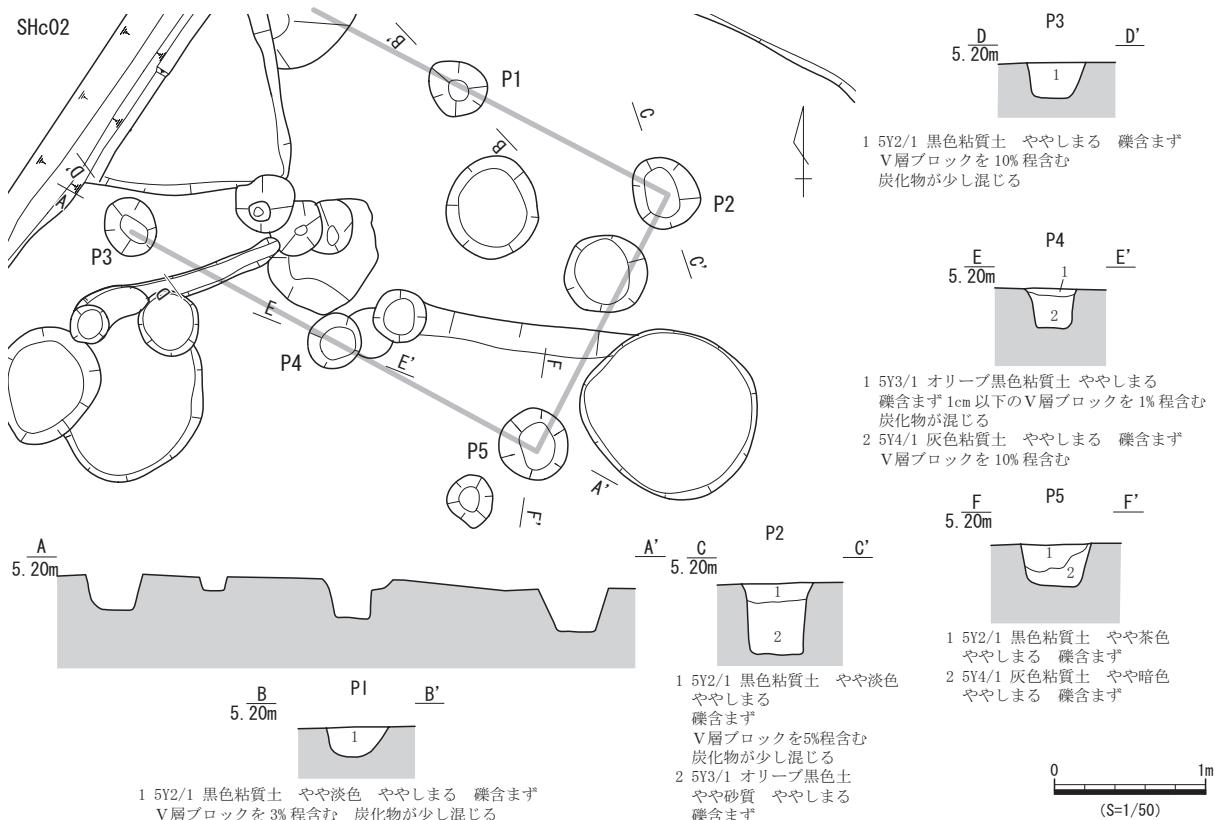


図114 SHc02

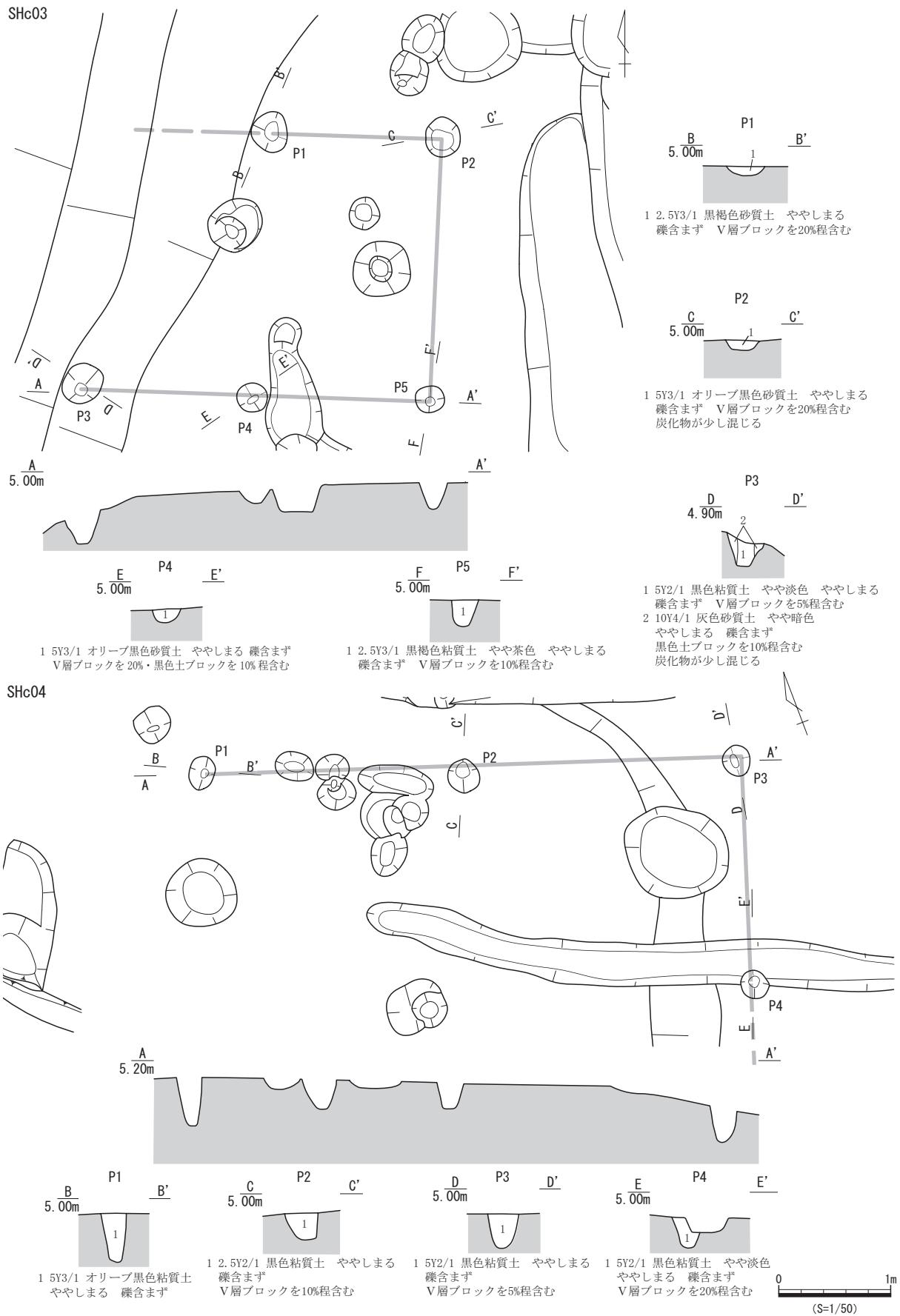


図115 SHc03・SHc04

SPc091(図116)

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出した。平面形は比較的明瞭で、検出時に柱根が確認できた。形状は円形で、壁面は立ち上がり、底面は比較的平坦である。規則的に並ぶような配置となる他の柱穴が確認できなかったため、単独の柱穴とした。

遺物出土状況 柱根が残存していたが、やや西に傾いた状態であった。埋土中からは土器片が1点出土しただけであった。

出土遺物 530は柱材で、節の残る丸太材の下端を不整方向から削ってやや尖らせていている。加工痕は鋭く、刃こぼれの痕跡も残る。

時期 他の遺構との先後関係などから、VI期～VII期頃と思われる。

SPc092(図117)

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。形状は円形で、壁面は西側が傾斜しているが、他は真っ直ぐに立ち上がり、底面は比較的平坦である。規則的に並ぶような配置となる他の柱穴が確認できなかったため、単独の柱穴とした。

遺物出土状況 柱根が残存していただけであった。

出土遺物 531は四角柱状の柱材で、底を一定方向から平坦に削り出している。

時期 V層上面で検出したことから、V期～VII期頃と思われる。

SPc097(図117)

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。形状は橢円形で、壁面はほぼ真っ直ぐに立ち上がり、底面は比較的平坦である。規則的に並ぶような配置となる他の柱穴が確認できなかったため、単独の柱穴とした。

遺物出土状況 柱根の他、埋土中から少量の土器片が出土したが、その中に甕D類（S字状口縁台付

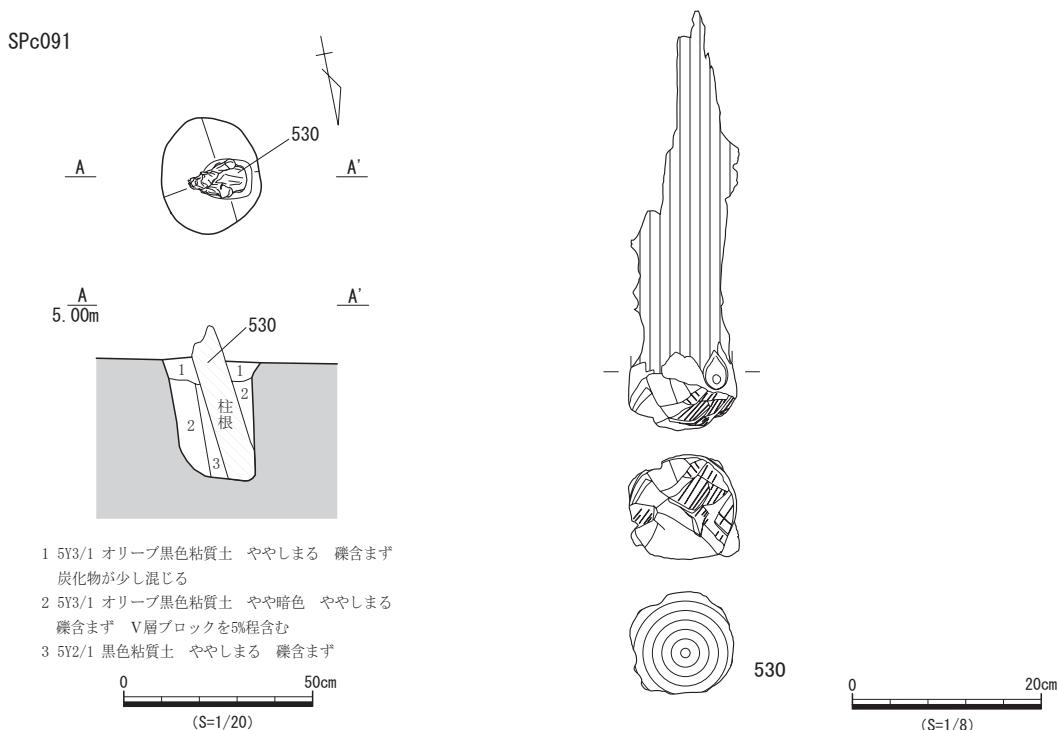


図116 SPc091

甕B類)の口縁部片があつた。

出土遺物 532は分割材を用いた柱材で、左側面や裏面を平らに加工する。底部はやや斜めになるが、横方向の工具痕がある。

時期 小片ではあるが、甕D類(S字状口縁台付甕B類)が出土したことから、VII期頃と思われる。

SPc098 (図118)

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形は不明瞭であった。SPc090掘削により、その壁面で掘り込みや柱根を確認したため認識できた遺構である。形状は楕円形で、壁面はほぼ真っ直ぐに立ち上がり、底面は比較的平坦である。規則的に並ぶような配置となる他の柱穴が確認できなかつたため、単独の柱穴とした。

遺物出土状況 柱根が残存していただけであった。

出土遺物 533は底を平坦に加工した柱材で、腐食が激しい。

時期 V層上面で検出したことから、V期～VII期頃と思われる。

SPc105 (図118)

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形は不明瞭であった。形状はほぼ円形で、壁面は上部でやや開き、底面は比較的平坦である。埋土を3層に分層したが、埋土1層は柱根が朽ちて細くなつたため、痕跡状となつたと思われる。規則的に並ぶような配置となる他の柱穴が確認できなかつたため、単独の柱穴とした。

遺物出土状況 柱根が残存していた他、少量の土器片が出土した。

出土遺物 534は丸太を削りだした柱材で、底面を斜めに加工し、側面は全体に面取りしている。

時期 V層上面で検出したことや、他の遺構との先後関係からV期～VI期頃と思われる。

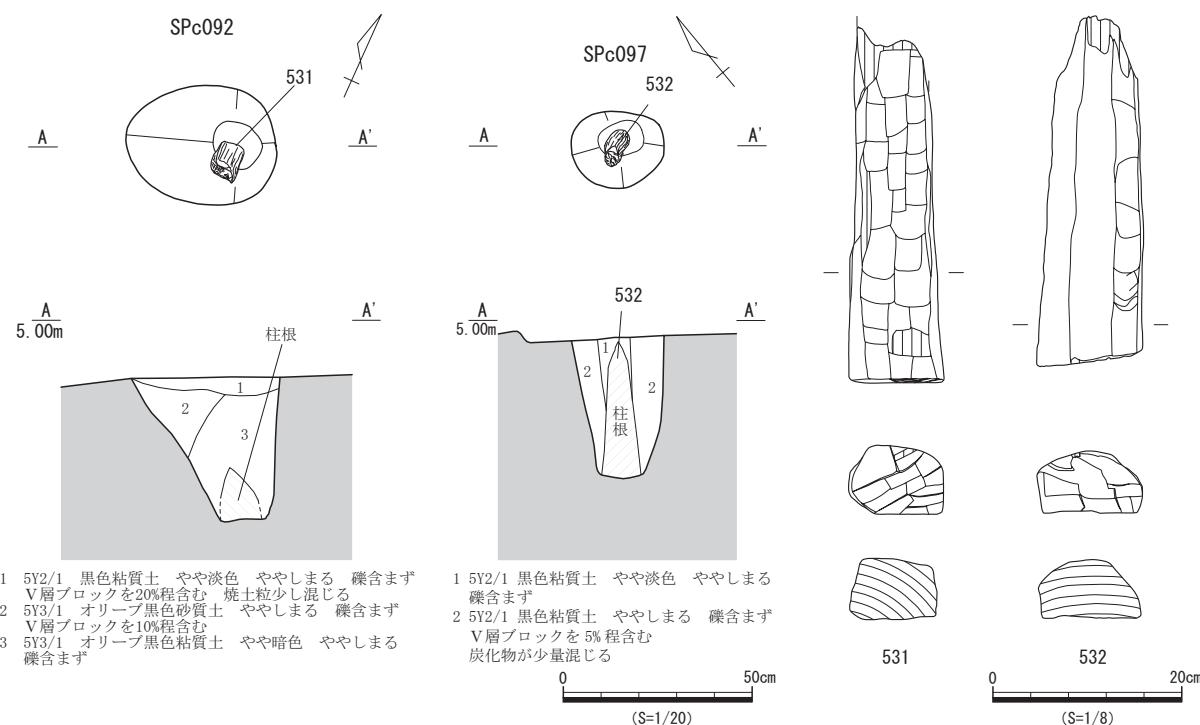


図117 SPc092・SPc097

SPc106 (図119)

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形は不明瞭であった。SPc105掘削により、その壁面で掘り込みや柱根を確認したため認識できた遺構である。形状は他の遺構との重複により不明であるが、円形若しくは橢円形で、壁面はほぼ真っ直ぐに立ち上がり、底面は比較的平坦である。埋土を2層に分層したが、埋土1層は柱根が朽ちたため、柱痕跡状となったと思われる。規則的に並ぶような配置となる他の柱穴が確認できなかったため、単独の柱穴とした。

遺物出土状況 柱根が残存していた他、土器片が1点出土した。

出土遺物 535は丸太を削りだした柱材で、側面は面取りしている。底面は、多方向から削り平らにしている。

時期 V層上面で検出したことからV期～VII期頃と思われる。

SPc117 (図119)

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形は不明瞭であった。形状は他の遺構と重複しているが、ほぼ橢円形で、壁面はほぼ真っ直ぐに立ち上がり、底面は比較的平坦である。埋土を3層に分層したが、埋土2層は柱根が朽ちて細くなったため、柱痕跡状となったと思われる。柱根は土層観察位置より北側にあった。埋土1層はこの柱痕跡状の堆積を切るように堆積しており、柱を根元で切断し、埋め戻したことが考えられる。規則的に並ぶような配置となる他の柱穴が確認できなかったため、単独の柱穴とした。

遺物出土状況 柱根が残存していた他、少量の土器片が出土した。

出土遺物 536は丸太を削りだした柱材で、側面は面取りしている。底面は、多方向から削り平らにしている。

時期 V層上面で検出したことや、他の遺構との先後関係からVI期～VII期頃と思われる。

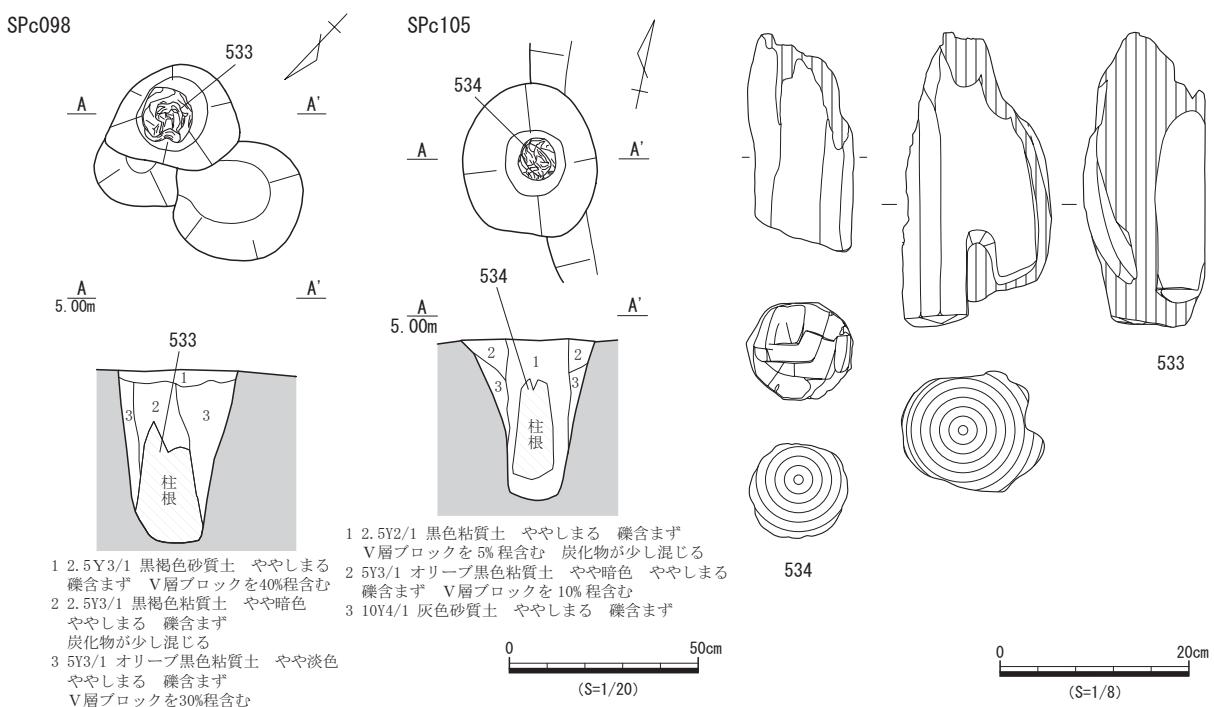


図118 SPc098・SPc105

SPc118（図120）

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、SDc092底面で検出したが、平面形は不明瞭であった。形状は不整橢円形で、壁面はほぼ真っ直ぐに立ち上がり、底面は比較的平坦である。規則的に並ぶような配置となる他の柱穴が確認できなかったため、単独の柱穴とした。

遺物出土状況 柱根が残存していただけであった。

出土遺物 537は丸太を削りだした柱材で、底面は、多方向から削り平らにしている。

時期 V層上面で検出したことや、他の遺構との先後関係からV期～VII期頃と思われる。

SPc120（図120）

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。形状は不整橢円形で、壁面はほぼ真っ直ぐに立ち上がり、底面はやや丸みがある。埋土を5層に分層したが、このうち2層と3層が柱痕跡と思われる。埋土1層は、この柱痕跡を埋めるような堆積となり、柱を切り取った痕跡を示す可能性が考えられる。規則的に並ぶような配置となる他の柱穴が確認できなかったため、単独の柱穴とした。

遺物出土状況 埋土中から土器片が少量出土したが、散在した状態であった。また、埋土5層から木屑と思われる木片が多く出土した。

出土遺物 538は壺D3b類で、口頸部が外反し、口縁端部が立ち上がる。口縁部内外面には煤の付着がある。539は手捏ね土器E類で、台付き土器を模したものと思われる。

時期 V層上面で検出したことや他の遺構との先後関係、出土遺物などからVI期～VII期頃と思われる。

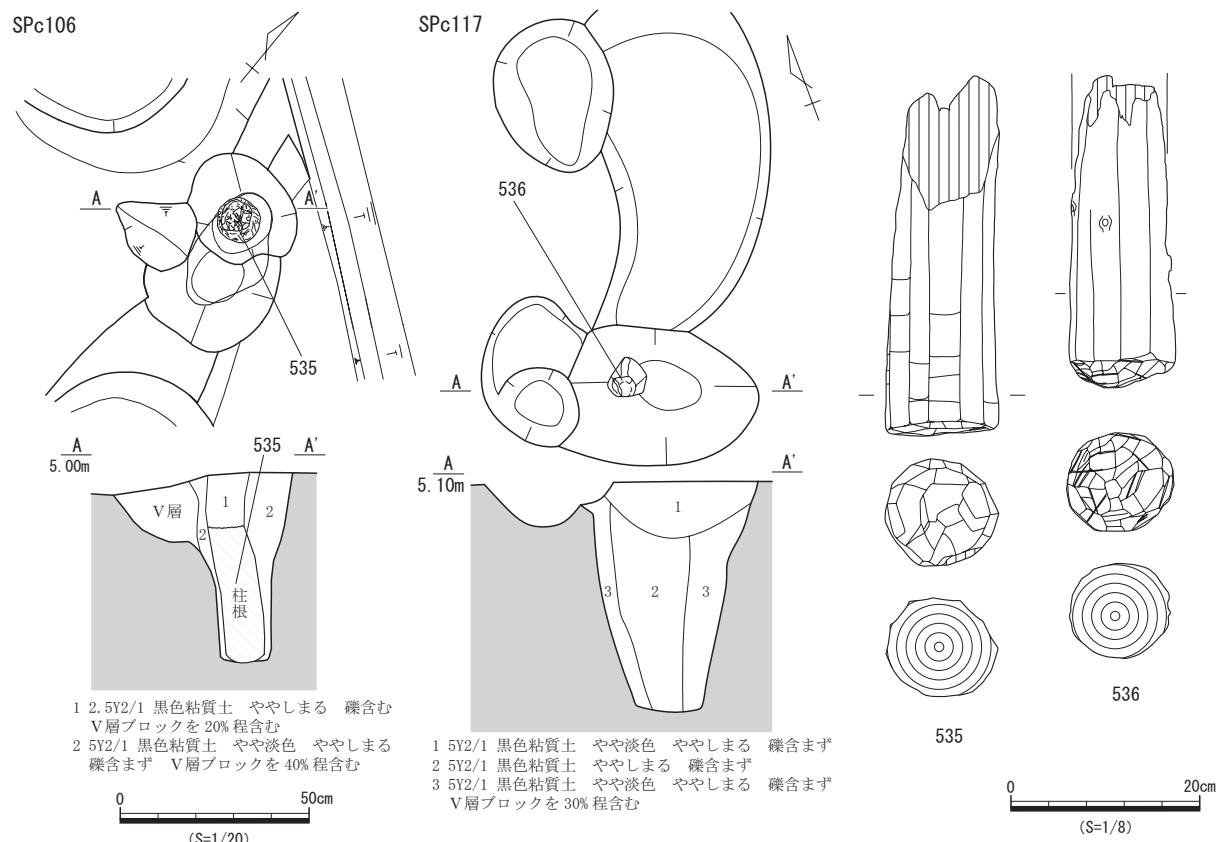


図119 SPc106・SPc117

SPc127 (図121)

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、SKc0665底面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。形状は不整橢円形で、壁面はほぼ真っ直ぐに立ち上がり、底面は比較的平坦である。埋土を3層に分層したが、埋土1層は柱根が朽ちたため、柱痕跡状となったと思われる。規則的に並ぶような配置となる他の柱穴が確認できなかったため、単独の柱穴とした。

遺物出土状況 柱根が残存していた他、少量の土器片が出土した。

出土遺物 540は丸太を削りだした柱材で、側面は面取りしている。底面は、多方向から削りやや丸みがある。

時期 V層上面で検出したことや、他の遺構との先後関係からVI期～VII期頃と思われる。

SPc129 (図121)

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、SDc091底面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。形状はほぼ円形で、壁面はほぼ真っ直ぐに立ち上がり、底面は比較的平坦である。規則的に並ぶような配置となる他の柱穴が確認できなかったため、単独の柱穴とした。

遺物出土状況 柱根が残存していた他、少量の土器片が出土した。

出土遺物 541は丸太を削りだした柱材で、底面近くのみ残存する。底面は、多方向から削り平らにしている。

時期 V層上面で検出したことや、他の遺構との先後関係からV期～VII期頃と思われる。

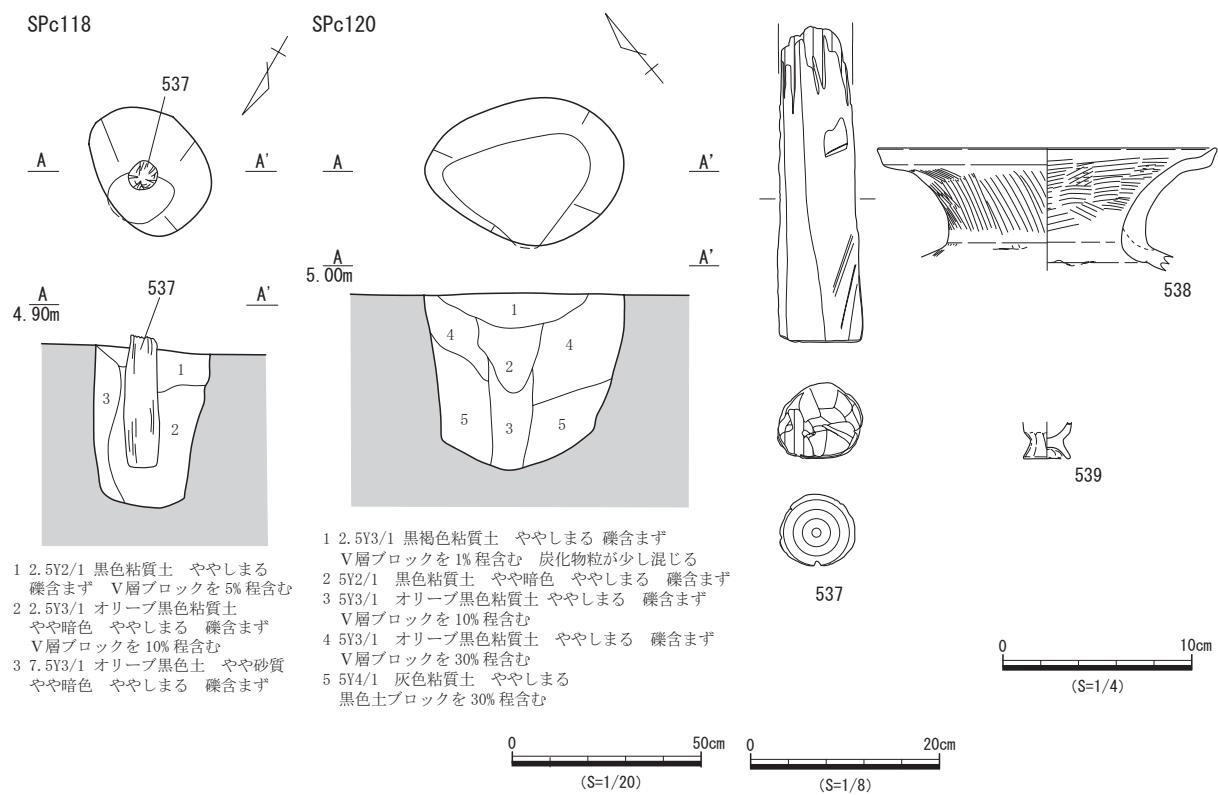


図120 SPc118・SPc120

SPc132 (図122)

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、SDc091底面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。形状は不整橢円形で、壁面はほぼ真っ直ぐに立ち上がり、底面は比較的平坦である。規則的に並ぶような配置となる他の柱穴が確認できなかったため、単独の柱穴とした。

遺物出土状況 柱根が残存していた他、少量の土器片が出土した。

出土遺物 542は丸太を削りだした柱材で、底面は多方向から削り平らにしている。

時期 V層上面で検出したことや、他の遺構との先後関係からV期～VII期頃と思われる。

SPc136 (図122)

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、SKc0675底面で検出したが、平面形は不明瞭であった。形状は不整円形で、壁面はほぼ真っ直ぐに立ち上がり、底面は比較的平坦である。規則的に並ぶような配置となる他の柱穴が確認できなかったため、単独の柱穴とした。

遺物出土状況 柱根が残存していただけであった。

出土遺物 543は丸太を削りだした柱材で、底面は多方向から削り平らにしている。

時期 V層上面で検出したことや、他の遺構との先後関係からV期～VII期頃と思われる。

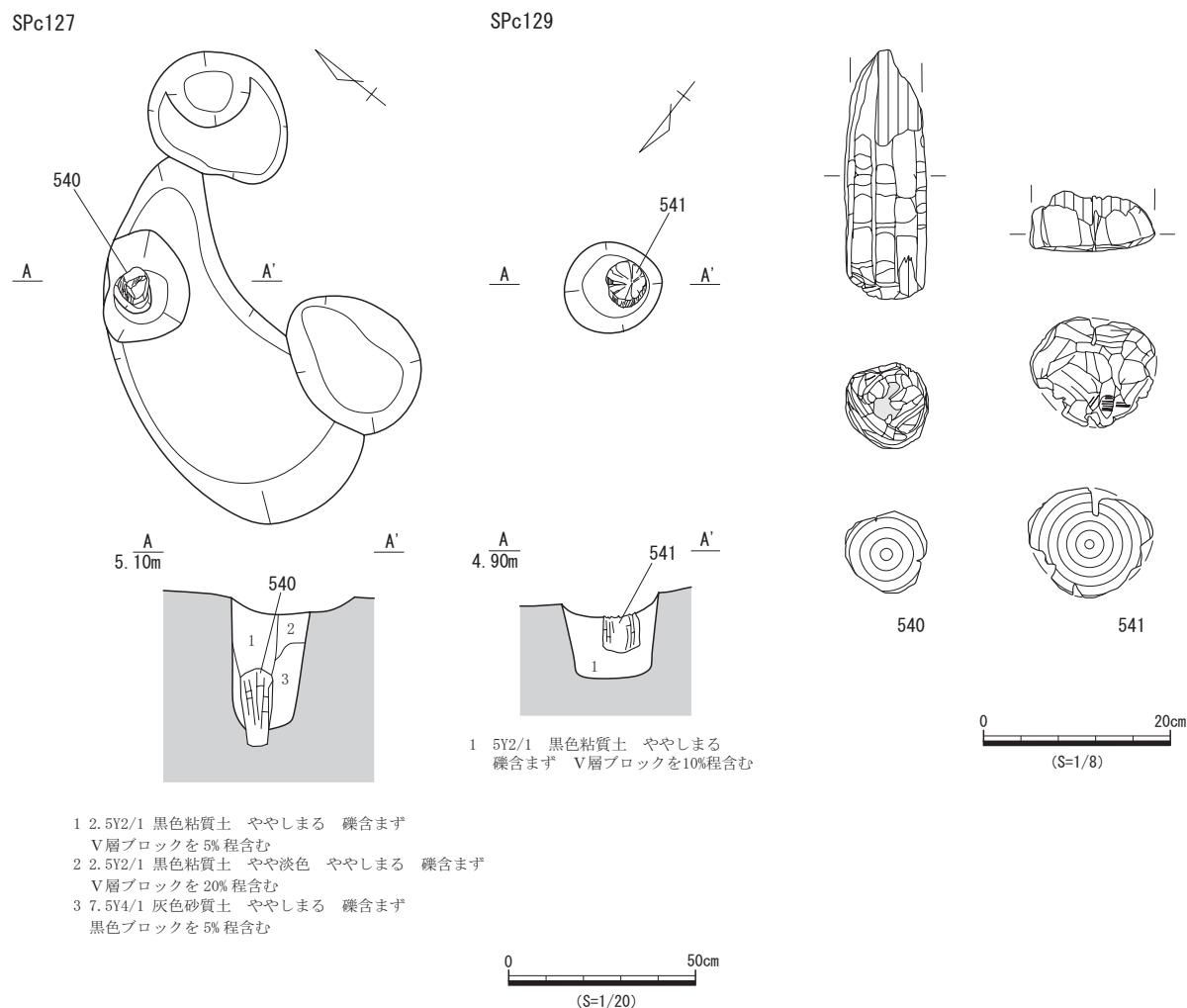


図121 SPc127・SPc129

SKc0532 (図123)

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出した。平面形は比較的明瞭で、径1.12mの不整円形で浅い穴である。埋土は2層に分層したが、V層ブロックを含んでいることから人為堆積の可能性がある。類似した形状のSKc0542と一部重複しているが、径1m前後の円形若しくは不整円形の土坑が、複数重複した状況がA地区やB地区の集落域においても見られる。こうした土坑の中には、埋土上部に土器片を多量に含むものや、意図的に置かれたような出土状況を示すもの、埋土が人為的に埋め戻された可能性を示すものなどがあり、墓坑の可能性があるのではないかと思われる。遺構の先後関係では、新しく位置づけられるものが多いことから、集落廃絶期若しくはその後の土地利用の一端を示している可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から散在して土器片が出土したが、図示した壺の破片は、土坑西半部の埋土1層から2層にかけて出土した。

出土遺物 544は壺E類で、頸部は直立し、上胴部には放射状に沈線が施される。

時期 図示した土器から、VII期～VIII期と思われる。

SKc0534 (図123)

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出した。平面形は比較的明瞭で、径0.87mのほぼ円形でやや深い穴である。埋土は3層に分層したが、1層と2層にはV層ブロックを含んでいることから人為堆積の可能性がある。SKc0532のように墓坑の可能性も考えられるが、やや深い穴であり、性格は不明である。

遺物出土状況 埋土中から少量の土器片が出土したが、図示可能なものはなかった。また、埋土1層から扁平片刃石斧が出土した。

出土遺物 545は泥岩製の扁平片刃石斧で、側面や基部に成形時の敲打による剥離痕が残る。全面を研磨しているが、使用痕と思われるような擦痕や刃こぼれは認められない。

時期 V層上面で検出したことや、他の遺構との先後関係からVI期～VII期頃と思われる。

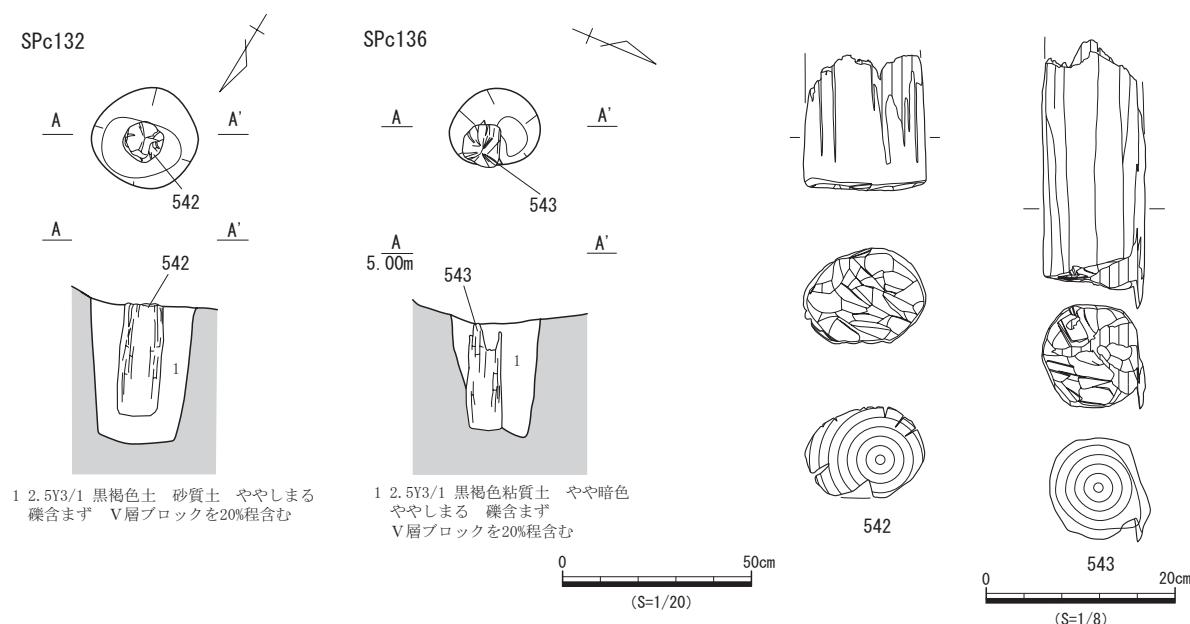


図122 SPc132・SPc136

SKc0538 (図123)

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出した。平面形は比較的明瞭であったが、他の遺構との重複により全形は不明である。西辺部から南辺部の状況から、方形若しくは長方形の土坑と思われる。深さは0.17mと浅く、壁面は開く。埋土は単層で、V層ブロックを含んでいることから人為堆積の可能性がある。西辺部から南辺部の形状から竪穴住居跡の可能性を考えたが、柱穴と思われるような穴は底面では確認できなかったことから、性格不明である。

遺物出土状況 埋土中から少量の土器片が出土した。

出土遺物 546と547は同一個体と思われる甕D2類 (S字状口縁台付甕B類) である。

時期 図示した土器からVII期と思われる。

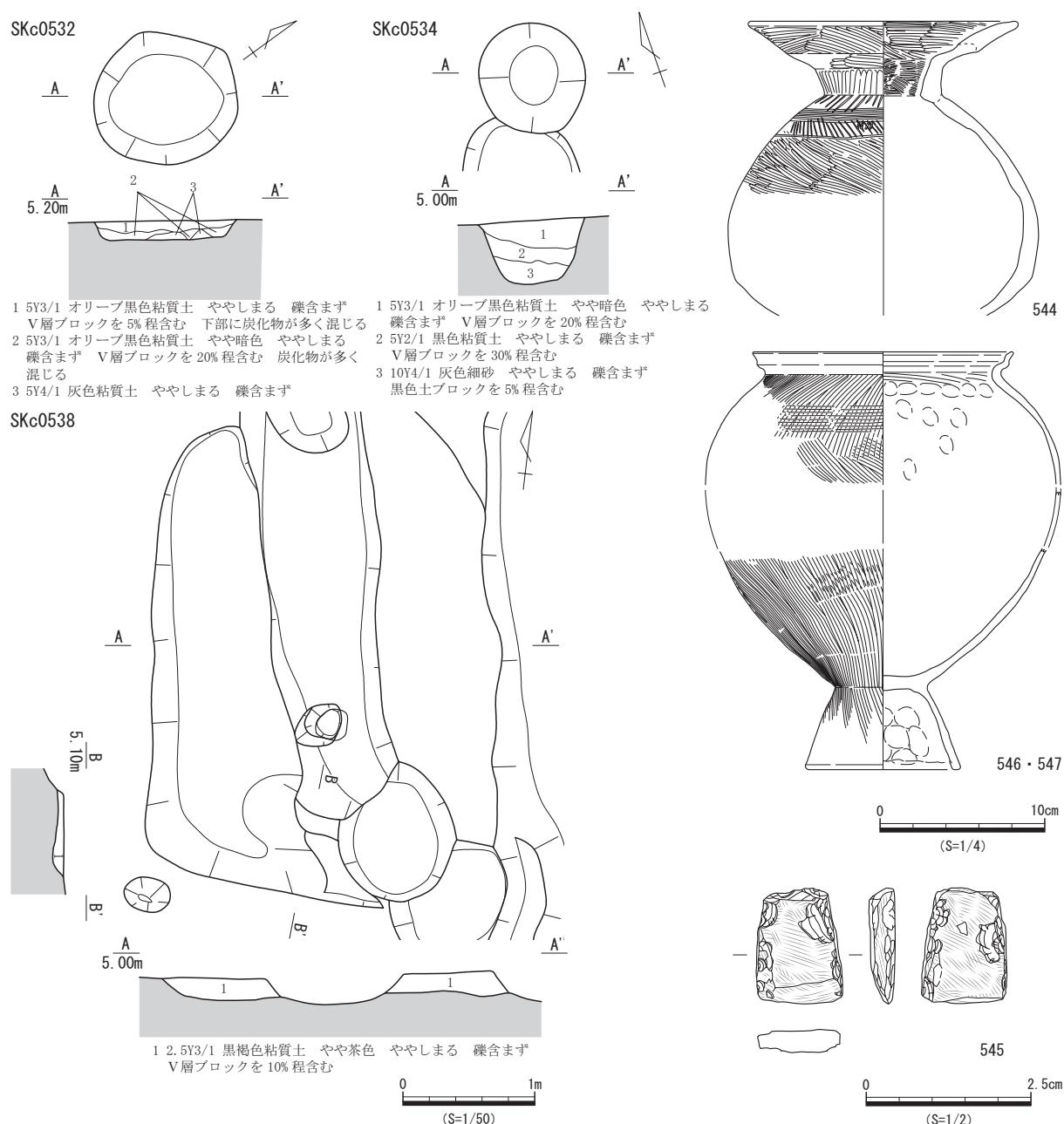


図123 SKc0532・SKc0534・SKc0538

SKc0539 (図124)

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出したが、他の遺構との重複が激しく、平面形は不明瞭であった。径0.6m程のほぼ円形で、深さ0.52mある。埋土は4層に分層したが、ほぼ水平堆積で、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 埋土中から小型の器台と少量の土器片が出土した。

出土遺物 548は器台C2類で、受部径が小さく、やや内湾する。脚部は円錐形に開く。

時期 図示した土器や他の遺構との先後関係からVII期と思われる。

SKc0542 (図124)

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。径1m前後の不整楕円形で、深さ0.23mである。埋土は2層に分層したが、いずれにもV層ブロックが含まれることから人為堆積の可能性がある。遺物の出土状況やSKc0532との類似性から墓坑の可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して出土したが、1層と2層との間に叩石と潰れた状態の土器が出土した。

出土遺物 549は甕D2類（S字状口縁台付甕B類）で、口縁部上段がやや外方に延び、端部内面に面を持つ。

時期 図示した土器や他の遺構との先後関係からVII期と思われる。

SKc0552 (図125)

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。径0.6m程のほぼ円形で、深さ0.33mである。埋土は6層に分層したが、底面に黒色土が堆積し、壁面に貼り付くようにV層ブロックを多く含む土が堆積していた。その内部は水平堆積で、V層ブロックや炭化物が含まれる。このように、壁面に貼り付くような土層堆積をもつ土坑は、07_4・5地点や09_20地

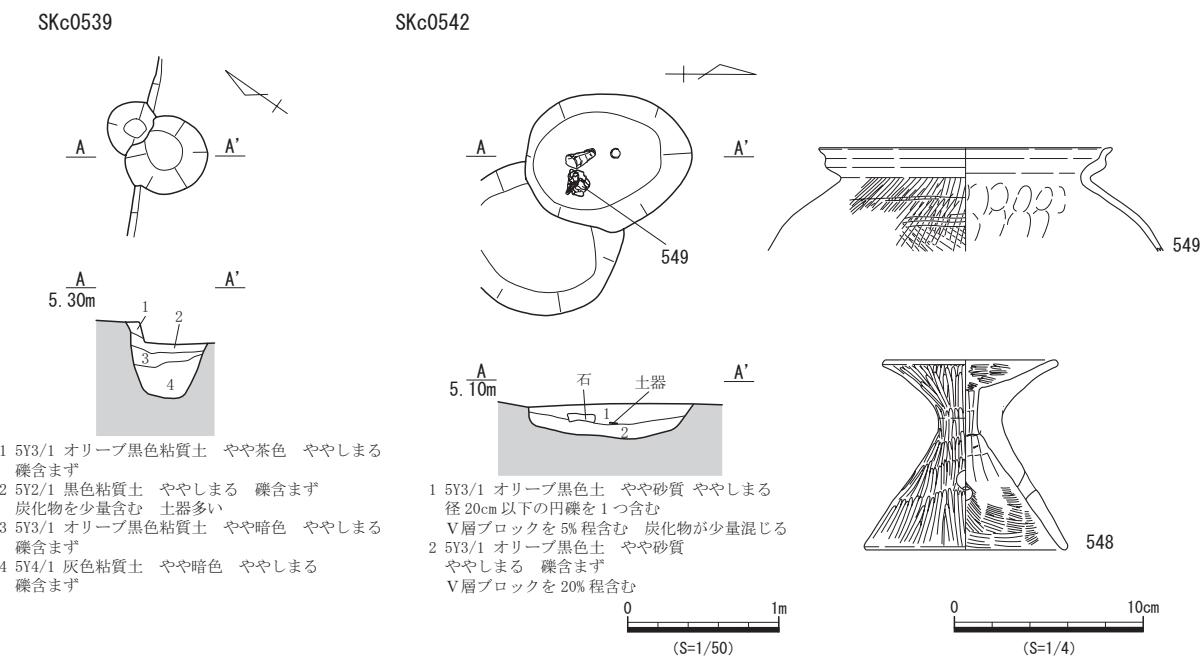


図124 SKc0539・SKc0542

点では他にもいくつか確認できるが、他の地点にはなかった土坑である。しかし、この土坑の性格は不明である。

遺物出土状況 埋土中から少量の土器片が出土したが、図示可能なものはなかった。

時期 V層上面で検出したことや、他の遺構との先後関係、出土した土器に甕D類（S字状口縁台付甕）片が含まれていることからVI期～VII期と思われる。

SKc0554（図125）

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形は不明瞭であった。発掘区外に広がるため全形は不明であるが、細長い形状の土坑である。埋土は2層に分層したが、V層ブロックや黒色土ブロックを含むことから人為的堆積の可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して出土したが、意図的な配置等は認められなかった。

出土遺物 550は高壙H1類で、脚部を欠く。

時期 図示した土器や他の遺構との先後関係からVI期～VII期と思われる。

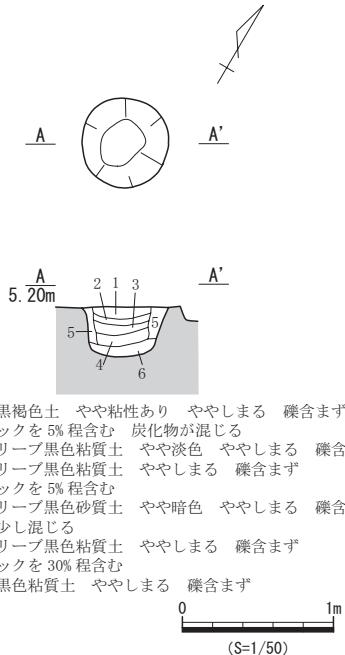
SKc0557（図126）

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形は不明瞭であった。三日月状に湾曲した穴で、深さは0.43mである。埋土は3層に分層したが、埋土1層・2層にV層ブロックを含むことから人為堆積の可能性がある。底面に段があることから、複数の土坑を区別できずに掘り下げた可能性もある。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して出土したが、埋土1層に多く、VII期と思われる比較的大型の破片もある。また、被熱痕のある砥石が1点出土した。

出土遺物 551は壺の脚台部片で、透かし孔が部分的に確認できる。脚裾部の内湾が顕著なことからVI期と思われる。552はVI期の甕D1類で、口縁部の屈曲部外面に押し引き刺突を施す。553はVII期の高壙D4類で、口縁部内面をやや肥厚させ、肥厚部に多条沈線や山形状の刺突文を施す。554はVI期～VII

SKc0552



SKc0554

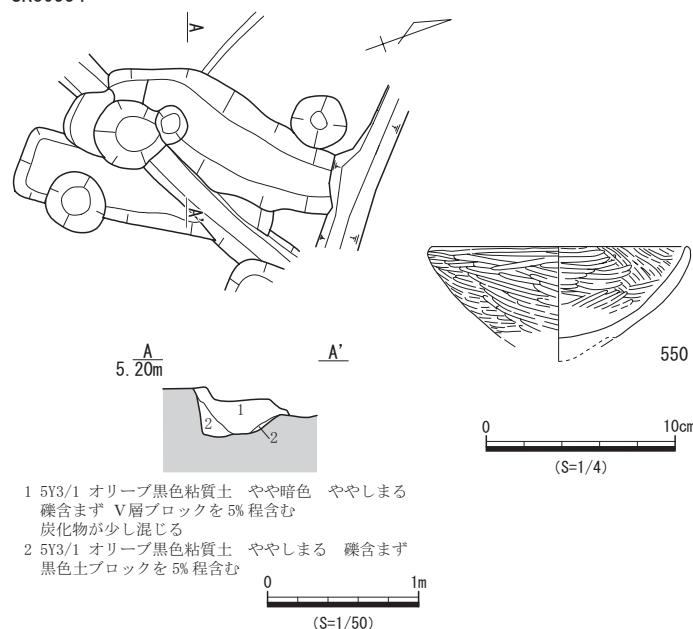


図125 SKc0552・SKc0554

期の高壺G3b類で、壺部がやや開き、口縁部は内湾する。口縁部外面には多条沈線を施す。555は小型の高壺脚部片で、多条沈線と刺突文を施す。

時期 図示した高壺（553）や他の遺構との先後関係からVII期と思われる。

SKc0558（図127）

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。径0.8m前後のほぼ円形で、深さ0.13mの深い穴である。埋土は単層で炭化材が含まれていた。壺の口縁部から上胴部片が炭化材とともに穴の中央部から出土したことから、人為堆積の可能性がある。遺物の出土状況やSKc0532との類似性から墓坑の可能性が考えられる。

遺物出土状況 検出面で壺が出土した他、少量の土器片が出土しただけである。

出土遺物 556はVII期～VIII期と思われる壺で、口縁部が短く立ち上がる。

時期 図示した土器や他の遺構との先後関係からVII期～VIII期と思われる。

SKc0559（図127）

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形は不明瞭であった。長さ2.49mの大型の土坑であるが、底面は北西部分が一段深くなっている。埋土は2層に分層したが、埋土2層にはV層ブロックを含み、埋土1層には炭化物が混じる。V層ブロックが含まれることや、大型の土

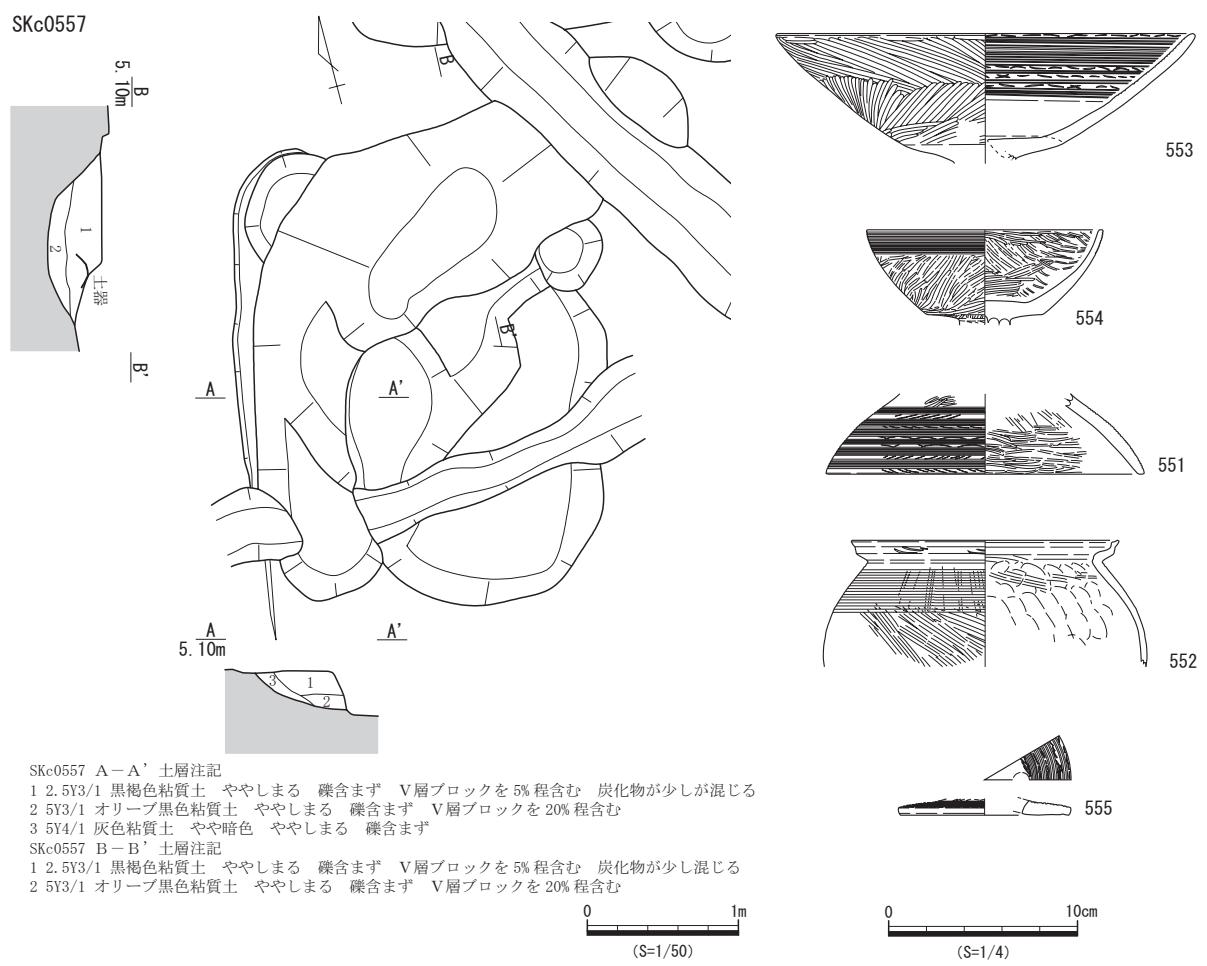


図126 SKc0557

器片が出土したことなどから、人為堆積の可能性があると思われるが、性格は不明である。

遺物出土状況 埋土中から比較的多くの土器片が出土した。また、大型の土器片（壺胴部片）が埋土1層から出土した。

出土遺物 557はVII期の壺C類で、口縁部が直線的で大きく開く。558はVII期の器台C2類で、受部が小さく内湾する。559は手捏ねE類で、調整が粗く、口縁部は直線的にはならない。

時期 図示した土器や他の遺構との先後関係からVII期と思われる。

SKc0563（図128）

検出状況 SDc031の西肩部に位置し、SKc0529底面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。長さ1.56mの不整橢円形の土坑であるが、底面は西側部分が一段深くなっている。埋土は3層に分層したが、埋土3層にはV層ブロックを含み、埋土2層には炭化物が混じる。V層ブロックが含まれることから、人為堆積の可能性があると思われるが、性格は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して出土した。

出土遺物 560はVIII期頃と思われる柳ヶ坪型壺の底部で、やや突出し底部中央がわずかに凹む。底部外面には木葉痕がある。561はVII期の甕D2類で、562はVIII期の小型S字状口縁台付甕である。

時期 図示した土器や他の遺構との先後関係からVII期と思われる。

SKc0564（図128）

検出状況 SDc031の西肩部に位置し、SKc0529底面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。径1m程のほぼ円形で、深さ0.49mである。壁面はやや開く。埋土は3層に分層したが、底面に灰色砂質土が堆積し、壁面に貼り付けるようにV層ブロックを含む土が堆積していた。その内部は分層でき

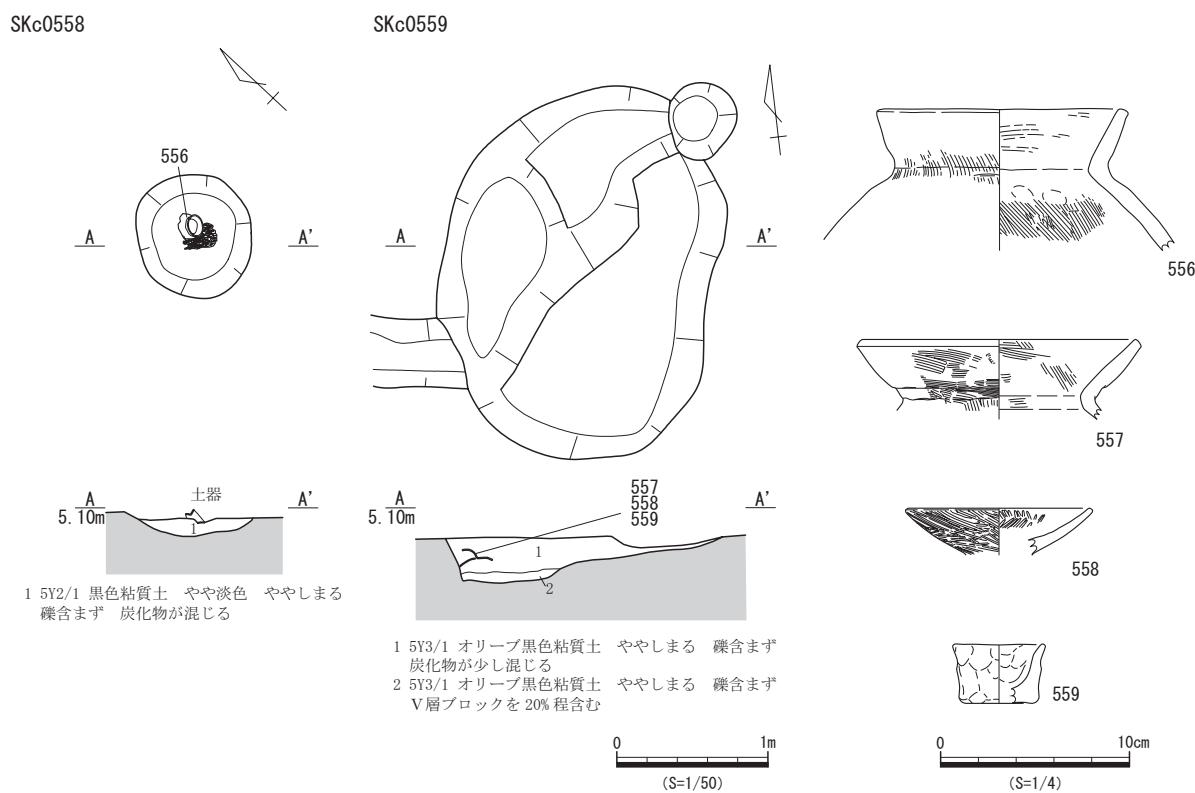


図127 SKc0558・SKc0559

なかつた。SKc0552と同様に、壁面に貼り付くような土層堆積となる土坑で、性格は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して出土したが、小破片が多く図示可能なものはなかつた。しかし、その中にS字状口縁台付甕C類の口縁部破片が含まれていた。

時期 他の遺構との先後関係や、出土した土器にS字状口縁台付甕C類が含まれていることからVII期と思われる。

SKc0575 (図129)

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形は不明瞭であった。発掘区外に広がることや、他の遺構との重複により形状は不明であるが、大型で浅い土坑である。北西部と南西部が比較的直線的であることから、方形若しくは長方形の竪穴住居跡の可能性も考えられたが、柱穴と思われる穴や炉跡などを確認することができず、性格不明の土坑と思われる。埋土は3層に分層したが、いずれもV層ブロックを含むことから、人為堆積の可能性があると思われる。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して出土した。

出土遺物 563はVII期の壺J2a類で、口縁部がやや内湾する。564と565はVII期の甕D2類である。566はVII期と思われる高壠脚部で脚裾部がやや屈折してハ字形に開く。567は下呂石製の凸基打製石鏸である。568は面を持つ輕石製品である。

時期 図示した土器や他の遺構との先後関係からVII期と思われる。

SKc0577 (図130)

検出状況 SDc031の西肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。形状は長さ1.97mの不整橢円形で、底面に段がある。埋土は2層に分層したが、埋土1層にV層ブロック、埋土2層に黒色土ブロックを含むことから、人為堆積の可能性があると思われる。

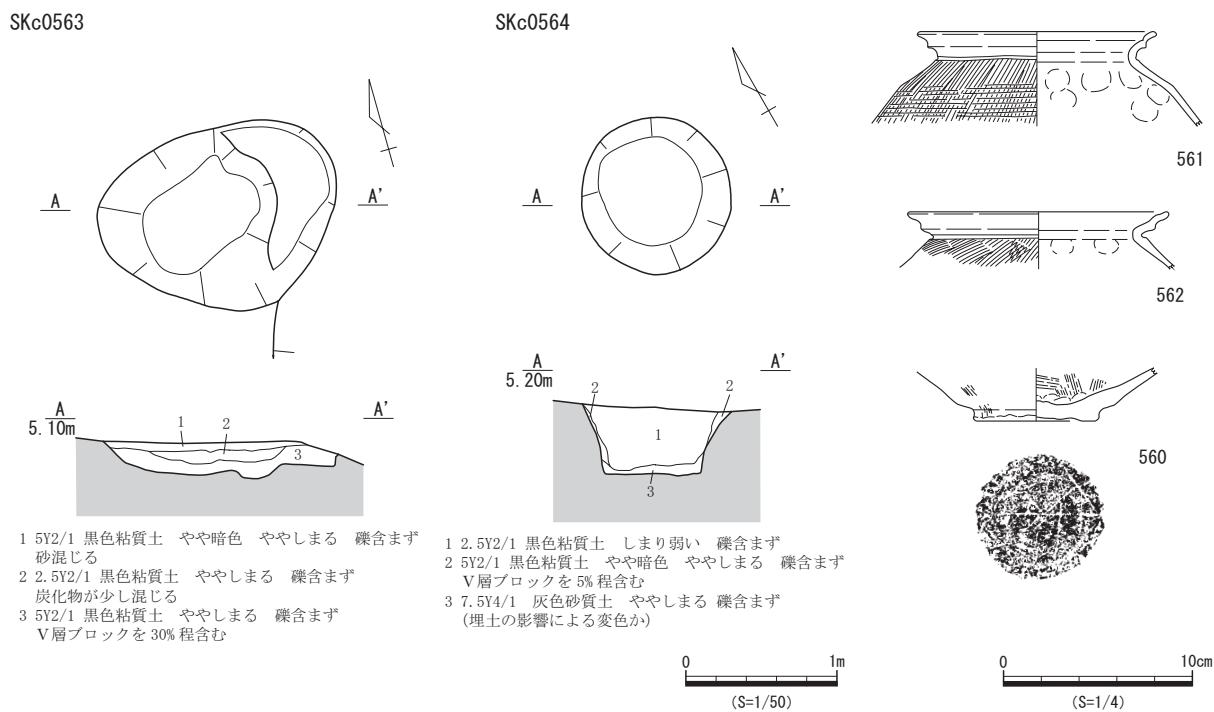


図128 SKc0563・SKc0564

遺物出土状況 埋土中から土器片が少量出土したが、図示可能な土器はなかった。しかし、その中にS字状口縁台付甕胴部片が含まれていた。また、叩石と砥石が出土し、このうち叩石を図示した。

出土遺物 569は砂岩製の長楕円礫の長軸端及び、平坦面に敲打痕を持つ叩石である。

時期 他の遺構との先後関係や、甕D類（S字状口縁台付甕）片が出土したことからVI期～VII期と思われる。

SKc0578（図130）

検出状況 SDc031の西肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。形状は0.69m×0.61mのほぼ円形で、底面は平坦である。埋土は3層に分層したが、埋土1・2層にV層ブロック、埋土3層に黒色土ブロックを含むことから、人為堆積の可能性があると思われる。

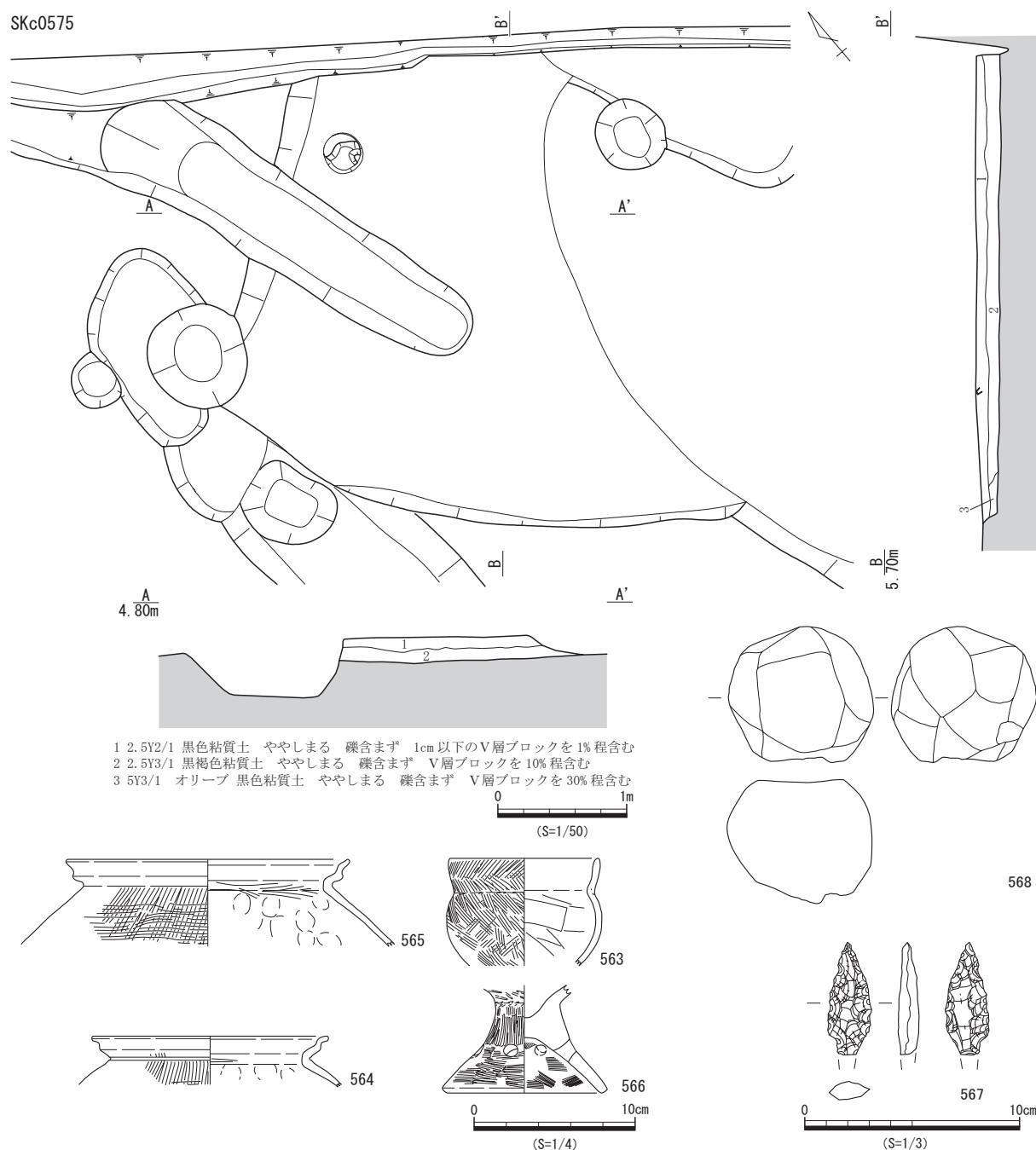


図129 SKc0575

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して出土した。

出土遺物 570はVI期頃と思われる壺の底部片と思われる。平底で突出している。571はIII期と思われる甕で、口径部が外反し、口縁端部に刻みを施す。

時期 他の遺構との先後関係や、出土遺物からVI期～VII期と思われる。

SKc0579 (図130)

検出状況 SDc031の西肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。大半が発掘区外となるため形状は不明で、底面は段がある。埋土は3層に分層したが、埋土2層にV層ブロック、埋土3層に黒色土ブロックを含むことから、人為堆積の可能性があると思われる。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して出土した。

出土遺物 572はハ字状に開く台部で、壺に付くものと思われる。573はS字状口縁台付甕C類で、口縁部上段が外方へ大きく伸びる。574は口縁部が直線的に開く鉢である。いずれもVIII期のものと思われる。

時期 他の遺構との先後関係や、出土遺物からVIII期と思われる。

SKc0584 (図131)

検出状況 SDc031の西肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。長径が1.14mのほぼ橢円形で、底面はやや凹凸がある。埋土は2層に分層したがほぼ水平堆積で、V層ブロックを含むことから、人為堆積の可能性があると思われる。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して出土した。

出土遺物 575はS字状口縁台付甕C類で、口縁部上段が外方へ大きく伸びる。576は円錐形に開く高壊の脚部である。いずれもVIII期のものと思われる。

時期 他の遺構との先後関係や、出土遺物からVIII期と思われる。

SKc0588 (図131)

検出状況 SDc031の西肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。大半が発掘区外となるため形状は不明である。埋土は単層でV層ブロックを含むことから、人為堆積の可能性があると思われる。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して出土した。

出土遺物 577はS字状口縁台付甕C類で、口縁部上段が外方に非常に大きく伸び、端部がやや肥厚する。

時期 他の遺構との先後関係や、出土遺物からVIII期と思われる。

SKc0608 (図131)

検出状況 SDc031の西肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。形状は径1.1m前後のほぼ円形で、底面は2段になりやや深くなる。埋土は2層に分層したが、堆積状況は不明である。ただし、埋土1層から多くの土器片が出土しており、これを意図的なものと考えると人為堆積の可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して出土したが、特に検出時から土器片が確認でき、埋土1層から多くの土器が出土した。

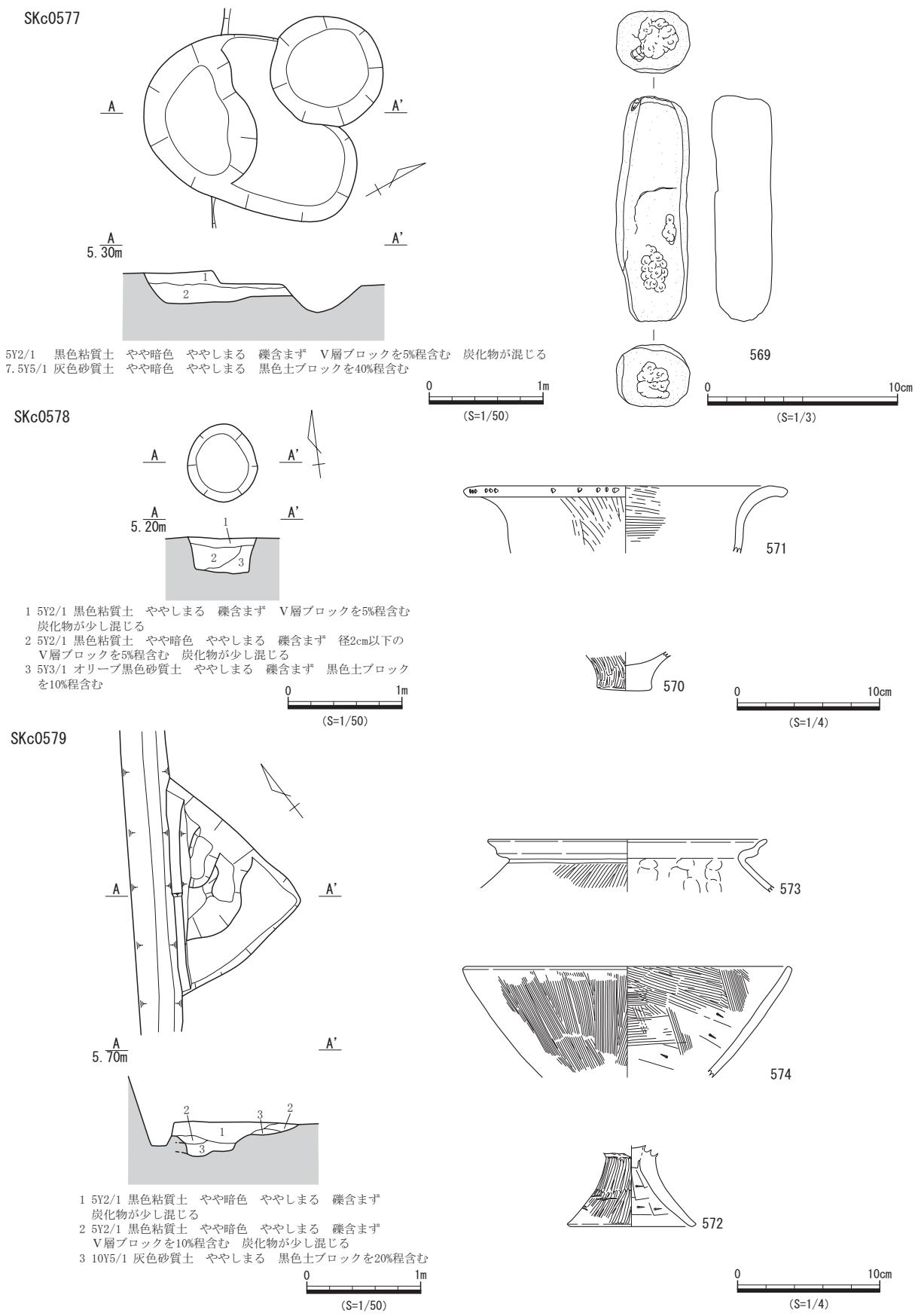


図130 SKc0577・SKc0578・SKc0579

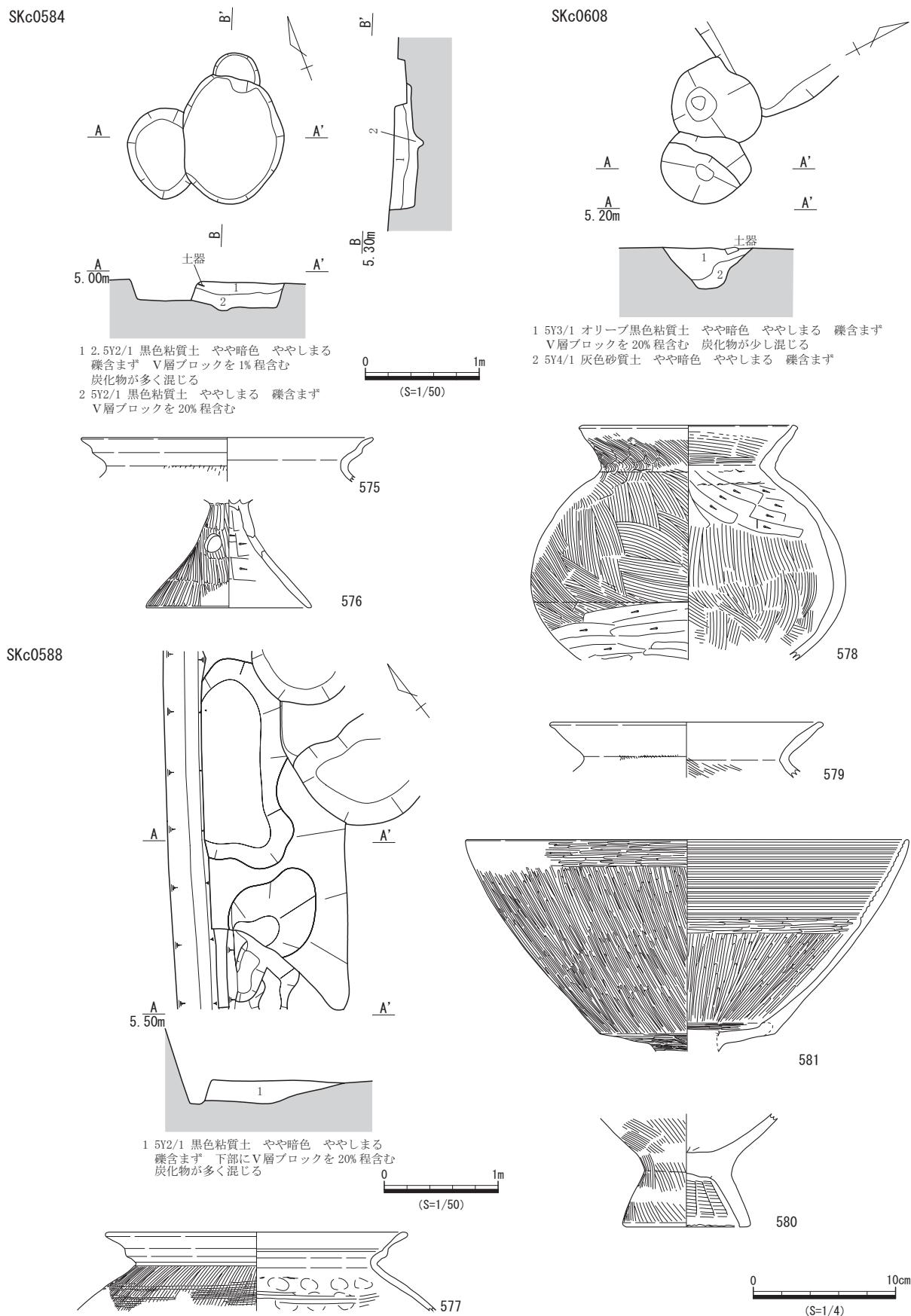


図131 SKc0584・SKc0588・SKc0608

出土遺物 578はVI期の壺I2類で、短い口縁部がやや内湾して開く。胴部は下部で張り、下ぶくれ状となる。579はVI期と思われる甕C類で、580は台付甕の台部である。581はVI期の高壺C3b類で、壺部がやや内湾して開く。口縁部内面を肥厚させ、多条沈線を施す。

時期 他の遺構との先後関係や、出土遺物からVI期と思われる。

SKc0625 (図132)

検出状況 SDc031の西肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。形状は径0.38mほどのほぼ円形で、すり鉢状の断面形となる。埋土は2層に分層したが、埋土1層にV層ブロックを含むことから、人為堆積の可能性があると思われる。

遺物出土状況 埋土中から少量の土器片が出土した他、砥石片が出土した。

出土遺物 582は被熱した砥石片で、砥面が2面確認できる。

時期 他の遺構との先後関係や、出土した土器片に甕D類（S字状口縁台付甕）片があることから、VI期～VII期と思われる。

SKc0635 (図132)

検出状況 SDc031の西肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。形状は径0.48mほどのほぼ円形で、壁面がやや傾斜した断面形となる。埋土は2層に分層したが、埋土1層にV層ブロック、埋土2層に黒色土ブロックを含むことから、人為堆積の可能性があると思われる。

遺物出土状況 埋土中から少量の土器片出土した他、埋土2層上面で木製品が2点出土した。

出土遺物 583は狭鋤と思われる扁平な板材で、下端は緩やかな片刃状となる。584は曲物容器の把手と思われる長方形の板材で、右側面が弧状に抉れている。

時期 他の遺構との先後関係や、出土した土器片に甕D類（S字状口縁台付甕）片があることから、VI期～VII期と思われる。

SKc0640 (図132)

検出状況 SDc031の西肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。形状は長径0.70mほどの不整円形で、北側の壁面に段がある。埋土は単層でV層ブロックを含むことから、人為堆積の可能性があると思われる。また、壺の出土状況から、小規模ではあるものの、墓坑の可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土中から少量の土器片が出土した他、横位の状態で壺が1個体出土した。埋納された可能性がある。

出土遺物 585はIV期の壺G類で口縁部を欠く。胴部はほぼ中位で張り、底部はやや突出する。上胴部外面には、横線文と波状文を3帯ずつ施し、頸部に横線文のみ施す。

時期 図示した土器から、IV期と思われる。

SKc0657 (図132)

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。一辺が0.90mほどの不整方形で、深さ0.30mである。埋土は7層に分層したが、底面に黒色土が堆積し、その上から壁面に貼り付けるようにV層ブロックを多く含む土が堆積していた。その内部は1層だけで、V層ブロックや炭化物が含まれる。SKc0552などでも、こうした壁面に貼り付くような土層堆積となつておらず、特徴的な土坑であるが性格は不明である。

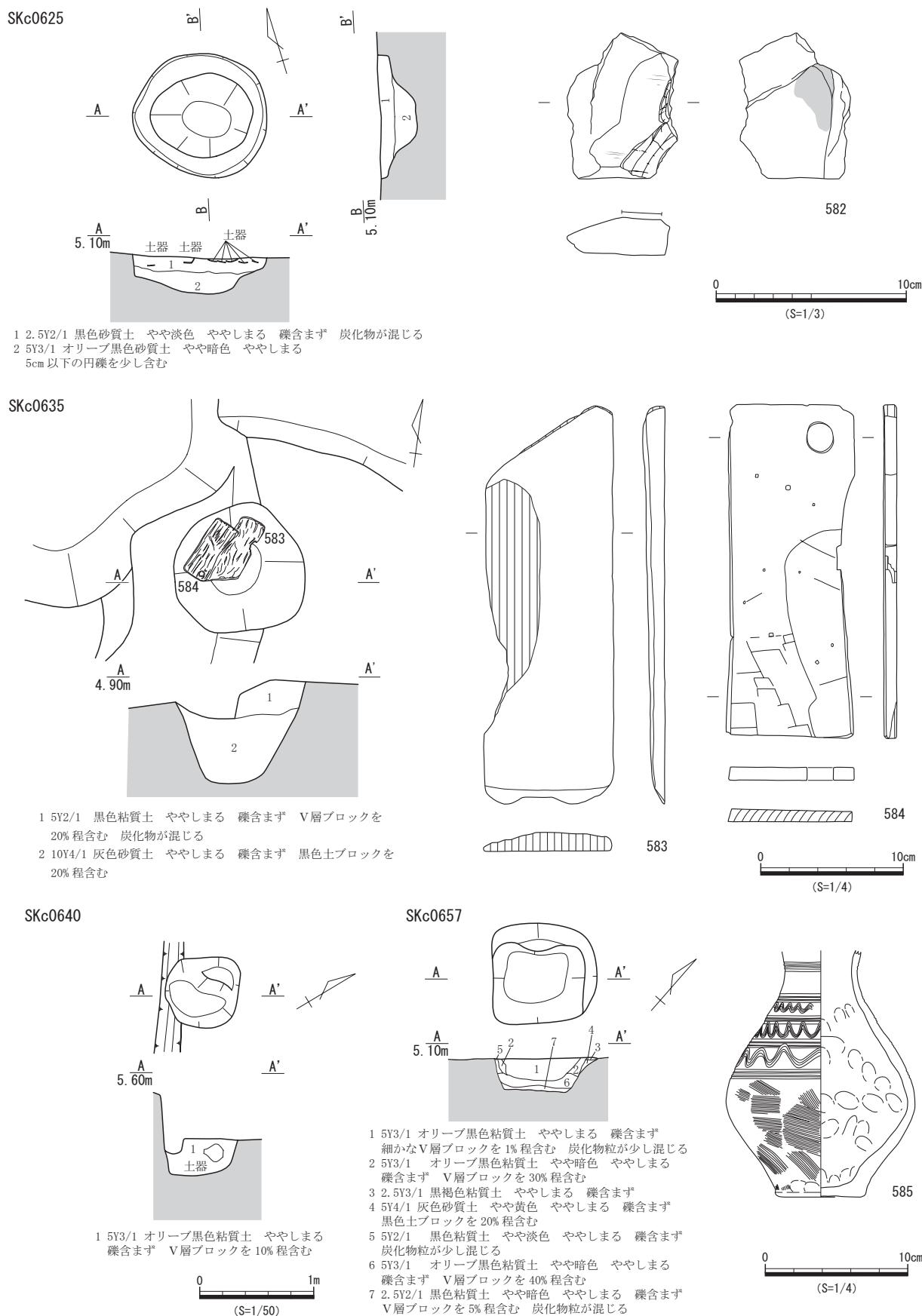


図132 SKc0625・SKc0635・SKc0640・SKc0657

遺物出土状況 埋土中から廻間式頃と思われる少量の土器片が出土したが、図示可能なものはなかった。

時期 他の遺構との先後関係や、出土した土器から、VI期～VII期と思われる。

SKc0674（図133）

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。形状は長径0.60mほどの不整円形で、断面形がすり鉢状となる。埋土は3層に分層したが、遺物出土状況から人為的に埋め戻されたもので、地鎮めのような祭祀に関連する土坑と思われる。

遺物出土状況 穴の北側壁面に、台付甕の台部が2点出土したが、586は台裾部を下に、587は台裾部を上にしていた。甕の台部や高坏脚部を埋納する例は、他の地点あるいは他の遺跡にも認められる。他にも土器片が少量出土した。

出土遺物 586は台付甕の台部で、裾部が内湾する。587はS字状口縁台付甕の台部であるが、裾部内面の折り返しが明瞭でなく、甕D1類の台部と思われる。

時期 図示した土器から、VI期と思われる。

SKc0678（図133）

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。形状は発掘区外に広がるため不明であるが、深さ0.56mのやや深い穴である。埋土は2層に分層したが、埋土1層にV層ブロックが含まれ、埋土2層には木屑が多く含まれていることから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器片が少量出土した他、木屑が多く出土した。

出土遺物 588はVI期の甕A3類で、口縁部が屈曲して立ち上がる。

時期 図示した土器から、VI期と思われる。

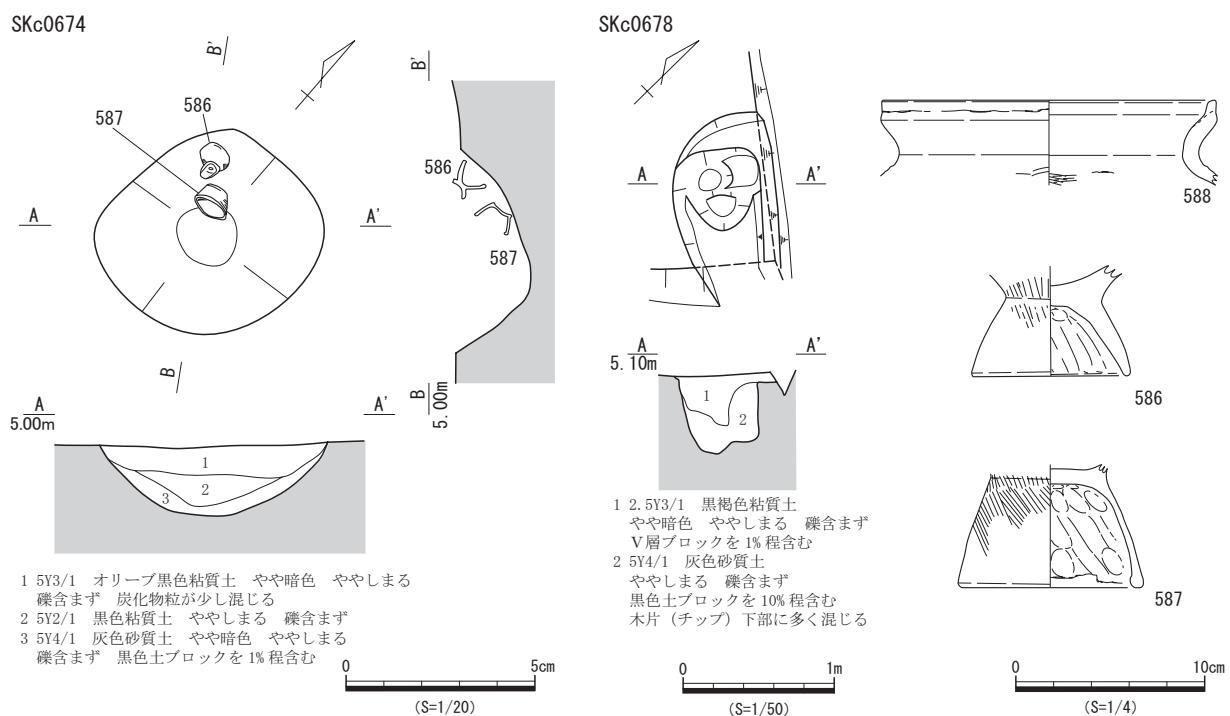


図133 SKc0674・SKc0678

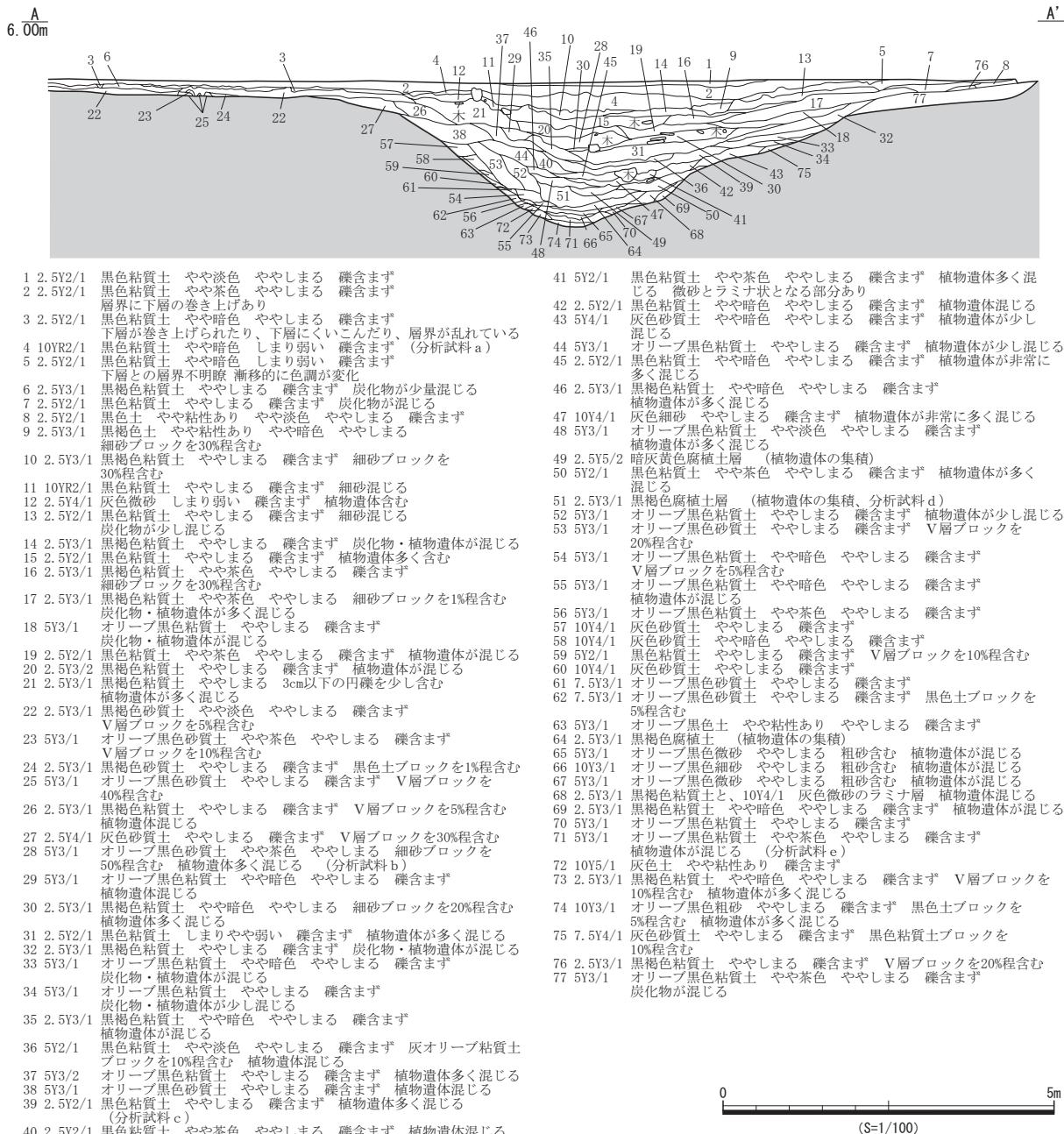
SDc031南部（図134～図137）

検出状況 SDc031南部を検出した場所は、地形が西から東へ非常に緩やかに傾斜している。IV層上面において帶状の窪地として確認でき、IVa層除去後に帶状の黒色土の範囲を溝の幅として掘削作業を開始した。しかし、V層上面ではその幅は当初よりも狭くなり、最終的に明確な肩部として確認した幅は最大8.70mであった。SDc031北部及び中部では、ほぼ南北方向に流れるが、この地点ではやや北東から南西に傾き、大垣市教委発掘区での検出状況と合わせると、SHc01を検出した部分がやや張り出すようにこの溝を湾曲させていると思われる。深さは最大1.80mあり、SDc031中部で検出した深さとあまり差はない。SDc031中部では東側にテラス状の段があり、浅く窪んだ溝状の部分を確認しているが、SDc031南部においては、SDc094とした浅い溝状遺構が、このテラス状の段と溝状部分の末端部となる可能性が考えられ、この位置から幅が広がると思われる。壁面は土層観察を行ったA-A'断面では東側よりも西側壁面の傾斜がやや緩くなっている。また、東側壁面から肩部にかけては、樹木の根株が8点残存していた。これらの根株は第5章第7節に同定結果を掲載したように、アカガシ亜属1点、ヤマグワ7点であった。他の地点での結果や今宿遺跡で検出された根株の同定結果との比較から、ヤマグワは居住域において意図的に植えられていた可能性が考えられる。なお、出土した種実類ではイチイガシが最も多いことから、根株のアカガシ亜属はイチイガシと思われる。西側壁面にテラス状の段として図示した部分は、東側の岸に生育していた樹木が倒れた結果、壁面を崩した部分である。埋土は図示した土層図で77層に分層したが、SDc031北部や中部と同様に、植物遺体や砂の混在状況、土色などから大きく三分でき、出土遺物においても時期的な差を傾向として認めることができる。土層図1層から4層は基本層序のⅢ層下部からIV層に該当する。上層は土層図1層から21層で、遺物取り上げ時の区分はa層からe層が概ね対応する。黒色から黒褐色の粘質土で、中央部に植物遺体が多く含まれる土層がある。間に灰色微砂層があり、一時的に水流があったと思われる。遺物はVII期からIX期のものが多く、X期や古代の遺物もある。溝状の窪地となった部分に堆積したものと思われ、この両岸において土器集積を検出した。この土器集積が出土した層位は、IVa層を除去した段階で土器が確認でき、V層上面に至るまでに全容が把握できたことから、IVb層に対応する堆積と思われる。中層は土層図22層から52層で、遺物取り上げ時の区分はf層から1層が概ね対応する。黒色、黒褐色、オリーブ黒色の粘質土で、壁際には砂質土やV層ブロックを含む土層が堆積していた。中央部には植物遺体が多く含む土層が堆積し、特に50層や52層は植物遺体が集積したような堆積であった。遺物はV期からVI期のものが主で、木製品が最も多く出土した。下層は53層から77層で、遺物取り上げ時の区分はm層からq層が対応する。黒褐色やオリーブ黒色の粘質土、砂質土や砂層が堆積し、ラミナ状の堆積も確認できることから、水流があったと思われる。65層は植物遺体の集積層であるが、その上部は壁際の堆積と中層となり、水流があったことを示すような砂層の堆積は少なく、北部や中部で検討したように、65層の堆積時から何らかの要因により止水され、沼地状態に変化したことが想定できる。遺物はIV期のものを中心とし、その前後の時期のものが含まれる。

遺物出土状況 埋土中から多量の土器や木製品が出土したが、その傾向は北部の状況に類似し、土器類は上層が最も多く、木製品類は中層に多い。上層から出土した土器のうち、出土状況を示したように（図135～図137）、溝の東西肩部で潰れたような状態で出土した土器がある（遺物観察表備考欄にSUと表記）。いわゆる柳ヶ坪型壺やVII期までの壺D類の系譜にあるものが主で、他に器台C2類やS字



図134 SDc031南部



出土状況図

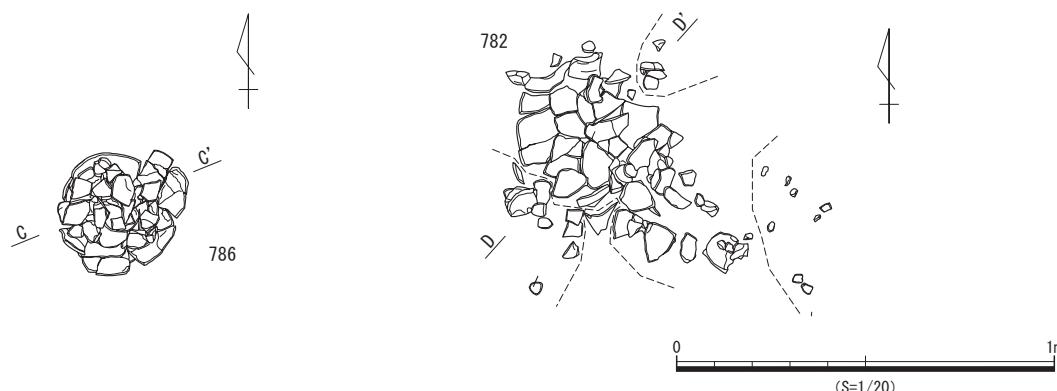


図135 SDc031南部土層断面図・出土状況図（1）

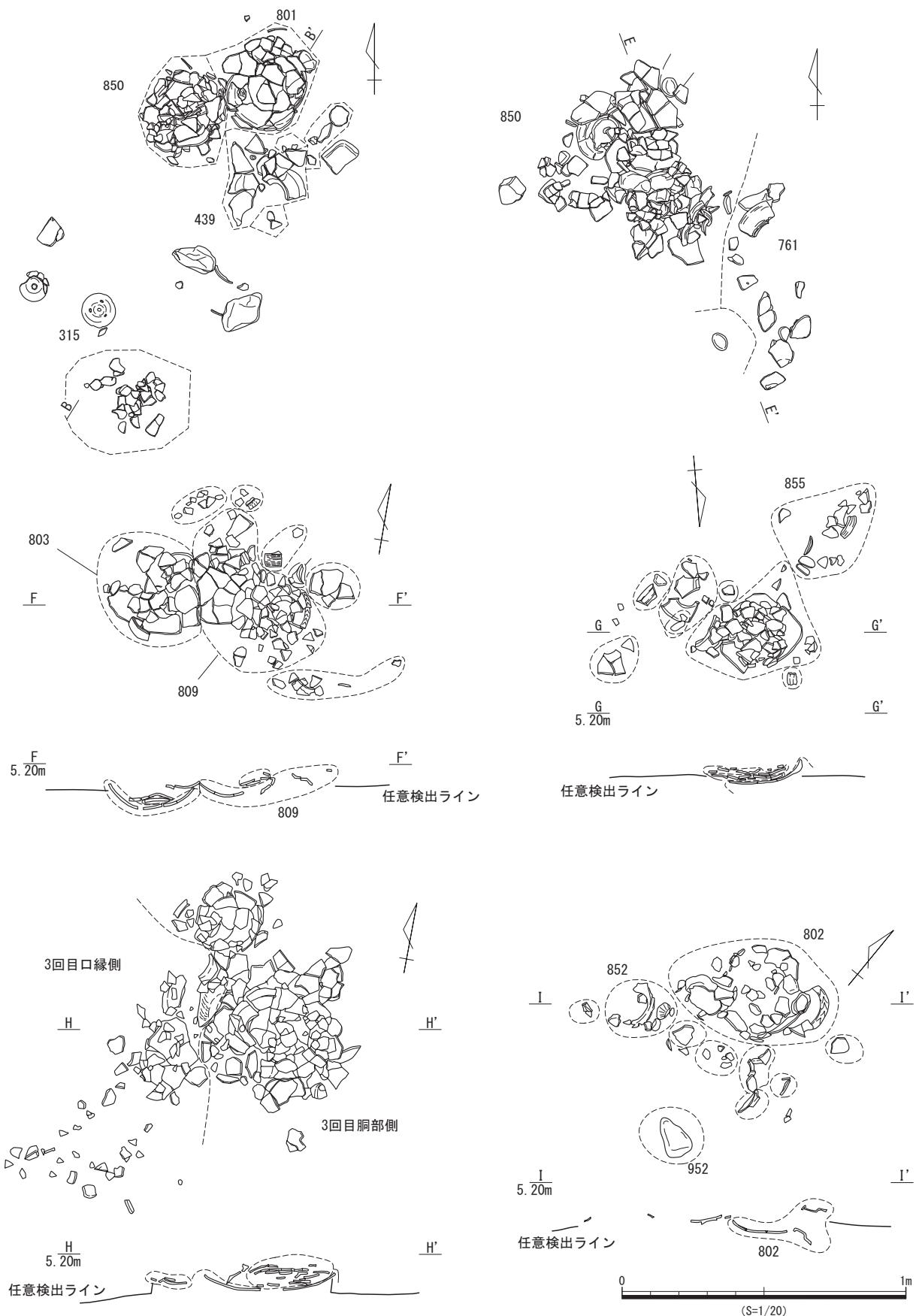


図136 SDc031南部出土状況図（2）

状口縁台付甕C類やD類がある。これらの土器は、VII期からVIII期のものと思われることから、この時期にSDc031の埋没はかなり進んでおり、帯状の沼地となった周囲で柳ヶ坪型壺や受口状となる壺D類を用いた活動が行われていたと思われる。上層の肩部で集積された状態で出土した土器以外は、意図的に配置された状況のものはなく、溝内に廃棄されたものと思われる。なお、中層から有孔円盤状銅製品、上層から巴形銅器が出土した。石器類は188点出土したが、叩石が89点、砥石が88点と両者で大半を占め、他に上層から軽石製品3点、中層から磨製石斧2点が出土した。

出土遺物（図138～図224） 589～604は下層から出土した土器で、I期からV期のものがある。589～591はIV期の壺A1類で、592はIV期の壺A2類、593はIV期の壺C類である。594と595はV期と思われる壺A1b類で、595の口縁部内面には円形の刺突文が不規則に施される。596はI期と思われる甕で、口縁部が強く外反し、口縁端部に刻みを施す。上胴部には横線文がある。597はIII期と思われる甕で、口頸部が緩やかに外反し、口縁端部を刻む。口縁部内面に波状文を施す。598はIV期の甕A1類、599はIV期の甕A2類である。600はV期と思われる高環B2c類である。601はIV期の鉢の台部と思われ、透かし孔がある。602はV期の鉢A1類で、口縁部が屈曲して受口状となる。口縁部外面に刺突文、上胴部に刺突文と横線文を施す。603はII期と思われる内傾口縁土器の口縁部片である。604はV期以降と思われる手捏ね土器C類で、鉢状の器形を模している。

605～756は中層から出土した土器・土製品で、V期からVI期が主体となるが、IV期からVIII期まであ

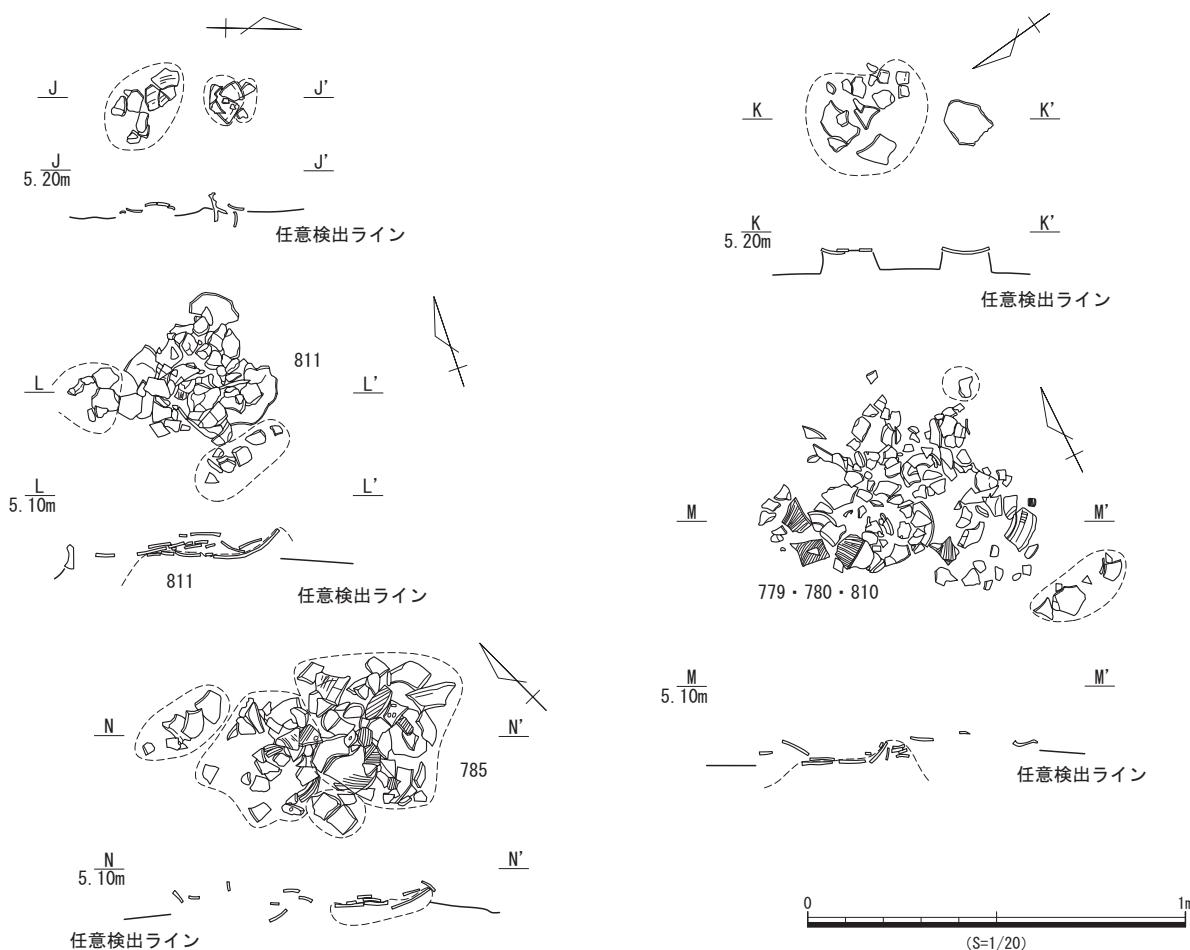


図137 SDc031南部出土状況図（3）

る。605はIV期の壺A2類で、口縁部から頸部にかけて、凹線文、羽状刺突文、横線文などを施す。606はVI期と思われる壺A1b類で、口縁部内面と口縁端部に羽状刺突文を施す。607と608はVI期の壺A3類で、赤彩を施す。608は脚台が付く壺A類で、細い突帯で胴部を区画し、突帯に沿って羽状の刺突文、区画内に多条沈線を施す。609はVI期～VII期と思われる壺A5類で、頸部内面、口縁端部、下胴部に赤彩を施し、上胴部には赤彩による山形文を施す。610は壺A類の胴部から底部で赤彩を施すが、被熱のため器面が剥落し、煤が付着する。611はVI期と思われる壺B1類の口縁部片である。612と613はV期～VI期と思われる壺B2a類で、612の胴部には人面の線刻がある。614と615はVI期～VII期と思われる壺B2b類で、614の胴部外面には横線文や山形文、波状文などを施す。616～618はVI期～VII期と思われる壺B3類である。619と620はV期～VI期と思われる壺C類で、620の胴部には多重の弧状線の線刻が施されている。621と622はVI期～VII期と思われる壺E類である。623はVI期と思われる壺G1a類で、口縁部が内湾して立ち上がる。624はVI期～VII期と思われる壺G2b類で、口縁部に沈線を施す。625はVI期～VII期と思われる壺G3b類で、下部で強く張る胴部から、やや内湾した口縁部が立ち上がり、外面に沈線を施す。短くハ字に開く脚台部を付ける。胴部外面には煤が付着しているが、内面にはお焦げ状の付着物はない。626はVI期と思われる壺H1b類で、口縁部外面に沈線を施す。627と628はVI期と思われる壺H2b類で、口縁部外面に多条沈線や連弧文などを施す。629～632はV期～VI期と思われる小型の壺I1類である。633と634はV期～VI期と思われる壺J1類で、633は無文で口縁部が短く外反する。634は赤彩を施し、口縁部外面には沈線、上胴部には横線文と刺突文を施す。635～637はV期～VII期と思われる壺K類である。635は口縁部が内湾して開き、壺A類の口縁端部を拡張させたように外面に段を持たせて肥厚させる。636は口縁部が外反して開き、口縁端部が上下に拡張される。口縁端部は丸みを持ち、刻みを施す。637は小型の壺で、口縁部は段を持って短く立ち上がる。口縁部外面には山形文を沈線間に施し、上胴部にも2帯の格子目文を施す。638と639は口縁部を欠くが、平底で胴部が張る小型の壺である。640と641は壺の胴部片であるが、多条線や葉脈状の線刻を施す。642はIV期と思われる甕A1類で、口頸部が外反して開き、口縁端部は拡張されて面を持つ。V期初頭とするべきかもしれない。643～648はV期～VI期と思われる甕A2a類、649～652はVI期と思われる甕A2b類である。653～657はV期からVI期と思われる甕A3類で、655～657の屈曲部外面に刺突文を施す。658はVI期と思われる甕A4類である。659はVI期と思われる甕B1a類で、口縁部が外反して開き、口縁端部に刺突を施す。660はVI期と思われる甕B2類で、661～663は甕B3類である。662と663の口縁端部は、指頭圧痕が残り調整が粗い。664はVI期と思われる甕B4類である。665～668はVI期と思われる甕C1類で、665には口縁部や胴部に施文がある。669～673はVI期の甕D1a類、674～676は甕D1b類で、いわゆるS字状口縁台付甕A類である。677はVII期の甕D2a類、678～682は甕D2b類で、いわゆるS字状口縁台付甕B類である。683はVI期～VII期と思われる甕E1類、684はV期～VI期と思われる甕E2類である。685は台付甕の台部片であるが、底部に径18mmほどの穿孔がある。686と687はV期～VI期と思われる鉢A1類で、687の口縁部外面には指頭圧痕が明瞭に残る。688～691はV期～VI期と思われる鉢A2類で、口縁部と胴部に施文がある。692と693はVI期と思われる鉢A3a類、694は鉢A3b類である。695はV期～VI期と思われる鉢A4a類、696は鉢A4c類である。697はVI期と思われる鉢B1類、698は鉢B2類で、底部に穿孔がある。699～703はV期～VI期と思われる鉢C類で、比較的丁寧な調整を施す。704はVI期～VII期と思われる鉢D類で、半球状の胴部に台が付く。口縁端部は未調整で、胴部外面には粘土紐接合痕

が残る。705と706はVI期～VII期と思われる鉢E類で、705は口縁部が直線的に開き、706は外反して開く。707はVI期～VII期と思われる鉢F類で、やや突出した凹底の底部である。708～710はVI期～VII期と思われる鉢G類で、708は壺の底部のような形状で、口縁部が内湾して立ち上がり、未調整である。709と710は短い口縁部が屈曲して開く。711はVI期と思われる高壺B3b類で、口縁部が外反する。712はVI期の高壺C2a類、713～715は高壺C2b類、716～718は高壺C2c類で、壺部が比較的深く口縁部がやや内湾する。719はVI期～VII期と思われる高壺C3b類、720は高壺C4a類、721は高壺C4b類で、口縁部がやや開く。722と723はVII期と思われる高壺D1類、724は高壺D5類で、壺部底部が小さくなり、口縁部はさらに開く。725は高壺C類の脚部で、裾部が内湾する。726は高壺D類の脚部と思われるが、壺底部が充填された粘土の剥離ではなく、穿孔したものである可能性がある。727はVI期の高壺G2類で、口縁部が内湾して立ち上がり、脚部は強く外反して開く。壺部外面には黒色の顔料を塗る。728はVI期の高壺G3a類、729～732は高壺G3b類、733は高壺G3c類である。734と735は高壺G類の低い脚部で、強く外反して開く。736はVI期の高壺H2類で、口縁部に多条沈線を施す。737はVI期と思われる高壺I2類である。738はVI期と思われる器台B1b類、739は器台B2類、740は器台B3類である。741と742はVI期～VII期と思われる器台B4類で、口縁端部を下方に拡張する。743はVII期と思われる器台C1類、744と745は器台C2類である。746はVI期～VII期と思われる蓋状のもので、高壺脚部に似る。口縁部は大きく外反して開き、頂部は円柱状に立ち上がる。747～751はVI期～VII期と思われる手捏ね土器C類、752～754は手捏ね土器E類である。755と756は形状不明な土製品で、パレススタイル土器と同様に白色系の胎土である。755は小型の壺状のものの可能性もあるが、赤彩を施す。口縁部状の部分に貼付したものが剥がれた痕跡が残る。756は裾が開いた円錐の頂部に、橢円形状の突起を付け、羽状の刺突と横線文を施す。

757～934は上層から出土した土器・土製品で、VII期からIX期が主体となるが、VI期以前やX期から古代の遺物がある。757と758は口縁部を欠くが、VII期～VIII期と思われる壺A類である。757は胴部上半に垂下する突帯や山形文などを施し、赤彩を施す台付壺である。758は頸部や胴部に赤彩を施し、胴部中央に円形の穿孔がある。その割れ面は摩耗しており、意図的に研磨した可能性がある。759～761はVII期～VIII期と思われる壺A1b類で、口縁端部を下方に拡張して面をなし、口縁端部や内面に羽状刺突、上胴部外面には横線文と波状文を施す。底部はやや突出し、凹底となる。762～764はVI期と思われる壺A3類で、赤彩を施す。765～772はVII期～VIII期と思われる壺B2類、773～775は壺C類である。776はVII期と思われる壺D3a類、777～784はVII期～VIII期と思われる壺D3b類である。785～787は口縁端部を欠くため細分類は不明であるが壺D類と思われる。788はVIII期と思われる壺E類で、口縁部の屈曲部に突線状の段があり、口縁端部は上方に立ち上がって面をなす。口縁端部には刺突を施す。789はVI期～VII期と思われる壺G2a類、790と791は壺H2b類、792は壺H3類である。793～796は口縁部を欠くが、壺H類と思われる胴部から底部である。797はVII期と思われる壺I1類、798は壺J2a類である。799と800はVII期～VIII期と思われる壺K類である。799は形状からは壺B類に近いが、その器壁は非常に薄く、口縁端部が上方にわずかに立ち上がる。800は形状からは壺A類に類似するが無文である。口縁部外面に粘土帶を付加して口縁端部を拡張し、口縁部はやや内湾する。胴部はほぼ中位で張り、やや突出した底部は凹底となる。801～805はVIII期～IX期と思われる柳ヶ坪型壺で、いずれも東肩部から潰れた状態で出土した。806はIX期と思われる小型壺で、球形の胴部から短い口縁部が開く。807～812は口

縁部を欠くため分類不明であるが壺の胴部から底部で、東肩部の土器集積から出土した809～811は壺D類か柳ヶ坪型壺の可能性がある。813は小型壺の脚台部と思われる。814～819は壺の胴部片で、線刻が描かれている。815は多条の線による涙滴状の線刻があり、器面には赤彩が施される。820はVI期～VII期と思われる甕B2類、821～823は甕B3類、824と825はVII期～VIII期と思われる甕B4類である。826と827は甕D1a類、828～837は甕D2b類である。なお、836と837は小型品である。838はVI期～VII期と思われる平底の甕E1類、839～841は甕E2類、842はVII期～VIII期と思われる甕E4類である。843と844は口縁部を欠くが小型の甕であることから甕E類とした。845～854はVIII期の甕で、いわゆるS字状口縁台付甕C類であるが、849と850、853は口縁端部がやや肥厚し、新しい傾向を示す。851～854は小型品である。855～857はIX期の甕で、S字状口縁台付甕D類である。858は口縁部断面が三角形状となるX期の宇田甕である。859～861はVI期～VII期と思われる鉢A1類、862は鉢A4c類である。863～865はVII期～VIII期と思われる鉢C類で、平底で緩く張った胴部からそのまま口縁部となるものや、わずかに立ち上がるものがある。866と867はVII期～VIII期と思われる鉢E類、868は鉢F類である。869～879はVII期～VIII期と思われる鉢G類である。869～873は小型の鉢で短い口縁部が付く。874と875は口縁部が短く外反し、台が付く小型の鉢である。876は口縁部がやや内湾する小型の鉢で、鋸歯状の文様を施す。877は小型丸底鉢で、口縁部はわずかに内湾して開く。878は畿内系の丸底鉢で、口縁部は屈曲して立ち上がる。879は口縁部形状や器壁の薄さ、器面調整などはS字状口縁台付甕と同様のもので、口縁部上段が短く外反し、頸部内面にハケ目調整が施されることから、VII期の可能性が高いと思われる。880と881はVI期の高坏C2c類で、口縁部内面には段を持って肥厚し、多条沈線を施す。880は坏部が深く大型の高坏である。882はVI期と思われる高坏C3b類で、坏部がやや大きく開く、口縁端部は内傾する面を持ち、沈線を施す。883はVI期の高坏C3c類で、坏部が深く口縁部がやや内湾する。口縁端部内面に内傾する面を持ち、多条沈線を施す。また、坏部内面には多条沈線と山形文、斜行刺突文を施す、この施文帶の下端は削りだして段を付ける。884と885はVII期と思われる高坏C4a類で、脚部は円錐形に開くが、裾部はやや内彎する。886～888はVII期～VIII期と思われる高坏D1類、889～892は高坏D2類、893～895は口縁部や坏部を欠くが、脚部の形状から高坏D類と思われる。896と897はVI期～VII期と思われる高坏G1類、898はVI期と思われる高坏G2c類で、内面に鋸歯状文を施す。899と900はVII期～VIII期と思われる高坏H1類で、900の脚部は短い。901と902はVII期と思われる高坏J類で、901は全形は不明であるが、坏部底部の外縁をつば状に残して、口縁部を立ち上げる。つば状の突出部には刻みを施す。902は畿内系の高坏で、浅い碗状の坏部から口縁部が大きく外反して開く。903は脚裾部が屈折するX期の高坏である。904はVI期と思われる器台B1a類で、受部は直線的に大きく開き、脚裾部が内湾して開く。905はVI期～VII期と思われる器台C1類、906～915はVII期～VIII期と思われる器台C2類、916はVIII期と思われる器台C3類である。917はVI期～VII期と思われる外来系器台で、外反する口縁部には円形状の透かし孔がある。918は裾部がやや内彎する器台脚部で、VI期～VII期と思われる。919～922は手捏ね土器C類で、919の外面には線刻が描かれている。923は壺を模したと思われる手捏ね土器D類、924～932は手捏ね土器E類である。924と925は台付土器、926～928は丸底の鉢状、929～931は平底の鉢状、932は碗状の形態である。933は古代の須恵器坏身底部片で、断面方形の高台が付く。底部外面には墨痕がわずかに認められる。934は径3.3cmの円盤の中央よりやや片寄った位置に、0.3cmほどの孔を開けている。孔の位置が中央ではないが、形状から土製紡錘車の可能性が高いと思われる。

935はg層から出土したR Fで、砥石片を転用したものである。936はk層、937はg層から出土した扁平片刃石斧である。938～963は叩石で、細長い楕円礫を利用したものが多い。長軸の一端あるいは両端、側面、平坦面に敲打痕がある。一部の叩石には砥面が認められるものがあり、砥石を転用したものと思われる。938は下層（q層）、939～949は中層（g層～h層）、950～963（a層～e層）から出土した。962～1002は砥石で、扁平な円礫の平坦面を使用したものや、ほぼ全面に砥面が観察できるものなどがある。964は下層（m層）から出土した砥石片である。965～979は中層（k層）から出土した。965はほぼ全面が砥面として使用されている。966～972は大型の置き砥石若しくはその破片で、砥面再生のための敲打痕が砥面に残るものがある。973と974はやや大きめの砥石であるが、平坦面を砥面とし、側面や端部に敲打痕がある。975は平坦な両面に砥面がある。976は小型の砥石で、線状痕が明瞭に残る。977～980は砥石片である。979～996は上層（a層～e層）から出土した。981は一部欠損するが、ほぼ全面が砥面として使用されている。982～988は大型の置き砥石若しくはその破片で、砥面再生のための敲打痕が砥面に残るものや、光沢が認められるものがある。989は平坦面を砥面とする砥石で、線状痕が残る。990～994は平坦な面に砥面があり、側面や端部に敲打痕が残るものがある。995は砥石片で、砥面が1面のみ確認できるが、砥面に光沢がある。996は小型の砥石で、砥面が2面ある。997～1002は小型の砂岩製砥石で、ほぼ全面が砥面として使用され、断面V字の溝が明瞭に刻まれるものもある。1003は軽石製品で、複数の面が形成されている。

1004はf層から出土した有孔円盤状銅製品である。径4.7cm、厚さ3mmほどで、中央部に径0.9cmの円孔を持ち、片面に軸受け状の突起がある。形状からは紡錘車の可能性が考えられるが確実ではない。唐古・鍵遺跡や大藤原京右京北三条五坊の調査で類例が出土している（田原本町教委・奈良県立橿原考古学研究所1978、奈良県橿原市千塚資料館2003）。1005はe層から出土した巴形銅器である。脚を一部欠損するが、半球形の座から5本の脚が渦を巻くように付き、座の中央部には棒状鉤を持ち、朝日遺跡出土例と非常に良く似ている。表面には被熱したような黒色化した部分が認められ、内面には赤色顔料が付着している。

1006は面取りした棒状材で、縦斧の柄の未製品と思われる。1007～1009は、長方形の板材の一方を薄く削った楔である。これらの木材加工工具は、中層から出土した。1010～1023は直柄鋤と思われる。1010と1011は頭部に鋭いくびれがあり、身は刃部にかけて膨らむ平鋤で、舟形の柄孔隆起を作り出し、円形の柄孔を空ける。裏面には蟻溝が作られている。1011は刃部に摩耗が見られず未製品か。1012は柄孔や蟻溝を設ける前段階の未製品である。1013は頭部にくびれがない形状で、粗加工段階の未製品と思われる。1014～1016はやや厚みのある板材で、上部に台形の柄孔隆起を削り出す。平面形は刃部側がやや幅広の長方形で、柄孔や刃部を作る前段階の未製品である。1017は柄孔隆起が見られない平鋤で、裏面に蟻溝がある。1018は柄孔隆起を持つ平鋤の破片である。1019～1023は直柄鋤の柄孔隆起の部分である。1021と1023は断面円形の柄の一部が残る。1024は直柄又鋤で、舟形の柄孔隆起を作り出す。1025～1030は方形の柄孔を持つことから、北部九州型直柄鋤として区別した。1025は扁平な板材で隅丸長方形に加工し、上側に方形の柄孔をあけている。刃部は片刃状に加工している。1027は頭部より刃部の幅がやや広く、刃先が湾曲する。1031～1048は、曲柄鋤や柄に縛縛する突起部である。1031はナスピ形曲柄又鋤で、軸部から刃部の上部に、不整方向の刃物痕がある。1032はナスピ形曲柄三又鋤で、笠の下から外側の刃部が湾曲する。1033～1035は同じ形状のナスピ形曲柄又鋤で、刃部外

縁が湾曲する。1036は曲柄三又鋤で、刃部外縁は湾曲する。柄の装着部には表面にのみ抉りが入れられる。1037と1038は曲柄鋤、1039は曲柄三又鋤の未製品と思われる。1040～1048は曲柄鋤の軸部片である。1049は平鋤の刃先、1050は狭鋤の刃先である。1051～1063は、又鋤や多又鋤の刃先で、外縁が湾曲したものや三又鋤の中央と思われる真っ直ぐなものがある。1064～1067は扁平な板材で鋤か鋤の刃先と思われるものである。1068～1089は泥除で、1068は蟻柄部分の破片、1069～1074は一部を欠損しているが、円形の柄孔が確認できる。1075は方形の柄孔が確認できる。1076～1085は、泥除と思われる板材で、補修孔と思われる小孔があけられたものがある。1086～1089は泥除未製品である。1086と1087は蟻柄を作り出しているが、柄孔を開ける前の段階、1088と1089は蟻柄を作り出す前の段階である。1090と1091は平面形のスコップ状の鋤で、一本から造り出す。刃先は両刃で平面が長方形、断面は台形である。柄は断面が丸く刃先との境は緩やかに変化する。グリップは丸みを帯びた三角形で、断面長方形である。1092は一本鋤のグリップである。1093は鋤の身部で、足かけ部分が長めである。1094は鋤の身部の一部か。1095は持ち手あるいは装着部、1096はグリップの一部と思われる。1097は長柄払い鋤、1098は横刃の払い鋤である。1099～1108は鋤の柄と思われる。1099と1100は直柄で、全面に縦方向の細かい調整を加える。1099の端部は細く加工し、1100は一方を平坦に、もう一方を尖らせている。1101と1102は半截材で、縦方向の調整を加えている。1103は丸太材で一部に加工痕が残る。1104～1107は曲柄の装着部である。1108は表面を縦方向に粗く削っており、鋤柄の未製品か。1109～1117は、樹種がアカガシ亜属の板材であることから、農具素材とした。1109～1114は、方形若しくは長方形の板材である。1115～1117はミカン割りをした板材で、断面形が三角形となる。これらの起耕・整地具は上層及び中層から出土した。1118は木包丁の未製品の可能性があるので、1119～1123は鎌の柄である。1119は柄の頭部に突起があり、装着孔は柄と直交している。これら収穫具は上層及び中層から出土した。1124は田下駄の足板で、円孔が中軸より右に1個、中軸より左に1個ある。1125は田下駄か大足の横木で、1126は大足の枠、1127～1129は大足の部材と思われる。これらの水田作業具のうち1126は下層から出土し、他は上層から出土した。1130～1132は横柾で、1130は断面が四角形である。1132は重く太く短い形状のため、藁打ち用と思われる。1133～1141は堅杵で、敲打部が使用により摩滅するものが多い。これらの敲打・潰碎具は上層及び中層から出土した。1142～1146は木錘で、中層から出土した1142と1143はやや大型である。1147～1149は棒の腕木、1150は棒の軸と思われる。1151と1152は紡織具の部品、1153は紡錘車片、1154は織機の部材であろうか。これらの編物・織機関連具は上層及び中層から出土した。1155～1160は断面が楕円形に近い棒状材で、表面を平滑に仕上げ、端部に蟻溝を付ける天秤棒である。1161は表面を細かく加工し、下部の水かきを幅広に、下端に向かって薄くしている。形状から櫂の可能性が考えられる。これら運搬具は、上層及び中層から出土した。1162は浮子、1163は網枠と思われる漁撈具で、1162は中層、1163は下層から出土した。1164は剣か刀の柄、又は鞘の未製品と思われる。1165と1166は弓で、端部を削り弭を作り出す。1167は盾の断片で、表面に朱漆を塗る。裏面に一辺0.1cmの方形孔があけられており、間隔は横0.6cm、縦2.0cmである。1168は盾あるいは鎧の断片で、表面に紐を通した後黒漆を塗っている。表面には横方向へ2.0cm、裏面は横方向へ0.6cmの紐の圧痕がある。一部に紐が残り、紐孔は円形である。横方向へ2.0cm、0.5cm、縦方向へは0.6cmの間隔である。紐は上段と下段で互い違いになるように通している。これらの武器・武具は中層から出土した。1169～1182は方形若しくは長方形の槽で、底部に長方形の脚

が付くものがある。1183は根曲り材を刳り抜くた容器で、長方形の抉りは18cm×12cm、深さは6cm程度である。1184は槽又は盤の底部で、脚部を削り出す。1185は両端を片刃状に加工し、表面を平滑に仕上げており、スリット式の容器の蓋か天板と思われる。1186は扁平で幅狭な板材で、側面にコの字状の抉りを入れており、浅い容器の側縁部と思われる。1187は形状が舟形で、内部を刳り抜いた容器の底部である。側面に小孔が並ぶ。1188は脚付き刳り物容器の一部である。楕円形に刳り抜かれ、底部に脚を付ける長方形の孔を空ける。1189は口縁部の中央に溝を巡らせ、高壙の蓋と思われる。内面には赤漆が付着する。1190と1191は曲物の底板、1192～1195は側板、1196・1197は蓋、1198～1205は把手と思われるものである。1206は組物容器、1207は指物容器の一部と思われる。1208は筒状器台と呼ばれる精製品で、内外面ともヤリガンナによる細かな加工痕がある。表裏面とも赤彩が施されている。これらの容器のうち1206は下層、他は上層及び中層から出土した。1209～1226は形代で、1209～1212は鳥形、1213は動物形、1214は鎌形、1215～1219は刀形、1220～1225は剣形及びその可能性が考えられるもの、1226は木葉形の中を刳り抜いた、舟形木製品である。1227～1232は断面多角形や円形に削りだした棒状具で、一端に抉りが入れられているものがあり、祭祀や儀礼に用いられる竿と思われるが、他の器具の柄の可能性もある。1233～1235は端部を丸く籠状に整形し、丁寧な加工を施したものである。1236は琴の天板の把手部と思われるもので、先端を多角形に加工する。1237は儀器の一種で、竿状の棒状具の先端に複数紐で縛り、音を鳴らす道具と思われる。これらの祭祀・儀礼関連具は上層及び中層から出土した。1238は椅子の脚で、差し込みが作り出されている。1239は丸太材を細かく面取りした台、1240と1241は組み合わせ式台の一部、1242は根曲材を利用した作業台、1243は作業台に使用されたと思われる板材である。1244～1250は板材を利用した火鑽臼である。1251は杓子の一部で、1252は柄の一部の可能性がある。1253は柄状に加工した棒状材で、栓と思われる。これらの家具・生活雑具のうち1242は下層、他は上層及び中層から出土した。1254は籠の枠材、1255は籠の底部で、中層から出土した。1256～1259は柱根で、1260～1265は柱材の一部、1266は束柱と思われる。1267～1271は、端部に加工を施した垂木で、1272は垂木の先端部、1273は垂木の残材の可能性がある。1274～1277は破風板、1278と1279は棒状の屋根材と思われる。1280～1287は横架材、1288～1304は棟材である。1305～1307は一本で、足掛部を作り出した梯子である。1308～1310は床板と思われる板材である。1311～1313は壁板材、1314～1320はその他建築部材と思われるものである。これら建築部材のうち、1260は下層、他は上層及び中層から出土した。1321～1331は杭で、丸太材と分割材を加工したものがある。1332は縦木である。これら土木部材は上層及び中層から出土した。1333～1340は器種不明の器具部材で、1339が下層から出土した他は上層及び中層から出土した。1341は断面形がやや湾曲し、木樋と思われる板材で、上層から出土した。1342～1360はその他の構造部材で、上層及び中層から出土した。1361～1438は板材で、扁平な板材や孔をあけるもの、端部を尖らせるもの、複数の板を樹皮で結束するものがある。1439～1512は棒材で、角材や端部を尖らせるものがある。1513～1542は端材、1543～1565はその他の加工材である。1566と1567は樹皮材である。

時期 掘削時期はSDc031中部における杭の年代測定から弥生時代中期前半代と思われ、出土した土器は下層からIV期～V期、中層からV期～VI期、上層がVII期以降が主体となる。溝の掘削後、止水し沼地化し始めたのが中層が堆積する頃と思われ、X期以降完全に埋没したと思われる。

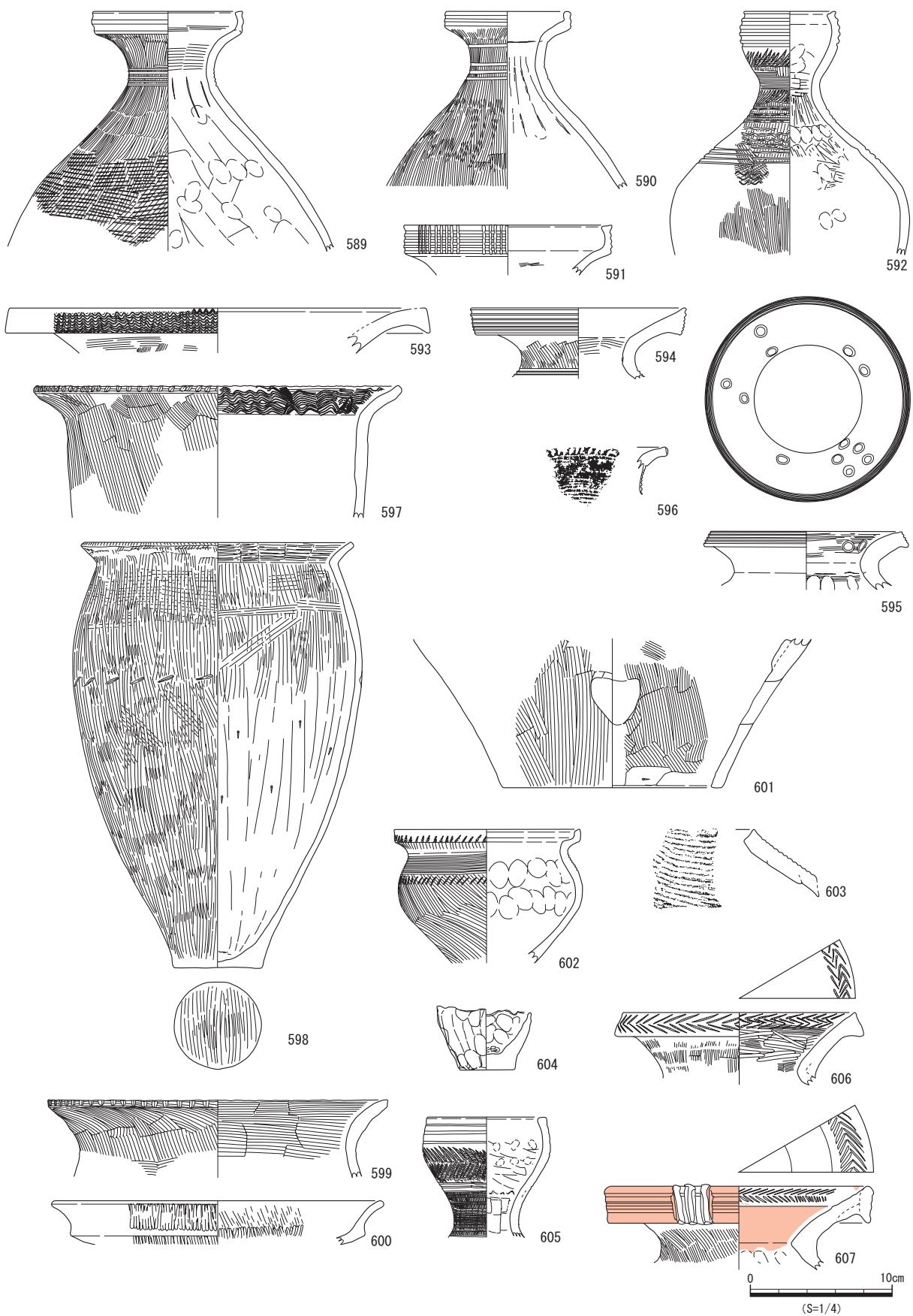


図138 SDc031南部出土遺物（1）

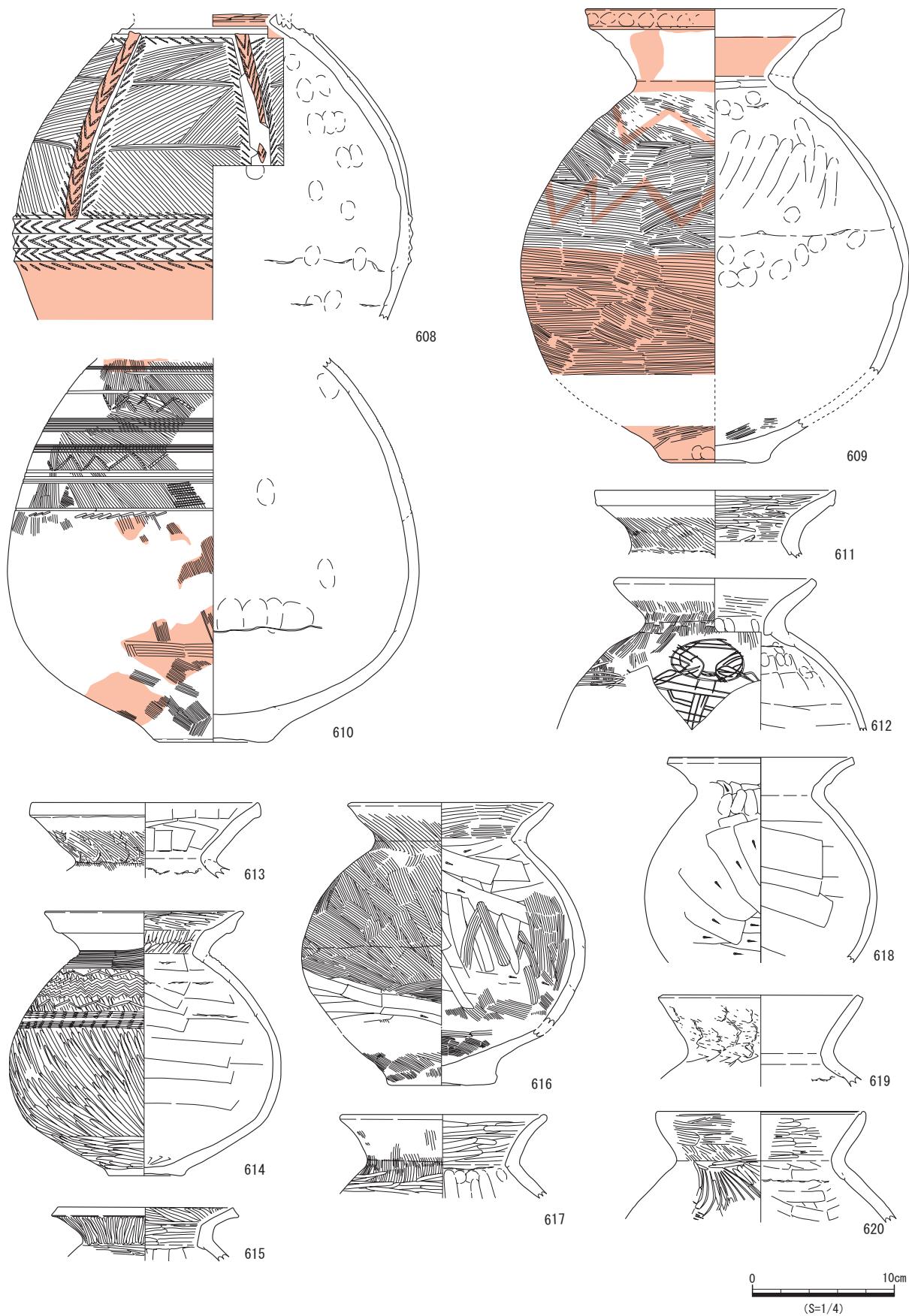


図139 SDc031南部出土遺物（2）

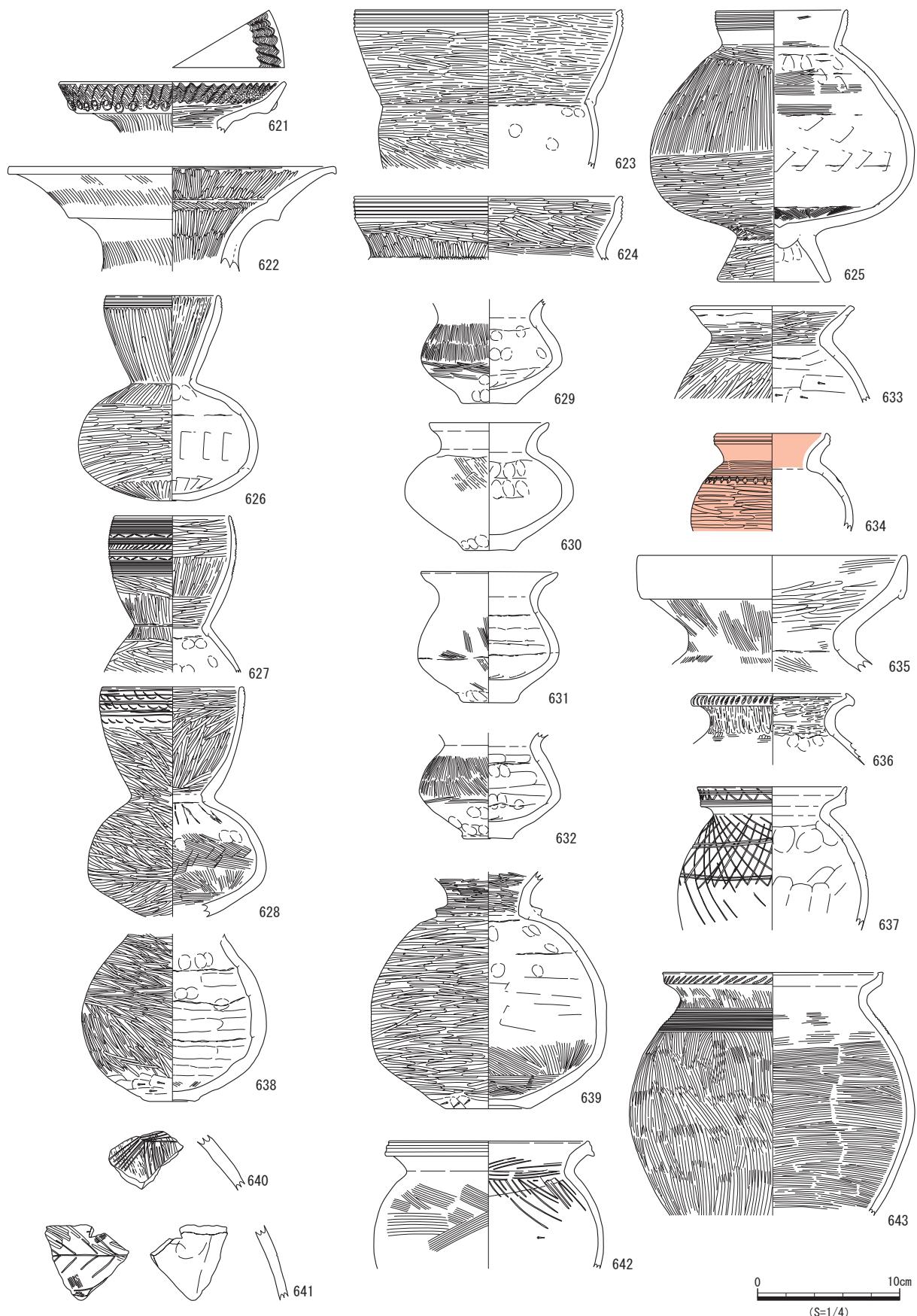


図140 SDc031南部出土遺物（3）

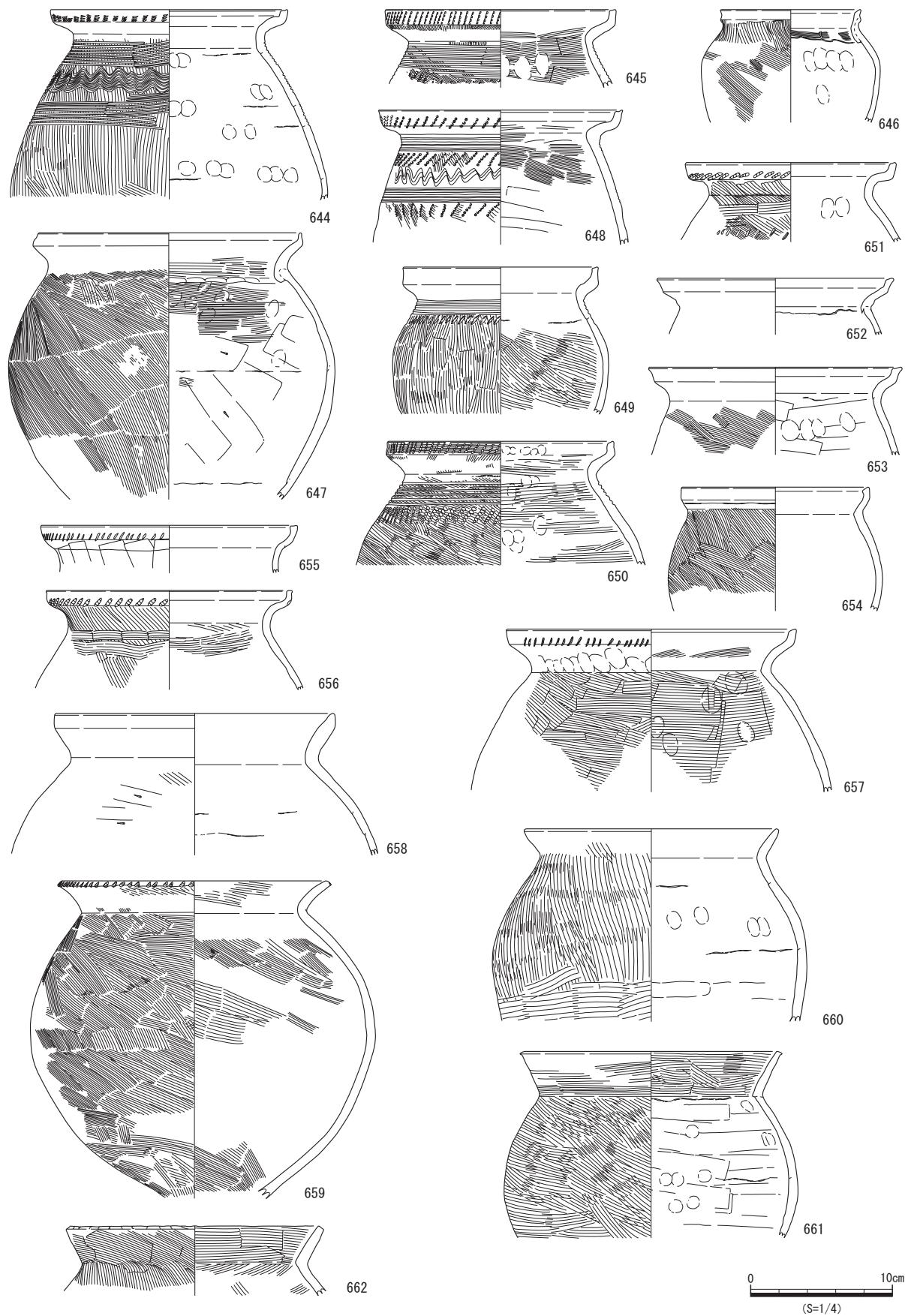


図141 SDc031南部出土遺物（4）

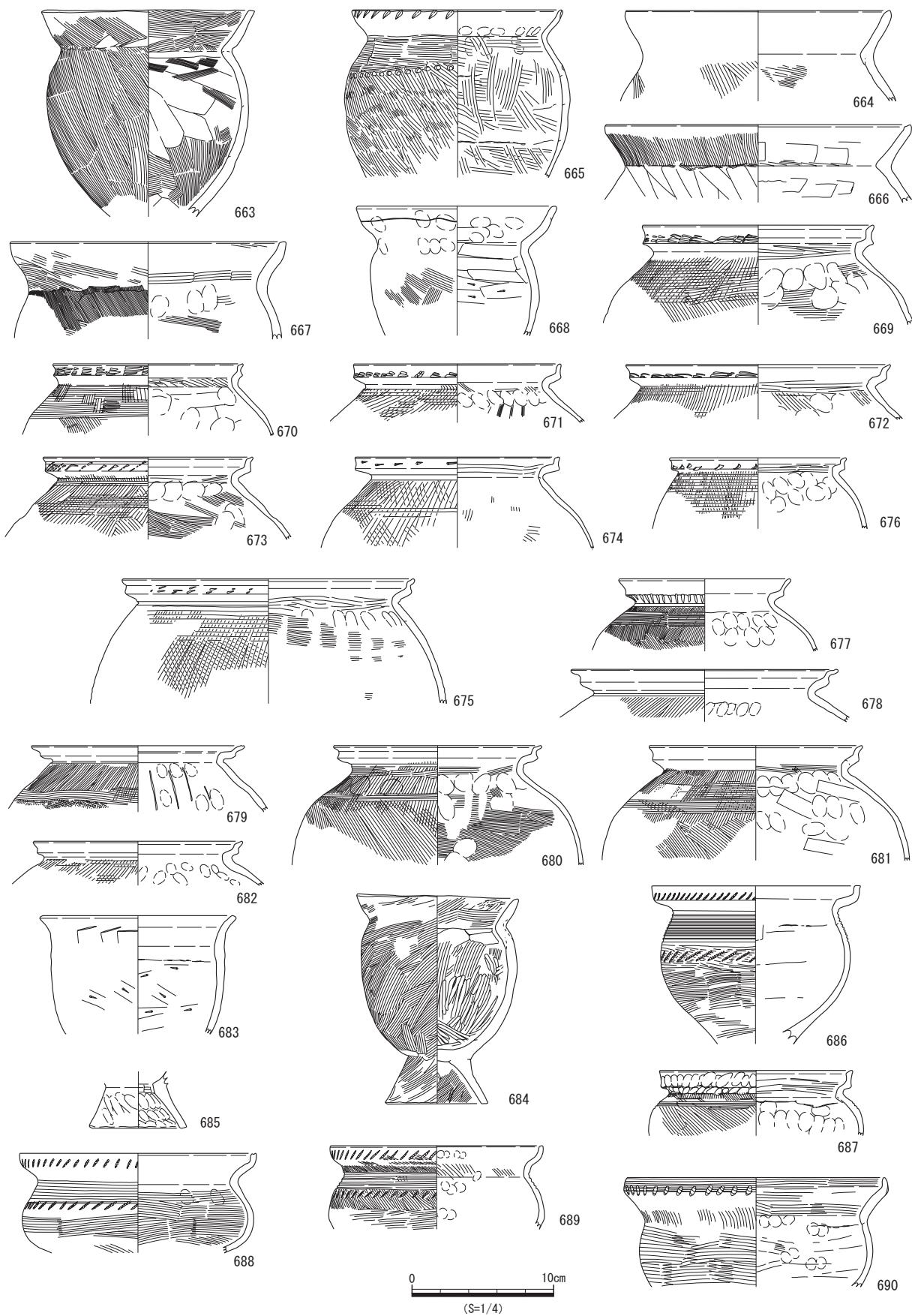


図142 SDc031南部出土遺物（5）

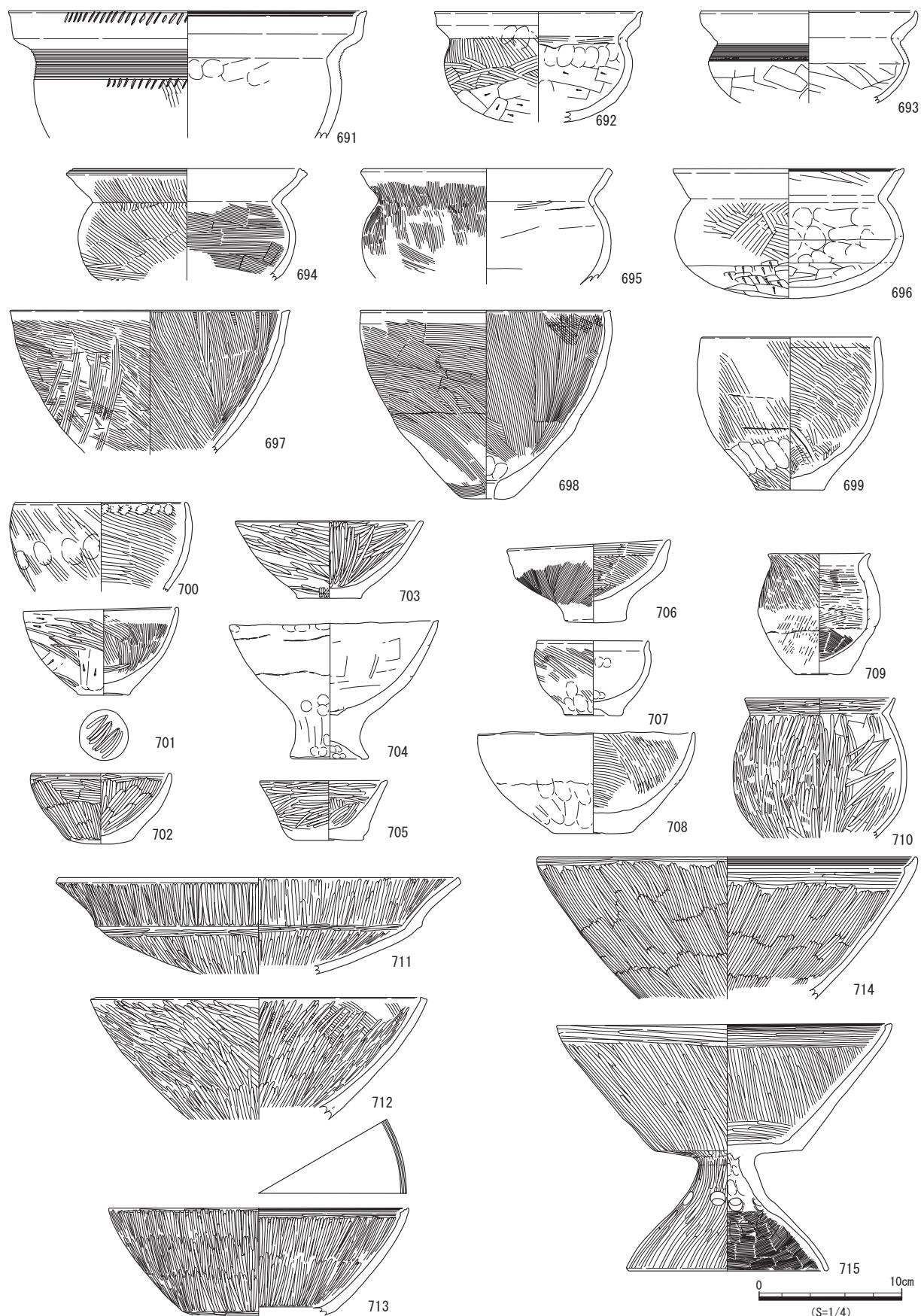


図143 SDc031南部出土遺物（6）

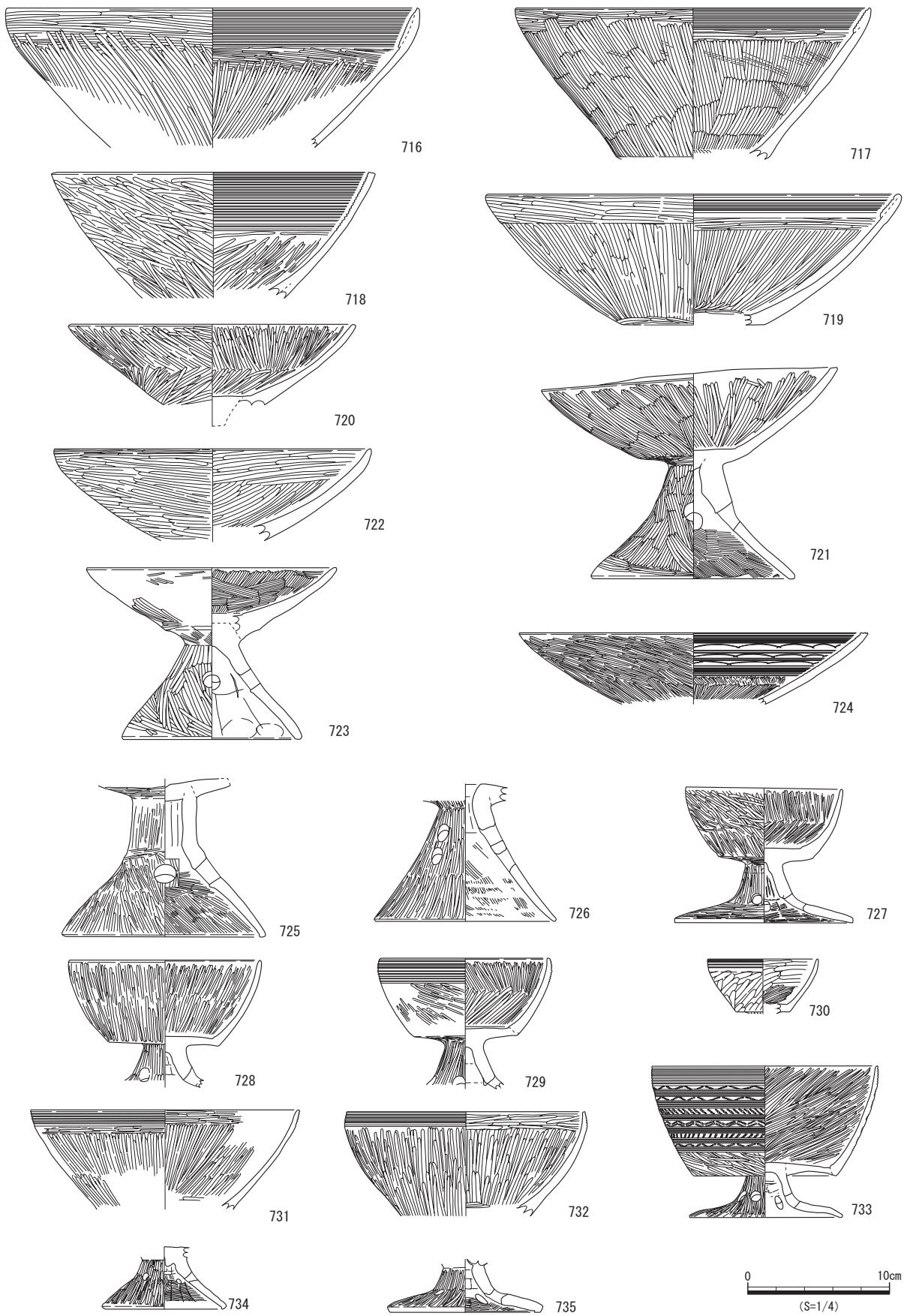


図144 SDc031南部出土遺物（7）

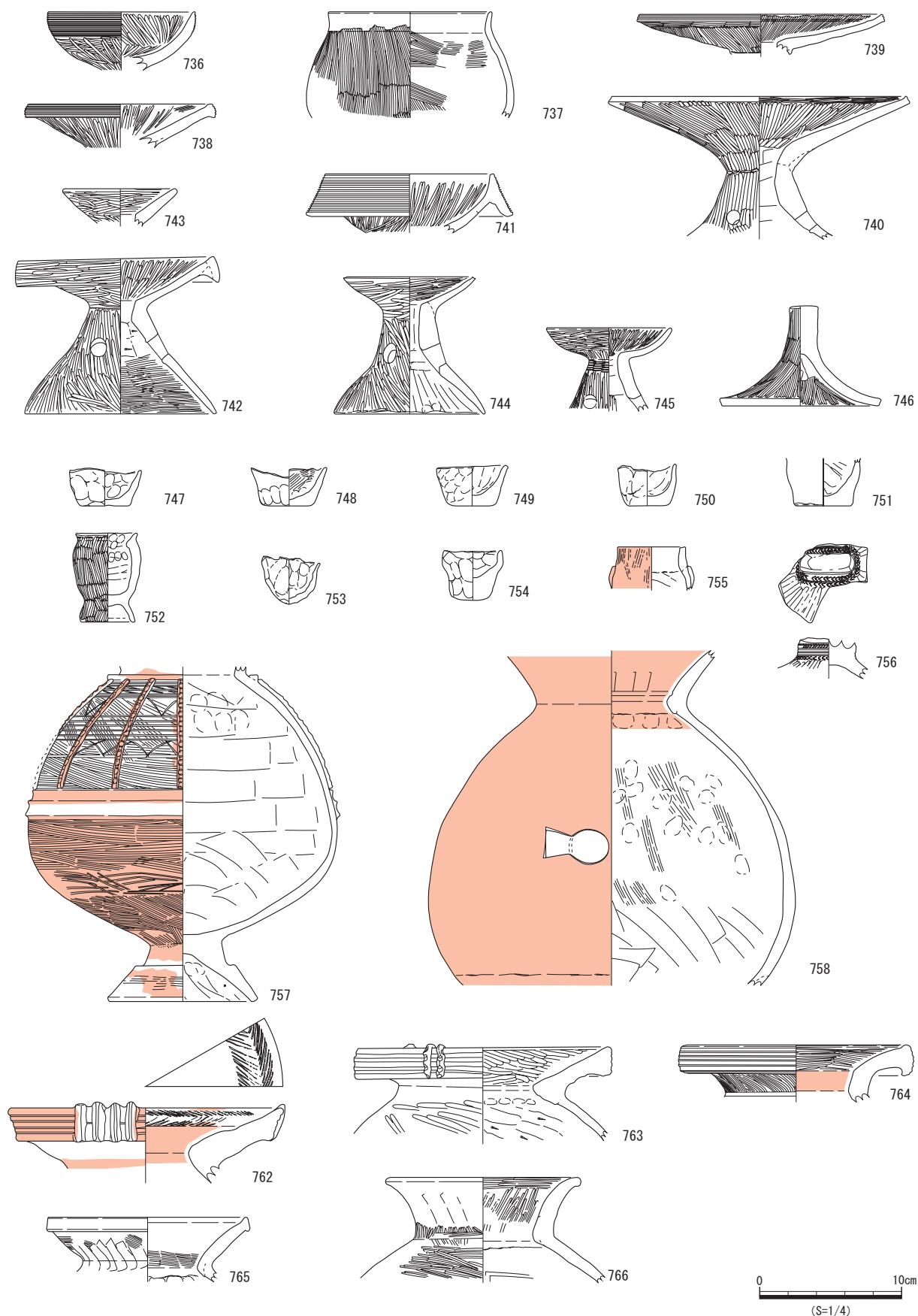


図145 SDc031南部出土遺物（8）

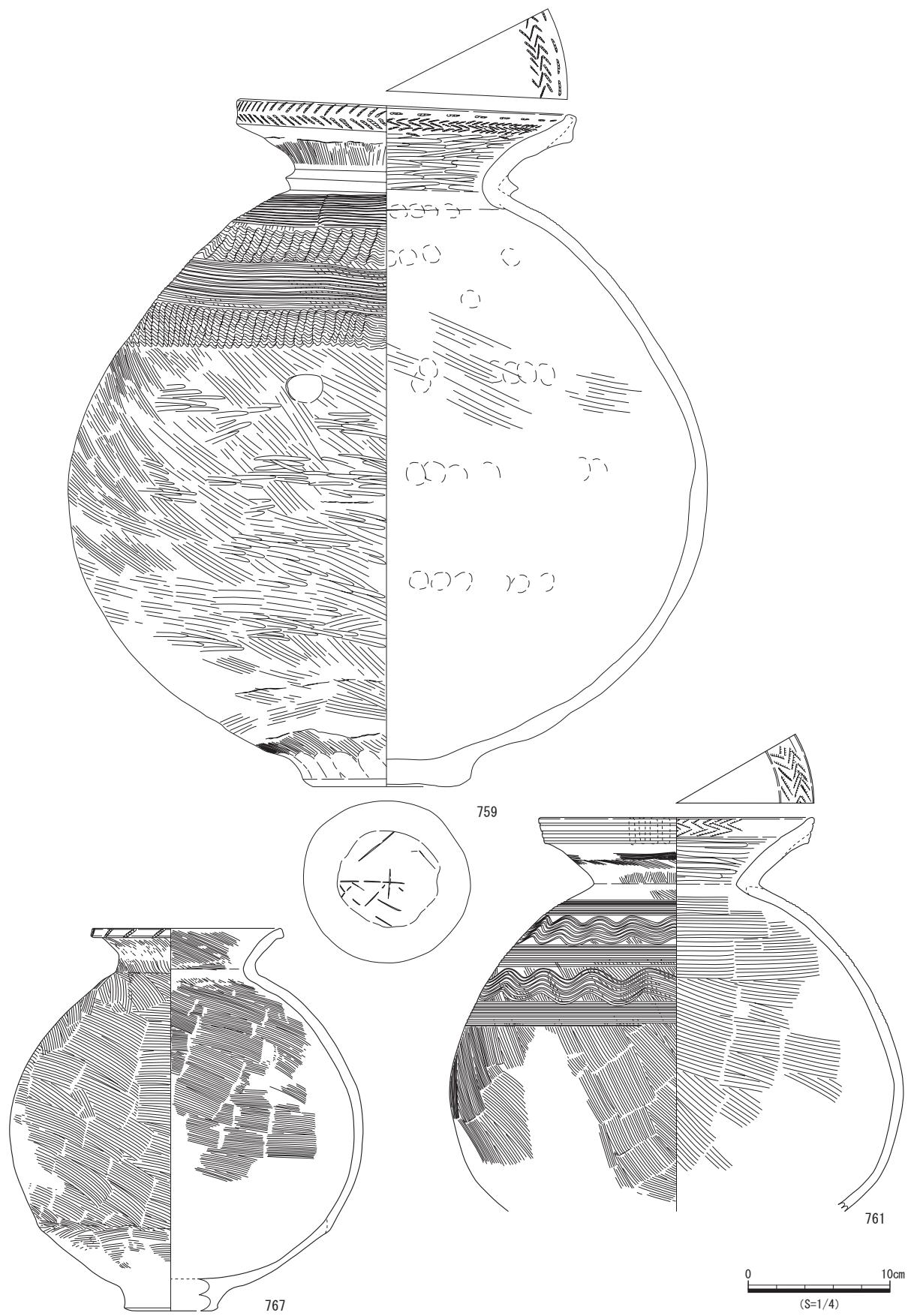


図146 SDc031南部出土遺物（9）

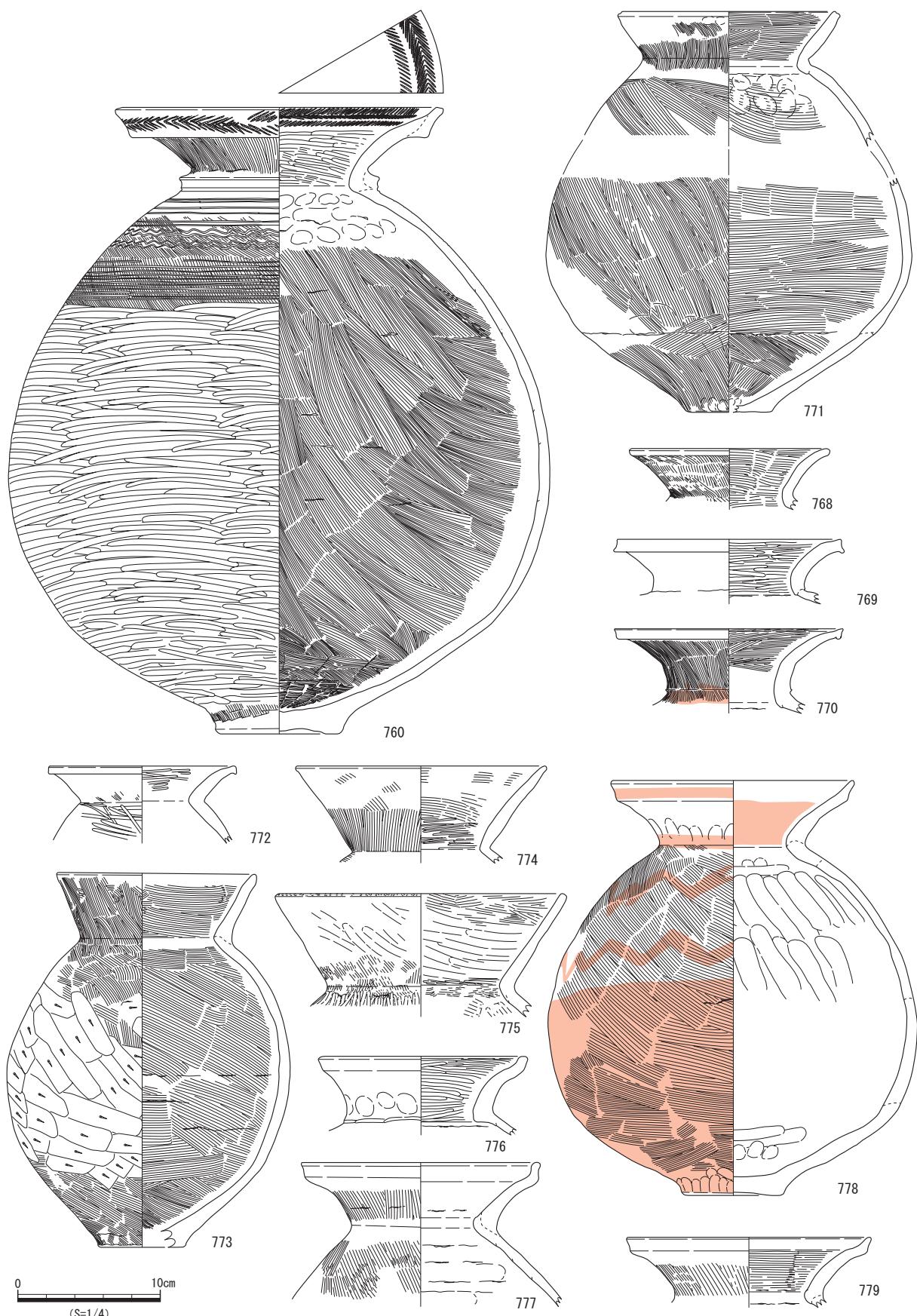


図147 SDc031南部出土遺物 (10)

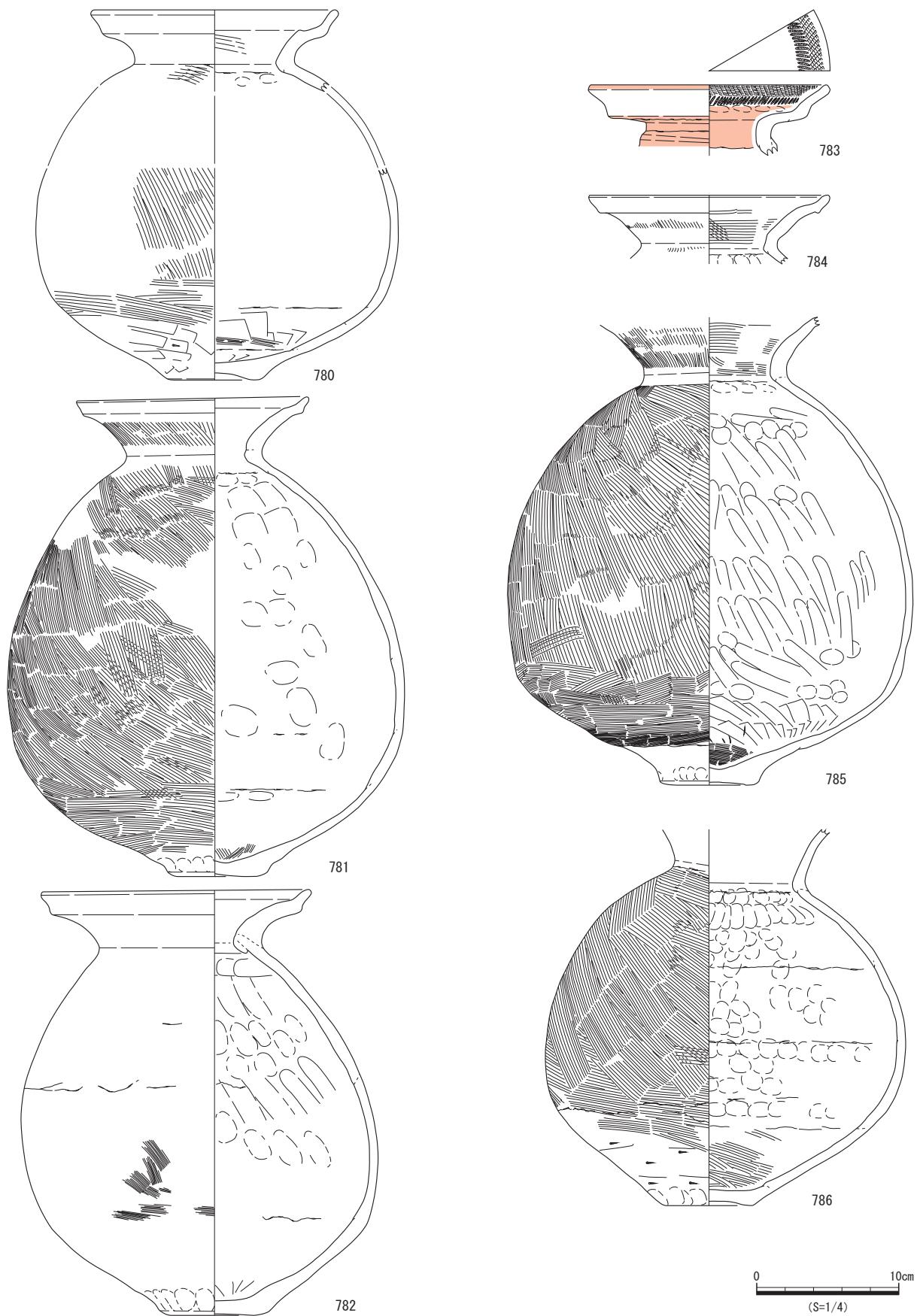


図148 SDc031南部出土遺物 (11)

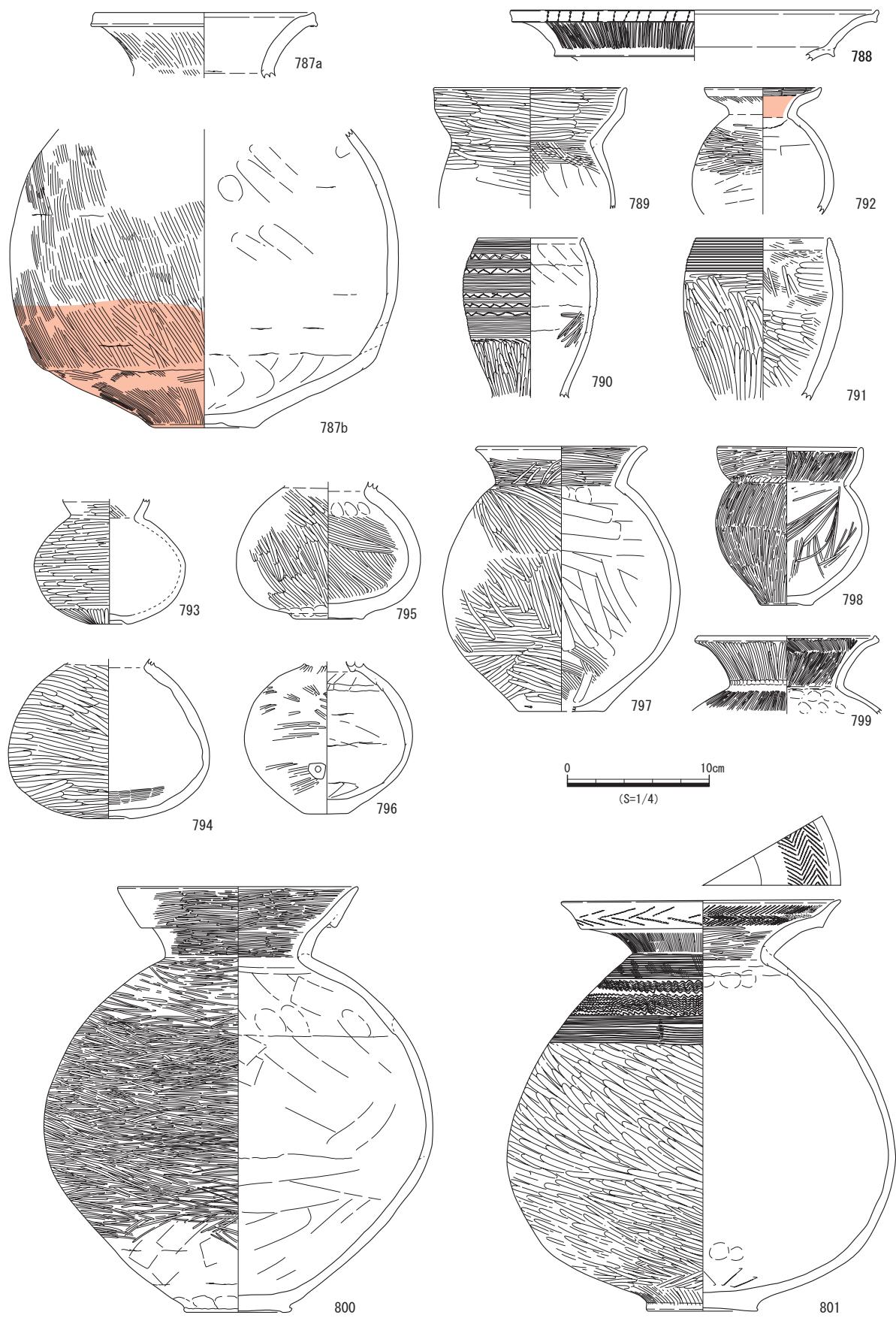


図149 SDc031南部出土遺物 (12)

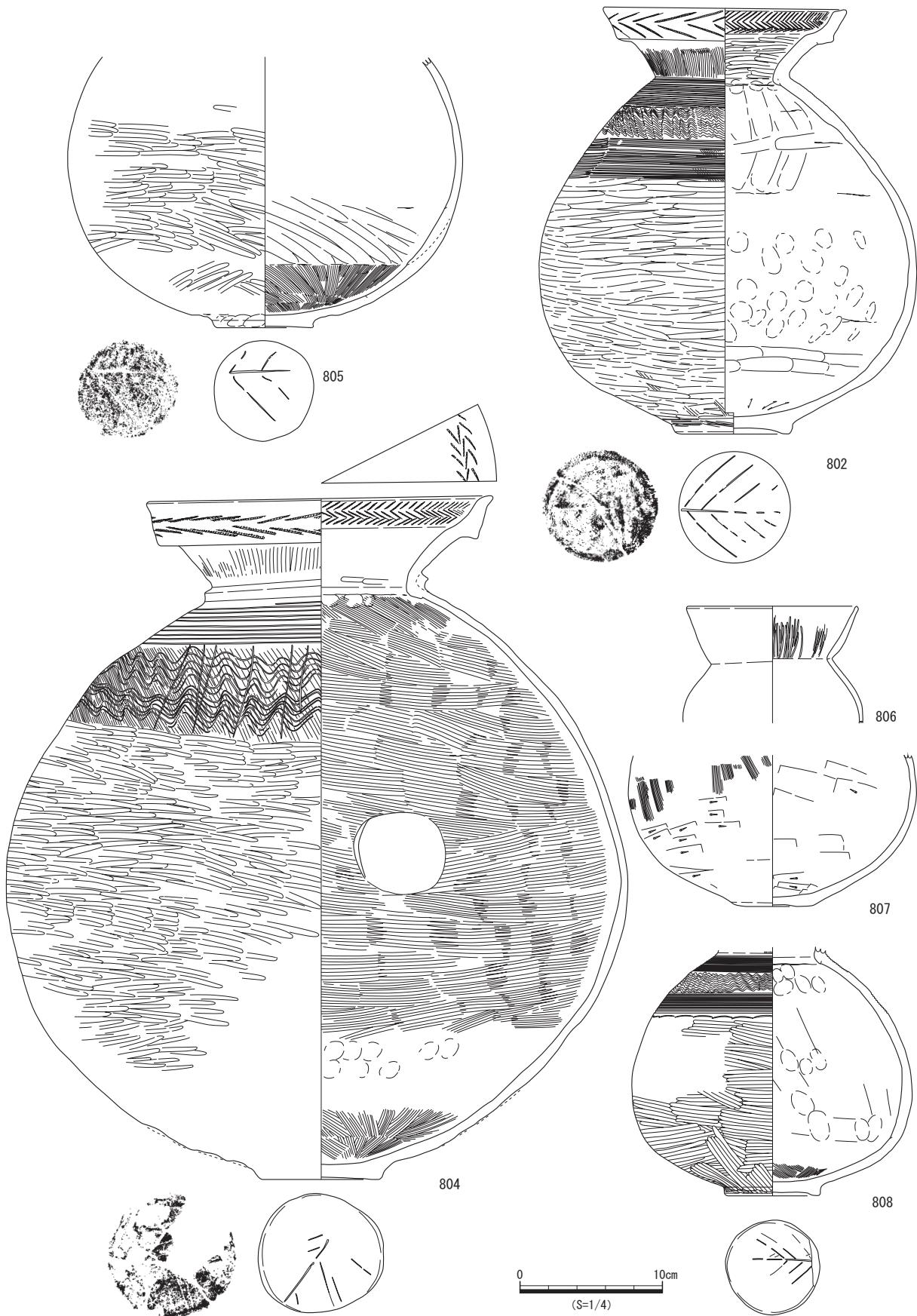


図150 SDc031南部出土遺物 (13)

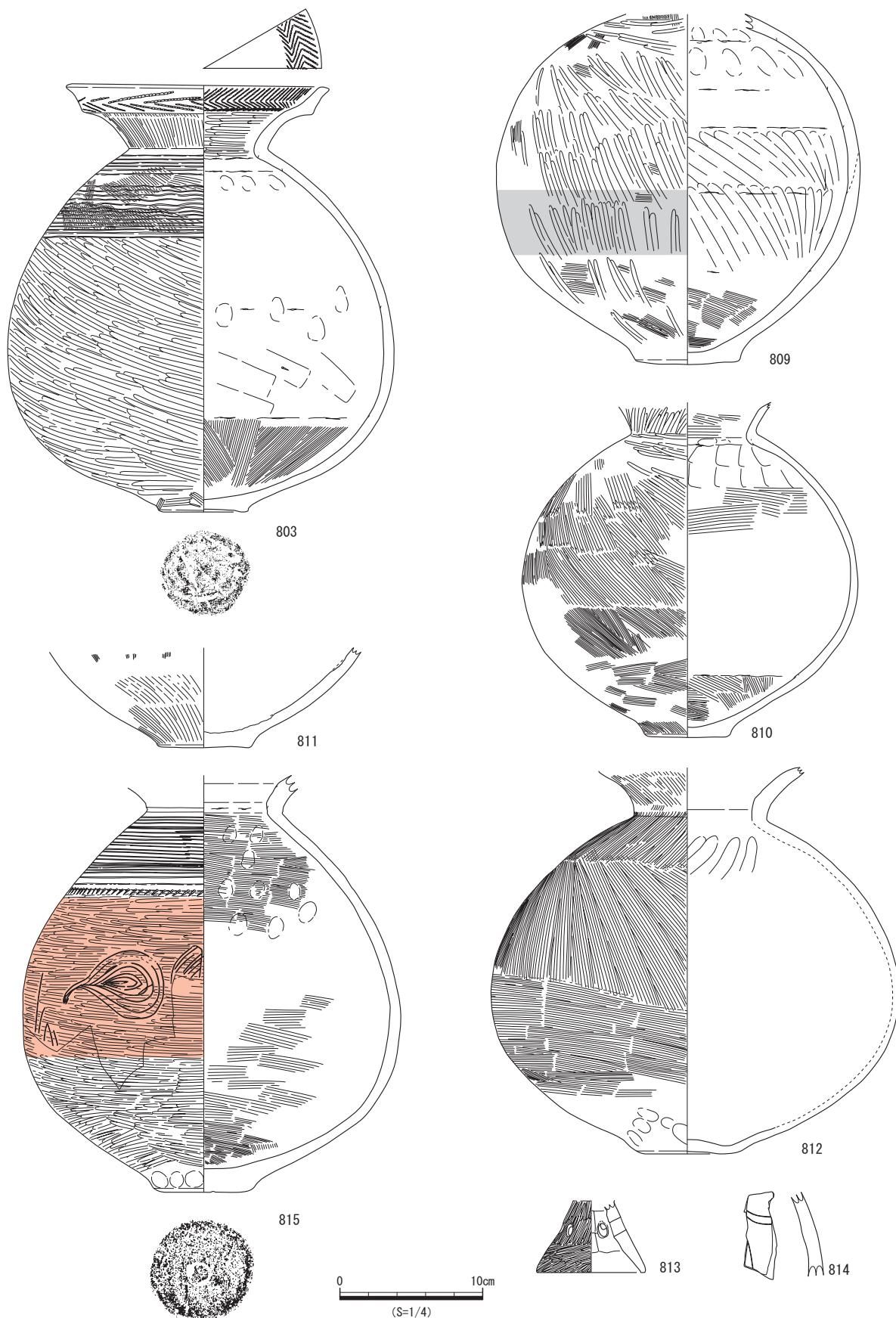


図151 SDc031南部出土遺物 (14)

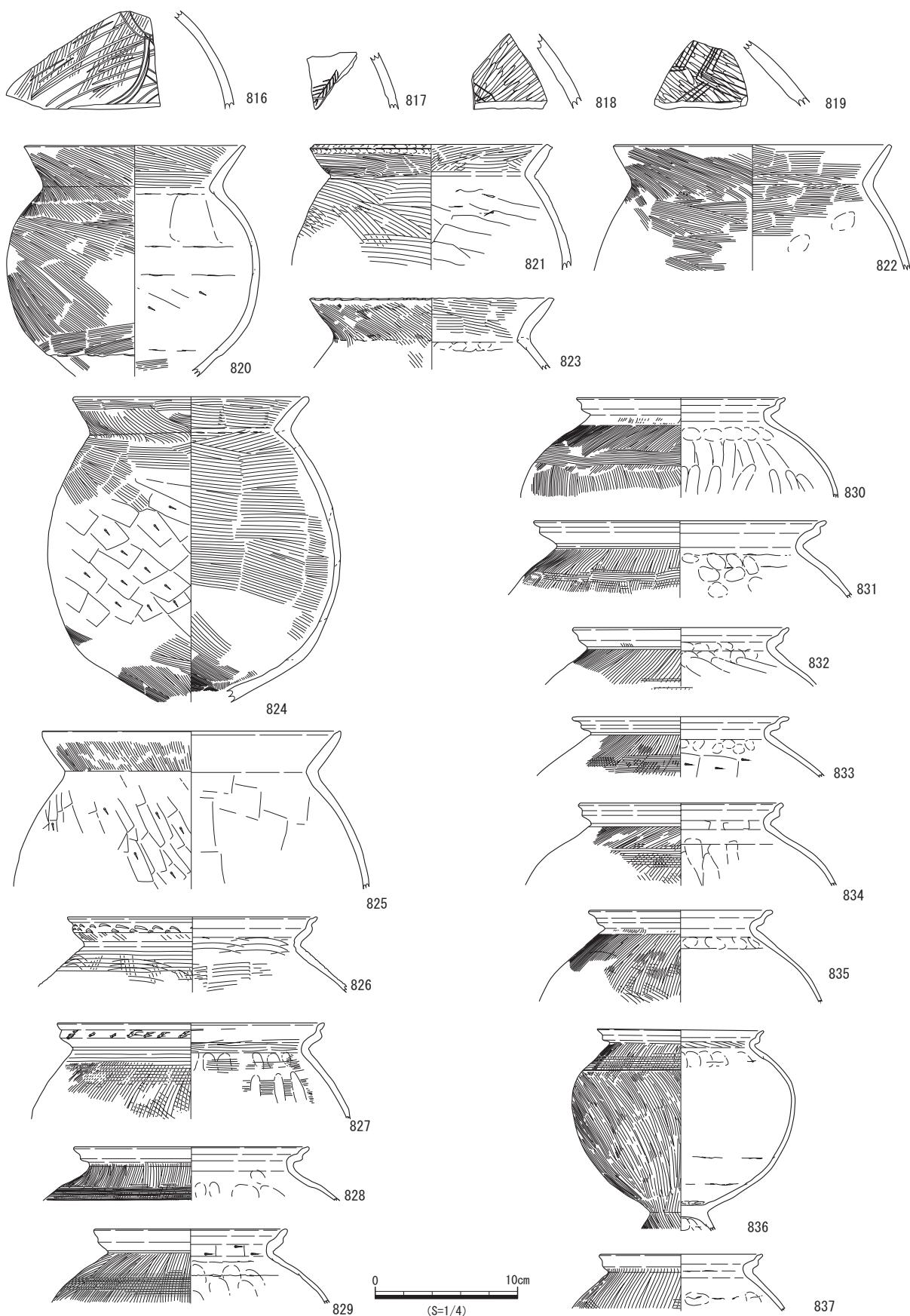


図152 SDc031南部出土遺物 (15)

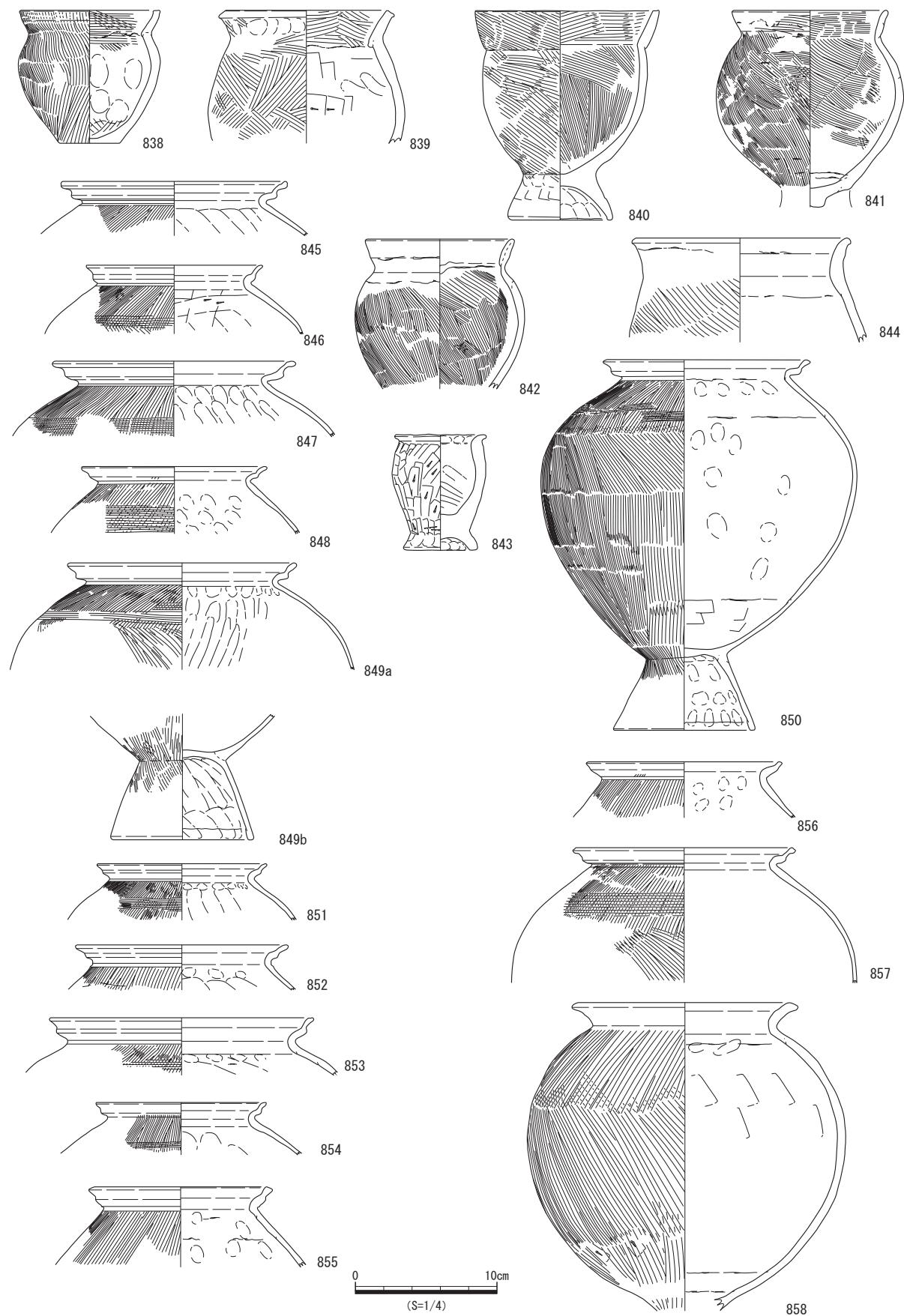


図153 SDc031南部出土遺物 (16)

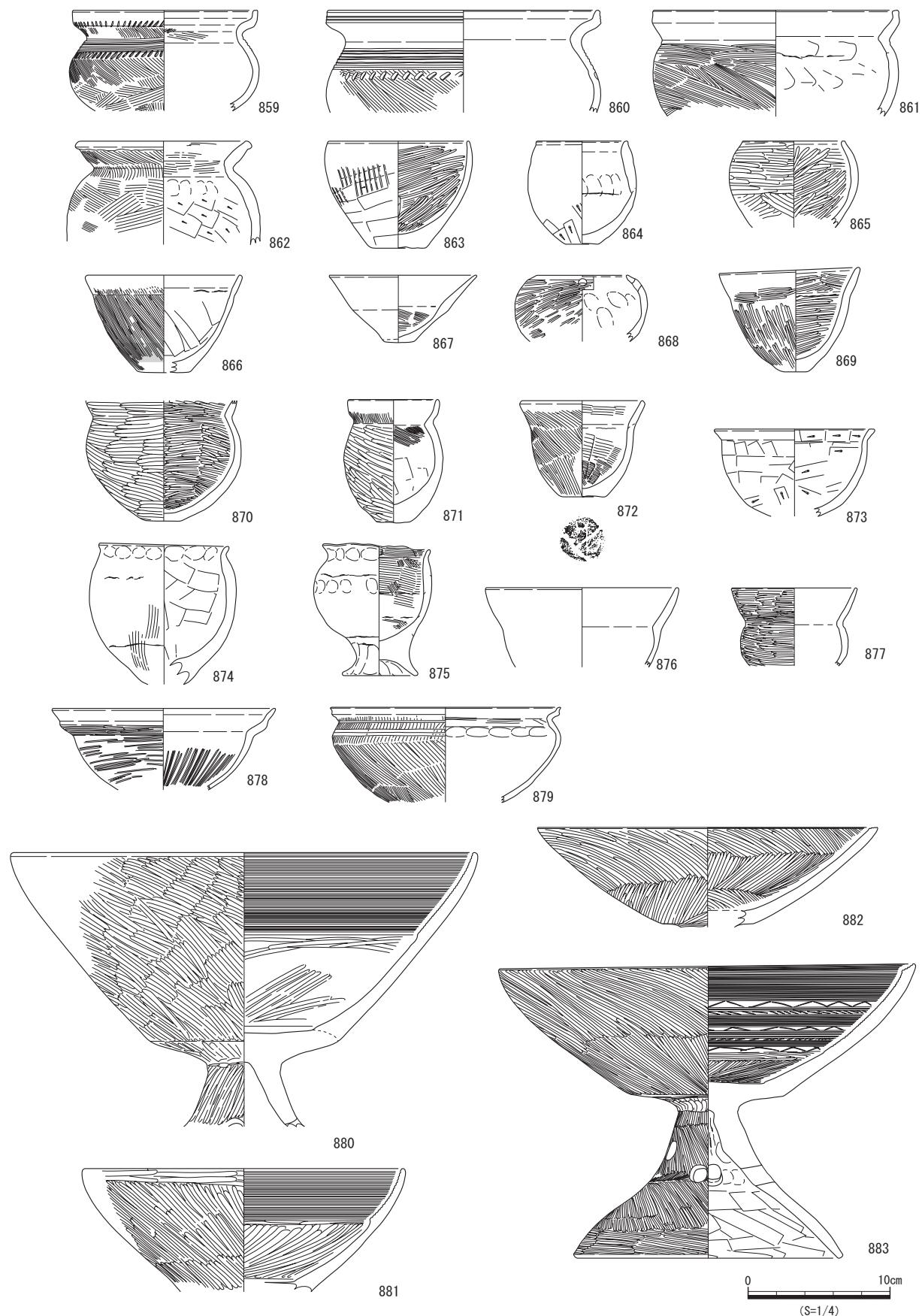


図154 SDc031南部出土遺物 (17)

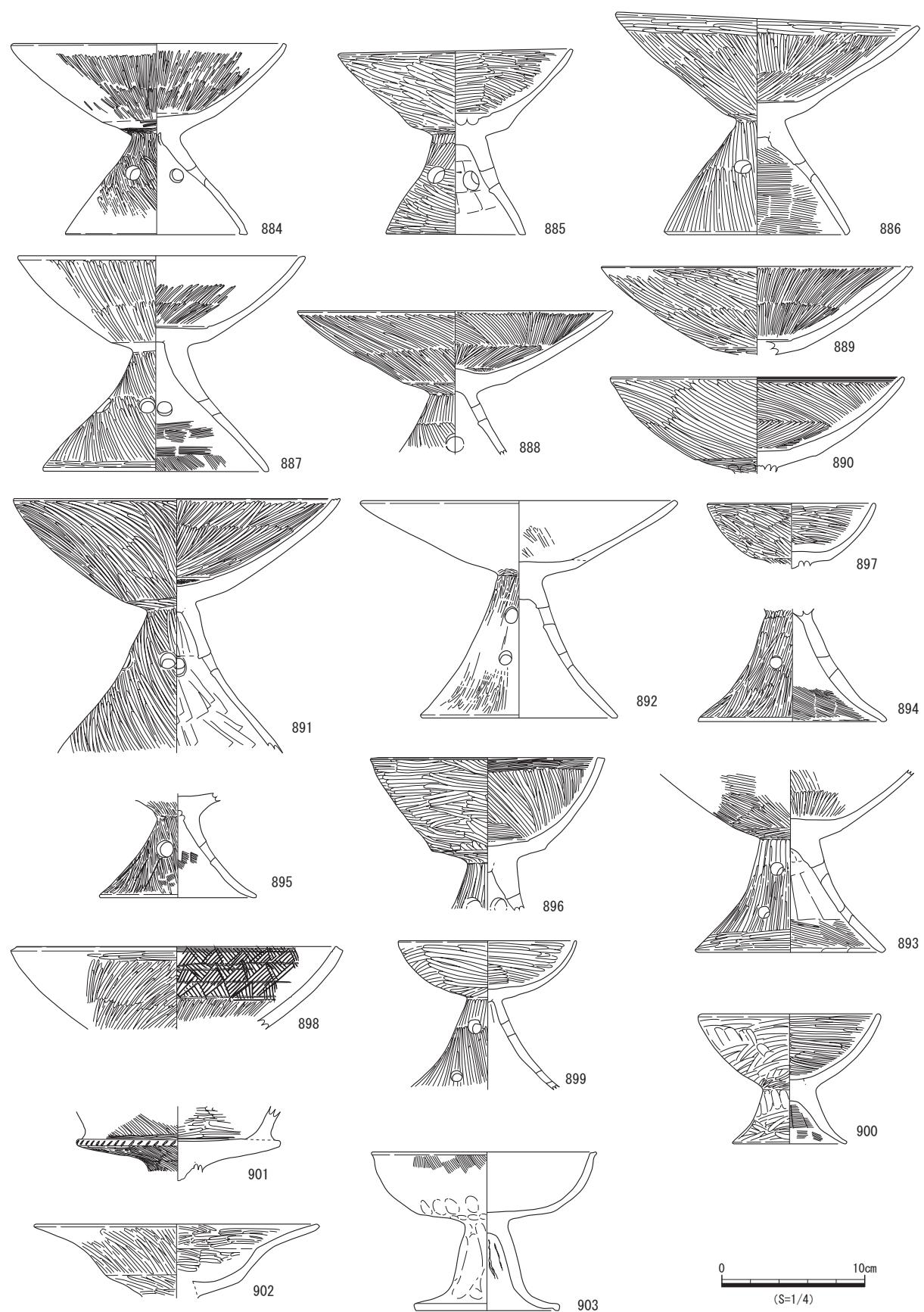


図155 SDc031南部出土遺物 (18)

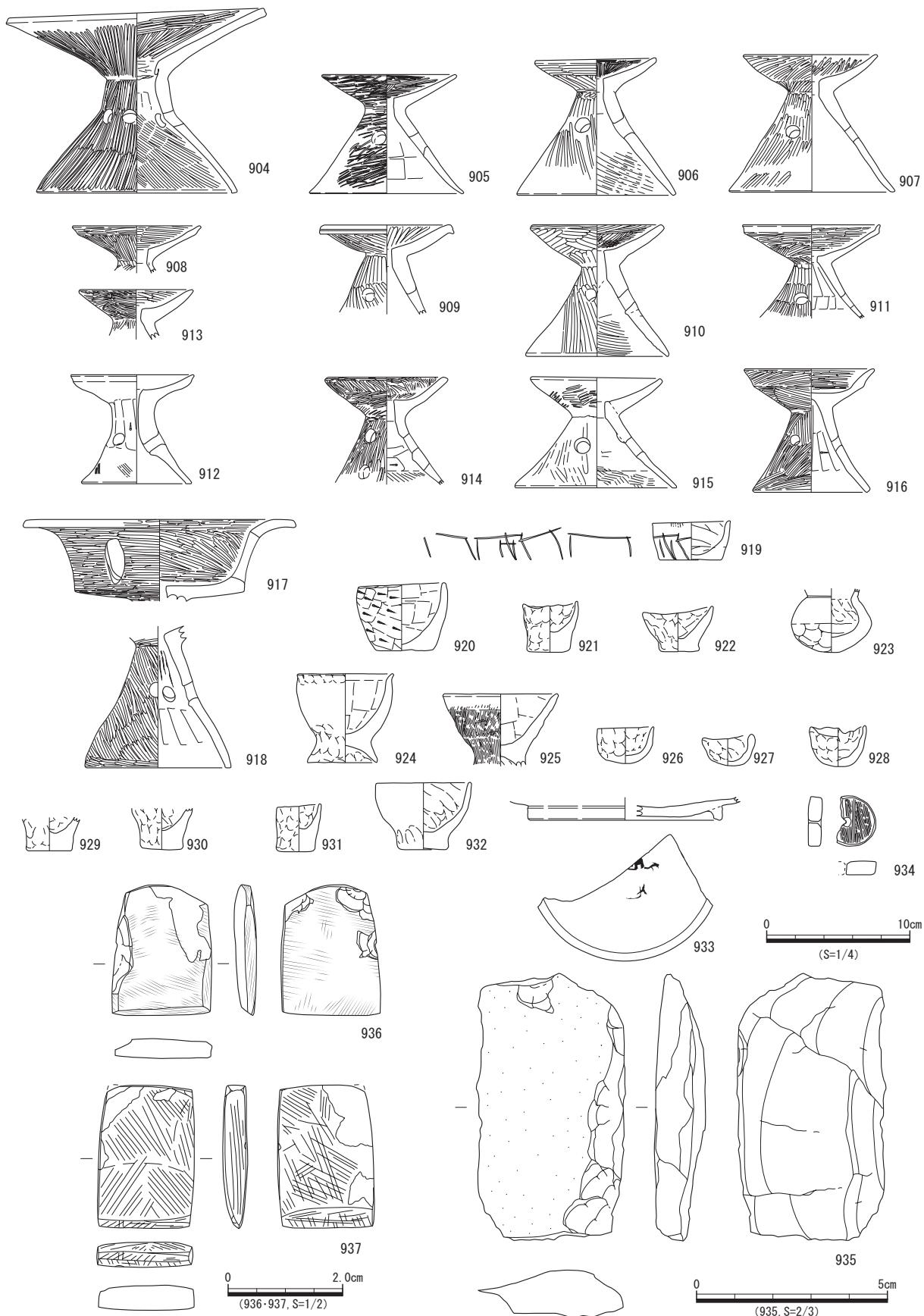


図156 SDc031南部出土遺物 (19)

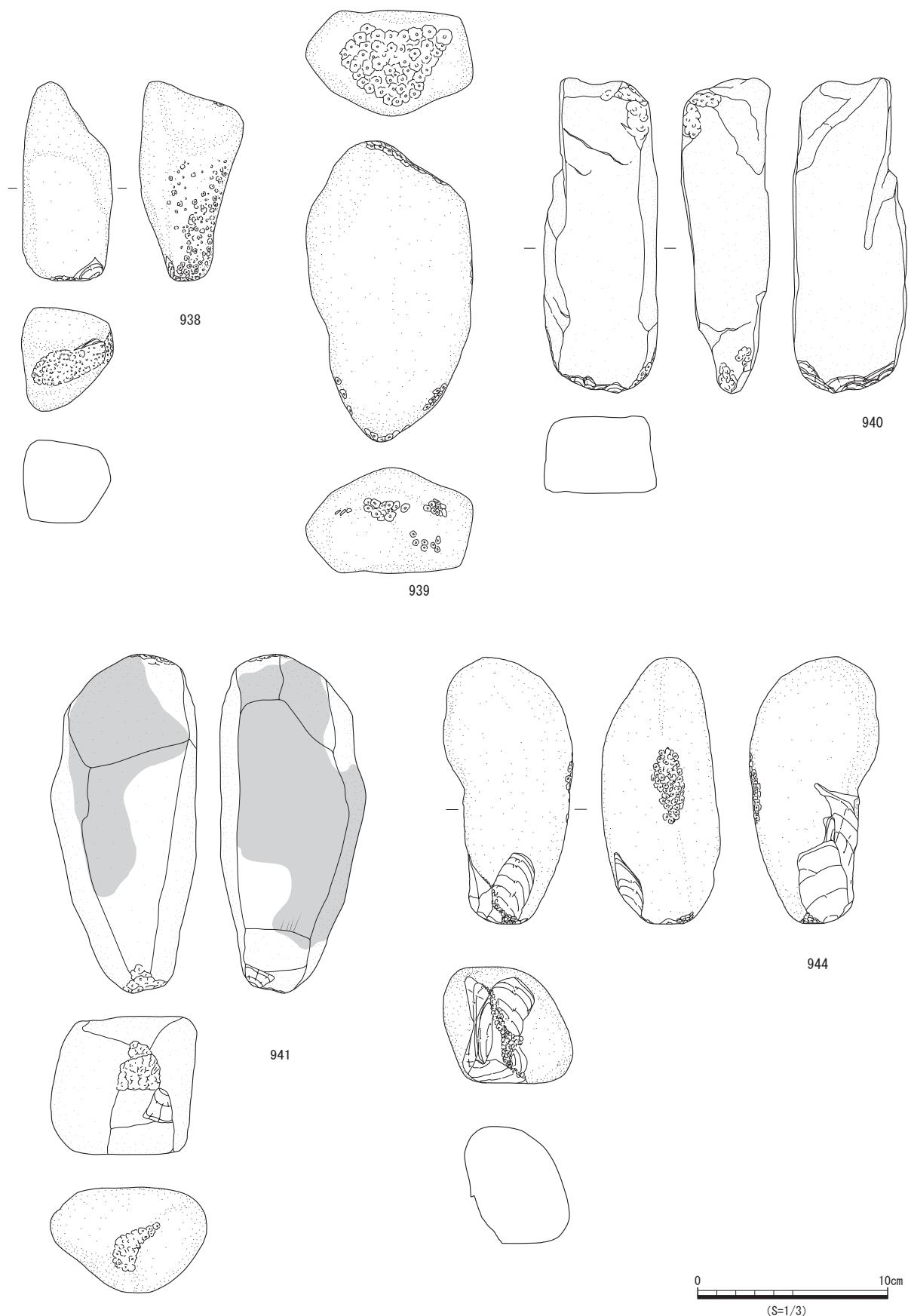


図157 SDc031南部出土遺物 (20)

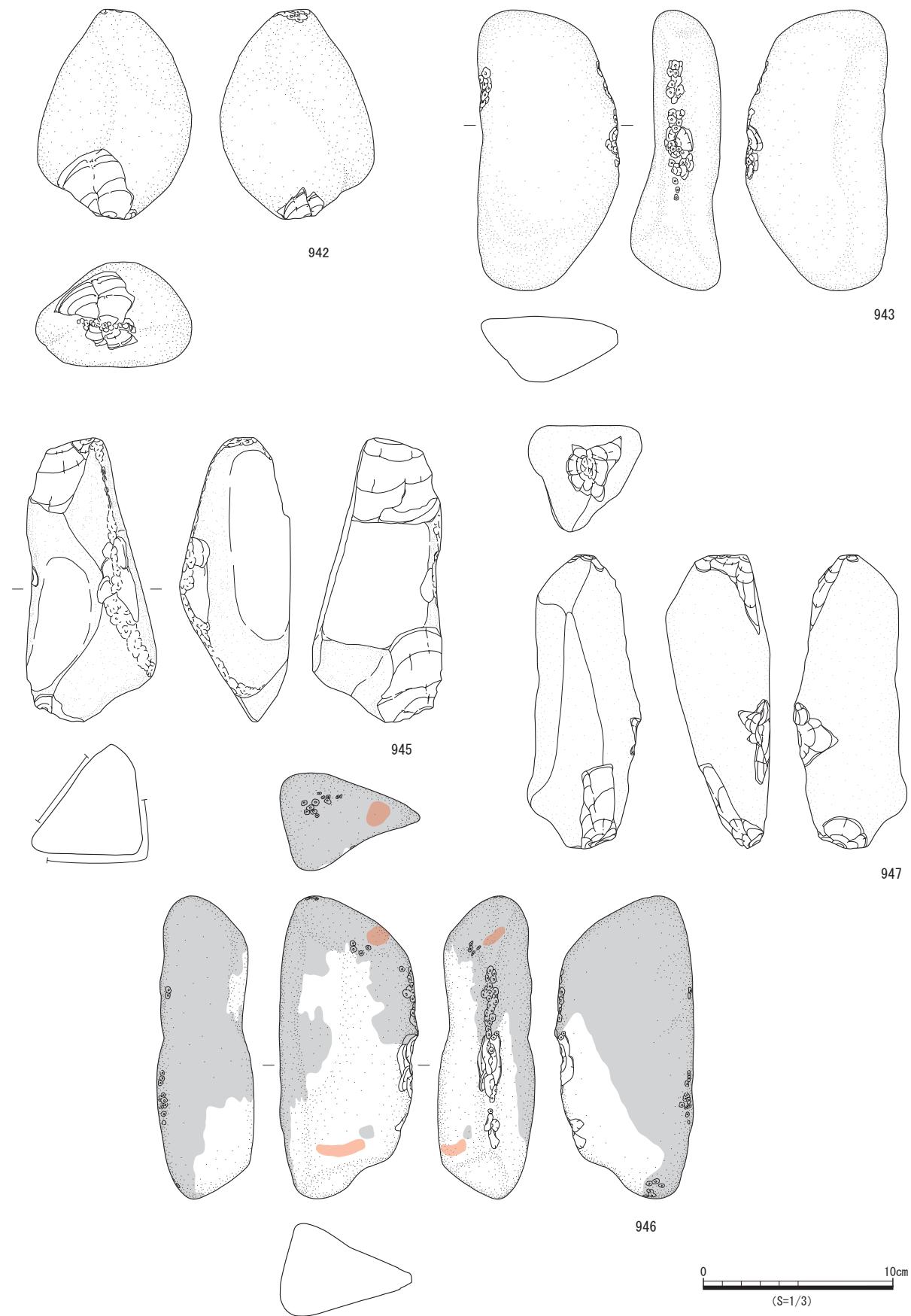


図158 SDc031南部出土遺物 (21)

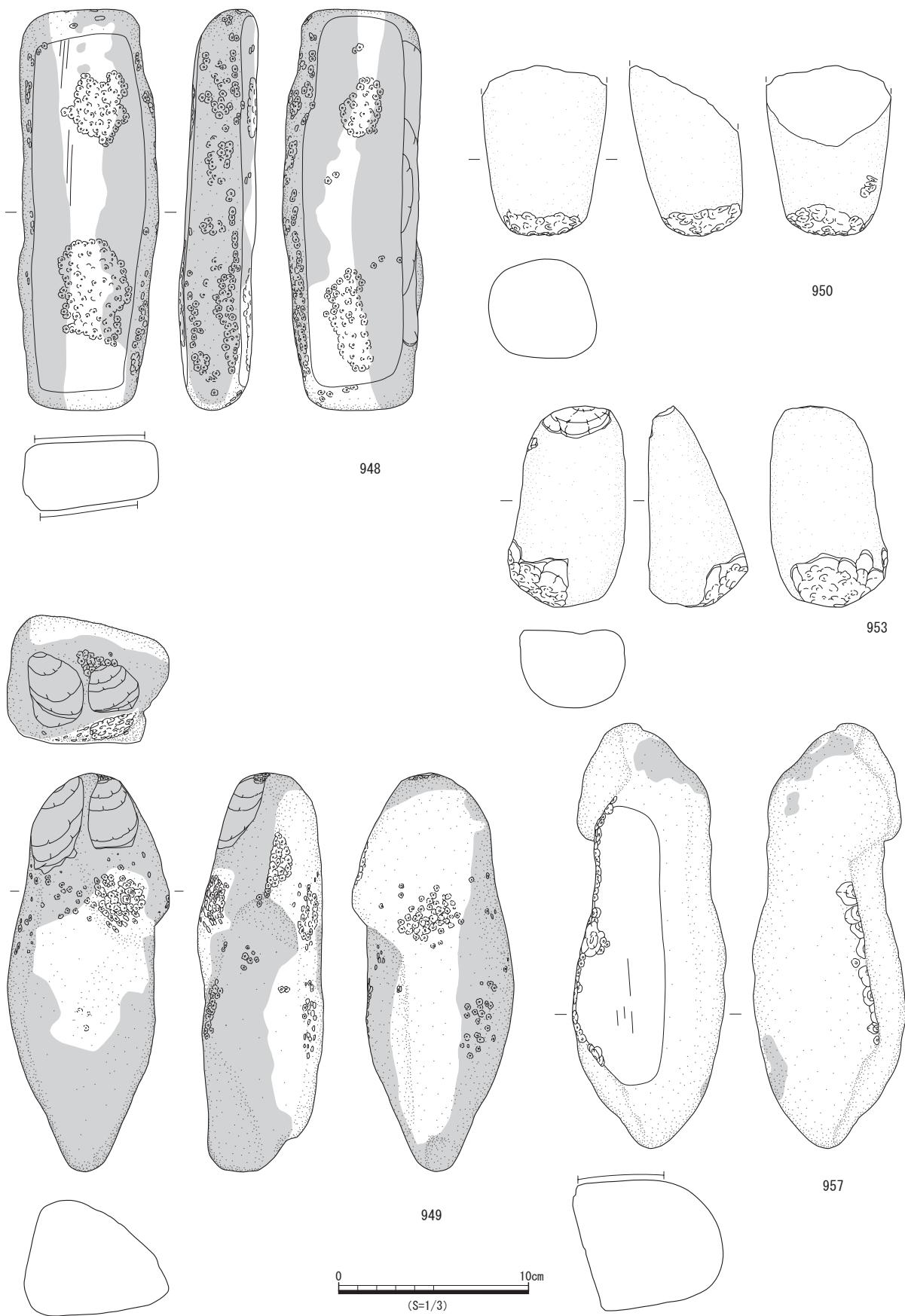


図159 SDc031南部出土遺物 (22)

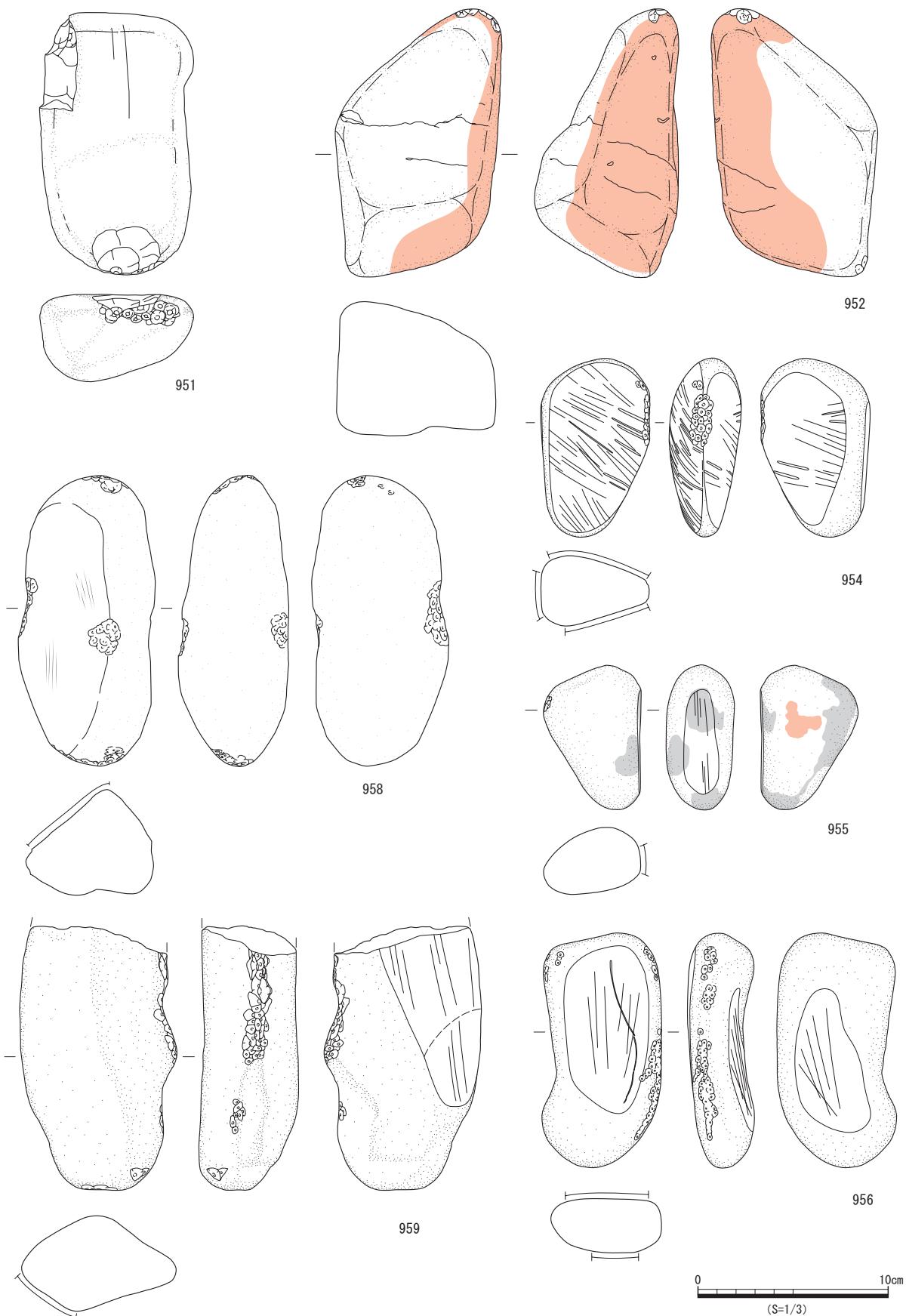


図160 SDc031南部出土遺物 (23)

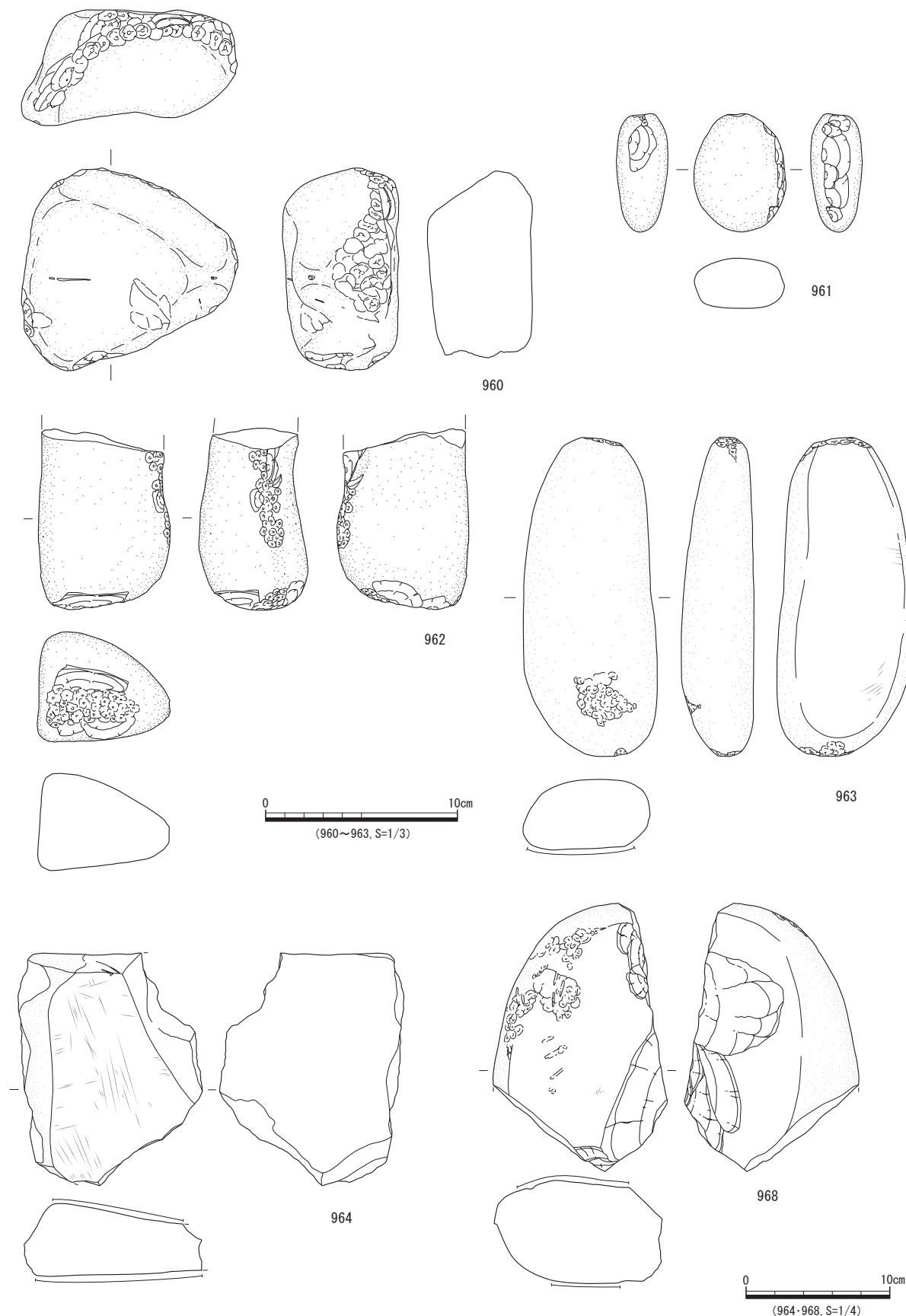


図161 SDc031南部出土遺物 (24)

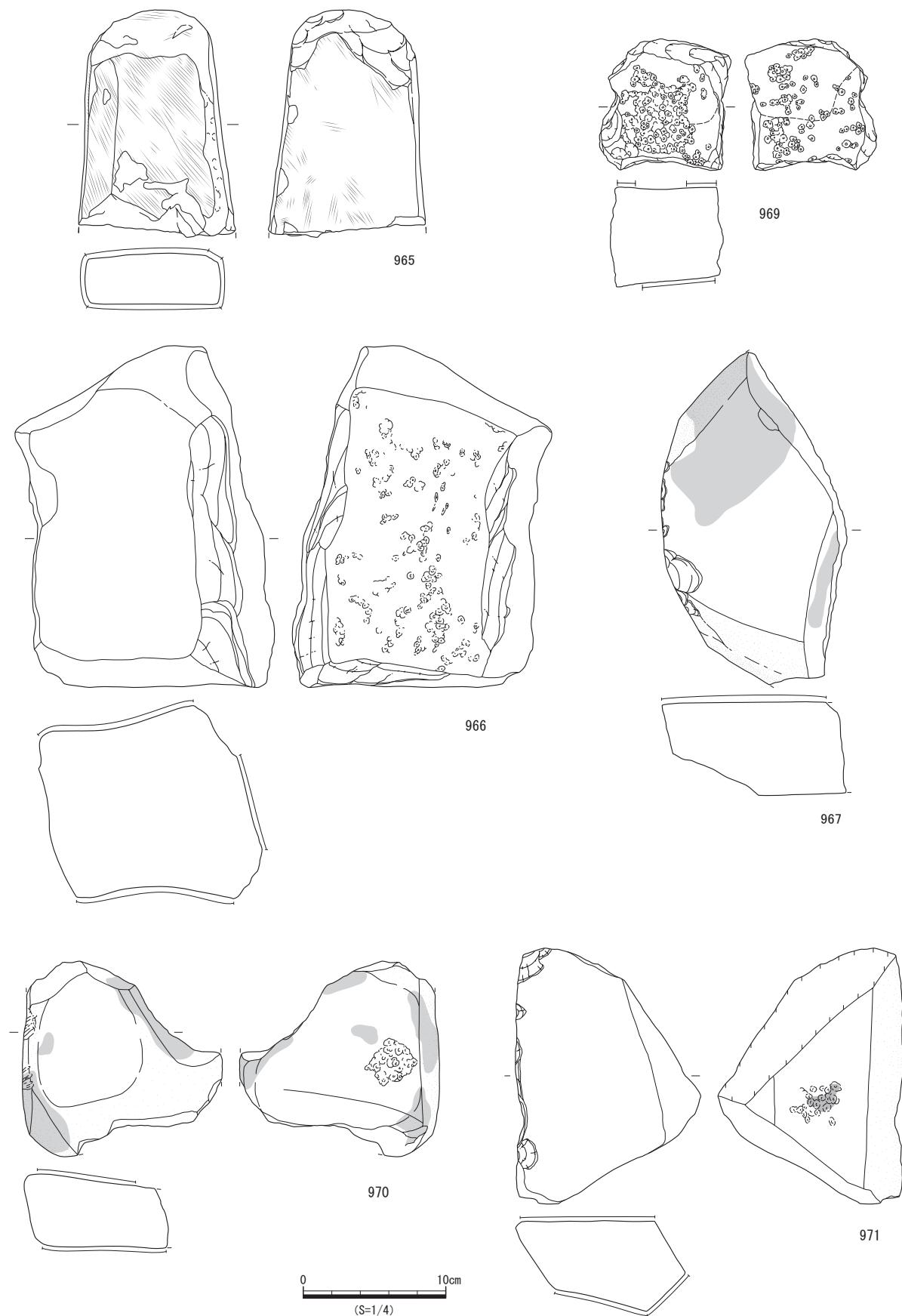


図162 SDc031南部出土遺物 (25)

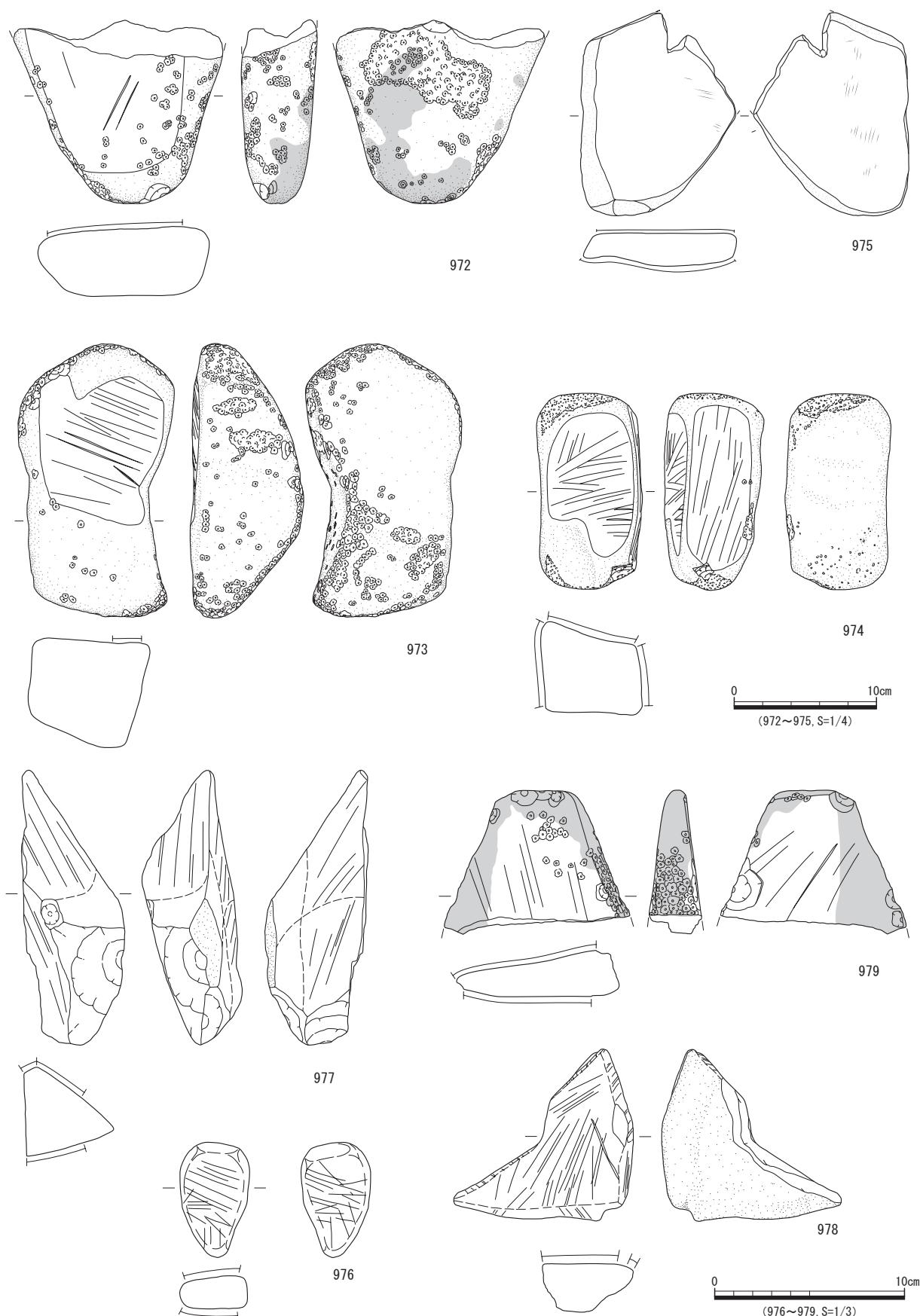


図163 SDc031南部出土遺物 (26)

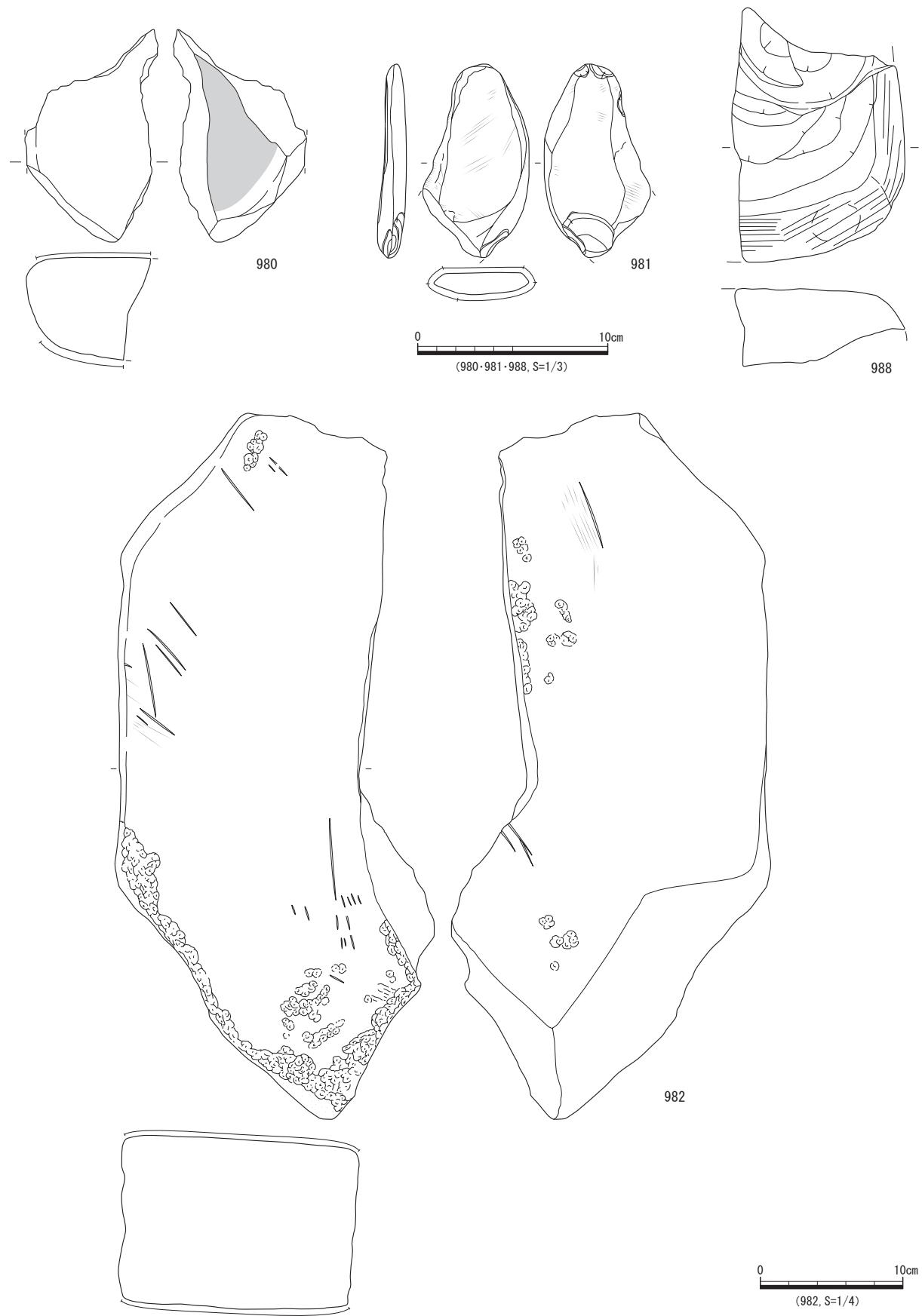


図164 SDc031南部出土遺物 (27)

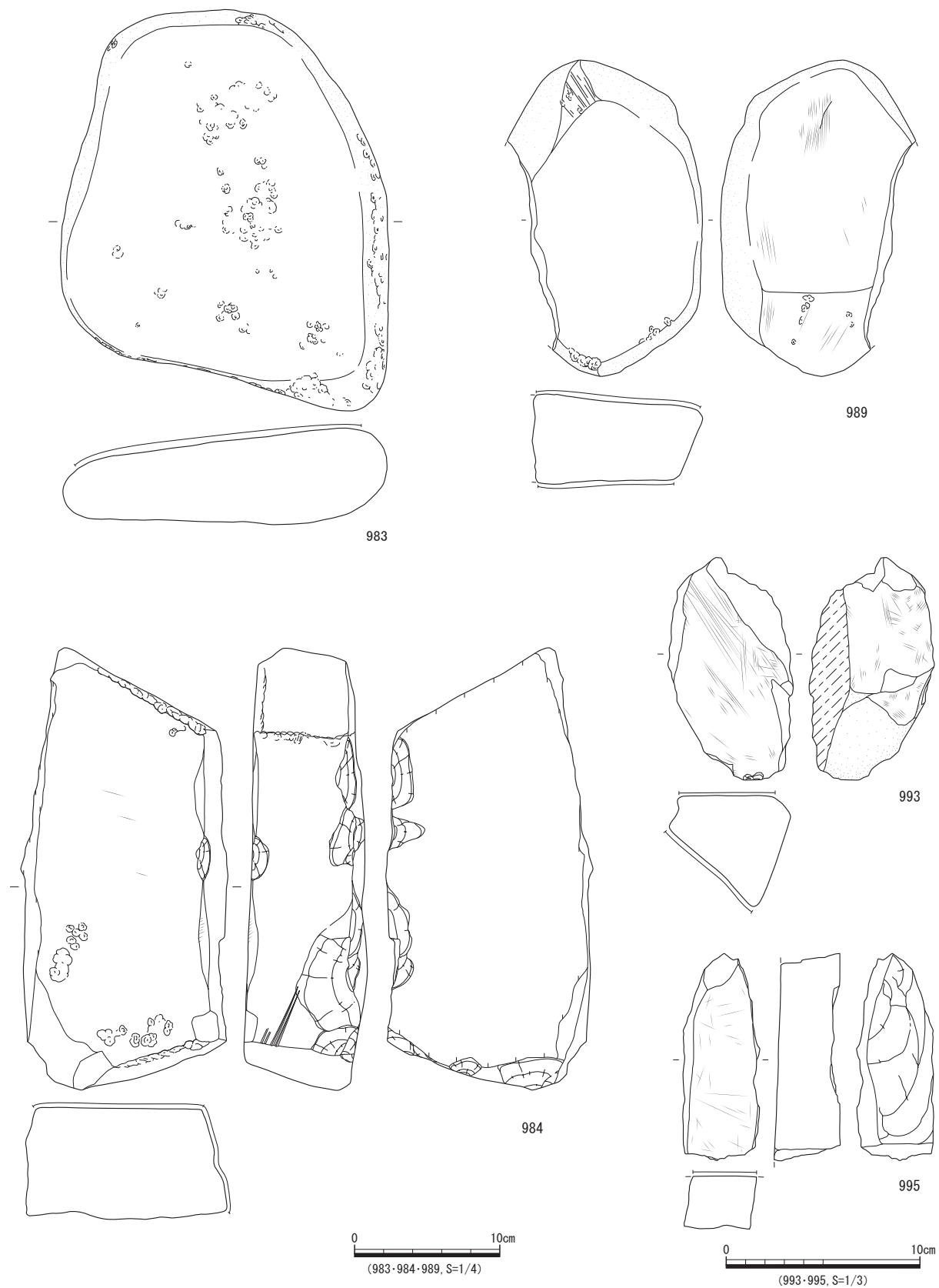


図165 SDc031南部出土遺物 (28)

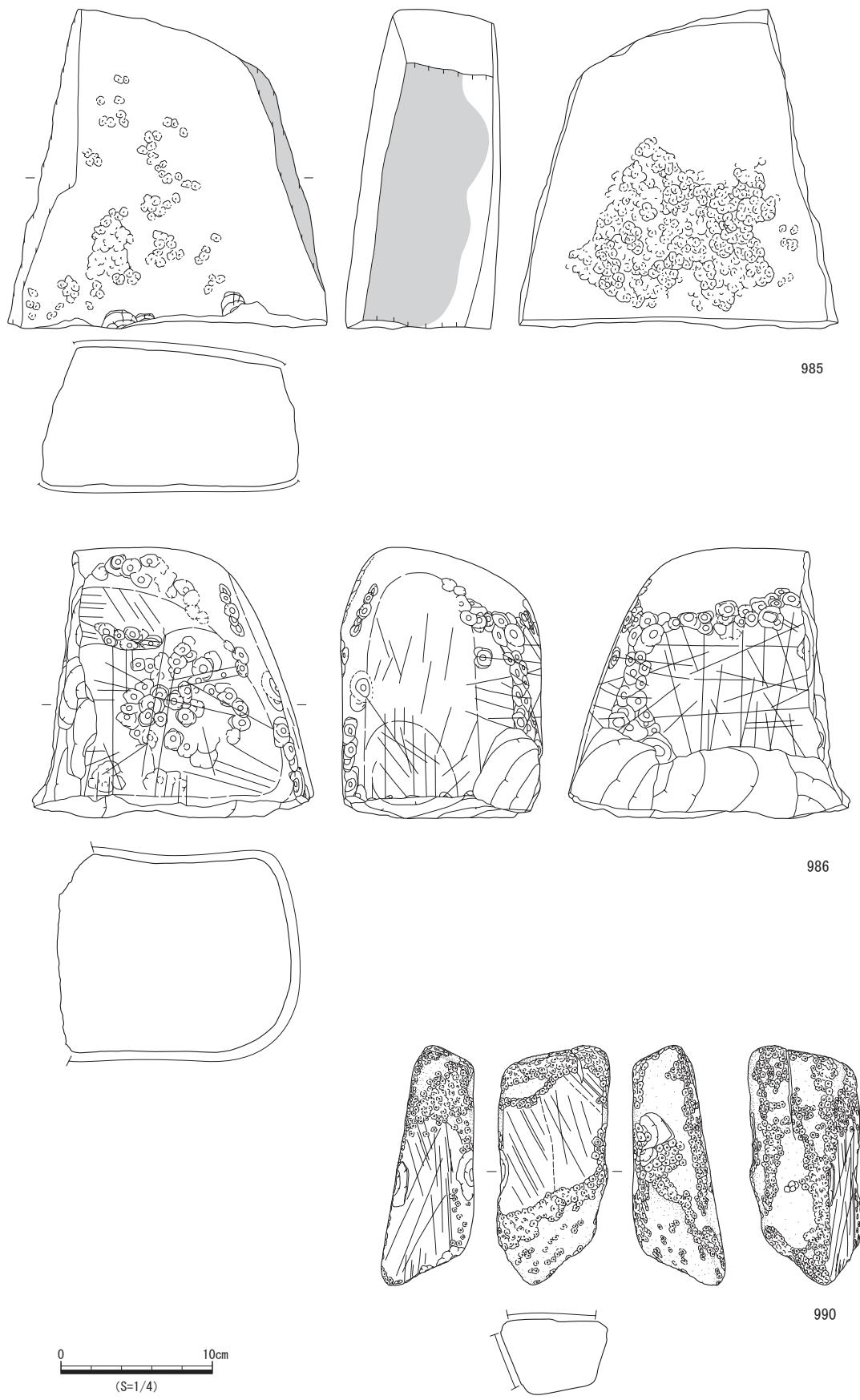


図166 SDc031南部出土遺物 (29)

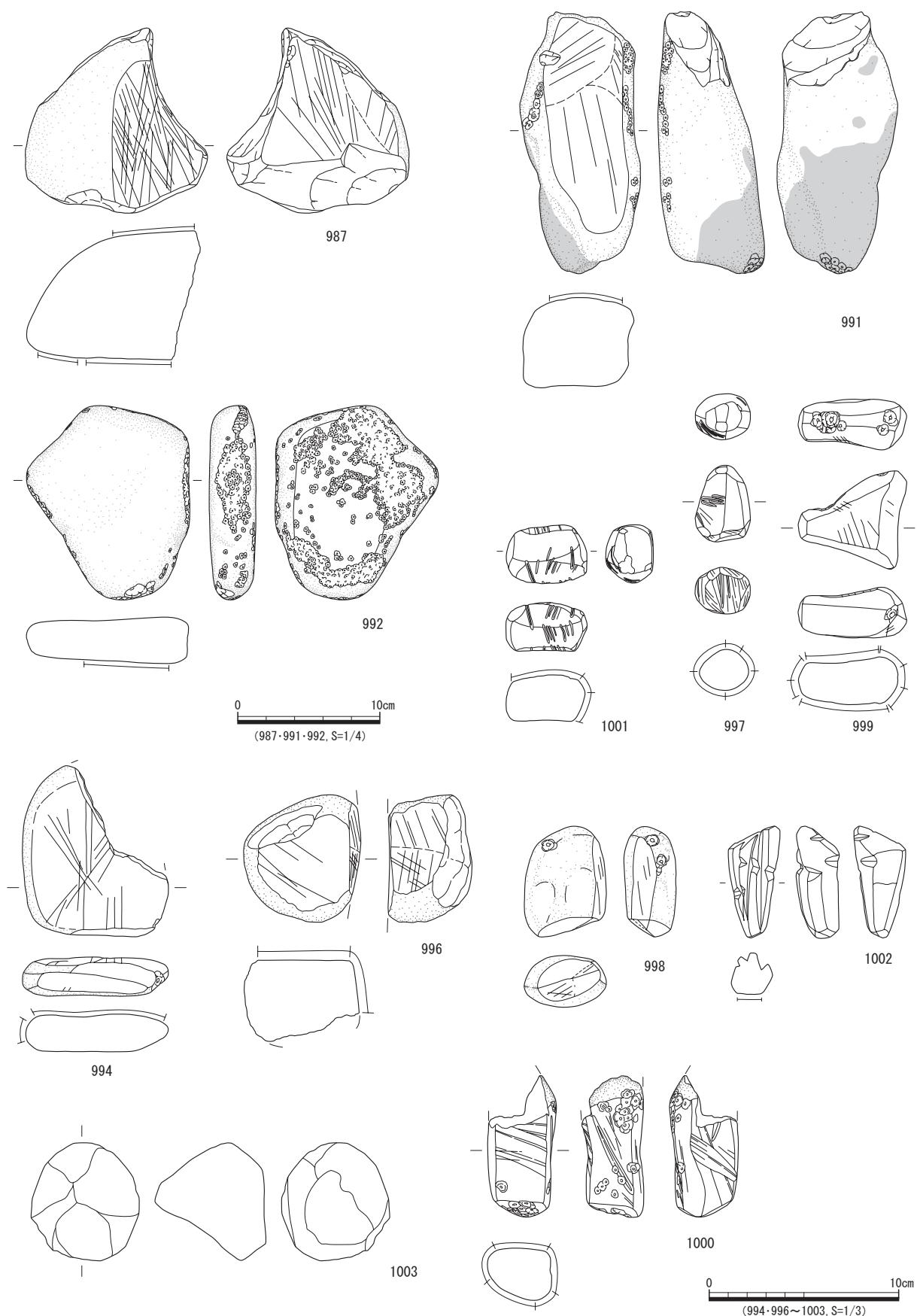


図167 SDc031南部出土遺物 (30)

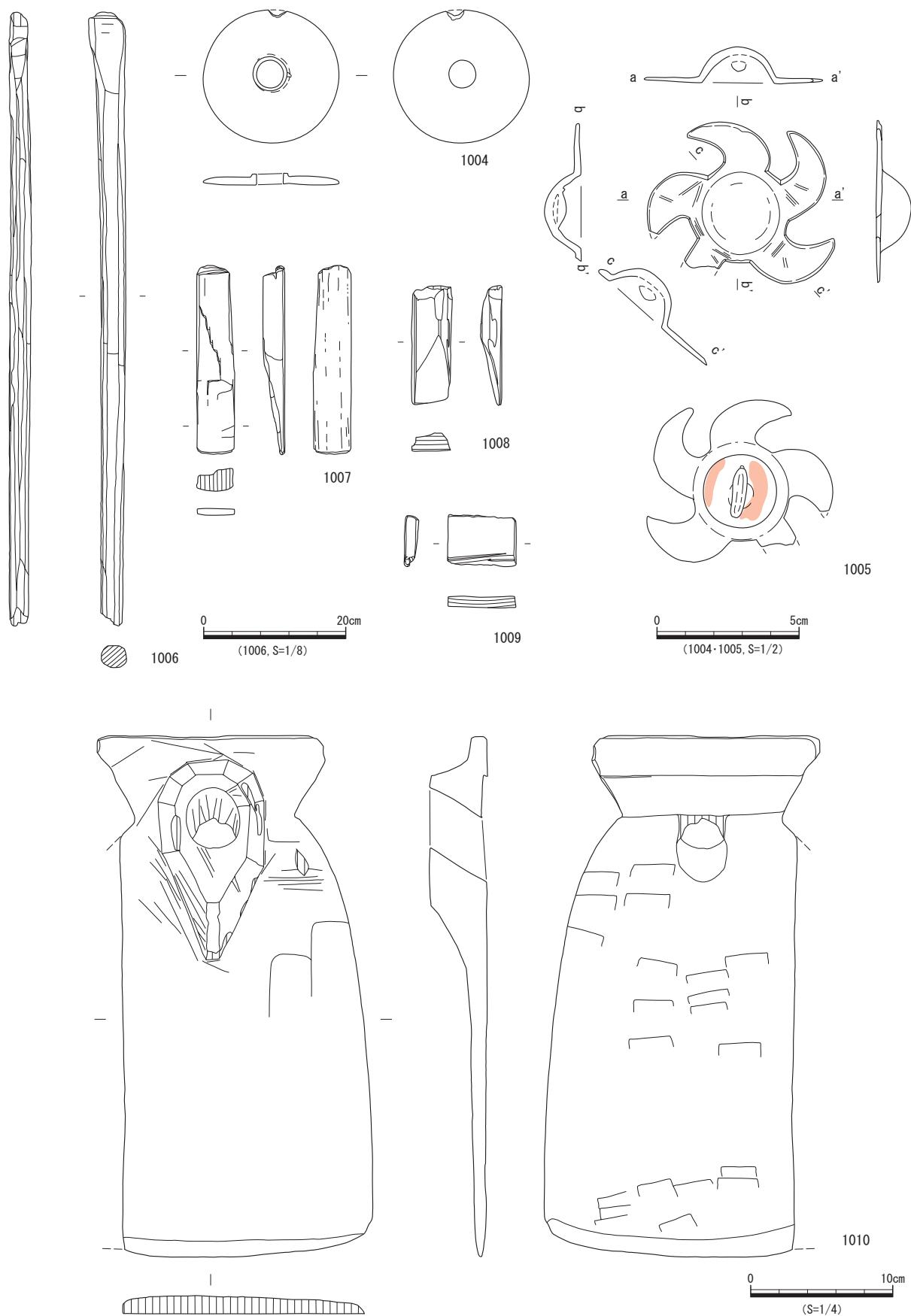


図168 SDc031南部出土遺物 (31)

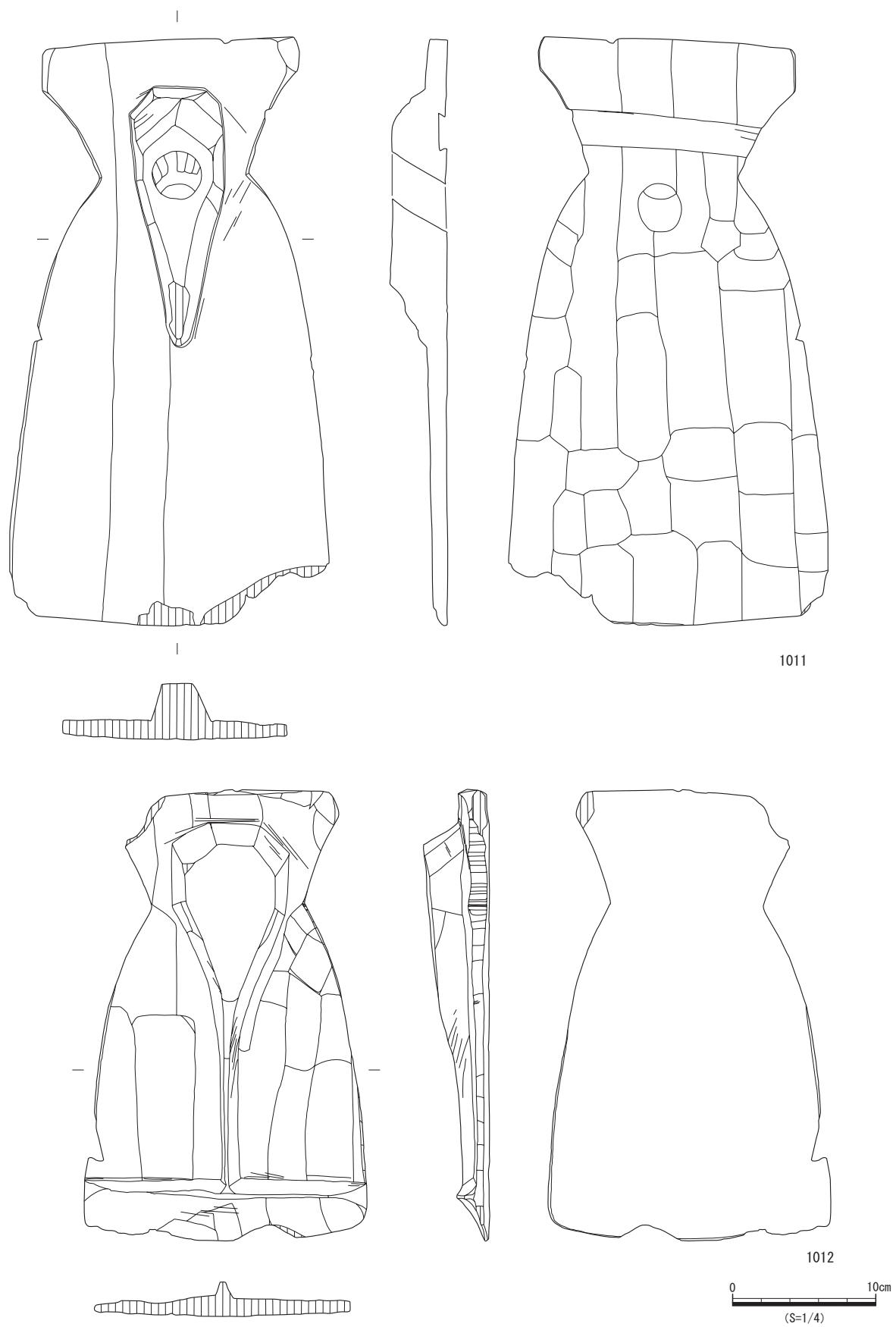


図169 SDc031南部出土遺物 (32)

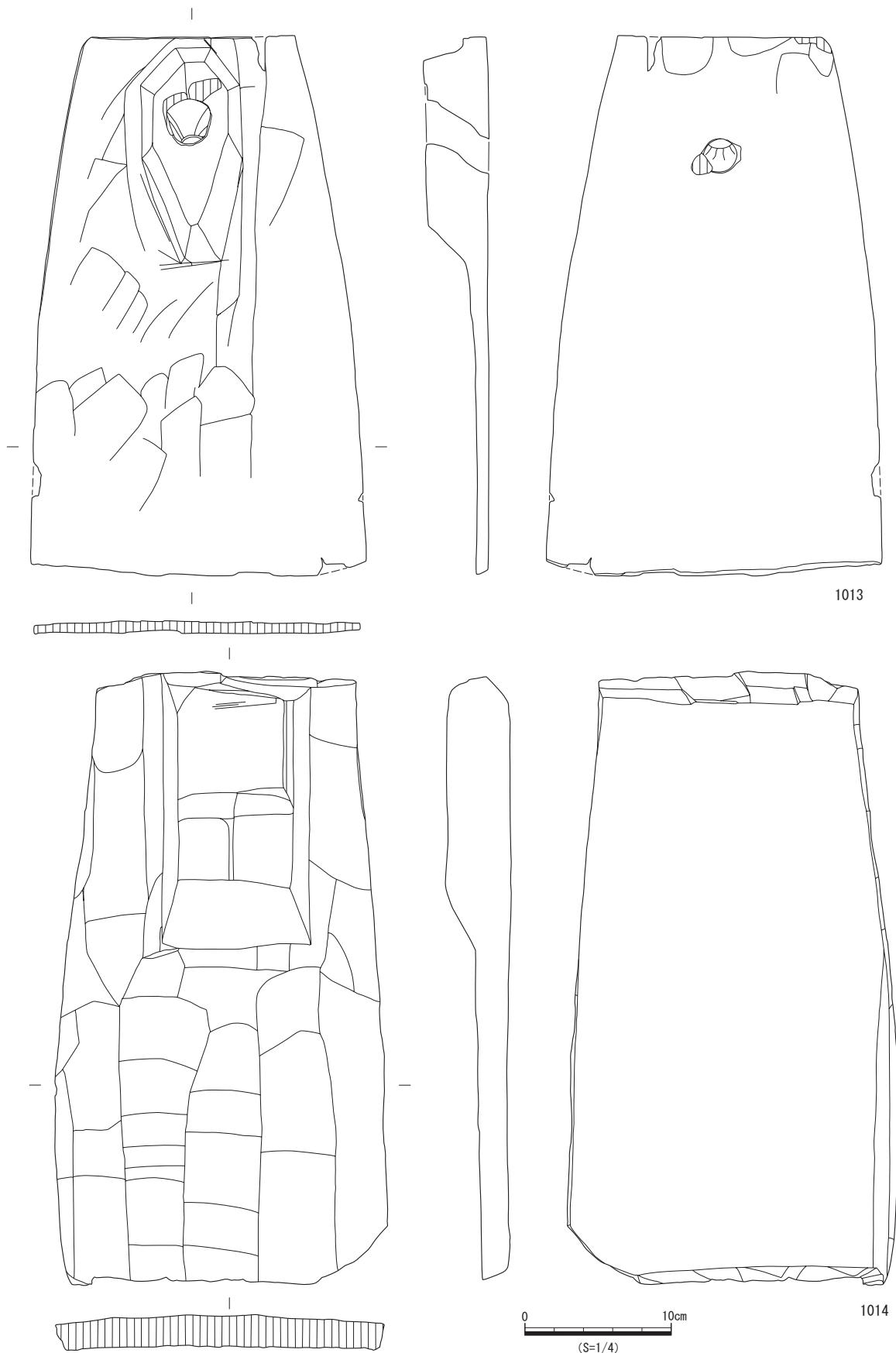
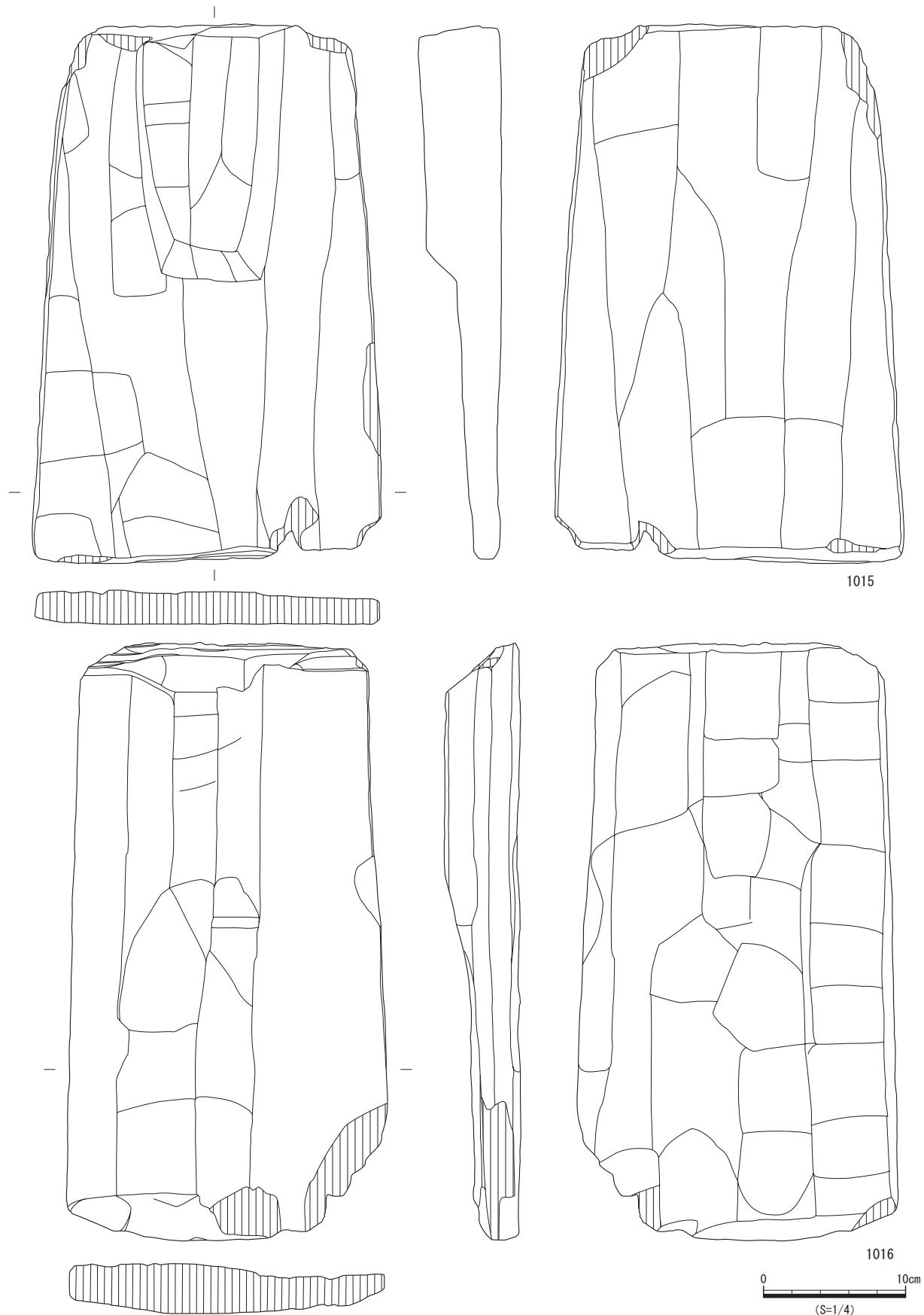


図170 SDc031南部出土遺物 (33)



171 SDc031南部出土遺物 (34)

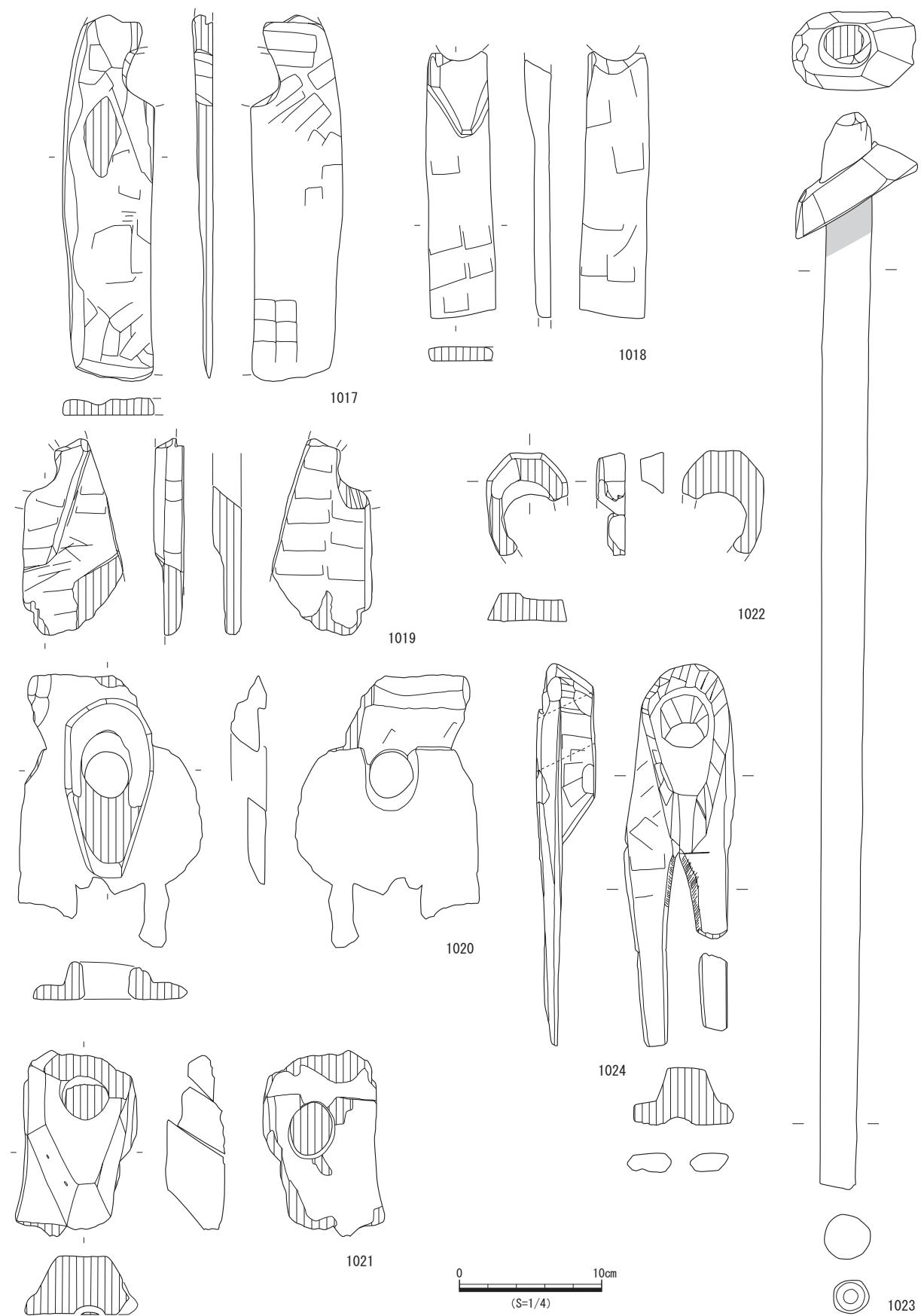


図172 SDc031南部出土遺物 (35)

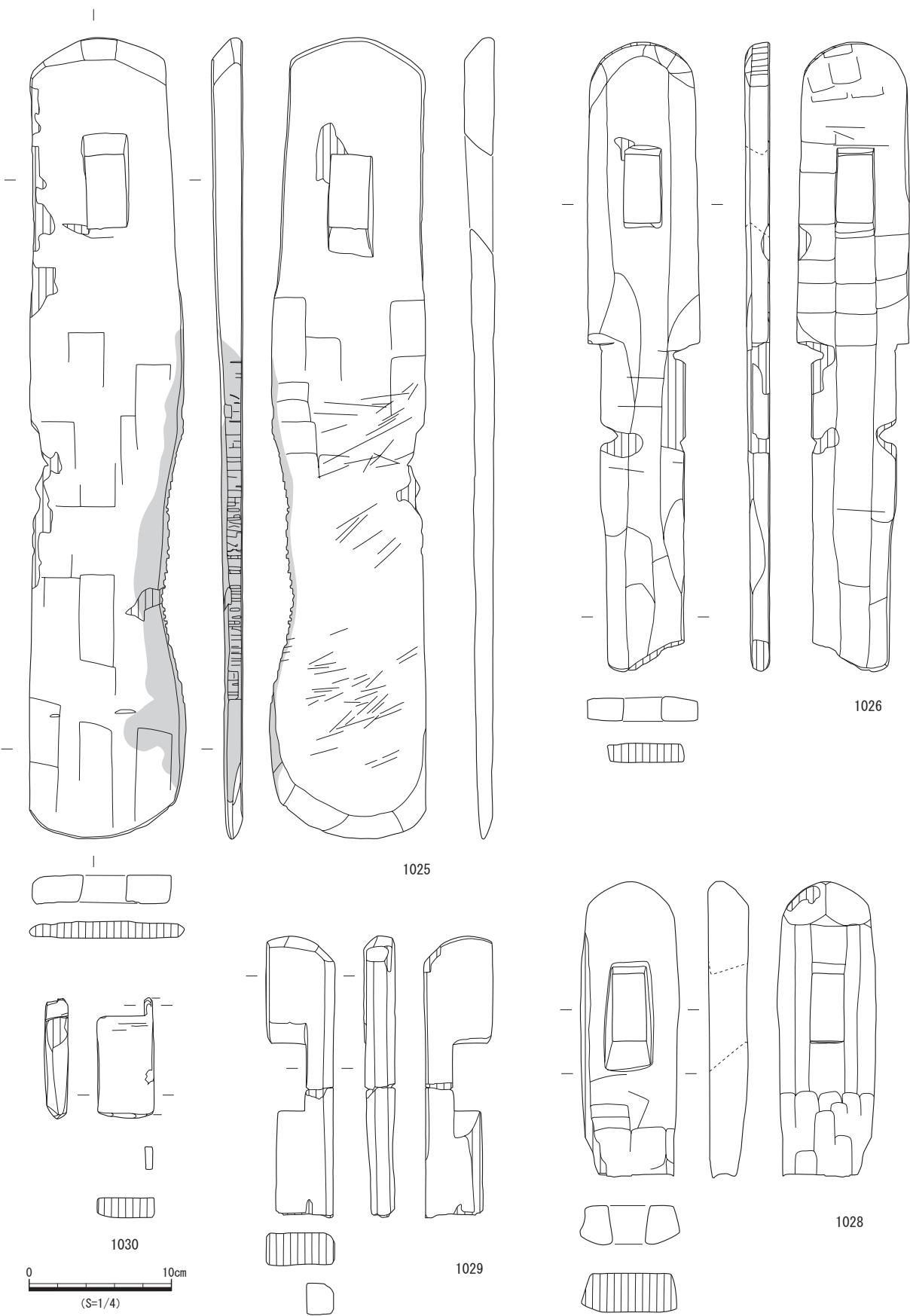


図173 SDc031南部出土遺物 (36)

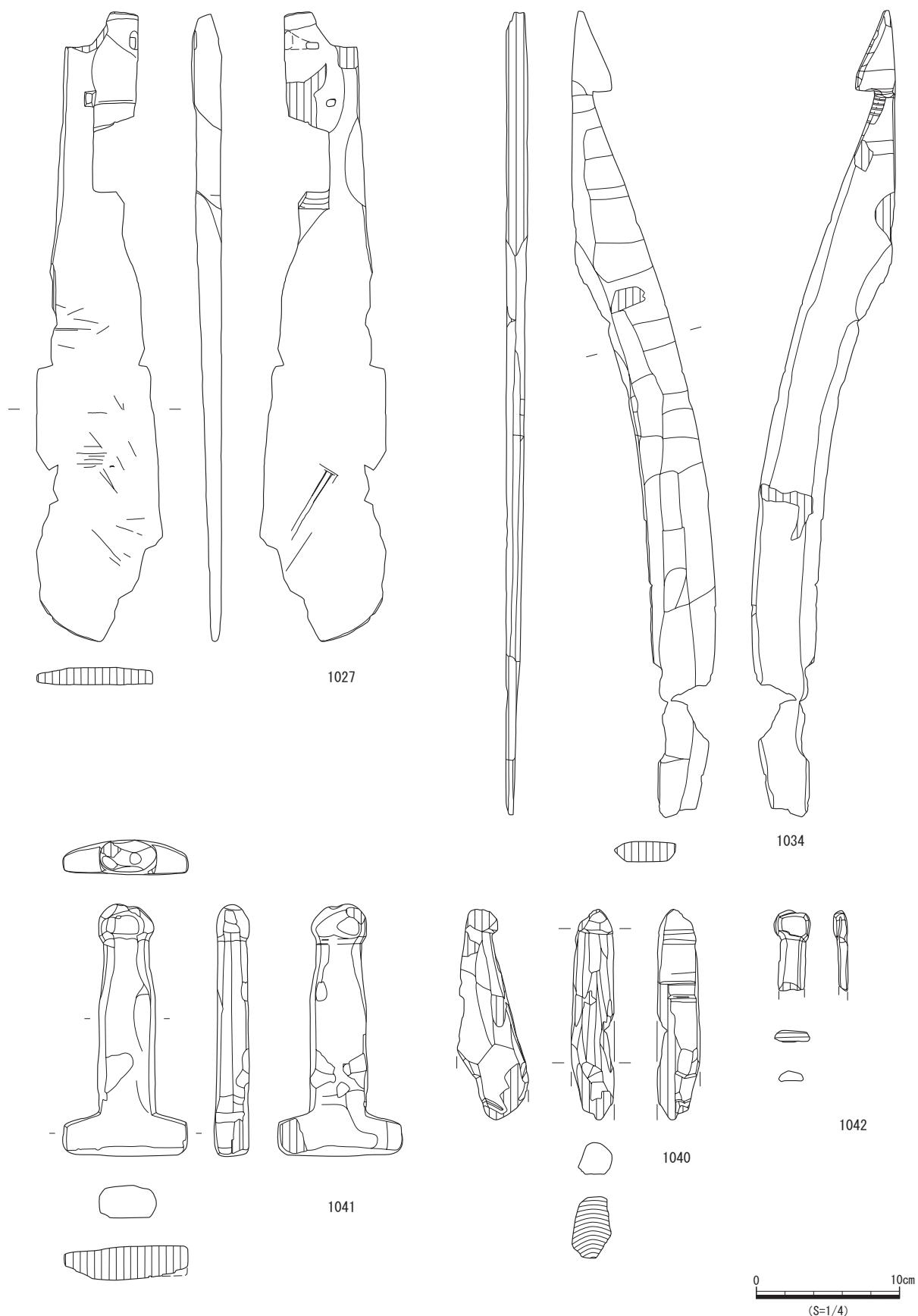


図174 SDc031南部出土遺物 (37)

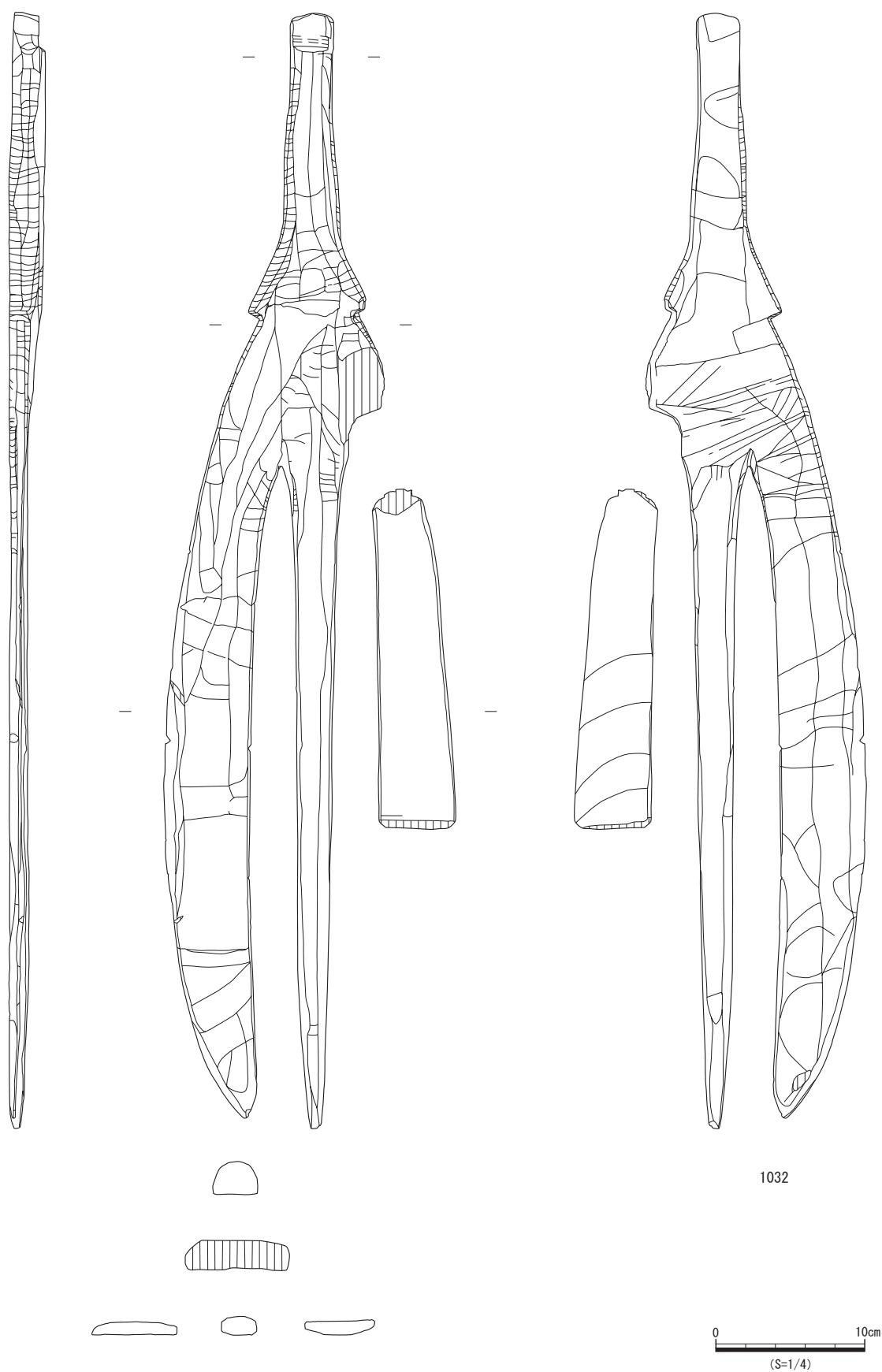


図175 SDc031南部出土遺物 (38)

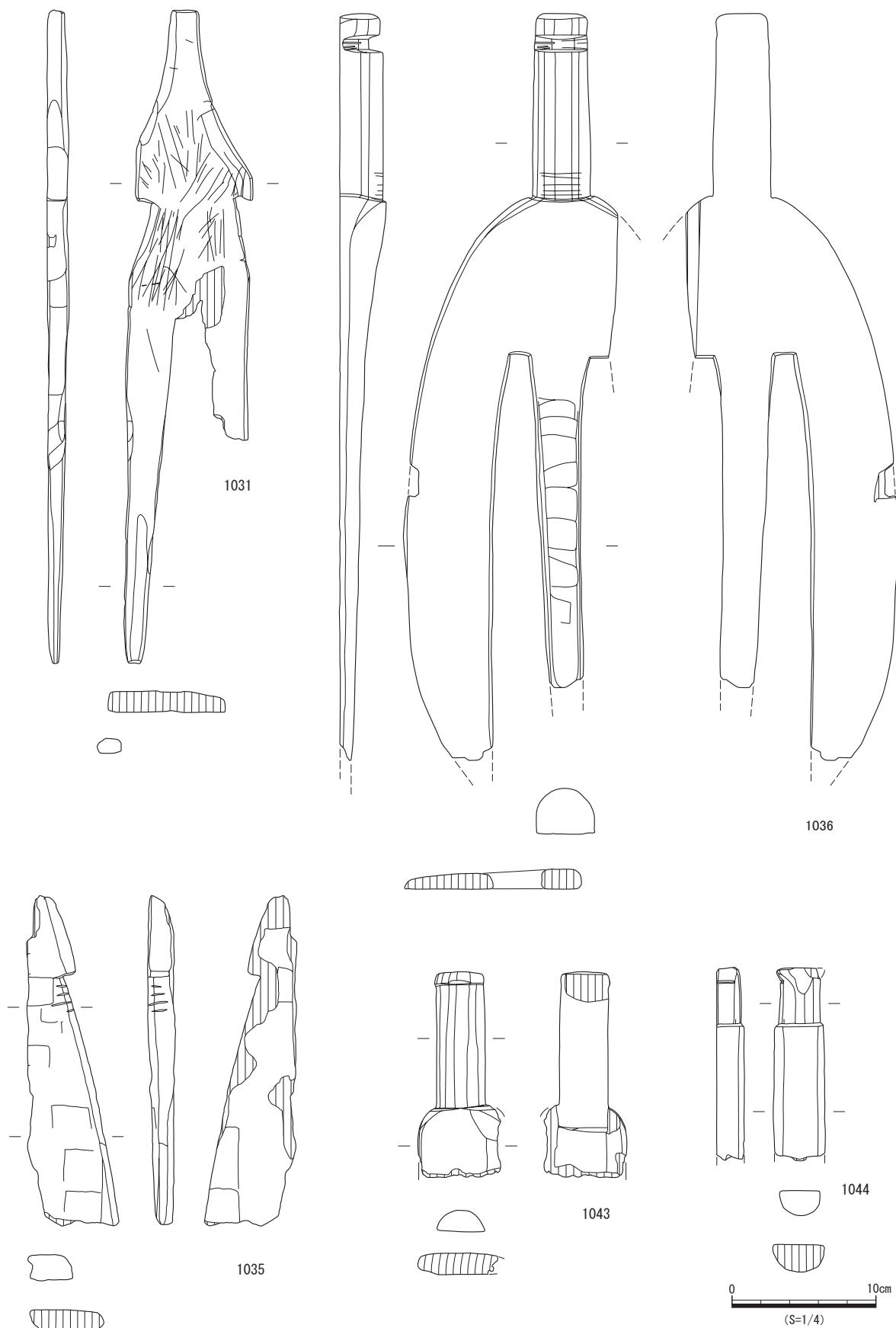


図176 SDc031南部出土遺物 (39)

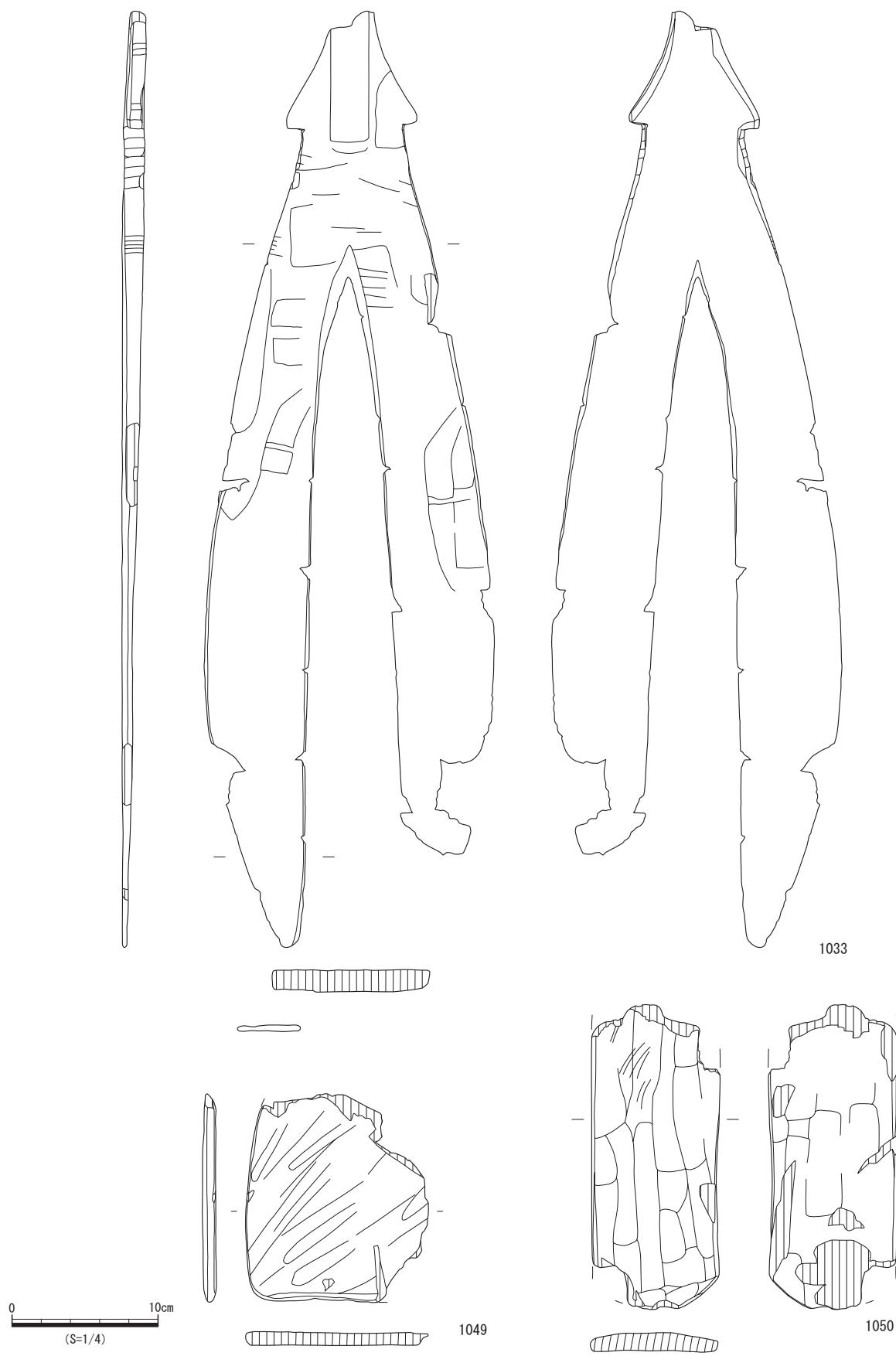


図177 SDc031南部出土遺物 (40)

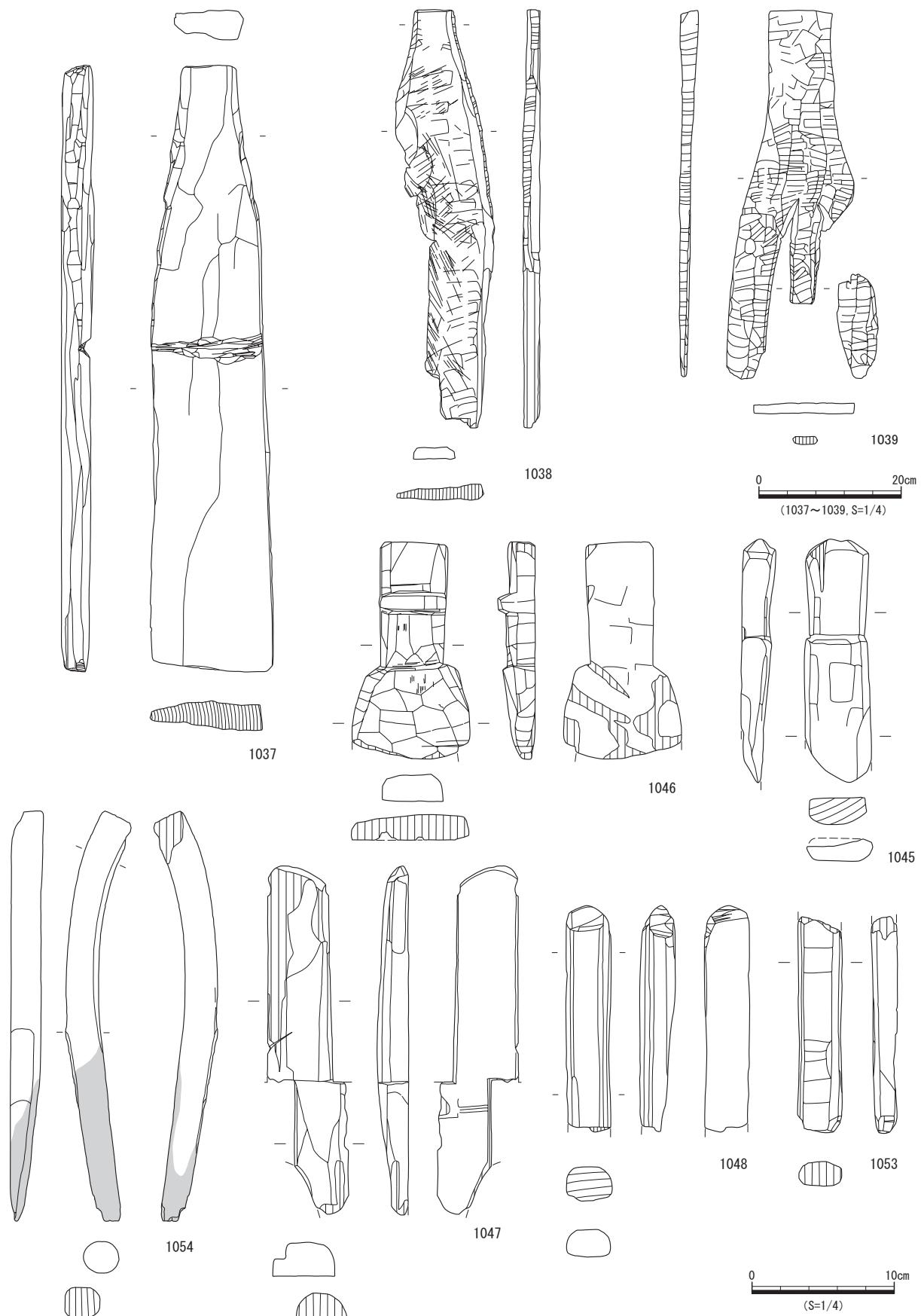


図178 SDc031南部出土遺物 (41)

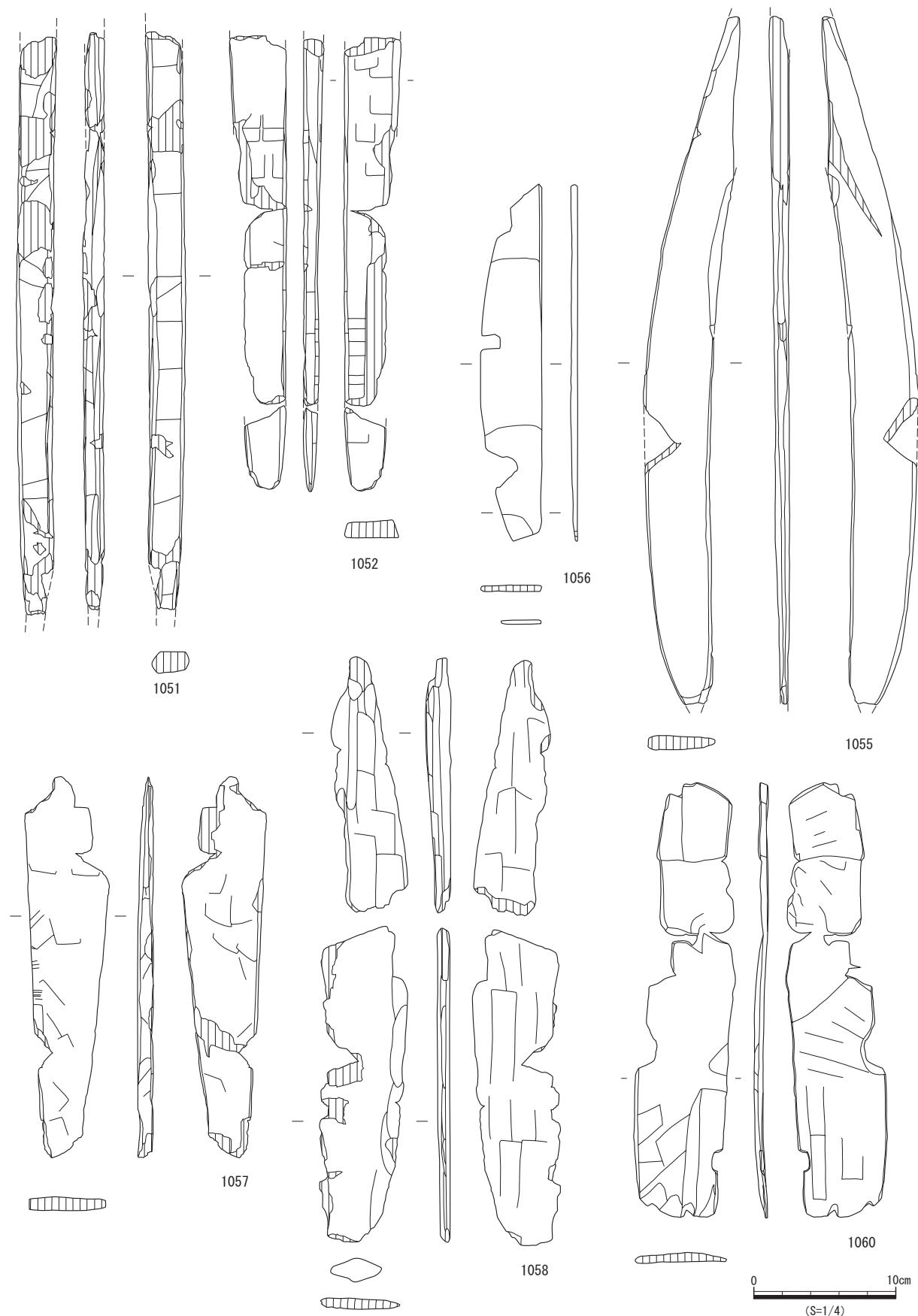


図179 SDc031南部出土遺物 (42)

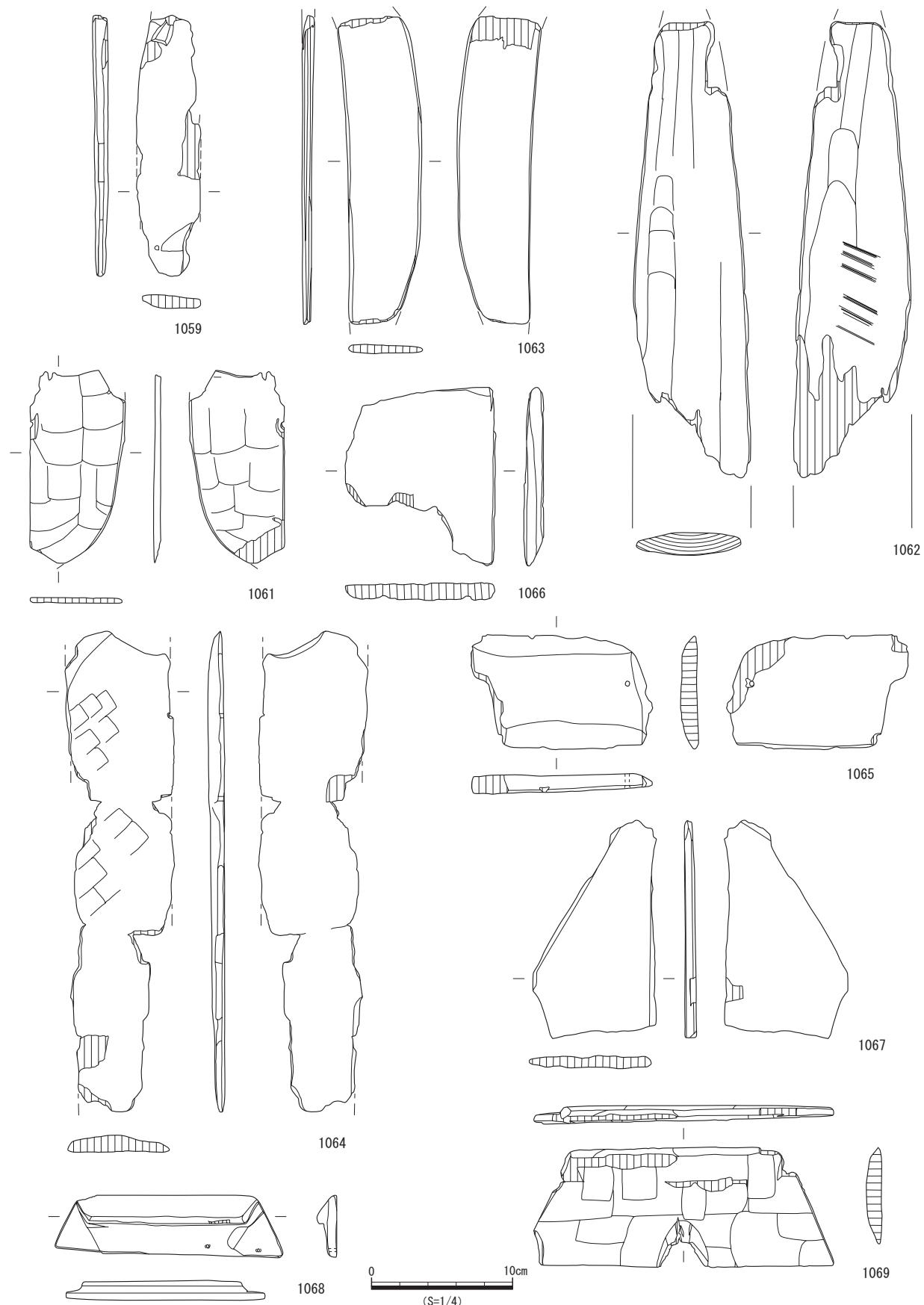


図180 SDc031南部出土遺物 (43)

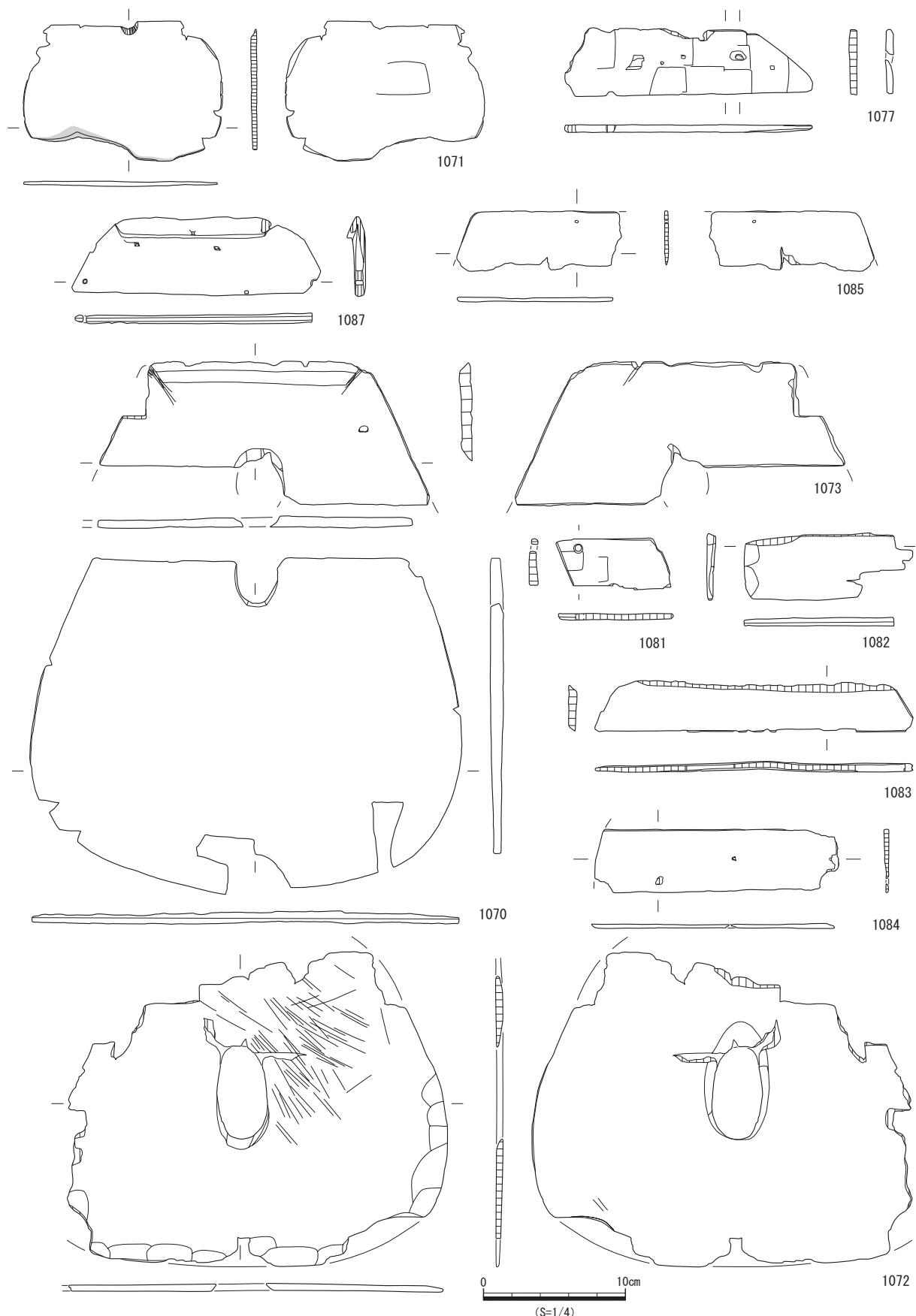


図181 SDc031南部出土遺物 (44)

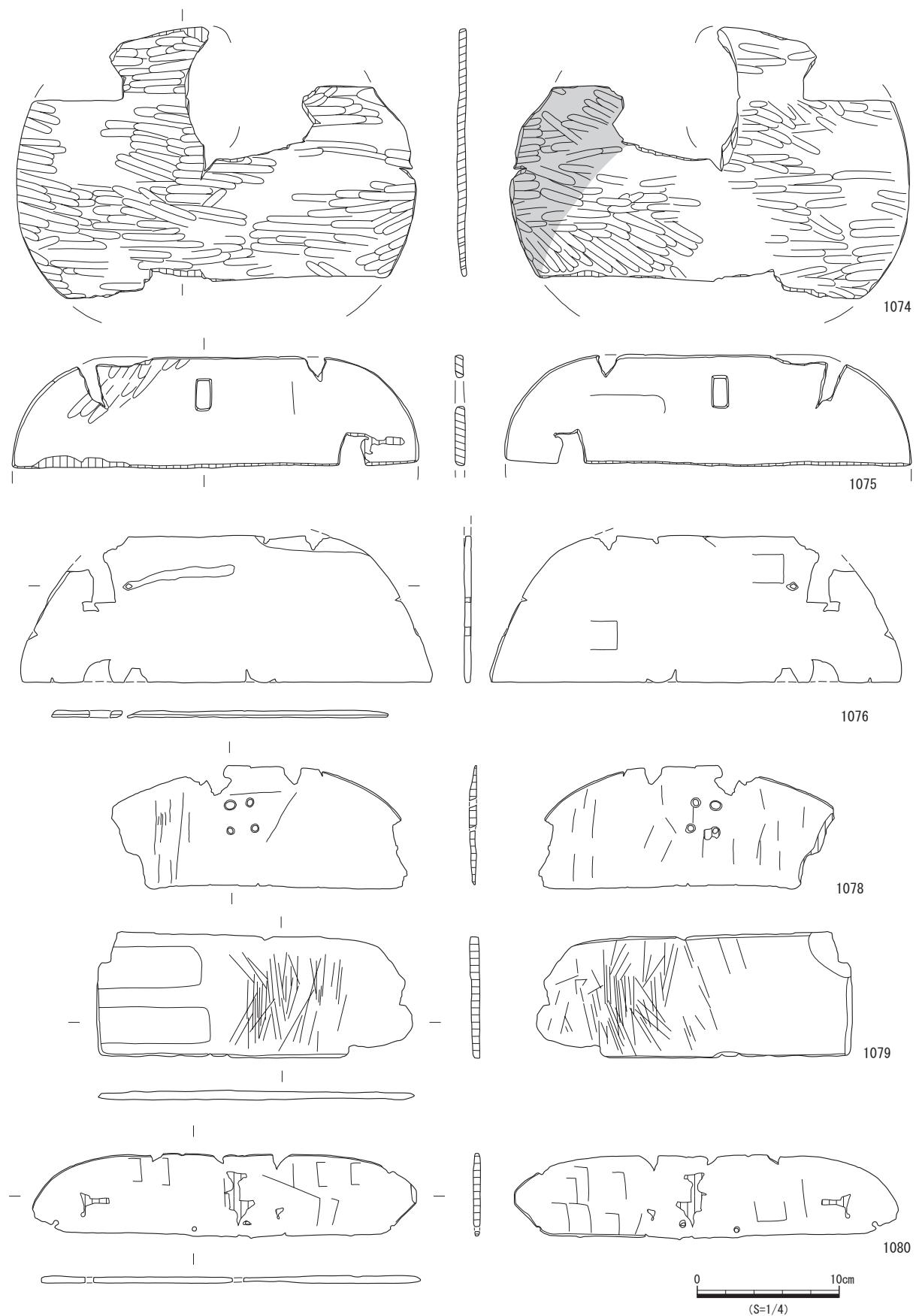


図182 SDc031南部出土遺物 (45)

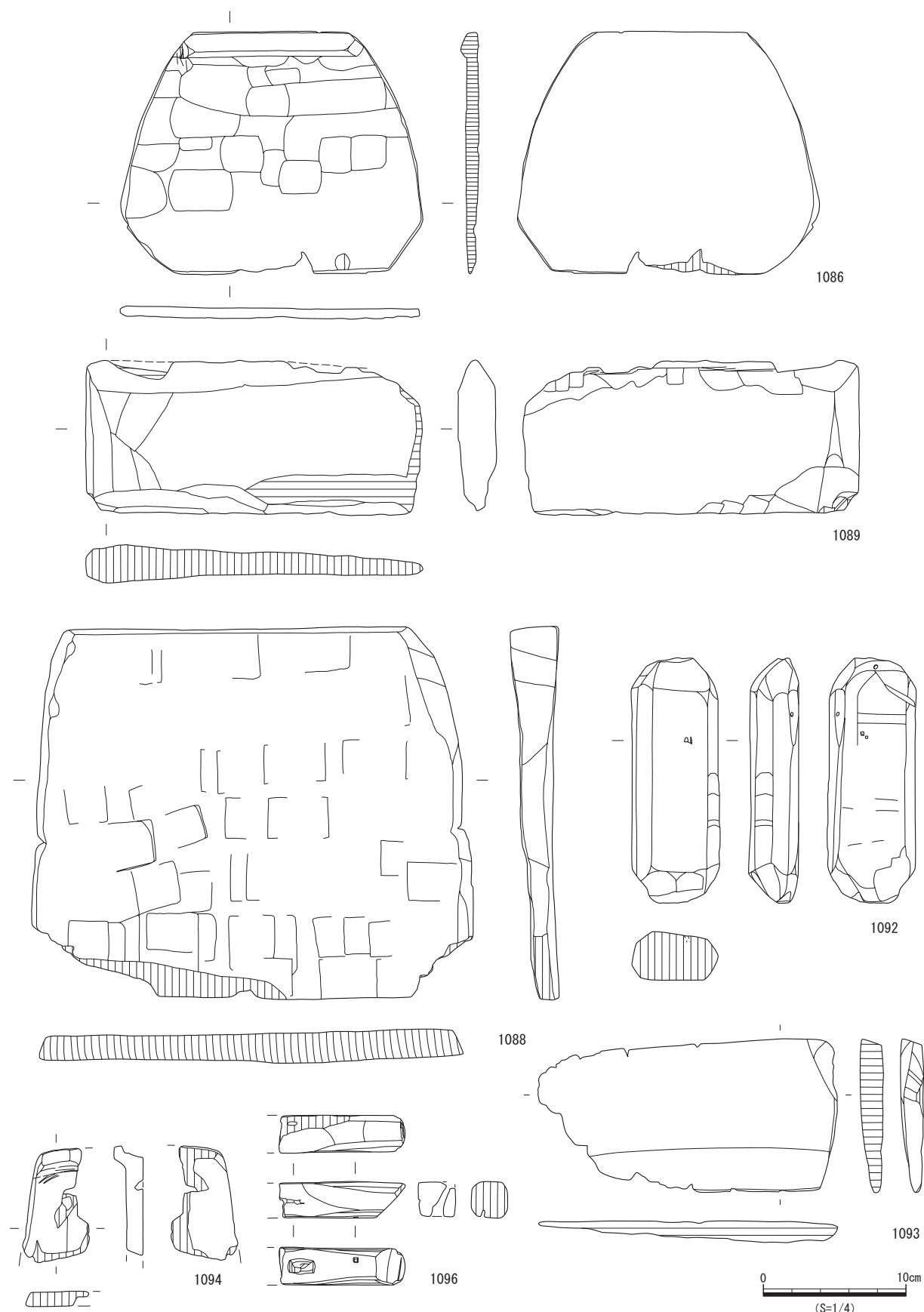


図183 SDc031南部出土遺物 (46)

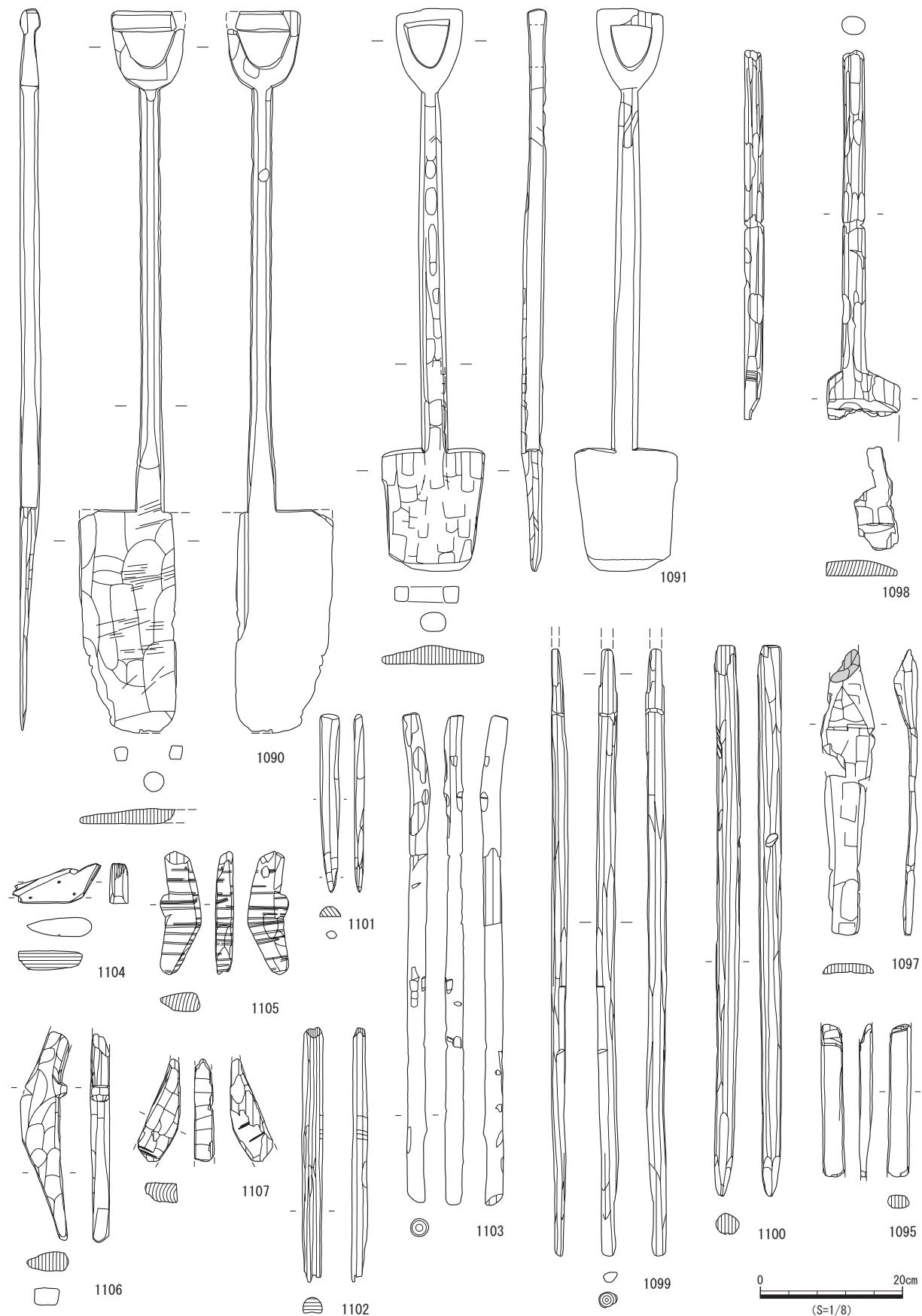


図184 SDc031南部出土遺物 (47)

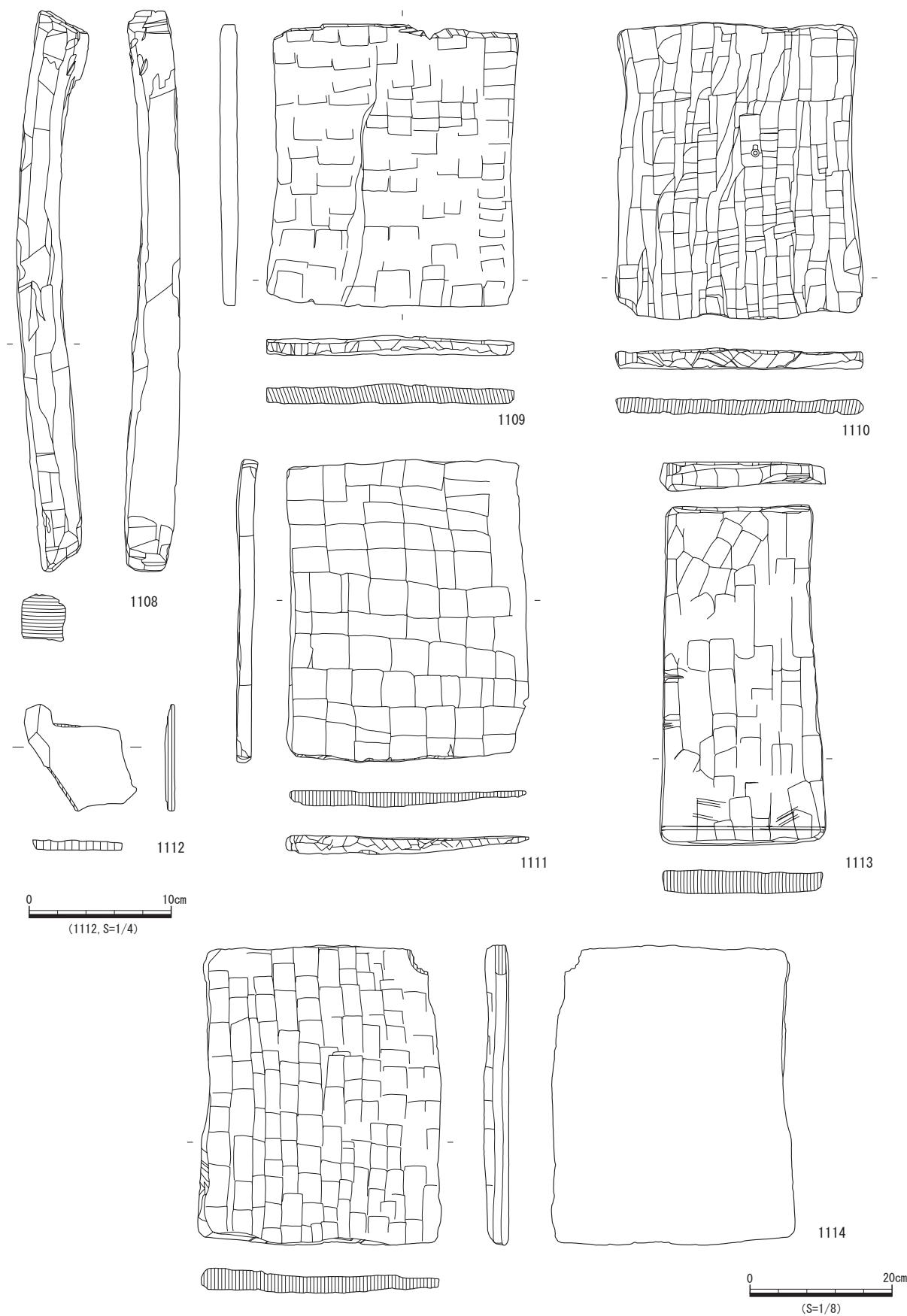


図185 SDc031南部出土遺物 (48)

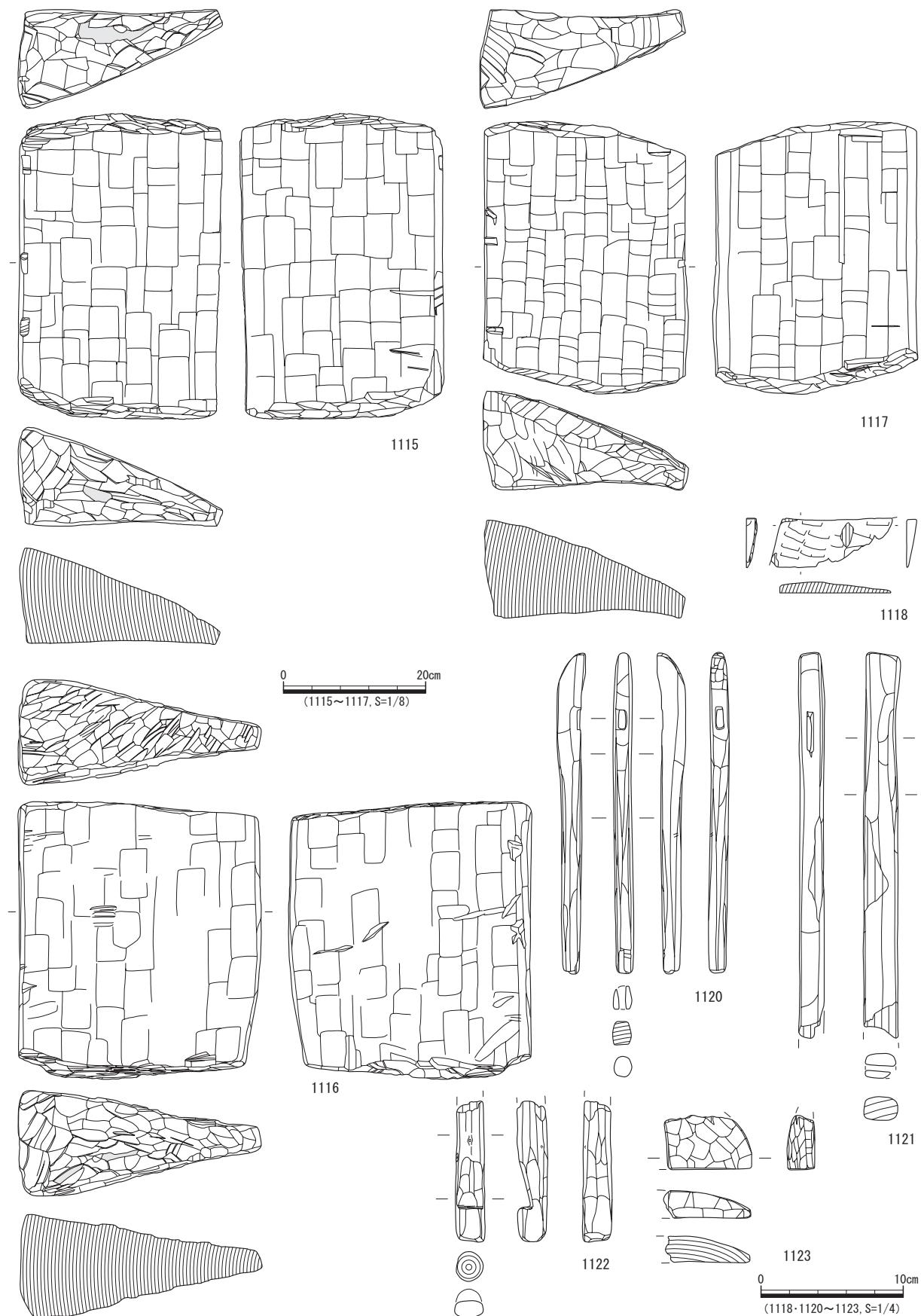


図186 SDc031南部出土遺物 (49)

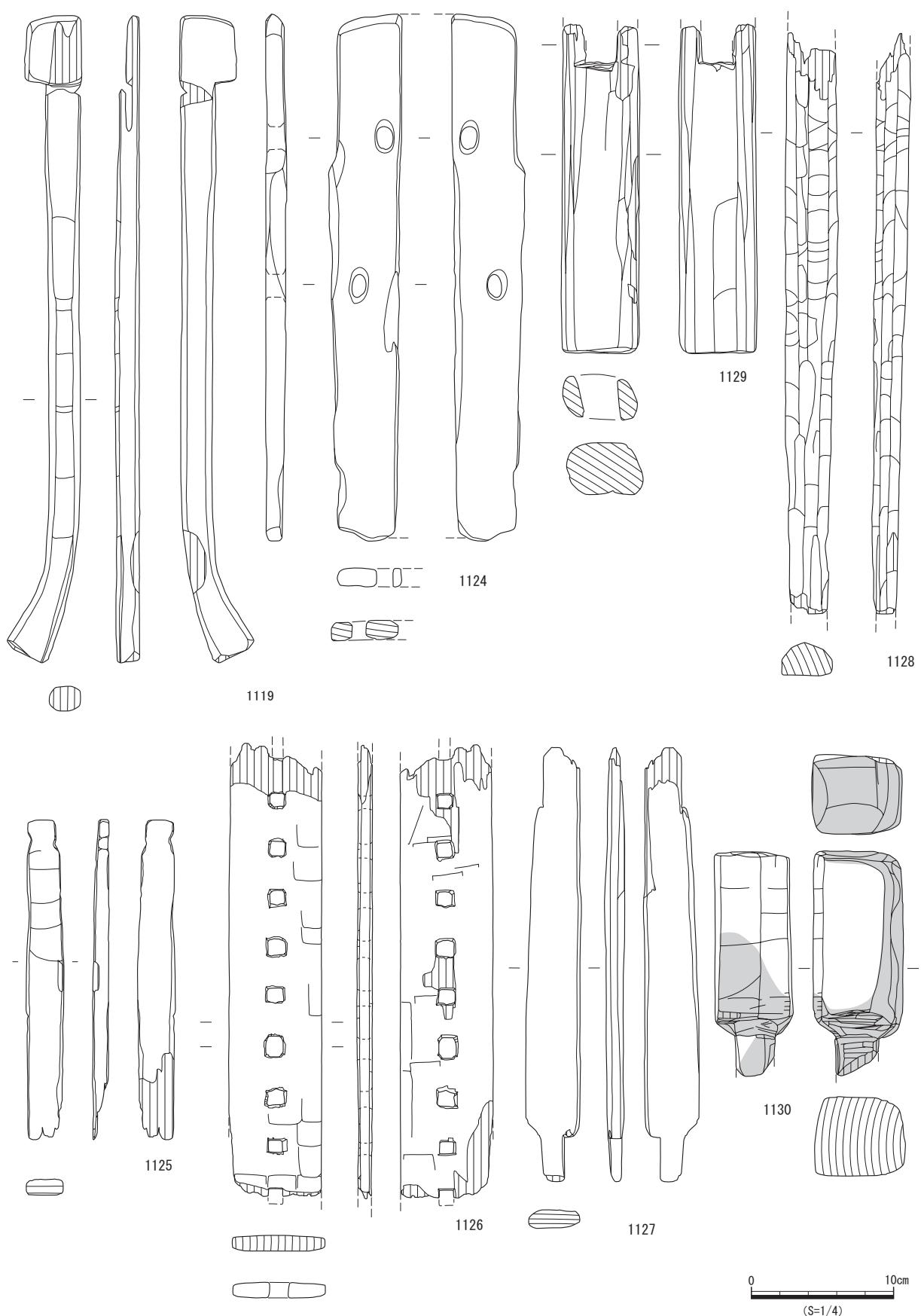


図187 SDc031南部出土遺物（50）

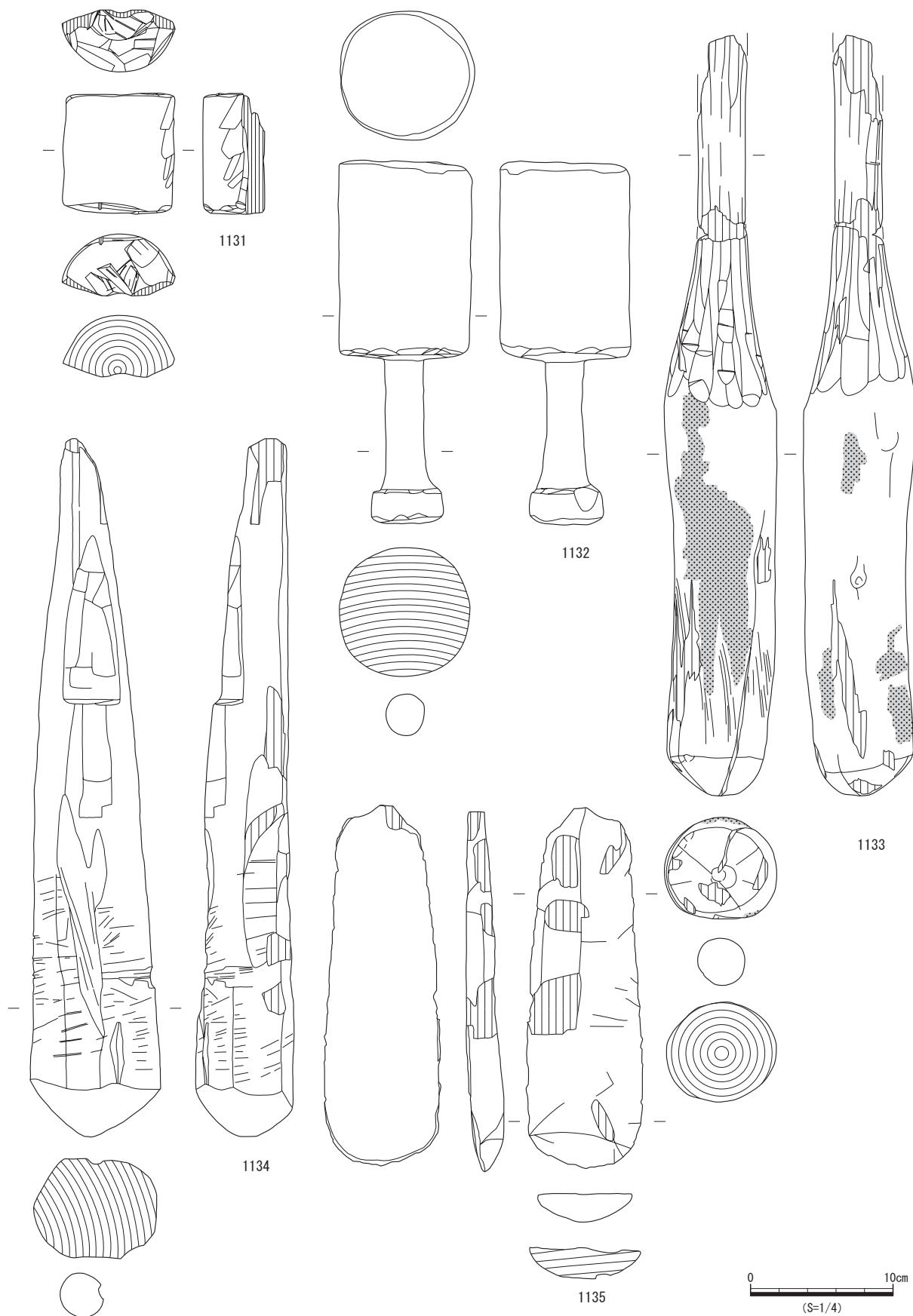


図188 SDc031南部出土遺物 (51)

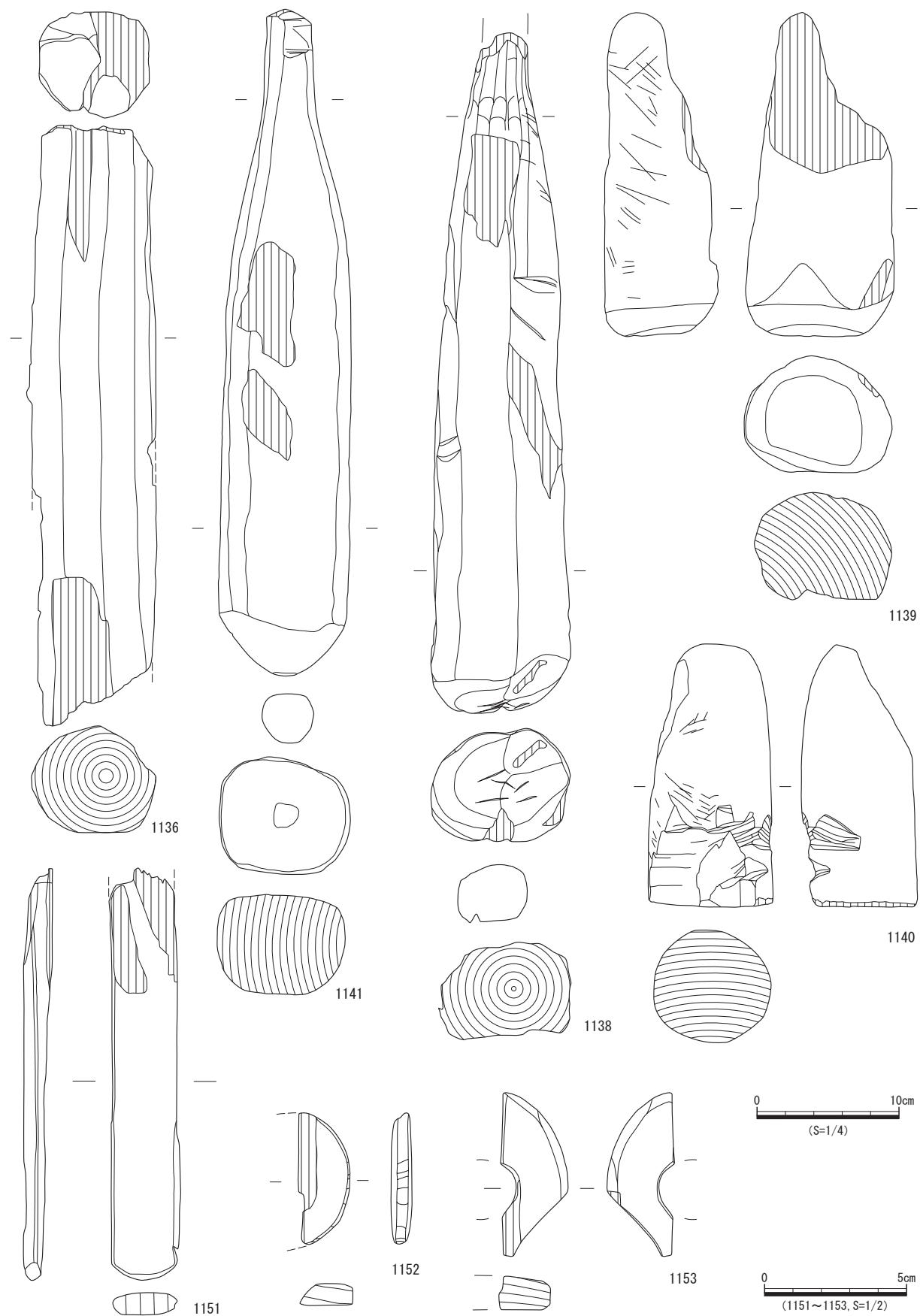


図189 SDc031南部出土遺物 (52)

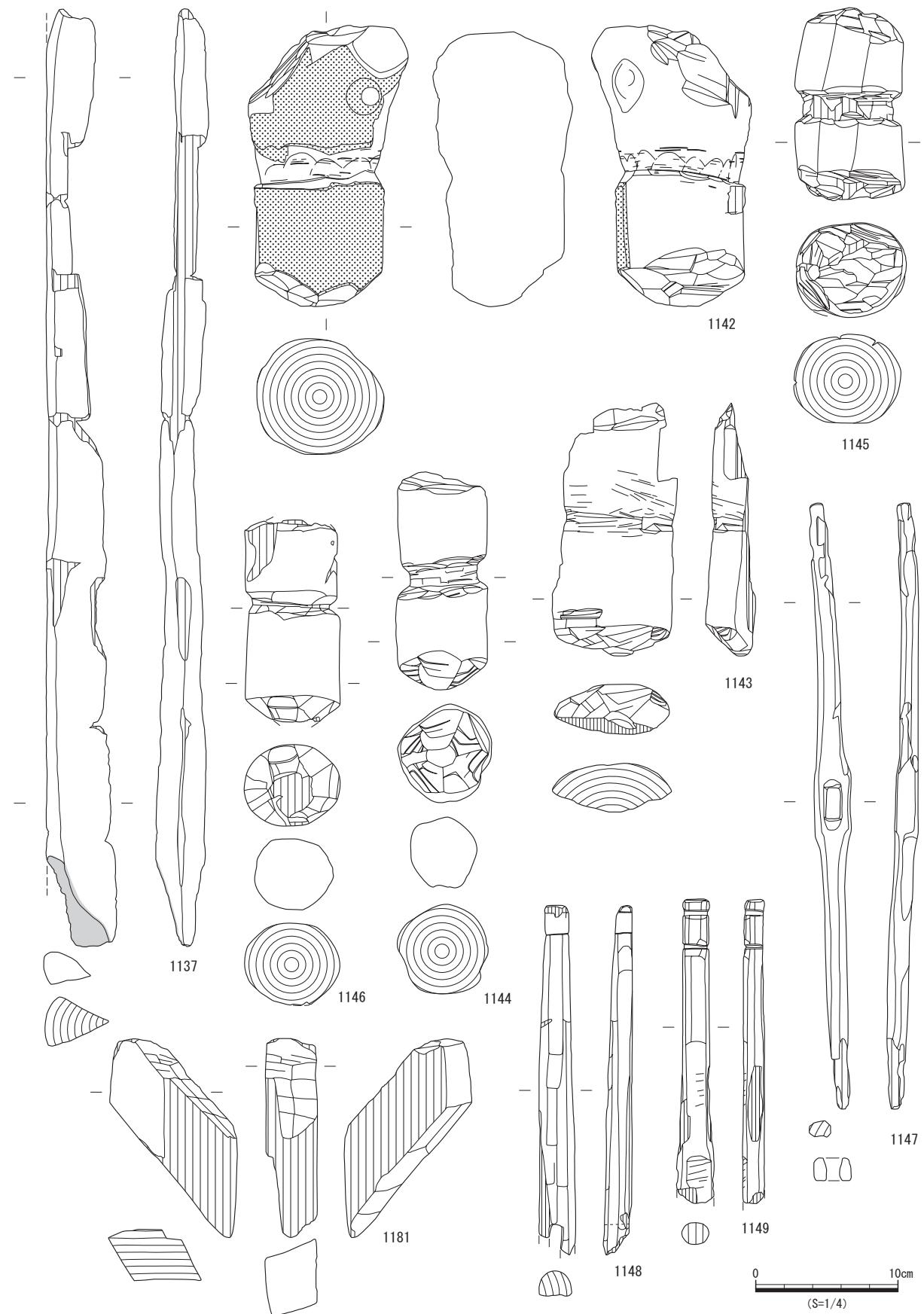


図190 SDc031南部出土遺物 (53)

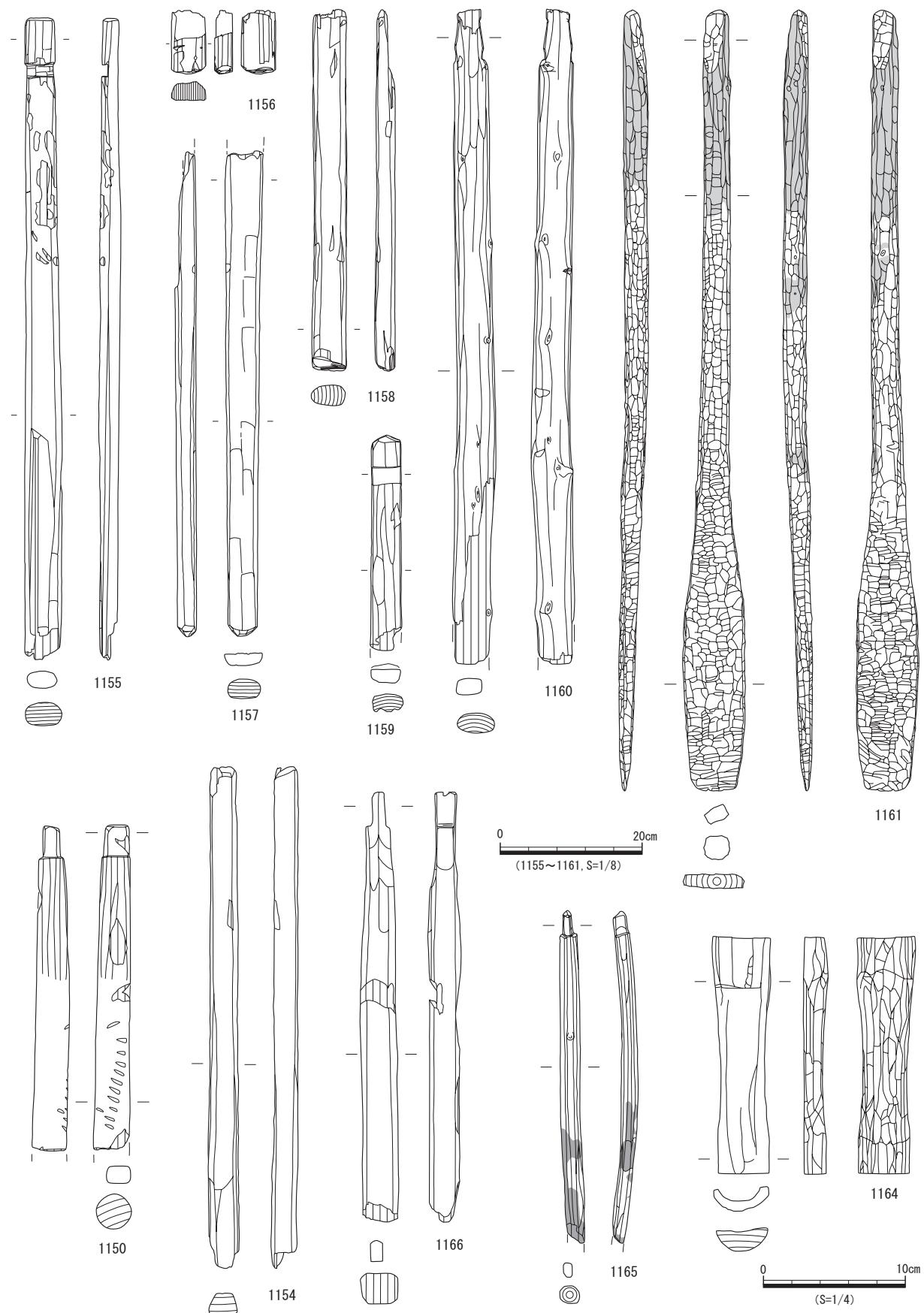


図191 SDc031南部出土遺物 (54)

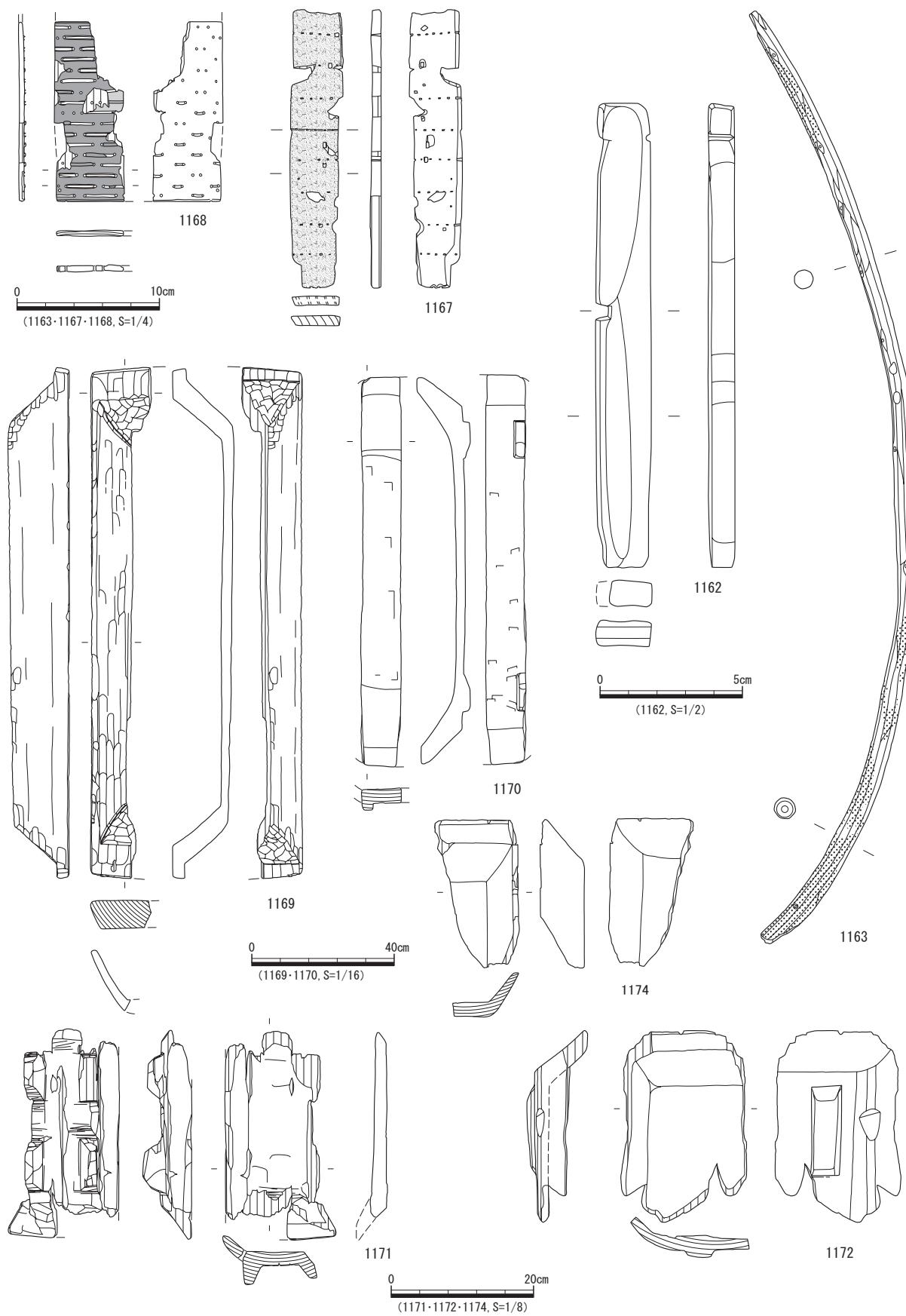


図192 SDc031南部出土遺物 (55)

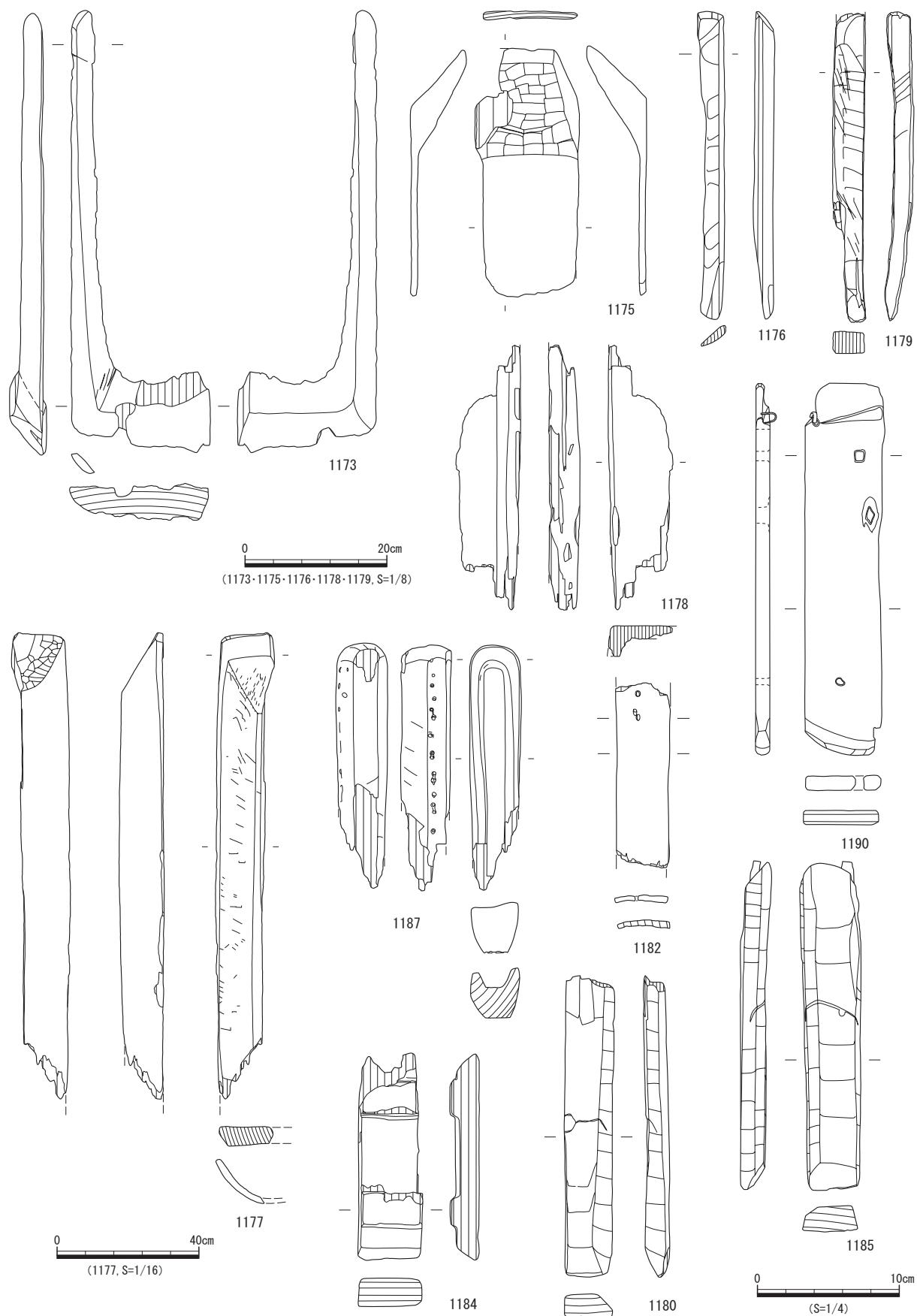


図193 SDc031南部出土遺物 (56)

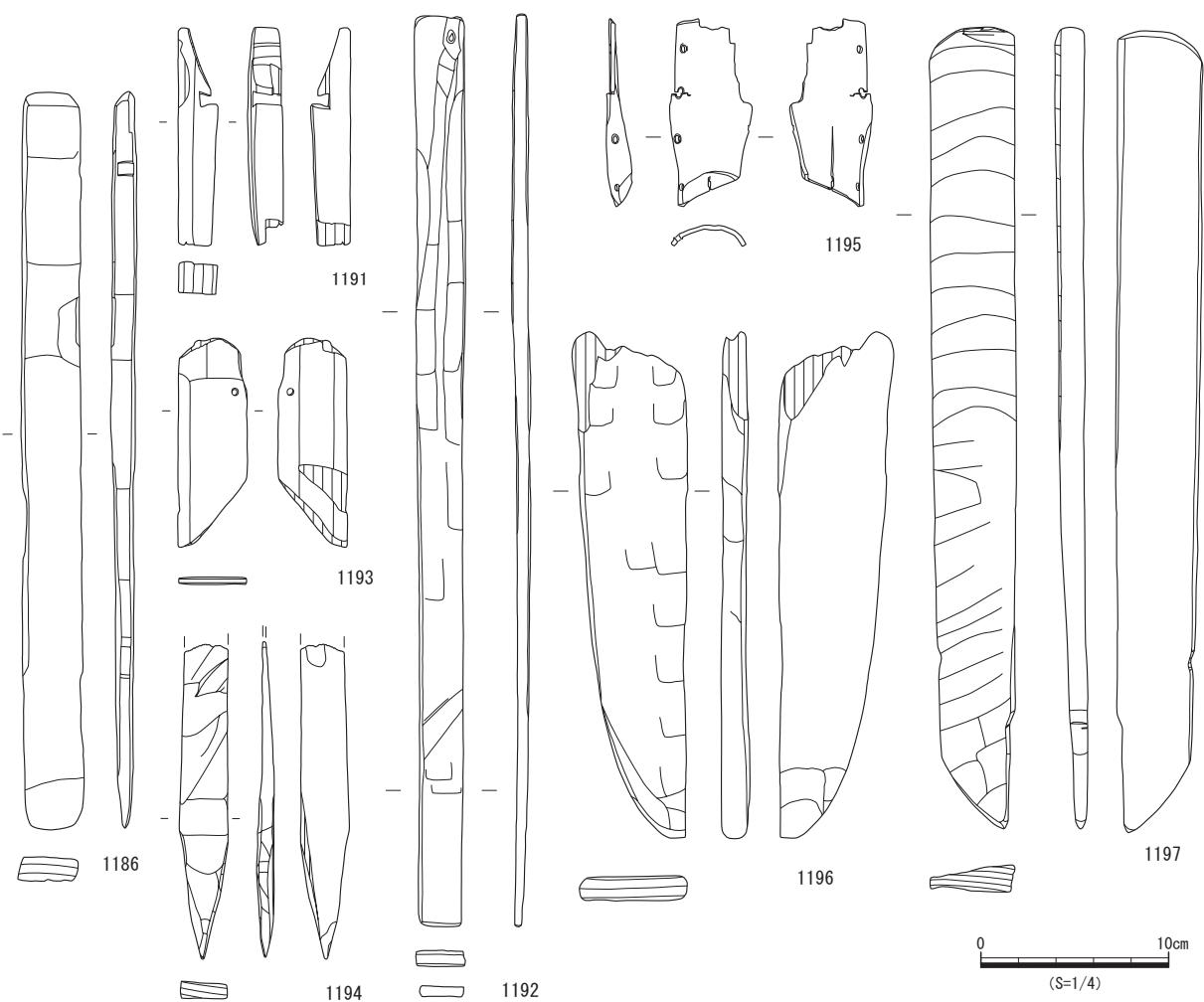
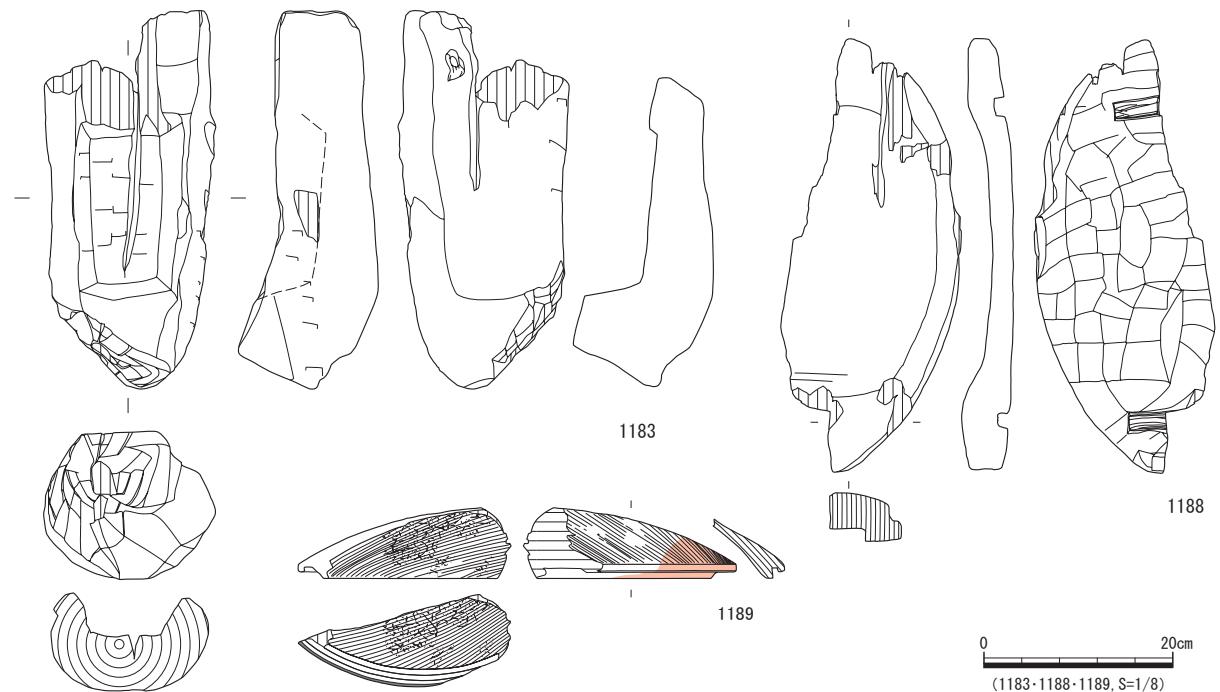


図194 SDc031南部出土遺物 (57)

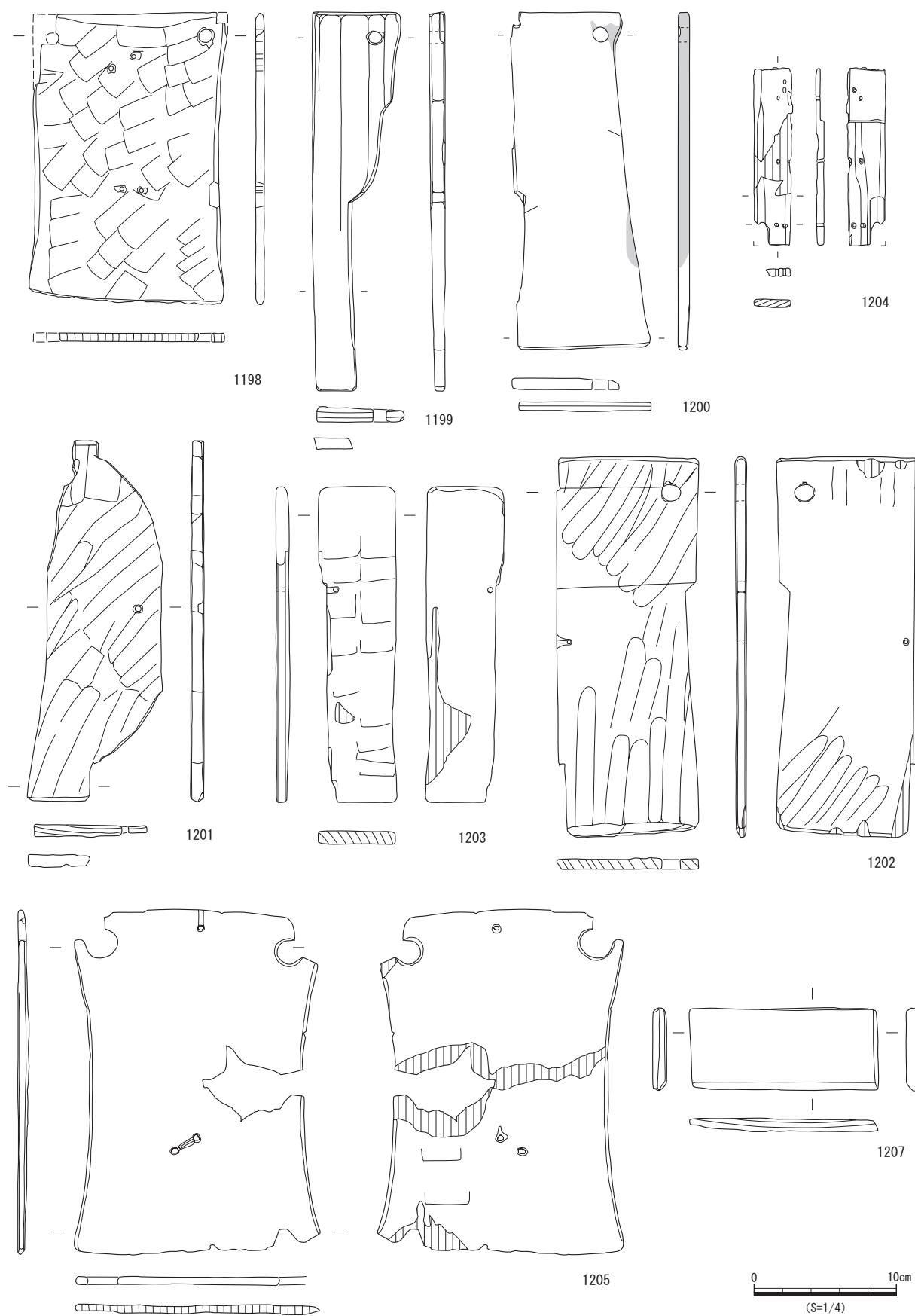


図195 SDc031南部出土遺物 (58)

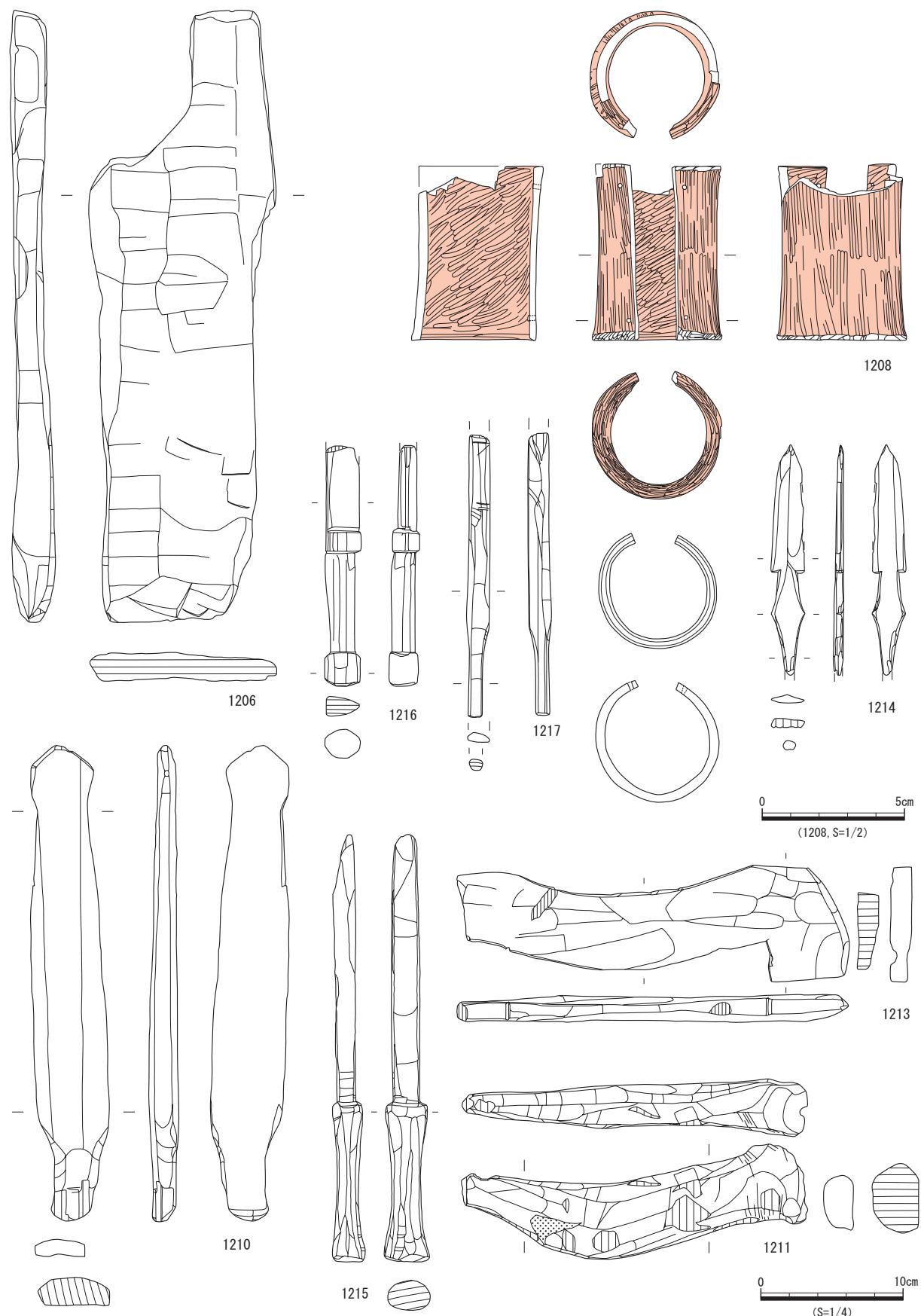


図196 SDc031南部出土遺物 (59)

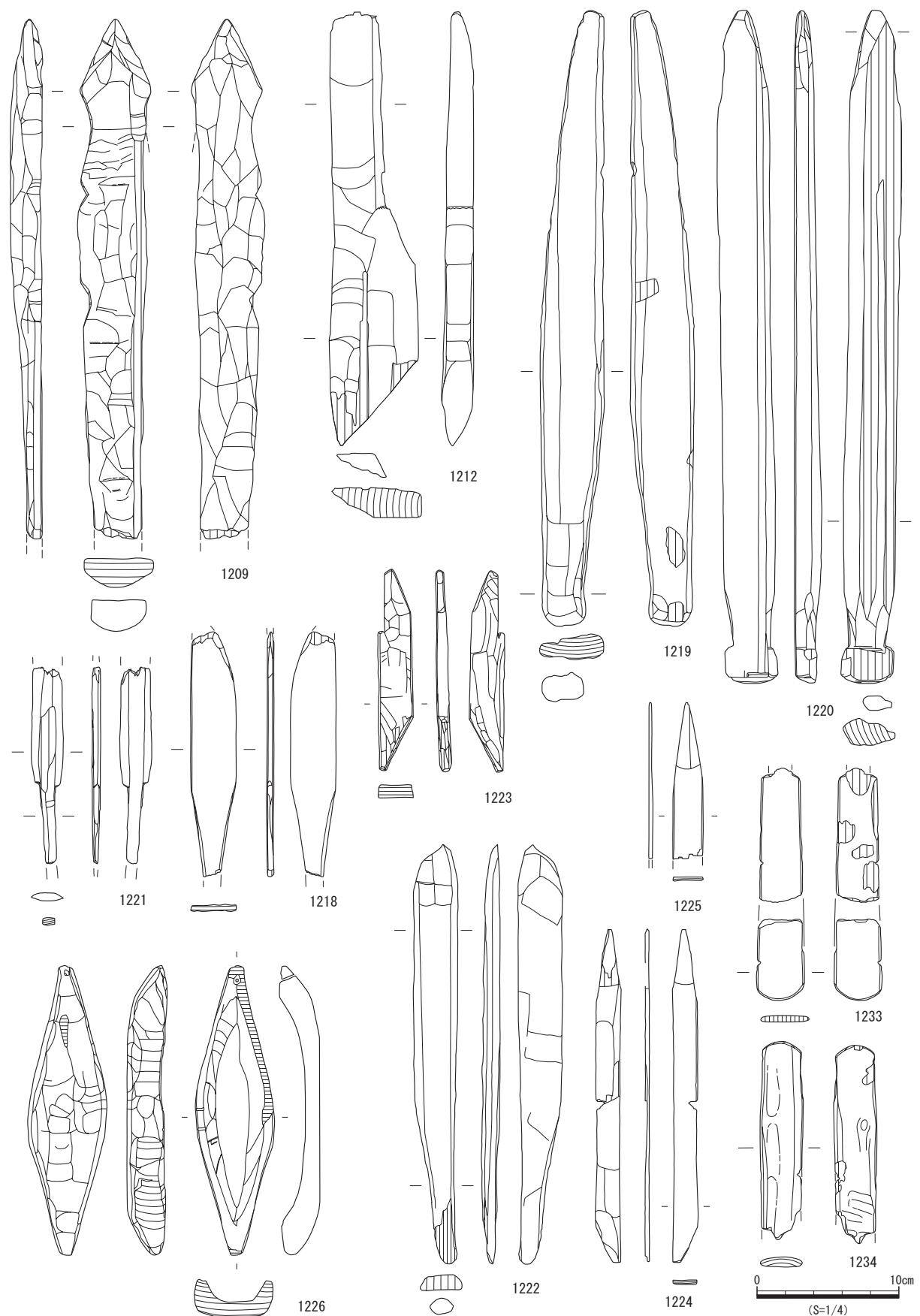


図197 SDc031南部出土遺物 (60)

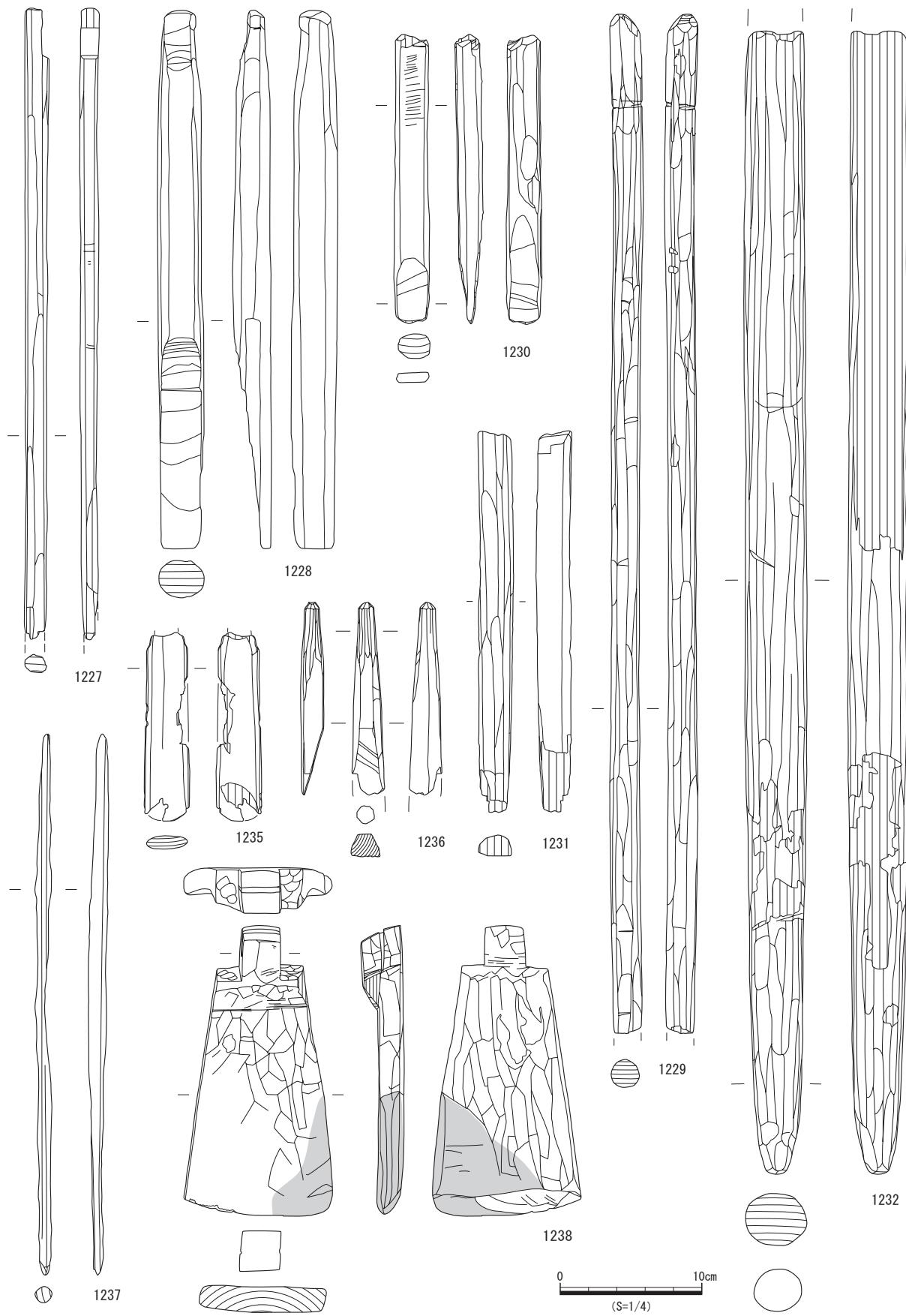


図198 SDc031南部出土遺物 (61)

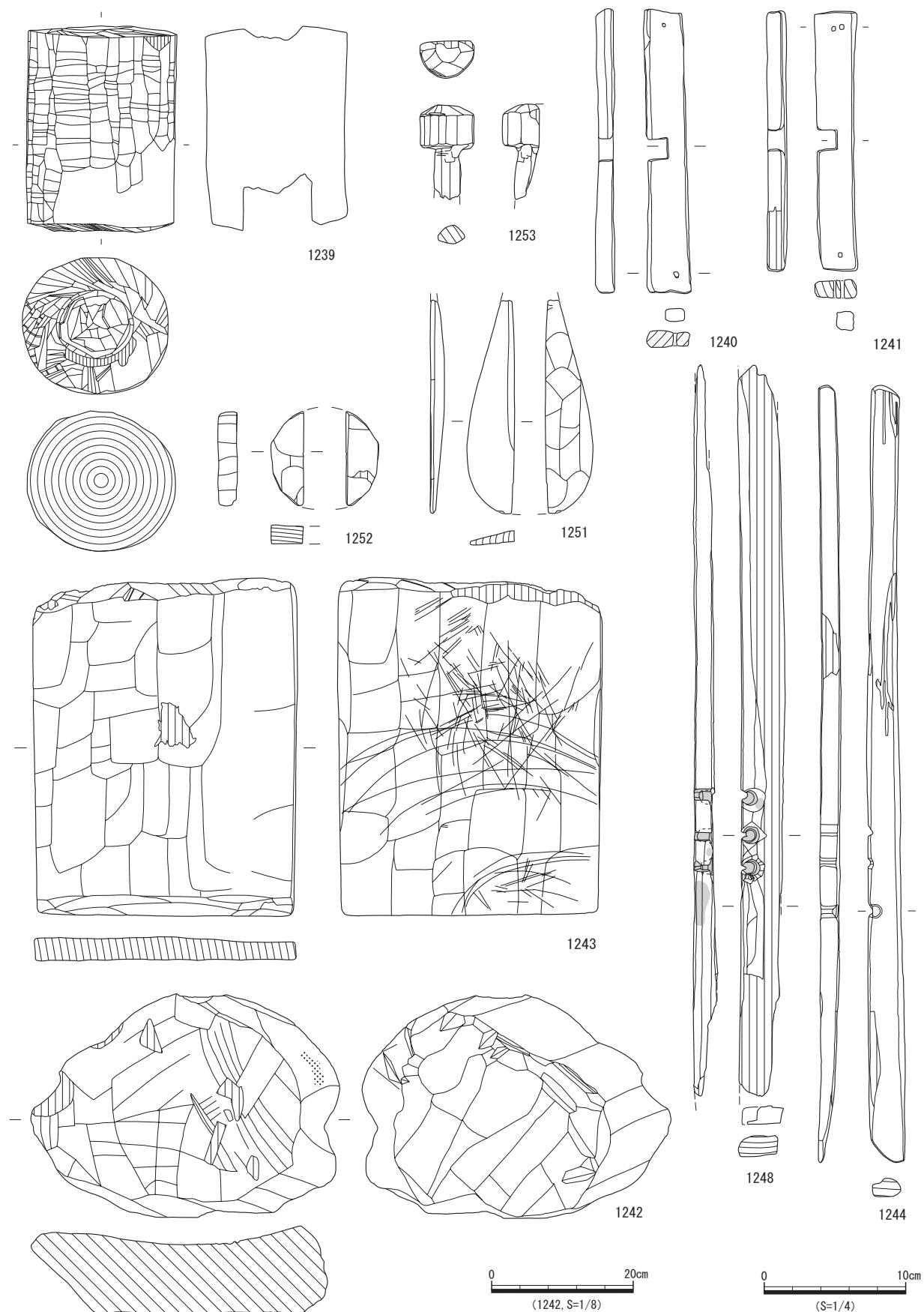


図199 SDc031南部出土遺物 (62)

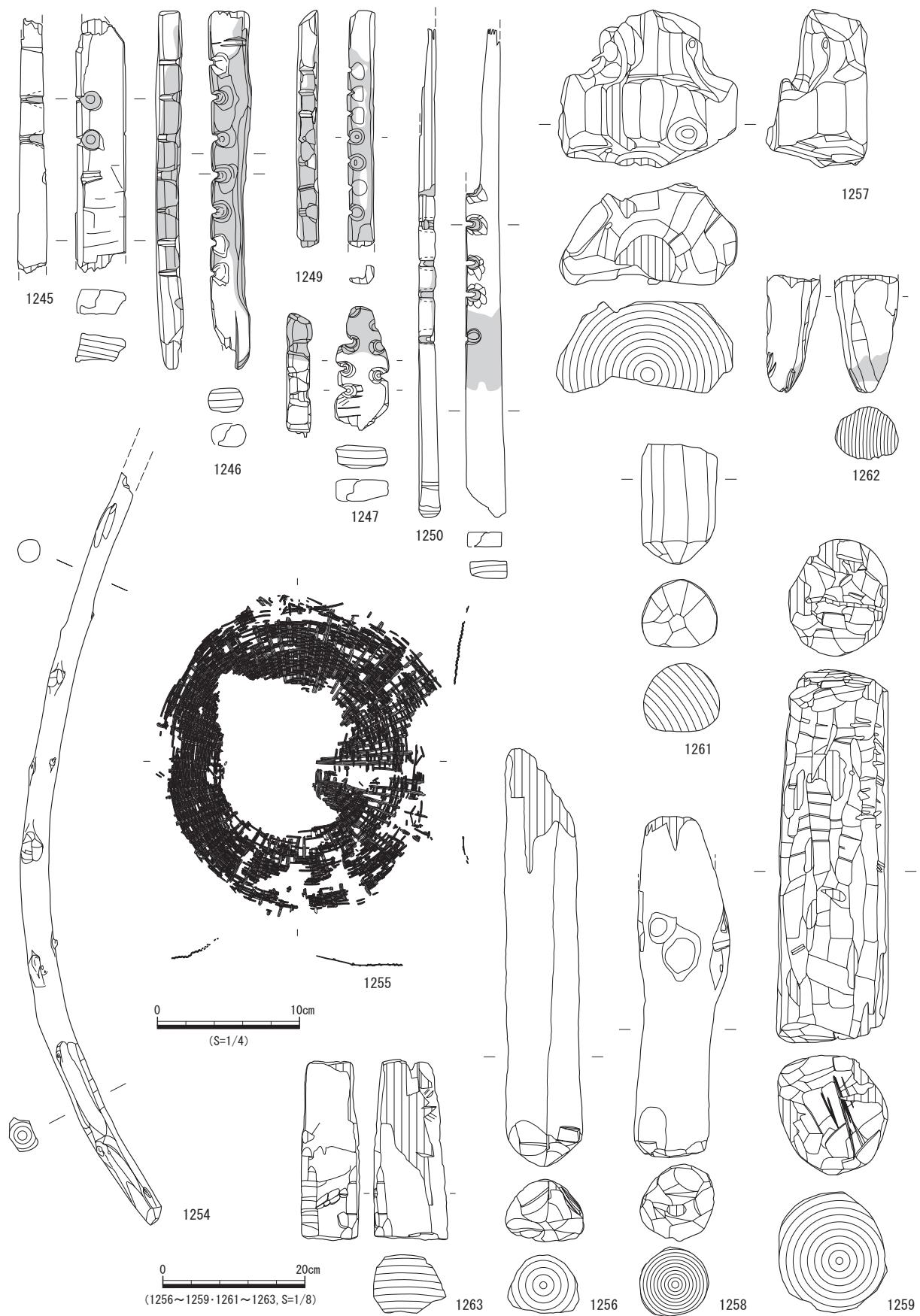


図200 SDc031南部出土遺物 (63)

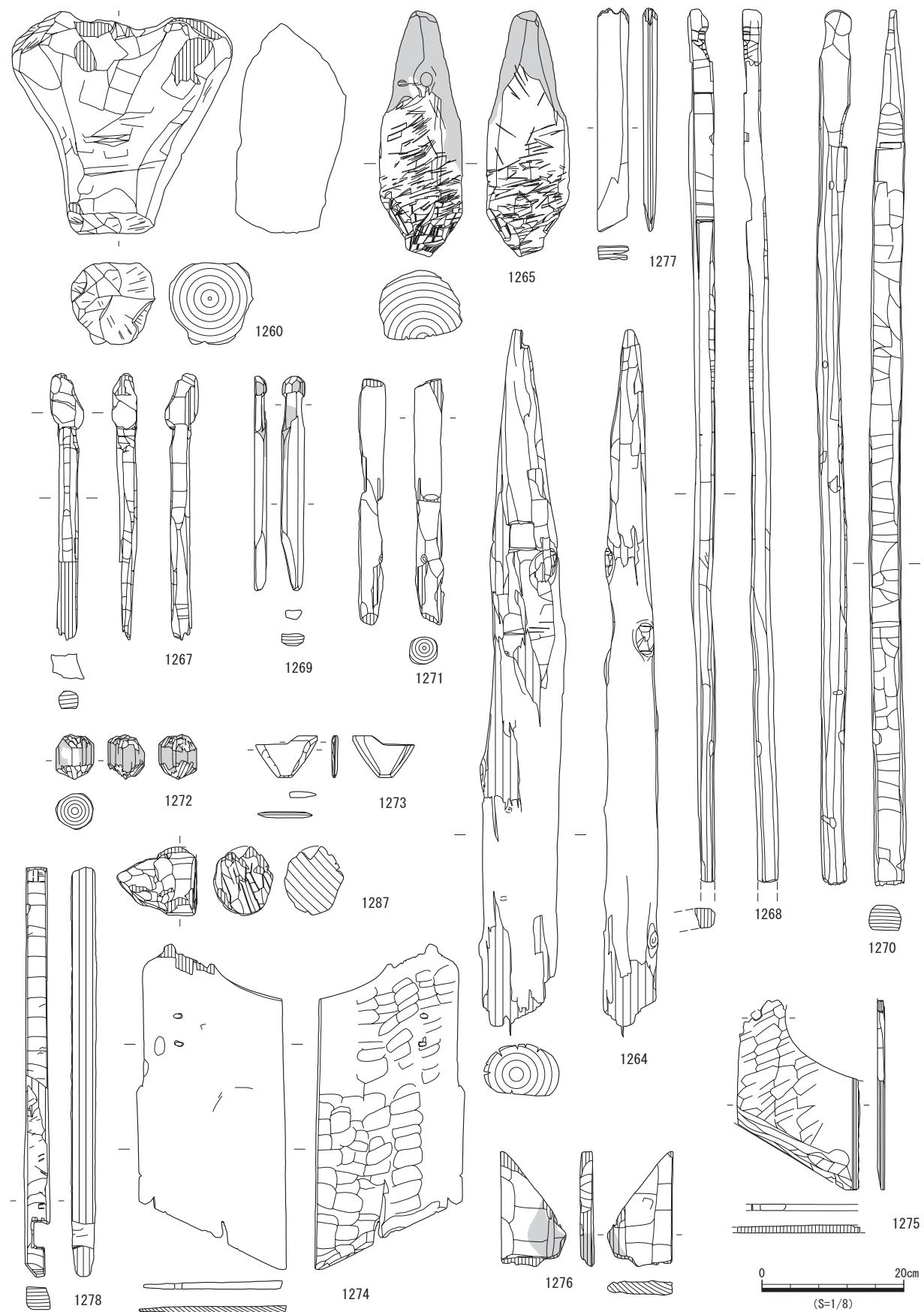


図201 SDc031南部出土遺物 (64)

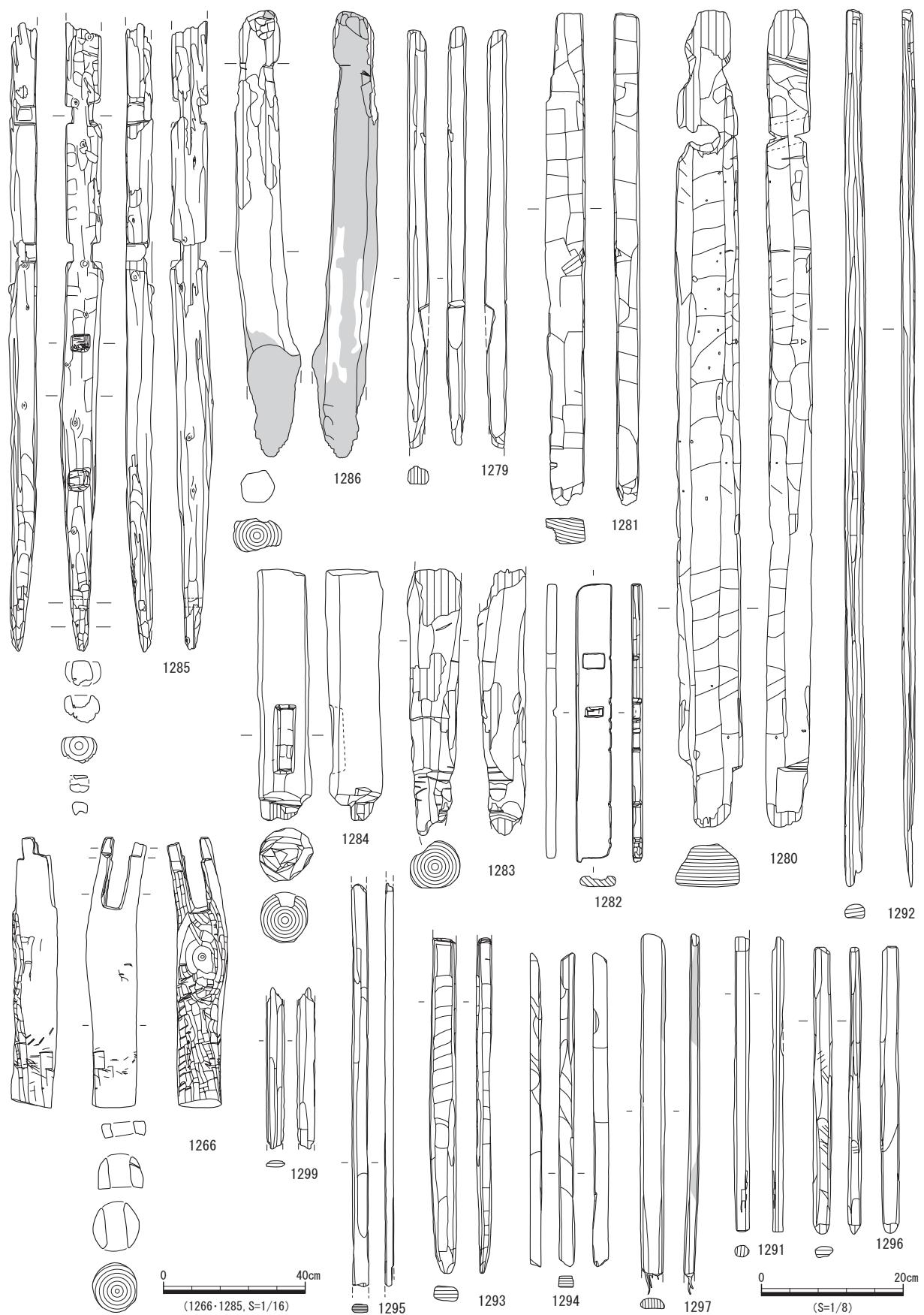


図202 SDc031南部出土遺物（65）

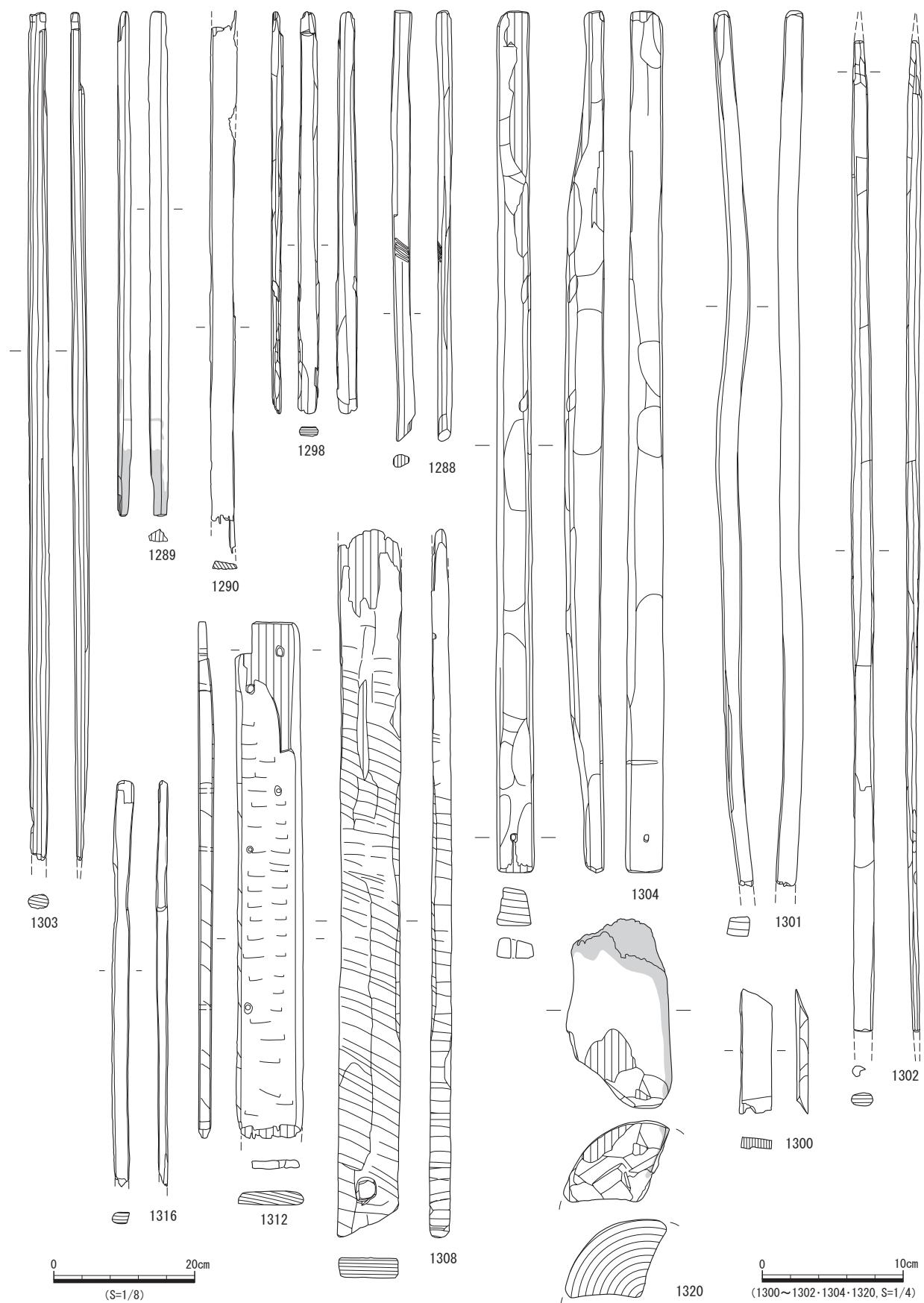


図203 SDc031南部出土遺物 (66)

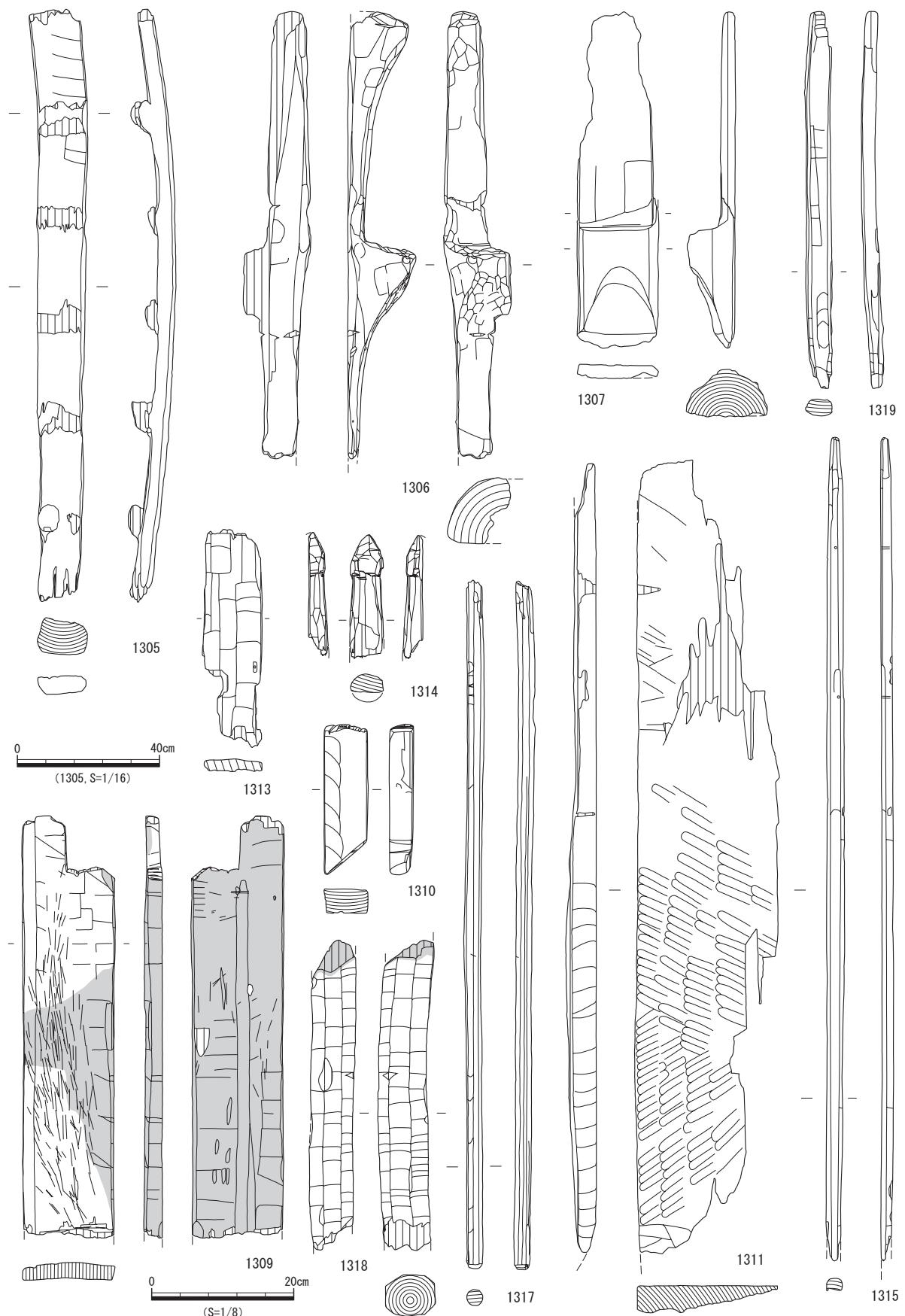


図204 SDc031南部出土遺物 (67)

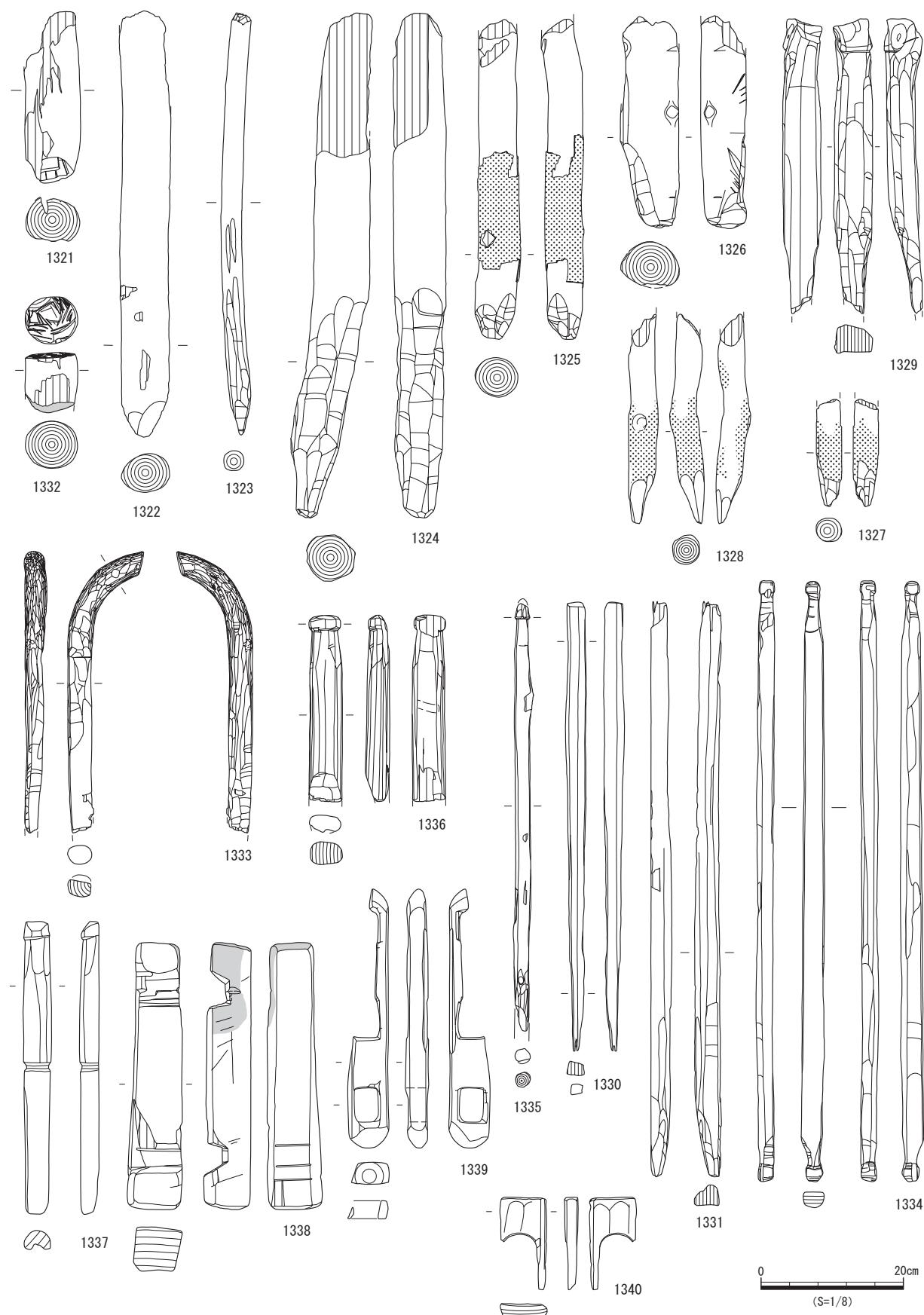


図205 SDc031南部出土遺物 (68)

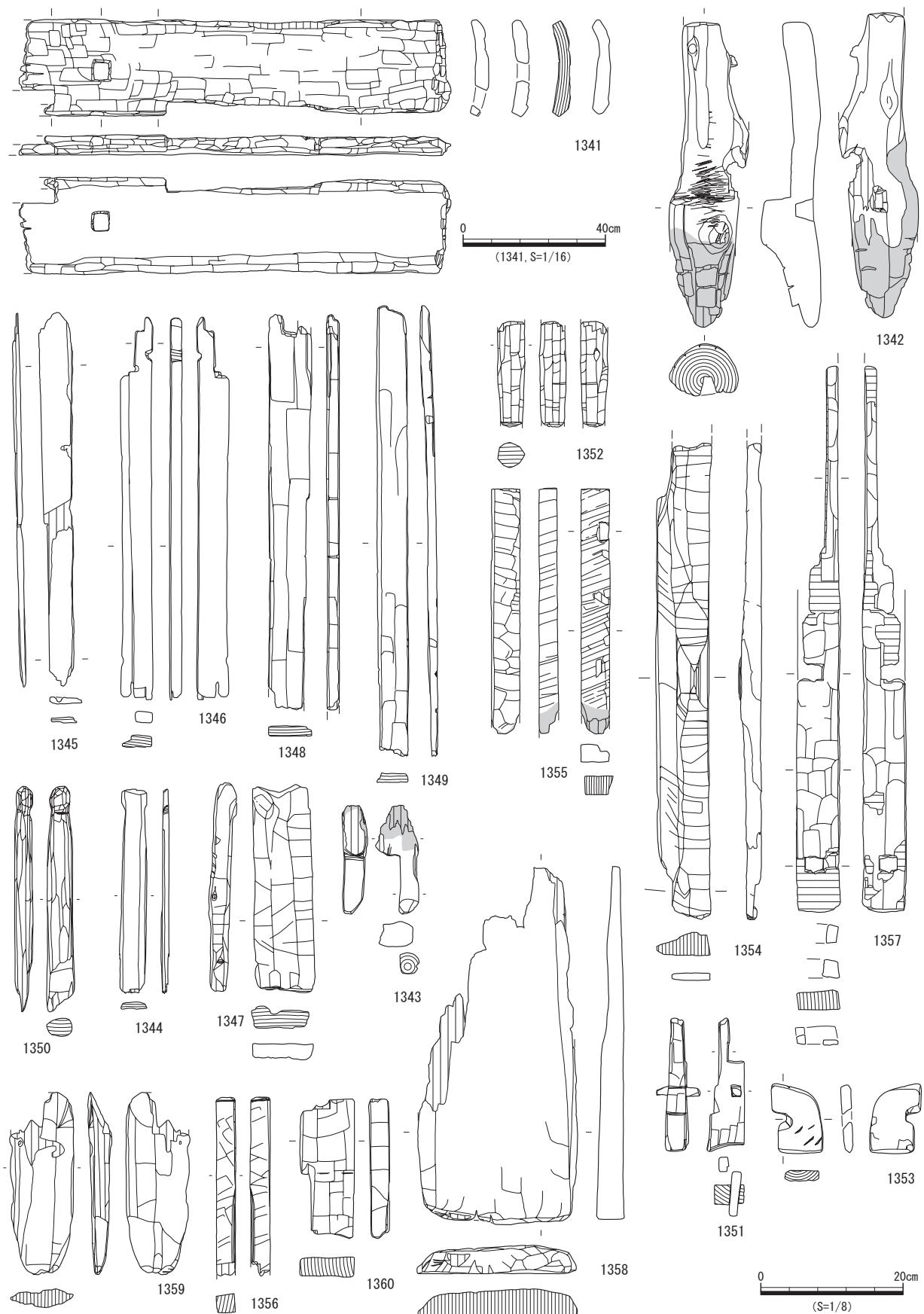


図206 SDc031南部出土遺物 (69)

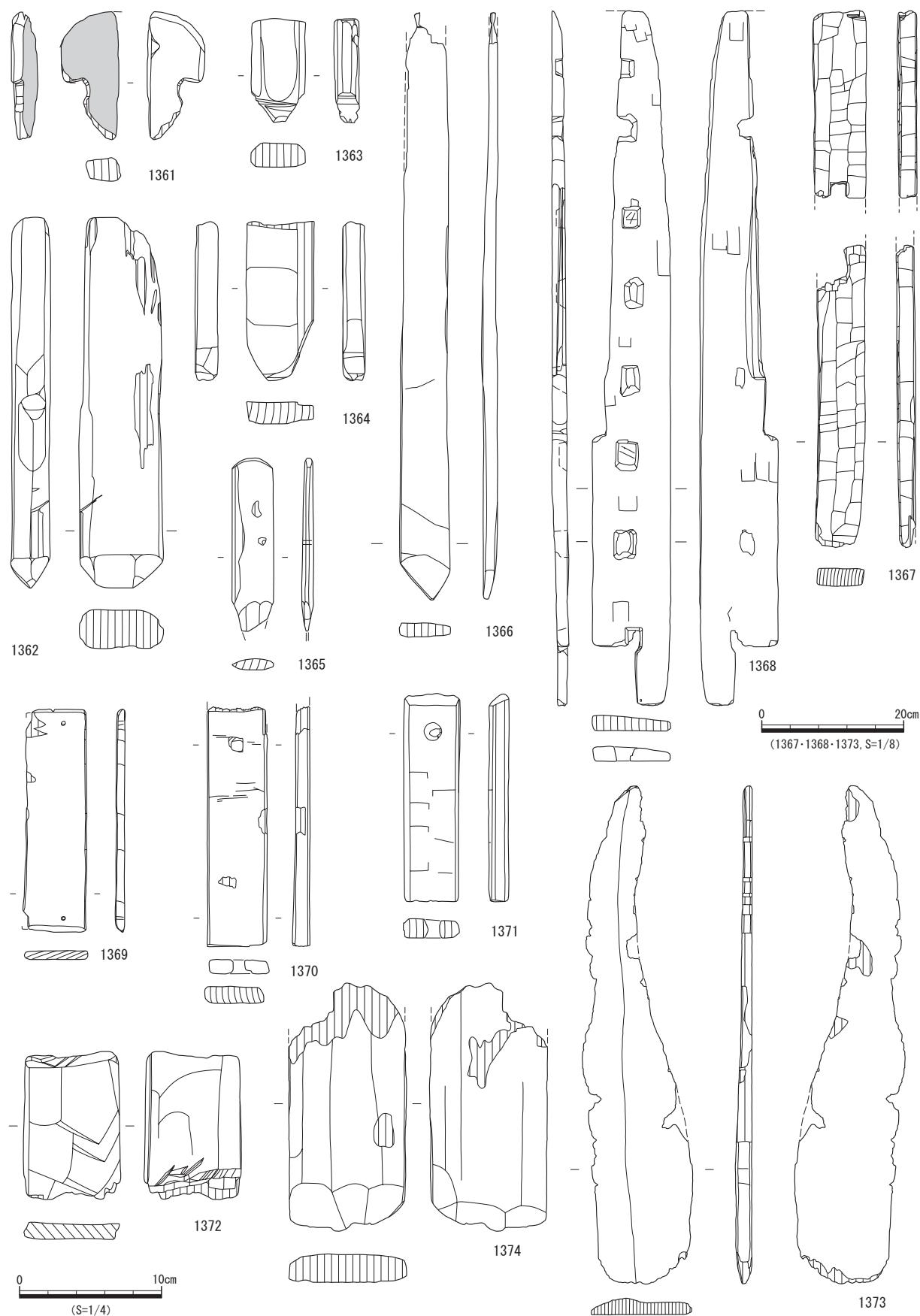


図207 SDc031南部出土遺物 (70)

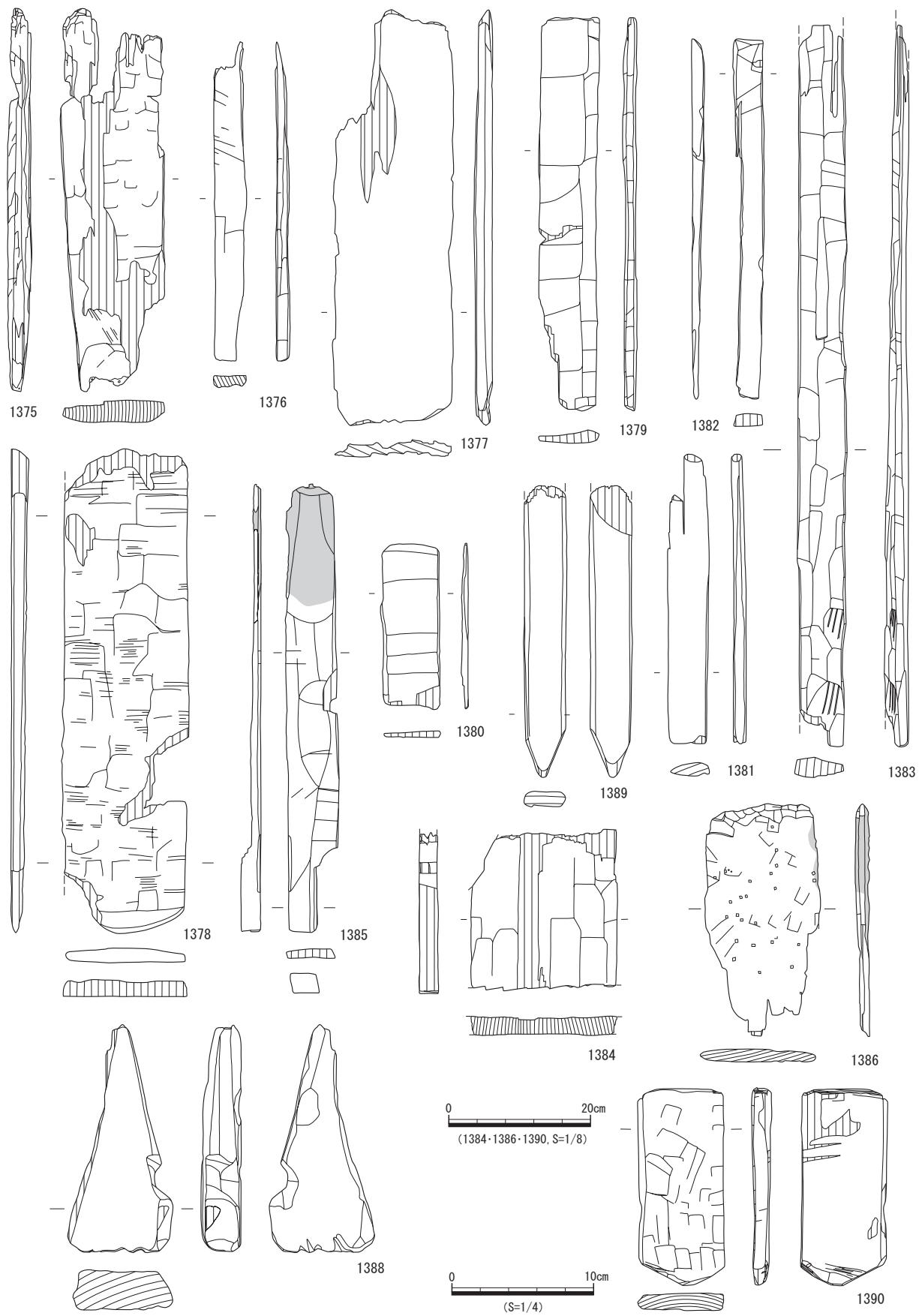


図208 SDc031南部出土遺物 (71)

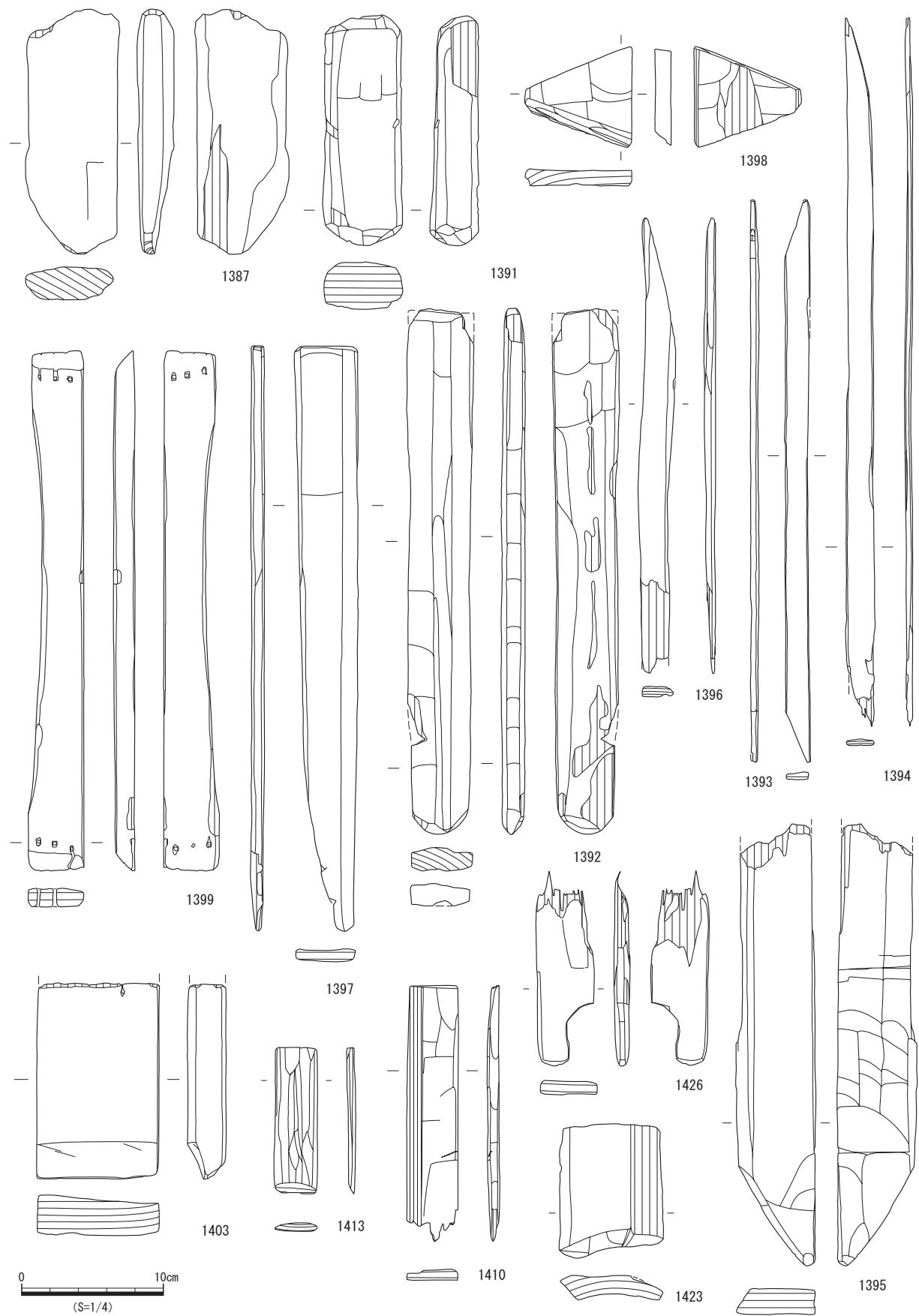


図209 SDc031南部出土遺物 (72)

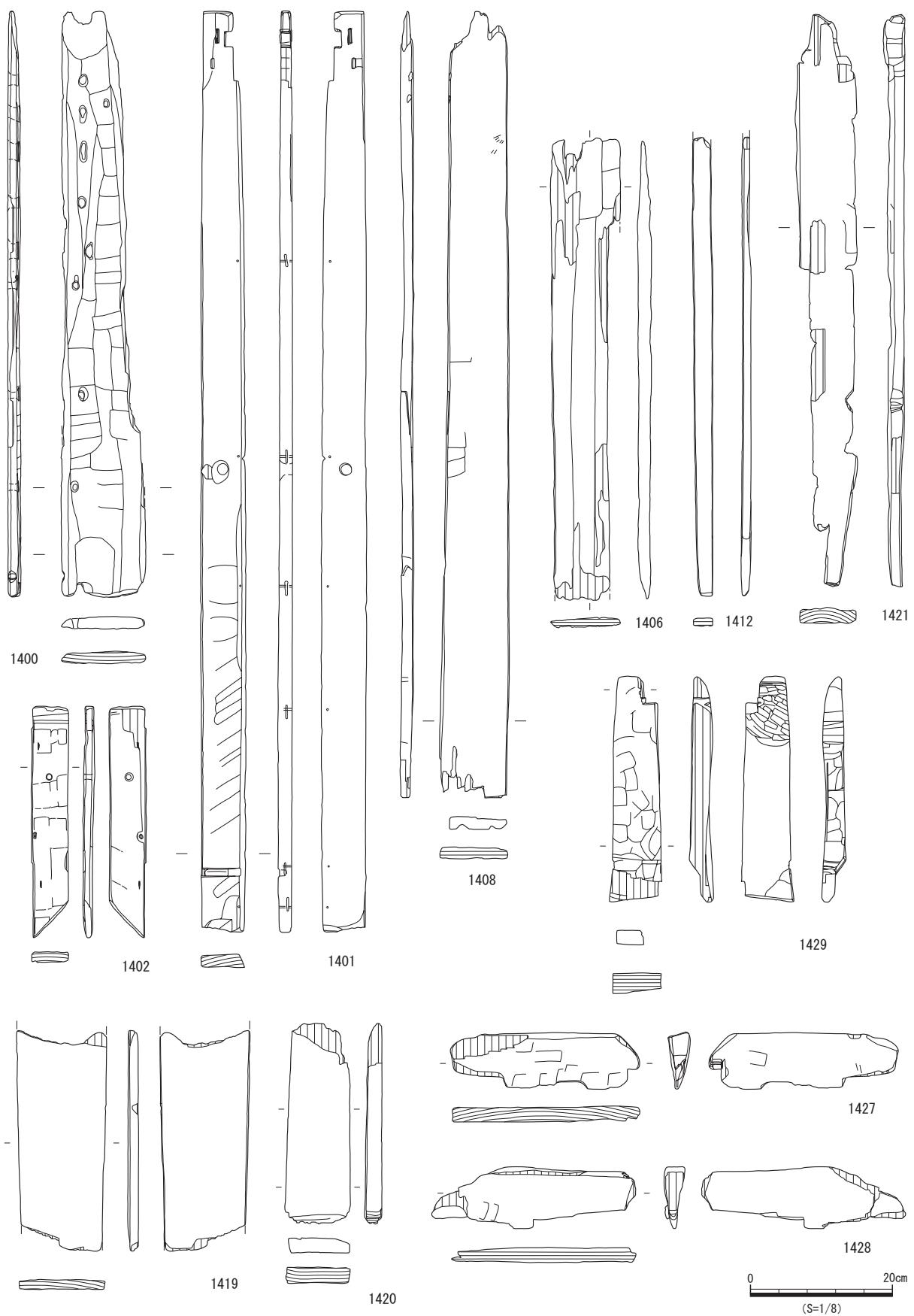


図210 SDc031南部出土遺物 (73)

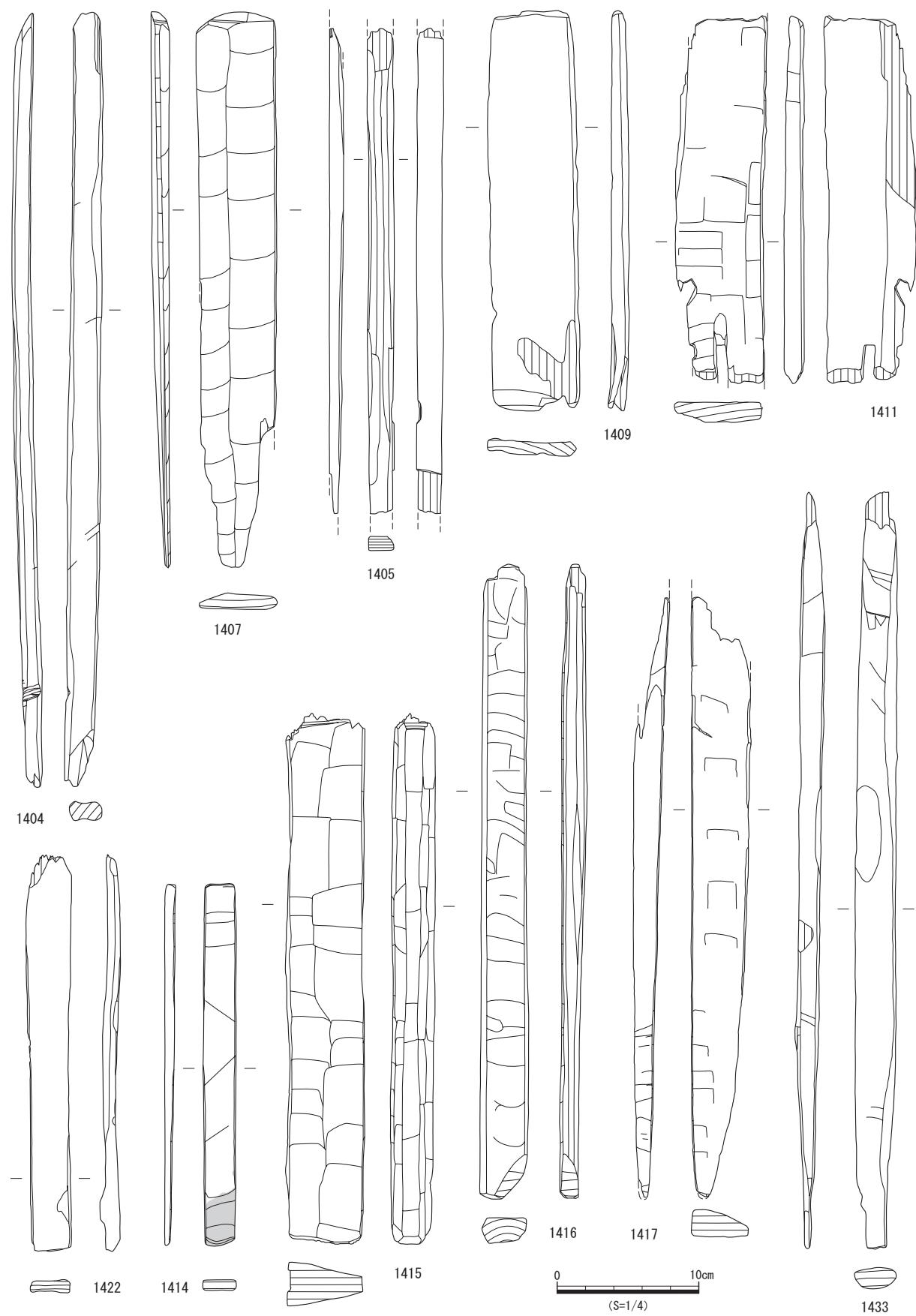


図211 SDc031南部出土遺物 (74)

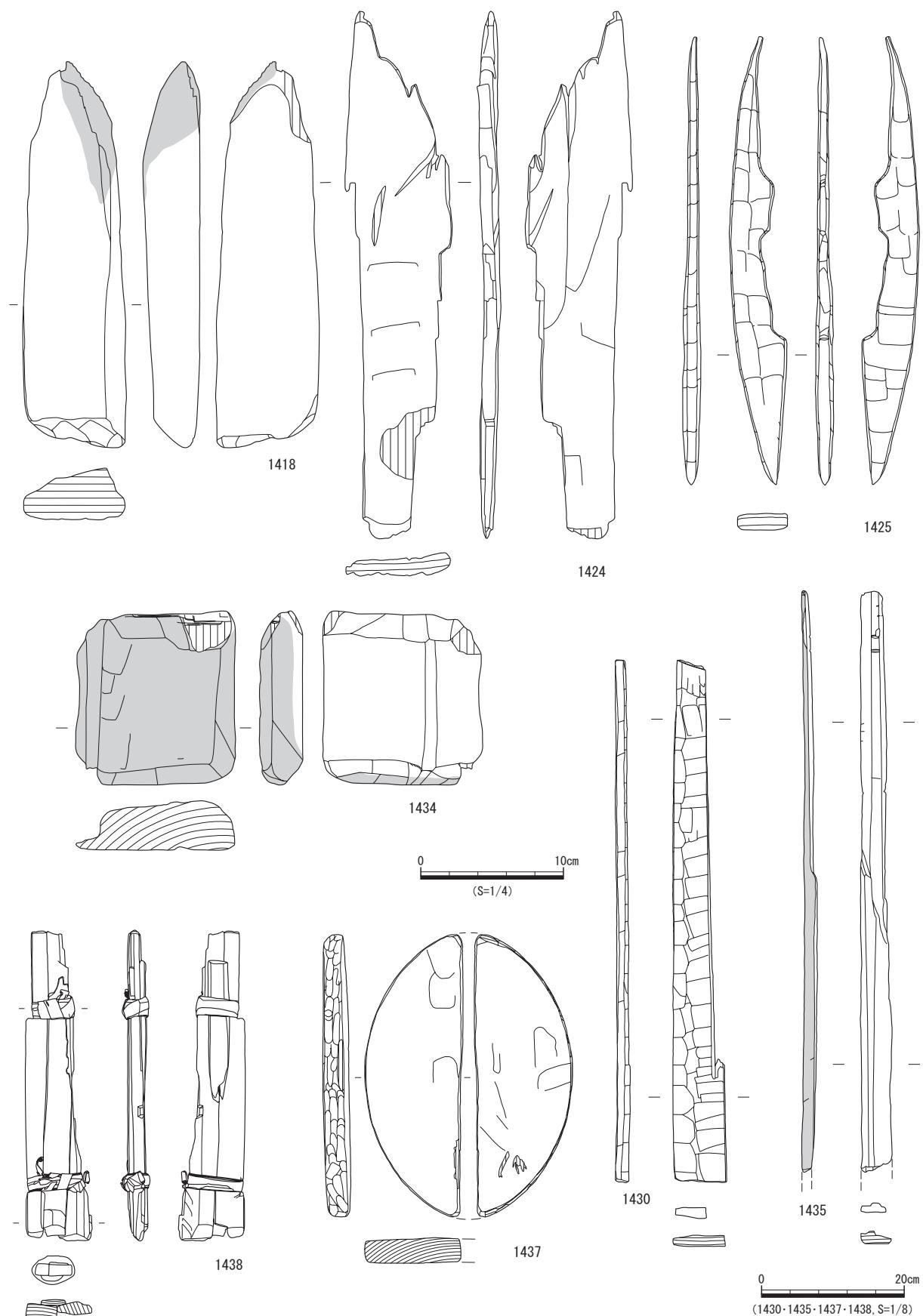


図212 SDc031南部出土遺物 (75)

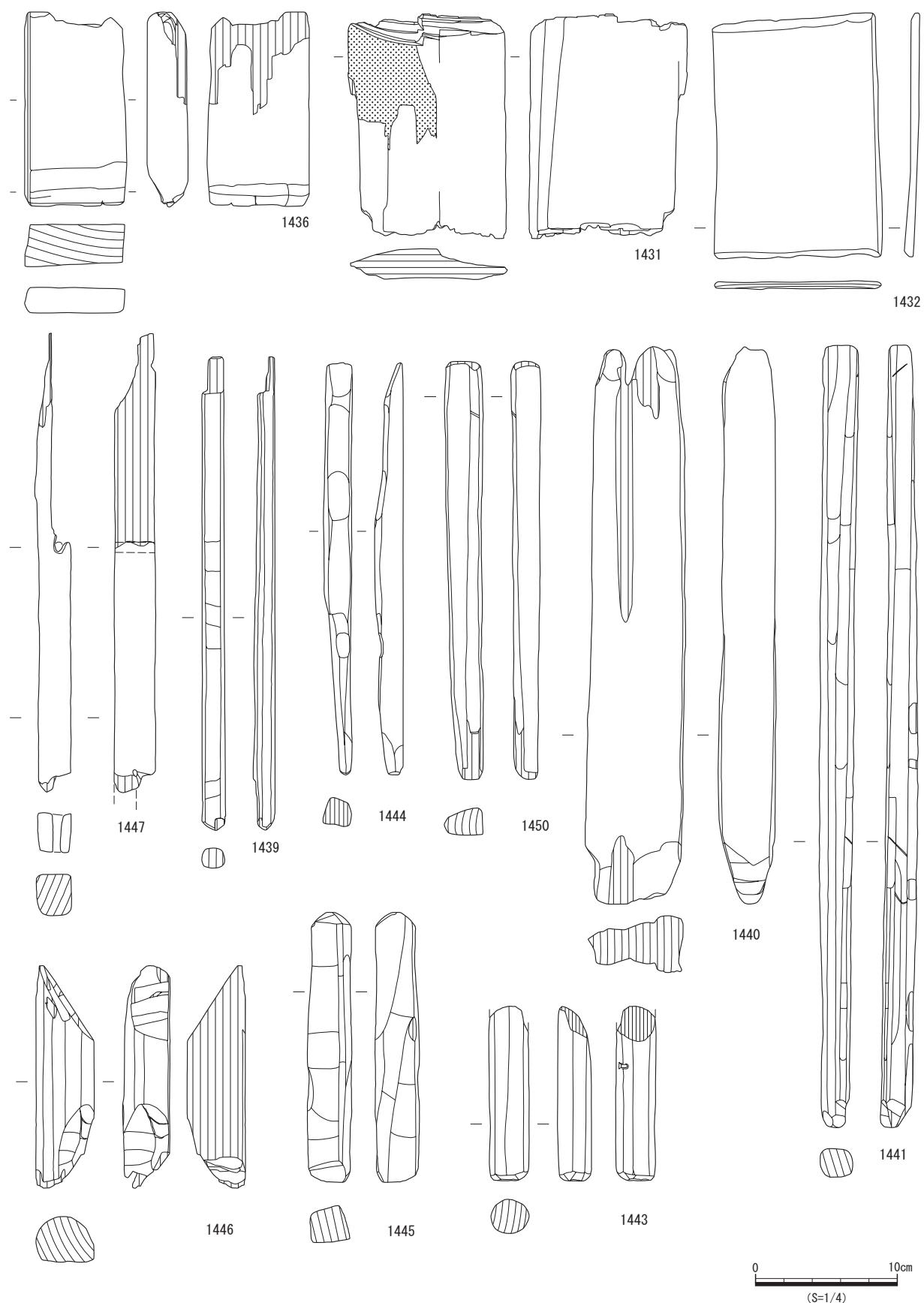


図213 SDc031南部出土遺物 (76)

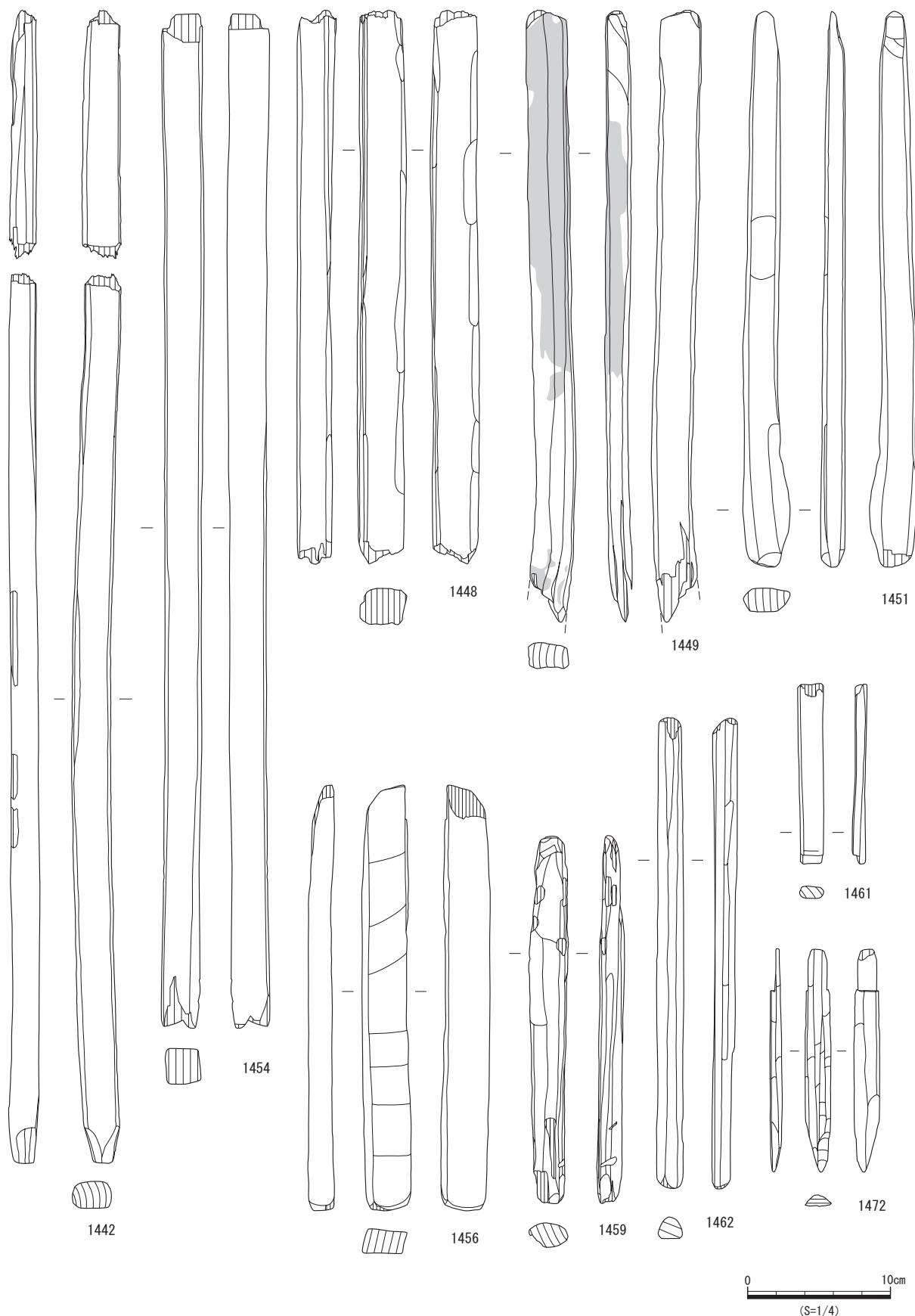


図214 SDc031南部出土遺物 (77)

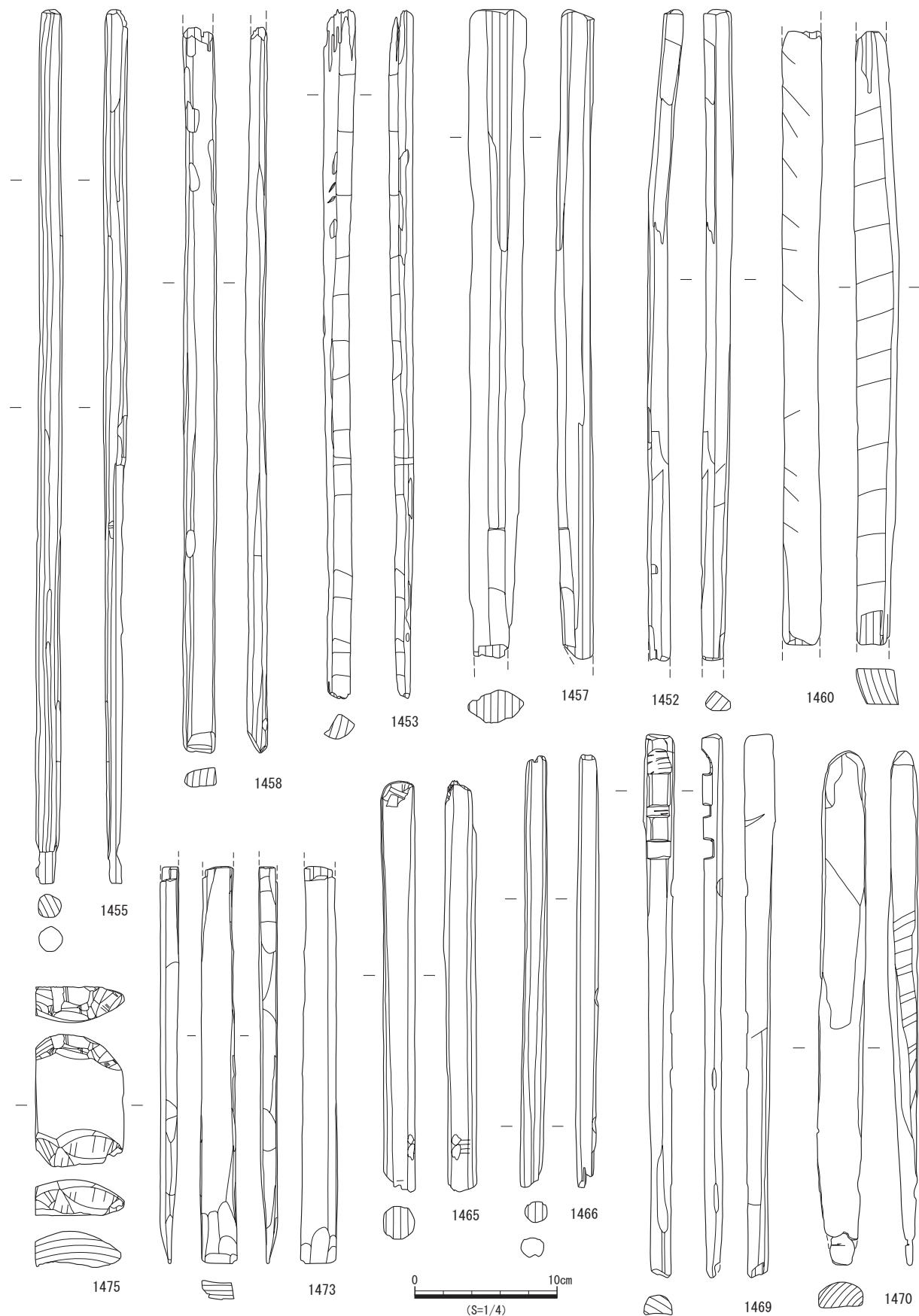


図215 SDc031南部出土遺物 (78)

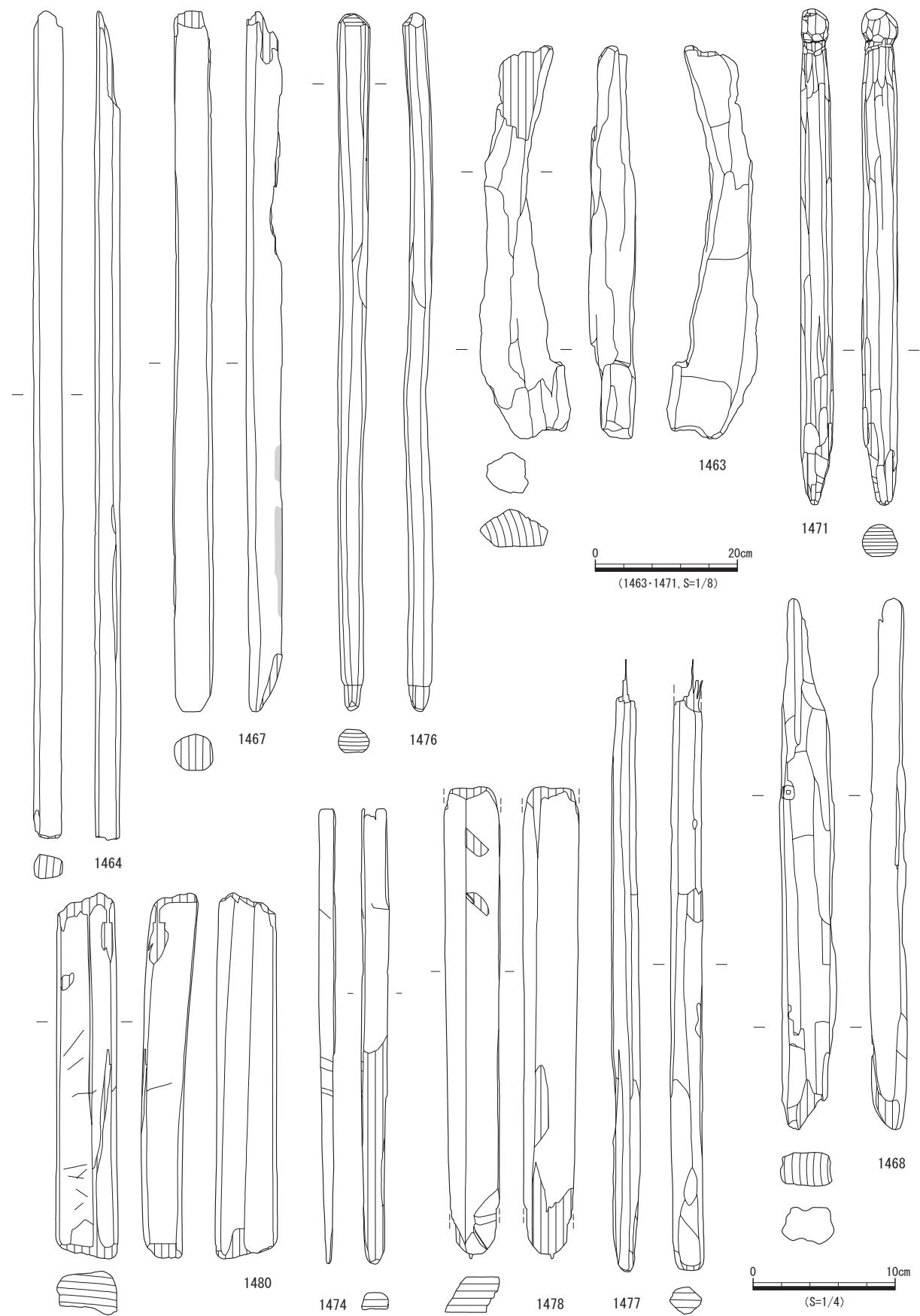


図216 SDc031南部出土遺物 (79)

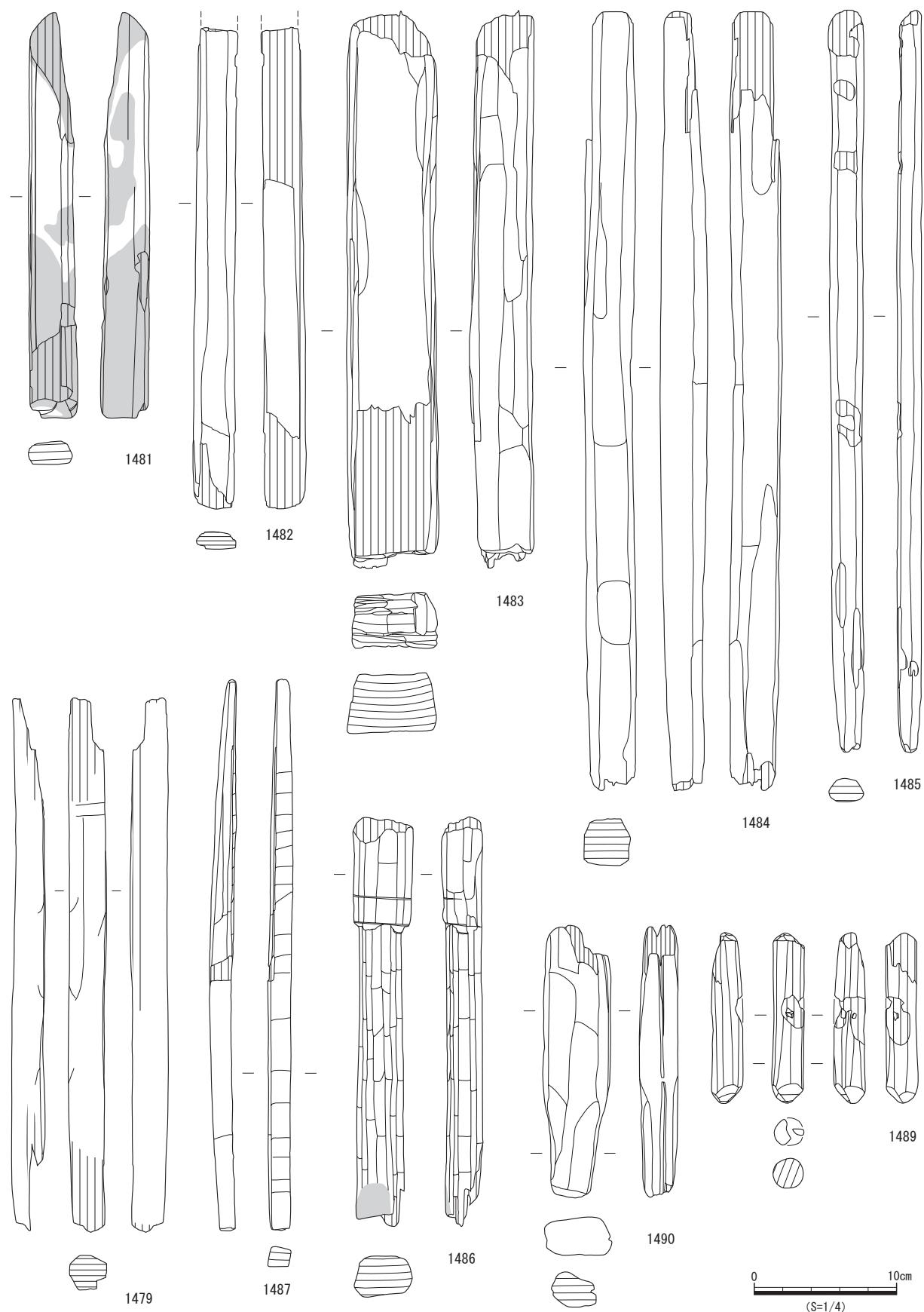


図217 SDc031南部出土遺物 (80)

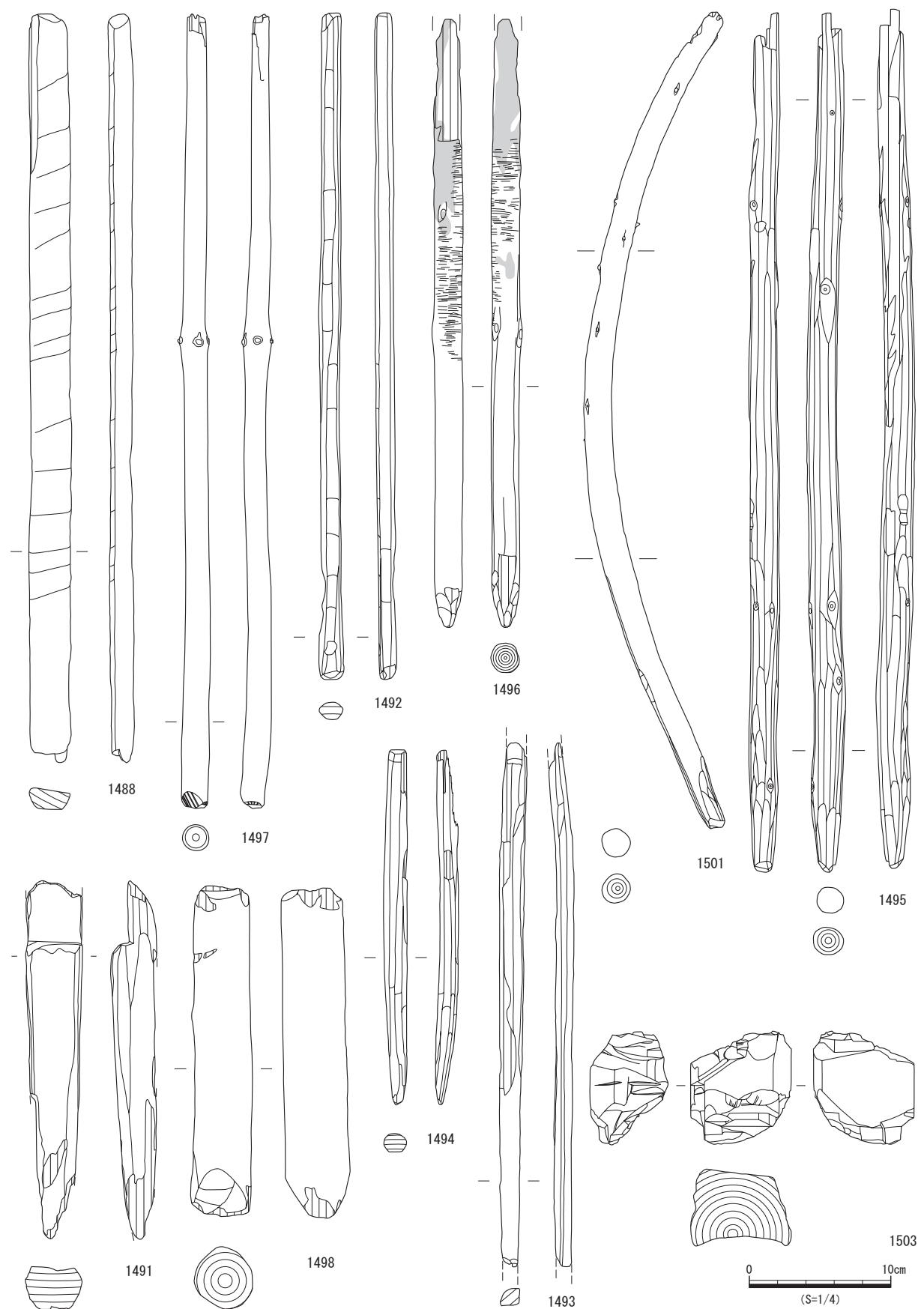


図218 SDc031南部出土遺物 (81)



図219 SDc031南部出土遺物 (82)

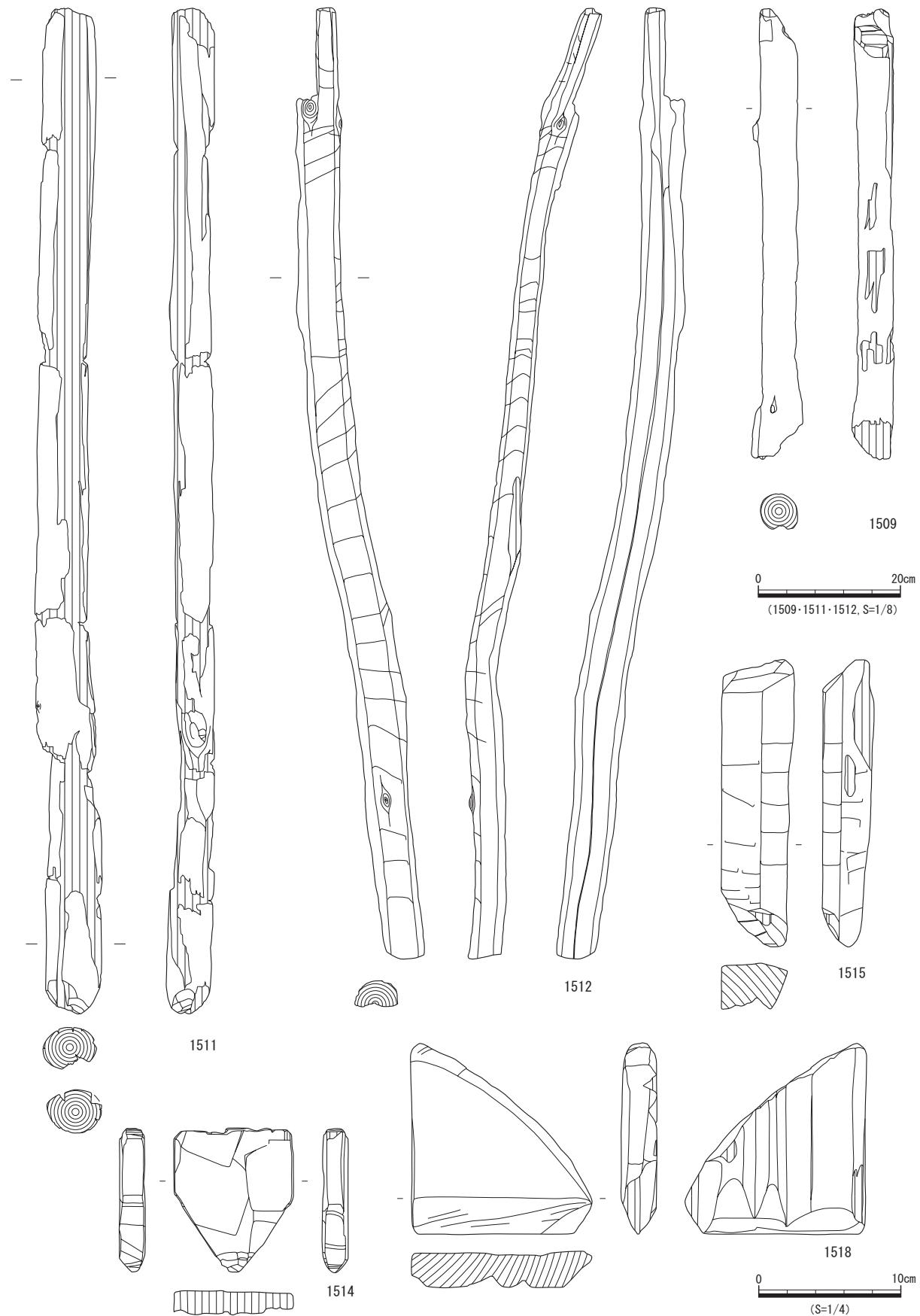


図220 SDc031南部出土遺物 (83)

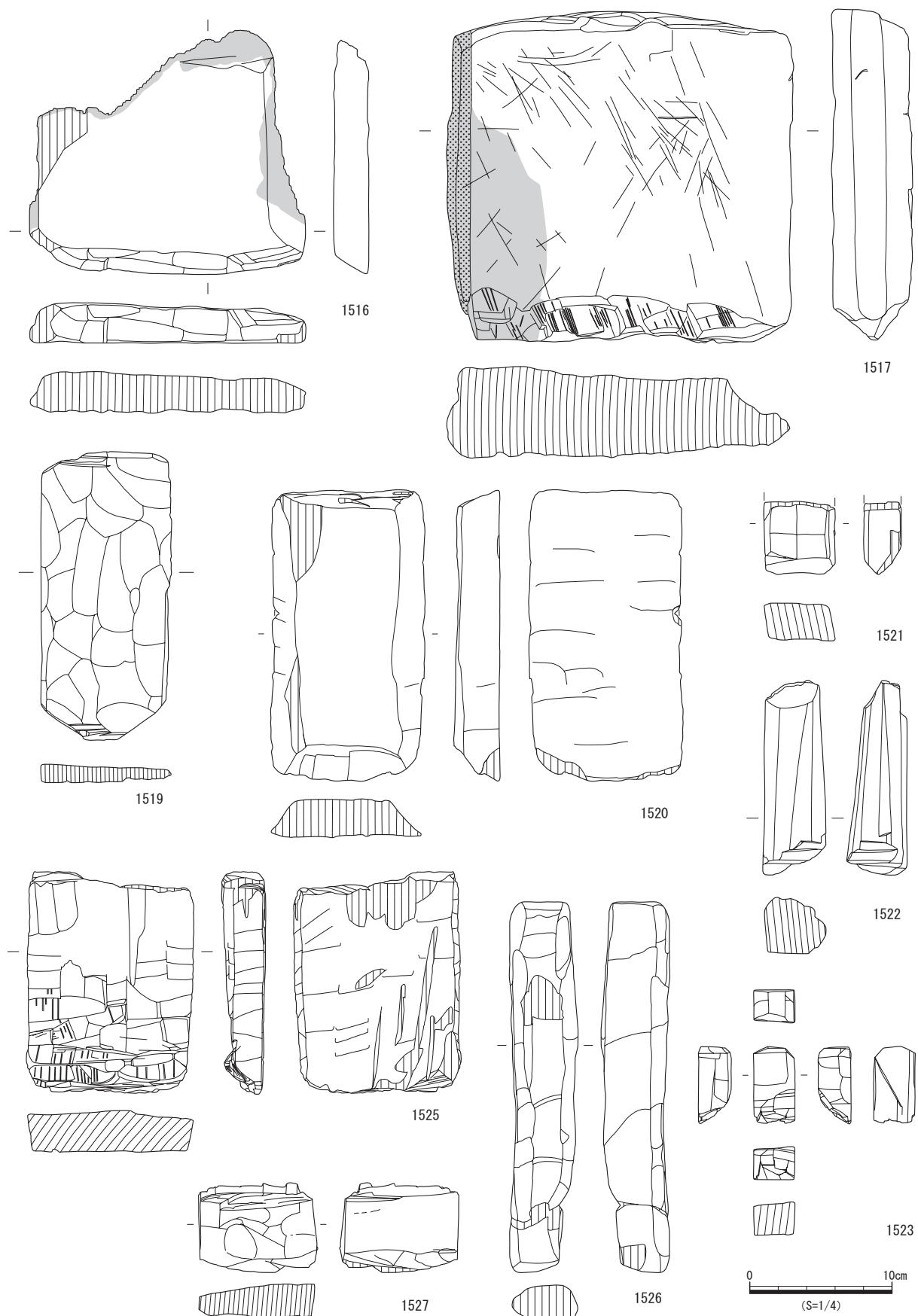


図221 SDc031南部出土遺物 (84)

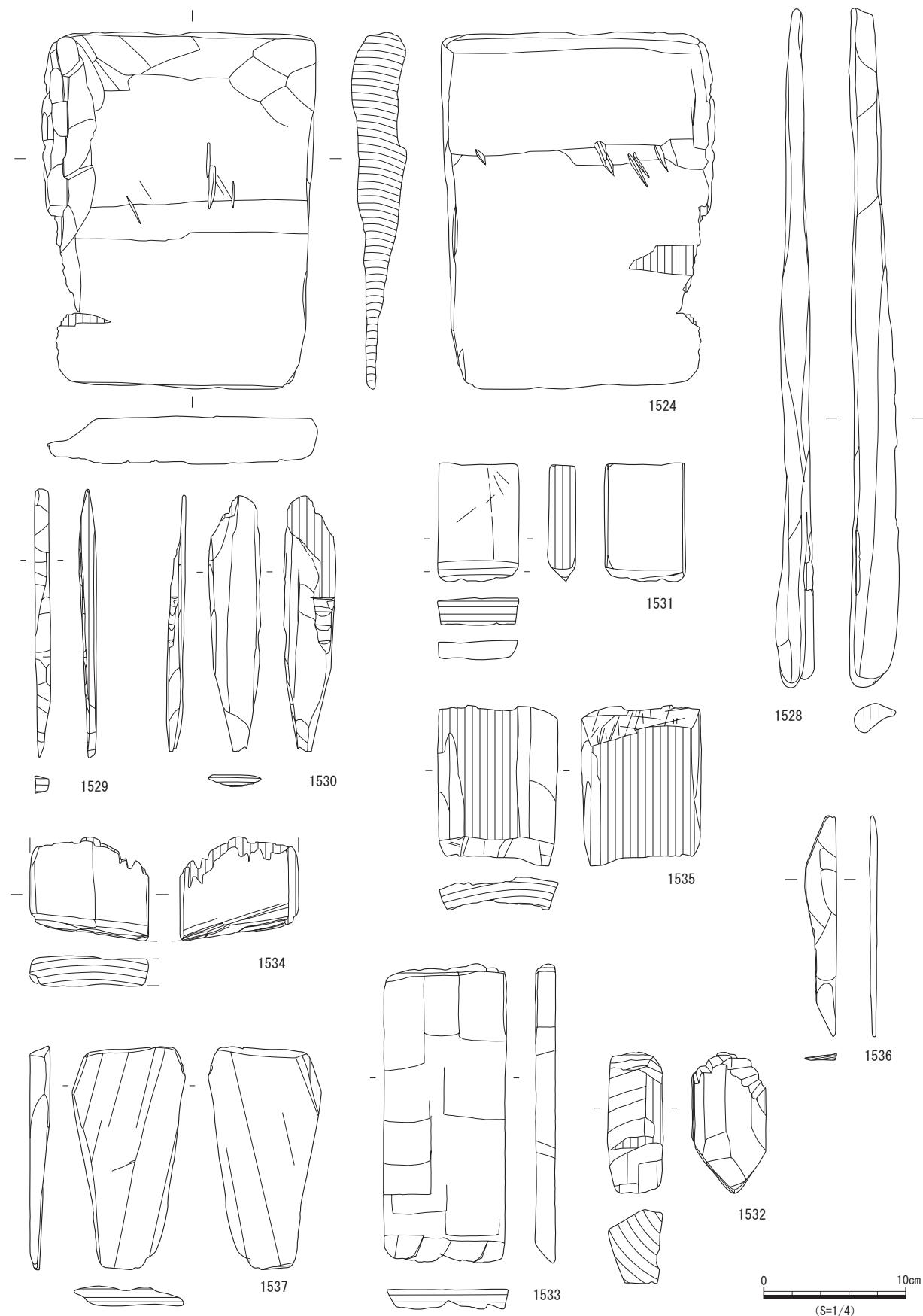


図222 SDc031南部出土遺物 (85)

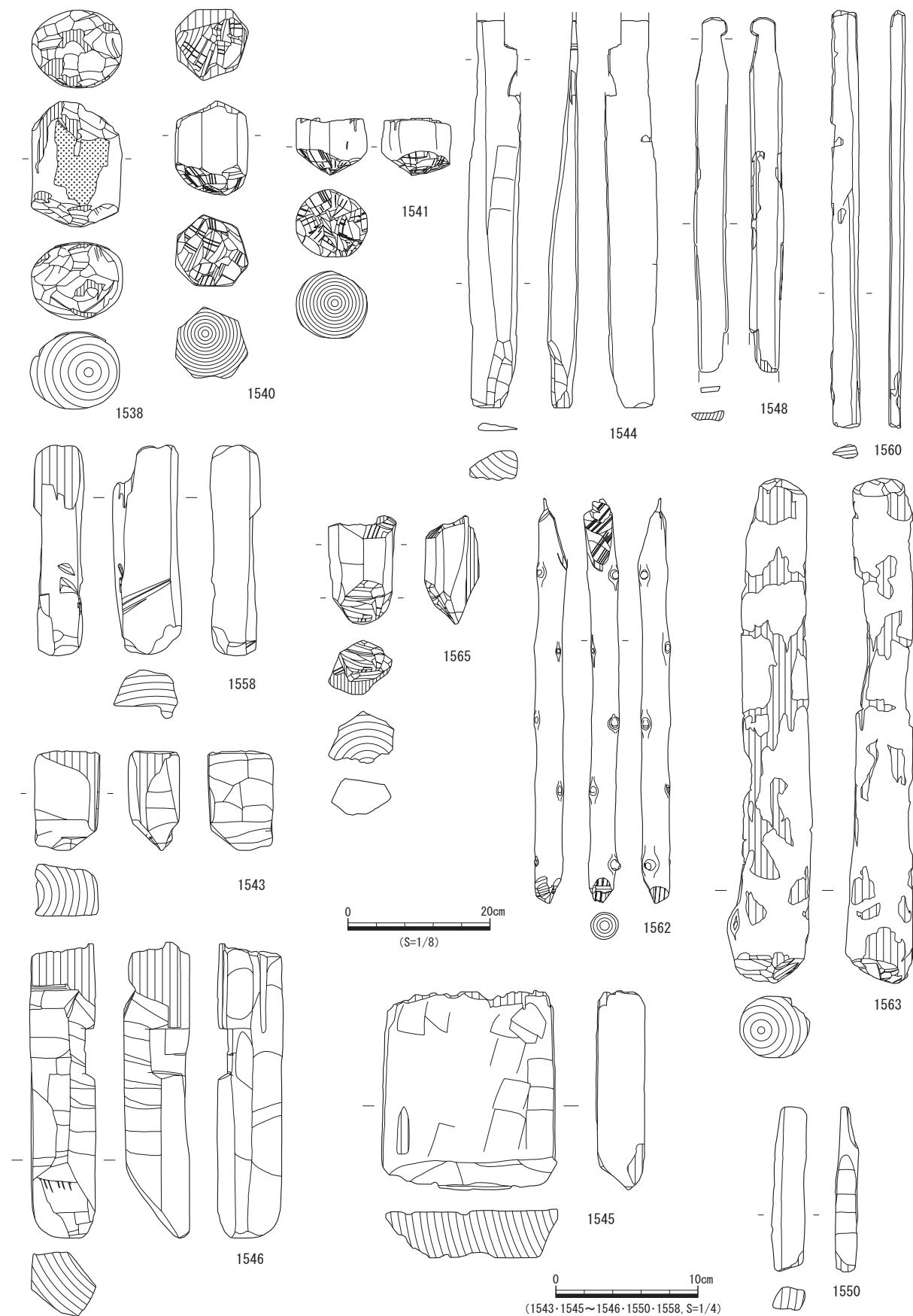


図223 SDc031南部出土遺物 (86)

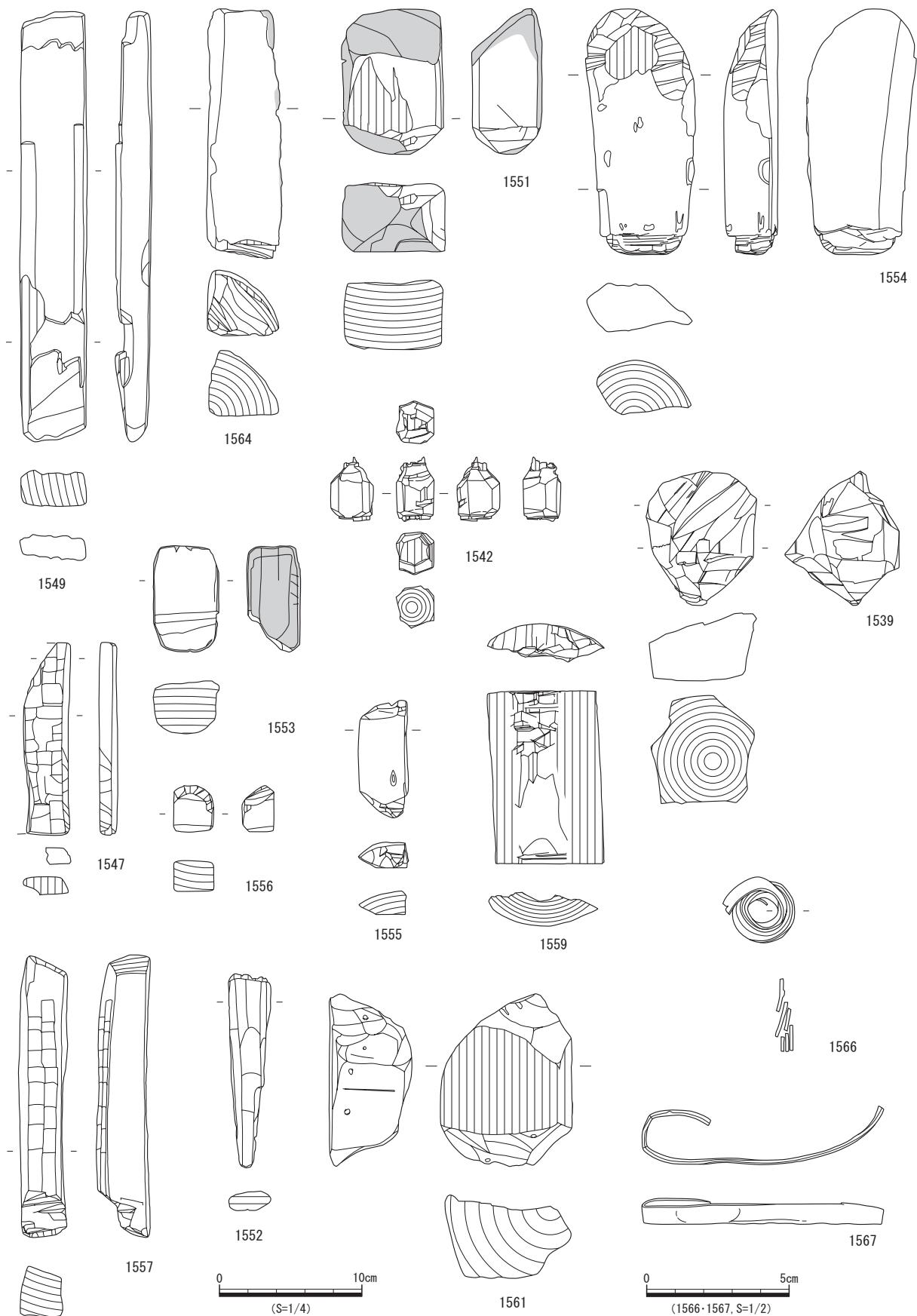


図224 SDc031南部出土遺物 (87)

SDc068（図225）

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。南東から北西方向に掘削された溝状遺構でSDc031に流れ込む。幅0.68mで直線的であるが、南東端の発掘区壁面際で北東へ屈曲しているようである。先後関係からはSHc01よりも新しいと思われるが、堅穴住居よりもやや古いか同時期頃と思われ、居住域における排水路的な機能を持っていた可能性が考えられる。埋土は3層～4層に分層したが、各土層からV層ブロックやオリーブ黒色土ブロックが含まれ、埋土中から比較的多くの土器片が散在して出土している状況から、人為的に埋め戻された可能性が高いと思われる。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して出土した。また、小型鉢がほぼ完全な形で出土した。

出土遺物 1568はVII期と思われる鉢G類で、口径が胴部径よりも小さい。1569はVII期と思われる高壺G類で、壺底部が小さい。脚部は大きく広がり、脚裾部外面に施文する。1570はVI期～VII期と思われる器台B3類で、脚部が内湾する。

時期 図示した土器や、他の遺構との先後関係からVII期と思われる。

SDc074（図226・227）

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。南北方向に掘削された溝状遺構であるが、他の遺構との重複により全長は不明で細長い土坑状となる。埋土は6層に分層したが、埋土1層、2層にV層ブロックや灰色土ブロックが含まれ、埋土中から比較的多くの土器片が散在して出土している状況から、人為的に埋め戻された可能性が高いと思われる。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して出土した。

出土遺物 1571～1573はVII期の甕D2類で、口縁部内面に面を持つ。肩部が張り、そこにヨコハケを施す。1574はVII期と思われる高壺D1類、1575は高壺D2類で口縁端部内面に沈線を施す。1576は高壺脚部片である。1577はVII期と思われる器台C2類で、受部がやや内湾する。

時期 図示した土器や、他の遺構との先後関係からVII期と思われる。

SDc076（図226・227）

検出状況 SDc031の西肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形は不明瞭であった。ほぼ東西方向に掘削された溝状遺構で、SDc031に流れ込む。西側は発掘区外に続いたため全長は不明であるが、深さ0.50mでやや深い。埋土は5層に分層したが、各層にV層ブロックを含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高いと思われる。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して出土した。

出土遺物 1578は甕D2類で口縁部内面に面を持ち、頸部内面にはハケ目調整を施すことから、VII期でも前半のものと思われる。1579はVII期と思われる器台C2類で、受部が小さくやや内湾する。1580は敲打痕がある砥石である。1581は樹皮の残る丸木材で、下端を不整方向から削る。

時期 図示した土器や、他の遺構との先後関係からVII期と思われる。

SDc082（図228）

検出状況 SDc031の西肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形は不明瞭であった。南西から北東方向に掘削された溝状遺構で、他の遺構に削平されて全長は不明であるが、SDc031に流れ込むと思われる。北東にはSDc076に連続しそうであるが、底面の高さが異なるため別の遺構として扱った。埋

SDc068

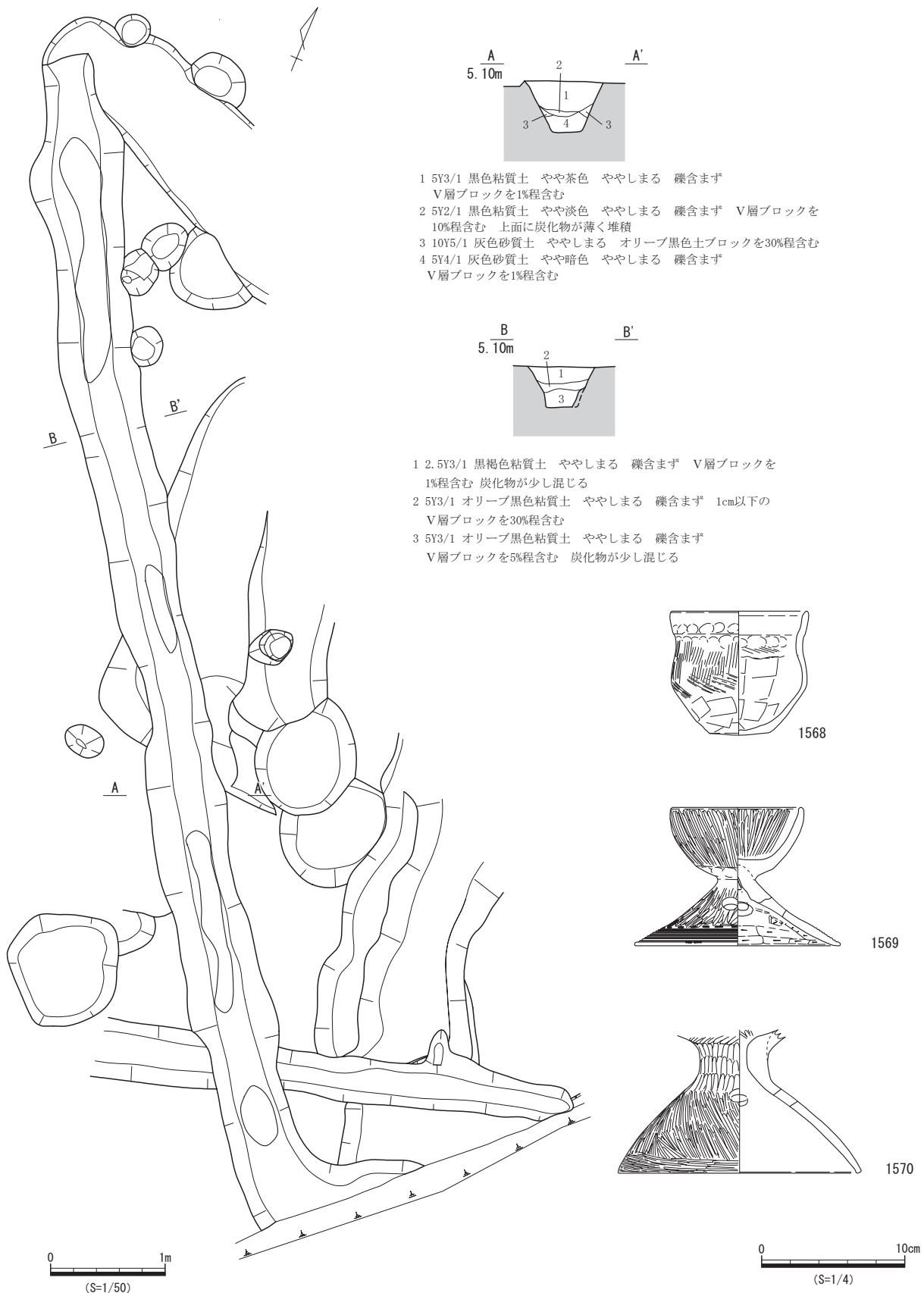


図225 SDc068

土は単層でV層ブロックを含むことから、人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して出土した。

出土遺物 1582は小型の壺であるが、口縁部の形状から壺B類に含めた。口頸部が外反し、口縁端部は面取りする。VI期～VII期と思われる。1583はVI期と思われる高壺C3a類で、口縁部がやや内湾する。

1584はVI期～VII期と思われる器台の脚部である。

時期 図示した土器や他の遺構との先後関係からVII期と思われる。

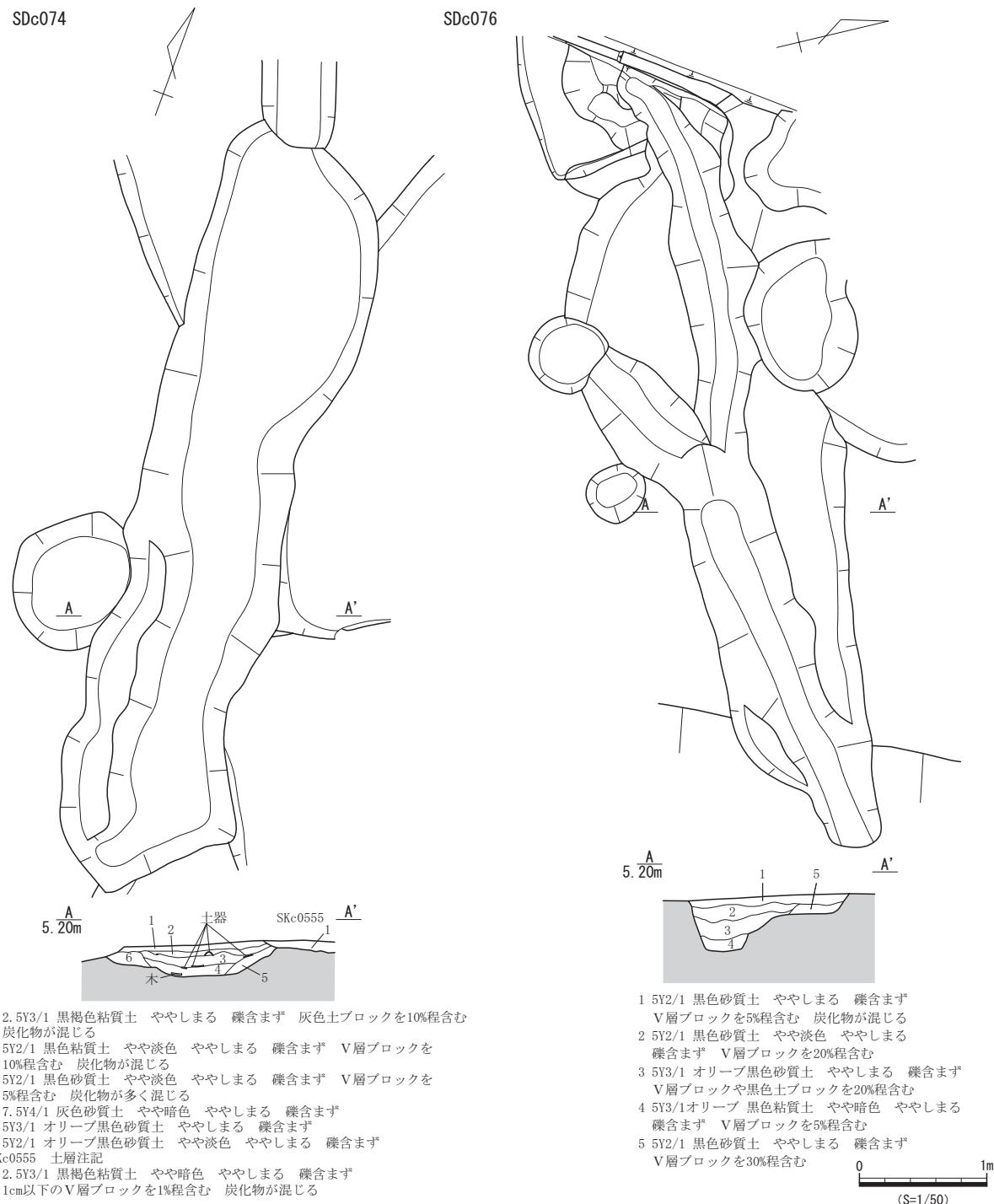


図226 SDc074・SDc076

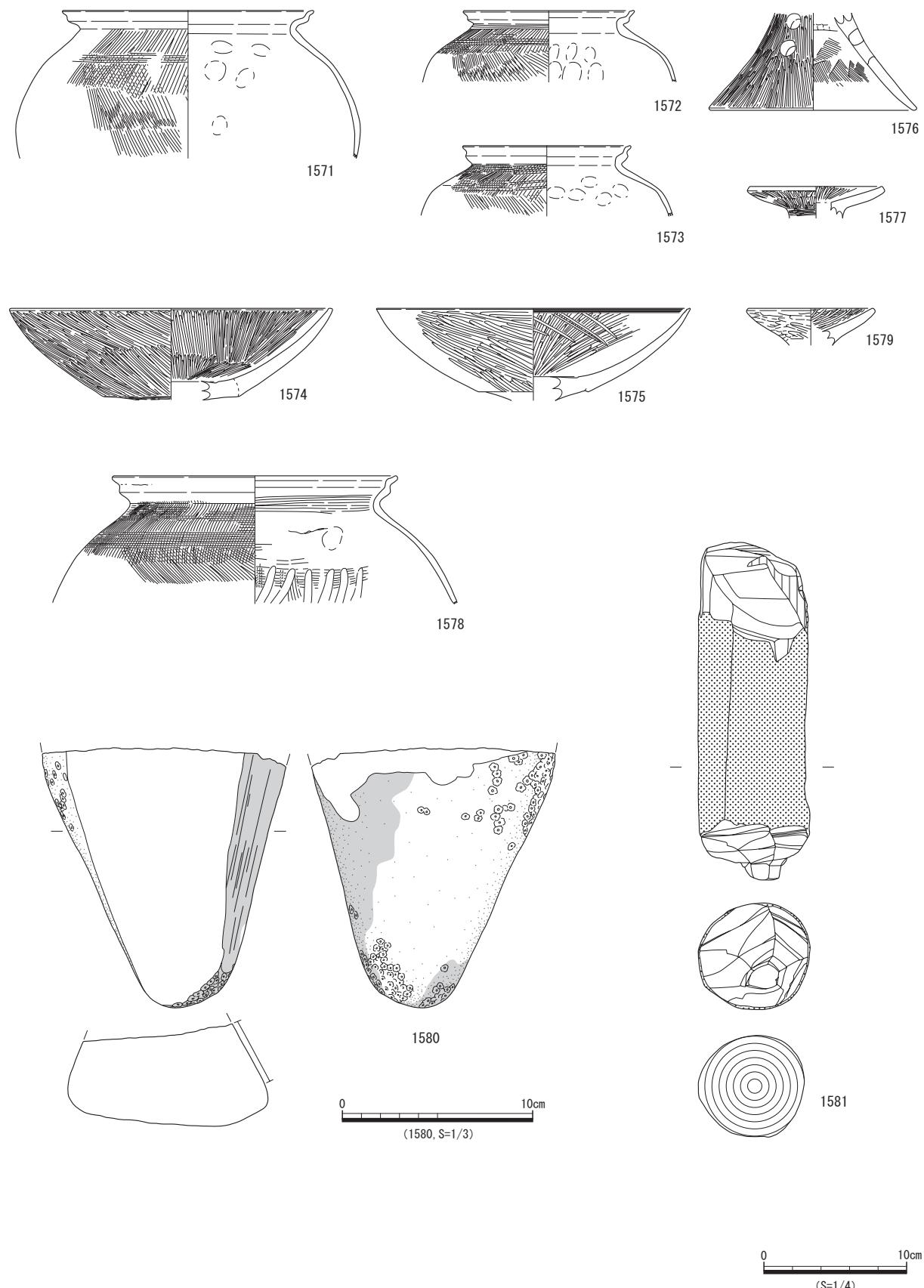


図227 SDc074・SDc076出土遺物

SDc085 (図229・230)

検出状況 SDc031の西肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。ほぼ東西方向に掘削された溝状遺構で、西側は発掘区外へ続くため全長は不明であるが、東端はSDc031に流れ込む。西側は南へ少し湾曲するが、その部分で底面に段があるため、別に掘削されたものであることも考えられるが、平面的な連續性から同一の遺構とした。埋土は2層に分層したが、いずれにもV層ブロックを含むことから、人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して出土した。

出土遺物 1585は底部がやや突出する壺の底部片で、VI期～VII期のものと思われる。1586は甕D2類で、口縁部内面に面を持つ。1587は小型の有溝砥石である。

時期 図示した土器や他の遺構との先後関係からVII期と思われる。

SDc096 (図229・230)

検出状況 SDc031の東肩部に位置し、V層上面で検出したが、平面形は不明瞭であった。ほぼ南北方向に掘削された溝状遺構で、南半部を平成19年度、北半部を平成20年度に調査したが、平面形がずれてしまっている。一連の溝状遺構の可能性を考えたが、南半部と北半部では出土した遺物の時期に違いがあり、別の遺構と判断した。埋土は2層に分層したが、いずれにもV層ブロックを含むことから、人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から少量の土器片が出土した。

出土遺物 1588はII期の甕C類で、口縁部が外反し、外面には羽状条痕を施す。口縁端部に押し引き状の施文がある。1589は口縁端部が肥厚し、内傾する土器でII期と思われる。

時期 図示した土器からII期と思われる。

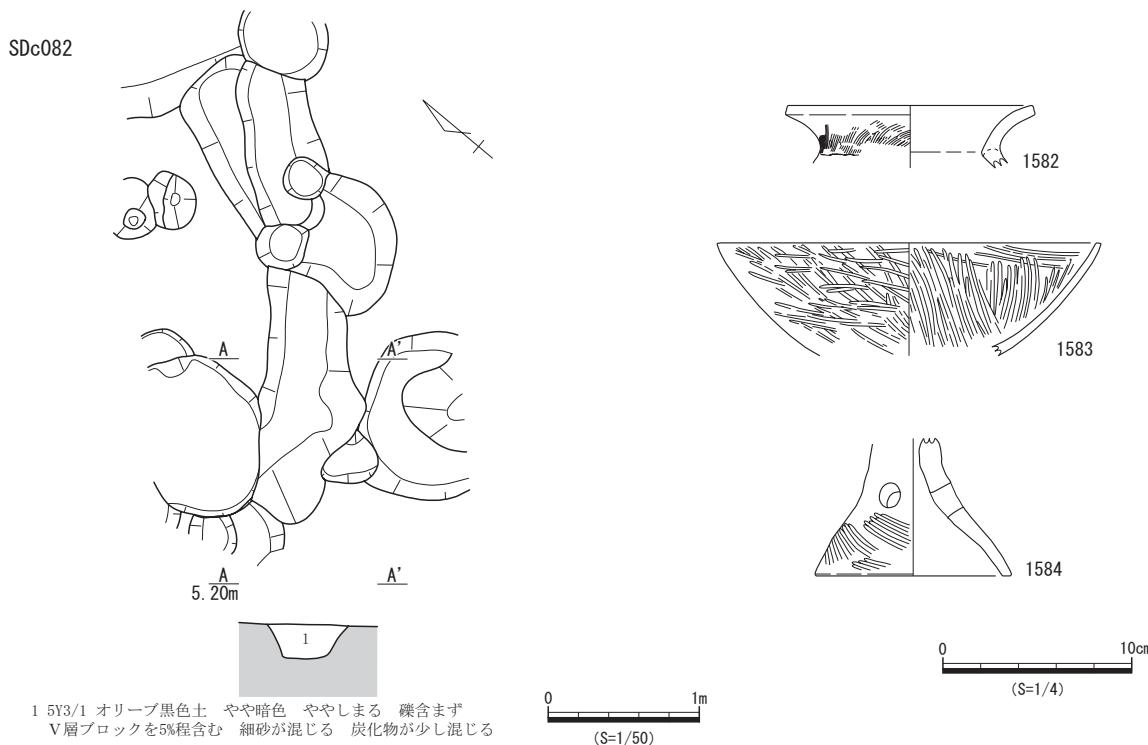


図228 SDc082

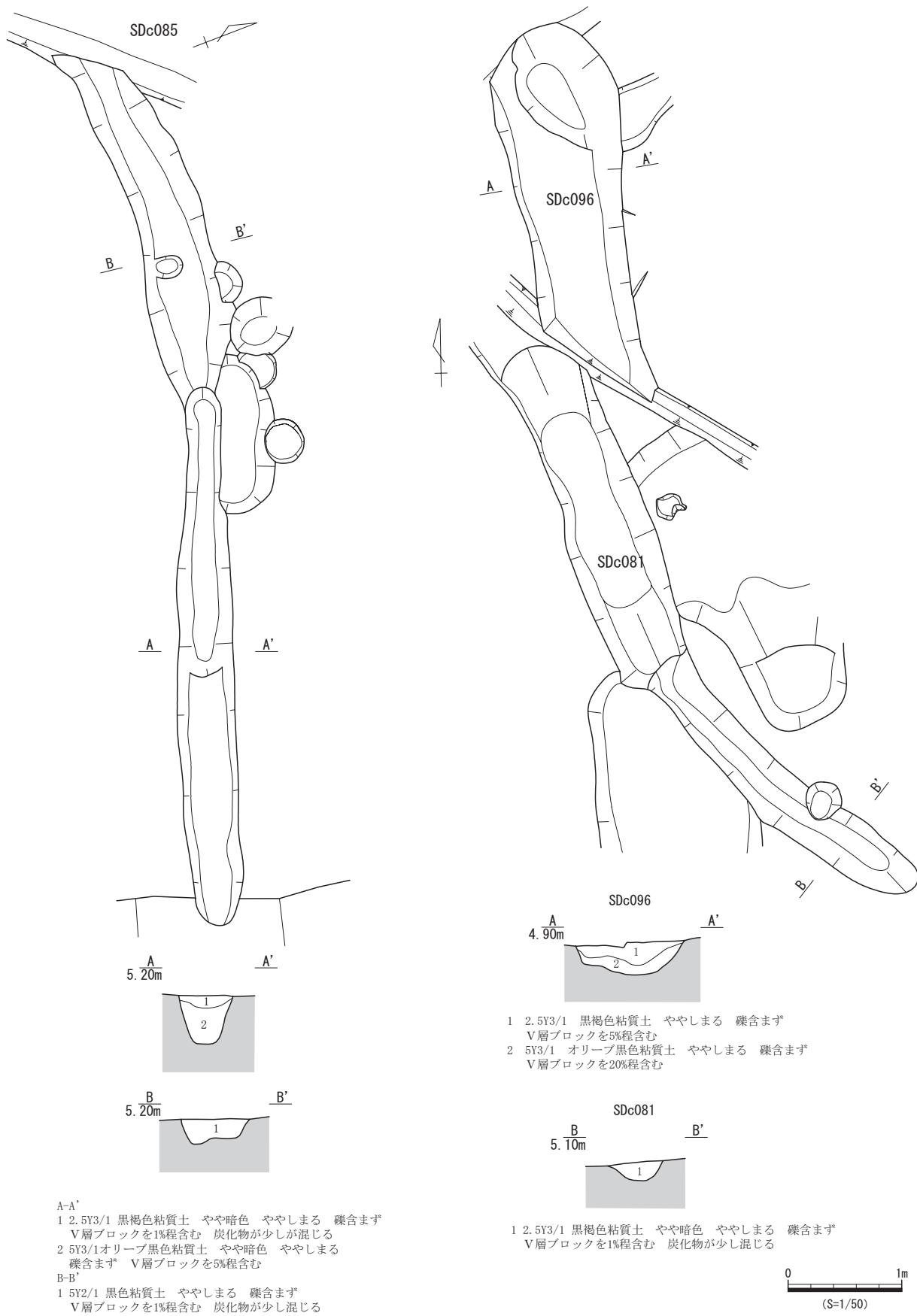


図229 SDc085・SDc096

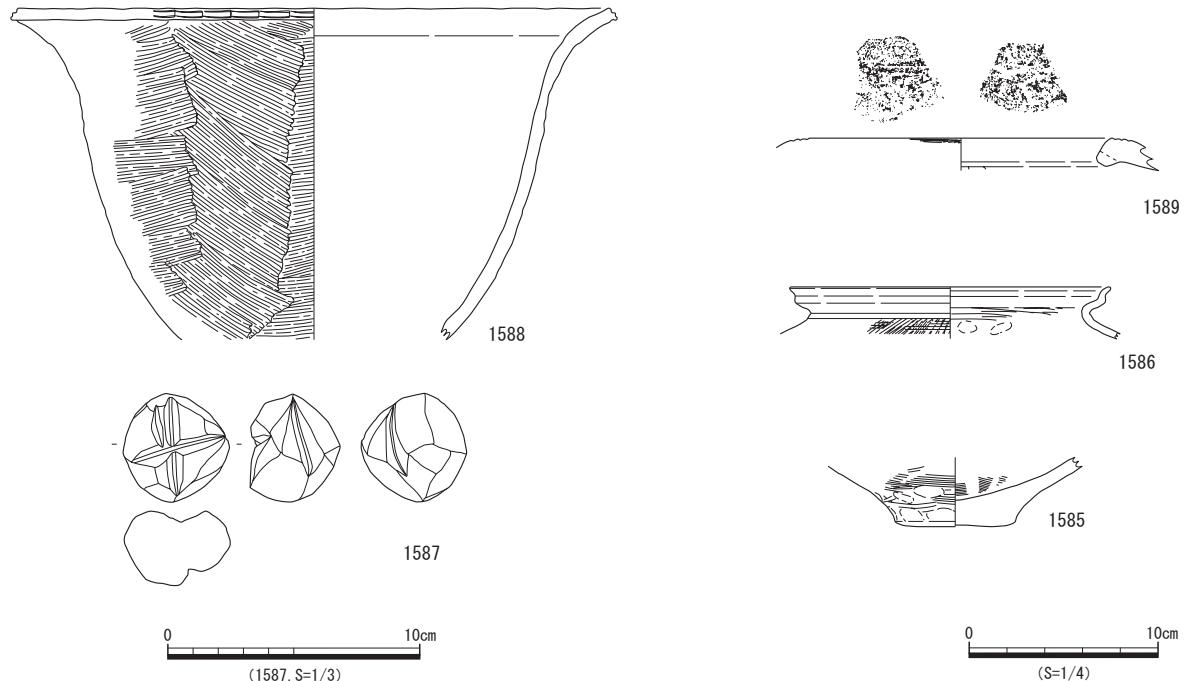


図230 SDc085・SDc096出土遺物

5まとめ

この地点は、平成8年に大垣市教委が調査した場所の北側に位置する。IV層上面の遺構は、特筆すべきもののがなく、少量の土坑を検出しただけである。しかし、V層上面では、南北に流れるSDc031（大溝）を中心に、その両岸に多くの遺構を検出した。また、IV b層上面においても土坑や集石遺構を検出し、多くの遺物が出土した。IV b層上面の遺構は出土遺物から、VII期以降のものと思われるが、V層上面の遺構の中にも同時期のものがあり、IV b層上面から掘削されていた可能性が考えられる。

II期と思われる遺構にSDc096があるが、III期と思われる確実な遺構はなく、IV期では土坑墓の可能性があるSKc0640が確認できただけである。しかし、発掘区中央を南北に流れるSDc031（大溝：市調査SD05）は掘削時期がIII期頃となる可能性がある。大溝内からはIV期の遺物が出土しており、大溝周辺には弥生時代中期の遺構が散漫ながらも存在していたことを示す。

V期～VII期の遺構は、非常に多く確認できるが、この地点では大溝の両岸、北側の07_6地点では大溝の西岸、南側の大垣市発掘区では大溝東岸に遺構が密集しており、場所により遺構の有り様が異なることが注意される。07_6地点では建物遺構が確認できていないが、この地点では竪穴住居跡や掘立柱建物跡を検出した。VI期～VII期と思われるSHc02とSHc04、VII期と思われるSHc01とSHc03、VII期～VIII期と思われるSBc01、VIII期と思われるSBc02があり、多量の各時期の土器や木製品などが大溝内を中心に出土した。大溝からは、ミカン割り材や農具素材とした方形・長方形の板材とともに、鍬や泥除などの未製品が出土し、掘立柱建物跡柱穴内には木屑が入れられていた。また、他の調査地点よりも、砥石と叩石の出土量が多く、砥石と叩石の集石が認められるなど、これらの建物遺構が木製品製作に関わるものである可能性が考えられる。なお、柱根を伴うものや形状から柱穴と思われる遺構を50基ほど確認したが、建物としてのまとまりを見いだすことができなかった。こうした柱穴の存在から、より多くの建物遺構が存在していたと思われる。

大溝から出土した遺物の中には、巴形銅器や円板状銅製品、筒状器台や盾などの木製品、武器や鳥などを形取った形代など、祭祀的な性格や所有者を権威付けるような遺物がある。大溝内に廃棄された状態で出土したものであるが、大溝両岸には壺を中心とした土器集積があり、この場においても何らかの祭祀的行為が行われていたことをうかがわせる。

大溝は弥生時代中期（III期）頃に掘削され、V期になるまでは多少の水流があったと思われる。V期以降には植物遺体の堆積が進み、沼地化したものと思われ、X期までにはほぼ埋没したようである。一部20mを超える部分もあるが、ほぼ10m前後の幅があり、1.5m前後の深さを持つ大溝は、遺跡西部を流れる自然流路と合わせて、南北に長い範囲を区画する環濠、あるいは遺跡内部の区画や水運としての機能などが推定されるものの、この大溝を掘削した理由は判然としない。遺跡北半（A地区からB地区にかけて）に広がるIII期の方形周溝墓群が、この大溝の西側に列状に並ぶ状況は、大溝と方形周溝墓群との関係を示す可能性があるものの、大溝の規模を説明できるものではない。なお、方形周溝墓群が列状をなす部分に平行する大溝は、幅が減じ深さは浅くなり、その手前では西側に張り出したような形状となっている。そのため、III期頃に掘削された大溝は、この場所が溝のはじまりとなっていた可能性も考えられる。

報 告 書 抄 錄

ふりがな	あらおみなみいせきCちく					
書名	荒尾南遺跡C地区					
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書					
シリーズ番号	第129集					
編著者名	鷺見博史、春日井恒、林直樹					
編集機関	岐阜県文化財保護センター					
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 Tel058-237-8550					
発行年月日	西暦2014年2月10日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間 調査面積	調査原因
あらおみなみ 荒尾南遺跡	ぎふけん 岐阜県 おおがきし 大垣市 あらおちょう 荒尾町 ひのきょう 桧町	21202	08568	35° 22' 02"	136° 35' 04"	20070423～20071214 20080717～20081212 20090428～20091221 20110426～20110913 7,160m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
荒尾南遺跡	集落跡 その他の墓	縄文時代 弥生時代 古墳時代 室町時代	堅穴住居跡 4軒 方形周溝墓 47基 前方後方形周溝墓 1基 掘立柱建物跡 4棟 溝状遺構 211条 土坑 996基 など	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、中世陶器類、石器・石製品、金属製品、木製品など	弥生時代中期の方形周溝墓群、弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡を確認	
要約	<p>荒尾南遺跡C地区は、弥生時代前期から古墳時代後期、古代から中世の遺構を確認した遺跡である。遺跡を分断するように、自然流路とB地区から続く大溝がある。大溝の東側では、B地区南東部から続く弥生時代中期の方形周溝墓群があり、弥生時代末から古墳時代初頭頃の集落跡を確認した。大溝と自然流路に挟まれた場所では、弥生時代中期の方形周溝墓が群をなし、古代から中世と思われる水田遺構を検出した。自然流路の西側では、弥生時代中期の土坑墓と思われる土坑群と弥生時代中期と弥生時代後期から古墳時代初頭と思われる方形周溝墓群を確認した。</p> <p>集落として利用された場所は限られるが、自然流路や大溝からは、縄文時代晚期から古墳時代前期の大量の遺物が出土した。また、木製品や石製品の加工を行っていたことを示す多くの遺物が出土したことからも、この遺跡において多様な生産活動が行われていたことを示唆している。</p>					

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第129集

荒尾南遺跡C地区

(第1分冊)

2014年2月10日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 新日本法規出版株式会社